

---

# ロザリオとバンパイア 刃の音撃戦士

米ツト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロザリオとバンパイア 刃の音撃戦士

### 【Nコード】

N6525Q

### 【作者名】

米ツト

### 【あらすじ】

この小説は一人の少年が音撃戦士として陽海学園でロザリオとバンパイアのキャラと一緒に様々な闘う物語である。

二次設定、オリ主、オリ技、テンプレ通りな展開、本編では死んでいるはずの人が生きている、キャラ崩壊、ハーレム阻止

などのことがてんこもりになるため上記のワードに苦手なものがあある人は見ないことをお勧めします。

それと作者のユーザー名は「善宗」です!!

## 第0話「プロローグ」(前書き)

今回はプロローグのため、主人公の名前は出ません!! 次回は絶対出ます。

## 第0話「プロローグ」

### プロローグ「転生」

俺はコンビニで「ロザリオとバンパイア」の最新刊を立ち読みし  
終えたところである。

?? 「ふゝむなんかわからなくなって来たぞ？これからどうなる  
んだ？・・・まあ次回にきたいとおきますか。」

俺はそう呟くとホットコーヒーを買ってコンビニから出た。

しかし俺の意識は突然途切れ、次に気がついたときには自分は何  
故か青い海が目の前に広がり、小さな家が一軒建っている小さな島  
の玄関前に倒れていて目の前には

?? 2 「おお、気がついたかの？」

折畳式の椅子に座っている白髪で長髪の・・・おっさんと見せか  
けておばさんの人が僕の方へ顔を向けた。

?? 1 「あのここはそして貴方は・・・？」

?? 2 「人に名前を聞くときはまずは自分からと言っじゃろ？因  
みにわしは」

?? 1 「それもそうだな・・・自分は・・・あれ？」

?? 2 「どうしたのじゃ？」

??1「自分の名前が……ええ〜つと、五代雄介!! 違うこれはクウガの主人公だし……」

自分の名前が思い出せない……たしか大学の入試とか書類とかにゲンナリしていたのに……何故なんだ!? しかもなんで仮面ライダーの主人公の方は思い出すんだ!?

??2「あゝ実はの少年、おぬしの名前は死んだことで一旦なくなつたんじゃよ」

??1「津上翔一、木戸真司、乾巧、本郷猛、風見士郎、南光太郎……何故歴代ライダーの主役の名前だけ思い出せるんだ……」  
「人の話を聞かんかい!!」……すいませんって死んだ?」

僕は女仙人(神様と言うより服装が亀 人ぽかったので……あれ? 隠す意味が無いじゃん!!)

女仙人「まあ、長つたるい話をぶつ飛ばすとの〜君には“ちよつと変わった” ロザリオとバンパイアの世界に転生してもらつことになつたのじゃ。ああ、後私は神様じゃ!!」

??「はあ……先に俺いや自分はどんな感じに死んだんですか?」

女神「実はの……心臓麻痺での……」

??「いかなされたんですか? 歯切れが悪いのですが……」

女神「いや、その〜倒れたのが自動ドアでの……今映像出すぞ。」

「  
そう言ってアロハシャツを着ている女神さまは目の前に画像を出したそこには・・・」

ガンツ！！ガンツ！！ガンツ！！

自動ドアに頭を何回も挟まれている自分の映像があった。

女神「まあ、今からなら生き返らせることは「やつぱいいです！」「まあ、そうじゃろうな・・・わしだってアレは恥ずかしすぎるわな。で実はのお主を転生させるわけはの・・・お前さんに言ってもらった予定の世界はの融合世界なんじゃが・・・」

??「なのですが・・・？なにか存在がちゃんとしてないとか？」

女神「実はのそうなんでのお主に決めてもらいたいのじゃー！！」

??「はあ！？何で僕が「天界の理でそうなっているのじゃよ！」「・・・はあ、じゃあ仮面ライダーでいいんじゃないですか？」

女神「仮面ライダーと言っても色々あるじゃろ？・・・だからコレで決めるぞー！！」

そう言い取り出してきたのは某パジェロコールでおなじみの回転するルーレットと一本のダーツの矢であった。

女神「やれ。」

??「はあ！？そんな無茶を言いますね・・・その前にこのダー

ツの的にかかれているライダーを見せて貰いますよ。」

女神「いいぞお主の好きな奴はちゃんと乗っているぞ。」

女神はそう言ったが、たしか僕の好きなクウガは妖怪と一ミリも関係無いはずなのにと僕はそう思いながらルーレットを回しながら見ていった・・・見終わった俺はふと疑問に思ったことがあって女神に聞くことにした。

??「なあ、なんで龍騎とファイズとディケイドとWとオーズがなく響鬼の所だけ文字が金色なんだ？」

女神「ああ、そのファイズ等はちよつとわけありでの・・・それと響鬼はわしが好きなだけじゃ！さあ、やるぞ！！」

女神は俺をルーレットから離し、俺にダーツの矢を持たせ、ルーレットを回した俺は直ぐに矢を投げ、当たったのは・・・

女神「ふゝむ・・・よし、響鬼じゃ！！では送るぞ！！」待つてくれ！！」・・・なんじゃおおそういえば、お主の願いを聞くのを忘れおつたのさあ、願い事を4つ言え！！」

女神はそう言ったが俺は

??「まず、俺の生前の記憶は消してくれ。「な！？なぜじゃ！？」俺はこの世界のどつちとも関わりたくないんだよ！！」

女神「・・・お主変わっておるの、他の奴らなら笑顔でチートみたいな能力を欲しがるのにのゝまあでも、万が一の為としておぬしはもし、魔化魍、音撃戦士もしくは妖怪に会った時には生前の記憶

が蘇らせるようにするが構わないか？セツトでその時が襲われているときなら絶対助かるようにしておくぞ」

??「ふん、勝手にしろ本当は願い事を全部使って転生するのを拒否したいが俺が行かないとその世界が成り立たないのだから？」

女神「そうじゃ・・・すまんの」

??「気にするな・・・俺はもう一度人生をやり直せるだけだ。その点だけは感謝する。」

女神「残りの3つは「一つは努力すれば努力するほど自分の実力があがるようにしてくれ、残りは勝手に決めてくれ」じゃあ、もし鬼になったら鬼神の力と特異体質になるようにしておくぞ。」

??「わかった・・・だが、俺は決して原作には介入しない！！だから力も意味を無くしてやるよ」

女神「そうかの・・・さて扉が出来たぞ。ココをくぐればお前はもう一度赤ん坊からやり直すぞそれとじゃ、お前さんが行く世界はロザリオとバンパイアがメインの世界じゃからな、響鬼の方は原作通りには行かないかもしれないそれを聞いておくれ。」

??「そうかい・・・あばよ。」

俺はそう言い、扉をくぐった・・・そして体を光が包み俺の意識はなくなった。

.....

少年が通った扉が閉じた・・・あの少年は原作には介入しないといっただが

「無理なんじゃよ・・・お主が原作に介入しないと言うのは・・・

」

なんせその世界の主人公は仮面ライダー響鬼の主人公の安達 明日夢、響鬼でもロザリオとバンパイアの主人公：青野 月音でもないのじゃよ・・・

「その世界の主人公はお主なんじゃよ・・・少年。主人公としての【引力】からは逃げられないのじゃよ。悲しいが頑張れよ・・・私の子孫よ。」

## 第0話「プロローグ」（後書き）

今回はプロローグのため短めです。自分は進行速度は自分が書いてあるもう一つの作品であるのはの方をメインで進めるので次の投下はいつになるのかわかりません。

なので気長に待っていただくとありがたいです。

第一話「妖怪じゃなくて、陽海学園に入るの!?!:前編」 (前書き)

コレを投稿する前にお気に入り件数が4件ある事に気付いた・・・  
・まだプロローグしか投稿してないのにすげえと思っしまいました  
た。

本当にお気に入りの件数が増えると書くスピードが上げるこの駄  
目作者にとっては本当にありがたいです。これからもよろしくお願  
いします!!

それでは第一話前編をどうぞ!!

## 第一話「妖怪じゃなくて、陽海学園に入るの!?!:前編」

第一話「妖怪じゃなくて、陽海学園に入るの!?!:前編」

物語は一軒の甘味処「立花」の地下室で始まる……………。

??「チキシヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

パソコンの前で叫んでいる少年の名は松坂刃<sup>まつざかやいは</sup>、そうこの少年（15だから青年か）が転生した青年である。彼は最初何の関係もない家に生まれたが、山に行ったときに親を目の前で魔化魍に殺され、その時退治しに来た音撃戦士に関わり前世の記憶が戻り、立花で暮らす事になった。

とりあえず彼が何故パソコンの前で叫んでいるかと言うと……………高校受験の受付に間に合わなかったのだ……………まわりにいる人はそんな刃を

日菜佳「まあ、しょうがないですよ。刃君は最年少の鬼ですから……………」

勢地郎（以下おやつさん）「まあ、刃君も人間だからね……………まあ過ぎた事を気にしてもしょうがないよ……………」

香須実「でも、まさか締め切りの日を一週間も間違えるなんてね……………」

あきら「2日3日は分かるけど……………まさか一週間とは……………」

京介「まあ、刃は昨日まで出かけていたからな」

と励まして(？)いると一階から二人の男性が降りてきた。

.....

僕は降りてきたほうを見るとそこにいたのは

響鬼「よっ！」

威吹鬼「今戻ってきました。」

日菜佳「響鬼さん！！」

香須美「伊吹鬼君もおかえりなさい。」

実はこの世界では大蛇は魔化魍の方しかいなくて関東七鬼の皆さんで倒せたが、響鬼さん、威吹鬼さん、轟鬼さん、斬鬼さん(この世界では生きていますよ！！)は大怪我をしていてつい最近までは代わりとして、僕とあきらの姉御と京介の兄貴が出来るだけ開いた大きな穴を出来るだけふさいでいたのである・・・特に響鬼さんの穴が大きすぎましたね。最近は魔化魍の数が少なくなってきたからなんとかもちこたえたけど、

京介「温泉はどうでした？」

響鬼「よかったね。って刃はなぜ落ち込んでるんだ？」

日菜佳「実はですね・・・。」

日菜佳さんが事情を説明すると、

響鬼「ちょうどよかった！刃、」

刃「はい、なんででしょうか？」

響鬼「この学園はどうだろうか？締め切りがまだ大丈夫だし、試験も無く簡単な書類検査だけだって、」

僕が響鬼さんから一枚のチラシを受け取るとそこには

「陽海学園新入生募集」

と書かれてあった。僕は

刃「へえ・・・響鬼さんコレは誰から？」

響鬼「いや、実は俺の友達にその学園の理事長をやっている人がいてね。この前湯治をしていた先の旅館でばったり会ってね、少年のことを話したらこれを貰ったというわけなんだよ」「この学園は普通ですか？」・・・なんだ俺のこと信じないのか？「いや、そうじやなくてですね」「酷いな、泣くよ？」

威吹鬼「いやいや、響鬼さん僕もあの人には会いましたが、あの人は怪しすぎますよ！」

威吹鬼さんの一言に霞のようにしか思い出せない陽海学園の理事長の顔を思い出してみるが・・・うん、怪しすぎる・・・え？なんか口調が変わっている？それは後で説明するとして僕は響鬼さんの

方を見ると、

響鬼「いや〜少年すまんその学園な実は生徒が全員妖怪なんだよ。」

香須実「はあ〜やっぱり裏があつたんですか。」

日菜佳「へ〜妖怪の学校ですか〜・・・と言う事はお化けにやあ学校も〜試験も何にも無いという歌は嘘になるのですかね〜。」

皆が話しているとあきらの姉御がふと疑問に思っているを言った。

あきら「でも、そうになると普通なら人間である刃が行っていいの  
でしょうか？」

京介「あ、確かに！！妖怪だけの学園に鬼である前に人である刃  
が行くのはやばくじゃないですか！！」

京介の兄貴がそう言った・・・確かに原作では月音がすっかり入  
学したが、やばくね？ちょーやばくね？と思つていとおやつさんが

おやつさん「あ〜その点なら問題ないよ僕もあの理事長とは仲が  
いいんだ。あの人は結構このきび団子が好きだしそれに僕達のこ  
とをよく知つているし、普通ならそのチラシは渡さないでしょ？き  
つとなにか特別なことがあるんだよ。」

マジですかおやつさん！！と心の中で思つていると突然電話がか  
かってきて、香須美さんが出た。

香須実「はい、立花です・・・はい、はい・・・お父さん電話」

相手は？」「陽海学園の理事長さんだそうです。」

陽海学園の理事長と言う言葉に皆が電話の方に注目し、おやつさんは電話を取った。

おやつさん「はい今代わりました・・・どうもお久しぶりです。  
・はい、ええ今皆でそのことで話していたところです・・・」

どうもおやつさんの話が長くなりそうだなと思っていると響鬼さんが僕の横に来て、

響鬼「刃、お前が分かりやすく教えてくれたおかげで俺もメールが打てたよ。」

京介「ええ！？」「京介、声が大きいぞ」すみません・・・でも、凄くないですか？」

威吹鬼「ええ、僕も旅館の部屋で響鬼さんがメール打っていたところを見たら驚きましたよ。しかもそのメールの相手が弾鬼さんでしたから・・・返信が「嘘だ！！」の一言で、僕が携帯のカメラでその場面を撮ってやっと信じてもらえたから・・・」

刃「でしょうね・・・あ、電話終わったようですね。」

僕達はおやつさんの方を向くと

おやつさん「うん、話してどうして刃を陽海学園に入れようとしたのかわかったよ。」

日菜佳「もしかして、鬼を調べたいとか？」

刃「もしくは人体実験・・・いや、鬼の状態だったら鬼体実験？・・・駄目だ、言葉がおかしくて日本語が成立していない。」

香須実「違うに決まっているでしょ！！でなんでなの？」

おやつさん「いや、実は最近妖怪が魔化魍に勘違いされる事が多くなっているだろ？」

刃「はあ、確かに斬鬼さんから聞いたことはありますね。眼鏡をかけた化け猫と会って助けたって・・・」

おやつさん「そう、でね被害者には学園の元生徒がいて、過去に何度か注意したけど言う事を聞かず逆に挑んでいく生徒が多くて、陽海学園としても生徒達に魔化魍の事を詳しく教えたいが、専門の知識を持つ教師がいらないと言う事で最初は響鬼君に頼もうとしたけど」

響鬼「俺が断ったから刃に白羽の矢が立ったと言う訳か・・・すまんな刃」

あきら「でもと言う事は刃は教師としていくのですか？」

刃「いや、姉御それは無いでしょう・・・こんな締め切り日を一週間も間違える馬鹿を教師として雇いますか普通「刃君の自虐を無視するけどどうやら情報提供してもらおう代わりに学費とか制服代とかを無料にしてもらい、人間である事も隠してもらえるみたいだよ・・・ねえおやつさん「なんだい？」制服代タダ「僕が鬼となる事があるっていうことですよね？」」

あきら「確かに・・・まあ妖怪の学園だからしょうがないよね？」

日菜佳「しょうがないじゃないでしょうかね〜？」

京介「刃、諦める。」

香須実「刃君は特異体質だけどそれじゃあ補えないかもね〜その事を考えると制服代タダはいいかもね」

威吹鬼「御免、フオローできない・・・」

響鬼「俺達が復帰したから刃は高校生活をエンジョイしてきたら？」

ああ、周りに味方がいない・・・まあ、中卒じゃあこのご時世生きていけないから僕はその学園に行く事を了承した。・・・血の涙を流しながら

それから約一ヶ月間、僕は書類を書いたり、入学準備をしたり、僕専用の弦を作って貰うようお願いしたり、僕用の音撃棒の木の所を予備を含めて貰いに屋久島に行ったりと忙しかった。（威吹鬼さんが音撃管も出来るようになってくれと言われたが無理だった。）

そうして一ヶ月が経った・・・立花の前では立花親子、響鬼さん、今の僕の親であり鼓の師匠でもある鋭鬼さんが来てくれた。（威吹鬼さん、あきらの姉御に京介の兄貴は今日は仕事でこれなかった。）

刃「では、いつてきます!!」

香須実「健康には気をつけてね。」

日菜佳「彼女ができたら報告してくださいね〜色々教えてあげちゃいますから。」

おやつさん「向こうでも、猛士通信はできるから、見てくれるといいね。」

鋭鬼「陽海学園に刃はなにかようk「はい！！わかりました。」  
・・ちよつと！！」

刃「鋭鬼さん・・言うと思っていたので、あえて無視してみました。「ちよつと酷くない!?!」  
・・気にしないで下さい。」

刃は少し同情めいた目を鋭鬼にむけて言ったが、実はその場にいたたちはなの全員（響鬼除く）が同じ視線をおくっていたのだ。

響鬼「まあまあ、少年の新たな門出なんだから、そんな顔するなよ。」

と、響鬼さんはたちはなの面々に向かって言った。

香須実「それもそうよね。じゃあ響鬼くんは何か刃君に言う事はあるの?」

一番初めに気を取り直した香須実は響鬼に言う事はないか聞いてみた。すると響鬼は

響鬼「まあ、向こうの理事長はいい人そうだったから、大丈夫でしょう。あと、向こう行っても鍛錬を忘れるなよ。」

刃「はい、響鬼さんも簡単にやられたら駄目ですよ。」善樹は響鬼に言い、

響鬼「分かっていますよ。僕も少年も、」

と響鬼は言いかけて、刃は響鬼に合わせるように言った

刃・響鬼「結構、鍛えてますから。」

刃と響鬼はそういった後、軽く笑い、刃は

刃「そろそろ行かないとバスに遅れるので、では!!!」

と刃は左手を顔の横あたりでシュ、と敬礼みたいにして待たせている車へと行き、乗り込んだ。

指定のバス停まではたちばなから少し遠いので、先輩鬼の轟鬼の愛車「雷神」に乗っていくことになっているのだ。

そして、刃を乗せた雷神は走り出し、最初の角を曲がり、見えなくなったときに集まっていた皆の後ろの方から、缶コーヒーを持った轟鬼がきた。

轟鬼「しまった、おいていかれたツス!!!自分も刃君に今までのお礼とか言いたかったのに残念ツス!!!」

おやつさん「あれ?轟鬼君なんでここに?」

轟鬼「いや、実は斬鬼さんからコーヒー買って来いって言われていったんですけどああ、そうだ皆さんに言う事があるツス!!!」



らな・・・というわけで俺がお前の鬼としてのコードネームを考え  
たわけだ。」

刃「オオツ！！なんて素晴らしい事なんだ！！」

斬鬼「そういえば、鋭鬼はお前に名前は付けようとしなかったの  
か？」

と斬鬼は聞き、刃は頭を掻きながら、

刃「まあ、つけてくれたといったらつけてくれましたが、あま  
りにも……………」

とはつきり言わなくなったので斬鬼は不思議に思い、

斬鬼「なんてつけたんだ？」

刃「鈍鬼」

斬鬼「は？……………なんていった？」

刃「鈍鬼です。理由は鋭鬼と対になるからだそうです。」

斬鬼「ひどいな……………まあ、安心しろ……………それよりはマ  
シだから。」

刃「はい？……………マシってどういことですか？」

斬鬼の一言に驚いた刃は自分の耳を疑った。

斬鬼「お前って結構性格とか戦い方が変幻自在だから難しかったんだよ。」

刃「左様ですか、では何になつたんですか？後、僕はコレが素ですからね！！」

刃が斬鬼に聞こうとしたら、車は目的地に着いた。

そこは住宅街の中にポツンとあるバス停であつた。時間はバスが来る30分前である。

斬鬼「おっと、目的地に着いたようだが刃、お前の鬼としての名前はこの紙に書いてあるが、今は見るな。」

と斬鬼は車を降りた刃に小さい紙を渡した。そして斬鬼の一言に刃は首をかしげた。

刃「なぜですか？」

斬鬼「簡単なことだ。もう既に猛士に登録してるからだ。「ええ！！」あきらめる鈍鬼よりはマシだから。あともう一つのこと、音撃弦のことだが、俺のを使え。」

刃「え．．．ええええええ！！どういふことですか！？英語で言うなら What do you mean ですよ！！」

刃は斬鬼の一言に驚いた。それもそのはず、斬鬼は猛士の中でもトップクラスの鬼である。その鬼の武器を使うということはかなり信頼されているという事でもあると刃は思っている。





刃「ああこれはどうも初めまして、しかしなぜ他の人がいないのでしょうか？」

一番前の座席に座ると運転手に尋ねた。すると運転手は

運転手「これからもう一人の所へいくんだよ。いまついたがね、ヒヒヒヒヒ」

するとバスは一つのバス停の前に止まり、バスに言っでは悪いが、いかにも平凡そうで、刃と同年代の少年が入ってきた。

彼はバスの中間の席に座り窓の外を見つめていた。刃はすぐには離しかけずに、少し様子を観察することにした。こうやってするのは刃がいつもする行動で、あいまいにだが相手がいい人かどうか判断することができる。

刃「何もかも人並み、でも……まさか高校受験に落ちこちるなんてなあ」

少年は独り言（刃の所まで丸聞こえだったが）を呟いていたが刃は心の中で

刃「こっちは高校受験も受けられなかったんだぞ〜！！（泣）」

と叫び、そうこうしているとバスはトンネルの中へと入っていく。

するとバスの運転手は窓の外を見ていた少年に、

運転手「……あんたも……陽海学園に入学する生徒かい？」

声の調子からするとわざとちよつかいをかけるのだなと思ったが、刃はこれで彼の事が少しは分かるかもしれないと思い、黙っていた。平凡な少年「あ、はい。」

少年は素直に答えた。会話は続いていく。刃はその少年の方へ顔を向ける。

運転手「ヒヒ、だったら覚悟しておくことだ・・・」「は!!!?」  
ヒヒヒこの長〜いトンネルを抜けるとすぐに学校だ。陽海学園は恐ろしい学校だぞ〜!!!」

その時の少年の顔の変化を見て刃は思った。

(あれ?こいつもしかして僕と同じ人間じゃないのか。まあいまさら引き返せないがな!・・・念のため名前聞いておくか・・・)

刃は驚き顔の少年に向かって尋ねてみた。

刃「あゝ失礼、僕の名前は松坂刃と言う、君の名前は?」

月音「あ、僕は青野月音あおのしづねって言うんだけど・・・さっきの運転手の話は本当?」

少年は青野月音(以下月音)と言っらしい。彼の質問に刃は落ち着かせようと、

刃「勉強とかの意味ではないか?何もお化けや幽霊の類が出るわけではないのだから。落ち着いていこうじゃないか(本当は妖怪だらけだけどwww)、月音君。同級生になるからお友達になろう

じゃないか。」

月音「月音でいいよ。刃君は「到着だぞ〜」ヒヒヒ」後は降りて話そうか。」

「ああ」と返事をした後、バスを降りようとしたら運転手に止められた。

運転手「ああギターの少年は降りるところが違うから少年とは一旦ここでお別れだよ。」

刃「そうですか。では同じクラスになるといいな。」

と、刃は降りた月音に言った。

月音「あ、ああ、そうだね。」

外の景色に半ば困惑気味ではあったが、月音は刃の言葉に反応して返事をした。

刃「ああ、じゃあ、またな。」

会話が終わるとバスは扉を閉じ動き始めた。動き始めた後座席に座った刃は運転手に尋ねた。

刃「なあ運転手さん、「ヒヒ、なんだね?」・・・彼は普通の人間じゃないか?あと、これからどこへ行くのでしょうか?」

運転手「そうかもしれないね〜今から理事長の所へいくのだよ。」

バスの運転手は怪しげなオーラを出しながら答えた。少しするとバスは止まり、黒服の人達が入ってきて僕の周りを取り囲んだ。刃はただ

刃「なんですか……」

と呟くくらいしかできなかった。

第一話「妖怪じゃなくて、陽海学園に入るの!?!:前編」 (後書き)

刃が鬼になるのはおそらく次だと思えますのでその所よろしく  
お願いします。

さてココで一つ問題が刃がなる鬼の色は肌?の所が黒で、顔の輪  
郭と言うのかな?その所が銀色の鬼になりますが刃の使えるのは作  
中でもありましたが、弦と鼓でメインは鼓の鬼ですが!・・・音撃  
鼓と音撃棒の名前が思いつかない(すいません!)

なので失礼だと思えますが音撃鼓もしくは音撃棒の名前を募集し  
ております!!片方だけでも構わないので募集しております!!

鼓の必殺技は考えているのに音撃棒と音撃鼓は考えてなくてすい  
ませんでした!!それと主人公の設定は次回の前書きで紹介します。

それでは次回までサラバダー!!

## 第一話「妖怪じゃなくて、陽海学園に入るの！？：後編」(前書き)

一話後編ですが、まだ変身しませんその代わりオリジナルのデザインスクアニマルが出ます。(ネーミングセンス無いけどね!!)

まあ、裏萌香はほんの少ししか出ません。後小宮君が不憫な感じになっていますが、気にしない方向でお願いします。

それと簡単に主人公の設定を書いておきます。

名前：松坂刃 性別：男 身長：180センチ 体重：95キロ  
誕生日9月15日 星座：乙女座 顔：ジョジョの奇妙な冒険の  
ジョナサン・ジョースター 髪型：斬鬼さんと同じ 一人称：転生  
する前「俺」、転生後「僕、自分」 親：生みの親は刃が小学生の  
時にヤマビコの童子と姫に襲われて死亡している。刃は姫と童子か  
ら逃げているときに鋭鬼に発見、保護されその後鋭鬼の養子となり、  
今は立花で暮らしている。因みに口調の変化も立花の教育によるも  
の、ロザリオとパンパイアの原作知識は10年くらいの間には大体は  
忘れてしまっているがその時になると思い出す。 性格：気はやさ  
しくて敵に対しては容赦ない性格のつもり(本人談) 好きな物：  
和菓子、料理、相棒のディスクアニマル 歌う事 好きな人(Li  
ke)の方の好き、loveはまだ無いよ!!)：響鬼さん、斬鬼さ  
んを筆頭にした立花の皆 嫌いなもの：バナナ  
、魔化魍、姫と童子(特にヤマビコは) 苦手な人：陽海学園の理  
事長、裏萌香、弾鬼さん(チョット怖いから) 悩み：オシャレが  
してみたいが鬼になると服が燃えてなくなるので意味が無くなって  
しまうのではないかが最近の悩み後、本当に陽海学園の理事長と響  
鬼さんが本当に友達なのか疑ってしまう事

鬼の名前：刃鬼じんぎ 属性：光と雷 使う武器：弦と鼓と剣 戦い方：  
実は今まで魔化魍に音撃を決めた事は少なく、小暮さん特製の双剣  
を使った対姫と童子戦や先輩鬼のアシストが専門（特に膝に爆弾を  
抱えた斬鬼さん、なんかやられる事の多い裁鬼さんをよくアシスト  
していた。）の鬼であった。しかし、陽海学園を入学を期に音撃す  
る事を定着させようと双剣を没収したのである。 外見：肌の部分  
は黒でマスクの縁取りは白銀色、角はあまり響鬼と変わらないが何  
故か音角だと右の角が、音弦だと左の角が響鬼の2倍近く伸びてい  
る。原因は現在調査中とのこと（みどり談）

長くなってしまいましたが、それでは後編をお楽しみ下さい。

## 第一話「妖怪じゃなくて、陽海学園に入るの!?!?…後編」

第一話「妖怪じゃなくて、陽海学園に入るの!?!?…後編」

僕が黒服の人たちに連れられて一つの扉の前に来た。黒服の人たちは僕を部屋の前まで連行するとさっさと来た道を帰ってしまった。

刃「ええ!? 普通こういう時って部屋の中まで連行するものではないが!?!?!? はあ、とりあえずノックするか。」

僕がドアをノックしようとしたら扉が突然開き、僕はこけた。

??「ククク、いらっしやい待っていたよ刃鬼君<sup>じんぎ</sup>」

刃「あゝ痛ててえゝと貴方が?」

理事長「そう、私がこの陽海学園の理事長である御子神天明<sup>みこがみてんめい</sup>だ。」

僕は胡散くせええと思ったがさっきの会話で気になる事が一つでき訊ねた。

刃「あの〴〵理事長「なんだね?」さっきのジンキ<sup>じんぎ</sup>って一体…?」

理事長「おや? 君の名前は知らないのかい? ほら」

とパソコンの画面を僕に向けたそこには僕の鬼の時の顔写真の横

に「刃鬼」と書かれていた。

刃鬼「へえ・・・刃鬼ですか流石は斬鬼さんいい仕事していますね〜あ、そう言えばこれおやつさんと響鬼さんからのお土産です。」

僕は理事長にバッグから取り出したきび団子二箱を渡した。

理事長「おお、すまないね。これは後で食べるとして、君に諸注意を話しておくか。」

刃「一通りなら知っています。まずこの学園の教師に魔化魍の情報をこっそり教えることと僕の音撃武器の鼓か弦をしばらくの間理事長方に貸すこと・・・でしたっけ？」

理事長「そう、そして君が人間であることを最大限隠すこと・・・もし学園内に大々的にばれたら君を消さなくてはならない。(二) ヤッ・・・後、君の属性ってなにかね？」

理事長は刃に言うのと刃の額からは大量の冷や汗が出ていた。

刃「僕は光と雷ですね。(ヒョエ)、怖いなあ・・・まあでも原作通りだと月音が・・・あ・・・ああああああああああああああああああああ！！忘れていたああああああ！！」

理事長「どうしたのかね？顔が真っ青だが？もしかして誰かにばらしたのかね？」

刃「いや〜その僕以外に人間がいると思います。気配が普通の人間と同じでしたから。」





萌香「そんな頭を下げなくていいですよあ、私は赤夜あかしや 萌香もかつて  
言います。」

刃「自分は松坂刃といいます・・・急ぎますか」

萌香「はい!!」

こうして僕たちは1の3の教室を見つけ先に萌香さんが入っていた。すると野郎の叫び声が聞こえてきて続けて、僕も入ったが中はもう混沌となっていて、身長180近くある僕が空気になっていた。すると眼鏡をかけたネコミミ先生がこっちにやってきて

猫目「君が蔵王丸さんの知り合い？私はこのクラスの担任の猫目ねこのめ  
静しずかだよ〜これからよろしくね」

刃「は、はい・・・もしかして斬鬼さんが助けた“アノ”猫の・・・？  
「正体を言つては駄目ですよ！」失礼しました・・・魔化魍の情報は先生に渡せばいいのですか？」

猫目「そうですよ〜後あの人からは？」

猫目先生は僕に期待するような目で僕を見てきた。僕は斬鬼さんから貰った紙を刃鬼と書かれたところの下にかかれてある伝言を読んだ。

刃「ええ〜っとお陰さまで傷も治りましたので今度美味しい魚を刃に送らせます・・・ウエ!?何で僕!？」

猫目先生は斬鬼さんからの伝言を聞いた猫目先生は上機嫌で

猫目「はいはい皆静かにしてね〜それでは授業しますよ〜」

なんか納得いかないけど・・・斬鬼さんだからしょうがない

そうして放課後になり、寮へと行ったが・・・

刃「凄く・・・不気味です・・・」

隣では友達となった月音君（人間）が萌香さん（バンパイア）に突っ込みをしていたが・・・完成の違いはしょうがないよ・・・すると

萌香「そういえば月音とえ〜と」「刃でいいよ」「刃は何の妖怪なの？」

萌香さ〜んそれは校則違反ですよ？とりあえず人間と答えるわけにはいかないのですらりと

刃「自分は鬼ですよ・・・ちょっと変わってますがね・・・それと正体を聞くのは校則違反のほうですよ？」

僕はそう言っていると月音くんは動揺していたが・・・

萌香「それもそうだったね月音、さっきのはなしにしてね、じゃあね!〜!」

月音「ああ、萌香さん・・・ハア」

月音君はため息をついて部屋に行こうとした。僕も自分の部屋に足を向けた・・・

・・・

刃「月音君・・・君は運命を信じるか？」

月音「男との運命は・・・なんか信じたくないな・・・」

刃「激しく同感・・・（理事長の仕業か？）」

僕と月音君の部屋が隣だった。

月音「じゃあ、僕は部屋で休むよ」

刃「そうだな・・・そうだ月音君、」

僕は部屋に入っけいこうとした月音君を止め

刃「これから大変な事があるかもしれないが・・・まあ挫けずに頑張れ」

月音「あ、ありがとう」「それと恋愛もな」なっ!？」

刃「萌香さんのこと好きなんだろう？ならどんなことがあっても諦めるな君が頑張れば報われるよ絶対・・・後、鍛えろよ。僕が言いたいのはそれだけだ・・・じゃあねシュッ!」

僕はそう言い左手で響鬼さんのアレをやり部屋の中へ入っけいた。部屋の中は普通の部屋だったが・・・家電製品に何故か達筆で

響鬼&みどりセレクション

と書いてあった・・・そういえば響鬼さん最近家電にはまったって言っていたな・・・

刃「まあ・・・それは関係無いかさて荷物とディスクアニマルの整理するか・・・」

僕はバッグを開け、着替え、ディスクアニマルを取り出したが・

刃「あれ？僕の剣がない？なんでだ！？確かに入れたはず・・・何だこの紙？」

バッグから一つのメモがあつて僕はそれを広げるとそこには小暮さんの文字があつて

刃へ

陽海学園に武器はいらないので君の双剣は預かっておきます。後、改造もしているので期待しててください。

小暮耕之

助より

刃「まじでか・・・しかも改造か・・・魔改造だろうな・・・あ、なんか楽しみと思ってる僕がいるな・・・期待しておこ。」

僕はメモを閉じ、ご飯を作るため台所へ向かった。

- - -  
- - -  
- - -

刃君が部屋の中へ入っていった後、

月音「なんか・・・頼れる人だったなもしかして彼が猫目先生が  
言っていた“戦鬼”だったりして・・・それはないか」

それは僕が教室に入ったとき、

猫目「うちは妖怪が通うための学校です。」

月音「（ええ〜！！？何言っているの〜？）」

猫目「この存在を知ってしまった人間には死んで貰ってます。」

そうしていると不良っぽい人？（妖怪）が

不良「人間なんて食えばいいじゃないか美女なら襲えばいいし」

この人怖いと思っていると猫目先生は顔をしかめながら

猫目「駄目ですよ〜そんな事していると魔化魍と勘違いされて  
“戦鬼”にやられますよ〜」

猫目先生がそう言つと生徒が

生徒A「先生、戦鬼ってなんですか？」

そう言つと猫目先生は

猫目「先生も詳しくは分からないけど優しくて人間を助ける鬼で楽器で闘つらしいです。魔化魍の方は先生は名前程度しか知りませんが、」

小宮「ハッ、そんな奴に負けねえな」

猫目「私は会ったことがありますが、普通のパンチが数々もあるそうですって、」

その後、萌香さんが入ってきた時後ろにいた刃を見た。その時、彼は他の人から少し距離を取られていたが僕は何かこう温かい感じが・・・自然をかんじた。

月音「何でだろうな・・・僕も部屋に入るか」

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

私は月音達と別れたけど刃君・・・彼はなんだかよく分からないけど私が水の側にいるときに感じとよく似ていた。

萌香「でも、優しい感じの目だったな・・・彼ともお友達になりたいな。」

私は部屋の前の前に来て、そう決心して部屋に入ってきた。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

朝僕は目を覚まし、朝飯を食べて時計を見た。

刃「ふむ・・・まだ5時半か少し体を動かすか」

刃はジャージに着替え、寮の前の空き地でまず体術の訓練、それが終わると音撃棒「烈光」で対姫と童子を想定したシャドーをやった。

刃「ハツ・・・ふう・・・」

シャドーを終えたとき、近くの木の陰から人影が出てきた。僕はとっさに身構えたがその人影の正体は理事長であった。僕は慌てて烈光を降ろし、

刃「理事長おはようございます！！汗だくですいません。」

理事長「うむ、おはよう調子はいいみたいだね。実はお願いがあつてここへ来たのだよ。」

刃「お願いですか？なんででしょう変身する以外なら構いませんが、

理事長「いや響鬼君からの話だと君は変身しなくても鬼幻術が使えるそうだが？」

刃「あ、はい今ですと鬼棒術が使えますよ？と言っても響鬼さんや斬鬼さんたちのをみようみまねしただけですけど・・・烈火弾で

構いませんか鬼火だとちょっと怖いので」

理事長「いいだろう・・・ちょっと着いてきなさいココでやるのは危険だからね。」

僕は理事長の後へ着いていくと原作で萌香さんのロザリオが始めて取れた場所に出て、

理事長「では・・・アノ墓石にやってみてくれ」

刃「分かりました・・・ハアアアア・・・」

僕は墓石に向かい、烈光を天に掲げ、気を集中すると烈光の先に付いている鬼石から白色の光の塊の烈火弾の刃版、烈光弾が出て、

刃「ハア!!」

と烈光を墓石に向かって振り、光の弾は墓石へ飛んでいき、墓石に当たると墓石は壊れその後着を5本程壊して烈光弾は消滅した。

理事長はその様子を見て、

理事長「刃鬼君、これだとかかなり加減をしないといけないね。このままでは学園の生徒に死者が出てしまう。」

刃「そうですね・・・え？待ってくださいよその言い方だと学園内で鬼になつての戦闘があるいいかたじゃないですか!!」

理事長「そうだが?・・・それと君の烈火弾「一応烈光弾と名づけました。」烈光弾はやけに清めの力が強いね・・・それは属性が関

係しているのかね？」

刃「さあ、過去に猛士で属性とかに詳しい人に聞いてみましたが、光属性は過去にいませんでしたから全く分からないそうです。まあ、皆からすると音撃を決める量が少なくて済むのでありがたく思っている人もいるそうです。」

理事長「ふむ、と言う事は君は猛士の鬼の中では忙しい方なのかね？」

刃「いえいえ、響鬼さん達が復帰するまではそうでしたが今はそれは無く音撃棒の名前を決める時に響鬼さんの音撃棒「烈火」をもじって「聖火」にされるくらいでしたよ・・・自分火属性じゃないのに」

理事長「ククク・・・まあ彼ららしいな・・・さて君も汗を流したいだろうしそろそろ寮に戻りなさい。」

刃「あ、はい。それとコレディスクアニマル基本の三種の<sup>アカネタカ</sup>茜鷹、<sup>ルリオオカミ</sup>瑠璃狼、<sup>リョクオオサル</sup>緑大猿です。」

理事長「おやおや、コレはすまないね〜では」

理事長はディスクアニマル3体を受け取ると僕に背を向けて帰っていった。

刃「そう言えば今日は月音君が小宮に襲われるんだっけ・・・ディスクアニマル使おうかな・・・今日は相棒使うか。」

僕は腰にぶら下げている残りの一体を手に取り、鬼の顔をあしら

った音角を取り出し、ディスクアニマル起動させるすると灰色のディスクは白色に変わり僕はそれを空へ放り投げたするとディスクは変形し、鳥の形になり僕の腕に止まった。

刃「僕の隣の部屋の男の後を付いていってくれないか？もし危険な目に合っていたら録音せずに僕に知らせてきて」

僕がそう言うのと僕の相棒の光鷲ひかりわしは頷き、飛んでいった。

刃「あ、でも今はまだ大丈夫か？・・・でも、猫目先生に資料届けなきゃ」

僕は部屋に戻って汗を流し着替え、魔化魍の資料をまとめて猫目先生に私に学校へ急いだ

〜数分後、職員室にて〜

刃「コレが山で遭遇するタイプの魔化魍とその姫と童子の資料です。」

猫目「ありがとうね〜それで刃君は部活はどうするの？」

資料を渡した時、猫目先生はそう言ってきたが僕は体型的に運動部の方がいいかもしれないが、仕事があるからマトモに部活は出来ないだろうし、音楽だと清めの力が出てしまうかもしれないからむりだけどココに来る前にみどりさんから

みどり「部活は絶対しなさい！君は中学校でもマトモに友達が出来なかったから高校では友達を作りなさい！さもないと光鷲を没収ですよ！！」

と念を押されているのだ・・・確かにココ最近は魔化魍の数が激減しているけどな」

刃「相棒没収されるのも嫌だからな」でも部活は何をしたらいいのかわからないからな・・・あ、先生は何か顧問していますか？そこに入ります。」

こう言う時は担任の先生が顧問をしている部活を聞いたらいって明日夢義兄さんが言っていたな・・・聞いてみたら

猫目「私は新聞部だけど・・・いいの？君の体を見る限り空手部とかの方がよくない？」

刃「いや、昔空手の誘いを受けたことありますが、僕の型は実戦に特化しているので相手を大怪我させてしまったので無理です。」

猫目「じゃあ、部活動勧誘の時になったら入部届渡すからね」

刃「お願いします（コンコン）え？もう？」

猫眼「どうしたの？」「先生！チョットばかり授業遅れます！！」「分かりましたけどそつちは窓ですよ！」「鍛えてますから！！」「でもココ1階じゃないですよ！？ああ！？飛んじやった・・・まあ今年はず一人確保できたからいつか。」

僕は窓から飛び出し、相棒の誘導で月音君たちの居場所に言ったが・・・

小宮「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」



萌香「ZZZZZZ・・・」

寝ています・・・なんか朝から疲れたなとりあえず僕は月音君に

刃「まあ・・・これからも仲良く頼むよ・・・月音君」

月音「そうだね・・・それと刃君」

月音君は僕のほうへ向きながら話し掛けてきて

刃「なんだい？」

月音「その肩に止まっている鳥はなに？」

僕は相棒をディスクに戻す事を忘れていたので慌てて

刃「・・・あああ！！コ、コイツは僕の相棒で・・・まあ簡単に  
言えば陰明師の式神みたいなものだよ。」

月音「そうなんだ・・・」「あげんぞ！！」「違うよ！！」

刃・月音「はあ・・・」「」

男の二人の疲れたため息が陽海学園の空へと溶けていくだけであ  
った。

**第一話「妖怪じゃなくて、陽海学園に入るの！？：後編」(後書き)**

次回は胡夢さん登場と部活動編をやります。具体的には刃仕事から戻る（なんか大変な事になっている）胡夢とファイト（この時既に鬼になっている） 数日後部活動勧誘を手伝う 烈斬登場的な流れになります。

次回は最初から刃は鬼の姿になっていますので今回鬼の姿になっていない事をお許しください！！

## 刃鬼にいたった経緯（前書き）

前に感想で刃の鬼の名前がキャラの名前と関係性がないと言われましたが、その説明として小話を作りました。

因みに作者が何故鬼の名前がキャラの名前となんの関係性が無いわけはばっさり言う世の中そんなイニシャルが同じ人が上手く集まらないだろと思ったからです。因みに作者のイニシャルは上下同じです。

## 刃鬼にいたった経緯

番外編「斬鬼、刃の鬼の名前を考えるの段！」

それは別府のとある旅館での出来事であった。

轟鬼「斬鬼さん、お茶買ってきましたッス・・・てなんすかこの紙!？」

部屋中に半紙がばら撒かれてあって、よく見るとその半紙全てには文字が書かれてあり、どれも最後に鬼の一字があった。

斬鬼「あゝ轟鬼か、お茶はそこに置いておいてくれ」

轟鬼「ざ、斬鬼さん!？これ一体なんですッスか？」

斬鬼「あゝこれはお前は刃知っているだろ？」

轟鬼「それくらいは知っていますよ!だって彼が僕の代わりに闘っているっすから・・・でなんで刃君の名前が出てくるッスか？」

斬鬼「あいつに鬼の名前がないだろ?で今鋭鬼が考えているが、俺も考えることになってな。さつきから考えているのだが・・・な、」

轟鬼「どうしたッスか？」

斬鬼「なあ、俺の名前は財津原蔵王丸たかひとしでお前は戸田山登巳蔵響たかひとし、鬼も日高仁志と名字と名前の最初の一字が一緒だろ？」

轟鬼「そう言われればそうッスね・・・あつ!刃君は松坂刃で

違うツス!!」

斬鬼「そう、だから鬼の名前がなかなか決めれないというわけだ。果たして名字から決めるか名前から決めるか。」

轟鬼「なら戦闘方で他の鬼を守るから護鬼は？」

斬鬼「なんかゴキブリみたいだから却下だ!!」

轟鬼「なら双剣で双鬼!」双子の鬼みたいだから却下!」なら猛士中で一番神々しいから聖」却下だ!!それ以上言ったら許さんぞ!!」すいませんツス!!」・・・あ、なら神様っぽい鬼で神鬼は？」

斬鬼「それはいいかな・・・ああ、響鬼が鬼神とも言われているから駄目だな・・・!!」そうだ」

斬鬼は机に座ると筆に墨をつけ、一枚の半紙に二つの文字を書いた。

書き終わると斬鬼は轟鬼に見えるように半紙を広げた。そこには「刃鬼」と書かれていた。

斬鬼「刃は鼓と弦そして剣を使う、鼓は鬼棒術で火炎剣があり、弦も剣と言われていた。どれも刃やいはが関係しているし、聞いた噂ではあいつも響鬼に似た力を持っていると言われているから神じんとおなじ響きを入れてみたどうだ？」

轟鬼「流石は斬鬼さんツス!!後、刃君が気に入ってくれるかですね。」

斬鬼「あつ・・・轟鬼後で組み手な！」

轟鬼「ええ~~~~~酷いツス!!」

この後、おやっさんに言ったら勝手に猛士に登録された事を斬鬼が気づいたのは刃を陽海学園に送る前日であった。

## 刃鬼にいたった経緯（後書き）

今回はどうでしたか？今回は初めて携帯で投稿してみました。誤字がありましたらパソコンで直しますが、では次は本編を投稿します。ですので楽しみにしていただけたら有り難いです。

第2話「刃鬼参上!!」（色んな意味で）：前編」（前書き）

最初に紅さんに謝罪をしておきます。

主人公の音撃鼓の名前は「光震天」になりましたが、紅さんの書いた設定は強化後の音撃鼓として使わせてもらいます。

紅さん、設定まで考えてくださったのに勝手に変えてすいませんでした。

それでは第2話をどうぞ!

第2話「刃鬼参上!! (色んな意味で) : 前編」

第2話「刃鬼参上!! (色んな意味で) : 前編」

僕は今陽海学園におらず、とある山の中にいます。理由は・・・

侠鬼(京介の鬼としての名前)「刃鬼、そっちにいったぞ!!」

刃鬼「は、はい!!」

土蜘蛛と闘っています。今回珍しく魔化魍である土蜘蛛が2体同時に出てきたので僕と京介、侠鬼の兄貴と協力して事に当たり、当初の予定では一体一体潰していく予定であったが・・・

刃鬼「まさか2体同時で出てくるとはね〜おっと」

侠鬼の兄貴はもう一体の土蜘蛛に音撃を決めた。僕も土蜘蛛の足を烈光で叩き割り、

刃鬼「よし、ハッ!!...あらよつと!!...すまないねこ  
つちも仕事だからな。」

土蜘蛛の上に乗った僕は土蜘蛛にそっ言い音撃鼓「光震天」を付け

刃鬼「音撃打、光速連打の型!!」

僕は烈光を文字通り素早く打ち込み、

刃鬼「ハアアアアアアア...ハア!!」

止めに左右の手で持った烈光と一緒に打ち込み、土蜘蛛は破裂して、僕は音撃鼓を回収し、侠鬼の兄貴の元へ行った。

刃鬼「兄貴お疲れ様です!!」

侠鬼「お疲れ・・・しかしお前とこうして肩を並べて魔化魍を倒すのは久しぶりだな。」

刃鬼「そうですね僕が入学するまで僕は轟鬼さんと兄貴は響鬼さんと一緒に活動してましたからね。」

侠鬼「そうだな・・・学園生活は今のところはどうか?」

刃鬼「そうですね・・・今のところはなんとも・・・あ、部活は新聞部に入ることになりました!」

侠鬼「おいおい!!身長が180あるお前が新聞部wwww駄目だおかしすぎて変身解けそうwwww」

刃鬼「ヒドツ!!・・・そっぴや兄貴は学生の時なら聞くな!!」  
「なんでですか・・・?」

侠鬼（実は刃鬼より5歳も年上）「聞かないでくれ・・・高校時代は俺の中では黒歴史なんだ。」

刃鬼「意外ですね・・・（響鬼は最終回まで見ましたが侠鬼兄貴そこまで思い込む程酷くなかったような・・・?）あ、そっぴえば兄貴」

侠鬼「なんだ？・・・まさか他の生徒におまえが人間だとばれたとか！？」

刃鬼「いえ、自分には二つの名前松坂刃と刃鬼の名前があります  
が、学校の書類とかは松坂刃のほうを使っていますが、学園への報告書とか魔化魍の資料とかにはどっちを？」

侠鬼「ああ・・・それは確か鬼の名前を使えと言っていたな・・・  
それと刃鬼」

刃鬼「はい？」

侠鬼「いい加減弾鬼さんと仲良くなったらどうだ？・・・お前が  
怯えているとシニールだから」

刃鬼「と言われましても・・・相手は大先輩だし仲良くなる方法  
も知らないし・・・」

侠鬼「最近弾鬼さんと飲みに行ったことがあるが、弾鬼さんが思  
っているより落ち込んでいたぞ、弾鬼さんお前に助けられた事もある  
からな」

そう僕は弾鬼さんが苦手なのだ事は僕が鋭鬼さんの下に引き取ら  
れてから1年経ち、性格が今の性格に直されている時にみどりさん  
の元でお手伝いとしてその時修理に出されていた弾鬼さんの音撃鼓  
「御影盤<sup>みかげばん</sup>」を磨いている時であった。

僕はその時はまだ弾鬼さんと会っていなく磨き終わって他の汚れ  
はないか確認している時に不機嫌な弾鬼さんとばったり会い、イタ  
ズラをしていると勘違いされた僕は弾鬼さんに物凄い形相（まさに

鬼の様に！）叱られ、その時はみどりさんと小暮さんがきて説明してくれたが（小暮さんは警策で弾鬼さんの尻を叩いて）それから弾鬼さんが怖くなってしまい（中身は成人以上だけどチキンハートなのよね）身長が僕のほうが高い今でもそれは治らないのであった。

侠鬼「で、どうすんだ？このままだと猛士としてもよくないからな。」

刃鬼「確かに弾鬼さんから学んだ事もありましたし・・・今度弾鬼さんと一緒に仕事が出来るようにしてくれませんか？」

侠鬼「わかった。俺もおやつさんに頼んでみるよ。後、小暮さんから伝言があるぞ。」

刃鬼「なんですか？まさか僕の双剣が！？」

侠鬼「いや、最近たるんでいないかと・・・」

刃鬼「・・・確かに夏休みに入ったらまた小暮さんの特別メニューでもお願いして貰おうかな・・・あ、でも今はむしろ力を落とさないで陽海学園で殺人事件がおきるからな。」

侠鬼「まあ、なんかやばい単語が聞こえたような気がするが・・・凄いなあの小暮さんの特訓をお願いするのおまえぐらいだから・・・その所は尊敬するよ。」

刃鬼「僕なんか全然駄目ですよ！僕はおそらく猛士内では一番弱い鬼ですよ絶対！！」

着替え終わった二人は立花に戻ろうとバス停に向かうと・・・

運転手「やあ、待っていたよ刃鬼君。」（ババーン！！）

何故か葉巻を持った運転手さんがいた。

刃鬼「運転手さん・・・何故ココにいるのですか!?!」

運転手「いやね、ココの近くのトンネルの一つが陽海学園に繋がっているものがあって、私はそこを通って君を迎えにきたのだよ・・・」

刃「へ〜〜凄いですねでも、なんで迎えに来るのですか?」

運転手「以前君が理事長に貸してくれた武器とかを返すつもりだからね・・・」

と運転手さんはマッチ箱を開けるがマッチが入ってなく、葉巻を諦めようとしていたが・・・一応火種はかなり近くにあるので僕は烈光の片方を取り出し、

刃「火、貸しますよ。」

運転手「おや、いいのかい? 鬼の力を葉巻に火をつけるだけに使ってた?」

刃「いいですよ。前に何度かご飯とか炊くのに使いましたから。」

そう言いながら運転手さんの葉巻に火を付けた。過去に何度かマッチやライターを忘れてたり、湿ってしまっ使用えない時に刃は自分の特異体質を利用して今のように烈光や鬼火で火をつけたりしたこと

がある・・・最初のうちは小暮さんには内緒で

狭鬼「そういえば猛士の中の噂でお前の火で魚を焼いたり、ご飯と炊くと上手くなるとか・・・」

刃「それはただ単に白色の炎でやるから美味しいと思うだけでしょう。小暮さんと蛮鬼さんは変わらないと言っていましたよ。」

狭鬼「後、お前の料理の腕がかなり上の部類に入るのもあるけどな。刃鬼、お前はそのバスに乗って学園に戻れ。報告は俺の方でしておくから。」

刃「スイマセン兄貴、では失礼させていただきます。」

狭鬼「ああ、気をつけてなで合っているのかな？」

刃「違いなですよ・・・では」

僕は学園のバスに乗りその場を去ったが、確かあそこのバス停5時間に一回だったような・・・兄貴暇じゃないのかな？

〔学園到着後〕

刃「あれ・・・あれは萌香さん・・・」

学園に戻り、職員室へ向かっているとなんか物凄く落ち込んでいる萌香さんを見つけ、僕は建物の陰に隠れて見ていた。

刃「なんでだ？あ、そうか胡夢が絡んでくる頃か・・・お、動き出した。」

僕は萌香さんの後をついていき、保健室がある建物の直ぐ側の陰に隠れていた。暫くすると・・・

胡夢「きゃあああああああああああ！！！」

パリーン！！

悪魔みたいな翼をはやしたサキユバスの女の子確か名前は黒乃胡夢だったか？ふゝむこの前女神さんが多少は原作ブレイクしても問題ないって言っていたしとりあえず鬼に変身しておくか・・・

因みに女神に会ったのは陽海学園に行く2日前のたちばなである。僕がバイト中に（年齢？身長で誤魔化せるわ！！）

女神「おひさ〜〜元気にしてたみたいね〜〜女神だよ〜〜」

刃「え！？何来しているんですか！？しかもまわりが白黒の世界になっっているし！？」

僕は周りを見ると皆止まっていた。試しに相棒を起動させると・・・

光鷲「ぴび？」

刃「起動できたよ・・・あ、そうだ女神様！」（光鷲を元に戻す）

女神「なんじゃね、私のスリーサイズは教えんぞ！！」

刃「全っ然違いますが・・・ココに転生する前、めっちゃくちゃ

生意気な口きいてスイマセンでした！今思うと自分不味い事をし  
てしまったという後悔の念が今も渦巻いていて・・・本当にスイマ  
センでした！！」

と僕はつい土下座で謝ったが、TPO間違えるとただの侮辱にし  
かならないっておばあちゃんが言っていた！！

女神「いや、お主が土下座するほどの事じゃないよ地獄兄弟とか  
浅倉とかと比べれば、たいしたことはないからの。」

刃「え！？あの人たちに会った事あるのですか！？」

女神「パラレルワールドのじゃがの・・・で今日はお主に言いたい  
事があつてきたのじゃ」

刃「なんででしょう？陽海学園のことですか？」

女神「そうじゃ、お主はこれからロザリオとバンパイアの原作に  
介入するが一つ言っておこう・・・バンバン原作ブレイクしてくれ  
！！」

刃「・・・それだけですか？」

女神「うむ、特に九曜だったかの？あやつは原作では一発で倒さ  
れたが、それをボッコボコにたこ殴りにしてやってくれ！！」

刃「それはなんという・・・素晴らしい事を！！よろこんでやら  
せていただきます！！」

僕原作見たけどあいつ嫌いなんだよね〜アームド響鬼とかになれ

るのなら即鬼神覚声使っている自身はある。僕と女神はお互いに見つめあつと

刃・女神「……又ハ、又ハハハハハハハハ！ d（・・・）」

サムズアップして黄色いボディスーツを来た某伸びる男みtainな笑いをした後、僕はバイトをしていることを思い出し、

刃「そういえば御注文は？」

女神「そうじゃの〜きび団子を一つ頼むかの〜」

刃「畏まりましたが……時を元に戻してくださいよ……これではどうしようもできません。」

後身長とか体重がヤバイのですが後、顔をイケメンにしてくれてありがとっございます！！」

今は時が止まっていてきび団子を作りたいのに作り様が無いのだ。

女神「それもそうじゃの……まあ本当は195とかにしたかったがのそれだとやりすぎだとおもってそれでも抑えたのじゃぞ、さておぬしの顔はジョナサンジョースターっぽくしたが、時を元に戻すぞ！！」

刃「お願いします！！」

女神「いくぞ〜……そして時は再び動き出す。」

刃「オiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!？」

〜回想終了〜

刃「さて、介入してみますか。」

僕はベルトから吊り下げていた音角を取り出し指で弾いた。そしてそれを額に持っていった。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

俺は萌香さんのロザリオを外そうとするが、何故か外れなかった。直ぐ側には胡夢ちゃんが攻撃を仕掛けようとしていました。

月音「ウワアアアアアアアアア!！」

俺はとっさに眼を閉じたが、胡夢ちゃんの攻撃はこなくて体に温かい腕の感触と軽い浮遊感を感じた。

俺は目を開けるとそこには肌は黒く、白銀色の縁取りで右の角が長い鬼みたいな妖怪がいて、俺に

鬼「よっ！少年、二股とは感心しませんな〜」

と左手でシュツとした後、俺達を降ろし、胡夢さんのほうを向き、

鬼「その少女、彼が二股しているからといって殺そうとするのはいけないな〜（違う事は知っているがな〜）」

なんか心の声が聞こえたような気がするが二股のまま勘違いされるのはなんかいやなので俺は鬼？に向かつて

月音「あの〜二股じゃないですが・・・」

刃鬼「マジデ」

胡夢「あなたも私の邪魔をするの!？」

刃鬼「とりあえずそうさせて貰いますよ・・・」

胡夢「なら、あなたも大人しく死んで!!」

胡夢さんは鬼に爪を突き刺そうとしたが、

鬼「フンッ!」

と片手で胡夢さんの手首を掴んで受け止め、胡桃さんは必死に上昇しようとするがぴくりとも動かない。

すると鬼は胡夢さんの腕を引っ張り、

鬼「フンッ」

ゴン!

頭突きをした胡夢さんは飛ぶのを止め、額を抑えた。

鬼は俺の方へ向くと、

鬼「でこの子どうする?一度と君達に逆らえないようにボコボ

「にやるか？」

俺は鬼に向かつて

月音「もう十分です！胡夢さんも本当に悪気があってやったわけじゃないだろうし」

鬼「ほう・・・彼女は君の命を奪おうとしていたのだが・・・何故かな理由をお聞かせ願おうか？」

鬼がそう言うとな俺は鬼に向かつて

月音「だって胡夢さん根っから悪い子には見えないもん。」

と自分が思ったことを言ったらすると鬼はただ俺達に背を向け、

鬼「そうか・・・なら部外者の俺が言うことはないな。」

と言って林の中へ歩いて行った。俺は鬼の名前を聞いてなかったので、鬼に名前を聞こうと声をかけた。

月音「待ってくれ！君の名前は！？」

鬼は歩みを止めると振り向かずに

刃鬼「俺の名は刃鬼だ。」

月音「俺の名前は青野月音だ！」

刃鬼「そうか・・・じゃあな」

刃鬼は手を振りながら森の中へ入って行った。

月音達と別れた僕は顔だけ変身を解き、ディスクアニマルから着替えの入ったバッグを貰ったが、

「……………どこで着替えようか？」

この後探し回ったが、結局は自室まで戻って着替えることになった。

第2話「刃鬼参上!!」(色んな意味で) : 前編「(後書き)」

前編終了!!後編では烈斬が大活躍すると・・・いいなあ。

第2話「刃鬼参上!!」（色んな意味で）：後編」（前書き）

2話後編ですよ

バレンタインが終わりましたが、作者は母からひとつ貰いました。アーモンドチョコレートで、最初の1個は買った本人が食べてました。

では後編をどうぞ！

第2話「刃鬼参上！！（色んな意味で）：後編」

第2話「刃鬼参上！！（色んな意味で）：後編」

僕は猫目先生に呼ばれ職員室へ行つた。

刃「1年3組松坂刃、入ります！猫目先生に呼ばれたので来ました。」

僕は最初鬼になったのがバレタと思つていたが

猫目「刃君こつちですよ〜」

僕はコソコソと猫目先生の近くへ行くと、

猫目「はいコレ入部届」

と猫目先生は「入部届け」と書かれた一枚の書類を渡した、

刃「そついえば、入部届を貰うの忘れていましたね。」

猫目「刃君つてもしかして忘れやすいの？」

刃「まあ、確かに今まで何度か修行するのを忘れて先輩方とかに怒られた事がありますね・・・斬鬼さんのときは怖かったな〜。」

猫目「にやははは、それで今日の放課後はどうするつもりかしら？」

刃「部屋に戻って入部届を書いた後、筋トレを！」

猫目「刃君別に今すぐ書かなくてもいいから色々な部活動を見てまわってはどうかしら？」

刃「はあ・・・でもそれで他の部活動に入ったらどうするのですか？」

猫目「あ！！それは困りますね〜」

と猫耳を垂れて困った顔で言っていた。僕は軽く笑いながら

刃「冗談ですよ先生、自分は一度決めた事は変えない主義なので、

猫目「刃君先生を騙そうとするなんて酷いですよそれなら単位W  
「今度新鮮な魚を持っていきますので！」許します！！」

刃「すいません、今度“仕事”が入ったら帰りに買っていきます。

猫目「わかりましたよ。それで斬鬼さんって魚釣りは好きですか？」

突然猫目先生はそんな事を言ってきたので僕は

刃「へ？なぜそんな事を聞くのでしょうか？」

猫目「いいじゃないですか、でどうなの？」

確か昔僕が斬鬼さんと一緒にバケガニを退治する時に（轟鬼さんは別の所に行っていた。）海辺に行った時に斬鬼さんが海を見て

斬鬼「ココの海はいつ来てもいいな・・・仕事じゃなければ魚釣りでもしたいな・・・」

と言っていたような・・・でも腕はいいのか知らないから僕は

刃「釣りに興味はありそうですが、腕前はどうかは知りませんね。お役に立てなくてスイマセン。」

猫目「そうですねか今度向こうの休みがいつ取れるか聞いてみますね」

僕はその一言を疑問に感じ、猫目先生に恐る恐る聞いてみた。

刃「あのおの～先生もしかして先生は斬鬼さんの・・・ストーカー？」

猫目「違いますよ！！斬鬼さんとは少しながらお付き合いを・・・ね。」

刃「ウ、ウエエエエエエエエ！?!?（W ;）」

と僕は思わずオンドウルな王子みたいな叫び方をしてしまった・・・あ、でもそのおかげで斬鬼さんが無茶しなくなった事もあるのかもととりあえずお礼を言っとこ

刃「ありがとうございます。」

猫目「にゃ!？」

猫目先生は驚いていたが周りの先生からの視線がきつかったので僕はさっさと職員室から抜け出そうとした。でも、猫目先生はそんな僕を止め、

猫目「それと忘れていましたがこれ」

と二つ折りにされている一枚のメモを渡してきた。

刃「ん?なんですかこれ?」

猫目「なんか刃君へって上から言われたの」

僕は内容が気になったが、それは一人の時にと言われたため僕はそれを胸ポケットにしまつて職員室を出た・・・最後まで他の先生方の視線は冷たかったが、

僕は受け取ったメモを見るとそこにはこう書いてあった。

学園の中での変身はもつと派手に暴れても問題は無いのでこれからも頑張りたまえ。

それと烈斬を返すからディスクアニマルをコチラによこすように

理事長より

あれ?理事長ってこんな性格だっけ?とりあえず僕は休み時間に茜鷹と光鷲を起動させ、理事長室へ向かうよう指示した。

くそして放課後（飛ばしすぎ？なに、気にする事は無い）く

僕は他に部活動があるのか見てまわる事になったのだが、

空手部員「是非空手部に！！」

プロレス部「いや、空手なんかではなく我らのプロレス同好会に来てくれ！！」

柔道部「プロレスなんて甘いものではなく、柔道部へ柔道部は君を待っている！！」

運動部の勧誘に捕まっています。事の発端は少し前月音君たちと色んな部活を見てまわっていると空手部のデモンストレーションでバーベルを持ち上げていた。すると

空手部員「さあさあ、この100キロ以上ある墓石を持ち上げたら一万円を贈呈します！！ただし出来なかつたら1000円頂きます。」

と聞いて僕は冗談で

刃「月音君、GO！！」

月音「いやなんで俺！？」

刃「いや、ノリで」

萌香「でも、こういつのはどちらかと言つと刃君が向いてない？」

と萌香さんが言って最近力が鈍ってないか確認するために挑戦した。勿論持ち上げれていた。バケガニとか持ち上げていたらなんか出来た。一時期はオリンピックピック目指せるのじゃないかと言われたほどだ。(まあ原因は特異体質のおかげで鬼の力がやすいらしい。)

そしたらこの有様である。月音君達とはつくの前に逃げていた。僕は

刃「すみません自分もう部活は決まっていますので」

といつて逃げた。誰もいない屋上に行くとは茜鷹と相棒が烈斬と斬撤を持ってきた。

刃「おお、お疲れさん・・・あ、相棒にメモが」

相棒の足にメモがあつて、読んでみると

烈斬の威力を調節できるようにしてみた。今度妖怪相手にやってみてくれ。

と書いてあつたが、理事長それははっきり言えば生徒を実験台にしてみると言っているようなものですよ・・・それとディスクアマルには録音機能がある事を説明したのですからそれを使ってみてくださいよ。

と思つているとプールの方から男の叫び声が聞こえたのでそつちの方へ見てみると水泳部の人が入生を襲っていた。そしてその襲われているなかには月音もいた。

刃「コレはやばいな・・・今回は弦の方の变身で行くか。」

僕は腕につけていた変身音弦を鳴らし、額の前に持っていき天に腕を突き出した。

俺は水泳部の様子が変わったと思うとまわりの人たちは先輩達にかまれ、老人みたいになり、僕が慌てっていると水泳部部长の一ノ瀬珠魚先輩が後ろから抱きつくつと、

珠魚「慌てなくても大丈夫、あなたは特別よ月音君」

月音「ひっ!」

珠魚「実はね・・・私入学式の頃からあなたに目をつけていたのよ。」

月音「・・・!?!」

珠魚「それからはずっとあなたに夢中なのだってホラ・・・月音君て人間みたいにおいしそうな匂いがするから・・・」

すると珠魚先輩の口が割れ、

珠魚「ずっとあなたを「キャアアア!!」何事!?!」

するとプールサイドにギターみたいなものが突き刺さり、何故か前にあつたときとは違い、左の角が伸びている刃鬼さんが両手に

精気を座れた人達を抱えていた。そしてプールには顔に足跡がついた先輩達が浮いていた。

刃鬼「また会ったな少年、君は災難を引き寄せる才能があるのかな？」

そういうと抱えていた生徒を降ろし、

刃鬼「ハッ！」

ジャンプして、他の精気を吸われた生徒の近くに行き、片手で生徒を掴みまたジャンプをし次々と救出するが、

月音「俺も助けて下さいよー！！！」

刃鬼「あゝすまん今から行く！！！」

と刃鬼さんプールの中へ入っていきこうすると萌香さんがきた。

萌香「月音っこれは！？」

すると珠魚先輩は萌香さんに

珠魚「何よっまた来たの邪魔しないでっ泳げもしないクス妖怪のくせにー！」

俺はその言葉に驚いていると、

珠魚「凶星でしょ！有名な話だもの水がだめなあなたには何もできないのよねー！！？ザマないわせいぜいそこで……」

と言いかけていると萌香さんはプールに飛び込んだ。するとプールに電撃がはしり、胡夢さんが来た。

胡夢「何これ・・・何でモカが水に飛び込んでんの!？」

その一言に刃鬼さんが言った。

刃鬼「あつ、確かバンパイアって水に弱いつてお師さん（斬鬼さん）が言っていたな・・・ってヤバいじゃないか!！」

胡夢「そうよ!水はバンパイアの力を奪ってしまうから飛び込むなんて正気じゃないわ!！」

俺は急いで萌香さんの所へ潜った。

・・・許して萌香さん!

月音君が潜って行った少し後、萌香さんが沈んでいるあたりから強大な妖気を感じ、裏萌香になった。僕は烈斬を引き抜き斬徹を装着していつでも音撃ができるよう、そして加勢するためにプールに飛び込んだ。すぐに烈斬を濡らさないように裏萌香さんの隣に行き、

刃鬼「萌香さん、微力ながら加勢させて貰いますよ。今の貴方は本調子ではないのですね。」

裏萌香「ふん好きにしろ、それよりも貴様等・・・よくも、よくも好き放題やってくれたな」

と人魚に殺気を放っていた僕も便乗して殺気を放った（魔化魍に放つ殺気より100分の1程度ですが）。

人魚「な、何よ今のおんたなんて怖くないのよ!!」

と指を鳴らし他の人魚達が僕達に向かってきて、僕は直ぐに月音君をプールサイドに、裏萌香さんを上空に放り投げた。そして烈斬の鬼石のところを水につけ、技名を叫んだ。

刃鬼「音撃斬「雷電斬震」!!!!!!」

雷電斬震を放ったが、この技には一つ問題があった・・・それは雷の技であるから半分自爆技であったのだ。勿論技の威力は抑えたから僕には大して聞いては無いが昔を思い出しそうだな・・・痛かつんだよ本物の雷電斬震。

人魚ら「~~~~キャアアアアアアアアアアア!?!!?!?!」  
「~~~~」

人魚達は痺れ浮かび、上空に飛び上がった人魚らも裏萌香さんには全く手も足でず叩き落とされ、プカーと浮いていた。

僕がプールサイドに戻ると、裏萌香さんは月音君にビンタし、

裏萌香「自分のことしか考えられぬような男に私のそばにいる資格はない!失せる・・・月音」

と言いつち去り、僕もその場を去った。

その日から3日後、僕は猫目先生に出し忘れた入部届を出しに行く、月音君、萌香さん、胡夢さんが笑顔で話していた。

僕は彼らの笑顔を見て、仲直りが上手くいって嬉しく思った。すると猫目先生が僕に気づき、

猫目「あ、刃君あなた以外にも新入部員が3人も出来たよ！これで新聞部を安心して活動できる！」

刃「良かったですね！」

すると三人は僕の顔を見て、

月音「え、俺達の他にいる1年生って」

萌香「刃君だったの・・・？」

胡夢「その体格で？」

と順番に言ってきたので

刃「左様ですが、それがなにか？」

と言つと三人がハモって叫んだ。

三人「嘘だ　　！！！」

なにが嘘だ！！だよ、胡夢さんに至っては僕とは（松坂刃の方）

初対面だよ！なにこの扱い酷い！酷すぎる！！

・・・でもその一言に納得してしまう自分もなんか酷いな。  
まあ、普通身長180のマッチョが新聞部に入るわけ無いもんな。

第2話「刃鬼参上!!」（色んな意味で）：後編」（後書き）

次回には魔女っこはでますが、スケベ狼は出ません!!

では次回をお楽しみにサラバダー!!!!!!

### 第3話「双剣と天才幼じゃなくて少女」（前書き）

どうも遅れてスイマセン！！花粉症でWのシユラウドみたいな格好でないと家から一步も外に出られない善宗です！！今回から後書きの形式が変わります！！それでは第3話をどうぞ！！

### 第3話「双剣と天才幼じゃなくて少女」

#### 第3話「双剣と天才幼じゃなくて少女」

新聞部に入って初仕事が、月音君がのぞきをしたという冤罪の証明と真犯人である銀影先輩を吊上げると言う猛士では“絶対”できなかつた体験ができた。(二重の意味で)

そうして時が過ぎ中間テストの結果発表の日、僕はまた理事長に呼び出された。

僕は理事長室に行くと理事長は猛士印のきび団子を食べていた。

刃「失礼します！理事長自分に渡す物があるそうですが何でしょう？」

理事長「ああ、つい先日猛士から君宛に届いた物だ開けてみるといい。」

というと理事長は机の下から箱を取り出した。

僕はそれを開けると中には片刃で白い柄には鬼の顔が入った双剣が入っていた。

刃「理事長コレって僕が修行で使っていた双剣「双閃」そうせんじゃないですか!？」

理事長「そうだ、響鬼君が君がこの学園にいる間に双剣を使う腕が鈍ってはいけないと思ってこっち配達するようにしたらしい。」

響鬼さん……僕マジで惚れそうだけどと思ひ僕は双閃を

手にした。因みに双閃は練習用なので最初から刃引きされているが鬼闘術で響鬼さんの火炎剣のようにすることは可能であるが、まあ学園の中では裏萌香さんぐらいしか相手はいないだろうから使うことはない・・・はずだ。理事長「さて、そろそろ中間テストの結果発表が張り出されるころだね、君の順位もわかるから早く行きなさい。」

刃「はっ、わかりました！それでは失礼しました！！」

僕はバッグに双閃を入れ、順位表を見に正門付近へ行き、途中で月音君と会い話しながら移動した。

順位表前には人だかりが出来ていた。僕の順位は44番で月音君は128番であった。

月音「へ〜、刃君運動も勉強もできるんだね。」

刃「まあ、鍛えてますから。」

すると月音君は萌香さんを見つけて近くに駆け寄った。

僕は順位表に向き直し萌香さんの順位を探した・・・16位か、萌香さんマシパネエツス！

視線を萌香さん達に戻すと、萌香さんを見つめている小さい女の子がいた。そしてその後ろから、いかにも小物な感じのする野郎の集団が来た。

小物「おめでとう紫さんまた一番だったようですね。さすが天才少女まだ11歳なのに飛び級で入学したのはダテじゃなさそうた、

」

なんかこの人更に小物臭がしてきたぞ。

KOMONO「でもいいですか調子に乗らないで下さい。私から見れば君なんて乳臭い青二才なんですよ」

そんなあなたは僕から見たら小物の中の小物だからね〜でも僕の場合は周りが大物すぎる人達が多かったかな？

僕はそんなことを考えつつ、魔女っ子の所へ歩いていく。

紫「・・・委員長」

ああその小物、委員長だったの他にまともな奴がいたと思ったんだけどな〜

小物委員長「だいたい何ですかこの格好は！完全に校則違反でしょう私ははみだし者は大嫌いです。」

と小物委員長はドンと魔女っ子を押しした。

紫「きゃ、や、やめてくださいです〜」

僕は少し歩くスピードを上げた。周りで何か話しているが気にしない。

小物「君の学級委員長として頭が痛いんですね、どうせ正体は魔女なんでしょう？汚らわしい！君と同じ学級っただけでヘドがでますよ。」

小物がそういうと近くに落ちていた少し大きめな石が勝手に動き出し、小物の頭に当たった。

紫「プツははは、ザマミロです。」

小物が、紫さんに手をあげようとした瞬間萌香さんは紫さんを庇うように二人の間に入り、僕は小物の腕を掴んだ。

萌香「やめて！・・・ごめんなさい、通りすがりだけど放って置けなくて女の子に暴力はやめて下さい。」

刃「僕も萌香さんと同意見ですね。委員長ともあるう者が同じクラスの女の子をいじめるとは君器が小さいね。」

僕はそう言いながら小物の腕を放した。小物は舌打ちをして去っていった。

その後僕達はさっきの紫さんという子と話すこととなった。

紫「あつありがとございますっ助かったですせんとどうゆかり私仙童紫っていいます。」

萌香「聞いたよ同級生なのに11歳なんだってね頭いいんだね」  
紫「紫ちゃんてその服も素敵だし、」

刃「僕なんかよりかゝなり！良いセンスを持っていると思うよ。」

「ほら？結構可愛いじゃん魔女の服って・・・ね？因みに僕は月音君と萌香さんの後ろに立っている。」

紫さんは顔を赤らめながら

紫「…やつ、そのつ…素敵だなんて…そんなことないですつ…私なんて」

紫さんの様子に月音君と萌香さんは頭の上にハテナマークをつけながら聞いている。

紫「ステキなのはキレイで優しいモカさんの方です…だって実は私…私…私モカさんが好きなんです…!!」

と抱きつき、月音君が間抜けつらをしている時、僕は恐らく日本で一番忙しい人の思い浮かべながら、

刃「仙童紫さん、カミングアウト!!」

と言った。

それから数分後、

紫「わぁモカさんて見た目より胸おっきいです」

魔女っ子は萌香さんの胸を揉んでいて周りにいる男子生徒の五割は顔を真っ赤にし、残りの二割は鼻血でアーチを描き、もう二割は股間を抑え前かがみになり、最後の二割はトイレに駆け込んだ。

因みに僕は親が子供が遊んでいる様子を眺めている感じで見た後掃除道具入れのロッカーに向かって歩いた。何故かって？それは勿論この血という絵の具で真っ赤に染まった廊下を掃除するためさ!!

紫「私はモカさんが好きだからあなたみたいの人に美しいモカ

さんを汚されたくないです。だから宣戦布告ですー。マジカルステッキ」

僕がロツカーに手をかけようとした時、ロツカーが勝手に開き、中に入ってあった箒やらバケツ等の掃除道具がひとりりで動き出し、半分は月音君に残りの半分は僕に飛んできて、とっさに掃除道具を掴んだ。

僕は紫さんの方を向くと月音君は箒に頭をペシペシと叩かれていた。そんなMr平凡は無視して僕は

刃「紫さん、いきなり何をするのですか!?!」

紫「むむむむ、あなたなかなかやりますね。あなたをモカさんに近づけなくするのは大変そう」あれ？僕は萌香さんとは友達以上の関係にはならないけど?」・・・え?」

僕がそう言つと紫さんは固まり、僕は続けて

刃「僕は今まで同い年友達が出来なかったからね、今こうして友達が出来たことで十分だよ。もしこれ以上中が発展したらバチ(音撃棒じゃないよ!)があたるよ。だから・・・」

僕はそう言いながら箒を元に戻し、

刃「君の相手は月音君だけですよ!!後、バケツ貸してこちらへんを掃除するから」

月音「ええええええええええ!!」

僕は雑巾とバケツを持って手洗い場へ歩いた。その時紫さんへ向けた殺気が混じった視線を感じたので一応念のため相棒の光鷲をコッソリと起動させ、紫さんの警護を任せた。

（放課後、部活の時間）

僕は新聞部へ行こうとしたら、何故か女の先輩達から

先輩「こう言う事で彼氏と喧嘩してしまったの、仲直りしたいけど彼とは話せなくてどうしたらいいの？」

人生相談をされていた・・・前に同級生の悩みを聞いて、それに助言をしたら何故か僕が悩みの解決法を的確に教えてくれるという噂が校内に広がっていった、それ以来一回缶ジュース一本で人生相談を行う事になっている。僕は

刃「まあ・・・なんと言いましょうか、そう言う時はまず話したいという内容の手紙を書いて、靴箱等に入れてもしそれで話し合える時になったらちゃんと謝る。と言う感じですねお話を聞く限り、まだ修復可能な範囲にあると思いますのでちゃんと謝れば大丈夫でしょう・・・これは僕個人の意見でうまく行く可能性は余りありませんが、」

と言った。すると先輩は

先輩「ううん、ありがとう、それにしても刃君って大人びているよね、なんか後輩に聞いているって感じより大人の人に聞いている感じがするの。」

・・・多分響鬼さんとかおやつさんとかの話聞いていてからか

？周りに僕と同年の子なんていなかったし、僕自身中は大人にならなくてはいけなかったからかな？

因みに僕の前には女の子の先輩と紫さんと同じクラスの子がいて、代金の缶ジュースの代わりに紫さんの種族「魔女」のことを教えて貰った。僕は魔女の立場を聞いて

刃「（なんか昔の戦鬼の境遇に似ているな・・・）」

戦鬼は今を守ってくれる人のほうが多いが、昔は人々を魔化魍から守っていたが、人間からは恐れられ、魔化魍からは敵視されていた。たまに人間から追われたこともあったらしい・・・しかも鬼は間違った心で闘えば、魔化魍の牛鬼になる・・・つまり魔女が人と妖怪の間の存在なら、戦鬼は人と魔化魍の間の存在になるのかな・・・彼女はイタズラをよくすると言っていたけど

刃「（なんか放つてはおけないな・・・お友達にでもなれないかな？・・・ん？）」

僕は身長が180cmなのに似合わない台詞に軽く絶望して窓の外を見ると相棒が窓をコンコンと突っついてた・・・あの小物どもが何らかのアクションを起こしたか・・・よし！！僕の双剣のリハビリの相手になってもらうか・・・僕は

刃「スイマセン先輩方、急用があったのを思い出したのでこれで失礼します！！」

僕はそう言いながらAIBOが叩いていた窓を開けて、

刃「サラバダー！！」（テレーツデー！！）

2階から飛び降りた・・・勿論無傷ですけど何故かって？鍛えますから！

- - -  
- - -  
- - -

私は委員長に連れられ森の奥に連れられた私はステッキで攻撃しようとしたけどステッキは破壊された。

小物委員長「こいつ・・・どうしてやりましょうか」

小物A「食べちゃおうよ霧も深いし誰にもバレないって」

委員長の取り巻きがそう言うと委員長は口を開け

小物委員長「そうですね食べてしまうのも「猛士式鬼飛蹴！」  
グハッ！？」

委員長を蹴飛ばした人は私の前に着地すると

鬼「譲ちゃん、大丈夫かい？」

するとモカさんが来て

萌香「紫ちゃんから手を・・・あれ？刃鬼君どうしてここに？」

と鬼の顔を見てきよんとしていた。すると刃鬼と言われた人が

刃鬼「なあに、そのコモドトカゲモドキが休み時間・・・そこ

の譲ちゃんが少年に宣戦布告している時に譲ちゃんに殺気を向けていたのを見つけてな。すこし監視役の式神を放ったら大当たりしたわけさ。」

と腰に手を当てながら言ったすると刃鬼さんは続けて

刃鬼「なあ萌香さん、貴方・・・いや貴方“達”は彼女に言いたい事があつたんだろ？」

すると遅れて月音さんが来て

月音「萌香さ〜ん、あれ？刃鬼さんどうしてここに」

刃鬼「まあ、そんな事はどうでもいいが、月音君萌香さんの口ザリオを外してくれないか？そのトカゲもどきがくるぞ、」

すると小物Aが爪を立てた腕を月音さんに振りかぶり

月音「え？うわっ!？」

と月音さんは慌てて避けるとバランスを崩し、萌香さんの首に付いていた口ザリオを掴むと

パキイン

と音を立てながら取れ、萌香さんは強大な妖力を放っていたその様子刃鬼さんは

刃鬼「ウツソーン・・・そんなに簡単に外れるものなのかよ・・・」

と呟いていましたが萌香さんが変わると刃鬼さんは

刃鬼「あの〜周りの雑魚は任せて自分はあのボスのなやつをやりたいのですが・・・構いませんか？」

裏萌香「ふん、勝手にしろ・・・」

刃鬼「では、参る！！」

その時委員長の取り巻きの人達はアツという間に萌香さんに蹴飛ばされ、委員長も刃鬼さんがベルトについていた物を委員長の腹につけると白い太鼓が出てきて陣鬼さんは横にぶら下げている二振りの剣を掴むと

刃鬼「音撃刃「鬼人乱舞の型！！」ハアア！！」

といい、委員長に切りつけていたが血は何故か出ていなかった・・・

刃鬼「ハアアアアアアアア！！！！・・・テヤア！！」

最後に×の字に斬ると太鼓は委員長に流れ込むと、何故か爆発を起こし委員長は

小物委員長「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

と叫びながらお空へ飛んでいき、最後にキラーンと聞こえたかもしれませんが無視していると太鼓をベルトの元の位置に戻した刃鬼さんが落ちていた私の帽子を拾い、誇りを落とすと私の頭に乗せ、

刃鬼「これで大丈夫でしょう・・・譲ちゃん、君は魔女かい？」

と話し掛けてきて私は俯きながら

紫「・・・はい」

という刃鬼さんは私の前に座り、頭に手を置き、私は驚いて顔を上げると

刃鬼「そうか・・・聞いた話では魔女は人と妖怪の間のものと言われていて今では差別されているらしいが、少なくとも月音君、今は別の人格になっている萌香さん、他にも二名くらいいるけど、その人達がきつと君の“友達”になってくれると思うからこれからはいいことがあるから大丈夫！！・・・きつとねだから頑張れよ！俺も友達になるから。」

と右手をサムズアップしながら言ってくれた。私はさっきとは違う意味で

紫「はい！！！」

と違って同じように右手でサムズアップをすると刃鬼さんは立ち上がり

刃鬼「と言うわけで、俺はもう用は済んだのでアデュー！！！」

と行って走り去っていきました・・・なんか変わった鬼さんでした。



### 第3話「双剣と天才幼じゃなくて少女」（後書き）

#### 今回の猛士報告

また新しくお友達が出来ました。中学では一人も出来なくて悲しかったけどここでは友達を大切に守っていききたいと思います!!

後そのお友達に上級生と勘違いされました・・・（、、、、）

返信：

響鬼「おゝ刃また友達が出来たんだ。青春だね」

みどり「それにまた勘違いされたんだね刃君・・・まあ身長も高いからね・・・」

響鬼「そういえば俺が送ったホームベーカリー気にいったかな？  
後最後の顔はなんていうの？」

斬鬼「なんだっけ・・・ガビーンだっけ？」

轟鬼「え？自分はガンと聞きましたツスが？」

小暮「お前達!!それはショボンだ!!それも分からないとは  
情けないぞ!!」

鬼達「「「じゃあ、なんで小暮さんは知っているのですか!?!」」」



#### 第4話「なんか徹夜するとテンションってよく分かんないけど上がったっちゃうよ」

今回は斬鬼さんを除く数名の鬼がひどい事、オリ設定になっている所がありますので、それが嫌な方は戻るのボタンをクリックしてください。

また今回ミスターサー先生の【清める鬼と屍】の主演の黒鬼さんをゲストして登場させていただきました。

最後に今回から設定を少しいじりましたのでご了承いただけるようお願い申し上げます。

#### 第4話「なんか徹夜するとテンションってよく分かんないけど上がったっちゃうよね」

第4話「なんか徹夜するとテンションってよく分かんないけど上がったっちゃうよね」

僕は今辛い状況に置かれています！僕は今まで沢山の危険な事や辛い修行をしてきましたが・・・

月音「今回載せる部活の取材終わったよー！！」

萌香「そこに置いて！紫ちゃんはどう？」

紫「こつちはまだです」

そうー！！今度配る新聞の原稿（？）製作に必死な状況です。因みに僕は皆とは少し離れて作業をしていますなぜなら前は紫ちゃんの隣で作業していたが、身長差と体格差（180のマッチョと137の小さい子）でかなりシユールな光景になり、皆が笑い作業にならないのでこうして離れて作業することになったのだ。

胡夢「刃君は自分のコーナーの記事書き終えた？」

刃「2つともできたのでそつちを手伝いますー！！」

胡夢「ほんと？助かるわー！！」

実は僕は自分のコーナーを2つほど作ってしまって、タイトルは「刃のさつと一品」と「刃流人生相談」の2つで前にちよつとだけ載せたら、一つ目は料理が苦手で夜食が欲しい男子生徒に二つ目は

女子生徒と一部教員の先生方に何故か人気であるのだ……僕学生なのになんで人生相談をされる側なんだろ？それと一つ目で神奈川県川崎市溝口の某將軍を思った方！！僕あのキャラ好きなんですよね〜（作者も大好きヴァンプ将　！！）

銀影「こら、刃早く手を動かさんかい！！」

銀影先輩はそう僕に注意し、教卓の所できび団子（刃作）を食べ、緑茶を飲んでいた。

刃「なら先輩も手伝って下さいよ！！第一、そのきび団子は皆の休用に作ったのですよ！！それを先輩が全部食べてどうするのですか！？」

確かきび団子40個作ったのに全部銀影先輩が食べてしまった……  
・・太りますよ？

銀影「うるさいわ！俺は先輩だからこうして上から目線でゆったりとしているんじゃない！！」

紫「なんか漫画の編集者みたいですよ〜」。

月音「なんで漫画で例えるの！？」

とりあえず、今回のきび団子は自分でも上手にできたと思ったから楽しみにしていたのになので……

刃「相棒……GO！！」

僕は起動していた相棒を銀影先輩に差し向けた。相棒は先輩の髪

の毛を一本思いつきり抜き、その後体当たりした。童子と姫さえ怯む攻撃を受けた先輩はぶっ飛び、黒板に頭をぶつけた。

銀影「痛いわー！！先輩は敬え！」

刃「僕の師匠（小暮さん）が言ってました。ただ年が上なだけでは真の先輩とは言えない、後輩から心から尊敬される人を先輩と言う・・・後輩に罪をなすりつけかつ、何人もの女性と付き合っている人は先輩とは少しばかりいいがたいですね。」

銀影「グツ・・・反論したいがお前さんの先輩の事を聞いたら反論できないな・・・ちよつと飲み物買ってくるわ。」

先輩はそういうと立ち上がり、教室から出ていった。因みに先輩に話したのは響鬼さんと斬鬼さんの二人を話した・・・轟鬼さんと威吹鬼さんはねえ・・・飛んでいた相棒はカッターを加え、僕が座っている机に降り、カッターを置き

光鷲「パイー！！」

と鳴いた。相棒はこの新聞部の今じゃマスコットキャラクターになっっているのだ。因みに事の発端は数日前に遡る。

（数日前）

月音「そういえば刃君、」

刃「ほいほい何でしょうか月音君？」

月音「あの式神はどうしたの？」

記事（月音君の濡れ衣事件）を終え、僕達は部室で打ち上げをしていた時に月音君は言って、

萌香「式神って月音が言っていた鳥のこと？」

紫「え？刃さんって式神を使えるのですか？」

胡夢「嘘！！それ見せて！！」

と他の皆は僕を見ているが、そう簡単にディスクアニマルを見せるのはダメだろうが僕がダメといって素直に引き下がらないと思っていると猫目先生が来たので

刃「あ、猫目先生ちょっと携帯使わせてください。ちょっと立花に電話します（ボソッ）」

猫目「あ、はいはい人目のに無いところやってくださいね。」

僕は教室を出て、人目のいない場所へ行き、立花に電話をすると一人の男性が電話に出た。

??「はい、こちら立花です。」

刃「あ、黒鬼の旦那お久しぶりです。」

黒鬼「お、やい・・じゃないな今は刃鬼だっけ？久しぶりだな。」

刃「はい、そちらもお元気そうで」

黒鬼くろきの旦那はつい僕の二つ前に鬼になった先輩鬼で、使う武器が僕と同じ鼓と弦で身長も一緒に鋭鬼さんの被害を受けている事もあって一時期はコンビで組んでいた事もある程仲がよかった、イケメンでいい人ですよ・・・本当だよ？

僕は黒鬼さんにみどりさんが立花にいるのかどうかとディスクアニマルの事をバラしても大丈夫なのか聞いてみた。数分して後に黒鬼さんが

黒鬼「ああ、今みどりさんはいなくておやつさんに聞いたところ構わないってさただし起動させる時は音角ではなく音弦を使えだと言」

刃「黒鬼の旦那、ありがとうございます！また今度仕事を一緒に組める時を楽しみにしています。」

黒鬼「おう、お前が烈斬を使っているところ見てみたいしなじやあな！」

そう言い黒鬼の旦那は電話を切り、僕も教室へ戻り猫目先生に携帯を返しカバンから相棒のディスクを取り出し机の上に置いた。

胡夢「え？これが式神？」

萌香「鳥の顔は入っているけど・・・鳥じゃないね。」

紫「魔力が欠片も感じませんよこれは本当に飛ぶのでしょうか？」

紫ちゃん、ディスクアニマルの動力って少しの清めの音と電気だから魔力はないよ。皆がディスクにじゅじゅと見ているときに僕は

腕についた音弦を顔の横に持っていき弦を出して指で弾いた。

ベェン……

と琵琶のような音が教室内に響くと灰色のディスクは白色に染まり、ディスクは動き出し鳥へと変形した。相棒は皆の頭の上を2回クルクルと飛び、月音君の頭の上に降り

光鷲「ピイツー!!」

と鳴き、数秒置いて女の子勢は目を輝かせながら、月音君は

萌香&胡夢「可愛い~~~~!!!!」

紫「なんか不思議な力を感じます!!これは早速解体せねば!!」

この後、紫ちゃんに追いかけられた光鷲は窓ガラスを割り、外へ逃げたそして割れたガラスは僕のお給金で支払われた。

〜回想終了〜

萌香「刃君!!」

刃「ハッ!私は一切何を!」

月音「顔は上の空の状態で手は凄い勢いで記事を作っていたよ……  
・器用だね。」

刃「それほどでもない!……ってあれ?胡夢さんは?」

僕は教室内を見まわすと胡夢ちゃんの姿が無かった。すると月音君が

月音「なんか急用ができたらしいよ。」

僕はそれを聞いてなにか違和感を感じた。

刃「(記事を作る・・・胡夢さんの急用・・・え〜っとなんかあったような・・・石神先生はもう終わっているし、)」

ついこの間美術の石神先生が女子生徒を石化した事件がおきたが僕はその時天鬼(あきらの姉御の鬼の名前)と一緒にイッタンモメンを倒しに行っていて、学園にはいなかったのだ。僕は考えていると

銀影「な〜にサボっとなのじゃこら!〜!」

ガン!!

刃「オワタツ!?!」

ジュースを買ってきた銀影先輩が考え込んでいた僕の頭にスチール缶を投げた。

銀影「全く・・・胡夢がどっか行ってしもつたから早くやるぞ!」

と言い原稿の一つを取り、教卓に座って作業をし始め、僕も作業に戻った。

胡夢「や、やっと終わった・・・アイツ12回も着替えさせるから遅くなっちゃった。」

私は教室の扉をあけると皆は私を睨んできていた。

胡夢「皆御免!!」

すると月音は

月音「あ・・・胡夢ちゃん今日はもう終わりにするよ。」

萌香「残りは明日片付けることにしたの」

紫「お、お疲れ様でした。」

皆はそう言いフラフラとした足取りで出て行った。皆が出て行くと

胡夢「間に合わなかった・・・。」

私はそう呟き椅子に座った。すると教室の扉が開き、

刃「あり?くるむさん、もしかして皆帰っちゃった?」

右手に缶ジュースを二本持った刃が入ってきた。

胡夢「うん、残りは明日片付ける事にしたらしいの・・・刃君は何をしに出ていたの?」

刃「ああ、先輩がMAXコーヒーを買ってきたから口の中が甘く

て嫌だからトイレに行くついでに紫ちゃんの方まで買って来たんだ・  
・オレンジジュース飲む？」

と100%オレンジジュースと書かれたジュースを渡してきた。

胡夢「あ、ありがとう。貰うわそれにしても刃は月音達と違って  
テンションが高いわね。」

刃「それは勿論鍛えてますから・・と言いたいけど本当は記事  
載せるメニューを考えていたら夜が明けて寝不足なんだ。」

胡夢「私は徹夜なんてしたことは一回だけあるけどそうはなら  
なかつたわよ。」

刃「あれ？そうですか？」

と雑談をしながら刃は私にジュースを渡すと、自分の分の缶コー  
ヒーを机に置くと鞆から灰色のディスクを4枚出すと鬼の顔がつい  
た弦を引き出鳴らすと、4枚のディスクは猿と狼と鳥に変わり、私  
の周りにきた。すると刃は少し驚くと、

刃「胡夢さん、何か悩み事とか人に言えない事抱え込んでいるの  
かい？」

胡夢「どうしてそう思うのかしら？」

刃「いや、顔が落ち込んでる感じだし、ディスクアニマル達が  
心配しているからね・・まあそう簡単に言えないでしょう。まあ、  
恋以外の悩みがあったら月音君たちに聞いてみたら？勿論僕も相談  
に乗るよ。」

胡夢「そう・・・優しいのね」「惚れた?」「全然!」「・・・」  
「・・・まっ気にしないがな!」「私の運命の相手は月音に決めたから!」

刃「そうかそうか、少しは元気になったから良しとしよう。」

と刃はコーヒーを飲んでいると私はディスクアニマルを出した理由を聞いた。

胡夢「どうしてディスクアニマルを出したの?」

刃「ああ、この鳥型のディスクアニマルは茜鷹っていうのだけどコイツは今度紫ちゃんに貸す分でちゃんと起動するか点検で、残りはさつきから胸騒ぎがするのでとりあえず記事の警護を・・・瑠璃狼、緑大猿、頼むよ。」

刃がそういいながら弦をもう一度鳴らすとディスクアニマルは透明になり、足音から私の近くにいなくなると刃は鞆を持ち、

刃「それじゃ、また明日な。」

胡夢「う、うん」

刃が教室から出て私は

胡夢「でもまずは謝らなくちゃね・・・」

そう呟くと、後ろから

??「うふふふ・・・何だい？どうしたのくるむちゃん」

私はその声の主の方へ立ち上がりながら振り向くと、そこには私に脅迫状を送った人物かのうながれ叶流行がカメラを持って立っていた。

叶「いやあ本日は本当に楽しかったよまた明日も遊ぼうねくるむちゃん」

胡夢「な、ながれ君！？どうしてここに・・・明日はやだよっデートの約束は今日だけのはずー・・・」

叶「そんなあつれないなあ今日撮った写真月音に見せちゃうよお？」

胡夢「ええ！？誰にも見せないって言ったのに・・・」

叶「じゃあ明日も遊ぶだろっ！！？もう放さないからなっ」

コイツ、さらに私を脅迫するつもり様ね・・・すると小さな足音が聞こえてきて

??「ガウッ！！」

突然ながれ君の腕に小さい噛み傷ができた。

叶「痛っ！？なんだ？何もいないのに噛まれたぞ！」

するとながれ君が噛まれている所を腕で払うと私の前透明化が解けて青い狼型のディスクアニマルが姿を表した。私はその子を抱き上げ

胡夢「もう私にはつきまとわないでっ!!」

そのまま私は教室を出た……

私は自分の部屋に戻ると抱き上げた狼を下ろすと狼は頭を下げ

狼「ギャンツ!!」

と鳴き、元のディスクに戻った。私はそのディスクを撫で

胡夢「ありがとうね。」

と眩き風呂に入って寝た……明日刃にお礼を言わなくちゃね。

僕は教室から出ると携帯にメールが入って周りに人がいないことを確認するとメールを見ると日菜佳さんからのメールで

鋭鬼さんが刃鬼君に応援を要請したので至急現場に行つて!!

と書いてあったので、急いで部屋に戻り、烈斬と着替えが入ったバッグを持ってバスの運転手さんに乗せてもらい、逝…行くと……

石割「ああ、刃鬼君待っていたよ。」

刃「えゝ石割さん、僕の相手はあれですか？」

石割「はい・・・すみません」

僕の視線の先にいたのは・・・

斬鬼「だからうちの轟鬼が一番だって！！今までたくさん魔化  
魁を倒したんだぞ！！」

と言いながら、轟鬼さんを自慢する斬鬼さん

裁鬼「いや、うちの石割だ！！お前のとこの轟鬼より賢いぞ！」

そう言いながら石割さんを推薦する裁鬼さん、

威吹鬼「いや、うちの天鬼がトップだ！！」

と異論は認めんとばかりに胸を張りながら叫ぶ威吹鬼さん、

いつもと違う彼らに共通して言えるのは彼らの周りには大量の酒  
瓶が転がっていることだ。事の発端は宴会をお開きにする際に響鬼  
さんが、狭鬼の兄貴に

響鬼「いや、狭鬼はよく頑張ってくれるね。」

と言い、酒を浴びる程飲んだ他の弟子を持つ鬼の人達が弟子自慢  
大会を始めて、鋭鬼父さん（今は戸籍上の関係で仕事中以外は父さ  
んと呼ぶようにしている）もそれに参加したくて呼んだらしい・・・

すると鋭鬼父さんが、僕が来たことに気づき、

鋭鬼「何を言っているんだお前ら！！一番はうちの刃鬼だ！！見ろ、今は学園にいるのに俺のために急いできてくれたぞ！！」

と僕に指を指して言った。因みに響鬼さんの方は

響鬼「あつ、バスの運転手さん、お久しぶりです！すみません今酒が入ってしまって、」

運転手「いや、気にすることはないよヒビキ君」

とお茶菓子を摘みながら話していた。すると弾鬼さんが僕の肩に手を置き、

弾鬼「お前色々と大変だな・・・」

次に轟鬼さんが

轟鬼「申し訳ないっす、部活で大変なのに呼び出してしまって、でもアレを止めれるのは刃鬼君しかいないっす！！」

さらに天鬼の姉御が

天鬼「目に隈ができればじめているけどちゃんと寝てるの？後、私の師匠に遠慮は要らないから」

と労いの言葉をかけてくれて最後におやつさんが

おやつさん「もう気絶させていいから、頼むよ。今度休みを多くさせておくから、」

おやつさんの一言に僕は双閃を構え、

刃「はい・・・刃鬼、これより武力介入を開始する!!!」

この後抵抗した斬鬼さん達を気絶させて、立花で報告書と二日酔いを治す(クスハ)ドリンクを作り、バスに乗せてもらい学園に戻った時は既に夜が明けていた・・・2日連続徹夜か。

僕はフラフラと歩きながら新聞部の教室に向かうと、

月音「逆です先輩。皆で作ろうって決めた新聞だから、くるむちゃんがないと完成しないと思ったんです。」

月音君がかっこいいセリフを言っていて、その時二日連続徹夜で鈍くなっている頭に電流が走った。(ア ギ風に)

刃「(あつ、あのナメクジ男が記事を盗み、胡夢さんに脅迫した所か!!)」

とりあえず知らないふりをしながら教室に入ってしまった。

刃「遅れてすみません、あれ?皆さんどうかしましたか?」

月音「あつ刃君実は・・・「大変みなさん大変ですう!!!」」

紫ちゃんが箱を持って走っていき、その右手には「愛するくるむちゃん」と「ながれ」と書かれた手紙があり、僕はその手紙を読むと寝不足で情緒不安定な心に怒りの炎が起こり、読み終わると。

刃「なるほどね、僕の仲間にごういう事をするとは・・・ゆ」

るさん!!」

月音「や、刃君？」

紫「なんかおかしくないですか？」

刃「今の僕を怒らして、楽に死ぬると思っなよ!!」

萌香「刃君!? 落ち着いて!？」

猫目「(あつ、これが噂の刃君デストロイモードね。)」

僕は手紙を月音君に渡し、教室を出て体育倉庫にむかったが・・・

刃「え〜つと、体育倉庫ってどっちだっけ？」

僕は多少迷いながら体育倉庫前に行くと、萌香さんがナメクジ男に襲われかけていた。僕は数歩走り、ジャンプして

刃「おりゃあああ!!」

とりあえずナメクジ男の顔にクウガ式飛び蹴りを食らわした。

叶「ギョボウ!!」

ナメクジ男はそう叫びながら、飛んでいき顔を抑えながら

叶「くそっ!! 僕の邪魔をするな!!」

萌香「きをつけて! 毒ガスを出すの!!」

萌香さんはそういうとナメクジ男は毒ガスをだそうとするが、萌香さん達の様子から毒ガスと言っても相手を痺れさせる程度のもので判断したので、ウ○ト○マンでお馴染みの大胸筋バリアをやってみたがその前に地鳴りが起き、樹の根っこが生えてきた。僕は胡夢さんの方を見ると翼を広げ爪を伸ばし、

胡夢「許さないっ…つくねとモカに手を出したら許さないんだからああ…！」

と叫び（僕はこの時カウントされてないことに少し悲しく思っていた。）、大きな樹が動いていた。ナメクジ男はその光景に

叶「う…嘘だ、夢…これは夢か!？」

と言っていたが僕は近づきながら、

刃「ところがどっこい…夢じゃありません…!コレが現実です…!…!!ウラッ!..！」

といいまた顔面にストレートを放った。ナメクジ男は吹っ飛ぶと胡夢さんの幻術の樹の根っこに縛れているのを見ると鬼爪を出し、

刃「胡夢さん、タイミングを合わせます!..！」

胡夢「わ、わかったわよ!..！」

ナメクジ男は抵抗しようとするが、空からは胡夢さん、前からは僕がきて慌てていたからかマトモな反撃が出来ず、

胡夢「はああああ!!」

刃「せいやああ!!」

胡夢さんは横一文字に僕は×の字に斬った。ナメクジ男は奇声を発しながら倒れ、僕は彼のカメラをこっそり鬼火で破壊して月音君達の元へ歩いていった。

少しして月音君達の毒が抜け終わると胡夢さんは

胡夢「モカ…私…新聞部に戻っていいの？」

萌香「や…やだ、何言ってるのくるむちゃん急がなきゃ新聞の締切に間に合わないよ!いろいろあるけどこれからも一緒にがんばろうね!」

と言って胡夢さんの目には涙が浮かんでいた。僕はその光景を見て、

刃「さて、頑張りますか!!」

と自分に気合いを入れると紫ちゃんがきて

紫「あの〜刃さん、その手大丈夫ですか?血が出ていますけど?」

と言われ自分の両手を見ると手の甲に鬼爪を出した時の穴ができていた(変身したら問題はないのだけど)

刃「ごめん…何か包帯ない?このままだと新聞が血まみれになっちゃう。」

月音「なんで怪我してない刃君が重傷なの？」

萌香「それ、痛くないの？」

刃「大丈夫ですよ。寝不足で痛みを感じなくなっていました、」

と右手は包帯に巻かれているので左手の鬼爪を出す

胡夢「グロい・・・」

銀影「あかん、暫く肉食えんわ・・・おえ。」

刃「なんか皆酷いな。とりあえず締切が迫っているので急ぎましよう!!」

全員「」「」おお!!」「」「」

銀影「いや、お前が仕切るなよ!!」

猫目「そろそろ締切よ!新聞のでき具合はどう!？」

私はそう言いながら新聞部のいる教室に入ると皆が寝ていた。机の上には新聞の原稿があり、確認するとちゃんと仕上がっていた。

猫目「(新聞部の絆はもろくなんてなさそうね!)後は先生に任せよう!休んでね!」

と教室を出ようとすると

銀影「あかん・・・刃それはグロいからあかんって・・・ぬあっ」

紫「刃さん、それは痛いですって・・・」

月音「刃君それは鍛えてますからは関係ない・・・うん」

と寝言が聞こえたので教室を見回すと教室の隅っこであ たの  
ヨーみたいに真っ白に燃え尽きている刃君がいた。

この数時間後刃君は一日中寝ていて、斬鬼さんから二日連続徹夜  
しているという連絡を受けました・・・お疲れ様。

#### 第4話「なんか徹夜するとテンションってよく分かんないけど上がっちゃったよ」

##### 今回の猛士報告

部活の新聞に自分のコーナーを載せることが出来ましたが・・・  
新聞を作るのって修行とはまた違った意味で辛いですね。

後、酒は程ほどにしてください。

返信：

黒鬼「あゝあの宴会か、刃鬼はこういう時大変だよな」

狭鬼「確かに身長は高いけど先輩からはかなり可愛がられている  
し・・・」

天鬼「いつも追加の注文を取ったり、酒のお酌をしているからね  
」

斬鬼「アイツにはいつも迷惑をかけてしまったな。」

轟鬼「あれ？斬鬼さん大丈夫なんですか？」

斬鬼「ああ、俺はなんとか二日酔いは軽くて済んだからな。」

黒鬼「威吹鬼さん達は？」

斬鬼「ああ、あいつらは二日酔いが酷くて刃特製健康ドリンクを  
飲んで、顔色はいいがぶつ倒れてまた寝込んだ。」

黒鬼「なあ、俺も一度飲んだが後の効力は凄いけどあの味だけだとあのドリンクは兵器だな。」

響鬼「へ〜そうなんだ。俺は飲んだ事はないから知らなかった。」

狭鬼「え？でも師匠、確か酒飲み大会で優勝しませんでしたか？あれに参加した鬼は全員飲んだはずですけど？」

響鬼「いや俺ね、今まで二日酔いした事ないんだ。」

全員「」「」「凄い・・・さすが響鬼さん」「」「」

本日の金言「響鬼さんは天性のザル」

斬鬼「それとさつき学園の電話から刃が目を覚まさないうって言うてきているのだが・・・」

日菜佳「なんか2日連続で徹夜だったそうです。」

天鬼「だからあんなに怖かったんだ・・・」

狭鬼「アイツは確か寝るのが好きだからな。」

響鬼「あの時の刃はまさに鬼気迫るものを発していたね〜」

本日の金言「寝不足の刃鬼を怒らせるな！！（マジで怖いから）」

第5話「別に公安を潰しても構わんのだろう?・・・あっ、駄目ですか」(前書

今回は長くなっていて、また独自設定画入っていますのでその所ご了承ください。

第5話「別に公安を潰しても構わんのだろう?・・・あつ、駄目ですか」

第5話「別に公安を潰しても構わんのだろう?・・・あつ、駄目ですか。」

どうも!!ぐっすり寝て回復をした松坂刃です。今僕は何故か・

公安1「おい、何無視しているんだ!!」

公安2「貴様ツ・・・我ら公安を馬鹿にしているのか!!」

何故か公安の人たちに囲まれていた。確か今朝、新聞部の新聞を配っている時に公安の九曜と言う人を始めとした人達（妖怪達?）に絡まれて机を蹴ろうとしたときにその足を片手に受け止め、

刃「自分達は理事長に校内新聞を配る事に関する許可を貰っています。（ハツタリではないよ）それなのに攻撃行為を行うという事はあなた方は何か新聞部に載せられてはいけない事をしていたもしくは今もしていると言う解釈で宜しいでしょうか九曜先輩?それとも他にも校長先生他の教師陣からも許可が必要でしょうか?」

と言いながら足を掴んでいる手に力をこめながら言つとその時は舌打ちをして、

九曜「まあいい、新聞の記事は直ぐに処分しろ!!」

と言いながら去っていった。その後銀影先輩にカンカンに叱られたけどね・・・それから休み時間のたびに公安の下っ端がきては僕

を連行しようとしてその度に逃げてきたのだけど放課後で僕は理事長に呼び出されていて（内容は不明）、向かう途中に見つかったわけである。

刃「（逃げるにしても、今回はかりは理事長が待っているから厳しいしディスクアニマルの巨大化でも公安に切欠を与えるから・・・アツ！今月音君達が公安のやつと闘っているかも！え〜とゴミ焼却所は・・・向こうか、）」

僕がこう考えていると公安の人たちは殴りかかり、僕はそれを飛んで避け、

刃「あゝばよとつとつあん達！！」

とルパン 世みたいなセリフを言いながらゴミ焼却所に向けて走っていた。勿論追いかけてくるが、

公安3「なんだアイツ早いぞ！！」

公安4「スキップのクセにはええ！？」

公安1「またしても公安を馬鹿にしゃがって〜〜〜！！」

公安2「あつごめん、私足吊った！！」

まあ、今まではぶつちぎって逃げていたけど今回はおびき寄せるためだからね〜僕が気をつけることは公安たちを話しすぎない事と喧嘩する際に鬼闘術と鬼幻術を使わないようにする事の二つである。それと公安2、大丈夫か？足吊るのは痛いからね〜僕も転生する前はよく朝起きると両足吊ったからね〜今は鍛えまくったから大丈夫

だけど。

すると目の前にゴミ焼却所が見え、丁度月音君が蜘蛛女に斬られていたところであった。

少しして萌香さんのロザリオが外れ、萌香さんから裏萌香さんに代わる瞬間僕は後ろから来た公安の一人の服を掴み、蜘蛛女に投げ飛ばした。

公安1「ギャブツ!？」

蜘蛛女「何事!？」

蜘蛛女はこつちを向く前に右手に公安3、左手に公安1を装備しやなくて持つと

刃「おまけだあああああああ!！」

投げ飛ばした。しかも蜘蛛女の糸に引っつくように投げて公安2にはとりあえずストレッツチ方を書いた紙を渡し(女の子を投げ飛ばすのはちよつと無理)気絶させてから、月音君を抱きかかえている裏萌香さんの横に行った。

刃「月音さんは大丈夫ですか？」

裏萌香「ああ、なんとか大丈夫だ。お前が思っているより傷は浅いぞ。」

刃「そうですかそれを聞いて安心しましたが・・・許せませんな。僕の友達をこんな目に合わすとは・・・ね。」

すると蜘蛛女と公安のやつらは裏萌香さんの腕についた人を引張るが最初は少しだけ裏萌香さんが動いたが、僕が掴むとピンと糸は張って公安の奴らは慌てて

蜘蛛女「まつ待って…！わ、私達が悪かったわ」

公安1「これ以上我ら公安に手を上げれば貴様達もただではすまないぞ…！」

公安3「だから今回はここまでにして…！」

と言っていたが

刃「萌香さんはあの蜘蛛女を頼む…！僕は残りを片付ける…！」

僕は萌香さんにそう言っていると公安の人達に向かい

刃「ついでに君達に一つ教えよう…力を使う者は必ず相手からやられる可能性がある事を前提に力を使え…！そうしないと…こくなるよ…！」

僕がそういうと糸を思いっきり引っ張り、飛んできた奴らに裏萌香さんは蹴りを、僕は拳で殴った。

公安の奴らを吹っ飛ばすと裏萌香さんは

裏萌香「ふん、私に手を出せばお前らがたじや済まないんだ。身の程を知れ。」

と気絶している公安の奴らに言うと僕に向かい、

裏萌香「月音を保健室まで運ぶぞ、」

刃「はい！それでは月音君、ちょっと失礼。」

僕は月音君を担ぎ上げ、裏萌香さんを先頭に保健室に向かって歩いていった。

～その日の夜～

月音「いてて・・・」

刃「月音君大丈夫か？」

僕は月音君の部屋で月音君の包帯を巻いていた。何故かと言うと月音君が風呂に入り包帯を替えたが、背中を切られているのでやりにくく、その時切り傷に良く効く薬を持ってきた僕を発見して（因みに窓から侵入）、包帯を巻くのを手伝う事になった。この時公安の事を聞いた。

刃「しかし、明日も公安のやつが来るかもね。」

月音「怖いこと言わないでくれよ！！」

刃「ああ、すまない。まあ、また来ても返り討ちにしてやるけどね。」

月音「刃君は遅しいね。そういえば刃君、」

刃「なんだい？」

月音「どうして刃君は新聞部に入ったの？君なら体育会系の部活に入った方が活躍できるのに、」

刃「うゝん確かにそれはそうだけど、僕は少し人には言えない事情があつていつも忙しいような部活には入れないんだ。もし入ったとしてもほとんど部活には参加できないかもしれないし。」

僕がそういうと月音君は大変なんだねと言うと話の内容を替えてきた。

月音「そういえば刃君は刃鬼って人知っているかい？」

僕は少しビックリしたが直ぐに持ち直し

刃「いや、噂程度でしか知らないよ。で、その鬼がどうかしたの？」

月音「いや、今まで僕は刃鬼さんに助けられてきたからそのお礼もしたいし、この前の水泳部騒動で人気もあるから銀影先輩がインタビューしてみたいって言うていたけど同じ鬼の刃君なら何か知っているかなと思って、」

刃「いや全く知らないよ（嘘ついて御免！本人です！）。すまないね力になれなくて。」

月音「謝るほどじゃないよ・・・包帯ありがとう。」

刃「ああ、明日も気をつけるよ！あばよ！！」

と言いながら僕は窓に向かうと月音君は慌てて

月音「ちよつと！！扉から出ていったら！？」

と扉に指をさすが僕は今素足だし、ここの扉油が切れていて開けるたびにギギギギというから近所迷惑になるけど、

刃「大丈夫だよだって僕鍛えていますから！じゃあね、シュ！！」

と月音君が叫んでいる中部屋に戻った……あつ、理事長の所に行くの忘れていた！！

～翌日（ヘイドインへブン！！時は加速する！！）～

理事長「で、なにか理由は？」

刃「いえ、公安に追われていたとはいえ、忘れていてスイマセンでした！！」

僕は翌日に理事長室に急いで行き、理事長に土下座をしましたが・  
・理事長がかなり怒ってらっしゃる・・あれ？なんか日本語がおかしいような？

理事長「今のこの状況で君は一体何を考えているのかな？」

刃「イエ、マリモ！！そういえば理事長昨日何故僕を呼んだのですか？昨日は何もしてないはずですよね？」

と土下座から顔を上げながら言うと理事長は湯飲みを出し、

理事長「まあ、それはお茶を入れてくれてからでいいかね？」

僕は鬼火でお湯を沸かし、お茶を入れてそれを理事長に渡すと理事長は一口飲み、

理事長「昨日君が交戦した公安の事だ。」

僕は「公安」の一言に理事長を見ると

理事長「今の公安には昔の公安にあったものがなく、悪い事しか私の耳には入らず過去に私が直筆で彼らに解散するようにもしたが、それも聞かなかった。しかも最悪な事に何者かが公安に青野月音が“人間”である事を漏らしたという噂も聞いた。」

僕は転生者で月音君が人間である事は知っていた・・・しかし、この世界はあくまでロザリオとバンパイアと仮面ライダー響鬼に近い世界で本来なら死んでいるはずの斬鬼さんが今も生きている。

これは良いことなのかも知れないが、裏を返せば原作にはなかった悪い事も起きる可能性がないわけでもないことを僕は今まで思っていた。本当は今すぐにでも助けに行きたい。

そんな僕の顔を見て、理事長はこう言った。

理事長「君達の猛士と私達には契約があり、そこには学園の事に刃鬼君、君をそれらの事に巻き込ませないと言う内容がある。だから君はこれ以上今回の事に首を突っ込む事を禁じる。」

と言った。僕はその言葉に叫びに近い声を出しながら

刃「そ、そんななら月音君に死ねと言うのですか！？確かに彼は自分と違いうっかりこの学園に入学してきました。だが、自分にやっと出来た同世代の友達、しかも公安は他の新聞部のみんなも殺そうとするかも知れないですよ！！」

理事長「しかし君には音撃戦士という立場があり、猛士でもかなりの活躍をしているそんな君を失う訳にはいかないだろ？」

理事長は僕にそう言ったが、僕は理事長に背を向けて、

刃「自分は友達を守れない奴に他の人と妖怪を守る資格……いや、鬼の力を借りてはならないとは思っています。理事長、僕は例えあなたに殺されかけても友達を守るために闘いますよ。例えそれが猛士の皆の教えに背いたとしても！！鬼になれなくても行きます！！」

僕がそう言うと背後から誰かが僕の肩に手を置いた。僕は身構えながら後ろを振り向くと、

プニッ

指でつつかれ、その人の顔を見ると……

鋭鬼「よお、刃鬼。」

鋭鬼父さんが立っていた……Why？

刃「な、なんで父さんがここに!？」

理事長「私が昨日の夜に響鬼君に頼んで来てもらったのだよ。」

僕は驚いていると

鋭鬼「刃鬼、少し頭の位置を俺の肩よりも下に下げてください。」

刃「何故ですか父さん?」「まあいいからいいから……はあ」

僕は鋭鬼父さんに言われたように頭を下げると、

ぼんっ

鋭鬼父さんは僕の頭に手を乗せ撫で始めた。

刃「と、父さん?何を?」

鋭鬼「いや、俺の所に養子にきた頃と比べると立派になったな、  
って思ったからだ。それに遂にお前にも猛士の他にも守る人達を見  
つけたからな。お前はこれからもっと強くなると思うと嬉しいなっ  
て、」

刃「でも、僕は猛士の契約を一方的に背くのですよ?」

理事長「ああ、実はあれの後に君が望んでいく場合は除くと書いてあるが君の覚悟を聞いたかったから敢えてそこを言わなかったのだよ。」

鋭鬼「俺はもしお前がさっきの理事長の話にあっさり了承した

時に怒る予定なわけだ。」

刃「なるほど・・・父さん、そろそろ頭を撫でなくてもいいのでは？「嫌だったか？」・・・いや、今空気椅子をしている状態なので腰が痛くなってきました。」

鋭鬼「ああ、すまん。」

父さんが手をのけ、まっすぐに立つと理事長が

理事長「そういえば君と私には個人的な契約をしていたが、覚えているかな？」

刃「はい勿論覚えています。人とかを殺すみたいな事以外なら手伝いますとは、」

理事長「では早速その依頼だが、君は新聞部の部員を助け公安の攻撃から部員達を守ってあげなさい。」

刃「はい、それと理事長、「なんだね？」守るのもいいですが公安を潰しても構わないのでしょうか？」

と僕は赤い服の英霊風に言うと理事長はあっさりと

理事長「駄目に決まっていますでしょう。」

その一言に僕は

刃「ですよね。「懲らしめてやるのは許可するが」・・・僕の言ったのと変わらないような気がするのは気のせいでしょうか？」

理事長「気のせいだ。それよりも急がなくていいのかい？ ついさきほど月音と萌香が公安に連れて行かれたと連絡があったよ。」

刃「わかりました。・・・それと父さん」

鋭鬼「どうした？」

刃「もし、僕の・・・刃鬼の正体が月音君達バレたら僕の処分をお願いします。」

鋭鬼「おい、それはつまり鬼になるのか？」

刃「今まで目立つのがいやで何回か変身しましたが、今回はかりは鬼にならないといけないかもしれません・・・では行ってきます！！」

僕はそう言うと扉を開け、理事長室から出て行った。

俺は部屋からでて行った刃鬼を見ていると理事長さんが俺に話しかけてきた。

理事長「確か鋭鬼君だっけ？」

鋭鬼「はい、どうしたのですか？」

理事長「刃鬼君は鬼の正体がバレると何かしらの罰があるようだが、どうしてなのかね？」

鋭鬼「まあ、昔、響鬼が一人の少年に正体がバレた時がありました。その時立花の皆に怒られていましたから響鬼達と比べると未熟者のあいつは響鬼よりキツイ罰があるのかと思っっているのではないかな・・・」

理事長「なるほど、では仮に刃鬼君が松坂刃という事がばれてしまったらどうなるのかね？」

鋭鬼「うーん、鬼の正体ばれることは実は大した事はないのですよね。弟子になる鬼と師匠の鬼の最初の出会いは大体がうっかり正体が見られた事が多いからな。」

理事長「更にここは妖怪の学園だからね。別にばれてもなんともない筈だ。」

鋭鬼「あつても刃鬼は先生方に魔化魍の情報と一緒に戦鬼の情報も渡しているかも。」

理事長「いや、前に私が戦鬼の情報は流さないようにしておいたから大丈夫だ。」

鋭鬼「・・・もしかして刃鬼のさっきの覚悟はあまり意味がなかった？」

理事長「そうかもしれないが・・・彼は少しばかりおっちょこちょいというのかもしれないね。」

鋭鬼「？確かにそうですが、どうかしましたか？」

俺は首を傾げながら言うと理事長さんは一枚の地図を持ち、

理事長「公安の建物までの地図を渡し損ねた。」

刃鬼間に合うのか？

因みにその時の刃

刃「公安の本拠地ってどこだっけ？・・・あつ目の前に公安の奴がいるから（肉体言語）聞いてみるか。」

私達の目の前には信じられない光景があつた。一つはついさつきまで月音の息が止まっていたこと、これはモカがバンパイアの血を流し込むことによってなんとかなるかも知れない・・・そしてもう一つが

裏萌香「くっ・・・」

モカのいつものような力がなく、

九曜「どうした？お前は「力の大妖」ではないのか？」

ロザリオが外れたモカがあの狐に押されていた。すると

裏萌香「月音に血を注ぎ込むことはバンパイアの力の源の血液を大量に相手に与えてしまうため…私の方の力が弱まってしまうことだ。」

そう言いモカは九曜にむかうがモカさんの攻撃は防がれ、九曜の攻撃を避けきれず、

九曜「はっ」

裏萌香「がつ!?!」

モカは壁に飛ばされ、その光景に私は

胡夢「ああ・・・モカ・・・」

そう呟いた、モカが立ち上がろうとすると

九曜「弱いッ妖のくせに人間との友情ゴツコに酔っているからこんなにも弱いのだッわが炎に焼かれてその愚かさを懺悔するがいいッ!!--」

と赤い炎が集まっていくと

???「はっはっ!!--」

私達の後ろから白い炎の弾が二つ飛んできて一つは集まっていく炎を消し、もう一つは九曜をぶっ飛ばした。私達は後ろを見るとそこには

刃「ハア・・・ふっ間に合ったか?」

太鼓のバチをもった刃君が立っていた。刃君は月音を見ると

刃「月音君！！大丈夫なのですか？」

と慌てていたが紫ちゃんが

紫「確率は低いそうなのですがモカさんが血を注いだので、とりあえずは大丈夫です！！」

その一言に安心した刃君は私達の前に来ると

刃「なら・・・後は僕が片付ける！！」

と言った。すると銀影先輩は

銀影「阿呆言うな！！アイツの種族を何と想っているのか！  
！アイツは日本の大妖怪だぞ！お前みたいなただの鬼では勝てん  
と「先輩それに一つ訂正を」・・・は？」

刃「僕は“ただの”鬼じゃないですよ・・・チョット変わった鬼  
です！！」

というと刃君はかなりの速さで九曜に向かって走り、

刃「はっ！」

右手のバチで叩き、それをふさがれると

刃「ハッ！ふんっ！」

左手のバチで脇を叩き、右回し蹴りを放って飛ばした。

九曜「ゲツ!？」

九曜が壁に当たるが直ぐに立ち上がり、刃君は制服が焦げている足を見て

刃「あゝやっぱり、“変身”しないと効きませんか。」

とおかしな言った。九曜は刃を見て

九曜「ふんっ、どうやら貴様が先に灰になりたいようだな。人間なんぞ庇っていても私のように強くはなれないぞ。」

と九曜は刃君に言うが刃君は片方のバチを腰に戻すとポケットから何かを取り出しながら

刃「僕は君のような張りぼての力なんていらない、それに本当の強さは大切なものを守るために使うものだ!!」

とポケットから取り出したものを展開した。

チャキン

金属の音がしたそれは鬼の顔の音又みたいなもので

刃「君にかなり弱いが本物の強さを教えてあげるよ。」

それをバチに当てると

リイ  
・・・

きれいな音が部屋中に鳴り響き、九曜は

九曜「はっ！笑わせるな！！灰になれ！！」

さつき月音に大火傷を負わせた技を放とうとするが刃はただ音叉を額に持つていき、少し額にかざすと手を降ろし、

九曜「食らえ！！隴・火炎車！！貴様も我が力思い知るがいい！！」

刃は九曜の炎によつて真っ赤に燃えていた。

紫「刃さん！！」

銀影「あの阿呆！何故避けんかったんや！！」

私達は叫び九曜は

九曜「ハハハハ、やけに大口を叩いた割には簡単に終わったな。」

九曜は刃に向かって笑うが徐々に顔が引きつっていった。なぜなら  
ら・・・

九曜「何故だ！？何故もがき苦しまない！？何故倒れない！！」

攻撃を食らった刃君は燃えているが動いてなく、声も出さない。

すると真っ赤に燃えている炎が下から白に変わっていき、

????「ハアアアアアアアアア・・・」



と僕は九曜に向き、

刃鬼「どうした？かかってこないのか？ならこっちから行くぞ！」

僕は音撃棒を腰に戻し、九曜に接近し

刃鬼「ウラァ！！」

九曜「グフツ！？」

右のストレートを腹に決め、九曜が怯み、その隙に雷の力を左手に込め、

刃鬼「鬼闘術：「雷撃拳」！！」

それを九曜の顔に食らわせ九曜は壁に打ち付けられるが鬼の力は魔化魍には効果はバツグンだが、妖怪相手にはイマイチのようで直ぐに火炎弾を複数作り、僕に向かって放つが光と雷の力を両手にまとわせ全部打ち消す、立ち上がった九曜は

九曜「オノレエエエエエエエエ！！鬼風情が調子に乗るな！！」

とさつきとは倍以上の火炎弾を作り僕に放つが飛んで月音君たちの前に行くと思わしきので大きく息を吸い、

刃鬼「鬼幻術：「鬼火」！！」

鬼火をだし、火炎弾を全て爆発させる。九曜を圧倒する光景を見て

紫「す、凄いです……」

銀影「嘘やる……あの九曜が手も足も出ないなんて……なんちゅうやつや。」

鬼火をやめて僕は双閃を片方だけ抜くと、九曜は再度火炎車を作り、

九曜「これを貴様が避ければ、貴様の守りたい仲間が燃えるぞ！  
さあ大人しく灰になれ！！」

と言いながら放つが、僕は上段で双閃を構え、力を送って大きな光の剣を作り

刃「鬼棒術：烈光剣……ハア！！」

隴・火炎車を叩き斬ると僕の背後からただならぬ妖気を感じ後ろを振り向くと月音君が立っていて、致命傷の火傷はドンドン治っていく。

刃鬼「ほう、凄いですね妖怪の血は……バンパイアなら尚更か。」

立ち上がった月音君の姿を見て僕は驚き、九曜は動揺していた。

九曜「馬鹿な……人間ならどうやっても手遅れのはず！  
！人間ならあんな事はできないはず……まさか奴は最初から妖怪だったのか！？くっ石神めこの私を騙したのか？」

裏萌香「まさかここまでとは……」

胡夢「いや、あんたが驚いてどうするのよ!!」

裏萌香「あの蘇生法には3つ問題があるって言っただろ？」

紫「一つは確立は少なく」

銀影「二つ目は萌香の力がかなり落ちて」

裏萌香「最後に妖怪の血が体内に入る事で何が起こるのか私にもわからんという事だ。」

裏萌香さんがそう言っているとき九曜は油断していたので僕は双閃を地面に突き刺し、素早く背後に回り、

刃鬼「隙ありだ!!」

音撃鼓「光震天」を取り付けた。僕は音撃棒を取り出し

刃鬼「音撃打：「百発百中」そりゃ!!」

僕は激しくそして早く音撃棒で叩き

九曜「グア何故だ!?何故体が動かん!？」

裏萌香「今だ月音行けえ!」

月音君はその声を聞いてか九曜に突っ込んできて

九曜「お前らにこの九曜が倒せると思っているのか!？」

九曜はそう叫んだが僕は

刃鬼「倒せるじゃない・・・倒すんだよハッ!!!」

と言つて音撃を決めると九曜は月音君に向かって吹っ飛び、

ゴシャア!!!

月音君の頭突きが決まり九曜は壁を壊し隣の部屋まで吹っ飛び月音君はバンパイアの血の効力が切れたためか気絶した。僕は顔の变身を解除し、月音君の近くに行き脈を確かめた。

脈は正常に動いていて安心すると、裏萌香さんは九曜に向かって

裏萌香「どうだ？これで月音がこの学園の生徒であることに問題はないだろ。」

と言つたが反応がないので僕はもしかしてと思い九曜に近付き脈を計るが生きているそして何回か頬をぺチンぺチン叩くが反応は無い。

刃鬼「あゝ萌香さん？コレ完璧に気絶してますよ？」

裏萌香「ん？別に大丈夫だろう帰るぞ！」

と言い月音君をお姫様抱っこするが僕は

刃鬼「すまないが僕はここでお別れだ。」

紫「なんでですか？刃君は月音君を助けてくれたのですよ！」

胡夢「そうよ！皆一緒に帰ろうよ！！」

と二人は言ってくれるが

刃鬼「僕達鬼・・・音撃戦士は本来魔化魍相手にしか闘わず正体も人と妖怪も問わず隠しておくべきものだけど僕はそれをばらしてしまったからこの学園にはこれ以上いれないんだ。」

銀影「別に正体がばれてもお前は新聞部の一員だろ！」

刃鬼「そうですがコレは規則なのですよ・・・だからしょうがないのです。」

胡夢「そんな刃君、折角友達になったのにそれは「行かせてやれ」・・・モ力？」

胡夢が言おうとすると裏萌香さんはそれを止め

裏萌香「仕方ないだろ？刃、「なんでしよう？」絶対帰って来い！それでもしないとこいつが悲しむだけだぞ。」

裏萌香さんの一言に僕は後ろを向き

刃鬼「わかりました・・・やってみますよ。じゃあね、シュ！」

僕は響鬼さんがよくやる敬礼とピースを合わせたものをやり、再会を信じ皆と別れた。

石神「ククク、赤夜萌香、今回は負けを認めるが・・・またいつか遊んでくれよ新聞部」

私は鳥居の上から憎き新聞部を見ていると背後から気配を感じ後ろを振り向くとそこには先ほど見た刃という鬼が立っていた。

石神「おや？私に何か用かな？刃君」

すると目の前の少年は

刃鬼「今は刃鬼です・・・僕は貴方に言っておきたい事がある。」

そう目の前の鬼はいうと腕を振った。私の顔に激痛が走り、私は顔を抑えながら刃鬼の手を見ると爪のようなものが伸びていて、その先に血が滴っていた。

石神「グウウ！？・・・貴様あ！！よくも私の顔に傷を！！」

私は叫ぶが刃鬼から放たれる殺気で動けなかった。

石神「（コイツ・・・15でこれほどの殺気を出せるとは・・・）私をどうするのか？」

刃鬼「いや、今回はそれでお終いだ・・・ただ月音君達とともに闘いたいからその願掛けさ・・・じゃあな。」

刃鬼はそう言ってその場を立ち去った・・・ただの願掛けの為に

この顔に傷を付けた恨み絶対忘れんぞ！！

月音「ハア・・・」

公安と闘ってから一ヶ月近くが過ぎ、僕の傷も治り公安委員会は生まれ変わり以前のような権力はなくなり、僕を妖怪と勘違いしてくれたようで新聞部とは干渉しなくなった。

でもその代わりのように刃君・・・いや、刃鬼さんがいなくなつた最初モカさんから刃鬼さんと刃君が同一人物と聞いた時は驚いたけど猫目先生が刃君が今までの魔化魍情報は刃君がくれた事も教えてくれた。

僕がそう考えていると、

萌香「月音、また刃君の事考えていたの？」

月音「うん、あの時刃君がいなかったら僕達がこうしているのも無かったと思うんだ。」

胡夢「そうよね、あの時いなかったのも理事長に公安と闘う許可を貰いに行ったらしいし・・・お礼を言えばよかったね。」

紫「でも、なんで今日いまから新聞部の教室に行かなくてはいけないのでしょうか？」

そう、夏休み間近の日曜の今朝、新聞部の部室に集合と言う内容

の手紙が全員に来たのだが何があるのか全く最初は刃君のことだと思っただけと紫ちゃんも組織に所属していて大きなミスを犯したのに一ヶ月足らずで帰ってくるとは思えないと言っていて刃君のことではないと決めたからだ。

教室前に行くと言った銀影先輩が立っ

ていて銀影「なんや、お前らもか。」

月音「先輩も手紙が来たのですか？」

銀影「そうや、全く今日はデートなのにキャンセルになったわ。」

胡夢「変わらないわねこのスケベは、」

すると職員室に続く廊下から猫目先生が来て

猫目「あつ、皆来てくれたのよかった。来てくれるか心配したのよ特に銀影君が」

月音「で、先生今から何をしますか？」

猫目「それは中に入ってからのお楽しみよ じゃあオープン」

猫目先生はそう言い教室のドアを開けると窓に大きな男の人が立っ

っていて肩には白色で無機質な体の鳥が止まっ

っていて男の人は僕達

に気付くと振り向いた。

刃「新聞部部員、刃鬼こと松坂 刃、只今戻ってきました。」

刃君はそう言い左手でシュツとやると

萌香「刃君、いつ学園に戻ってきたの？」

刃「昨日の夜に帰ってね、」

胡夢「今まで何をしていたのよ!！」

刃「猛士で僕の処分と先輩方の手伝いをしていたら遅くなったよ。」

紫「戻ってきて嬉しいです!！」

刃「僕も光鷲も嬉しいよ!！」

光鷲「ピィ!！」

銀影「これからビシビシしばくから覚悟しやがれ!！」

刃「はは、お手柔らかにお願いします。」

猫目「さてそれでは始めますか!！」

と猫目先生は言ったが周りをよく見ると何故かお菓子やらジュース等があつてパーティ会場のようになつていた。僕達は不思議に思つていると

猫目「今までいろんなことがあつて打ち上げをする機会が無かつたので・・・」

刃「僕の帰ってきた記念も含めてやってしまおうと言っわけだ。そのため会場設置は僕とディスクアニマル達でやったわけだ。」

ふと教室の隅を見るとディスクアニマル達が騒いでいた。

萌香「月音、どうしたの？早くやろう。」

月音「あ、うんでもその前に刃君」

刃「どうしたんだい？」

僕は刃君に向かって

月音「今まで助けてありがとう！」

というと

刃「お礼を言われるほどの事はないよ・・・だって僕達友達ではないかこれからも宜しく月音君、萌香さん、胡夢さん、紫ちゃん、森岡「銀影で構わん」では、銀影先輩、猫目先生。」

銀影「全く命を助けてもらったのに・・・お前の真の先輩になるのはまだまだだな。「胡夢さん達を助けに行っただじやないですか先輩はいい先輩ですよ」・・・女意外で褒められて照れるのは始めてや。」

紫「えへへ・・・」

胡夢「なんか嬉しいわね。」

萌香「これからも一緒に頑張ろうね!!」

猫目「貴方がいない時に集めた人生相談の手紙集まっているからね!!」

僕は刃君に手を差し出すと刃君は力強く握り返してくれた。

刃「新聞部をもっと人気にするぞ月音君!!」

月音「・・・うん!!」

これからも色んなことがあるけど頑張っていこうと思う。

刃「あ、それと僕月音君と同じ人間だからそこそこよろしく」

全員「……………エエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!?!?!」

?「……………」

猫目「言い忘れていたわ。それとこの蟹食べていい?」

刃「いや、それディスクアニマルだから食べられませんよ!?!」

第5話「別に公安を潰しても構わんのだろう?・・・あっ、駄目ですか」(後書

今回はここではやらないで、次の話で番外編として猛士報告はやり  
ります。

## 第5、5話「猛士での出来事」(前書き)

前回の猛士報告ですが、一応番外編にしました。

## 第5 / 5話「猛士での出来事」

### 第5 / 5話「猛士での出来事」

僕は立花の地下にある猛士の施設の机に座っていた。

おやつさん「刃鬼君、君が何をやったかわかるよね？」

刃鬼「陽海学園で猛士関係者じゃない者に鬼に変わるときの姿を見せ、戦闘をしました。他にもディスクアニマルを使い部活のサポ  
ートをしました。」

おやつさん「そうだね、それでなにか言い訳とかあるかい？」

おやつさん、向かい合って座っている刃鬼に話し掛ける。

刃鬼「いえ、覚悟していますので言い訳などはありません。」

するとおやつさんの隣に座っている小暮さんは

小暮「よろしい、ではアレを持ってきてくれ」

小暮さんは斬鬼さんに何かを持ってくるように言い、

斬鬼「はい」

斬鬼さんは席を立って奥へ行った。すると小暮さんは

小暮「さっき言い訳はないと言ったが後悔はあるか？」

その一言に僕は顔を上げ

刃鬼「後悔と言えるのかわかりませんが僕の友達の月音君と言う人は陽海学園にいる僕以外の・・・ただの人間です。おそらく彼にこれからも今回みたいな事が起きる可能性があります。そのことだけが心配です。」

僕が言い終わると斬鬼さんが戻ってきた。

小暮さん「そうか、なるほどお前の気持ちはよくわかった。」

おやつさん「それじゃあ刃鬼君に今回の件の処分を言うよ。」

すると斬鬼さんが僕の目の前に書類を置いた。それを見て僕は驚いた。

何故ならそれは20×20の大きさのよくある原稿用紙で枚数は5枚あった。僕はおやつさん達を見ると

おやつさん「確かに君のやった事はよくないけど、友達の為にといいのは良いことだね。」

小暮「しかも変身した相手は妖狐だけで妖狐は強い相手だ。しかも気絶するだけに止めているからまだ許せる部分がある。」

おやつさん「それに刃鬼君はちゃんと考えてやったからね処分は反省文原稿用紙5枚分だよ。ちゃんと書いてね？それを書いて報告書を書いたら学園に戻っていいからね。」

おやっさん達はそう言ったが

刃鬼「では、響鬼さんが明日夢兄さんや鋭鬼父さんが僕に見つかった時はどういった処分をしたのですか？」

おやっさん「鋭鬼君の時はしよがなかつたし、響鬼君の時も似たような感じだから同じ反省文だよ。」

小暮「お前は知らなかつたかもしれないが、大半の弟子はそうして師匠の鬼と出あつたのだよ。だから刃鬼がどんな処分を考えていたのか知らないが無駄に考えすぎたな。」

刃鬼「はあ・・・わかりました。では明日書いて提出させてもらいます！！」

おやっさん「うん、今日はゆっくり休みといいよ。」

僕は椅子から立ち上がると香須美さんが来て、

香須美「裁鬼さんがバケガニにやられたそうなので誰か他の人をお願いするそうです！」

斬鬼「しかし今は轟鬼はヤマアラシで出かけているし」

小暮「蛮鬼は武器の調整で出られないからとなると残ったのは・・・」

刃鬼「僕ですね・・・烈斬もあるので行っても構いませんか？」

おやっさん「頼むよ・・・しかしなんでこつも裁鬼君ばかりやら

れるのかな？」

刃鬼「ここまでやられると最早何かの呪いじゃないですか？」

小暮「否定できんな・・・斬鬼送ってやれ。」

斬鬼「はい、行くぞ刃鬼」

刃鬼「はい！！急ぎましょう！！」

僕はこうして魔化猛魍を倒したり他の鬼のサポートをしたり報告書や反省文を書いたりして、学園に戻るようになったのはその一ヶ月近く後のことであった。

今回の金言「鬼になるのを見られたら反省文！！」と「裁鬼さんはお払いに行く事を勧める！！」

刃鬼「斬鬼さん、学園に戻ったら友達で占いがよく当たる子がいるので裁鬼さんの事を占ってもらってみます。」

斬鬼「ああ、もしわかってても裁鬼には直接言っなよ！！」

刃鬼「なんかよくない相が出そうで怖いですね。」

斬鬼「ああ・・・」

第5 / 5話「猛士での出来事」(後書き)

次回は夏休み編に突撃します!! お楽しみに!!

第6話「夏は鼓の鬼が忙しくなる時ですね。え？関係無い!!!：前編」

第6話「夏は鼓の鬼が忙しくなる時ですね。え？関係無い!!!：前編」

夏、それは学生で言えば夏休み、海、夏祭り、と言ったイベントの大売り出し……。だが一人の学生だけ、夏は仕事の季節と勘違いしている人がいる。その名は松坂刃またの名を刃鬼、何故彼だけ勘違いしているかと言うとある川にて……

暁鬼「刃鬼、そっちに一体行ったぞ！」

刃鬼「はい、暁鬼さんこそ尻子玉抜かれなくてくださいよ！」

夏には鼓でしか倒せない魔化魍がいて他の武器だと増えてしまうので、猛士では嫌な季節であり、鼓を使う刃鬼は鬼になった年からずーっと夏に鼓の鬼は忙しい時期、と頭の中にインプットされているのだ。

カッパ「クエエエ!!!」

暁鬼さんが逃がしてしまった魔化魍カッパに向き合おうとカッパは口から白い粘液らしきものをだすが、僕はそれを避け近づいてきたカッパの腹に光震天を取り付け、

刃鬼「音撃打「閃光連打の型」!!!はあ!!!」

僕はカッパに音撃を決め、灰になると周りに他の個体がないのを確認して、顔だけ変身を解除した。

暁鬼「刃鬼、お疲れ様。」

刃鬼「暁鬼さんもお疲れ様でした。今回はやけに魔化魍の数が少ないですね。」

暁鬼「確かに去年の今頃でももつといたからな。」

実は夏特有の魔化魍の数もここ近年減少傾向にあるのだ。

暁鬼「俺としては減少するのは良いことと思うが数の減少の幅が大きすぎて気味が悪いな。」

刃鬼「そうですね・・・いつまたオロチの時みたいな事が起きないか心配ですね。」

暁鬼「まあ、その時がこない事を信じてお前は明日から合宿なんだろう？そこで羽でも伸ばして来い！！」

刃鬼「まあ、こつち（人間界）で取材するので大して変わりませんよ・・・途中仕事で抜け出すかもしれませんよ？」

暁鬼「そうならないように俺達が頑張るよ！だからお前は楽しんで来い！！」

刃鬼「そうですね・・・楽しんできます！！（実は魔女の丘事件で全然楽しめないけどね！）では自分は学園に戻りますので報告書

はこつちで書いてパソコンから提出します。」

暁鬼「ああ、頼むよそれじゃ！」

僕は学園の制服に着替えるとバスの運転手さんと待ち合わせ場所に向かうべく、暁鬼さんと分かれ川を北上すると、

???「にゃあああ!!！」

聞き覚えのある声が聞こえ直ぐにその声のほうへ行くとそこには僕のクラスの担任で新聞部の顧問である猫目静先生がいて先生は釣りざおを持っていて近くにはクーラーボックスにはみ出さんばかりの魚がビチビチと暴れていた。しかも近くにはバスの運転手さんもいた。

刃鬼「先生・・・何しているのですか？」

猫目「あ、刃君先生はここで魚釣りをしていたのですよ」刃君はお仕事ですか？」

刃鬼「そうです・・・でも、ここは危ないですよ？夏ですから。」

運転手「確か夏の魔化魍は分裂する特徴があるのだったかな？」

刃鬼「そうです・・・僕は響鬼さんみたいに紅になれないので先生方を守るかどうかわかりません・・・それにその魚の量は明らかに捕りすぎですよ。」

猫目「そうですかもう少し欲しかったですけど「乱獲で斬鬼さんから嫌われますよ?」わかりました!!！」

刃鬼「はあ・・・まあ安全な場所で美味しい魚料理を作りますから勘弁してください。」

僕達は川から離れてバスが止まっている駐車場の直ぐそばの猛士の関係者がやっている民宿の台所を借りて塩焼きとホイル焼きを作り民宿の人から白飯を貰い食べていると

猫目「そういえば刃君は皆に詳しい事を教えましたか？」

刃「いえ、皆忙しいかったので僕の種族は人間、職業が鬼で魔化廻退治をしている、といった事ぐらいしか話せませんでした、自分はいくらでも丁度だと思っています。」

流石に月音君達に響鬼さん達のことまで教える訳にもいかないの  
で、とりあえず僕の事と猛士の名前ぐらいしか教えてない

運転手「あまり話しても駄目だからそのあたりが妥当だね。」

猫目「そうですね、なら明日からの合宿を精一杯楽しみましょう  
！！」

刃鬼「はい！」

僕達は遅めの昼飯を食べてから学園に戻った・・・さて、明日の準備が大変だ。

～合宿当日～

合宿当日の人間界に行くバスの中、僕は

紫「なるほど、鬼の武器には鼓、弦、管の三種類もあるのですか。」

刃「そう、僕はそのうちの弦と鼓を使って主に鼓がメインの鬼なんだ、因みに鬼は最初に適正を計ってから修行を開始するんだ。それと僕と一人の先輩だけだけど剣もあるよ。」

紫「ちゃんに鬼のことを（好奇心的な）物凄い形相で聞かれたので聞かれたことは先輩鬼の名前以外は答えないようにした。」

紫「その武器はそれぞれどういう相手に使うのかあるのですか？」

刃「空を飛ぶ相手には管が活躍し、溶解液や針を飛ばしたりする相手には弦を、大きさがかなり大きい相手や夏に出てくる特別な相手には鼓を使うね。」

紫「へ〜そういえば刃さんは何故管を使わないのですか？」

僕は紫ちゃんの質問に固まった・・・紫ちゃんは僕の様子に

紫「え！？なにか私失礼なことを言ってしまったのでしょうか？」

刃「いや・・・ただ管が苦手で過去に恥ずかしい思い出があるだけなんだ。」

僕の一言に近くにいた萌香さん、胡夢さん月音君も参加してきた。

（銀影先輩はいない）

萌香「へ〜刃君にも苦手なものがあったんだ〜」

胡夢「なんか意外な感じがするね。」

月音「で、恥ずかしい思い出って？」

刃「言わなきゃ駄目か？」

月音「別に無理をしなくても・・・」

刃「まあいうけど！「言うのかい！！」鬼火は皆にも見せたよね？」

月音「ああ・・・あれは衝撃的だったね。」

萌香「でも、大道芸っぽかったよ？」

何故月音君はこういうかというバスに乗り込むとき運転手さんの葉巻を音撃棒ではなく月音君に鬼の力の一端を見せるためにあえて鬼火でつけたのである。

刃「僕は特異体質で変身しなくても鬼の技の一部は使えるんだけど管を練習し始めたのが鬼になってからでいつも管から鬼火が出ちゃって・・・何個もの練習用の奴を壊してね。無理と判断された日の晩、ひとりの管の先輩鬼（威吹鬼）が涙で枕を濡らしたらしい。」

全員「「「ああ・・・」」」

刃「わかった僕がさっきの質問で固まったわけを」

紫「分かりました・・・後刃さんは種族は人間で間違いないです

よね？」

刃「そうそう、僕は魔化魍魎の情報提供の対価として学園に通わせて貰っているわけだ。」

月音「じゃあ、もしかして萌香さんのロザリオを外せるんじゃない？それはできない月音君」・・・なんでさ？」

刃「僕は清めの音を使い、僕自身その清めの力が強く萌香さんのロザリオに手をかざすだけで・・・」

僕はそう言いながら萌香さんのロザリオに手をかざすとバチツと大きな火花が出た。

刃「と、このように互いの力が反発するので触れる事すら敵わないわけだ・・・萌香さんがとられると思ったのかい？」

月音「え！？そ、そそそんな事な、なないよ！！」

刃「嘘がつけないのね」月音君は、

萌香「刃君も何言っているのよ！！」

二人は顔を真っ赤にしていて、僕は心の中でリア充乙！と思っっていると、バスは真っ暗なトンネルの中へ入っていき運転手さんが喋りだした。

運転手「さて、少年達この長いトンネルは人間界各地にあるトンネルと繋がっていて【四次元トンネル】と呼んでいる者もいる・・・例えば刃鬼君もそういうね。」

と運転手は言うが僕は一つ思い出し、

ジンキ「あ！そういうえば皆に言うておきたい事があって人間界では僕の事はジンキと呼ぶようにお願いする！・・・そうしないと色々都合が・・・」

月音「う、うんわかったよ。」

紫「わかりましたです。」

運転手「さて、話がずれたがこいつを抜けると妖の世界とはしばしお別れということだ。」

運転手さんが言い終わるとバスはトンネルを抜け、激しい日差しが燦々と照りつける人間界に出た。

紫「あー、人間です！本物の人間が何人も・・・」

胡夢「当たり前よ人間界だもん。」

萌香「凄い日差し、こっちも夏休みなのかな？」

と妖怪と魔女トリオは人間界の様子にテンションが上がっていて、月音君は人間界に戻ってきたことに嬉しく思っているようだ、仕事でよく戻っている僕は月音君には謝罪を言いたくなってしまったのは秘密だ。

胡夢「あー見て、街よ！」

紫「遠くに大きな街が…」

萌香「アソコに行くのかな？」

すると目の前を立ち入り禁止の看板が横切つて、バスの中の空気は低くなっていく。するとバスは止まり、

ジンキ「……とりあえず、降りてみますか？」

月音「そ、そうだね。」

胡夢「とりあえず降りてみましょうか。」

皆は先に降り、僕は烈斬をもつて降りるとそこには一面の向日葵畑があつた。

月音「わー……」

萌香「凄い……」

胡夢「人間界にもこんな綺麗な所があるんだ。」

ジンキ「ほう……絶景だね。」

皆は向日葵畑に驚き、僕も見とれていると、猫目先生は運転手さんに話しかけていた。

猫目「あれ？此処って目的地と全然違う場所ですよね？」

猫目先生がそういうと運転手さんは怖い笑顔を浮かべながら

運転手「いやなにちよつと立ち寄ってみたんですよ。ここは今ちよつとした「話題の名所」なのでね。」

運転手さんはそう言つと月音君は

月音「名所？…？ああひまわりの名所ですか？」

月音君の一言に僕はつい

ジンキ「妖怪と魔女と戦鬼のパーティーの僕達が寄つた場所だよ？そんなわけではないでしょう。」

僕がそついうと運転手さんは

運転手「そうだよジンキ君、ここは神隠しが続出するミステリースポットで噂の場所だよ。」

月音君達がずっこけていると運転手さんは続けて言った。

運転手「今時神隠しとはなかなか風流だと思わないかね」

月音「そんな理由で来たんですかー！！？」

暁鬼さん・・・やっぱりゆっくり出来ませんでしたよ。そう現実逃避をしていると運転手さんは猫目先生を乗せて行ってしまい僕は自分の持ち物を確認して気づいた。

ジンキ「鼓と着替え、バスに乗せたままだ〜！！！」

月音「え？それってやばいことなの？」

僕の叫びに月音君達は首を傾げていたが、僕は皆に説明した。

ジンキ「もし、神隠しが魔化魍の仕業でその魔化魍だったら僕達死ぬ事は間違いないよ！！もしそれ以外なら僕が一度変身したら着替えがないと街中を素っ裸で歩き回らないといけなくなるよ！」

紫「これからどうなるのです！もう嫌ですう、帰りたいですう  
〜！〜！」

胡夢「何言ってるのよ！まだ来たばかりじゃない！いつまでもうだうだ言ってるどぶつからね。」

女子勢が喧嘩をしている時に月音君はひまわり畑の方を見つめていると何かがコチラを覗いているのに気付きそれと同時に今まで聴いたことの無い唸り声が聞こえてきた。

月音「とりあえずこの花畑から離れた方がいい、あっちに小屋があるよあそこへ……！！！」

といい、皆近くにあった小屋に逃げ込み僕はすぐに立花へ電話した。するとおやっさんが出た。

おやっさん「もしもし？立花です。」

ジンキ「あ、おやっさんですか？ジンキです。少し聞きたいことがありますして」

おやっさん「なんだい？」

僕は月音君が呼んでいた新聞を後ろからのぞいて向日葵畑で18人の人物が行方不明になっていることと獣みたいな唸り声が聞こえてきた事を話すと、キーボードの音が聞こえ、

おやつさん「とりあえず夏の魔化魍ではない事は確かだね・・・ひよっとしたら妖怪関係かもしれないから気をつけてね。」

ジンキ「はい、こちらこそスイマセンでした。それでは失礼しました。」

僕がそういいながら電話の電源を切ると、

紫「もしものことがあったらどうするのですかあここは人間界なんですよ〜ワタシノタロット占いでこの旅は不吉だって・・・」

といていた。紫ちゃんの占いの的中率は高くて（裁鬼さんの事を占ってみたら大当たりだったから）僕はつい、

ジンキ「え！？やっぱりそうなの！！」

と言うと胡夢さんは額に青筋を浮かべ

胡夢「あなたねえ・・・いい加減にきなさいよ紫ちゃんッ何がタロットよ！朝から弱音ばかりはいていつまでもビビってのよこの弱虫っ！それにジンキ君がいるのに友達を信じられないの！？」

ジンキ「胡夢さん、落ち着け・・・慎重になるのにやりすぎは無  
いから・・・」

僕はそう言って止めようとしたが遅く

胡夢「やっぱりお子様よね。そんなに帰りたければ一人で帰れば  
いいじゃない!」

と胡夢さんは言うてしまった。紫ちゃんは俯くと

紫「な・・・何よ・・・何もビビってなんかないもんバカアアア  
!」

と言って出て行き僕も烈斬を持ち直し、

ジンキ「僕が後を追う!」

紫ちゃんの後を追うように小屋を出た。

私は深い谷の奥の小さな結界の村で暮らしてきたからつくねさん  
やジンキさんの正体を知るまでずっと人間を敵視してたし人間界も  
わけあって大嫌いだった。

紫「なのみんな・・・私の気も知らないで・・・」

??「それはすまなかつたね紫ちゃん」

後ろを振り向くとジンキさんが立っていた。

紫「刃さん・・・」

ジンキ「今はジンキだよ・・・隣いいかい？」

ジンキさんはそう言つと武器を降ろし、私の隣の横に座った。

ジンキ「胡夢さんも状況がこんなものだから少しイライラしているかもしれないのだろう、それでも僕はあれは言いすぎだと思うね。」

紫「ジンキさんもそう思いますよね！いっく」でも紫ちゃんもやりすぎだよ・・・え？」

ジンキ「いくらなんでも鉄製のカードを額に刺すのはやめたほうがよかつたねいつもの金ダライで十分だよ。」

そうジンキさんは言つと私の頭に手を置いた。ジンキさんは続けて

ジンキ「胡夢さんが僕を頼りにしているようだったけど、もし敵が出てきてそれが魔化魍だとしたら僕は皆は守りきれるかどうかわからないからね。」

紫「え？ジンキさんでも大丈夫でもきついですか!？」

ジンキ「それはそうだよ僕は猛士の鬼の中では一番！年が若く、弱いだからね!！」

と一番を強調して言つてたけど顔は笑顔であった。私はジンキさんの先輩の様子を創造してみる事にしましたが模擬戦でボコボコにされているジンキさん・・・怖い顔しか創造できませんでした。

ジンキ「因みに先輩方は全員紫ちゃんが今創造しているような感

じではなく皆優しいよ。」

紫「え！？ジンキさんって心読むことができるのですか！？？」

ジンキ「いや、紫ちゃんの顔から血の気が引いていたから多分怖い顔でも創造したかと思ってね、後僕のとうさんも鬼なんだけどその人なんていつも寒い親父ギャグを言っているんだよ。」

紫「面白い人ばかりなんですネ。」

ジンキ「曹s「キヤアアアアアアアアア！」なんだ！？女性の叫び声か？」

突然叫び声が聞こえてきた。

紫「向日葵畑のほうですねまさかみんなの身になにか！？」

ジンキ「急ぐぞ！！」

紫「はい！！」

私達が向日葵畑に行くと思わず知らずの人がいて女性は私の格好を見ると

女性「な、なにあなたのその格好・・・魔女？」

私はみんなの危機と思っていたのに見ず知らずの人とわかったからその場を立ち去ろうとしたらジンキさんは

ジンキ「どうかしましたか？」

と女性に言い、女性は

女性「先輩がつ、私の先輩が“ひまわり”に食べられそうになの  
!!!」

ジンキ「え？」

私は女性の手の先を見ると女性の先輩が植物に吸われていた。

紫「これはもしかして魔草の一種……食虫植物のように人や  
獣を襲って食べる植物の妖怪……!!」

するとひまわり畑から植物の妖のガリガリ草がでてきた。

ガリガリ草「エ……エサダ！餌食う……！」

それは襲い掛かってきたが

ジンキ「ハッ！」

ジンキさんが殴り飛ばしたがどうやらコレが神隠しの正体で私は

紫「こんなのに……食われてたまるかですう　!!!!」

タロットを投げた。カードは真っ直ぐ魔草に刺さり

ジンキ「紫ちゃんナイス!!」

紫「へへへ、タロットカードの刃をステッキをステッキで操る私

の必殺技です！たかが植物には負けないですう」

しかし相手には効き目が薄く

ガリガリ草2「エサ・・・」

ガリガリ草3「エサダ・・・」

周りから同じような草がたくさん出てきて、

紫「なっ？こいつら・・・一体何匹・・・」

ジンキ「紫ちゃん気を抜くな！！」

ジンキさんが言ったときには既に遅く私の腕は蔓に巻かれて上に放り出された。

僕は左手に鬼爪を右手に烈斬を使って草を切っているが、紫ちゃんの下へいけなく

女性「ああ、魔女さん！！」

紫ちゃんはガリガリ草に食われていたが最初にカードが刺さった草が

ガリガリ草1「カエセ、オレノエサ！」

ガリガリ草2「ガッ」

紫ちゃんをかんでいるものを跳ね飛ばした。僕は昔見た特撮のマネで光の力を左手に溜め、紫ちゃんの足に巻きつけている蔦に向かって放った。

光弾は上手く当たり蔦は切れたが紫ちゃんは受身の体制をとらなっていたので僕は走りガリガリ草を鬼爪で草の腹を抉り、烈斬で切り裂くと紫ちゃんを受け止めた。

ジンキ「大丈夫か紫ちゃん!？」

すると紫ちゃんのはつきりとした顔で

紫「はい、少し嫌な顔の人を思い出しただけです・・・ジンキさん少し思いついた事があるのですが・・・。」

僕はそれを聞くと

ジンキ「それは面白い事をいうね・・・足止めは任せろ!!」

そう言うと襲い掛かってきた草に向かって足に雷の力を込めて

ジンキ「鬼鬪術・雷撃蹴!!」

と蹴りを放つと紫ちゃんは術の詠唱を始めた。紫ちゃんがあいつらを倒せなかったのはただ単に威力が少なかったためカードの威力強化をしたが隙だらけになるのでそのカバーをお願いしたいらしいのだが・・・まあ、獲物が一箇所にいるのでまとめて襲い掛かってくるが接近戦が大得意なこっちとしてはむしろありがたいくらい

だ。

僕は烈斬で敵を切り払い紫ちゃんのカードが僕たちの周りを飛び交い紫ちゃんの詠唱が終わるとカードから羽が出て、草を真つ二つにしていく。僕はその光景を見て

ジンキ「僕も負けていられませんね・・・はあああああ」

烈斬を居合いの構えにして雷と光の力を烈斬に集める・・・すると烈斬の形に沿って二回り程大きな刃が出来た。紫ちゃんの攻撃がフィニッシュに近付くと僕はそれを横一文字に振るった。

紫「私だって・・・やってやるですう！！！」

ジンキ「鬼剣術・・・閃光烈雷剣！！ハアアア！！」

紫ちゃんのカードが敵の手足となっている蔦を切り、閃光雷刃が敵の体と焼き払う。

敵が全滅すると紫ちゃんは魔力を使い切ったためか気を失い僕は烈斬を地面に突き刺し紫ちゃんを支えた。少しすると月音君達に来て闘いの後を見ると

月音「うわあ！？なんだこれ！？」

胡夢「これって植物の妖？これ全部ジンキ君がやっつけたの？」

月音「なんで紫ちゃんがこんな奴らと闘っていたんだ？」

僕は紫ちゃんを木陰に移すと胡夢ちゃんに

ジンキ「胡夢さん、こいつらを倒したのは紫ちゃんだよ、僕はそれのお手伝いをしただけ・・・紫ちゃん学園で自分の魔法を鍛えてたんだろ。」

僕は胡夢さんはひまわりに引つかかっていた紫ちゃんの帽子をとり、紫ちゃんに

胡夢「紫ちゃんは全然弱くなんかないよ・・・さっきはひどい事を言っでごめんね。」

ジンキ「胡夢さん、それは紫ちゃんが目を覚ましてから言っただけなさい。」

僕は胡夢さんにそう言うと言月音君に向き

ジンキ「月音君、僕は水を汲んでくるからあれから紫ちゃんのカードを引き抜いてくれないか？」

月音「うん、わかった・・・え？」

ジンキ「じゃあね!!」

僕はバケツを取りにさっきの小屋に戻った・・・しかし一体誰があんなものを何の目的で作ったんだ・・・洋館の奴らが絡んでなきやいいけど・・・それとも魔女が関係あるのか。

僕はそう思いながら走った。

第6話「夏は鼓の鬼が忙しくなる時ですね。え？関係無い！……前編」(後書き)

中編へ続きます。

第6話「夏は鼓の鬼が忙しくなる時ですね。え？関係無い！！…中編」(前書き

中編を書きました。2日連続投稿は辛いですね。

それとミスターサー先生の「清める鬼を屍」の主人公クロキをまたゲスト出演させていただきました！！

第6話「夏は鼓の鬼が忙しくなる時ですね。え？関係無い！！…中編」

第6話「夏は鼓の鬼が忙しくなる時ですね。え？関係無い！！…中編」

ジンキ「どうだ？紫ちゃんは目を覚ましたかい？」

僕は近くの川から水を持ってくると木陰に眠っている紫ちゃんの隣にいる萌香さんに訊ねた。萌香さんは少し動揺しながらも首を振り、

萌香「う、ううん、ケガはたいした事はないけど戦闘で使った魔力の消耗が激しかったみたい。」

ジンキ「そうか、それを聞いて安心したよ。」

月音「でもジンキ君、一つ聞きたいのだけど」

月音君は言いにくそうに僕に訊ねてきた。

ジンキ「なんだね？月音君なにかおかしいかい？」

月音「おかしいも何もなんで上半身裸なんだ？」

月音君はそういったが今思うと萌香さんはそれで動揺していたのか、勿論これには理由があり、

ジンキ「いや、さっきの戦闘で服が返り血(?)がついたから水を汲んだついでに服を洗いに行ったわけだよ？」

月音「でも、何で変身しなかったの？テレビとかではああいう変身すると服も元通りになるから大丈夫なんじゃあ・・・」

月音君はそう言うのが確かに仮面ライダーとかはそうなるけど・・・響鬼は特別な仕様だからね・・・とりあえず説明しよう。

ジンキ「月音君、世の中そんなにうまく行かないよ僕たちの変身は炎や雷を纏って変身するから服は燃えたり裂けたりしてなくなるんだよ。」

胡夢「ああ、だから荷物があんなに多かったんだ。」

紫ちゃんのカードを磨きながら胡夢ちゃんは言ったが実際月音君の荷物と比べてみると

月音君の荷物：着替え（二泊分）、洗面道具、消毒液と絆創膏、タオル×5枚

ジンキの荷物：着替え（5泊分）、洗面道具、救急セット、タオル×10枚、ディスクアニマルケース×2、烈斬、光震天、烈光、予備の音撃棒の材料、将棋一セット

とこんなにも多いのだ、ひまわり畑についた時は目的地ではないと思って持っていなかったが、一回分の着替えを入れたバッグもあったのだが、それをとる前にバスが発射してしまい、変身できないわけである。

僕はその事を説明し終わると胡夢さんはいさつき切り捨てた草の残骸を見て

胡夢「第一、びつくりだよまさか紫ちゃんがこんな怪物達をやっつける力があつたなんてそのくせ何であんなに人間界を恐がっていたのかわかんないし私達何だかんだで紫ちゃんについて知らないことまだたくさんあるよね人間とも妖とも違う「魔女」についてもね」

ジンキ「紫ちゃんが人間界を恐がっている事については僕がこの前猛士で銀で魔法使いの方がいたから聞いたことがあつたが魔女などは風の声を聞き、精霊と語り合う事で自然の力を自分の力にする種族らしく都会のように自然が壊され“気”が乱れた街は慣れてないと眩暈がするほど気持ちが悪いものらしい・・・自然から力を借りる点では僕たちと似ているかもね。」

月音「へへそうなんだ。」

萌香「よく調べたね。」

僕の説明に皆は納得するとさっきの女性の方々がきた。

女性「あの・・・どうですか？紫ちゃんの具合は」

ジンキ「ケガは思ったより軽いものであつたが少々力を使いすぎてね寝ているよ。」

すると女性は

女性「あの・・・紫ちゃんってこの土地に住む魔女さんですよね？」

月音「いえ・・・？違いますけど、僕らは学校の行事でここ来た

ばっかりです。」

と話していると女性の先輩が僕の烈斬に気付き、話し掛けてきた。

先輩「あの・・・もしかして猛士の角の人ですか？」

ジンキ「なっ!?!?・・・もしかして貴方も猛士の方で？」

その先輩の方と話すとき城南大学の方で僕の先輩鬼の蛮鬼とは先輩後輩の仲だったらしく蛮鬼さんの後を追って猛士に入ったとのことである。そんな会話をしていると紫ちゃんが起きて、

紫「そんな証拠もなしに魔女のせいにししないで下さい。」

どうやらこの丘での事件は魔女の神隠しの仕業と言っていた所を聞いていったらしい。

胡夢「よかった、気がついたのね紫ちゃん!ケガは大丈夫・・・」

といいかけたが紫ちゃんは僕のそばにきて、胡夢さんと顔を合わせないようにした。

胡夢さんは頬を掻いていると月音君が

月音「とりあえずこんなやばい土地から早く離れた方がいいよね。」

萌香「・・・じゃあ今夜泊まる予定の街に私達だけで行っちゃう?はぐれた猫目先生と合流できるかもしれないしこのことはまず先

生に報告した方がいいよ。」

先輩「なら私達が車でお送りしましょうか？」

ここで僕が転生する前に読んだ通り女性の方が車に乗せてくれるがここで一つ問題が出てきた。原作では新聞部の四人だけだが今回は車に乗れるのかが分からない体格の僕がいるのでこの前軽四に乗ろうとして頭をぶつけたのは記憶に新しい・・・そうだ！！

ジンキ「自分は車の屋根にしがみついておりますね。」

月音「いやいや、何言っているのジンキ君!？」

ジンキ「大丈夫だよだって鍛えてますからシュツ！」

先輩「貴方ならできるかもしれないませんがやめてくれたらありがたいですね。」

女性「え!?!先輩つつこむ所そこですか!?!」

ジンキ「なら誰かが他の人の膝の上に乗るか?」

胡夢「なら私がつくねの膝に乗る!?!」

月音「ええ!?!誰かがそうになると一組だけじゃあそれでもきついと思うよ」

月音くんがそう言うと紫ちゃんが手を上げ

紫「なら私がジンキさんの膝に乗ります」

・・・why?紫ちゃん?ボクハロリコンナンテシユミハモチア  
ワセテイマセンヨ?・・・念のため

ジンキ「紫ちゃん君の好きな人は?」

紫「月音さんと萌香さんですう・・・どうしたのですか?」

ジンキ「なんでもない・・・乗りますか?」

皆が乗り込もうとすると僕は気配を感じその方を向いたが誰もい  
なかった。紫ちゃんも僕と同じ方向を向いていた。

萌香「?・・・どうしたの二人とも?」

ジンキ「いや、少し視線を感じただけだ・・・そうだ紫ちゃん、」

紫「はい、なんですか?」

ジンキ「僕は今回の事で人間界に行くから紫ちゃん用にコレを作  
ってきた。」

僕はそう言いながらポケットから鬼の顔が彫られた木製のお守り  
を取り出した。

紫「なんですかこれ?」

ジンキ「ああ、僕と先輩の音撃棒の材料は屋久島の屋久杉で出来  
ているから僕が前に折った音撃棒の欠片を使って作ったんだ。仲間  
の魔女の方に聞くと鬼の清めの力は魔女にとってもいいものらしい

からそれでましだといいなあってね。それと練習用の音角も渡しておくよ。それと護身用のディスクアニマルを三枚あげるね。学園に戻ったら詳しく研究すると良い。」

紫ちゃん「あ、ありがとうございます。」

ジンキ「気にしない気にしないでって僕達友達だからね。」

渡し終わると僕たちは急いで車に乗り、車は街に向けて発車した。

??「・・・お館様、あいつら大事なひまわり畑を荒らしておいてさっさと帰って行っちゃいますよ。」

お館様「・・・瑠妃<sup>るひ</sup>よ、ますます逃がしてどうする・・・言っただけだ魔女ならば同族のよしみ是非仲間を迎えたいと」

とお館様は言ったが

瑠妃「ですがお館様、素性の知れない仲間特にあの雷を使う男は厄介かもしれません。」

お館様「・・・ふん、どうせやつもたいした事はないだろう他の奴らもどうせ人間だ邪魔ならば殺して構わない。今は一人でも仲間が欲しいこの土地を守るため・・・憎むべき人間どもに罰を与えるために!!」

お館様は口調を元に戻すと

お館様「その幼き魔女を我が元へ連れてこい・・・やってくれるな？我が愛弟子瑠妃よ。」

私はお館様の一言に頷き、変身魔法を使い、鳥になり街のほうへと飛んだ。

俺たちは街へ着き、色々見て回っているけど、

通行人A「あのコかわいくない！？なんて完璧な顔とスタイルなんだ！！」

通行人B「こっちは巨乳だ！」

通行人C「でかつしかもこっちも相当いけてるし！」

通行人D「しかも魔女っこがいるぞ！可愛いな。」

と通行人は言っているが近付いてこない何故なら

通行人E「でも後ろの人の目つき凄く怖そうだよ！！」

でも  
ジンキ君が僕たちの後ろでもものすごい目力で睨んでいるからです。

ジンキ「やばっ・・・目が痛くなってきた・・・あ、ついでに涙もでてきた。」

結構ギリギリのようで誰かがジンキ君の目にレーザーポインターをして

ジンキ「があ、目が目がああああああああ！！！」

ジンキ君は目を抑えもがいていると通行人が押し寄せて

紫「いやあ、こないで下さいですう！！」

紫ちゃんは杖をふり街灯が全て割れて、その場が騒然となった。

ジンキ「月音君、少々やばいのではないか？」

月音「あ、紫ちゃん街中で魔法を使っちゃったら駄目でしょう！？」

俺は皆を連れて路地裏に逃げ込むと紫ちゃんは

紫「もう、嫌ですう人間も人間の街も私には恐すぎですう！！」

紫ちゃんはそう言うとジンキ君は拳を握り締めながら

ジンキ「すまない、僕が修行不足だから紫ちゃん達をこんな目に  
．．．」

紫「ジンキさんは悪く無いですう．．．でも魔女（私達）と人間とでは住む世界が違います！分かり合うことなんて一生できっこないですう！！」

俺はその言葉に声をかけづらくなり、くるむちゃんが

胡夢「こらあア、なんてことを言うの紫ちゃんツつくねが可愛そうでしょ」

ジンキ「まあ、待てここでけんかしても意味が無いだろ。」

ジンキ君が二人を止めようとするが突然一羽の烏が襲い掛かってきた。

胡夢「えっ！？烏が襲ってきたの！？」

すると大量の烏の群れが襲い掛かってきた。ジンキ君は

ジンキ「皆固まって行動しろ・鬼火！！」

そう言って烏に鬼火を放つが一羽の烏が背後から襲い掛かってきたが、

??「ジンキ！！」

ヒュン！！・・・コンッ！

烏「クワッ！？」

俺達の背後から小石が飛んできて烏にあたると烏は一回鳴き去っていった。

俺達は後ろを向くとそこには琵琶らしきものを持った人が立っていた。ジンキ君はその人を見て

ジンキ「クロキの旦那！！なぜここに！？」

ジンキ君はクロキと呼ばれる人を見て驚いていると

クロキ「いや人だからが出来ていてそしたらお前の顔が見えたから追ってきたのだがどうなってるんだこりゃ？」

僕は皆いるのか確認すると紫ちゃんがいなかった。

月音「あれ？紫ちゃんがないよ！？」

ジンキ「くそ、もしかして敵の狙いは紫ちゃんだったのか！？皆はあっちを探してくれ！！僕はこっちを探す！！」

するとジンキ君は走り出した。

クロキ「おい、待てジンキ！！」

クロキさんもジンキ君の後を追っていった。

萌香「でも、紫ちゃんはどこに！？」

俺は周りを見渡すと一つのビルの屋上に鳥が集まっているのを見かけた。

紫「あれ・・・？こゝは」

私が目を覚ますとビルの屋上にいた。すると近くにいた人が私に気付き、声をかけてきた。

??「あら・・・気がついた？人間の街へ来てみた感想はいかがかしら思っていたよりは辛そうにしてなかったけど大丈夫かしら若い魔女さん、」

目の前の女性は魔女と言い、その言葉に私は

紫「え？」

驚くと目の前の方は続けてこう言った。

??「ここ（街）には何もありませんよ風も水も花も土や緑の香りさえも・・・あるのは人間の欲望とエゴだけ魔女である貴方の目にはここはとても愚かに映ったでしょう？」

私はその言葉を聞いていると一羽の鳥が私の近くで羽ばたいた。

私は驚くと目の前の魔女さんは

魔女「あ、安心して鳥は私の友達なのあなたをあの人達から連れ去るのを手伝ってもらったのよ。」

紫「貴方は一体・・・」

瑠妃「私は瑠妃、「魔女の丘」に住む魔女よ貴方と友達になりましたくてあの丘から追ってきたの。この街を見ても分かるように人間はね・・・敵よ」

すると瑠妃さんの後ろから白と茶色の鳥が飛んできた。

瑠妃「何？この鳥！？」

鳥は私の肩に止まり鳴いたよく見ると片方はジンキさんのディスプレイクアニマルの光鷲だった。すると後ろの扉から

??「ドッサーーいー!!」

扉が破壊され、仲からジンキさんと見知らぬ方が来ました。

ジンキ「いや、クロキの旦那何しているのですか!？」

クロキ「管理者にはねなきやいいだろ・・・あのロリっこがジンキの仲間か？」

ジンキ「紫ちゃんですよクロキの旦那、紫ちゃん大丈夫か？」

ジンキさんが私のそばに近付くと

ジンキ「全く心配したよ鳥に襲われると思ったら紫ちゃんは拉致られるし鳥がいなかったらここら一体のビルの屋上を飛び回らなきゃいけなくなるとだよ。でも・・・無事でよかった。」

ジンキさんは安心した顔で私を見ると月音さん達まで来た。

月音「話は聞いたよ紫ちゃん、」

月音さんがそう言ったとき私は怒られると思っていたけど月音さんは私に手を差し伸べ

月音「帰ろう、オレ達と陽海学園へ、もう・・・合宿は終わりにして・・・ね？月音さん」

私はその手を取ろうとした時、

ジンキ「二人とも、危ない！！」

ジンキさんが私達を突き飛ばし、私達はすぐにジンキさんを見ると

ジンキ「チツ・・・修行不足か」

ジンキさんの右腕からは血が流れていた。

瑠妃「・・・駄目だよ紫ちゃん、騙されないで言ったじゃない人間は敵だって」

瑠妃さんは杖を振ると背中からカラスのように羽が生え、クロキさんと言われた方は音角と鳴らし額に当てようとするとジンキさんが止め

ジンキ「旦那・・・ここは自分がやります。」

月音「そんな！君のケガじゃ闘えないよ！」

するとジンキさんは笑みを作り、

ジンキ「前にもいった通り僕は特異体質で鬼の術が生身で使え、そして鬼の回復力も同じなんだよ・・・紫ちゃん後で薬を頼むよ。」

ジンキさんは腕に力を入れると傷はドンドン小さくなり最後には完全にふさがった。

瑠妃さんはジンキさんの腕を見て驚き、

瑠妃「貴方妖怪なの？」

ジンキ「いや、ちょっとばかり変わった人間だよ。」

ジンキさんは音角を取り出すとそれを鳴らすと額に当てずにいると音角の鉄の部分は伸び、片刃の剣になった。

クロキ「鳴刀・音叉剣って、えらい古い技を使うね。」

月音「古いってどうしてですか？」

クロキさんはそう言い皆は何故に思っているとクロキさんは続けて

クロキ「アレはこっちが知っている限り戦国時代ぐらいから大体の鬼が使っていた武器だがな、時代がたつにつれて使う奴はいなくなり、おそらく今ではジンキ以外は使わないだろうな。」

月音「せ、戦国時代！？そんな昔から鬼はいたのですか？」

クロキ「存在の確認だけなら平安にもいたぞ。」

萌香「平安時代にもいたなんて・・・凄いなねジンキ君って」

クロキ「しかもあいつは今までなかった属性の使い手だからな・・・まったくアイツは後何回俺達を驚かすんだろうな・・・しかしア

イツは修行しない事を辞めないから凄い。」

私達はジンキさんを見ると瑠妃さんの攻撃を剣で弾いたりして避けて、しかも顔は余裕の表情で瑠妃さんは動揺していた。

瑠妃「貴方は本当に人間！？なんで魔女の攻撃をこつも簡単に避けるの！？」

ジンキ「そりゃあ、僕達鬼は大自然の力を借り、や友達を守りたいと思う気持ちを力に変えて、人を守ってきた！君のように恨みや憎しみがないそんな力に負けるわけにはいかない！！」

瑠妃さんは空に飛び上がりジンキさんにむかって急降下してきた。

瑠妃「自然を壊し、魔女を差別してきたお前ら人間が生意気を言うな！！」

ジンキさんはただ鳴刀を地面に突き刺し、左手に雷の力を集めて瑠妃さんは飛び上がり

ジンキ「はっ！」

瑠妃「かはっ！」

瑠妃さんの鳩尾に拳を入れ、気絶させるとジンキさんは瑠妃さんを抱きかかえこつちに来た。

ジンキ「月音君、彼女を少しの間見てくれ」

月音「う、うん」

クロキ「全く・・・関係者じゃないのに結構喋ったんだな。でも、肝心なところも忘れてないか？」

ジンキさんが剣を引き抜く手が泊止まる、私は

紫「どうということなんですか？」

するとクロキさんは私に向かいこう言った。

クロキ「俺達鬼もな・・・昔から人に嫌われていたんだよ・・・中には人を恨み魔化魍に寝返った鬼もいるらしい、勿論その鬼を倒したのも鬼なんだがな。」

私達はクロキさんの言葉に驚くとクロキさんは続けてこう言った。

クロキ「だが俺達の何代もの前の鬼はそれでも人を守りつづけた。そうして人も俺達を守るために猛士を作った。そこが魔女と違うところかな・・・？」

ジンキさんは音角を元に戻すと

ジンキ「全くクロキの旦那、それを言わないで下さいよ。」

クロキ「そういう悪い事実を隠すのがお前の悪いところだぜ。」

クロキさんの一言にジンキさんはうつとといった後苦笑いしながら

ジンキ「まあ、とりあえずその子を放置してもやばいからね。猫目先生を探るか。」

月音「う、うんそうだね」

萌香「そうしよづ。」

瑠妃さんをジンキさんが持って行き、私達は猫目先生を探した。

クロキ「結局日が暮れたね。」

ジンキ「とりあえずクロキさんがここにいるか突っ込みたい！」

クロキ「まあまあ、気にしない」

萌香「宿は見つかんないし・・・」

月音「本当に猫目先生達とははぐれちゃったね。」

皆はそう呟いていると胡夢さんは空を見上げると

胡夢「星も見えないんだね夜の街って・・・寂しいねこれから一体どうなるんだろ私達・・・」

僕は胡夢さんの方を見ていると紫ちゃんが立ち上がり

紫「平気、皆と一緒にならもう私はどうなっても平気ですう・・・」

ジンキ「紫ちゃん・・・」

紫ちゃんは月音君に抱きつき

紫「ごめんなさい、私どうかしてましたわかりあえてもあえなくとも私は皆が大好きですう・・・」

すると魚のマークが入った箱を持った猫目先生が来た皆は先生は抱きついたが僕は瑠妃さんを抱き上げるとクロキさんが近付き、

クロキ「しかし、なんか大変な事になるな。」

ジンキ「そうですね・・・すいませんがもう少し付き合ってくださいか？」

クロキ「ああ、わかったもしかして魔化魍が関わっているかもしれないからな。」

ジンキ「クロキの旦那、すいません。」

クロキ「いってことだよ、後お前の友達宿に向っているぞ。」

ジンキ「ええ！？ま、待ってくれええ！？」

僕は瑠妃さんを抱えながら月音君たちの後を追った。

第6話「夏は鼓の鬼が忙しくなる時ですね。え？関係無い！……中編」(後書き)

バトルな後編に続くと思うよ？

第6話「夏は鼓の鬼が忙しくなる時ですね。 え？関係無い！！…後編」(前書き)

今回で夏休み編は終わりヒロインが決まります。今回もクロキさんがゲスト出演しています！！

第6話「夏は鼓の鬼が忙しくなる時ですね。え？関係無い！！…後編」

第6話「夏は鼓の鬼が忙しくなる時ですね。え？関係無い！！…後編」

夢を見ていたまだ両親が生きていて、人間の街を一緒に歩いている夢でその夢の最後は決まって突然車が突っ込んでくる。

瑠妃「・・・ハッ!？」

私が目を覚ますとそこはどこかの建物の中で、近くには

男1「お、目が覚めたか。」

紫「瑠妃さん大丈夫ですか？」

私は起き上がろうとするが体に激痛が走り、鳩尾に手を当てる。すると先ほどの男性は体格のいい男を指差しながら、

男1「無茶するな、お前は手加減したとはいえジンキの雷の力を込めた拳を食らっているんだ、結構痛いんだぞ。」

するとジンキと言われた人は

ジンキ「クロキの旦那・・・あの時はスイマセンでした。」

クロキ「うゝん・・・許さん」

ジンキ「エエエエエエ!?!?あ、そうだ因みに自己紹介して

なかったね僕はジンキ、といってもこれは仕事上のコードネームで本名は松坂刃つて言うんだ。」

そんな会話をしていると私はジンキと言われた男に向かって訊ねた。

瑠妃「そう言えばあなたは一体何の妖怪なの？」

私の知っている限り口から白い火を吐き、剣を使う妖怪なんて聞いたことが無い。するとジンキは頬を掻きながら

ジンキ「信じられないかも知れないがここにいる男は全員・・・“人間”だ。さらにここにいるのは人間を含め、妖、魔女と種族がごちゃ混ぜなんだ。」

瑠妃「そんな、嘘よ！！なんで人間がわずかな時間で傷をふさぐ事ができるのよ！！」

するとジンキは服（ジンキの服装はジーンズに長袖のＴシャツ）をめくると腕には包帯が巻かれ、包帯には小さな赤いしみが出来ていた。

ジンキ「あれは本来鬼にならないとできない術で、僕は特異体質だからできるけど応急処置くらいだから、君が気絶した後気を抜いたら傷口が開いてね」

月音「僕もビックリしたよ。突然腕から血が出てきて僕達も慌てたんだから、」

ジンキ「ＨＡＨＡＨＡ、すまなかった・・・さてえ」と瑠妃

さん」

ジンキと言われた男は軽く笑った後、真面目な顔になり私に顔を向け、私は身構えると彼は地面に両手を置いて、

ジンキ「すいませんでした!!」

ゴンツ!

床に額をぶつけ、土下座をした。私はわけがわからず啞然としていると紫ちゃんが

紫「ジンキさん、理由を説明しないといけないですよ。」

ジンキ「ああ、そうか・・・え〜、君は一応僕たちの敵だけど女性に対して攻撃をしてしまった・・・これは謝罪がいると思ったからな、ひどい事をしてすまなかった。」

彼はやさしい顔でそう言つと私はつい顔が熱くなるのを感じた。

〜翌日〜

僕は皆にお願いをし、瑠妃さんに朝ご飯を持っていくことになった。理由はもし瑠妃さんが不意打ちをしてきても対処できるのは僕とクロキの旦那くらいしか出来ないけど、クロキの旦那は今朝から立花と連絡しているからいなので僕が担当する事になったのだ。

ジンキ「瑠妃さん、朝ご飯ですよ。さすが魔女ですね。回復力が

羨ましい。」

僕は朝ご飯を机に置くと瑠妃さんは僕を睨んできたのがわかるが僕が瑠妃さんを見ると顔をわずかながら赤くし、顔を逸らした。そう言えば昨日寝る時クロキの旦那が

クロキ「お前・・・やさしい顔したら女落ちるからな！」

といていたような・・・まさか惚れたわけないよね。うん、だってもろグーパンでやったから憎しみが多いような気が、すると紫ちゃんがコンビニの袋を持って部屋に戻ってきた。

紫「見てください“コンビニ”っていうお店にいて一人でお買い物できたですう!!！」

月音「凄いよ紫ちゃん!!！」

胡夢「人間界があんなに嫌いだったのに・・・」

クロキ「やるねえ〜あ、王手」

ジンキ「やったね、紫ちゃん!!後、クロキの旦那普通に紛れ込まないで下さいよ!!！」

萌香「紫ちゃん、ジンキ君のお守りの効果どうだった？あ、王手返しです。」

クロキ「負けたあああああああ!!！」

紫「えへへへ、ジンキさんのお守りは効果絶大ですう・・・それ

と皆頼まれた飲み物ですうジンキさんのおごりだそうです。」

胡夢「ありがとう」

ジューズを渡しながら紫ちゃんは

紫「私、種族が違えばわかりあえなくても当然だってあきらめて  
ましたけど、こうやって歩み寄る事はできるんですね。」

さらに紫ちゃんは月音君に抱きつき僕を見ながら

紫「こういうことを教えてくれたのは月音さんで、諦めてはいけ  
ないことはジンキさんから教えてもらったですう。」

月音「あれ？ジンキ君そんなこと言っていたの？」

ジンキ「ああ、この前少しな・・・何事も諦めたら駄目だ、諦め  
たらそこが終点だってね。」

クロキ「ジンキ・・・そのネタは危ないか？」

ジンキ「さあ？」

すると瑠妃さんが大声で

瑠妃「ふ、ふざけないで！！私は、私は騙されないわ！！だって  
知っているもの！！人間がどんな自己中で、汚い種族なのか・・・

」

するとたちあがり腕を振りかぶった。僕は紫ちゃんからオレンジ

ジューズを貰い、瑠妃さんに差し出した。瑠妃さんの手は僕の顔の前で止まり、驚いていた。

瑠妃「なんのつもり？それに何故避けないの？」

僕は瑠妃さんの言葉にただジューズを彼女の前に持っていきながら

ジンキ「このジューズは貴方に渡したかっただけ、それと魔女の丘については新聞で知った。土地開発のせいで壊され、ゴミ捨て場になる事も知った。それで人間を恨むのは当然だ。すまない・・・こうして君の嫌いな人間である僕が謝ってもなんにもならない事もわかってはいるだが・・・せめて瑠妃さんの力になりたいのだよ。そしてこれはさっき言った言葉を嘘にさせないためのものだ。」

僕はそう言い、瑠妃さんに反対の手に音角持ち、を出すと瑠妃さんは

瑠妃「う、うるさいっ」

と言い、手で払った。オレンジジューズと音角は宙を舞い、月音君がキャッチしたが瑠妃さんは

瑠妃「今さら無駄よ貴方達に何ができる事は何も無いわ・・・人間は我がお館様の怒りに触れてしまった・・・人間に罰を与えるためもうすぐお館様はこの街を火の海に変えるでしょう。」

と瑠妃さんは言った。僕は机の上に月音君から貰いなおした音角とオレンジジューズを置いて外へ出て行った。少ししてクロキの旦那も来た。

クロキ「猛士から援軍はどうする？」

ジンキ「いりません・・・最悪僕一人でも行きます。」

クロキ「そうか・・・俺も手伝うよ」

ジンキ「旦那・・・スイマセン。」

僕はそう言い青い夏の空を見た。

俺は夜中に物音で目を覚ますと廊下側から声が聞こえた。俺は物音を立てないように扉に近付き耳を当てると声からすると瑠妃と紫と言う女の子達の会話のようだ。

瑠妃「ねえ紫ちゃん・・・私の魔具はどこ？」

紫「え？」

瑠妃「魔法を使うためには自然の力を集めて制御するための魔具が必要でしょう？私もあの魔具がないとここから帰ることができないのよ。」

まあ、人間を恨んでいる奴がヘイタクシーとか言えないもんな。ロリっこも説得するが瑠妃は自分の過去を言った。

瑠妃「私の両親はね私が幼い頃に人間に殺されたの！！」

俺はその一言に驚き、瑠妃は続けて言った。幼い頃人間の街に行った時、恐らく飲酒運転をしていた車が突っ込んできて彼女の両親は彼女を庇い・・・死んだ。それから彼女は人間、人間の文化を恨んだらしい・・・俺は出て行こうとしたが後ろから誰かが俺の肩を掴み、俺は振り向くとジンキがいた。ジンキはただ首を振った。俺はそれにただ従うことしかできなかった。

すると廊下側から声と走る音が聞こえ俺たちは出ると、新聞部の奴らが集まっていた。

紫「あ、ジンキさん、瑠妃さんが・・・」

紫ちゃんがそう言うのとジンキは服に着替え、烈斬を持ち、

ジンキ「ああ、聞いていた。僕は先に行くから皆はバスの運転手さんを起こしてから来てくれ!!」

そう言うのとジンキはディスクアニマルを一つ出し音弦を鳴らし起動させると

ジンキ「相棒、巨大化を頼む!!」

光鷲はその一言に頷くと外へ出て大きくなり、ジンキは俺に

ジンキ「クロキの旦那、クナイを2個ほどくれませんか？」

俺は音石でできたクナイを渡すとジンキは窓から飛び出し光鷲の背中に乗ると飛んでいった。俺は視線を外から宿の中に戻すと新聞部の奴らは固まっただけで、

クロキ「おい、皆行くつもりじゃないのか？」

月音「あ、はい！皆急ごう！！」

全員「」「うん（はい）！」「」

俺たちはその後運転手を起こしに行こうとしたら既に外でバスに乗っていた。

私は魔女の丘に戻るとお館様はひまわり畑を見ていた。

瑠妃「た、只今・・・戻りました・・・お館様」

私はジンキから貰った缶ジュースと音角を握り締めるとお館様は

お館様「瑠妃・・・人間如きに敗れたそうだな。鴉どもから全て聞いたぞ」

するとお館様から伸びた蔓が私がついていた。缶ジュースを奪い取りそして・・・

お館様「しかもお前・・・その人間に手厚く看護されていたそうじゃないか・・・情けない、教えたはずだぞお前の親を含めどれだけの仲間が人間に殺されてきたのか！この私がどれほど人間を嫌悪しているのかこの魔女の恥さらしめ！！少し・・・教育をしなおさなければならぬようだな。」

お館様の袖のあたりから蔓が出てきて私に巻きつき締め付けられた。

瑠妃「あああ、苦し・・・い」

するとお館様の蔓を何かが切り、私は地面に落ちた。そして空から私の前に一人の男性が着地した。その人は背中に何かを背負い肩には白い鳥のようなものが止まっていた。その人は私のほうを向くと私は顔を見て驚いた。

瑠妃「ジンキ・・・さん。」

ジンキ「間に合ったな。大丈夫かい、瑠妃さん？」

お館様はジンキさんを睨んでいると背後から人間界のバスが飛び出して。そして中から月音さん、紫ちゃん、胡夢さん、萌香さん、それと一人の男性が降りてきた。

するとジンキさんは走りだし、お館様を殴った。月音さんは

月音「ジンキ君！何をするんだ！！」

月音さんはジンキさんに近付こうとするが男性が止め

クロキ「行くな、少年これは元々話し合いではどうしようもできない。とりあえず謝ろうとする甘い考えは捨てる！」

月音「で、でも・・・」

胡夢「月音・・・今回ばかりはクロキさんの言う通りかもしれないな

いよ。」

するとお館様は立ち上がると

お館様「そうか・・・お前らか瑠妃が世話になったようだな・・・何故ここにきた？投降でもしにきたのか？なあ・・・」「幼き魔女」よ、我等が同朋よ」

紫「!？」

お館様は月音さん達に殺気を向けるがジンキさんとクロキさんはいたって普通の顔をしていた。お館様は紫ちゃんに向かって言った。

お館様「今ならまだ間に合うおいでお前だけは私達の仲間にしてやる。我々は人間よりはるかに優れた種族・・・！人間を皆殺しにして今こそそれを思い知らせてやろう！！」

紫ちゃんは月音さんの側へ行き、それを拒否とお館様は受け取ると

お館様「そうか・・・残念だ・・・なら死んでもらおう！！」

お館様はひまわり畑に手をかざすと土煙を上げた。

胡夢「キヤア!? コレはっ・・・」

萌香「見て！ひまわり畑から何が・・・」

お館様「ひまわり畑？クク・・・よく見るこれはひまわりなんかじゃないぞ。私は植物を操る魔法が得意でねえこれはその私がじつくりと育ててきた植物の妖だよ・・・人間を食らう殺人植物だ！！

戦闘データを取るいい機会だまずはそいつらを皆殺しにしろ！！」

お館様の育てたハナバナは月音さん達に襲い掛かるが黒木さんが前に出ると背負っていた物でハナバケを叩き飛ばした。

クロキ「お、コイツ意外と弱いな。」

ジンキ「そうですか・・・なら鬼火！！」

起き上がろうとしたハナバケに向かってジンキさんは白い火を吐くとハナバケは悶え、力尽きた。お館様は

お館様「ほう、おまえ人間にしてはやるようだな。」

ジンキ「いや、コレが弱いだけだから。」

お館様「どうやら貴様ら人間とはもとより共存の道は無いようだな「それは違うな」・・・なに？」

ジンキさんは背負っていたもののカバーを外しながら

ジンキ「あなたは人間の闇しか知らない、それで人間を一まとめにし、復讐しかないそんな考えのやつと共存なんてもともとから無理だ。それにな人間にも自然を愛し自然とともに生きている人もいる・・・僕は両親を魔化魍に殺されたが復讐の心なんて今は持っていない。今は・・・ただ人を、妖怪を守りたいだけ！！それを信条に闘っている。」

お館様「ふん、ガキがこの私に説教とはな、何様のつもりだ？」

お館様の言葉にジンキさんはただ鼻で笑い

ジンキ「僕は誰かを守るために強くなるつもりです・・・ただの男の子です。」

背負っていたものを地面に突き刺し、手につけたものを引き出すと弦が出てそれを指で鳴らし、額に持っていくそれを天に突き出すと

ジンキ「ハッ!！」

ドーン!！」

ジンキさんに青い雷があたりジンキさんの姿がかわっていき、今度は足元から白い炎がジンキさんを覆い、

刃鬼「テリヤアアア!！」

腕を振り雷を飛ばすとジンキさんは鬼に変わった。

お館様「ほう、面白い格好だな・・・目覚めよ植物妖怪軍団よ!!！」

お館様はハナバケを全部呼び、私は刃鬼さんに音角を渡した。

瑠妃「ジンキさんこれを・・・」

ジンキ「お、すまないな瑠妃さん・・・じゃ、あの人を止めてくるよ。」

ジンキさんは音角を剣にするとハナバケへと向かって走っていつ

た。その後姿はかつこよこいいと思ってしまった。

私と紫ちゃんはハナバケと闘うことになり周りにはその死骸がたくさんある・・・でも、

胡夢「どう？もういいかげん諦めてよこんなのが何匹いようと私達には勝てないんでから！（でも、もう疲れたよ～～まだこんなにいる～～！！）」

紫「くるむさん、疲れたと思って駄目ですよ！！」

紫ちゃんにそう言われたがそれもそのはず私達の右側では

刃鬼「鬼剣術「双雷光斬」！！」

ハナバケ「「ギヤアアアアアアアア！?!?!?」」

刃鬼君が右手に烈斬を左手に鳴刀音叉剣を駆使して敵をなぎ払い反対側では

黒鬼「ふん！！・・・音撃斬「黒煙粉塵」！！」

変身した黒鬼さんが琵琶で敵をふっ飛ばし、固まった所をクナイを投げ必殺技で灰にしている。しかも私達より何倍もの量をやっているから辛いとは口ではいえない～～！！

お館様「ぐっ・・・まさかあの二人がこれほどやるか・・・だが

「!!」

敵の親玉は手から蔦を出し、モカに巻きつけ自分の近くまで引張ってきた。

月音「モカさんっ!!」

お館様「ふん、あの二人が遠くにいてよかったよ。大事なものが目の前でいなくなる苦しみをおまえらも味わえ!!」

萌香「かはっ・・・!!」

私達は助けに行こうとするけどさっきのやつらが邪魔でいけなく

刃鬼「クツ!!どけえ!!」

黒鬼「数が多すぎるわ!!」

二人もモカを助けにいこうとするが雑魚が多すぎて進めなかった。  
すると

月音「モカさんを放せえ!!」

つくねが親玉に向かって走り出すが数体の植物の妖に体を噛まれる。

お館様「ふん、無駄な足掻きを!」

萌香「つくねええ!!」

モカも蔓を引きちぎり、月音の元へ行くと更にその上からまた数体の妖が来て二人を食らおうとする中から光が出て、全部粉々に引きちぎられ、なかから銀髪のもかと抱きかかえられたつくねがいた。

裏萌香「この馬鹿め・・・相変わらずただの人間のくせに無茶をする・・・だがおかげで助かったよ月音。」

親玉は裏萌香を見て

お館様「貴様も妖だったとはな・・・これ以上私の邪魔をするな！！！」

と攻撃しようとしたが裏モカは懐に素早く入り込み、蹴りを食らわせた。

裏萌香「私は他の奴らと違って甘くは無い・・・覚悟するんだな。」

モカはそう言った。親玉は立ち上がると

お館様「ふん、舐めるな小娘が」

親玉は本に手をかざすとハナバケが集まりだした。それを見た瑠妃さんは

瑠妃「駄目ですお館様！！その魔法は！！！」

瑠妃さんはそう言うが相手の耳には届かずドンドン大きくなっていった。

黒鬼「なんだよこれ・・・普通の魔化魍よりでかいし、まがまがしいぞ。」

私達に近付いて来た黒鬼さんはそう言っていると瑠妃さんは

瑠妃「あれは妖魔合身・・・あれは、術者が自らの身体を他の生物と合体・融合させる事によって、その力を我がものとする捨て身の魔法で、一度合体が完了すると術者は二度と元に戻れなくなってしまう術・・・誰か・・・誰か親方様を止めて!!」

瑠妃さんがそう言っていると刃鬼君が瑠妃さんの横に膝をついて

刃鬼「わかった・・・やってみよう、だが瑠妃さん彼女を生き止めるのは無理かもしれませんそれでもいいですか？」

瑠妃「そ、そんな!!どうにかならないのですか!？」

刃鬼「多分むりでしょう・・・ごめんね。黒鬼さん、共鳴音撃出来ますか？」

黒鬼「俺はいいがお前は接近しないと駄目だろう?」

刃鬼「大丈夫です。萌香さんは音撃をしている時にあの人に直接攻撃をお願いします。」

裏萌香「ああ・・・」

モカが向き合った時黒鬼さんが私にクナイを渡して

黒鬼「済まないが、コレを上からあれに投げてくれないか？」

胡夢「は、はい！」

刃鬼「紫ちゃんは瑠妃さんを頼む！」

紫「はいですう！！！」

裏萌香「なら・・・行くぞ！！！」

モカ達は親玉に突っ込み私は空からさっき貰ったクナイをばら撒き刃鬼君は敵の死角に行き、烈斬を刺し、ベルトから何かを装着させる

刃鬼「音撃斬「雷電斬震」！！！」

音楽を弾き始めると敵の体に雷が走り、動きが少しだけ鈍り私が黒鬼さんの隣へ降りると黒鬼さんも琵琶を構え、

黒鬼「音撃斬「黒煙粉塵」！！！」

黒鬼さんも弾いて刃鬼君の演奏とあわせると相手は動きが止まった。

お館様「ガア！？なんだこれは！？」

刃鬼「いまだ」

その時モカが鳶の一つを駆け上がり、親玉の前に行き

裏萌香「巨大化した程度で私達に勝てると思うなよ!!」

相手の顔に蹴りを食らわして私達はやったと思った・・・でもモカの手足に鳶が伸びモカが捕まった。相手の顔を見ると歪んでいたが、効果は無かったみたい。

刃鬼「ガア!？」

攻撃を続けていた刃鬼君は鳶に弾き飛ばされ、私達の前に来ると

お館様「ふふふ・・・思い出したぞその銀色の髪、そして赤い瞳、書物で読んだ事があるお前は力の大妖のバンパイアか・・・その力吸収させてもらうぞ!!」

すると鳶の一本が萌香の体に入っていった。刃鬼君は

刃鬼「くそ、あの術はただ合体するだけでなく吸収もしつづけることができるのか!!」

お館様「その通り、何故かお前はできなかったが、コイツを吸収し更に強くなった状態でお前を殺す!!」

裏萌香「くっ・・・!!」

親玉は視線を刃鬼君からモカに移し、モカの力が鳶を伝って親玉に行く

お館様「くくく、お前の力が私の中で漲っていく・・・さて私と一つとなれバンパイア!!」

蔓がモカに向かって伸びると私達の横を誰かが物凄い速さで通り過ぎ、モカの前に立ちふさがりモカを庇った。それは瑠妃さんだった。

瑠妃「くっ!?!」

瑠妃さんはモカの蔦を切り自分の杖を見ると

瑠妃「あら、いけない魔具が壊れちゃった・・・魔具が壊れちゃうと魔法が使えないのよ・・・魔女は皆・・・」

とモカに言い、瑠妃さんの羽が消えたときにお館様と言われたアイツは

お館様「何故だ?何故私にそこまでたてつくのだ!?!?今まで私達は二人でやってきたのに一度も私に逆らった事の無いのにな?」

瑠妃「もう・・・終わりにしましょうお館・・・様・・・全て終わりに・・・刃鬼さん、萌香さん・・・お願いお館様を止めて・・・」

瑠妃さんの手が力尽き倒れると同時に刃鬼君は

刃鬼「瑠妃さん・・・うおおおおおおお!!!!」

と叫び、刃鬼君の体が激しく光り、烈斬を持って瑠妃さんの元へ走った。

お館様「瑠妃イイイイイイイ!!!!」

相手も瑠妃さんを食べようとした瞬間、刃鬼君も巨大妖獣の口の中へ飛び込み食べられた。

お館様「余分なものも入ったがこうすればどんなに逆らおうとこれまでどおりお前は私のものだ・・・ああ、漲るお前が・・・お前の魔力が流れ込んでくるぞ・・・るび・・・」

その時相手の体から青い雷を纏った白い炎が噴出し、それはドンドン広がっていき、中からは弦の弾く音が聞こえる。モカは瑠妃さんの杖を持ち

裏萌香「哀れだな・・・瑠妃は命を賭けて私にお前の弱点を教え、今度は刃鬼が己の身を燃やしお前を封じ込めている・・・あえて言っつてやるうお前の負けだ!!」

そう言いモカは攻撃を仕掛ける。相手も反撃しようとするが刃鬼君の攻撃で動けなかったりモカに届く前に燃え尽き、

裏萌香「愚か者め、言っただはずだ・・・お前は既に負けていると!!」

ズンツ!!!

モカの放った瑠妃さんの杖は魔道書に突き刺さり、

裏萌香「瑠妃が言っていたぞ・・・魔女は魔具を壊されると魔法が使えなくなるとな!!」

お館様「ルビイイイイイイイイイイイ!!」

アイツはそう叫ぶと中から魔力の暴走が起き、私達は吹っ飛ばされた。

刃鬼「うっ……いててここはひまわり畑？」

僕は確か瑠妃さんを抱いてアイツに飲み込まれて、烈斬を必死に弾いて周りを白い光が包みこまれたはずだが、今いるのはあの丘のようだが空が真っ白だった。僕は空の感じから

刃鬼「ふう……どうやらまた死んだようだな。今回ばかりはまた転生は無いだろうな。」

すると向こうから人が来て僕はその方を見ると

お館様「ほう、お前も来ていたのか。」

僕はつい構えを一瞬したがすぐに解いた……僕はもう死んだからあの世で戦う必要は無いと判断したからだ。すると彼女は

お館様「お前はまだ死んでないから生き返るぞ。」

刃鬼「は？どういうことですか？」

お館様「お前の攻撃は私のように妖怪と合体したのものには毒にしかならないが、ただの魔女の瑠妃を守る効果はあったようだな。」

刃鬼「へえ、そうだったのですか・・・あ、そうだとお館様  
でよろしいでしょうか？」

お館様「ん？なんだ？刃鬼とやら」

刃鬼「不意打ちで顔を殴ってスイマセンでした！」

僕は彼女に向かって頭を下げた。彼女の顔は見えないが声で驚い  
ている事はわかった。

お館様「お前は変わっているな・・・敵の私に謝るとは瑠妃もお  
前を好むわけだ。」

刃鬼「へ？なんですかそれ？僕いつの間にフラグを？」

僕は顔を上げると彼女は笑い、

お館様「ふふふふ、瑠妃が生き返る際、私はアイツの思考を読み  
たのだがな、お前の事を好きになっていたぞ・・・お前がそのまま  
死んだらあいつが悲しむぞ。」

刃鬼「いや、それはこっちのセリフですよ、貴方が生き返るべき  
だ！！」

僕は大声で言ってしまったが、彼女は

お館様「そうしたいが、瑠妃に私はもう必要ない・・・これから  
先必要なのは君だよ。刃鬼君「刃」ん？」

僕は頭の変身を解き、

刃「僕の本名は松坂刃です。」

お館様「そうか・・・なら刃、瑠妃を頼む。」

刃「わかりました・・・彼女を守って見せますよ。」

お館様「頼もしいな・・・。」

段々彼女との距離が開いていくなか僕は左手を上げ

刃「自分、鍛えてますからシュツ！」

僕はそれをするとう視界が白くなっていき、再び目を覚ますと

ジンキ「知らない天井か・・・気がついたかい？」ん？その声は？」

僕は起き上がると窓際には昔一時期響鬼さんの弟子で今は医者になった明日夢兄さんがいた。そして反対側を見ると隣のベッドに瑠妃さんが寝ていた。

明日夢「ここは僕が今勤めている病院で、刃君はかれこれ3日間も寝ていたんだよ。それに体中に火傷があつたけどでも流石“鬼”だね傷はもう治っているよ。後は数日間ご飯を食べ、検査をしたら退院だつて、」

ジンキ「そうですね・・・」うっ「おお、瑠妃さん目が覚めたか。」

隣で寝ていた瑠妃さんが目を覚めると明日夢兄さんは軽食を持っ

てくると言い、部屋を出て行った。

少しの沈黙が流れた後、突然瑠妃さんが泣き出した。僕は慌てて

ジンキ「ウエエエエ！？ど、どうしたのディスク！ルビさん！？（W ;）」

瑠妃「すみません、お館様がなくなったのでまた一人ぼっちになってしまったと思うと悲しく「僕は一度お館様にあっただぞ」ええ！？」

ジンキ「会ったといっても現実味が無いから信憑性はないけど君を頼むってね。」

僕がそう言うと瑠妃さんは下を向き、

瑠妃「刃鬼さんは優しいのですね、私を慰めるためにそんな事を言ってくれるなんて、」

僕はベッドを降り、瑠妃さんの肩に手を置いていった。

ジンキ「嘘じゃないよ瑠妃さん、もしあなたがこの病院を退院したらなにかの仕事につくかもしれない妖怪関係なら僕と会うことも多いだろうし、陽海学園に勤めることになったらさらに月音君、萌香さん、胡夢さんに紫ちゃんにも会えるからきつと一人ぼっちにはならないはずだよ！！」

瑠妃「ジンキさん・・・」

僕の言葉に瑠妃さんは僕の顔を見て僕は言った。

ジンキ「それに、僕はお館様に言われましたが貴方が僕の事を気にいつているのを知っています!!!・・・なんだったら僕が“貴方の家族”になつてあげますから、落ち込まないで下さい!!!」

僕がそういうと瑠妃さんの顔はドンドン赤くなつていき最後には響鬼紅より真つ赤になつて・・・

瑠妃「!?!?#\$%&%¥\*@+!!?!?!?・・・きゅっ」

ジンキ「ウワアアアアア!?!?!?ルビさん!?!?お気を確かに!?!?明日夢兄さん!?!?」

するとトレイを持った気まずそうな顔の明日夢兄さんとクロキの旦那が入ってきて、僕は

ジンキ「あ、兄さん!!!ルビさんが気絶してしまいました!?!?」

というのが明日夢兄さんは口を開き

明日夢「いや、そりゃそうだよ・・・ジンキ君」

クロキ「ただでさえ顔が整っているお前が“愛の告白”したら気絶するよ・・・。」

僕はクロキの旦那の言葉にさっき言った言葉を思い出すと・・・  
うん

ジンキ「ガイアアアアアア!?!?」

パリーーン!!

明日夢「あ、ジンキ君!!」

クロキ「アグルウウウとでも言えばいいかな? とりあえず回収するか?」

↳数分後

僕は明日夢兄さんにさとされ瑠妃さんが目覚めるを待つが、クロキの旦那が

クロキ「はるがきくた、はるがきくた、どこにきた」

さつきからこの調子である。とりあえずクスハドリンコを飲ませて気絶させると瑠妃さんが再び起きた。瑠妃さんは僕を見て真っ赤にするが、僕は気絶する前に

ジンキ「失礼なこと言って、スイマセンでしたああ!!」

といって瑠妃さんに土下座をするが、瑠妃さんは

瑠妃「いえ、その・・・私は外の事を知らない不束者ですが宜しくお願いします。」

ジンキ「へ?」

明日夢「成功!?!」

クロキ「うっそーん。」

僕に本当に春がきました・・・いや今は夏だけど。



響鬼「よし、その時彼女を見せてもらおう!!」

斬鬼「（録画できるディスクアニマルに彼女の映像送ってもらった方がいいのじゃないか？）」

本日の金言「ジンキ、彼女連れてこい!!」

番外編「カップルさん、いらっしやい! : 前編」(前書き)

今回は番外編であります。キャラ崩壊が酷いです。苦手な方は見ないことをお勧めします。

それと今回主人公に新しい武器が出ます!!

番外編「カップルさん、いらっしやい!：前編」

番外編「カップルさん、いらっしやい!：前編」

魔女の丘の事件が終わってはや2週間が経ち、僕も新聞部で今までたまりにたまった人生相談の葉書をジャンル別に分け、ひとつの織り込みチラシみたいにして原稿が終わると猫目先生が入ってきた。

猫目「あ、刃君記事作成終わった?」

月音「刃君なら僕達の何倍ものスピードで書いて終わりましたよ。」

銀影「なんか先輩としての威厳が・・・」

胡夢・紫「あんたは元からないでしょう(ですう)」「」

萌香「でも、凄いやね一人で記事を私達より早く作れるし、その上こっちも手伝ってくれたからね。」

刃「まあ書類作成は良くやったからね。慣れてるんだ。」

まあ先輩方と一緒に出た時、報告書は僕の仕事だったし、特に轟鬼さんは擬音を使うから分かりにくくて変わりに僕が上手くならないと報告にならなかったからね。

刃「でそう言えば先生は何か自分に伝えたいことがあるのではないのでしょうか?」

猫目「そうそう、理事長が刃君をお呼びですよ。」

刃「ん？なんだろ？この前のプールの修復作業はやった時にしばらく学園側の仕事は無いって言っていたのに、とりあえず行ってみます。」

猫目「でも、刃君お昼まだでしょう？理事長はお昼食べてからでいいから来てね。と言ってました。」

月音「それじゃあ僕達もお昼にしようか。」

胡夢「賛成〜私もうクタクタ。」

紫「同意見です〜」

こうしてお昼を食べる事になったが、その時銀影先輩がとんでもない事を言った。

銀影「なあ、裏のモカちゃんはかなり強いよな。」

月音「それはそうですよ、モカさんはバンパイアですから。」

銀影「んで、刃の鬼の姿も強いよな。」

紫「確かにあの時は何倍も大きい物を止めてましたですう。」

銀影「でや、お前らはこの二人、どっちが強いと思う？わいはモカちゃんに一票や」

するとまず萌香さんが、

萌香「私は刃君かな？刃君は実戦経験はもう一人私より上だろうし、色んな術が使えるから勝つのは難しいかな？」

胡夢「私も同じね、あんな無双っぷりを見せられたら流石の裏モカでも辛いんじゃないの？」

刃「僕はその逆の萌香さんだな、先輩の鬼ならまだ分からないけど僕相手じゃあ萌香さんの相手になるかどうかさえ分からないね。」

月音「俺もそう思うよ、モカさんは大抵圧倒的な力の一発で倒すけど刃君は技で倒す感じだから真っ正面から戦うと刃君が負けると思う。」

紫「私は刃君ですう、もしかしたら今までの相手に力が刃さんより上の物もいたのでその対象方法を知っているかもしれないですう。」

意見が三対三に別れたこの状況に嫌な予感がした僕は残りの昼ご飯を流し込んで、

銀影「というわけいつペンしよ」ボクタベオワリマシタカラコレニテシツレイシマス！ユクゾツ！！」あ、逃げた。」

僕は急いでその場を去った。因みに裏萌香さんとはというと、

裏萌香（ふむ、それは面白そうだな。こんどロザリオが外れた時挑戦してみるか。）

（移動中・・・）

僕が理事長室のある建物の前に行くと

????「ガウツッ！」

僕に少し大きめの動物が飛び込んできた。それは理事長のペットの

刃「おお、トゲゾーじゃん、今日もお前は元気だね」

トゲゾー「ガウツッ」

僕はトゲゾーを撫でると喜んでいた。因みにトゲゾーの種族はヤマアラシなので最初理事長から聞いた時は思わず烈斬を構えたのは恥ずかしい思い出です。

僕はトゲゾーと別れて理事長室に入った。

刃「理事長、なにか急用が入ったのですか？」

理事長「いやこの前の事でいくつかあってね、まず君の彼女、<sup>じょう</sup>橙<sup>とう</sup> 瑠妃君かな？彼女を“暫くの間”臨時で私の部下にする事にした。」

刃「はあ、ん？暫くの間ってどういうことですか!？」

僕は理事長の“暫くの間”を強調していった事に気付き首を傾げながら訊ねてみた。理事長はただ笑みを作って

理事長「その後は君のもとへ永久就職させればよからう」ブツッ！

！・・・嫌かね？」

刃「いえ・・・ただ理事長もそんな事をおっしゃるのだな」と思  
いまして、」

理事長「彼女もこんな風にカマをかけたら面白い反応をしてくれ  
たぞ。君たちをいじるのは楽しいね。」

理事長はクククと笑いながら言った・・・この人には一生勝てな  
いとも思った。そして理事長は烈斬を取り出した。

理事長「それとこの烈斬だが、どこか壊れているようだから修理  
するにもここ（陽海学園）では無理があるだろう、休暇も兼ねて立  
花に戻りなさい。」

刃「しかし、自分は新聞部の仕事がある」では、携帯の電源を入  
れてみなさい。」・・・は？」

僕は携帯（特別製で結界の中でも電話が可能）の電源を入れると  
着信件数が50件もあった。しかも大半が鋭鬼父さんすると響鬼さ  
んからのメールが来た。（曲は響鬼2期opの「始まりの君へ（小  
暮さんの歌入り）」）一度唾を呑み、メールの内容を確認すると内  
容は

刃鬼へ、彼女つれてこれなくてもいいから帰って来い！！鋭鬼が  
大変でそっちに殴りこみに行きそうだから、早めにね？後小暮さん  
が刃鬼のデータをとりたいてさ。 響鬼

僕は携帯を閉じ、天井を向いて、ため息をつく

刃「父さん……では一週間ほど立花に戻ります。」

理事長「うむ、それとこれを渡そう。」

理事長は引出しを開けて机の上に「臨時給与」と書かれた封筒が置かれた……はい？

刃「理事長、これは流石に受け取れませんよ！僕は自分からお願いしたのですよ！？これは無償奉仕です。それなのになんで給与が！？」

僕はそう断ると理事長は椅子に深く掛けなおすと

理事長「君は今までに妖怪同士の喧嘩を防いだり、寮の修理、学生の悩み解消と色々な事をやってくれた私達はそれに大いに助かっている、それに長年の悩みの種公安を改善してくれたのは本当はこんなものでは済ませなかつたが君の姿（刃鬼のほう）を公表するわけには行かない……だから気持ち程度だが受け取ってくれたまえ。」

そう言い理事長はずいっと封筒を僕の方へ押した。僕は頭を掻いてからそれを受け取った。

刃「わかりました……ありがたく受け取らせてもらいます。」

理事長「うむ、これからもよろしく頼むよ。それで彼女にプレゼントでも買ってあげるといい。」

刃「理事長……最後の言葉がなければかつこよかったのに……」

理事長「クククク・・・それでは猫目君を呼ぼう。」

僕は猫目先生が来て、僕は理事長室を後にして部屋に戻った。

刃「あ、そう言えば臨時給与でどれくらいなんだろう数千円くらいで後は手紙があつたら十分でしょう・・・開けてみるか。」

僕は何故か少し重めの封筒を開けると中には感謝の言葉が書かれた便箋と諭吉さんが30枚入っていた・・・は？野口さんではなく諭吉さん！？僕は顔を洗い波紋呼吸方をやってから枚数を数えなおした。諭吉さんは一枚だけで後は野口さん高くて樋口さんであることを信じて数えたが、オール諭吉さんだった。さらに同封されていた便箋の最後には大きな文字で「返金不可」の文字が筆で書かれていた。

刃「はあ・・・貯金しよう・・・使う気が失せるよ。」

僕は荷造りし、響鬼さんにメールの返信をしてバス停に一人で向かった。（瑠妃さんはまだ検査入院のため明日夢兄さんの陽海学園付属病院にいる・・・明日夢兄さんがいる理由は理事長のスカウトらしい。）

僕は封筒をバッグに詰め、烈斬を持ち部屋を出た。

（移動中）

そしてバスを待っていると猫目先生が来て、

猫目「あ、刃君お願いがあるのだけど・・・いいかしら？」

刃「あ、はい構いませんがなんでしよう?」

すると猫目先生は魚のシールで封をされている一通の手紙を渡した。僕は

刃「ああ、このラブレターを斬鬼さんに渡せばいいのですか?」

猫目「はい!お願いします!!そのラブレターの中身を見ないで下さいよ!」

刃「わかりました・・・しかし先生普通ラブレターといわれたら恥ずかしくないですか?」

猫目「何ですか?その通りだから恥ずかしくも何にもありません!」

と胸を張るいつもは頼りない感じのする先生が今は頼もしく見えた・・・そういえばこの先生ノーブラだったような(先日萌香さんから聞いた。)

するとバスが来て僕はラブレターを烈斬が入った袋のポケットに入れ、バスに乗り込んだ。

運転手「やあ、ジンキ君お疲れだったねえ。」

ジンキ「あ、そうか立花に戻るから僕の名前はジンキにしないでいいんじゃないんですね・・・ややくしや」

運転手「ヒヒヒ・・・それじゃあ発車するよ。」

僕は一番前の座席に座るとバスが発車した。すると携帯に電話がかかった(曲は響鬼一期edの「少年よ」)。運転手さんに許可を貰い開けると斬鬼さんからだった。僕はでると

ジンキ「もしもし、ジンキです。」

ザンキ「ああ、俺だ。お前が今から戻ってくるらしいけど一つ噂の確認をしたい事があるんだが今は大丈夫か？」

ジンキ「はい今はちょうどトンネルを抜けたので大丈夫ですが、どうしたんですか彼女は本当に出来ましたか？」

ザンキ「お前、何げに自慢したな・・・まあいい、報告書でお前が烈斬を片手で振り回したと書いてあったが本当か？」

ジンキ「はい、やりましたよ・・・あ、預かっているのに乱暴に扱ってスイマセンでした!!」

僕はザンキさんがそれで怒っているかと思い、そうザンキさんに謝罪すると

ザンキ「ああ、別に怒るために電話したんじゃないやなくてお前、力強いな俺だってアレを片手で振り回すのは出来ないからな。」

ジンキ「ええ!?そうですか?自分はザンキさんも片手で振り回しているイメージがあつたのですが、それがどうかしたのですか？」

ザンキ「いやそれはない、まあ聞いたのは小暮さんがお前の装甲「ザンキ!!」じゃなくて、双剣を作るのに大きさをどうしようか

考えていてなお前は音叉剣が使えるから前より長くていいかなとな  
いつていたんだその確認の電話だ。」

ジンキ「はあ、わかりました（装甲？アームドセイバーは響鬼さ  
ん以外には使えないはずですけど言い間違えたのでしょうか）。あ、  
それと猫目先生からラブレター預かっています。」

ザンキ「そうか・・・それと早く戻って来い。鋭鬼がダジャレを  
言わずに不貞寝し始めたから仕事に行ってくれなくて・・・」

ジンキ「重症ですね、なら父さんにその仕事一緒にやろうと言っ  
ておいてください。多分物凄い勢いで準備しますから。」

ザンキ「わかった少し捏造して言うておく」「いや、しないで下さ  
いよ！」「・・・ジョークだ、じゃあ、切るぞ。」

ジンキ「はい、失礼します。（ピッ）・・・ふう、なんか瑠妃さ  
ん連れて行くの怖くなってきた。」

運転手「大変だねえ君も・・・それと火をお願いしたい。」

ジンキ「わかりました。烈光出すのでチョット待ってください。」

（バス移動中・・・立花付近のバス停到着）

ジンキ「ありがとうございました。」

運転手「いいよ、私はこれが仕事だからね。ヒヒヒ、」

バスは去っていき僕は立花に向かった。

立花につき、戸を開けると

エイキ「ジンキイイイイイイ！！！」

父さんがタツクルしてきたので思わず避けてしまった。父さんはアスファルトに顔からスライディングしてきてすぐに立ち上がると

エイキ「何故避ける！！昔は俺が頼ずりしても大丈夫だったのに！？」

父さんが叫ぶと僕は烈斬を見せて

ジンキ「父さん自分から突っ込んで大ケガはしたくないでしょう。」

僕はそう言っていると父さんは涙目で

エイキ「流石は俺の自慢の息子だあああ！！！」

と言って抱きついてきた僕はそのままにして扉を閉めて、斬鬼さんに猫目先生のラブレターを、みどりさんに故障した烈斬を渡した。すると店の奥からキョウキの兄貴とアマキの姉御が出てきた。

しかし様子がおかしかった。いつもと比べるとなんか暗くなっていた。すると兄貴が

キョウキ「いいよな・・・お前は彼女が来て、俺なんか同級生に中学と高校の鬼になる前のイメージが強すぎて友達が中々出来なくて・・・」

なんか地獄の兄弟風に言つと次に姉御が

アマキ「どうせ私なんかヒロイン役のオーディションに落ちて歳の割には落ち着いていたからこの役を「姉御！」それ以上言っちゃ駄目です！」・・・しかも出会いがないのに「

と言いだの隅でのの字を書いていた。ヒビキさんが僕の肩を手を置くと

ヒビキ「まあ、二人は今はそのうとしておいて、お帰り」

ジンキ「ヒビキさん、只今戻りました。」

イブキ「そのうえばジンキ君は音叉剣が使えると聞いたけど、本当かい？」

ジンキ「はい、おやつさんに昔の書物を見せてもらったときに聞いて、魔化魍相手に使えるかもしれないと思い頑張つて覚えましたが今では変身する前の戦闘方法や清めの音が効かない妖怪相手に使っています。」

少し前に学園でカマイタチ同志の喧嘩を止めるのに使ったこともある（剣で攻撃を斬つて峰打ちで静めた。）

みどり「ちょっと研究室で見せてもらえるかしら？」

ジンキ「あ、はい・・・あの小暮さんは？」

僕がそう言つと立花の戸が開き、

スルツ・・・ベチーン！！

エイキ「イタツ！！」

小暮「全く、養子とはいえ、息子に彼女が出来たとはいえその彼女に嫉妬するとは・・・」

小暮さんはエイキ父さんの尻に警策を叩き、その

トドロキ「小暮さん戻ってきたん・・・ア」

ヒビキ「これは面白くなりそうだな、キヨウキ、お前も戻らないと叩かれるぞ。」

アマキ「そうよ、キヨウキ。」

小暮「アマキ、お前もだ！！エイキ、アマキ、キヨウキは街を走って鍛えなおして来い！！」

すると尻を抑えた父さん、アマキの姉御、キヨウキの兄貴の順で立花から出て行った。僕も退院してロクに鍛錬が出来なかったのでついでに行こうとすると小暮さんが止めて

小暮「ジンキ、お前は行かなくてもいいだろ！」

ジンキ「いえ、小暮さん実は少し鍛えなおした方がいいかと」

ヒビキ「でも、アスムとクロキから聞いた話ではお前敵の体内に入って音撃したんだから体に相当負荷がかかっているんだろゆっく

りしなよ。」

日菜佳「そうですね、ジンキさんは妖怪と魔化魍を給料無しで相手にしてきたんですよ。ゆっくりしてもいいじゃないですか？」

イブキ「そうだよって……今まで給料無しでやっていたの!？」

日菜佳さんの一言に皆（小暮さん、おやっさん、響鬼さん日菜佳姉さんは除く）は啞然としていたが、

ジンキ「はい、だって僕が鬼になったのは労働基準法とか破りそうな歳だったので給料無しで、ほとんど魔化魍とは闘わずに皆さんのサポートと言う形でやってきましたし、オロチの後はエイキ父さんの講座に貯金するように頼みましたから本当に給料無しではありませんよ。」

小暮「今は立派にもらえるが小さい時はジンキに申し訳なかったと思っている。」

ヒビキ「ちなみに小暮さんがジンキ君に優しかったのはこのこともあるんだ。」

おやっさん「そう、小暮さんはジンキ君を孫とも思っているけどね。」

皆「「「「「へ〜〜〜」「」「」「」

ジンキ「とりあえず……自分は研究室に行きますね。」

イブキ「うん、わかったよ僕たちはアマキ達の方をしてみるよ。」

僕は小暮さん、みどりさん、ヒビキさん、ザンキさんと一緒に研究室に向かった。

〈研究室〉

研究室でみどりさんは相棒から僕の今までの戦闘データを見ると、

みどり「凄い・・・これがルーキーの実力なの？」

小暮「それはそうだがジンキの修行は私がつきつきりで行ったからな。しかしまだ力任せな所があるな。」

ジンキ「そうですね、自分はまだまだ未熟者です。まだ皆さんの足元に立っているのかどうかさえ分かりせん、」

ヒビキ「でも、ジンキって結構色んな敵にも対応できるよね。打撃が効きそうではない奴には鬼爪や弦で対処して、その逆なら音撃棒で闘い」

ザンキ「複数相手なら敵を盾にしたり足場にして闘ったり、重い一撃を使う相手なら受け流して闘う・・・器用だよな。」

ヒビキさんとザンキさんがそう褒めてくれるとみどりさんが瑠妃さんと戦っているときの映像を出す

みどり「この魔女相手なら、ほら常に動き回って狙いが定まらないようにしている。それとこの子可愛いわね。」

僕は少し照れながら



ジンキ「（え〜つとあの時は確か相棒の手入れをしていたし灰色の剣は触ったけどアームドセイバーは赤色だから触ってなんていないね）触れた記憶はありませんね。」

僕がそう言つと小暮さんは床に置いてあつた烈斬と同じぐらいの長さの箱を机において

小暮「そうか・・・すまなかつたなそれとこれは新しいお前の剣だ。」

と言ひ、蓋を開けるとそこには片刃の両手剣が一振りあつた。そして柄の近くの刃には

鬼刃刀【雷光】と彫られていた。僕は持つてみると意外と軽く手に馴染んだ。

みどり「どうかしら？君の双剣お手製の双剣の柄を元にして君の手に馴染むようにしたの、」

ザンキ「で、比較的軽くて片手で使える。後、鞘もあるから安心しろ。」

と出して出した鞘はどう見ても蛮鬼さんの音撃弦「刀弦響」の片側がないみたいな感じだった。（刀弦響は一人でも共鳴音撃ができるようにできていて、二つの弦が一つになったようなデザインです。）

小暮「因みに鞘に差したままだと音撃弦として使える・・・まあ音撃棒を打撃専用に使つてくれ、」

ジンキ「は、はい・・・明日父さんに行ったときに使ってみるか。  
「よし、まだいた。」」

すると少しの間部屋から出ていたヒビキさんがアームドセイバー  
を持って戻ってきた。

ジンキ「ヒビキ、一体それでなにをするんだ？」

ヒビキ「いや、もしかしてジンキも適正があるならこれをもった  
後に変身したらいいじゃないかって？駄目だったら駄目だけどひ  
よっとしたら角も同じ長さになるかも、」

小暮「それはいいが・・・また今度にしよう。今は雷光の慣らし  
をしなくてはな。」

ヒビキ「そうですかそれは残念「皆さ〜んご飯ですよ」お、行  
くか。ジンキの彼女は来てないからそのことも聞きたいし、」

ジンキ「ヒビキさん、程ほどでお願いしますよ。（瑠妃さんが退  
院したら何か送ろう）」

私は病院で検査を受けて明日夢先生が検査結果を見て

明日夢「うん、もう大丈夫だね。明日退院しても大丈夫だよ。」

明日夢先生の一言に私は嬉しくなった。

瑠妃「そうですか！先生ありがとうございます！！」

明日夢「いや、僕は何もしてないよ瑠妃さんの回復力の賜物だよ。そして退院したらやっぱりジンキ君の所へ行くのですか？」

瑠妃「はい！！書かなくてはいけない書類があるので明後日に行こうと思います。」

明日夢「そう、頑張つてね」「失礼するよ」「あ、御子神さんこんばんわ」

するとこれからお世話になる理事長さんが来て、

理事長「こんばんわ明日夢君、ちょっとばかり盗み聞きさせて貰ったがジンキ君は今人間界の立花という店にいるけど、君は大丈夫かい？」

理事長は私にそう語りかけるが私は彼から借りた音弦を握り締め、

瑠妃「それでも・・・私は行きます！！」

理事長「じゃあ、明日の朝にバスを用意するよ。それとこれは立花に一番近いバス停からの地図だよ。」

瑠妃「ありがとうございます！！・・・刃さん待っていて下さい！！」

「一方のジンキ」

ジンキ「ブエックシヨイ！！」

トドロキ「どうしたツスカ、ジンキ君？」

ジンキ「いや、今誰かが僕の事について話していたような気が・  
」

イブキ「誰か王様ゲームす」「ダブル雷撃蹴!!」「ギャアア  
アアアア!!」

ザンキ「結構いいコンビだなあの二人」

おやつさん「もしかして噂の彼女が、近々来るかも」

エイキ「ふっ、追い払ってくれるわ!!」

小暮「エイキ、もう一走りするか？」

エイキ「すいませんでした!!」

ジンキ「それはそれで嬉しいかもしれないね。まあないでしょ  
うけどね。」

番外編「カップルさん、いらっしやい! : 前編」(後書き)

今回でたジンキの武器の鬼刃【雷光】の設定を説明をします。

鬼刃刀【雷光】：外見は日本刀の鍔なしの柄にS・I・Cの装甲響鬼 戦国時代ver. 版の装甲声刃の刃がついた感じですが。

(鞘は先述のように刀弦響の下側に取り付けるようになっていて)

小暮さんがジンキのために作った刀、魔化魍魎以外の主に清めの音があまり効かない敵を想定して作った。、鞘に取り付けて音撃弦として使えるが鞘自体は殴るようにはしか使えない。双剣を使うジンキが使いやすくするため見た目よりは結構軽いでも頑丈。最初はこれを二振り作る予定だったがジンキが音叉剣を使得る事を聞いて一振りにした。

以上で説明を終わります。後編では立花が騒がしくなります。

番外編「カップルさん、いらっしやい!」:(多分カオスな)後編「(前書き)

立花に瑠妃さんが襲来!!ジんキはどうなるのか!?!今回オリジ  
ナル設定が入りますがご理解のほどよろしくお願いします。

番外編「カップルさん、いらっしやい!:(多分カオスな)後編」

番外編「カップルさん、いらっしやい!:(多分カオスな)後編」

私は人間界に来たがここは私が住んでいた所とは違い所々に自然があり、その自然も人によく手入れされている事が感じられました。

運転手「ヒヒヒ、すまないがここからは徒歩になるのだが構わな  
いかね?」

瑠妃「いえ、ありがとうございます。」

私は荷物を持って降りるとバスは行き、理事長から貰った地図を広げ、その通りに歩いてみた。

〜数分後〜

瑠妃「え〜っと、地図はここで間違いないみたいね、でも・・・」

私は地図と目の前の建物を見ました。刃さんの実家とは聞きましたが、目の前の建物には甘味処「立花」と暖簾が出ていました。すると中から箸とちりとりを持った人間の女性の方が出てきた。私はつい物陰に隠れると

????「ん〜〜今日もいい天気ですねえ、さてお掃除しますか。」

といい、掃除を始めた。私は新しい魔具とジンキさんの音弦を抱

きしめ声をかけた。

瑠妃「あ、あの・・・すみません!!」

??「あ、はいはい、どうかしましたか？」

瑠妃「ここはジンキさん・・・松坂刃さんのご自宅でしょうか？」

私はそう言うと目の前の女性は

??「そうですが、もしかしてあなたは橙条 瑠妃さん？」

瑠妃「は、はいそうです。」

すると目の前の女性は口を開け始め、店に入り

??「お、おおおお、お父さん!!う、うううう噂のジンキ君の彼女が来ちゃいましたよおおオオオ!!?!?!?」

すると男の人とさっきのが出てきて

お父さんと言われた方「ありやあ・・・本当に来ちゃったの。香須美、ジンキ君に電話を日菜佳はお茶の用意を」

香須美? 「は、はい!!」

日菜佳? 「りよ、了解ッス!!」

私はついばかんとしてしまいましたが、どうやら先日辺りに噂をしていたようです。

小暮「ジンキ、次行くぞ!!」

刃鬼「はい!!お願いします!!」

僕はこの前貰った刀、鬼刃刀【雷光】（以下雷光）のならしをするために猛士の関係者がやっている採石場に来た。何故この場所かと言うと確かめるのに大きな岩でやる事になったのでここにしたいわけだ。

ヒビキ「行くぞー・・・そうね!!」

ゴロツ、ゴロゴロゴロ・・・

上から大きな岩が転がってきて、僕は両手で雷光を握り締め光の力を送り込んで

刃鬼「セイヤアアア!!」

ズズンツ!・・・

岩を逆袈裟切りにした。岩はバターみたいに切れて僕の横へ落ちた。

トドロキ「もういつちようツス!!」

更にもう一つ落ちてきて今度は雷の力を込めて切ると

刃鬼「はああ・・・ウェイ!!」

ボカンッ・・・パラパラ・・・

今度は破裂して僕の周りに落ちた。

小暮「よし、これで慣らしは終わりだ、後は実戦で扱い方のコツを掴め、」

刃鬼「はい!!ありがとうございます!!」

僕は変身を解き着替えるとザンキさんが携帯を持ってやってきた。

ザンキ「おい、ジンキなんかさっき立花からメールが来たぞ。」

ジンキ「へ?なんででしょうか?まさかまた裁鬼さんが!?!」

ザンキ「なんでも急いで戻ってこいだそうだ。というか裁鬼はお払い済んでから快進撃しているから違うだろ。」

僕達は不思議に思いながら立花に戻るとおやっさんが出てきて

おやっさん「ああジンキ君、やっと来たかい。」

ジンキ「おやっさんどうかしたのですか?」

おやっさん「まあ、それは見たらわかるよ。」

僕は客間に行くつと魔道書を膝の上に乗せ、お茶を啜っていた瑠妃

さんの姿があった。

瑠妃「あ、刃君お邪魔しています。」

ジンキ「今はジンキだよ、瑠妃さん」

ヒビキ「春だね〜」

おやつさん「エイキ君を北の方に仕事に生かせて正解だったね。」

ダンキ「羨ましい・・・ジンキ、風呂入って来い。そのままだと臭いかもしれないぞ。」

ジンキ「あ、はい分かりました。ダンキ兄さん」

ダンキ「兄さんか・・・照れるな。」

少年風呂入りなう・・・

僕は頭から湯気を出しながら客間に向かい瑠妃さんと向かい合うように座った。

ジンキ「瑠妃さん遅れてスイマセンでした。」

瑠妃「いえ、お気になさらずに」

ジンキ「しかしいつ退院を？」

瑠妃「実は一昨日に退院してその後書類を書いて、荷造りしたら一日経ってしまいました・・・まさか実家が甘味処とは思いません

でした。」

ジ~~~~~

ジンキ「まあ、鬼って世間にはらせるものではないですから。」

ジ~~~~~

香須美「はい、きび団子とお茶のおかわりです。」

瑠妃「あ、ありがとうございます。」

ジンキ「ありがとうございます香須美姉さん・・・はあ」

僕はさっきから感じる視線のために後ろを向いた。

ジンキ「皆さん、質問があるならもう少し後になったら構いませんがそうやって覗かないで下さい。」

ヒビキ「あ、やっぱり駄目か・・・お嬢さんは始めまして・・・  
シュッ」

イブキ「いや、なんかジンキ君の彼女にはかなり綺麗だな  
と思って」

トドロキ「魔女って言うていたけど、思ったのより真面目な感じ  
があったので、」

ジンキ「・・・瑠妃さん、この後立花の皆の質問に答える事に  
しますが構いませんか？後、イブキさんにはクスハドリンクね。」

イブキ「ゴメンナサイ!!」

瑠妃「あ、はい分かりました。それと理事長からこれを預かってきました。」

瑠妃さんは魔具の本の間から封筒を取り出し僕は中身を見るとそこには

本日より松坂刃、橙条 瑠妃の以下二名は卒業までの間、陽海学園特別遊撃班に任命する。これは妖怪関係や学園内の事件、魔化魍に関する情報提供、また事件の解決を主な仕事とし、そのための特別な権力もある。またどんな活動するときも二人で行動したまえ

これからも学園のために尽力を尽くしてくれ・・・まあ、いつも通り気楽にやってくれたまえ連絡は携帯で連絡する。まああまり関係がカップルから夫婦にいきすぎないようにしたまえ 御子神 天明

ジンキ「うわお・・・最後、理事長とんでもない事言ったね。」

ヒビキ「理事長やるねえ・・・さて質問会しますか。」

全員「「「「「おお!!」「」「」「」

瑠妃「すごい団結力・・・」

こうして今日は立花が休みを利用してお店のところを改造して記者会見みたいなことをすることになった。(司会はおやつさん)

日菜佳「ではまず私から・・・瑠妃さんジンキ君のどこに惹かれ



すると瑠妃さんは鴉になり僕の肩に止まりそして、元に戻ると首を傾げながら

瑠妃「いかがでしょうか？」

全員「……………オオオオオオオオオオッ！！！！」

「「「「」

会場は騒ぐが、トドロキさんの一言で

トドロキ「あ、変身するのに呪文はいらないのですね。リリカルマジカルと言う感じの」

全員「……………流石にそれはない！！！！！！」

トドロキ「……………」

瑠妃「かなり大掛かりなものや封印などは必要ですが、流石にそれはちよつと……………」

落ち込んでいるトドロキさんを見無視しておやっさんは

おやっさん「え〜それではここでなにか瑠妃さんから皆に聞いてみたい事は無いかい？」

瑠妃「では、あのヒビキさんがさっきやったのはジンキ君と同じ気が、」

ヒビキ「ああ、これ（シュツ）ね。ジンキは尊敬している先輩鬼

の癖をやるんだ。」

トドロキ「確かに自分は敵と闘った後に念押しをやるのだけど、ジンキ君もやるツス！」

「  
ザンキ「俺は街のチンピラ相手にやるガンの飛ばし方を教えたな。」

イブキ「僕は・・・グスッ」

ジンキ「イブキさんのはまだ出来ないだけで尊敬して無いわけではないので安心して下さい!!！」

イブキ「なら何をするつもりなんだい？」

ジンキ「え〜っと・・・疾風一閃？」

イブキ「やっぱりないのじゃないか!!！」

イブキさんは香須美姉さんに抱きついて泣いていると、瑠妃さんが

瑠妃「なら、これから何か教えてたらいいのではないのでしょうか？」

イ・ジ「ああ、確かに」

おやつさん「では最後にこの書状を見ると君はジンキ君と行動することになるけど、今日から人間界の方で泊まる所にあてはあるのかい？」

瑠妃「あ、すみませんジンキ君に会いたい一心で来たからまだ考えてませんでした。」

と瑠妃さんは申し訳なさそうに言うともどりさんが

みどり「なら立花に泊まれば？」

ヒビキ「確か、部屋に空きはあるよね？」

香須美「ちょうど人、魔女一人分なら空いてますよ。」

日菜佳「じゃあいつそのことジンキ君と一緒に部屋にしますか？  
カップル何ですから大丈夫でしょう。」

日菜佳姉さんの火にタンクローリーを突っ込んだ発言により、

瑠妃「え？はわわわ・・・きゆう。」

ジンキ「瑠妃さあああああん！！」

香須美「かなりこの子も初心なのね。」

小暮「全く、ジンキはその子を部屋に運んであげなさい。」

小暮さんは僕にそう言い、小暮さんはやはりいい人だなと思い

ジンキ「わかりました。ではどこの部屋に運びましょうか？」

小暮「いや、お前の部屋に決まっているだろ。」

ジンキ「まさかの小暮さんまでそれですか！！泣きますよー！！」

でも他に布団の準備がすぐにできる部屋はなかったため僕の部屋に布団を敷き寝かせた。

日菜佳「ではジンキ君いたずらしちゃ駄目ですよ？」

ジンキ「日菜佳姉さん、さすがの僕でもキレますよ？」

日菜佳「嘘だよーもうー瑠妃さんが起きたら言っつてね、お茶持ってくるから」

ジンキ「わかりました。」

日菜佳姉さんが部屋の扉を閉めると、僕は瑠妃さんの魔具の本を手を取った。それはよく見ると魔女の丘のお館様が持っていたものと似ていた。

僕はそれを一通り見てついでに中身も見てみたが、まったくわからなかったので閉じ窓際に行き雷光の手入れを始めた。

私が目を覚まし周りを見ると棚の上には写真立てがいくつもあり、そのどれにもジンキさんが写っていた。窓際を見ると刀を手入れを終えた様子のジンキさんが私の方を見た。

ジンキ「おお、目を覚ましましたか、ここは僕の部屋だよ。」

瑠妃「ふえ！？と言うことは私は・・・はわわわわ！！」

ジンキ「落ち着け！！また気絶したら夜寝れないぞ！！」

瑠妃「ええ！？そうなんですか？「いや知らん、落ち着くかなと思つて」嘘ですか！！」

ジンキさんは笑いながら私に謝った。するとジンキさんは私の魔具を持ち

ジンキ「そういえば瑠妃さん、これはもしかしてあの人の・・・遺品ですか？」

瑠妃「いえ、それは違います。それはお館様のを元にした私の専用の本です。勿論お館様の魔具も私の部屋に置いてます。」

ジンキ「そうか・・・聞いてすまなかつた。」

ジンキさんは頭を下げると

瑠妃「そ、そんな気にしないでください。それとお願いがあるのですが、」

ジンキ「お願い？なんででしょうか・・・でもその前に」

ジンキさんは立ち上がると扉に手をかけ、一気に開いた。すると

ヒビキ「あっ、」

みどり「きゃあ!？」

イブキ「うわあ!？」

香須美「ちよっ!？」

トドロキ「おおお!?!？」

日菜佳「ありやりやりや・・・」

扉を開けると立ち聞きしていたジンキ君の先輩方が流れ込んできた。

ジンキ「よりによって立花のカップル三組ですか・・・どうしたんです?。」

ヒビキ「よく俺たちの視線に気づいたなジンキ」

ジンキ「いや、そりゃあ六人分の視線が来ていたら気づきますよ。」

イブキ「まあ、確かに・・・そういえば瑠妃さんのおねがいつてなんだい?。」

瑠妃「実は・・・この魔具に鬼のマークを入れたいのですが、それをお願いしたいのですが、」

ジンキ「別にそれくらいなら構わないが・・・いつそのこと鬼石を埋めますか?。」

日菜佳「おお、それはナイスアイデアですね！この魔具をよく見るとちょうど大きさにいい穴がありますからね。」

ヒビキ「なら仕事はみどりか。期待しているよ。」

みどり「そうね・・・まあジンキ君の彼女の頼みは断れないわね。」

そう言いながらみどりさんが私の魔具を触ろうとした時、

おやつさん「あ、ジンキ君今空いているかい？」

ジンキ「どうしたんですかおやつさん？」

おやつさん「実は裁鬼君がやられちゃったよつで応援にジンキ君を呼んでだって・・・構わないかい？」

ジンキ「僕は構いませんが相手はいつたい・・・それに裁鬼さんは絶好調って本人言っていたのに？」

おやつさん「石割君はカツバラしき生物って言ってたけど・・・なんか見かけたら相撲をやるうって言われてその勝負の最中に燃え尽きたって言ってたけど・・・色々とおかしいよね？」

ジンキ「魔化魍ではないですね・・・たぶん妖怪かと」

二人の会話から察するとどうやら相手は妖怪のようであることは間違いない様子、私は

瑠妃「妖怪なら、私も一緒に行っても構いませんか？」

おやつさん「うん．．．妖怪相手なら瑠妃さんの方がお願いするよ。移動はザンキ君に頼んでいるからとりあえず装備一式と着替えを持っていったらいいかな？．．．あと胡瓜も」

ジンキ「わかりました！！行きますか瑠妃さん！」

瑠妃「はい！！！」

日菜佳「初めての共同作業です！！！」

ヒビキ「春だね～季節は夏だけど」

私たちはザンキさんの車に乗って目的地に行くと言った真面目そうな青年が真っ白に燃え尽きている鬼にバケツの水をかけているところでした。青年は私たちに気づくと近づいてきて

石割「あ、ザンキさんにジンキ君に．．．そちらの方はどちらですか？」

ザンキ「噂のジンキの彼女だ。」

石割「へへあ、自分、石割と言います。あつちで燃え尽きているKYは裁鬼さんです。」

瑠妃「あ、初めまして瑠妃と言います。早速ですがカップはどちらに？」

石割「それならあちらの方に．．．」

すると石割さんの方には岩の上でギターを持ってくつろいでいた妖怪の河童の男性がいて、

石割「いや、実は裁鬼さんが魔化魍と勘違いして攻撃を仕掛けたのですが、その前に今までの疲れがどつと出て音撃弦を取られて帰るにも帰れないんですよ。」

ザンキ「はあ、まったく裁鬼の気持ちもわからなくないが確認しろよ・・・全く外見が違うのに」

ジンキ「とりあえず行ってみます。」

ジンキさんは河童に近づき、私も後へ続いた。

カッパに近づくと

ジンキ「すいません、うちの先輩がおご迷惑をおかけしましたが、それ返してもらえないでしょうか？こっちの商売道具なんです」

カッパ「あん？なんで俺が人間のいうことを聞かなやいけねえんだよ？・・・ん？そっちの魔女かよ？」

ピキッ

瑠妃「はい、私は陽海学園のものです。どうかそれを返してくださいでしょうか？それが無いと守れない命があるのです！！もしかしたらあなたにも襲い掛かってくるかもしれません！」

カッパ「へっ、いやだね！なんでお前みたいな魔女の言うことを聞かなきゃいけないんだよ！そんなに返してほしけりゃ服でも脱げ



ザンキ「やりすぎだこの馬鹿!!」

ゴチンツ!!

ジンキ「いてっ!? すいません、命を軽く扱っていたのでつい・  
」

僕はザンキさんに殴られた頭をさすりながら謝ると

サバキ「それと彼女を馬鹿にしてたから・・だろ？」

ジンキ「サバキさん・・照れ隠しに殴らせてください。」

ザンキ「それなら許す! むしろやってしまえ!!」

ジンキ「ならこれはクリリンの分!!」

サバキ「いや、誰だよ!!」

「少しの間お待ちください」ちよつと雷の力は纏わないで・・「  
チャオズの分!!」ぐはっ!?!」

ジンキ「すつきり!!」

サバキ「ぐふ・・」

僕はサバキさんを殴ると九曜さんが来た。(妖怪関係の荒事があった後、容疑者、被疑者の事情聴取とかは公安に引き継がれる。)

九曜「刃さん、お疲れ様です。それとここにサインを」

ジンキ「はいはい、それにしても大丈夫かい？顔に青痣があるけど？」

なぜか九曜さんの顔には大きな拳型の青痣があった。聞いた話では笛の鬼と聞いた。僕は渡された書類に名前を書いて渡すと九曜さんは笑いながら

九曜「こんなもの刃さんの音撃と比べればどうということはない。私的にはむしろまだまだ修行が足りないと思っところですよ。・とはいつても“この跡”を見る限りまだまだ刃君の足元には及ばないそうですね。」

ジンキ「そうですね？九曜さんは結構力が強いから僕と同じぐらいのはずだよ？それと、今度公安にお土産持っていくよ。」

九曜「ありがとうございます。それと模擬戦をしてくれるとありがたいですね。」

ジンキ「わかったよ。それじゃあ僕は帰るよ。」

九曜「はい、では自分たちもあのカップを回収してから学園に戻ります。」

ジンキ「ばいばい」

九曜さんたちはカップを連れてバス（運転手はいつものひとじゃない。）に乗り込んで去って行った。すると瑠妃さんが近づいてきて

瑠妃「ジンキ君”あれ”はやりすぎですよ!!」

ジンキ「いやあ、ごめんごめん。瑠妃さんが侮辱されるのは嫌ですから。」

瑠妃「私を大切に思ってくれるのはわかりますが“あそこ”までやる必要はありませんよ!」

ザンキ「なら謝罪として瑠妃さんの願い事をなにか一つ叶えてやったらどうだ?」

ザンキさんがそう言うと瑠妃さんは考えた後

瑠妃「なら、学園に戻るまで一緒に部屋で寝ましょう!!」

鬼一同「「え・・・?」「」

瑠妃「駄目ですか?(上目使い)」

僕が瑠妃さんの上目使いと戦っているとザンキさんが僕の肩に手を置き

ザンキ「諦める・・・」

ジンキ「・・・はい。」

瑠妃「やった!」

サバキ「リア充もげろ!!」

石割「あゝ今日も平和だな。」

僕たちは僕の剣によってできた直径メートルのクレーターを後にした。(河童はもちろん生きてますよ。トラウマを植え付けましたかね。)

～その日の晩～

ジンキ「寝れねえよ……」

瑠妃「スー…スー…」

一緒に寝るがまさか布団まで一緒とは……瑠妃さんの胸が当たっている!!息がかかっている!!……やべ鼻血でそう

瑠妃「刃君」

ギユ!!

この時ジンキ君の緊張の糸が切れた!!

ジンキ「ガクッ……」

ジンキはお昼ぐらいまで気絶していたそうです。(響鬼談)

番外編「カップルさん、いらっしやい!」:(多分カオスな)後編「(後書き)

猛士報告

瑠妃さんは基本ノーメイク

byジンキ

みどり「え!?嘘っ!?あれでノーメイクなの!?!」

香須美「負けた・・・」

日菜佳「しかもお肌すべすべでさ〜スタイルもいいのよあの子!  
(ちゃっかり一緒に風呂に入った人)」

ヒビキ「気にしない気にしない。」

イブキ「僕も同じですよ香須美さん、」

トドロキ「そうですね!!日菜佳さんも元気出してくださいよ!  
」!

ザンキ「ちなみに猫目の話ではあれよりスタイルがいいやつがい  
るらしいぞ、同級生で」

エイキ「ただ今戻りました〜あれ?ジンキは」

おやつさん「あ、エイキ君おかえりジンキ君はもう寝たよ。」

サバキ「しかも彼女と一緒に」

エイキ「は？・・・ソイツコロス！！」

小暮「ヒビキ、やれ」

装甲響鬼「ごめんね、鬼神覚声！！」

エイキ「ギャアアアアアアアア！！」

サバキ「うお、エイキが火だるまに！？」

石割「はあ・・・ジンキ君は苦労しますね。」

本日の金言「瑠妃さん、後で何かお肌のことでも聞きたいことがあります！！（女性一同）」「エイキ、いい加減子離れしろ！！（鬼一同）」

なんか番外編の執筆がよく進むからもう一つ書こうかな？宴会で大はしゃぎして瑠妃がドMであることがバレルとかしようかと思いませんがいかがでしょう？

番外編 P A r t 2 「輝、そして猛士の嵐とクスハドリリンクが舞う大宴会・前編」

今回ジンキが強化されますが、強化形態の名前は気にしない方向  
でお願いします。

今回カオスなことになります。そこもご了承ください。またミス  
ターサー先生の「清める鬼と屍」からクロキ、チヨウキ、ミツキの  
蟲鬼組の皆さんがゲストで主演させていただきました！！それでは  
どうぞ！！

番外編 Part 2「輝、そして猛士の嵐とクスハドリンクが舞う大宴会・前編」

番外編 Part 2「輝、そして猛士の嵐とクスハドリンクが舞う大宴会・前編」

瑠妃さんが立花に来てから早くも4日が経ち、明日学園に戻るこ  
とになった。僕はディスクアニマルの使い方を教えるために森へ行  
った。

ジンキ「で、ヒビキさんはこの黄蘗蟹キハダガニも水があるところで活躍す  
るけど、僕はこっちの青磁蛙セイジガエルを使っているんだ。」

瑠妃「へへ色々種類があるんですね。勉強になります。」

ヒビキ「瑠妃さんは勉強熱心なんだね。いや。さすがはジンキの  
未来のお嫁さん。」

僕は次のディスクアニマルの説明をしようとする。と瑠妃さんが突  
然涙目になり

ジンキ「ど、どうしたの?」

瑠妃「な、なにかが服の中に……」

というと、とても言いづらいが瑠妃さんの胸の……谷間あたり  
から……虹色の蛇型のディスクアニマルが出てきた。僕は申し訳  
なさそうにそれを摘んで説明を始めた。

ジンキ「これは鈍色蛇ニビイロヘビ、同じく水中でも活動できてイブキさんが

主に使います。そしてこいつは狭いところが好きなんだ。」

「ヒビキ「俺もこの前またそいつが服の中に入ってきたんだよね。」

「瑠妃「イブキさんがよく使っていることはあの人はスケベなんですか？」

刃・響「……ノーコメントで」

すると瑠妃さんの肩に専用の鴉型のディスクアニマル黒色鴉「くろくろ」が止まると服をつんつんと引っ張った。

「ジンキ「ん？なにが聞いたのかな？ディスクに戻してこうして聞いてみて」

僕は手に持っていたニビイロを元に戻し音角にセットして回した。もちろんこの辺に魔化魍がいないと聞いたので来たから外れである。瑠妃さんも同じように練習用の音角にセットして回したすると

「ニヤア！……ニヤニヤア！！」

と猫のような声が聞こえ僕とヒビキさんの表情は強張った。

「瑠妃「ど、どうしたのですか？」

「ジンキ「ねえ、ヒビキさんさっきのって……」

「ヒビキ「間違いない……」

後ろの藪から姫と童子、さらにバケネコが4匹いた。

僕とヒビキさんは音角を鳴らすと、姫が襲い掛かってくるが変身せず剣に変えて腹を深く斬り払い、白い血液が顔にかかる。

妖姫「鬼が小癩な・・・」

男の声が聞こえ、僕が音弦を引き出すと妖姫は土くれに変わり、今度はバケネコが二匹襲ってきたが、

瑠妃「ジンキ君の邪魔はさせません!!」

響鬼紅「そういうこと、あらよつと!!」

瑠妃さんが鬼石の力を上乗せした刃の羽で切り裂き化け猫を怯ませ、怯んだ隙に響鬼さんの紅の力で敵を燃やし倒した。その間に僕は音弦を鳴らし変身した。

刃鬼「はあ!!・・・ではいきますか!!」

瑠妃「童子はお任せください!!」

響鬼紅「じゃあ俺たちは残りを倒しますか!!」

僕は烈光弾でバケネコを攻撃した。今までならこの技では相手はぶっ飛ばすことはできなかったが、

バケネコ1「フギアアアアアアアアアア!？」

バケネコ2「ギアアアアアアアアアア!？」

バケネコ3「ブニヤ!？」

バケネコ4「ニヤニヤ!？」

僕が担当したバケネコが吹っ飛び、響鬼さんと闘っていたバケネコに当たり、子の方はなぜか全部消えた。

響鬼紅「おお、刃鬼やるじゃん、音撃もお前がやりなよ。」

刃鬼「は、はあ・・・ではいきます!!」

僕は光震天を取り出し、宙に放り投げた。すると僕の目の前に鼓が展開され僕は烈光を振り上げ、

刃鬼「弾鬼兄さん直伝、音撃打「粉骨碎身」!!」

僕が鼓をたたくと白い波動がバケネコを覆うとたたくスピードを上げた。バケネコは苦しみ、

刃鬼「はあ!!」

最後の音撃を決めるとバケネコは爆発して息絶えた。僕は頭の変身を解除すると宙に浮いていた光震天を元に戻した。すると響鬼さんは

響鬼「刃鬼、お前後で装甲声刃持つてみる？」

刃鬼「いやいや、変身できなくなったら大変ですから結構です。」

響鬼「え〜ケチ〜いいじゃないの〜妖怪相手なら問題ないでしょ？」

瑠妃「実はそうも言えないのです。妖怪の中にも刃さんが鬼にならないと止められない人もいるのです。」

瑠妃さんが着替えを持って来ると響鬼さんは

響鬼「じゃあ、紅になれるかな？」

刃鬼「いや、もっと無理でしょう僕に炎の属性なんてありませんよ!?!」

瑠妃「では光ですから真っ白になるのかもしれないね。」

刃鬼「その発想は……ありませんでした。」

響鬼「同じく……とりあえずなってみる？」

僕は再度変身して響鬼さんに初めて紅になった時の感じを聞いて、僕は力全身に力を止めると体から白い炎が出るが、変身できず

刃鬼「アツッいあつアツツツ……!!!!」

響鬼「うおおい!?!自分の炎で火傷するなよ!!!!」

僕は急いで川に向かうと川の向かい岸からクロキの旦那、ミツキさん、チヨウキさんの蟲鬼組の人たちが出てきた。

クロキ「え〜とっ確かここらへんにいると聞いたけど……」



瑠妃さんが事情を説明すると復活した黒鬼の旦那は

クロキ「確かに小暮さんの修行で鬼になった刃鬼だから可能かもしれないが・・・炎属性の響鬼の感覚はあてにならないじゃないのか？」

その一言に変身を解除したヒビキさんは

ヒビキ「やっぱり駄目か〜う〜んでも俺、光属性はよくわかんないな〜」

チヨウキ「ならアニメの感覚でやってみれば？」

クロキ「まずは龍玉風にか？」

刃鬼「え〜・・・まあ、やってみます。」

僕は皆さんから少し離れてもう一度体に力を込めた。今度は白い炎ではなく光だったが、僕の周りをうねっているだけ、

クロキ「う〜ん、いまいちだねえ、」

チヨウキ「もう少しこ〜う・・・パンっといかないかなあ・・・」

ヒビキ「とりあえず、なにか言ったらいいかもね。」

すると瑠妃さんが

瑠妃「刃さん、変身とってみてはいかがでしょうか？」

僕はそれに頷き、深く呼吸をして

刃鬼「クリリンのことかあああああああ!!」

と叫ぶと光が収まった・・・

瑠妃「外れですか・・・」

と皆は落ち込むとヒビキさんは手をぽんと叩き

ヒビキ「刃鬼は最初の頃鬼に変わるとき「変身」っていつてただろ？それならどうだ？」

クロキ「でも、それはまだ半人前の頃の話ですから今はそれをやっても意味がないはずでしたよね？」

ヒビキ「ほら、ジンキって色々といレギュラーなことができたからいけるかもしれないし、これは初の試みだ・・・なら初心に戻ったらいけるかもしれないぞ？」

刃鬼「・・・よし、男は度胸何でもやってみますよ!!」

僕はもう一度体に力をいれ、光が僕を包んだ。しかしその時僕はこれは今までの仮面ライダーで言うところとフォームチェンジみたいなものだと思うから、僕は

「超・・・変身っ!!」

すると今までより濃い光が包み、どうなっているのか僕はわか

らなかったが、ヒビキさん達の反応が

ヒビキ「おおっ!」

クロキ「まさかのあたりですか・・・」

チヨウキ「反対側の角が・・・おお、こっちの角は縮んだ!」

瑠妃「綺麗・・・」

すると変身が終わった感じがしたので

刃鬼「はああ!」

と光を払うと

ヒ・ク・チヨ「( )・・・え?」

鬼一同はポカーンとしていたすると瑠妃さんが手鏡を持ってきて僕の姿を映すと映っていたのは真っ白い肌に伸びた同じ長さまで銀色に輝く角(後で測ると響鬼さんの1.5倍)で響鬼紅のように黒のゴーグルのようなマスクの僕の顔があった。

刃鬼「やってみるものなんですね・・・」

すると正気に戻ったヒビキさん達は

ヒビキ「そうだな・・・あ、名前決めなきや」

クロキ「なににしますか？俺は刃鬼白雪」

チヨウキ「いや、雪属性ないだろ！！俺はシンプルに刃鬼じんき白はく」

クロキ「それはシンプルすぎるだろ！！それにさっきジンキが光を払った時に刃鬼の周りを雪のように落ちてたから白雪！！」

チヨウキ「でも、刃鬼はいつもは白い炎を使っらしいし、白雪って言うと女ばいから白！！」

この後、数分間白雪と白の攻防が繰り広げられたが、クロキの旦那の携帯がなり、

クロキ「ちょっと待ってる！はいクロキです。あっおやっさん・・・」

話していると瑠妃さんが

瑠妃「刃さん、さっきの曲は聴いた事がありますがなんてなんて名前の曲でしたか？」

その時、刃鬼ダイナマイトをくらい服が焦げ、僕の予備の着替えを着てダボダボで裾を引きずっているミツキさんが、

ミツキ「え〜と、確か「輝」だったような・・・」

瑠妃「ありがとうございます！後で携帯の着信音にします。あ、刃鬼じんき輝かがやきはどうですか？」

ヒビキ「いいんじゃない？」

チヨウキ「む、確かに・・・」

刃鬼輝「いいですね！それにしましょう！」

クロキ「おやっさんがそろそろ戻ってこいだってさ。そして白雪はゆずらんぞっ！！」

ヒビキ「あ、もう決まったから」

クロキ「はっ！？まさかジブリアニメに出てきそうな名前の白になったのか？」

ジンキ「いえ、輝になりました。」

僕は顔の変身を解除してそう言つと

クロキ「まじで！？・・・ま猛士らしいからいつか」

ジンキ「か、軽いですね、それでおやっさんからはなんと？」

クロキ「なんか宴会するそうだよ刃鬼と瑠妃さんが戻るからだつて」

ジンキ「またか・・・」

僕がこつ呟くとミツキさんは

ミツキ「へっこつちの宴会って初めてですけどどんなのでしょうか？」

ミツキさんがそう言つとクロキの旦那とヒビキさんは肩に手を置き





ダンキ「ならのめやあああああああ！！」

ミツキ「ゴボゴボゴボゴボ・・・」

クロキ「イッキイッキイッキ！！！」

サバキ「イッキイッキイッキ！！！」

石割「イッキいきまひゅ！！！」

小暮「だから君はもう少し鬼としての自覚がクドクドクドクド・・・」

おやつさん「イブキ君はうちの香須美と付き合っているんだからもう少・・・」

イブキ「すいません・・・」

キヨウキ「あ、あしが・・・」

ジンキ「案の定カオスな空間になっちゃったよ・・・あつ酒瓶も二升ほど持ってきてください。それと枝豆もう一皿」

僕は備え付けの電話で連絡するとチヨウキさんが来た。

チヨウキ「しかしすごいな・・・」

ジンキ「いえいえ、そんなことはありませんよ。むしろ凄いのはあれですよ・・・」

僕は指差す先には

トドロキ「もう無理っす……ぐふっ」

ゴウキ（鬼の時は剛鬼）「お、同じく……オウフ」

バンキ「少しきつい……」

明日夢「リタイアした人はジンキドリンクを飲んでくださいね。」

香須美「ガハッ!？」

ミドリ「グフッ!？」

アマキ「……（目を開けたまま気絶している）」

ヒビキ「おや?みんなどうしたの?」

周りに仲間の屍と酒瓶を気づきあげて普通に飲んでいるヒビキさんの姿があった。

チヨウキ「すごいなあ……それとあのドリンクの原液あるか?」

ジンキ「え!?ええ、ここに2リットルペットボトルで5本ほど・  
・それをうすめる水はその五倍ありますが、」

チヨウキ「すまんが原液の方を一本くれ、家のお土産にする」

ジンキ「はあ!?!いえすみませんこれをですか?前のよりヤ  
バイはですすよまず(詳しくはミスターサー書の「清める鬼と屍」

を見てください) まずは湯呑一杯分飲んでからで・・・」

チヨウキ「いいぞ」

僕が赤色の液体を入れたコップを渡し、チヨウキさんはそれを一  
気にのむと

チヨウキ「ウマイツ!! (CV:大塚明夫)」

ジンキ「ウソダンドコドーン!!・・・破壊力は三倍(九曜さ  
んで実験した結果)なのに・・・それを笑顔で飲み干すとは流石だ・  
・・・で、ドリンクくれ」どうぞどうぞ」

チヨウキ「〜」

チヨウキさんはドリンク「赤い彗星」(九曜さんの声で思いつい  
た名前)の入ったペットボトルを鼻歌をうたいながら戻っていった・  
・・・まじかよ。

僕は席に戻って焼き魚をほじって食べていると、顔を赤くした瑠  
妃さんが来た。

瑠妃「あの刃さん・・・お酌してくれますか?」

その時、蒼天のケンシロウ並みの僕の嗅覚が瑠妃さんの口からア  
ルコール反応を検知した。

ジンキ「ちよつと瑠妃さん!? お酒飲みましたか?」

瑠妃「そんなあ、ジュースを飲んだだけです。のどがスカツとす

る変わったジューズですが」

ジンキ「それがお酒ですよ！？しかも今瑠妃さんが持っているのも辛口の日本酒の一升瓶じゃないですか！！誰だよ瑠妃さんにお酒を飲ませたのは！旦那か！？」

クロキ「ちょ、違うぞ！！おれならミツキに飲ます！！」

ジンキ「なら父さんか！？」

エイキ「俺なら毒を入れるぜヒヤッハー！！」

ジンキ「ならっ・・誰だ！！後で父さんには原液で赤い彗星を飲ます！！」

ヒビキ「あ、ごめん俺が飲むはずだったテキーラを飲んじゃった。しかもストレートの」

ジンキ「ウエエエエエエエエエエエエエエエエ！？！？！なんでここにあるの！？それになんで瑠妃さん倒れてないの僕も前飲んでしまったときぶっ倒れたのに！？」

瑠妃「いいじゃないですか・・それよりもお酌してくださいよ！！」

ジンキ「ええ！？・・はあ、しょうがないほれその瓶貸して、」

僕は瓶を受け取るとお酒を徳利に移し、鬼の力ですぐに温めた（アルコールは温かい方が酔いが早く回るらしい・・作者の父談）。僕は次におちよこを瑠妃さんに渡し

ジンキ「どうぞどうぞ・・・」

瑠妃さんはそれを飲むと僕に渡してきた・・・は？

瑠妃「私あれから人間の文化について調べました。すると西日本の方で自分の杯をお酌をしてくれた人に渡し、その杯にお酒を入れるという習慣があるのを知りました。しかもそれは尊敬とかのいいで使います・・・私は刃さんを尊敬していますそしてあなたが好きです！！だから私の杯を受け取ってください！！」

僕は周りの視線が痛く、仕方なくそれを受け取るうとしたがほろ酔い気分のヒビキさんが

(ちなみにこの時ヒビキさんの周りには酒樽が転がっていた。)

ヒビキ「となると二人のファーストキスは間接か〜」

火に油いや、タンクローリー・・・いや、オイルタンカーをぶち込んでくれたよ！！それで酒がかなり入って頭がうまく回らない瑠妃さんは

瑠妃「そういえばまだキスがまだでしたね・・・なら今ここでそれを実行します！！」

ジンキ「いや、なぜそうなる！！」

全員「oooooooooooooooooooooooooooo！！！！」

「oooooooooooooooooooooooooooooooooooo！！！！」

サバキ「オツシャーやれやれえい！！石割、バンキ、エイキを押

さえる!!」

バンキ「わかりました先生!!」

石割「エイキさん、すいません!!」

エイキ「ええい!放せ!!あの女に取られるくらいなら俺が...

石割「全力で止めます!!」

ジンキ「ヤ、ヤバイ...みんな酔っているじゃないか!!...こうなったら小暮さ...」

僕が小暮さんの方を見ると口の端から赤い液体を流しながらおやつさんと小暮さんが気絶していた。近くには...

イブキ「特殊ミッション...小暮さんとおやつさんを酔わせ、俺たちに説教させ、」

キョウキ「説教でのどが渴いたときにさりげなくジンキドリンクを飲ませる...」

イ・キョ「」ミッション...コンプリート。d)。(」

と僕にサムズアップしていたイブキさんとキョウキの兄貴がいた。

ジンキ「ちきしょおおおおおおおおおおお...」

すると僕の体に黒いパツと見ナルガクルガ素材の武器にみえる羽が巻き付き、身動きが取れなくなり、顔を両手で抑えられ、うつつらとほほが赤くなつた瑠妃さんの顔が近づいていく……

ジンキ「ま、待て！！ここは人目が多すぎる！！恥ずかしいからやめろ！！」

瑠妃「なにをいつているのです！いつも一緒の部屋で寝ているのに少しも襲つてこないじゃないですか！！」

クロキ「はっ！？……一緒の部屋！？」

瑠妃「私はいつだつてかまわないから寝るときは日菜佳さんからのアドバイスでブラを外して、いつもあてていたのに……我慢できません！！刃さんが攻めないなら……私から攻めます！！」

チョウウキ「おいおい……ノーブラつて俺の奥さんでもしないぞ……」

僕は近づく瑠妃さんの顔に震えているハートを落ち着かせ、

ジンキ「そりゃあ……恥ずかしい話羞恥心がありますし、僕はそつちのことに關しては疎いものですから……それに嫌われたくないし」

すると瑠妃さんは

瑠妃「私は……刃さんならどんな命令をされれも構いません！むしろ命令してください！！私はどんな命令でもやってみせます！！」

そうはつきりと言ったが会場が凍りついた。

ヒビキ「え……？」

イブキ「もしかしてDM？」

ザンキ「……」

周りからの視線が集中していると小暮さんが瑠妃さんの背後に立ち、

小暮「よっと」

トンッ

瑠妃「あふっ」

当身をして気絶させた。するとおやつさんが立ち、

勢地郎「さて、ヒビキ君とジンキ君、ザンキ君にトドロキ君、それと蟲鬼組のみんなは隣の部屋を使ってね。」

と顔は笑顔で言っていたが殺気……いや、むしろ覇気が出ていて目が笑っていない。

小暮さん「刃鬼、これ……借りるぞ。」

小暮さんは僕の音角を持ち立ち上がった。僕は瑠妃さんをお姫様抱っこして

ヒビキ「みんな頑張れ、シュッ」

ザンキ「トドロキ、急げ!」

トドロキ「日菜佳さん、すみませんッス!」

クロキ「大丈夫かミツキ?」

ミツキ「な、なんとか・・・おやつさんと小暮さんのおかげで少し酔いが覚めました。」

チヨウキ「このドリンクだけは死守せねば!」

僕達が出ると最後に聞こえた一言は

勢・小「少し・・・頭冷やそうか?」

全員「すいませんでしたあああああ!」

番外編 P A r t 2 「輝、そして猛士の嵐とクスハドリリンクが舞う大宴会・前編」

初の恋愛描写と尊敬する先輩との試合の後編へ続きます。

番外編 P A r t 2 「輝、そして猛士の嵐とクスハドリリンクが舞う大宴会・後編」

今回もミスターサー先生の「清める鬼と屍」から蟲鬼組がゲスト  
出演します！！

次回からは原作に戻ります！！それでは後編をどうぞ！！

番外編 P A r t 2 「輝、そして猛士の嵐とクスハドリリンクが舞う大宴会・後編」

番外編 P A r t 2 「輝、そして猛士の嵐とクスハドリリンクが舞う大宴会・後編」

瑠妃「ん？・・・私は・・・？」

私が目を覚ますと目の前にジンキさんの顔があった。

ジンキ「おっ、目が覚めたか？」

瑠妃「私は・・・あ！すいません！！」

私は酔っていたとはいえあんなことしてしまった・・・これは嫌われてもしょうがないですね。

瑠妃「ジンキさん、あんなことをして、ごめんなさい！！」

私はジンキさんから離れて謝ると

ジンキ「いや、こっちこそすまない。瑠妃さんにつらい思いをさせて・・・」

と言って謝った。続けてジンキさんは月を眺めながら

ジンキ「僕は今まで恋愛なんてできないと思っていたんだ。まあ、この仕事に命の保証なんてほかの仕事よりないからね。でもこうして瑠妃さんが僕のそばに立ってくれているでも・・・瑠妃さんの方こそ僕のこと嫌いになっちゃった？」

瑠妃「そんなことはありません！！私だってジンキさんがいてくれたおかげで毎日が楽しいし、今までこうしたことがないので嬉しいです！！それなのにジンキさんのことを嫌いになる要素さえありません！！」

私はそういい、大声で言ったことにはっとして口を押えたが、ジンキさんは私に微笑み

ジンキ「そうか・・・それを聞いて安心したよ。・・・よし、瑠妃さんちよつと耳を貸して」

私はなんだろうと思いい右耳を近づけると耳ではなくほほに何か当たるのを感じた。私は少しの間固まったがはっとしてジンキさんの顔を見ると真っ赤にしながら

ジンキ「す、すまないが・・・今はこれで勘弁してくれないか？接吻はまだ恥ずかしくてできない！」

私は真っ赤にして土下座のジンキさんに近づき、

瑠妃「ジンキさん、顔を上げてください・・・」

ジンキさんは顔を上げたとき、額にキスをした。すると・・・ジンキさんは

ジンキ「わが生涯・・・一片の悔いなし！！」

と言って気絶するとその時部屋にザンキさん、ヒビキさん、トドロキさんの三人が入ってくると

「ビビキ」ちょ！？ジンキ！？」

ザンキ「まさか・・・ここまで初心とは・・・」

トドロキ「いや、そんな感想を言う前にジンキ君起こしましょうよ！・・・」

すると庭の方から

チヨウキ「蝶のように舞！」

ミツキ「蜂のように刺し！」

クロキ「蠅螂のように喰らう！」

チ、ミ、ク「我等！蟲鬼組！いざ！まかり通る！」

クロキさんたちが来て

クロキ「ここは俺たちに任せてもらおう！！」

と言って庭に引きずり出すとミツキさんは水が入ったバケツを持ち

ミツキ「すいません！！」

ガラッ・・・バシヤ！！

まずミツキさんが氷水をぶっかけ、

チヨウキ「目を覚ませええ!!」

バシバシバシバシ!!

次にチヨウキさんが往復ビンタを食らわせて

クロキ「もういつちよおお!!」

とどめと言わんばかりにクロキさんが消火栓から引っ張り出した水をジンキさんにあてると

ジンキ「冷たくて痛アアアアアアイ!!」

といつて起き上がった。

蟲鬼組「ヨシ!!」

トドロキ「えええええ!!?いいんですかそれで!」

クロキ「いいんだよ!!」

ジ・ザ「グリーンだよ!! H A H A H A H A!!」

ジンキさんたちが笑っているとおやっさんと小暮さんが入ってきた。

おやっさんが少しのつまみと

おやつさん「お、まだ大丈夫のようだね」

小暮「全く・・・よってたかつてキスをさせようなどと・・・全く持ってなさけない!!」

ザンキ「やけに早かったですね・・・まだ一時間ぐらいしかたつてませんよ。」

ザンキさんは時計を見ながら言う僕たちは驚いたすると小暮さんは空の2リットルのペットボトルを

小暮「あまり時間をかけるのもなんだからあのドリンクの原液を一人一杯ずつ飲ませた。」

おやつさん「そういえばクロキ君たちには名乗りがあったんだね。」

クロキ「ええ、一応ジンキにもありますよ。」

ミツキ「ク、クロキさん!?!何を!?!」

チヨウキ「小暮さんの前でそれを言うのは・・・」

小暮「よし、ジンキそれを見せてみる!!」

ジンキ「は、はい!!」

僕は立ち上がって息を吸い込むと

ジンキ「神の器の一つ、刃<sup>やいば</sup>！  
それを使う鬼の刃鬼！！  
人を護る為！！アナタ達を斬る！」

僕は言い終わると小暮さんを見た小暮さんは

小暮「ふむ、「人」のところを「愛する者」にした方がいいのじゃないか？」

蟲鬼・ジ「「まさかのアドバイス！？」」「」

僕たちは驚いていると瑠妃さんがおやっさんい話しかけていた。

瑠妃「小暮さんはいつもは厳しいのですか？」

おやっさん「というより鬼の皆は小暮さんに苦手意識があったけどジンキ君は厳しいとわかって修行をお願いしたからうれしかったんだよ。」

ヒビキ「へ〜そういえばジンキ「はい？」小暮さんに輝を見せたら？ある意味小暮さんのおかげでなれたんだから」

ジンキ「そうですね！では・・・」

僕は音角と音弦を鳴らし額に持って行った。そして

刃鬼輝「ハア！！」

変身すると小暮さんとおやっさんは

小暮「ほう、なかなかの力だ。」

おやつさん「綺麗だねえ・・・今も光っているけど」

僕は自分の体を見るとうつすらとだけど光っていた。すると響鬼さんが紅になって

響鬼紅「よし、刃鬼俺と模擬戦をしよう。」

刃鬼輝「いや、なんで!?!」

小暮「私も響鬼と刃鬼力に差があるのかどうか知りたいからなやってくれ。」

おやつさん「ここは幸い旅館の人たちは全員猛士で、山の中だから安心してね。」

クロキ「頑張れよー刃鬼」

ザンキ「ルールは簡単先に参ったといったほうが勝ちちなみに音撃棒はそれぞれ片方ずつのみ使用が可能だ。」

僕と響鬼さんは庭の真ん中に立ち、

おやつさん「では・・・はじめ!!--」

おやつさんがさういうと僕は響鬼さんに接近し

刃鬼輝「はっ!!--ふん!!--」

拳を繰り出すが響鬼さんはそれをかわし僕の腕をつかんで

響鬼紅「よつと!!」

僕を投げ飛ばすが僕は体をひねり着地して響鬼さんをむくと響鬼さんは音撃棒を取り出し力を込めた

響鬼紅「ハアアアアア・・・」

すると火炎剣を生成する僕も少し遅れて剣を作るが白い炎ではなくまさに光の剣ができた。僕はそれに驚いていると

響鬼紅「よそ見をするな!!」

響鬼さんは剣を振りかぶった僕はそれを剣で受け止めて、つばぜり合いが起ころうが次第に僕が押し始め、周りのみんなは

クロキ「うそっ!?! 響鬼さんを押ししている!?!」

チヨウキ「さすがバケガニを持ち上げた男・・・」

ザンキ「力だけなら上のような・・・だが、」

響鬼紅「闘いは力だけじゃ勝てない!!」

刃鬼輝「うわっ!?!」

響鬼さんは火炎剣をなくすことで僕の剣は空を切り、力に慣れない僕は体のバランスを大きく崩し

響鬼紅「てりゃー!!」

僕の腹に膝蹴りを食らわせさらに顔面に拳を食らわせた。急いで立ち上がると

響鬼紅「おりゃー!」

飛び蹴りが来て僕は腕でガードするが飛ばされた僕は木にぶつかり

刃鬼「ぐふっ!?!」

輝から通常に戻り、喉元に火炎剣を突き付けられた。

おやつさん「勝負あったね・・・響鬼君の勝ち」

クロキ「あゝまだ慣れてないか。」

ミツキ「やっぱり強いのですね響鬼さんって」

ザンキ「まあ、関東では最強の鬼だからな」

すると顔の変身を解除したヒビキさんは真面目な顔で

ヒビキ「いや、俺もジンキとの罅迫り合いの時あれば本気でいったけど押されたんだ。」

トドロキ「ということは輝はヒビキさんより強いことですか?」

小暮「違うな・・・おそらくは腕力に特化した姿とさえはいいだろっ。」

小暮さんはそう言うとおやつさんは

おやつさん「おそらく輝ならバケガニの甲殻も拳で壊せるかもしれないけど・・・問題は」

チヨウキ「脚力と・・・防御力ですね・・・」

チヨウキさんの一言におやつさんがうなづくと思議  
そんな顔で

瑠妃「え〜つとなぜ力が強いと速さと防御力に問題があるですか？」

ザンキ「力が強いとどうしても十分な勢いで放つのに足を踏んばってやらないと自分の力に体のバランスを崩し、下手をすれば普通の姿でやった方が威力が高いかもしれん」

小暮「それにヒビキのように経験があるものならまだしも、刃鬼は未熟なところが多く固い甲殻を持つものに対して闘うとなると懐に入って攻撃する間に攻撃を食らうことを考えなければいけない。また複数相手ならほかの鬼よりも多対一が得意な刃鬼でも辛いものがあるな。」

ジンキ「実戦経験は鍛えるばかりではどうしようもありませんね。  
・公安の皆さんの力も鬼の力を使ったら意味がないですね。」

瑠妃「そうですね・・・私でもこればかりは・・・」

僕たちは考えていると

ヒビキ「あ、でも陽海学園の理事長なら何とかなるかも！」

というとすぐそばの陰から

理事長「呼んだかね？」

クロキ「あぁ！」

ジンキ「いいっ!？」

ミツキ「うう!？」

瑠妃「え!？」

トドロキ「おおお!？」

と理事長が出てきた。すると理事長は

理事長「修行がしたいのかねジンキ君？それも今までとは違ったものを」

ヒビキ「天明さん、修行方法あるんですか？」

理事長「あることはあるが・・・果たしてできるかどうかかわからない。それに命の保証はないよそれでもやるかい？」

理事長は僕に向かって言った・・・確かに今までやってきた修行は小暮さんには申し訳ないが“人間”の修行、僕はこれから相手するのは魔化魍だけでなく下手をすれば魔化魍より強い相手が来るか

もしれないその時に僕は友を、家族を、愛する者を守れるかどうか  
わからない。だから！！

ジンキ「お願いします！！輝を使いこなせるように！！」

理事長「そうかい・・・なら学園に戻りひと段落したら始めよう・  
・それではまた学園で」

理事長はそう言いながら木のそばに行き、消えた。すると小暮さ  
んが僕の肩に手を置くと

小暮「ジンキ、お前がそう言ったから私は何もしないだが！！も  
しあっちの修行の途中で弱音を吐いてみる、私がお前に活を入れる  
からな！！」

クロキ「俺も時々遊びに行くからな！！」

ミツキ「僕も刃鬼さんに負けないように頑張りますよ！！」

ジンキ「皆さん・・・ありがとうございます！！」

ヒビキ「もし、逃げ出そうとすれば鬼神覚声使っからな  
」

ジンキ「それだけは勘弁してください！！」

ヒビキ「ハハハハハ・・・」

ザンキ「フッ・・・」

小暮「ククククク・・・」



僕はその一言に固まると瑠妃さんは

瑠妃「だ、駄目ですか！？やはりなにか問題でも！？（涙目＋上目使い）」

ジンキ「いや、その・・・問題はあることはあるけど・・・別に大きな問題とかそういうのじゃなく、ただ・・・」

瑠妃「じゃあ、構いませんね！（笑顔）」

と太陽よりまぶしい笑顔を向けられ、僕も言い訳をしようと思えば、フル回転させるが思い浮かばず、

ジンキ「ハ、ハイ・・・」

その日の晩僕たちは向い合せでしかも瑠妃さんは抱きついてきたので腰だけを引いて僕は寝た。だけど寝不足にはならなかった・・・なんでだろ？慣れたのか？緊張の糸がマッハで切れたからです。

今回は猛士報告は無しで、そのかわりちよつとした小話をどうぞ

ジンキと瑠妃が寝てから二人の部屋の前に影が三つ

日菜佳「よし・・・あの二人の寝顔を撮って、ジンキ君の部屋に飾ろう」と

香須美「ちよつとなにやっているのよ!！」

日菜佳「姉さん、いいじゃないですか、二人の記念を収めても」

イブキ「そういえばジンキ君って小学生のころ女の子を助けて大きくなったら迎えに行くといわれたことがありましたよね？」

香須美「そんなこともあったね〜そういえばその時いじめていた男子を関節技で撃退したとも聞いたわ。」

イブキ「あ、今ディスクアニマルの情報ですと向いあわせで寝ているそうです。」

日菜佳「よし、突撃「待ちなさい」・・・はい？」

日菜佳が扉を開けようとする後ろから声がして後ろを向くと小暮さん、おやつさん、斬鬼さんが立っていた。

小暮「さて・・・お前たちは懲りてないようだな・・・」



第7話「小学生の頃の思い出つてふとした切欠に思い出すんだよね。 ・前篇」

第7話は白雪みぞれ編ですが、あの人が活躍します!!後、前篇ではみぞれさんの出番はそんなにない。そして瑠妃さんはもっとない!!!ヒロインなのにごめん!!

第7話「小学生の頃の思い出つてふとした切欠に思い出すんだよね。 : 前篇」

第7話「小学生の頃の思い出つてふとした切欠に思い出すんだよね。 : 前篇」

僕は夢を見ると結構はつきり覚えれるタイプなのだが、今日見た夢は小学生のころ確か父さんの関係で北の方に行ったことだ。学校の帰りに一人の女の子を数人の男子がいじめていてそれから女の子を関節技で守った夢だ。

僕がおぼえているのは最後に女の子が何か僕に言った事とその女の子はチュッパチャップスらしきものをなめていた夢だ・・・しかしなぜかその夢では途中からなぜかだよ父さんが出てくるんだよ。もちろん父さんは喧嘩はしてないよ？女の子のけがを治療していたはず・・・うん、いじめた子を魔化魍をにらむように見ていたわけではない・・・無い筈だ!!

刃「はあ・・・またあの夢だ。」

僕は布団から起き上がると時計を確認すると携帯に電話がかかってきた。僕はそれを見ると「瑠妃」と書かれていたすぐに通話ボタンを押した。

刃「もしもし、刃です。」

瑠妃「刃さん、おはようございます。」

刃「瑠妃さん、おはようで、どう？仕事には慣れたかい？」

瑠妃「ええ、といつても書類だけですから刃さんとした仕事の方が慣れるのに時間がかかりました。」

刃「フツ・・まあ、そうでしょうね。ああ、そろそろ公安の人たちが来るかもしれないから切るね。」

瑠妃「もうですか・・では仕事の時に会いましょう。」

刃「うん、また瑠妃さんの料理が食べたいね・・じゃあね」

僕が電話を切るとインターホンが鳴り、ドアを開けると公安の制服のモヒカン達（以下モヒ安）が四人立っていた。

モヒ安A「ヒヤッハー御迎えに上がりましたぜー！！」

モヒ安B「今日もいい天気だぜー！！」

モヒ安C「誰もいないのに電気がついてあったところがあったのでこまめに節電してやったぜー！！」

このようにモヒ安の方々は口調は乱暴だが、実際は優しい人たちである。現にさっきのセリフは全部近所迷惑にならないように小声であったのだ。

僕は食堂へ行くと、九曜さんが席を取って待っていた。その隣には少し警戒している顔の月音君がいた。僕は日替わりA定食を持っていくと

九曜<sup>カレ</sup>「おはようございます、刃さん」

刃「おはよう〜そういえばドリンクの実験台にしてごめんね。」

九曜「いえいえ、しかし復活した後、スピードが30%アップしました！」

刃「まさに赤い彗星！・・・九曜さん、ペンネームとかで赤い彗星とかシャアという名前で活動してないよね？」

すると日替わりB定食を食べていた月音君が話しかけてきた。

月音「そういえばなんで刃君は公安と仲がいいの？・・・九曜先輩の変わりように銀先輩が怖がっていたよ？」

刃「いや、僕が月音君達を助けるために公安に殴りこんだでしょ？」

月音「おかげで帰りが楽だったけどそれがどうかしたの？」

刃「その時に僕の闘っている姿に惚れた人がいて、いろんな人に話すうちに背びれ尾ひれがついて噂ではファンクラブもあるそうで・  
・女子限定と男子限定のふたつが」

月音「はははは・・・嘘じゃないよね？」

モヒ安A「ヒッター嘘じゃないんだぜこれが!!」

モヒ安B「女子限定の方では隠し撮りした寝顔写真が飛ぶように売れていると聞いたぜ!!」

モヒ安C「ちなみに主犯の写真部の女子は逮捕しました!!」

刃「よろしい、それと写真は？」

九曜「私が焼却処分しました。それとこれは学園祭における警備体制の配置図です。」

僕は九曜さんからメモをもらい、それを少しだけちらっと見ると

刃「ありがとうございます、お昼休みにでも改善点を書いたメモを公安の人にでも渡すよ。」

九曜「では螢系けいとにでも渡してください。では私たちはこれで」

刃「はいはい」

九曜さん達はトレイを返却コーナーに戻し、食堂から出て行った。すると月音くんが

月音「それでも、九曜先輩の変わり様はすごすぎない？」

刃「多分、音撃をした時に清めの音で一時的に心が浄化されたの  
と思っただけだ・・・」

月音「違うみたいだね・・・あ、新聞配らないと急ごう!!」

食堂に備え付けの時計を見て慌てると僕も急いで食べ終わらせ

刃「おお!!今回は特集版だから!!」

月音「うん!!刃君は今回もよろしく!!」

刃「ああ！！全て・・・配ってやるぜ！！」

僕達は校門前に行き、胡夢ちゃんから配る分の新聞をもらい、それを配りに運動場（朝練をしている人達に配る為）に向かったのだが・・・

刃「なぜ野郎に追っかけられなければいけないのだ？しかも戦闘狂とあっち系の人に！！」

男A「待てええええええ俺と勝負しろおおおおおおお  
！！」

男B「九曜と公安を一瞬で滅したその力本当かどうが見せるおお  
お！！」

オカマA「お願い私と付き合って」

オカマB「逃げるのね・・・嫌いじゃないわ！！」

僕は新聞を配りながら走っていると前から顎が立派な人が立ちふさがった。銀先輩の話では名前はチョッパ<sup>りきいし</sup>ー力石だったような・・・

力石「おい、勝負しやがれコノヤロー！！」

刃「断るといえば？」

力石「食らいやがれコンチキショー！！」

とフライングボディーマタックをやってきたが、

刃「そんな技をしかけたら・・・隙だらけじゃないか!!」

僕は飛び上がり、力石さんの顔を踏んづけ、さらに背中を蹴り、追っかけてきた奴らにぶつけた。

オカマC? 「アアン、ヒドゥーイ!!」

オカマB「でも・・・嫌いじゃないわ!!」

オカマB・・・それ言いたいだけか!? それしかセリフがないのか? と一瞬思ったが追手が来るのが怖かったので、すぐその場を後にした。

その後新聞を配り続けたが追っかけられていた間に練習を終えてしまった部活があったため一部余ってしまった。僕がみんな元へ戻りこの事を言い、謝ると

紫「気にしなくていいです」

萌香「災難だったね・・・」

胡夢「うわあ・・・」

刃「でも、月音君も大丈夫か? かなりカサカサという効果音が似合う顔になっているが、」

月音「う、うん大丈夫」

胡夢「そっだきいてよねえ!! また萌香が血吸ったのよ!!」

刃「すまん、僕もできることなら血を分けたいが、僕の血は清  
めの力が強すぎて萌香さんにあげるのは無理なんだ!!くう!清め  
の力が強すぎる自分が恨めしい!!・・・それと話変わるけど原液  
の赤い彗星飲む?」

月音「いや、いいよ!!死にたくないし!!」

僕は赤い彗星を片手にじりじりと月音君に近づくと萌香さんが

萌香「そつだ!!また打ち上げをしない?夏休み特集版成功の打  
ち上げ!」

刃「いいね、あ、でも一部残っているけど・・・まあ構わないか  
!!」

僕たちが和気藹々としていると

??「...ふうんへんなの、ずいぶん仲良しだね新聞部って」

僕たちはその方をむくと一人のピンクと黒のニーソックスでチエ  
ツクのスカートで口にキャンデー?を加えていたの女の子が立って  
いた。さらにその女の子は

女子「馴れあっちゃって...わかんないなあそういうの」

と言い、月音君に近づいた・・・この時僕は

刃「(頼むから公安は来るなよ!!!!)」

すると月音君をまじまじと見た女の子は

女子「君が月音君か思ったより可愛いね・・・それと新聞余ってる？」

刃「ああ、それならここに一部余ってますからどうぞ」

女子は新聞を受け取ると僕の顔をじくじくと見てきた。すると

女子「君、前にどこかで私と会ったことある・・・？」

と言われたがこっちは君に見覚えがあるがさすがに夢の中で見たことあるというのは気が引けるので

刃「いや、心当たりはないね・・・他人の空似でしょう。」

女子「そう・・・それじゃ新聞もらっていくから」

と言い、去っていった。

しかしその後教室にて・・・

猫目「みなさん、おはようございます！夏休みも終わって二期になりました。さっそくですが最初のHRを始めましょう！」

相変わらずハイテンションだな～と思っていると

猫目「二期は学級委員長を決めたいと思います！」

すると後ろの方の椅子が動く音が聞こえ

??「私は青野月音君を推薦します。」

僕はその声に聞き覚えがあるしかもついさっき、僕は急いで後ろを振り向くと今朝の女子がいた。

月音「き、君は今朝の・・・同じクラスだったの!!」

女子は頷き座ると

月音「でも、俺よりも刃君の方が適任だと思います!!」

と言った。僕はゆっくりと席から立ち上がると月音君に

刃「月音君・・・僕は公安のまとめ役をしているのですよ?（しかも理事長からの仕事もあるし）その上に仕事を与えるとは君は僕を過労死させたいのか!!」

と斬鬼さん直伝猛式鬼睨みをした。月音君はびびり、猫目先生は

猫目「まあ、刃君は忙しいですから彼以外でお願いしますね。」

萌香「頑張つてね、月音!!」

と萌香さんも言ったが後日投票をして決めるそうだ。そして昼休み僕は警備体制の改善点を書いたメモを九曜さんのいるクラスへ向かった。その途中螢系さんに会いメモを渡し、その場を立ち去ろうとしたが、

螢系「あの、刃さん!今度良かったら私の料理を食べていただき

ませんか？」

と顔を赤らめながら言っていたが、一応僕には思い人（彼女）がいるので優しく断っておいた。

すると、赤らめていた顔が一瞬で元に戻り

螢糸「よし、噂は間違いのないようね・・・では早速報告を、」

ガシッ！！

と走り出そうとしていたので僕は頭を掴み、（黒い）笑顔で

刃「ねえ？噂ってなんだい？僕に教えていただけなかな？螢糸

“先輩”」

すると螢糸さんの顔は青ざめていき（公安の人達の事は基本年上であつてもさん付けで呼ぶようお願いされたからだ）、周りの生徒も僕が立っているところから近づかないようにしていた。螢糸さんは涙目で

螢糸「その・・・風の噂で彼女がいると聞いたものでもし本当なら見つけ出そうと・・・」

刃「一応はつきり言つと僕に彼女はいるよ。で、もし見つけたら・・・どうするのかな？」

螢糸「その・・・別れてもらおうと・・・もしそれが駄目なら最悪闘いを・・・」

その一言に僕は殺気を込めながら

刃「そうかそうか・・・なら、その人に言うておいてください。  
もし決行しようとするのなら消すとね!!」

僕はそついいながら手を放すと螢糸さんは

螢糸「は、はい!!」

と言つて走つて逃げて行った・・・空気が凍っている中、僕はその場を後にした。

↓放課後（キングクリムゾン!!）↓

僕は九曜さんと呼ばれて公安本部に行く途中購買の前を通りかかると今朝の女の子と月音君を柱の陰から見ている萌香さんを見かけ、萌香さんは僕に気が付いた。とりあえず小声で話しかけた。

刃「萌香さん、どつたの？」

萌香「刃君、実は・・・」

話を聞くと学級委員長の件で喧嘩をしまして、月音くんは最後に一人でもやっつけていける云々と言つたらしいがとりあえず白雪さん（萌香さんから教えてもらった）の手帳を見て顔だけ引いている月音君に

刃「このヴァカが、バカではなくヴァカめが!!人間や妖が誰の助けも借りずに一人でやっつけていけると思うな・・・叩き斬つてやるわ!!裏萌香さん風に言うなら身の程を知れだな（小声です）」

萌香「刃君、落ち着いて・・・ね？」

刃「何を言うか萌香さん！！これをもし僕のお師匠さん達が聞いたらフルボッコは間違いないよ！！僕はそう思ったら死ぬものとさえ考えている・・・極論だろうけどこう考えないと本当に死んじやうかもしれないから。それに・・・」

萌香「それに・・・？」

刃「男の子は誰かのために強くなれると聞いた事がある・・・もちろんな女の子も見ていただけじゃはじまらないけどね・・・まあ、月音君のことだどうせ厄介ごとに巻き込まれるさ。それじゃあね。」

僕はそういつてその場を後にした・・・急いで

（公安本部）

僕は公安に行くと九曜さんがあわてた表情で来て、

九曜「あの、螢糸がものすごく怯えていてメモを渡してくれないのですが・・・何をしたのですか？」

と言ってきたので僕は

刃「いや、僕には彼女がいるのは九曜さんには言っていたよね？」

九曜「はあ、確かに前に携帯の写真を見せてもらったのは覚えてます。・・・そういえば噂になっていましたね。」

刃「それで恐らく螢系さんは何かしらのファンクラブに入っているようで僕の彼女を消そうとしたからそれを少しだけ注意しただけだよ。でもやりすぎちゃったかも」

九曜「では、治すことはできますか？むしろ治してください！  
螢系は幹部なのでかなり重要な仕事を遂行中なのですよ！！」

僕が螢系さんの様子を見ると部屋の隅で

螢系「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめ  
んなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめ  
んなさいごめんなさいごめんなさい……」

刃「あゝ……僕はできないけど明日夢兄さんならいけるかも附  
属病院に安達明日夢っていう新人医者がいるから呼んできてくれる  
かな？」

九曜「わかりました！！では早速……いけ！！」

モヒ安「……ヒヤッハー！！」「」

（数分後）

明日夢「いきなりモヒカンの黒い学ランの人達に連れ去らわれた  
から何事かと思っただらそういうことだったんだ。」

刃「すいません兄さんが忙しいことはわかっていたのですが、患  
者の様子だと僕がいつでも駄目かと思ひまして……」

兄さんは部屋を除くと

明日夢「刃君あれはやりすぎ、でも何とかなるかも・・・」

九曜「本当ですか！？先制！！」

刃「落ち着け九曜さん！せんせいの字が違うぞ！！」

明日夢「それじゃあ・・・いってみるよ」

そう言って部屋に入って数分後ごめんなさいの声は止まり、そのかわりに・・・

明日夢「ちよつと落ち着いて！なんで糸吐くの！？僕はおいしくないよ！！アアアアアアアア！！」

と兄さんの叫びが聞こえたので僕と九曜さんが入ると糸でがんにがらめにされた兄さんに抱き着き頬ずりしている螢糸さんであった。

九曜「すごい・・・」

刃「兄さん・・・なにしていたの」

明日夢「いや、昔ヒビキさんと話したことを少し言っただけなんだけど・・・」

刃「恐るべしヒビキさん！！」

螢糸「もう一生ついていきます！！」

その後僕と向き合わせ大丈夫になったのを確認して九曜さんにメ

モを渡し、明日夢兄さんは公安に胴上げをされながら病院に戻っていた。

僕が教室に戻っていると凍った湖の上で新聞部がいたので駆け寄ると、月音君が白雪さんに氷漬けにされかけたのを萌香さん達が助け、白雪さんに。その時僕はあのことを思い出した。

刃「そういえば、月音君、君は一人でやっていけると言ってたそうだね……」

月音「うん、でも今はそれが間違いだと気づいたよ。」

刃「そうかそうか……だが説教だ!!そこに正座しなさい!!」

胡夢「で、でも今は反省しているからいいじゃないの?」

刃「甘い甘い甘い!ガムシロップを限界超えてまで入れたアイスティーよりも甘いぞ!!胡夢さんも正座!!あ、他の人たちは戻っていいよ。大体月音君はクドクド……」

月・胡「つ、冷たい……(、(、(、(」

説教は氷が割れる直前まで行われ、そしてその日の晩から明日夢兄さんの部屋に螢糸さんが来るようになり次の日、白雪さんがまた不登校になったそうだった。

第7話「小学生の頃の思い出つてふとした切欠に思い出すんだよね。 : 前篇」

陽海学園附属病院の院長からの一言

院長「安達君、許可は出したが行きは持ち上げられて拉致られたのに帰りは簀巻き状態で胴上げされて帰ってくるって何があったの!?!」

返答

明日夢「いえ、僕もさっぱり・・・ただ精神的に重症の人を治しただけです。今、つきまとわれています。」

螢糸「明日夢さん、私とお付き合いを!?!」

明日夢「ジンキ君助けて!?!」

第7話「小学生の頃の思い出ってふとした切欠に思い出すんだよね。 : 後編」

さて後編です。後編ではなぜか刃が古畑っぽくなっていますが気にしない方向でお願いします。

それではどうぞー!!

第7話「小学生の頃の思い出つてふとした切欠に思い出すんだよね。…後編」

第7話「小学生の頃の思い出つてふとした切欠に思い出すんだよね。…後篇」

僕は九曜さんと手合せしていた。もちろん僕は輝、九曜さんは最強フォームでの試合・・・と言ってもお互いの技をぶつけるだけといったものだが、

九曜「臃・・・火炎車!!」

九曜さんは臃・火炎車を放ち、僕は同時に飛び上がり、足に光の力を込めて

刃鬼輝「光撃蹴!!」

と蹴ると火炎車は消えた。

九曜「全く、こつもあっさり消されるとは・・・自信がなくなりますよ。」

刃鬼輝「いや、九曜さんの炎も最初と比べると強くなっていますよ・・・収束率を上げたのかい?」

九曜「ええ、その通りですが、しかし後何か足りないのですよ。」

僕達が少し考えると僕はあることを思いついた。

刃鬼輝「ねえ、臃火炎車の回転って目標に向かって平行の回転で

すよね？」

九曜「ええ、そうですが・・・」

刃鬼輝「それを垂直の回転に変えるのはできる？」

九曜「もちろんですが・・・何を？」

刃鬼輝「なら、炎を一つのリング状にして投げてみてくれない？」

九曜さんは頷くと炎を収束してリング状にすると僕に投げた。僕は鉄パイプを取り出し、バットのスイングの要領で振ると、

スパンツ！！

と切れた。しかも・・・

刃鬼輝「戻ってきたああアアアアアアアアアア！！」

九曜「コントロールできたのですね・・・」

僕は走り烈光を取り出し閃光剣を生成して斬ろうとしたが、斬れたのは

刃鬼輝「斬れたあ！！（0目0；）」

烈光の方だった。炎は消えると九曜さんは

九曜「すいませんでしたあ！！修繕費はこちらで出しますので・・・

」

と言ってきたが僕は頭の変身を解除して

刃「いや、これの材料に予備があるから大丈夫だしこの木の部分は屋久杉だから買うとしたら高いよ？」

九曜「凄いですね・・・よく取れましたね。」

刃「形式的には力を借りているだけね・・・しかも霊木のだからそのまま捨てるのも気が引けるから家具の修繕に使うんだよね・・・後、お守り作ったりするね。今度作ってあげようか？御利益は結構いいから」

九曜「ありがとうございます！！それとさっきの技の名前はどのようなですか？」

刃「うーん、八つ裂きの火炎車は？」

九曜「すこし著作権にひっかかりそうな名前ですね・・・烈・火炎車はいかがでしょうか？」

刃「うんいいかもね。それじゃあ時間ですから・・・着替えますか！！」

九曜「はい！・・・しかし刃さん、意外ですよね・・・」

刃「ん？何が？」

僕が着替えを取り出そうとしたとき九曜さんが言った。

九曜「下着・・・禪なんですな。」

刃「まあ、僕も小さいころはパンツだったけど鬼の姿だと全員禪だから慣れるために一年間やってただけど禪の方が気に入っちゃってね・・・前ブリーフだったし、」

九曜「ああ・・・私はトランクス派ですが・・・」

刃「そうか、急ぎましょうか・・・」

九曜「はい・・・それと螢系がすいません」

刃「気にするな、兄さん優しいから大丈夫のはず・・・」

僕達は兄さんの貞操を案じながら制服に着替え、教室に向かった。

（放課後（飛ばし過ぎ？気にしたら負け！！））

僕と月音君と萌香さんは猫目先生に呼び出され職員室に向かった。  
内容は・・・

猫目「白雪さんを連れてきてほしいのよ」

月音「え〜！！なんで俺たちなんですか!？」

猫目「白雪さんは一学期をほとんど休んじゃっているからね〜これ以上休まれるとこまるのよ〜、だから月音君とモカさん、今から白雪さんトコについてあのコを無理やりにも連れてきてほしいの」

刃「なるほど、つまり先生僕は無理やり連れてくるときに白雪を

担ぐ役ですね。わかります。「違っわよ〜」え?」

僕は肩を抱いて震えている二人を無視していると先生は電話の受話器を渡した。僕は電話に出た。電話主は明日夢兄さんだった。

明日夢「あ、ジンキ君!」

刃「今は刃ですがどうかしたのですか?」

明日夢「昨日の彼女がついてくるんだけど・・・病院内に」

刃「後で、保護者（九曜さん）を向かわせますから・・・それと持田さんとは連絡取ってますか?」

明日夢「いや、全然」

刃「なら食われても問題ないね・・・ちゃんと保護者は向かわせますから頑張ってくださいね。」

明日夢「早めに頼むよ!」

僕が電話を切ると男の先生が来た。

男「あの〜ちょっといいですか?猫目先生…すいませんがその白雪の事でお話が…」

猫目「あら、小壺先生どうかしたのですか?」

小壺「まだ聞いてないのですか?全く大変ですよ。昨日の夜うちのサッカー部の者を二人半殺しにしたそうですね。」

月音君は驚いていたが、僕は小壺先生の顔を見たが言っていることは信用できなかった。

小壺「かわいそうに…血祭りにされたあげく氷漬けにされたそう  
で…二人とも重傷だ発見が遅ければ死んでいた所だ。」

と淡々と言い少しして席を離れた猫目先生と討論をしていると数学の籠目李々子<sup>かこめりじこ</sup>先制が来た。

籠目「ちよつと月音君、萌香さん貴方達また何かやらかしたの？」

月・萌「李々子先生！！」

籠目先生は月音君にずいといと近寄り

籠目「いけない子ね、悪戯が過ぎるといつか痛い目にあいますよ  
うちの教師はみんな私のように甘くはないのよ。」

僕はそれを聞きながら胸ポケットから公安関係と書かれた手帳から籠目先生のページを見て、

刃「で、その自称甘い籠目先生は今までに自慢の体を使い、洗脳をした生徒の数は男子10人、そっちの気があつた女子は5人を超え、そのうちの半分は重度の洗脳により解けた後のテストの点数がガタ落ち、そしてこの間月音君を洗脳、覚醒した萌香さんにより成敗されたと書いてありますねえ」

籠目「う！君も…ああ！！」

と先生は文句を言おうと僕の顔を見ると後ろに下がり自分の席に戻るとなぜか色紙とペンを持ってきた。

籠目「ごめん!!これにサイン書いてくれるかしら?」

と目を輝かせながら言ったのでもしやと思い

刃「はいはい・・・もしかしてファンクラブに入っているのですか?」

籠目「そうなの!で、今度先生に付き合ってくれないかしら?」

月・萌「ええ!?」

刃「すいませんが自分には思い人がいますので結構」

月・萌「ええええええ!?」

刃「いや、訂正すると彼女だったね。」

月・萌「ええええええええええええ!!」

刃「驚き過ぎだつて・・・で、籠目先生」

籠目「李々子でいいわよ。」

刃「だが断る!!」「いけず」  
「すいませんがあの小壺先生に何かしらの噂はありませんか?」

籠目「あるわよしかも、悪いのが、小壺先生は女性に手が早い事

で有名だし、結構シツコイ人でね一度狙った生徒は絶対許さないタイプ：確か一学期にも一人“彼の手で停学にされた生徒”がいるわ。絶対彼を敵にまわしちゃ駄目ですからね」

刃「ありがとうございます……では自分は明日夢兄さんの方に行かなくてはいけないのでこれで失礼します。」

僕は急いで職員室を出た……そして九曜さんの教室に行き、

刃「九曜先輩はいますか？」

九曜「刃さんどうかしましたか？」

僕は九曜さんのところへ行き

刃「公安のメンバーは集めれるかい？」

九曜「いつでも可能ですが、何をするのですか？」

九曜さんはそういつと僕は

刃「新・公安の初めての正義のお仕事だよ……守るのは不器用な女の子で敵は変態教師さ。」

九曜「ふむ、それは面白そうですね。」

刃「ああ、後明日夢兄さん」

九曜「……今度お菓子の詰め合わせ持っていきますか。」

明日夢「ハア、ハア、ハア……」

今日僕は非番で部屋にいたんだけど、昨日のあの子が追っかけてきたので外から出て逃げている。僕は神社の陰に隠れた。

明日夢「なんで助けただけなのにあんなに追っかけられなければいけないんだよ。」

僕はそうつぶやくと

??「話した内容がヒビキさん関係だからかな？」

??「すみません……」

明日夢「うおおおお!!?!?!?!?!?」

後ろから声が聞こえ、振り向くと刃君と昨日の人がいた。

刃「兄さん……まだ食われてはないようですね。」

九曜「すみません、うちの螢糸が先生にご迷惑をおかけして自分は九曜と申しましてこれは謝罪の黍団子です。」

明日夢「あ、どうも……あ、これ立花のだ。」

刃「懐かしいでしょう?実は兄さんが食べてた黍団子の半分は僕が作ってたのです。それと兄さんにお願いがありません……」

明日夢「何？なんでもいいk「みくつけましたよ明日夢さん！！」  
げっ！？」

僕がその声の方を向くとあの子が立っていた。

螢糸「見つけましたよ明日夢さんわたs「この馬鹿者がああああ  
！！」ブベツ！？」

彼女が言い終わる前に九曜さんが右ストレートを浴びせた。

九曜「螢糸！！お前が明日夢先生に惚れたのはわかったがストー  
キングしてどうする！！そんなことでは明日夢先生に嫌われるぞっ  
！！」

螢糸「ガーンツ！！」

そして向こうでお説教をやっていると刃君が

刃「今日病院の方にサッカー部の少年二人が搬送されませんでしたし  
たか？」

明日夢「うん、それなら僕も聞いたよ。かなりの重傷だった」

刃「実はその二人のけがの種類を聞きたいのです。ひよっとした  
ら誰かの濡れ衣で一人の女の子が退学・・・下手をすれば変態教師  
の手籠めにされるかもしれないんだ。」

明日夢「え？それは言えないよ！僕も電話で聞いたぐらいでけが  
の種類までは知らないよ！！」

すると僕のピッチに着信がかかり出ると先輩医者 of 由地豊先生からだった。僕はすぐに出た。

明日夢「はい、安達です。どうかしたのですか由地先生？」

豊「豊でいいよ、それより安達君生きているかい？」

明日夢「いや、死んでたらこうして会話できませんよ！それよりも豊先生今朝入院した男の子達の事なんですけど……」

豊「あ、もしかしてそこに松坂刃君っていう少年がいるの？」

明日夢「はい、います！」

豊「実は院長からさその少年に彼らの事を話すように言われてね。で、まず傷の種類の事なんだけど、ほとんどが殴られた怪我で切り傷もあるがその傷のまわりに凍ったような痕跡はなくしかも何か太いものに巻きつけられた痕跡があったんだよ。はっきり言うけどこれは女の子ができる代物ではないね。」

僕はそのことを刃君に伝えると

刃「では、最後に確認しておきたいことがあります……その人たちが発見した人の名前は小壺じゃないですか？」

僕はそれを豊先生に言うと

豊「お、よく知っているね、その通りだよ。」

僕はそれを刃君に言つと

刃「やはりね・・・兄さん自分は急ぐのでこれで失礼!!九曜さんは螢糸さんの説教をよろしく!!」

九曜「はい!!」

刃君は回れ右をして走り去った。

白雪「あんまりだよつくね・・・お前にだけには私の事を・・・わかってほしかったのに・・・」

私はそういい後その場を後にして去った。

月音「あつ、白雪さん待って・・・」

彼の言葉を見無視して私は走った。

そしていつもの崖のところへ行くこうとすると白い鳥が私の肩にとまった。しかしその鳥は全部人口の物でできていた。

鳥「ピィ!!」

その鳥はまるで私を誘うように飛んで、私もそれについていくといつもの崖に来た。

そして崖の端には一人の男の子がいて鳥はその男の肩にとまると

男「おつ光鷲ごころうさん・・・さてと白雪さん貴方に聞きたい  
ことがありますね・・・」

男はそういいながら立ち上がり、こっちに振り向いた。

白雪「あなたはっ・・・」

刃「名前を言っでませんでしたね僕は松坂刃と言います。白雪さん貴方の無実を証明しにきました。でも、そのためには貴方の証言がいるのですよ。構いませんか？」

白雪「私は氷漬けにただけですぐに元に戻したわ。」

そっういと彼は

刃「はい、結構です。それだけを聞いたら満足です。これで裁判になったとしても貴方の無罪が勝ち取れますよ。」

白雪「え？」

私が驚いていると彼はつづけた。

刃「月音君があなたに何か言っで、あなたの一言に驚いていたか  
もしれませんが、それはとある教師の証言と矛盾していたからです。  
決してあなたが嘘をついたからで驚いたわけではありません。さて、  
ではあなたが犯人ではないとしますと、そこで真犯人が出てきます。  
・・・しかし私はその真犯人、まだ容疑者のレベルですがその人を知  
っでいてその人はこの場に来ています・・・そっうですよねそこの  
木の陰に隠れてい方？」

私は後ろを振り向くと木の陰から小壺先生が来た。

小壺「ほう、気づいていたのか・・・生徒にしてはできるんだな。」

刃「御生憎、僕は殺気には機敏でね・・・さて真犯人の小壺先生は白雪さんをどうするつもりなのですか？」

小壺「おいおい、なんで俺が犯人扱いなんだ？第一証拠は？」

刃は私をかばうように立つと

刃「まず、貴方の言動ですね・・・自分の部の部員が半殺しにしたにしては落ちすぎています。まずはこれが一つ、それに貴方にはよくない噂が立ってしまっていて女の噂は嘘が多いが男の噂は本当の事が多いですから・・・それに入院した男の子のけががおかしいのだよ。」

小壺「何がおかしい？その子だって氷を固まらせて打ち付ければできるぞ、」

刃「ふむ、どうやら先生はけがの種類はわかるそうだが、でも大切なことをお忘れですね。彼女は雪女で、爪を展開できるそうですねじゃあなんで氷の後の付いた傷がないのでしょうか？しかも切り傷はごくわずか・・・先生、貴方はもう少しごまかし方を覚えるべきでしたね。」

そういつと小坪先生の顔は歪み、つくね達も来た。

月音「みぞれちゃん！！公安の人たちに聞いて君が犯人じゃない

ことはわかったよ!!」

すると小壺先生の姿は変わり、背中から八本の足が出ると同時に刃君はポケットから何かを取り出し、

刃「白雪さん少し離れていてね・・・火傷しちゃうかもしれないから。」

取り出した何かは音叉へとなり、指でそれをはじいた。それを額へ持っていくときに

刃「さて、小壺先生、僕は闘う前に名乗りをすることにしたんですよ。」

刃はそう言うと一歩前に出ると体を光りが包み、

刃「神の器の一つ、刃やいば！それを使う鬼の刃鬼！！彼女をを護る為！！アナタ達を斬る！そして括目せよ！これがその刃の輝きよお！！」

というとさらに光は大きくなり、天を突いた。

刃鬼「はああああああああ・・・」

光は大きくふくらみ、

刃鬼輝「ハアツ！！刃鬼輝！！」

刃が変身すると小壺先生は蛸のような刃君に伸ばすと刃はそれを掴み、

刃鬼輝「皆ふせるよおおお！！今回はいつもより多く回しまあ  
あああす！！！」

小壺先生をハンマー投げのように振り回すと

刃鬼輝「どっせええええい！！！」

地面に叩きつけたが・・・

小壺「くそっ・・・ガキのくせに力は強いのか！！！」

刃鬼輝「軟体動物に効果は薄いか・・・なら！！！」

刃はさっきの音叉を剣にすると小壺先生に近づこうとするが八本の足で近づけない。

月音「くそおおお！！！」

月音も背後から小壺先生にしがみついたが、

小壺「うっとおしい！！！」

と払われ首を絞めた。

ゴキッ！

首の骨が折れる音が聞こえるとあの女モカに投げた。

その時、ガシッと聞こえ

刃鬼輝「先生・・・覚悟するんだな・・・僕の友を傷つけた罰を受けな！！！」

すると白い大きな太鼓ができて、剣を構えた。細身の剣に光が宿り大きく太くなった。刃はそれを八相に構えると

刃鬼輝「音撃刃・・・烈閃光剣！！セイヤアアアアアアアアアアアア！！！」

と叫び斬ると爆発が起きたが、小壺は起き上がった。刃君は小壺に背を向けた。

そして

刃鬼輝「月音君・・・後は頼んだよ。」

小壺ははっ？と言いながら後ろを向くと月音の拳が顔面に入り、ぶっ飛び海に落ちた。

目がない刃の顔に光が包むと目と鼻のついている顔が出てきて、私に近づき

ポンッ・・・なでなで

刃「大丈夫？それとこれからもよろしくね。」

そういうと刃は走り去った・・・そして思い出した。彼は小学校の頃、化け物と言われた私を守ってくれて

刃「少なくとも男が数人がかりで弱い女の子をいじめるのは許せませんな。」

と言いながら私の頭を撫でたことは覚えている。そして私は別れ際に

みぞれ「17歳になったら迎えに行く。」

と言って

刃「覚えていたらね・・・それに僕に彼女ができてたらどうする？」

と彼は笑いながら言い、去ったが私はあの時から決めていた・・・たとえ彼女がいても私の彼にすると・・・

えゝ刃です。あの後小壺先生は公安に連行され、僕は家に帰りました。そして音撃鼓はぱっかりと割れ、次が来るまで弦で行動しないといけないな〜と思っているが、問題はそこじゃない。その翌日の朝の事である。

刃「おはよ〜〜〜〜〜月音君三途の川をどのくらい渡りかけてた？」

月音「朝一番でその話はどうかと思っよ!!--」

萌香「あははははは、さすが刃君」

すると髪を切った白雪さんが来て、

白雪「おはよう・・・」

刃「おお、白雪さんおはよう髪を切ったのかい？似合っね」

すると白雪さんは

白雪「みぞれでいいよ。私とお前の仲じゃないか。それに忘れたのか？」

といいながら髪を綺麗にまとめると・・・夢の女の子と全くおんなじ髪型になった。

その時僕の頭に電流が走った。

刃「ああ！！小学校の時の女の子みぞれさんだったの！！」

僕がそう言つとみぞれさんは頷き

みぞれ「そうだ思い出してくれたのかうれしいよ。さあ、私の彼氏になれ！！」

月・萌「えええええ！？」

刃「あゝすまんが、先約が入っているから無理だぞ。」

みぞれ「構わない・・・ライバルがいるのなら奪うだけだ！！」

と抱き着いてきた・・・マジでか!?

刃「ちよつと勘弁してくれないか？」

みぞれ「嫌だやつと見つけたんだお前を離さないから」

と言つて抱きしめる力が強くなった・・・助けて明日夢兄さん!

!九曜さん!!

九曜「無理ですつて私は螢糸を止めるので精一杯なんですから」

明日夢「僕も無理だよ・・・ヒビキさんに聞いたら？」

第7話「小学生の頃の思い出つてふとした切欠に思い出すんだよね。…後編」

今回の猛士報告

え〜瑠妃さんにライバルができました。しかも小学生に助けた女の子

ヒビキ「ええ!?!?!」

イブキ「ウソッ!?!猛士初だよ!?!両手に花って!?!」

ザンキ「嘘だろ・・・おいジンキがモテ期到来!?!」

エイキ「ああ、あの子か・・・ガクッ」

アマキ「エイキサーーーン!?!」

キヨウキ「俺とあいつとは何が違うんだ・・・」

日菜佳「でででで、でもこういう時はどうしたらいいんですか!?!」

香須美「ちょっと!?!私に聞かないでよ!?!父さん!?!」

父さん「どうやったらいいいんだ!?!・・・そうだ過去のデータベ  
ースで・・・」

トドロキ「駄目だ!?!おやつさんも混乱しているッス!?!そうだ小  
暮さんなら!?!」



## 第8話「ゲール化・・・そして修羅場」(前書き)

はい8話です！今回は少し短めですが修羅場をうまくか不安です！それと今回から原作で言うとしーズン1の終わりまで原作とは違った流れで行きたいと思います。違うといつても月音君たちと別行動で人海戦術を使って反学園派の首領探しで、たまに月音君と行動したりと今のところぼんやりとしかできてませんがよろしくお願いします。

最後に今回は色々とアチャーなお話なので「こんなの俺の知っている～～じゃない！！」という方はまわれ右をしてください！！それでは第8話をどうぞ！！



音撃を決め灰になると僕達は

刃鬼「さて斬鬼さん、いつちよやりますか？」

斬鬼「そうだな・・・はっ！」

念押しとしての演奏をした。実はこの前瑠妃さんが立花に来た時に斬鬼さんの怪我の事を話したら

瑠妃「あ、その治す方法を私は知ってますよ。」

と言った。僕も嬉しさの余り抱き着いて瑠妃さんを気絶させちゃったけど、実は今日はそのリハビリを兼ねて本来は轟鬼さんの仕事を横からかつさらってやったわけなのです。

刃鬼「斬鬼さん、調子いいですね。」

斬鬼「まあな・・・鬼として復帰するか。」

刃鬼「おお！！という事は轟鬼さん、斬鬼さん、僕の三重奏ができますね！！！！」

斬鬼「いいかもしれんが、そうしないといけないほど強い魔化魍が出ないことを祈るしかないよな。」

刃鬼「確かに・・・少ね〜んよ、旅立つのなら〜」おや、瑠妃さんからだ。」

雑談をしていると携帯に瑠妃さんからの連絡が入った。話を聞くとなんと月音君がはぐれ妖に襲われ、萌香さんの血でグール化し

て裏萌香さんと闘い、瑠妃さんと理事長が何とか封印したそうだが襲撃があるかもしれないので戻ってきてほしいとの事、僕は急いで病院に向かった。すると待合室には多くの目の焦点があつてない人達がいた。

刃「なんかこの前も似たような事があつたような・・・あの吸血鬼まだ息があつたのか（詳しくはミスターサー先生の清める鬼と屍を見てね）」

すると怪しげな看護婦さんが来た。

看護婦「あら？あなたはこの薬受けてないの？」

と指を伸ばし、その先から液体が出ていた。

刃「すまないが・・・僕が今まで世話になつた薬はマキロンくらいしかないからね。それに見た感じそれドラッグっぽいのでね。それとあんたはぐれ妖でしょ？」

看護婦「あら、知っていたの？私の名前は・・・それじゃあ、お別れかしら？」

そう女の人が言うと周りの人達はこつちに来て僕を動かさないように捕まつたが、

ズズズズ・・・

看護婦「え？」

さらに月音君、少し後に萌香さんも来て僕の様子をみて啞然とし

ていた。なぜなら……

刃「全速前進だ!!」

ほかの入院患者が十人近くしがみついているのに少しずつだが近づいているからだ。

看護婦「な、なんでしがみついているのにこっちにこれるのよ!!」

刃「そりゃあ……鍛えてますからね。それと僕はこんなこともできるのですよ。」

バチンと弾ける音がすると僕にしがみついた人は崩れ落ちた。タネを明かすと雷の力を使ってスタンガンのように一瞬だけ体にまとっただけであるが、そんなことも知らないであろう敵は慌ててほかの動かせる人を月音君に向かわせ、指を伸ばす。僕は手に光の力を込めて、飛ばした。光弾は看護婦に当たり吹き飛ばすが月音君に人がしがみつき動けなくなり、僕もそばに行こうとするが操られている人達が立ちふさがる。その間に看護婦は立ち上がり月音君に指を伸ばした。すると萌香さんが月音君の前に立ち、体に指が刺さる。

看護婦「あはははははは!!バカねえ、自分から私のお薬を受けるとは!さて月音君愛しの彼女の手によって死になさい!!」

と言い萌香さんの手は震えながらだが、月音君を殺すために振り上げられる。

萌香「つくね…逃げて!!」

と萌香さんは言うが操られている人に取り押さえられているので動けないが月音君は

月音「大丈夫逃げないよたとえ殺されたって、俺はモカさんの味方だから」

そう言い、萌香さんの手は振り落とされたが、その手は月音君を捉えずに萌香さんの腹に刺さった。しかもいつの間にも口ザリオをはずしたのか裏萌香になっていた。

看護婦「何iiiiiiiiiiiiiiii!?!?こいつなぜ自分で自分を  
ツ!?!?」

裏萌香「…フツすまなかつたな月音…少し眠ってしまったよ  
うだ。夢の中で届いたぞお前の声は…おかげで目が覚めたよ…あ  
りがとう月音」

裏萌香さんは看護婦さんをにらみ、看護婦さんは数歩後ろに下が  
った。その時僕は気づいた。

刃「あれ?もしかして僕空気?…なら!?!」

僕は操られている人(支持がないとぼろーと立っているだけだか  
らね)を適当に気絶させ、看護婦さんの後ろに回り込んで、肩を軽  
くたたいた。

ポンポン

看護婦「なによっ!今いそが、しい…」

僕は黒い笑いをしながら肩を掴み大きく息を吸い込み雷の力を発動させた。

バリバリバリバリバリバリバリ！！

看護婦「アビヤババババババババババババババババ！！！」

骨が見えそうなくらい痺れさせ口から煙が出ている看護婦さんを持ち上げ、

刃「HEY、萌香さん、パス」

と投げ飛ばし、裏萌香さんは看護婦さんの顎に蹴りを食らわして

裏萌香「お前ごときでは「私達は倒せないよ・・・身の程を知れ」

と言った。その後はぐれ妖の薬丸麻子やくまるのまこは公安に連行され、萌香さんもどこかへと去っていきこうとして明日夢兄さんに捕まり治療を受けていたのだが・・・僕個人の災難はこれから始まったのだ。

↳数フウン後（海馬風に）、月音君の病室にて

刃「最初に言っておく！僕は今まで何回か月音君モゲロと思っていた！！」

月音「えええええ！？いきなり急だね」

紫「刃さんはそういうことと思う人では無いと思っていました。」

胡夢「へえ、やっぱり男の子ってモテたい気持ちがあるんだね」

萌香「なんか以外・・・」

明日夢「まあ、目の前で女の子が争奪戦を開始していたら、なんとなくだけど羨ましいと思うよね。」

刃「だが、今はつきりとわかったことがある・・・これって結構辛いよね!!」

僕はそう言った。なぜなら・・・

瑠妃「・・・あなた誰ですか？」

僕の右腕に瑠妃さんが左腕にみぞれさんがしがみつきお互いからんでいる・・・殺気も込みで

みぞれ「お前こそ後から来て刃に馴れ馴れしいぞ。」

瑠妃「私は夏休みの時に知り合いました!!あなたの方が後です!!」

みぞれ「甘いな、私は小学校の時に出会ったのだからな。」

瑠妃「なっ・・・でも私は刃さんとキスをしました!」

月・萌・紫・胡「」「」「えええ!?!」「」「」

刃「接吻はまだだからな!!まだ頬だからな!僕は額にしたけど!!」



刃「ま、待て！！いきなり急すぎるし、まず体を粗末に扱うな！それともし僕がみぞれさんにより、瑠妃さんが隙だったらどうする！？いや、今は瑠妃さんが好きだけど！！レベル的にはアイライクユーでもアイラブユーじゃなくアイウォントユーですけど！！）混乱してます）」

瑠妃「刃さん・・・／／／／」

僕は赤くなる瑠妃さんを見無視し、慌ててそういつがみぞれさんは僕の方を見ると

みぞれ「問題ない既成事実ができてなければまだ勝機は十分にある。それに寝取りというのもあるからいいだろう。」

全員「……………いや、良くないでしょ！！！！！！！！！！」

皆の言うことを無視しながらみぞれさんは僕を転ばせ、床を凍らせて滑るように僕を連れて行こうとするが扉の前に足音からして一人の人が立った。

男「全く・・・もう一人の彼女らしき人物ができたと聞いたがこういうやつとは大変だな“ジンキ”も・・・」

僕はその怒気がこもった声に顔が青くなっていつ気がした。みぞれさんは

みぞれ「邪魔だ、どいてくれる？」

と言ったがその直後

ゴチン！！

と頭をたたく音がした。みぞれさんの手が離れ僕はすぐに立ち上がりその男性の顔を見た。

刃「やっぱり・・・ザンキさん、なぜ個々にい！？」

烈斬を持ったザンキさんがやや呆れ顔で立っていた。ザンキさんは

ザンキ「この前このこの体育教師が辞めただろう？それでしばらくの間俺が働くことになった・・・魔化魍の時に素早く行動できるしな・・・それと瑠妃さん恥ずかしがってくねくねする暇があったら助けるよ！」

瑠妃「はっ！す、すいませんでした。」

明日夢「ザンキさんお久しぶりです。」

明日夢さんとザンキさんと瑠妃さんが世間話で花を咲かしている間に僕は固まっている。みんなに

刃「あの人はザンキさんで僕の鬼の先輩、さらに夏休みまで僕が使用していた音撃弦「烈斬」の本当の持ち主だよ。」

萌香「・・・ということは彼も人間なの？」

刃「うん、そうだよ。後、明日夢兄さんも人間だ。」

胡夢「ねえ、ここって人間は立ち入り禁止のはずだよね？」

刃「まあ、何事にも例外はあるもんだよ胡夢さん」

僕はそういいながら指を振ると月音君は

月音「でもザンキさんの声を聞いた時、刃君凄く怖がっていたよね？」

紫「確かにそうですね。あそこまで怖がる刃さんって初めて見ました。」

皆はそういうと僕は顔をそむけながら近くのパイプ椅子を斬鬼さんの分も広げて座りながら

刃「いや、ザンキさんって怒ると怖いんだよ。小学校の頃に実家の立花に強盗が来たときにザンキさんがキレただけだけどその時の光景が今もトラウマで・・・だって包丁を持ったただの一般人が歴戦の戦士に勝てるだけでも？あの時は酷かったよ」だって強盗言っでは悪いが睨まれただけで失禁してたもの」

月音「うわ~~~~」

紫・胡・萌「」「ガクガクガクガク.....」

刃「まあ普段は優しいし尊敬する人だよ。」

僕はそう言つと後ろからみぞれさんが抱き着き

みぞれ「それであの人がお前とどういう関係にあるんだ。」

頭の後ろに胸を押し当てるみぞれさんの問いに僕は

刃「親、しかもドラマ的にいえば堅実で鋭い観察眼を持つ父親」

僕の一言にみぞれさんは固まり話し終えたザンキさんは

ザンキ「刃は少し変わった環境で育ったからな親代わりを含めるとえ〜と20人はいるな。」

明日夢「しかも今は瑠妃さんが圧倒的にリードしているね。ザンキさん、結構発言力が強いから」

ピシッピシッと音が入りみぞれさんは崩れ落ち、僕が振り返るとみぞれさんは「終わった・・・orz」となっていた。

月音「おお、みぞれさんが」

胡夢「落ち込んでいる・・・やりい？」

瑠妃「それに刃さんは私にプロポーズしてくれましたですよ！今更あなたに取りつく島はないわよ！..!」

月・萌・紫・胡「。。。<ナ、ナンダッテー」

ザンキ「遊び人の男ならホイホイ変えるかもしれないが・・・刃はな〜責任感が強いから振られて原因を究明して、謝らない限りでもしない限りほかの人に乗り換えることはないかもな〜。」

ザンキさんの一言にみぞれさんは激しく落ち込むが、ふと何かを思いついたが

みぞれ「責任感が強いのなら・・・できちゃった作戦で行こう！」

刃「いやいや・・・」

月音「そんなことをしちゃ・・・」

全員「「「「「駄目でしょ!!」「」「」「」

ザンキ「はあ・・・立花にはいい意味でも悪い意味でもポジティブと連絡しておくよ。」

明日夢「ザンキさんが匙を投げた!？」

刃「中の人的にはコーヒースプーンでも可!!」

月音「刃君、何言っているの!!」

ザンキさんは呆れながら部屋を去り、するとみぞれさんの一言に

瑠妃「なら私も!!」

なぜか瑠妃さんまで乗り気になってしまった・・・。

刃「ちよ!?!瑠妃さん落ち着いて!!」

瑠妃「安心して下さい!私初めてですけど頑張りますから!!」

刃「マジで落ち着けええええええええええ!!明日夢兄さん螢糸さんを!!」

僕は明日夢兄さんに螢糸さんと呼んでもらうようにお願いした。

明日夢「ええ！？・・・螢糸ちゃん（ボソツ）」

明日夢兄さんはかなりの小声で名前を呼ぶと

螢糸「お呼びですか！明日夢先生！！」

なぜかナース服で螢糸さんが来た。

月音「さっきの音量で本当に来た！！」

紫「しかもナース服ですう・・・」

明日夢「ええ！？どこで売ってたのそれ！！」  
「a m a o nです  
！！」  
「あっそうあの二人を止めて！！」

螢糸「わかり」「邪魔よ！！」「へブツ！？」

二人を止めようと身構えたがあっという間にやられてしまい、

みぞれ「さあ、刃、私と子作りを！！」

瑠妃「大丈夫ですよ、優しくしますから・・・」

といやらしい手つきで近づいてきた二人を背に僕は

刃「明日夢兄さん、病院の方々にすいませんと言っておいでくだ  
さい・・・」

ガシャーン！！

と僕は叫びながら外へ飛び出した。最後に

明日夢「ええ！？それ強化ガラスなのになんであっさり割れるの！？」

と聞こえたが気にしないことにした。そのあとしばらくの間、九曜さんの所や理事長室に寝泊まりすることと胃薬を飲むことが多くなった・・・もちろん最後にザンキさんが怒ってもらったことで鎮静化した。が、学園中に「体育の財津原先生は鬼」という噂が出た・・・鬼なんだけどなあ。それと今財布に氷河期到来（強化ガラス代で・・・）

## 第8話「ゲール化・・・そして修羅場」（後書き）

猛士報告

瑠妃さんのライバルは超ポジティブ、それと明日夢に彼女が出来た…かもしれない。

b y ザンキ

イブキ「あ、ザンキさん向こうについたのですね。」

ヒビキ「ってか明日夢もついに春か〜」

トドロキ「でも、その人ってストーカーじゃないのですか?」

アマキ「いや、この間持田さんから彼氏ができたそうで落ち込んでいたところ慰められほれてはないそうですが仲良くなっただけです。」

おやつさん「へ〜そうかそうか」

香須美「あの〜ジンキ君が援軍を要請してますけど・・・」

イブキ「無視で!何が悲しくてそんなことに参加しないといけないの!」

日菜佳「ジンキ君もそろそろ大人の階段を上るべきだと思いますよ?」

香須美「でも、手紙ではもう一人の子、みぞれさんを納得させる

ような振り方を教えてくださいって書いてますけど・・・」

ヒビキ「誰かある？そういう意見？」

小暮「もう・・・決闘させて勝った方を彼女にする案でいいのではないか？」

みどり「いや、それで瑠妃さんが負けたらどうするんですか！！  
いつそのこと二人を呼んでどちらかが好きかはつきり言った方がいいような・・・」

日菜佳「というより・・・いつそのこと刃君が好きな方に既成事実を作らせた方がいいのでは・・・」

全員「もうめんどくさいのでそれに決定！！」

日・香「ええええええ！？！？！？」

本日の金言「刃、おとなしく大人の階段を登れ！！」

刃「うっそーん！！」

瑠妃「待つてください」

みぞれ「おとなしく捕まって・・・」

刃「だが断る！！」

明日夢「うおおおおおおおおおお！！」

螢糸「明日夢先せうい」

## 第9話「反学園派との闘い・序章」(前書き)

はい、どうも善宗です！今回と次回、ひょっとしたらその次の回まで反学派との戦闘です。戦闘描写がうまく書けるかどうかわかりませんが見てください！！

## 第9話「反学園派との闘い・序章」

### 第9話「反学園派との闘い・序章」

あの騒動が収まって一週間、僕は公安でこれまでの報告書を見ていた。

刃「これでラストか・・・ふう」

九曜「お疲れ様です。しかし一週間で100枚近くの報告書がたまるとは・・・」

刃「まあ、学園祭が間近だし、今まで仕事をさぼった罰と思えば楽ちんだよ・・・それにいまこうして書類を見て、お茶を啜れると思うと気が静まるよ・・・あり？」

僕はお茶を飲もうとしたが湯呑にお茶がなかった。すると

??「お茶のお替わりです。」

刃「あ、これはどう・・・も・・・」

と急須が来たので僕はお礼を言おうとその顔を見ると・・・

瑠妃「どうかしましたか？」

僕はとっさに書類を飛ばないように筆箱を書類の上に置き、次に椅子から飛び退き、九曜さんの後ろに隠れた。この間実にわずか2秒！！

瑠妃「いや、刃さん・・・驚き過ぎですよ。」

九曜「それに私の後ろに隠れないでくださいよ身長ならあなたの方が上なんですから。」

僕は素早く左右上下ゴミ箱の中と天井裏を確認して

刃「みぞれさんはいないようですね・・・すまないね逃げちゃって」

瑠妃「いえ、私も財津原先生に怒られて正気に戻りましたから、」

実はこの間臨時教師になっているザンキさんが助けってくれてその時に

ザンキ「お前らがジンじゃなかった刃の事がすきなのはわかったがお前らの思いをぶつける前に刃が胃潰瘍になったらだめだろうが！！このまま追いかけて続ければ刃が死ぬぞ！！」

と鬼の形相で言いなんとか事は収まったが、新聞部に記事にされたよ・・・

「学園のモテ夫、実は二股!?」

と・・・なんで自分の部活に記事にされなきゃいけないのだろう  
と思い記事作成者を見ると

森岡銀影と書いてあったので九曜さんと螢糸さんと一緒にジエツトストリームアタックをかけて、その後ザンキさんの叱りの時にな

んとか誤解が解けて楽になった。(ちなみにジェットストリームア  
タックはまず螢系さんが糸でがんじがらめにして、次に九曜さんが  
朧・火炎車で燃やし、とどめに僕が輝の状態で北斗百烈拳をしたコ  
ンボ。)

刃「そうか・・・白雪さんには悪いけど昔だったら泣いて喜んだ  
けど今は瑠妃さん一筋だからね」

瑠妃「そんな・・・／＼／＼」

僕は瑠妃さんが作った紅茶を湯呑で飲んでしていると書類を確認した

九曜「惚気ですか？全く羨ましい限りですよ。」

刃「あれ？九曜さんにいないのそういう人？」

九曜「ええ、私はこの学園の生徒には私は恐怖の対象というイメ  
ージなのでいないのですよ。」

刃「そうか・・・趣味はぬいぐるみ編みというかわいらしい趣味  
をお持ちなのに「やめてください！！恥ずかしいです！！」・・・  
白雪さんは無理だろうから・・・よし、姉御に紹介するか！」

瑠妃「多分撃たれますよ？」

刃「いや、絶対撃つだろうな！！しかも連射で」

九曜「あの・・・撃つとか撃たないとか何の話ですか？」

刃・瑠「・・・銃の話？」

九曜「いるのですねそういう人」

刃「うん、姉御は間違いなく撃つね！とりあえず写メ送ろう・・・  
九曜さんはい、チーフ！」

パシャー！！

刃「アンドッ送信！！」

ピッ！

（立花）

アマキ「クシュン！」

日菜佳「あり？アマキさん風邪ですか？」

アマキ「いえ、そういうのでは・・・ん？着信」

香須美「え」とジンキ君からで「この人どうですか？・・・妖怪  
で人間が苦手ですが大方ですよ」だって・・・あら？イケメンじゃな  
い？」

アマキ「あいつ・・・ふざけてもう！！ちょっとあいつ殺してきま  
す！！！！」

日菜佳「あ、でも今から奈良の方へ行ってもらいたいのだけど・・・  
」

アマキ「ああもう！！帰ってきたら殺す！！」

（陽海学園）

刃「む、背筋に寒気が・・・姉御キレたな。」

九曜「慣れてますね・・・」

瑠妃「刃さんですから・・・それと理事長からの報告ですが反学派に気を付けてくださいとの事です。それと月音君を学園祭の委員会に潜り込ませました。」

刃「わかったよでは九曜さん警備体制の強化をよろしく頼む。」

九曜「はっ・・・それと明日夢先生から伝言はどうしますか？」

刃「なら・・・もうゴールしてしまえ」と言ってくれ・・・ほかも近々そうなるかもしれないからね（じゃあね！！）」

と僕は瑠妃さんと共に公安の建物から出た。少しして視線を感じ  
小声で

刃「瑠妃さん、二手に分かれるぞ、僕は路地裏に入る。」

瑠妃「はい、私はそのまま直進します。それで挟み撃ちですか？」

刃「いや、瑠妃さんはそのまま直進した後、相棒が来たら理事長のもとへいって援軍を、来なかったらみぞれさん関係だから安心してくれ」

瑠妃「はあ、わかりました・・・刃さんは頑固ですから」

刃「すまないね・・・」

こうして僕たちは別れ、僕は路地裏で待った。そして僕は後ろを振り向きポケットの音角をいつでも剣にできるようにして待っている

??「あれ？気づいてたの？」

と白髪の男の子が来た。

刃「まあね、そりゃ気づくよ今まで追っかけられてたしね・・・  
貴方の名前は？」

霧亜「オレは吉井よしい 霧亜キリアっていうんだ。」

刃「ふむそうか、僕は松坂刃ただの学生さ、それとどうやら君は反学派かな？わずかながら殺気を感じるからね。」

霧亜「ふ〜んそこまで気づいてたのか・・・じゃあお別れかな？」

そういつと霧亜は消え僕はすぐに音叉剣を出し、後ろへ振り向きながら斬った。

ガキンツ！！

剣は鈍い金属音をたて、鎌とぶつかり合い

霧亜「へえ、これを防げるんだ・・・」

刃「さらにこんなこともできるんだね〜・・・フンッ!!」

僕は力を込め剣に雷の力を送った。霧亜はすぐに飛び退くが、少し受けたようだ。

霧亜「痺れるね〜これが鬼の力か〜」

刃「僕は特異体質だけどね。ふん!!」

今度は光りの力を込め飛ばす。霧亜は飛んで避け

霧亜「飛び道具なんてありなの？」

刃「ありだよ・・・これで倒せるのなら!!」

と僕が言つと霧亜は

霧亜「気づいたか〜僕もこれで手はないから今日は帰るよ。」

刃「できれば二度と来ないでほしいがな。」

霧亜「それじゃあまた遊ぼうね。」

と言つて消えた。僕は

刃「二度と来るなつていったらだろうが・・・」

と呟き、新聞部に戻った。

新聞部の教室に戻ると僕は

刃「萌香さん何か仕事はある？」

萌香「あ、刃君それじゃあ各クラスの出し物の紹介記事を作りたいと思っていたからそれをお願い」

刃「了解！胡夢さんは皆に飲み物を買ってきてください！！その後まだ手が付けられない記事の作成を頼みます。」

萌香「イラストを付けたりレイアウトを考えたりとね、」

刃「よし、レイアウトは僕が考えるからイラストは頼みました。」

僕と萌香さんがそうやって話していると胡夢さんは

胡夢「あゝん！学園祭って新聞部もこんなに大変なものなの？！？」

バラッ！

と各クラスの出し物のデータが宙を舞った。

シユババババババババババ

僕はそれを掴むと内容を確認してから

刃「データをばら撒くな！！」

胡夢「し、ごめん」

みぞれ「うるさいぞ」( 刃のお願いとザンキさんのお仕置きを含めて手伝っている。 )

僕たちが注意すると

胡夢「だいたい人手不足なのよつくねが北都って男のところ行っちゃっているから…！」

ここの所月音君は学園祭実行委員会の方へ行っているため人手が足りないのだ。もちろん少しわけありで理事長からの話によると反学派の手先がいるらしい。

すでに一人その反学派のスパイを捕まえてはいるが、まだいるかもしれないと理事長は言っていた・・・本当は理事長は誰かはわかっていてもかもしれないがあの人を考えていることは多分ヒビキさんぐらいにしかわからないんじゃないのかな？

僕がそう考えていると「ああ・・・イライラすんだよ」となっている胡夢さんに

萌香「まあまあ！北都さんって礼儀正しくて頭いいって先生たちに評判だしつくねが信頼するのわかる」

胡夢「ええ〜どこがよ〜〜あんな奴ノツポでメガネで悪党面じゃない〜ッ」

萌香「悪党面っ!?!」

刃「その発想は・・・無いよ」

紫「嫉妬ですかくるむさん？男相手にくみつともないですう」

紫ちゃんの一言に喧嘩が始まると

ザンキ「何をやっているんだお前ら？」

と呆れ顔でザンキさんが来た・・・なぜか銀影先輩を引きずりながら

刃「ザンキさんどうしてここに？」

ザンキ「まず手伝いに来た事とココに来るときにこいつが高性能カメラを持って校舎の中を写していたから連行してきた。」

萌香「私ちよつと月音に聞きたいことがあるから出かけてくるね。」

刃「はいはい・・・それと銀先輩またですか？」

銀影「くそくまさかよりもよって鬼の財津原に捕まるとは・・・」

刃「先輩もばかですね」ザンキさんに捕まらなくとも今は公安がフル稼働しているのですよ？なぜそんなときにこんな事をそれよりもまず手伝ってくださいよ！！」

銀影「ふん、何を言う学園祭に向けているんな教室や部の女子達はあるんな服やくんな服を着ているんやで！！それを見逃すなんて男やない！！それに前にも言うたけどワイはこの部で偉いんやか

ら記事作成なんてめんどいことなんてするか!！」

僕とザンキさんは写真を見せる銀先輩の前と後ろに立った。

ザンキ「銀影・・・お前の言い分はよくわかったただがっ!！」

刃「教師がいる前で堂々と盗撮した写真とめんどくさいという発言をするのは感心しません!！」

ザンキ「少し頭冷やそうか!！」

僕とザンキさんはお互いの右腕を水平にあげ銀先輩の首めがけて走り

ザ・刃「クロスボンバー!！」

銀影「ぐえ!？」

綺麗にクロスボンバーが決まり、その後銀先輩を公安に突出し盗撮した写真は焼却炉に投げ捨てた。

この時何名かの男子がもったいないとか学内オークションに売れば高値が付いたのにとか言っていたが、ザンキさんの猛士式鬼睨み術で退散していった。

僕とザンキさんが写真焼却から部室に戻ると

胡夢「ええ~~~~~!！」

紫「北都会長が反学派エエ!！」

という声が聞こえ中へ入った。

刃「どうしたんだ！」

萌香「あ、実は北都会長が反学派の霧亜と一緒にいるのを見かけたの！」

ザンキ「霧亜と言うと今要注意人物だな」

刃「ええ、僕もさつき彼と戦闘をしましたよ。」

すると扉が空いて、僕達はその方を見ると月音君が立っていた。

月音「ほ…本当なの今の話…北都さんが反学派って…」

胡夢「つくね…」

萌香「うん、つくねに会いに行ったら偶然見ちゃったの…会話は聞き取れなかったけど…きっとあれは…」

月音「…」

僕は二人の会話を聞いているときにふと隣を見てギョツとなった。

刃「(ザンキさんがなぜかご機嫌斜めだ…!!)」

萌香「と、とにかくつくねはこのことを理事長に相談して…」

月音「は…ははは、あはははははっ」

萌・胡・白・紫「……!!?」「……」

刃「やっぱね」

月音「そっそんなの見間違いだよ北都さんはそんな人じゃないって」

胡夢「……!? 待ってよつくねそんなっ……」

萌香「うそじゃないのっ信じて! つくね私本当に……」

月音「……たとえ本当でも……北都さんはきつと霧亜に騙されているんだ」

と言いながら月音君は扉に手をかけ、

萌香「どこに行くのつくねっ!!」

胡夢「今までずっと一緒にやってきた私達より北都さんを信じるわけ!? ウソでしょ!?! 許さないよそんなのっ……」

胡夢さんの言葉に月音君はただ

月音「ごめん」

と言い出て行くこととしたとき

ザンキ「青野……歯を食いしばれ!」

バキッ！！

月音「ガア！？」

ザンキさんの拳が飛び、青野君は壁まで飛んだ。ザンキさんは青野君の前に立ち

ザンキ「いいか青野、北都という奴がお前の目に映っていたのかは知らないし俺も北都が今までどんなことをしてきたのかも知らないが、反学派のそれも霧亜という要注意人物に会ったという事実は変わらない。」

月音「でも、そんな事信じられません！！」

ザンキ「だからと言って今まで苦楽を共にした仲間を裏切れるのか・・・軽い男だな。第一、お前は一週間くらいしか一緒に行動した奴の何を知っている？」

月音「そ、それは・・・」

ザンキ「俺だって自分の弟子を知るのに長い年月がかかった。刃の事を知るのにもかなりの年月がかかっているのに・・・それを一週間でわかりきったと思うなよ青野、それに世の中には優しそうな顔をして人を殺せる奴だっていることを忘れるなよ・・・。」

ザンキさんが指をさしながら言うと言音君は黙って部屋を出て行った。

ザンキ「はあ・・・まだまだ甘いなあいつは刃は公安の所へ行ってこい。」

刃「はい！万が一の為の一般生徒の避難、そしてけが人の護送と  
かですか？」

ザンキ「それと北都の事を公安サイドから調べてもらえ赤夜は橙  
条の所へ行き理事長に報告をしてくれ、」

萌香「は、はい！」

ザンキ「残りの仙堂、黒乃、白雪はあの小僧を助けてやれ・・・  
いいな？」

紫「はいですう！！！」

白雪「わかった・・・刃の為に頑張る」

胡夢「つくね・・・今助けるから！！！」

ザンキ「俺は教師達に話して公安の活動が上手くいくよう連絡し  
ておく・・・では活動開始！！！」

僕達はザンキさんの指令によって各自行動に出た。

俺は新聞部の教室を出て職員室に向かった。

籠目「あら？財津原先生どうかしましたか？」

ザンキ「いえ、緊急事態なので先生を全員集めてくれませんか？」

籠目「ええ、わかりました。」

その後先生たちを集め事の次第を説明したが、教師の中にもいいやつもいれば頭の固いやつもいる

頑固教師「ええい！なぜお前のような新参者に命令されなければいけないのだ！！しかも公安と手を組めだどっ！？そんなことができるか！！」

とふざけている奴がいたが

猫目「ニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤ！」

バリバリバリバリ

頑固教師「ギヤアアア！何をするのでですか猫目先生！！」

猫目「今は非常時なのです！！そんなことを言っている暇はありません！！」

するとほかの先生方も賛同し公安との連携を承諾したが俺はその責任者になってしまい動けなくなった・・・刃鬼、後は頼んだぞ！！

僕は急いで公安の建物に行き九曜さんにこのことを伝えると

九曜「刃さん、実はつい先ほど調べたら北都が怪しい人物と話していてその男が反学派のメンバーである経験があったのを発見しました!!」

刃「本当か!!・・・なら月音君は危ないね。」

九曜「私もお供します!!」

刃「いや、九曜さんは他の公安のメンバーに教師と共に連携するよう呼びかけてくれ!!北都会長の逮捕は僕だけで十分だから!それと附属病院にも連絡を!!」

九曜「はい!!それでは地図をお渡ししておきますのでお気を付けて!!」

刃「ありがとう、九曜さん!!」

僕は九曜さんに見送られ、僕は光鷲を展開、巨大化して、学園祭実行委員会の本部へ向かった。その途中瑠妃さんを見つけそばに降りた

刃「どうしたの瑠妃さん!？」

瑠妃「刃さん・・・実は萌香さんがさらわれました!!」

刃「そうか・・・なら瑠妃さんは光鷲に乗って実行委員会本部へ向かって!萌香さんは僕の方で何とかする!!」

瑠妃「そんな!!これは私の不始末です!それなら私が!!」

刃「いいから、瑠妃さんは月音君たちのもとへ急いでくれ!!」

瑠妃「わかりましたが・・・私は黒色鴉で行きます!!」

瑠妃さんはディスクを起動、巨大化した黒色鴉に乗って実行委員  
会本部へ向かった。僕は光鷲に乗り直し、

刃「急ぐぞ!!」

光鷲「パイ!!」

萌香さんを捜しに空へと飛んで行った。

第9話「反学園派との闘い・序章」(後書き)

タイトル的に脊髄抜きライダーが思い出されるかもしれませんが続きますから楽しみにしてください!!

それと感想待ってま〜す!!

第10話「鬼の刃vs妖の鎌そして真・光震天」(前書き)

第10話です！最初に言っておきますが、タイトルには霧亜と刃の闘いがメインだと思いますが……そんなにバトルがないのですよ……トホホ

それではどうぞ……！

## 第10話「鬼の刃vs妖の鎌そして真・光震天」

### 第10話「鬼の刃vs妖の鎌そして真・光震天」

萌香「あう！」

私は霧亜というはぐれ妖に攫われて海と崖の見える墓場に連れていかれた。

霧亜「だから逃げようとししないでよ。大人しくしてくれれば何もしないからさ。」

と明るくいう霧亜に私は

萌香「ど……どうして……どうしてこんなことを……？ 貴方達「反学派」は一体何をしようと言っの……！？」

私はそついうと彼は

霧亜「……どうして？」

と笑い十字架に腰をかけ、

霧亜「面白そうだから言っちゃおうかな……君はこの陽海学園を守っている「大結界」の存在を知っているかい？」

私はその言葉に固まり

萌香「……大結界？」

霧亜「そう…！人間が入ってこないようにするための結界さ」

彼は言った。大結界は『3大冥王』と呼ばれる大妖怪がこの学園を築く際に張った巨大な結界で、こいつの強力な力で学園は人間界から完全に隔離されていると…。

霧亜「つまり学園の生徒がのんびり妖怪生活をマンキツできるのも、人間界の奴らが妖怪の存在に気付かず大手を振ってるのも、まあたいていはこの結界のおかげってわけだね。」

そして彼は手を空へ向けながら

霧亜「…でもコレ“いらなと思うないか”？もしこんな結界がなければ妖も人も混沌としてもっともっと面白い世の中になるだろうに」

私はその言葉でハツとなって

萌香「…！あっあなた達まさか…その結界をッ…」

私の言葉に霧亜はただにこりと笑った…。

僕が光鷲で上空から萌香さんを探していたが陽海学園は思いのほか広い

刃「本当なら部屋に戻ってディスクアニマルを起動させたらいい

かもしれないけど時間がかかるからな」

光鷲「パイ・・・」

刃「すまん光鷲、萌香さんを見つけるまでだから頑張ってくれ！」

光鷲「パイ！」

その時海の方で一瞬何か光ったのを感じその場所に向かって光鷲を飛ばした。

刃「あれは？萌香さんと・・・霧亜か！！それと映像？」

僕はそれを見ていると理事長がいつもいる建物で月音君と写真で見た北都という男が闘っているが、

刃「まいったな・・・あの男（北都）格闘技をやっていたな。素人の月音君では分が悪いな・・・光鷲、萌香さんを乗せたら急いで理事長の建物に行ってくれ」

光鷲「パイ！！」

その時、下から

霧亜「恥を知れよッそれでも最強のバンパイアかッ！！？」

萌香「グウ！？」

霧亜が萌香さんの首を絞めていた。僕は音叉剣を出し光鷲が飛び

降りた。

刃「ハッ！」

剣を二人の間に投げた。霧亜が手を放し萌香さんが倒れると着地した僕は痺れる足で霧亜に足払いをかけるがそれはあっさり避けられた。

霧亜「君か・・・面白くなりそうだね・・・」

僕は霧亜さんを睨みながら萌香さんに

刃「萌香さんは相棒に乗って月音君の元へ、あいつは僕が抑える  
！！」

萌香「で、でも・・・早く！！」・・・頑張ってね

萌香さんは急いで相棒に乗って飛び立とうとしたが

霧亜「そっちはさせないよ！」

と霧亜は鎌を持って攻撃をかけようとするが僕は剣を取り、

刃「それを僕がさせない！！」

ガキイン！！

それを防ぎ飛び立つのを確認して剣を体に近づけ、霧亜の腹部を蹴飛ばした。

霧亜「ぐう……結構やるんだね君」

霧亜は立ち上がりながら言い、僕は

刃「……鍛えてますから……で？君はなんでこんな馬鹿みたいな事をしたんだ？あれか世界を混沌へと変えたいのか？」

霧亜「へ〜知ってたんだ正解だよ。君は妖怪と人間が争いあうのは本来の姿だと思わないかい？」

刃「いや、全然。こっちとしてはそんなことをされたら困るんだよね〜“魔化魍”と勘違いして闘うのは嫌なんだから……」

僕がそう言うと霧亜は驚きと期待の表情が顔に浮かんでいた。

霧亜「もしかして君……戦鬼？」

刃「音撃戦士とも言っね……嬉しそうだね」

霧亜「もちろんだよ！！上位の妖怪でも手古摺る魔化魍を唯一倒せる者……それが戦鬼だと聞いているからね……さあ早く変わってよー！！」

とまるであたらしい玩具を見つめるかのように見ているが……

刃「だが断るー！！」

霧亜「え？」

僕の一言にぽかんとしている霧亜に

刃「というより君はたかが妖怪だ。しかも本気じゃなく遊び感覚で闘う奴に鬼になるのは先輩鬼の皆さんに申し訳が立たない・・・というよりそんな奴相手にてこずるようじゃあ僕が鍛えたりないからね〜そんなじゃ僕は友達の所へ行くよ。(まあ、今まで妖怪相手に鬼の姿で闘ってきたけど)」

僕はそう言い後ろを振り向いた。その時

霧亜「ふ・・・るな・・・ふざけるな!!」

後ろからまがまがしい殺気を感じとっさにしゃがんだ。

ブオン!!

僕の上を鎌が通過し僕は後ろを見ると明らかにキレた霧亜がいた。軽く挑発をしたつもりなただけどここまでうまくいくとは・・・というより

霧亜「コロスコロスコロスコロス!!」

やりすぎだな・・・ウンまあ、とりあえず

刃「ほう・・・やればできるじゃないなら変身はしないけど鬼の力の一端をお見せしよう。遠慮なくかかってこい!!」

僕は剣を構え対峙し、

霧亜「ハアア!!」

刃「テヤア!!」

剣と鎌を打ち付けあった。僕が重い一撃を放とうとすれば霧亜はそれを受け流したりして避け、霧亜の素早い攻撃を音叉剣で止め、何回かしていると

霧亜「強いね……」

刃「お前こそ……これでバカみたいな考えなかつたら猛士に誘いたいぐらいだよ……でもこのままやると月音君のもとへいけないし、君の強さを軽視していたからそのお詫びに鬼になってやるよ。」

霧亜「へえ……それは楽しみだね!!」

霧亜はそう言いながら鎌を振るい、僕はそれを受け止めると

パキーン!!……ドス!

刃「あ……変身音叉折れたあああああ!!」

音叉剣が根元からぱつきりと折れてしまった。

霧亜「え?もしかしてそれがないと変身できないの?」

刃「うん、つかこれ弁償しろ!!結構高いんだぞ!!」

霧亜「そう……それじゃあ死んでくれ!!」

と霧亜は鎌を振ってきたが僕は霧亜に近づき、鎌の柄の所を右手

で抑えそれを脇腹で抑えるように移動させると霧亜に見せつけるように

刃「まあ、僕の場合音弦があるから大丈夫だしそれと……. . . . .  
かったね？」

僕は音弦を持っていてる右手を左手に近づけ引出してそれを鳴らし額に持って行った。

霧亜「くそっ！」

刃「はっ!!！」

僕は音弦を天に掲げ雷が落ち、変身した。

刃鬼「さて霧亜第2ラウ……. . . . .あれ？」

霧亜は雷の直撃を受けて、倒れていた。

刃鬼「感電してるよ……. . . . .息はある……. . . . .狸根入りじゃないから……. . . . .よし放置!!！」

僕は近づいて脈拍と呼吸をしているのか確認して理事長のいる建物に向かおうとしたとき

刃鬼「あ、音叉の破片を回収して……. . . . .とりあえず地面にメッセー  
ージ書いておこう。」

僕は音叉を回収し音撃棒で地面にメッセージを書いて

刃鬼「よし、急ごう!！」

僕は今度こそ理事長室のある建物に向かった。

〈数分後〉

刃鬼「くそっ! 遠い!! 鬼の力で走っているのにつかないってどういうことなんだ!! ああ、もう!! 選ぶときカブトにしとけばよかったよ!！」

僕がそう女神に文句を叫びながら走っている

キイイイイ!!!

雷神が目の前にとまり、

刃鬼「ちょ!?! 鬼は急には止まれないのよおおお!！」

ズササササササササササ・・・ゴン

僕は思いつきリブレーキをかけたが車の横にぶつかってしまった。すると運転席とその後ろの窓が空き、ザンキさんと猫目先生が顔をだし

ザンキ「刃鬼、早く乗れ!！」

猫目「先生もいますよ!！」

僕は急いで車に乗ると猫目先生が白い鼓を渡した。



刃鬼「ええ、掃除しているときに調子に乗るなとかいい子ぶつてるんじゃないぞとか言われましたよ。」

猫目「先生方でも石頭先生にいい印象を持っている人も少ないですよ。」

ザンキ「どおりで九曜が燃やした後周りにいた生徒と先生がガッツポーズしていたのか・・・ついたぞ。」

僕が降りると同時に後ろから

裏萌香「刃鬼か・・・これを返すぞ。」

と光鷲のロザリオが一部壊れている裏萌香さんがいた・・・ん？

刃鬼「なんでロザリオがついているのに裏になっているんだ？」

裏萌香「話はあとだ行くぞ!!」

刃鬼「おう!!・・・とりあえずテリヤアア!!」

僕はドアを蹴破り中へ入ると北都と向かい合う月音君の姿があった。

裏萌香「後は私に任せてのんびり観戦でもしているがいい月音」

月音「萌香さん・・・」

北都「馬鹿ななぜ貴様がここに・・・？」

刃鬼「霧亜なら僕が気絶させたよつと!!」

僕は烈光弾を放つがそれを北都は避け、

北都「…何故だ…？なぜお前達はあくまで俺の邪魔をする？特に月音お前は元々人間だろ？」

月音君はその一言に驚き

刃鬼「ついでに言うけど僕も人間だよ。信じられないだろうけど」

北都「ならお前たち二人はこの妖の学園を守る理由なんて何もないはずだ。」

と言い北都はロザリオを顔に近づけ呪文を呟くと地面に魔方陣が出て、

月音「どっ、どうして北都さんがそれを…」

北都「オレには理由がある自分の存在の全てをにかけて学園を壊す理由が…これ以上オレの邪魔をするな月音」

北都が床に沈んでいる様子に直感でヤバいと思った僕は飛び上がり、

刃鬼「鬼闘術、「雷撃蹴」!!」

北都に向かって蹴りを放とうとして裏萌香さんも北都に近づき

裏萌香「ちつ逃がすか!!」

月音君も近づき激しい光に包まれた。

俺が烈斬を持って入ると

胡夢「つくねはどこ!?!どこに行ったのよオオ!!!行かなくちや早くつくねの後を追わなくちやああ!!!」

紫「お、落ち着くです〜くるむさん〜」

みぞれ「刃・・・」

ガリガリガリ

瑠妃「落ち着いてください首しまってますよ!!!」

ザンキ「何やっているんだお前ら・・・?」

瑠妃「あ、ザンキさん」

ザンキ「今は財津原だ・・・それより理事長は?」

瑠妃「あそこに・・・」

俺は急いで橙条が指差した方に行った。そこには血まみれだが立

ち上がった理事長がいた。

ザンキ「大丈夫ですか？」

理事長「ああ、しかし大変なことになった。」

ザンキ「ええ、だがジンキが何とかしてくれるでしょう・・・あいつはああ見えて結構強いから・・・模擬戦だと最下位だが、それより理事長あの結界を破る方法がありますか？」

俺は新聞部の奴らと橙条が閉じ込められている結界を指を差しながら言つと理事長は

理事長「ああ、君の音撃斬なら問題無いはずだあれは妖力と電力を合わせて作ったから雷の力を持つ君なら問題ない。」

ザンキ「そうか・・・なら」

俺は結界の前まで歩くと烈斬を突き刺し、音枷おんかを引出し、鳴らした。

胡夢「嘘！？財津原先生も鬼なの！？」

みぞれ「いや、いつも刃はザンキと言っていたからそうだろう」

瑠妃「ええ、刃さんに弦の基礎を教えたのも斬鬼さんなんですよ。」

俺は変身すると烈斬を構え、

斬鬼「お前ら少し痺れるかもしれないがいいな？」

3人「「「え？」「」」

瑠妃「できれば激しくお願いします。」

俺は結界に烈斬を差し、斬徹をセットした。

斬鬼「音撃斬「雷電斬震」！！ハア！！」

胡夢「キヤアア！？」

みぞれ「うわっ！？」

紫「フミヤアア！?!?」

瑠妃「ああん（ハート）」

中にいる奴の叫び(?)を無視して俺は音撃を決めると結界に罫が入り、

パライイン！！

と割れたが、中にいた奴らは

胡夢「あびゃびゃびゃびゃ」

紫「痺れるですう〜」

みぞれ「い、痛い・・・」

と伸びていたが・・・

瑠妃「ああ、今度刃さんに頼もつかない・・・／＼／＼」

約一名喜んでいたが、無視することにした。・・・刃鬼、頑張れよ（いろんな意味で）

第10話「鬼の刃vs妖の鎌そして真・光震天」(後書き)

今回は北都戦ですが・・・刃鬼耀きをどう活躍させたらいいのか  
まいてしまつて・・・普通にやるとしたら輝で北都を放り投げち  
やえそうだからどうしよう・・・と悩みますが四月に入るまでにシ  
ーズン1は終わらせたいと思います!!

## 第11話「地下での決戦」(前書き)

今回は北都戦でかなり裏萌香と月音が空気に…そこは気にせずに  
第11話をどうぞ!!

## 第11話「地下での決戦」

### 第11話「地下での決戦」

刃鬼「烈光でもここまで暗いとは・・・第一ここはどこだ？」

裏萌香「私を知るか・・・しかし奴はどこへ行ったんだ？」

僕と月音君それに裏萌香さんは暗い空間の中僕は音撃棒で皆を照らしながら歩いていった。

月音「寒い...それにもうだいぶ歩いているのにまるで果てがないみたいだ...」

刃鬼「すまん僕が火属性ならもう少し温かくできたかもしれないけど・・・今の僕が力を強くすると萌香さんにダメージを与えちゃうから」

僕達はあたりを警戒しながら歩いていると

北都「やれやれ...警告したのについてくるとは困った奴らだ」

僕達はその声の方を見るとそこには変な機械が囲まれた北都が立っていた。

北都「ココは学園の地下に位置する『常闇の祭壇』陽海学園の心臓部だ。」

北都はそう言うと機械を操作し始めた。

刃鬼「なあ・・・あれってもしかして」

僕が言いかけたとき

北都「それにしても驚かされるなお前達には、オレの計画は完璧だった：完璧はずだった。反学派を組織してお前たちを利用して理事長からこの『審判の十字架』を奪った：全てはこの学園を滅ぼすために！」

月音「・・・」

裏萌香「ふん、」

北都「だが俺は二つ誤算をしていた。一つはお前だ月音、お前がここまで食らいついてくる可能性はほばないと踏んでいたし萌香も霧亜が抑えきれると思った。：だがこのザマだ。そして二つ目の誤算が鬼・・・貴様だつ！！」

突然声を荒げ僕を指差した。

北都「霧亜をあつさりと倒し、お前がすぐ側にいた事のも知らなかった。」

刃鬼「あ、そうそれは気づけなかったお前が悪いし、正体をいつも隠しているからね：で覚悟はいいかな？僕は生憎手加減が上手くいかない：よつと！！」

僕は烈光弾を連続で放つ・・・それを北都は手で払うと

北都「…だが…もういいこれで結果は同じだ。あとはこの『鍵穴』に『審判の十字架』をはめ込めば大結界は解除され学園は人間界に堕ちる」

裏萌香「北都…こいつツ!?まさかしゃべっていたのは時間稼ぎを…!」

北都は十字架を大きく掲げながら

北都「遅い!これでオレのかた「まだだ!!」」

ボンッ!

僕は“本気”の烈光弾を放ち手に当てた。

北都「グッ!?さっきよりも早い!」

刃鬼「それはそうだよ最初から本気でいったら君には回避されるかもしれないからね…速度と威力を落としてやってたんだよ。」

だが烈光が当たった手を見ると審判の十字架は…放されていなかった。

月音「え!?!」

刃鬼「まじかよ…恐るべし執念…」

北都「こんどこそオレの勝ちだ!!」

十字架ははめられ、結界が解除されるのが始まった。

月音「……そんな……やめろっ……駄目だ北都さん、やめろ……やめろオオオオオオ！」

北都「黙れよ月音……この最高の瞬間を穢すんじゃない……ずっとずっと待っていたんだ学園の歴史そして未来その全てがオレの手によって消えていくこの瞬間……ああ長かったいいよだ……いいよオレの計画の全てが成就される時が……」

北都はそう言いながらどっかの教祖のように天を見ていた。その時僕の横で風を感じると

裏萌香「それは少し困るな。私にとってこの学園の居心地は悪くない、少なくともお前ごときに潰させてやる気には気にはなれんな。」

ゴッ

北都「グハッ」

と言い裏萌香さんは北都の頭に膝蹴りを食らわし、北都は柱を碎き飛ばされた。

月音「モカさん!!」

裏萌香「……安心しろ学園を覆うほどの巨大な結界だ。解除されるにはそれなりの時間がかかるはず……今ならまだ解除の取り消しが間に合っはずだ。」

刃鬼「なら今のうちに……」

僕は機械に触れようとした時、

北都「邪魔するなよ今…いいところだって言ってるんだろオ？」

刃鬼「うわあ、しぶといね。」

北都「オレの至福の一時に土足で入り込むんじゃないやねエぞこのカス共がアアア！！」

月音「うつつ…」

北都は立ち上がり、僕達を睨んでくるが僕は彼の妖気をおかしく感じた。僕はいつも瑠妃さんや九曜さんと行動しているから妖気を感じるという事に慣れたが北都の妖気はそれと比べるとどこか不安定な感じがした。

月音「…な…何故だ北都さんあなたの方こそどうしてそこまで学園の破壊にこだわる！？一体何でそこまで…」

月音君はそう北都に質問を投げ掛けると

北都「…お前にはわかるまい月音、仲間を守られながらぬくぬくとやってきたお前などにはな」

北都はそう言いながら上着を脱ぎ捨てると…

月音「……！な…そ……それはっ…」

刃鬼「月音君と同じ、魔封じの鍵…！！！」

裏萌香「……そうか……どこかで感じたことのある思ったら……」

月音「どうして北都さんがこの鍵をまさか……まさか北都さん、あなたは……」

月音君がそういうと北都は鍵を外し眼鏡を外しながら言った。

北都「そう……つまりはそういうことだ。オレも人間だったんだよ月音」

北都は言い終わり眼鏡を投げると北都の妖力が膨れ上がった。

北都「だが一緒にするなよ……オレはこのクソツタレの学園を一人で生き抜いてきた。頭脳と身体全てを駆使してたった一人で……な。」

北都の体はどんどん異形の物へと変わっていく

北都「そのためにはこうなっても強くなるしかなかったわけだ。オレは自分をこんな姿にした学園を決して許さない……醜く凶々しいこんな化物に……だから滅ぼす。これはオレの人生を懸けた復讐なのだ。」

北都が変身し終わり僕と月音君はぼうつとすると

裏萌香「月音、刃鬼ぼさつとするな来るぞっ！」

月音「わっ」

刃鬼「おうー!!」

北都「誰にも邪魔はさせん！」

ゴウツ！！

北都の攻撃は今までの魔化魍より厄介な攻撃で複数の腕からによるすばやい攻撃で、僕は避けきれずいくつかは音撃棒で叩き落とすが、体のあちこちに小さい切り傷ができた。

その時背後から

月音「モカさん！！！」

と月音君の叫び声が聞こえそこを振り向くと多いな傷ができ、血が出ていた。

月音「すっかりしてモカさんつまさか俺をかばってこんなっ……」

裏萌香「どけ……お前は下がってる。もはやあれはお前の手に負える相手ではない。私が奴を惹き付けるからそのスキにお前は逃げるんだ。」

月音「いつイヤだよそれにモカさんその体でっ……」

裏萌香「聞け月音ッ！！これは「表」のモカの頼みでもあるんだ。あいつはお前を助きたい一心で危険を冒してまで自分の封印を解き私にすべてを託した。」

月音「！！？」

裏萌香「…バカな奴だよでも私はそのバカと約束をしたんだ……  
月音、お前は私が守ってやる。」

裏萌香はそう言い北都に立ち向かおうとしたが、

刃鬼「すまないが萌香さん、あんたも休んでくれ。」

裏萌香「何っ！？ふざけるなっ！！」

刃鬼「萌香さんあなたは今まで封印されていたんだ……それに  
今まで“本気の命の奪い合い”をしたことはあるのかい？」

裏萌香「！？」

刃鬼「まあ、別にそれは関係ないけど…僕が今からやるのは萌香  
さんとの距離も考えなくてはいけないから……それじゃ」

僕はそう言い、北都に向かって走った。もちろん攻撃が来るが

刃鬼「ハア……」

僕は止まりその攻撃を待ち、

刃鬼輝「ハッ！！」

輝になってそれを叩き落とし、烈光弾を連続で放つ

北都「グッ！？……ただの鬼風情が、凶に乗るなああ！！」

北都はそう叫びながら上下左右から時間差で攻撃が来た。

刃鬼輝「ハッ！ホッ！ヨット!？」

上から来たのを右に避け、左右から来たのを音撃棒で叩いて軌道をずらし、下から来たのをバク転で避けると、

北都「食らえ!!！」

ザシュ!!！」

真正面から鋭い突きが来て体に刺さり、赤い血が出てくる……

月音「刃鬼君!!！」

月音君が叫ぶが北都は顔をゆがめた。

北都「くっ……固い!？」

刃鬼輝「グッ!？だが……捕まえた!!！」

僕は胸に浅く刺さった爪を掴み、胸から抜き

刃鬼輝「ウラアア!!！」

ハンマー投げのように投げ飛ばし、僕は真・光震天を取り出しそれを空に投げ出すと

パカッ……パシュ!

刃鬼輝「へ？・・・まじかよ」

光震天の真ん中に線が入ると中から小さな鼓が飛び出し僕の目の前で小さな鼓と大きな鼓が展開されるが・・・それは和太鼓というより

刃鬼輝「ドラムだね・・・とりあえずソレッ！」

僕がそうつぶやくと北都立ち上がりこっちに向かってくる前にまづ橋の小さな鼓を叩くと素早い波動が出て当たるが少し足を止め、すぐにこっちに向かってくる。次に大きな鼓を叩くと大きな波動が出るがそれは避けられた。

刃鬼輝「つまり・・・小さい方は速度は速いが威力は小さい足止め用、大きい方は威力は大きいけど速度が遅い攻撃用か・・・なら！」  
僕はそれぞれの特性を生かし北都に音撃を決めた。

刃鬼輝「ハッ！フッ！ハッ・・・ハッ！ハッ！フンッ！」

北都「があ！？なんだこれは！？」

僕が音撃を決めて姿を見てか月音君は

月音「なんかのライブみたい・・・」

僕は叩くスピードを上げ、

刃鬼輝「音撃打「天上天下」の型！！」

僕は音撃を決めたが、やはり元人間の北都には効果は薄く

北都「グツ・・・だが!!」

北都は動き出すが僕は背を向け

刃鬼輝「僕では駄目だったけど・・・後は頼むよ月音君、萌香さん・・・」

北都「貴様らごときのカスに全存在を懸けた俺を止められるものか!!・・・!?!」

僕がそうつぶやいたその時、北都の前に裏萌香さんと月音君たちが来て、

裏萌香「止められるさお前は所詮一人私達に託された思いはお前の覚悟なんかよりずっと重いんだよ。」

月音「あなたは僕達で止める!!」

そう言い、裏萌香さんは蹴り上げ、月音君は右ストレートで北都を倒したが、その時大きな揺れが起きた。

北都「聞こえるかこの破滅の音が全て計画通り…もうすぐ大結界は解除される。今こそ終焉の時だ。」

月音「モカさん・・・」

裏萌香「ちつ予想より早い何とかしてこいつを止めなければ・・・」

その時、遠くから

????「「「まだ諦めないで下さい!!!」「「「

僕達が声の方を向くと紫ちゃんを持ち上げてきている胡夢さんとみぞれさんを持ち上げてきている瑠妃さんが来た。

裏萌香「お前達・・・」

月音「どうしてここに・・・!?!」

瑠妃「理事長が移動魔法で送ってくれました。力を貸すように・・・と」

胡夢「つくねー無事でよかったよ!!」

みぞれ「刃も無事で何より・・・」

月音「皆・・・」

刃鬼輝「鍛えてますから・・・紫ちゃんこの結界をどうにかできるか？」

紫「はいですう!そもそも結界というのは術者の「妖気」をエネルギー源にして作られています。大結界といえどもそれは同じはず...今...すでにそのエネルギーは半分近く失われてしまっているそうですね。でも、今ならまだ失った分の妖気を私達が送り込めば大結界は再生できるはずですう!!」

月音「そうなの！？さすが紫ちゃん」

みぞれ「ていうことは…ココから妖気を送り込めばいいのか？」

月音「ねえ、それって俺にもできるのかな？」

刃鬼輝「月音君はダメだろ！！」

紫「そうですうそれ以上妖気を使うと死んじゃいますよ」

刃鬼輝「僕は…妖気がないorz」

僕が落ち込んでいると月音君を除く皆は台座に手を当て

胡夢「これなら楽勝ね…」

みぞれ「これも…刃のためだ…頑張るか…」

刃鬼輝「今は刃鬼だけど」

瑠妃「それと刃さん」

刃鬼輝「ん？どうしたの瑠妃さん？」

瑠妃「理事長とザンキさんからの伝言で鼓を地面に設置してみてくださいと言っていました。この大結界は少し違うところもあるので・と」

刃鬼輝「おう！！」

紫「それでは一斉に全力で行きますよ」

皆は一斉に魔力を送り僕は地面に鼓を展開して音撃を打ち込んだ。しかし高ランクの妖怪が集まっていたが、最初に紫ちゃんがダウンして、最後には裏萌香さんだけしか立っていない、僕も意識がなくなってきたが、

刃鬼輝「ぐっ・・・まける訳にはいかない・・・この僕達が過ごした学園を壊すわけにはいかない・・・」

月音「そつだよ・・・」

裏萌香「……！月音…何のつもりだ？まさかお前…ダメだお前はすでに力を使い果たしているんだぞ…！」

月音君は裏萌香さんの言葉を無視して立ち、

月音「北都さんは「変えたい」って言ったんだ。「暴力だらけのこの学園を変えたい」、「少しでも平和にしたい」………って……」

僕はそついった月音君に

刃鬼輝「月音君、君の覚悟はわかった。だから言わせて貰うよ…死ぬなよ。」

僕はそつ言う意識が途切れ、次に意識を取り戻したのは病院のベッドの上で最初に見えたのは涙目の瑠妃さん達であった。

僕が意識を失った後の事を聞くと月音君が妖力を送っている時に







とつぶやき、目を閉じた・・・

刃「やべ・・・筋肉痛が痛くて寝れねえ・・・」

結局その日の晩は寝れなかった。

第11話「地下での決戦」(後書き)

今回は混沌とラブな学園祭!!

果たして安達明日夢は螢糸の蜘蛛の糸から逃げ切れるのか!?

第12話「親父襲来!!&初めてのチュー」(前書き)

はい、ギャグとカオスとラブな回です!!今回キャラ崩壊がひどいキャラがいますので注意してください!!

それではどうぞ!!

## 第12話「親父襲来!!&初めてのチュー」

第12話「親父襲来!!&初めてのチュー」

刃「月音君、ついに始まったな・・・」

月音「そつだね・・・」

僕達は二階から学園祭でにぎわっている校内を見た。

月音「北都さんの言った通りだね。」

北都さんはある日忽然と病室を抜け出したそつだ。

刃「そつですか・・・では月音君はクラスの方をお願いします。

僕は公安の方へ行きます。」

僕と月音君と別れ、公安の所へ行つた。学園祭の間、公安は迷子を探したり、喧嘩が起きた際の鎮圧、気分が悪くなった人を保健室へ運んだりすることになっていて、保健室には明日夢兄さんといづもの包帯グルグル卷子先生がいることになっている。

刃「やあ、何か仕事はあるかい？」

九曜「いえ、今は何も「ヒヤッハー!迷子を見つけましたぜ!!」  
そつか」

モヒ安の一人が小さな男の子を連れてきた。するとモヒ安が男の子の顔の高さまで腰を降ろし、

モヒ安A「ヒヤッハーお名前はなんて言うんだああ！？・・・田中羅王か・・・いい名前だな！！」

モヒ安B「今日はお父さんと来たのか？お母さんと来たのか教えてくださいやあ！！お兄さんたちが探してあげてやるぞヒヤッハー！！」

モヒ安C「連絡を入れるぜえ！！・・・あゝ　市からの起こしの田中花子様、羅王君がお待ちになっておりますので一階公安員会受付まで来てください。・・・連絡を入れたからあと少しで来るんだぜヒヤッハー！！」

刃「ねえ、九曜さん・・・彼ら喋りにくくないですか？」

九曜「ええ・・・ああいう子にはもう少し優しくないと「ジョイヤアアアア！！」ホラ泣き出した。」

刃「・・・あれ子供の泣き方か？世紀末霸王な感じがするんだけど、」

九曜「あれは私がかしますから刃さんは今まで頑張ってきたのですから学園祭は楽しんでみてください。」

九曜さんは熊のぬいぐるみを取り出し男の子の方へ歩いていき、僕も公安のブースから出るとザンキさんが来た。

ザンキ「ああ、ジンキここにいたのか、ちょうどよかった」

刃「どうかしたのですかザンキさん？」

ザンキ「実はさつき立花から電話がかかってきてな・・・」

刃「魔化魍ですか？」

ザンキ「いや、今日と明日の二日間、鬼が数名ここに来るそうだ。」

刃「マジですか・・・今日は誰が？」

ザンキ「え〜っとアマキとキョウキと・・・後エイキ」

刃「ええ！！・・・皆はもう少しで来ますよね。」

ザンキ「エイキだけなら今ここでお前が小声でもあいつの名前言ったら間違いなく来るな」

刃「デスヨネー・・・はっ冷氣！？」

僕が後ろを振り向くとみぞれさんが立っていた。

みぞれ「刃、少しいいか？」

ザンキ「うお、白雪！？」

刃「君の忍び足スキルは欲しいくらいだよ・・・で、どうしたの？」

みぞれ「実はお前を会わせたい人がいるのだが・・・」

刃「ああ、それくらいならいいけど誰なんだい？」

みぞれ「実は…学園祭を見学にうちの母が来てしまったんだが…刃に会わせるとしつこくてな」

ザンキ「白雪の母親がなんで刃に…」

突然ザンキさんが固まり、僕もその方を見ると…

刃「すでにいたよ！しかも柱の陰からこっちを見ているだど！？」

ザンキ「あの覗きっぷりからして、あれは間違いなく白雪の母親だよな…」

刃「ええ…口にチュッパチャップスを加えていてあの髪を感じからしてそうでしょうね…認めたくありませんが、」

みぞれ「…出てきてもいいぞ、母よ…紹介しよう彼が小学校の時私を守ってくれた“私の将来の夫”だ。」

刃「どうもみぞれさんのしょ…ええええええ！？」

ザンキ「夫って紹介としておかしくないか！？」

僕達は外へ設置された席へ移動する際にみぞれさんが教えてくれたそうだがその時将来の夫と説明したそうだ…振ったはずなのに、いやまでポジティブだな！断れなかった僕も僕だけどころか最後に

みぞれ「まあ、どの道お前と私は結ばれる運命なんだから問題な

い。」

僕は席に座り向かい側に座るようにみぞれさんの母が座ると

つらら「初めましてみぞれの母のつららでございます。」

と頭をペコッと下げて自己紹介始めた。

刃「あ、これはどうも自分は「松坂刃さんですね」「はい、」

つらら「娘からは話は伺っています。」

と上品な感じで話は進んでいるが相手はみぞれさんの母親だ。どんな曲者かわかったもんじゃない！！と警戒しながら話を聞いていると

月音「あれ？財津原先生どうかしたのですか？」

萌香「刃君とみぞれさんと・・・誰ですか？」

ザンキ「母親だそうだ。」

月音「へ〜結構きれいなんだ。」

瑠妃「あれ？刃さん誰と・・・？」

ザンキ「橙条！？今はちょっとやばい」

と後ろからそういう会話が聞こえたとき

つらら「後ろの方はお友達かしら？」

と僕が答えようとした時

みぞれ「男の方は私が刃の事を忘れていた時に恋をした月音で、その隣のピンクの髪の女は月音の彼女の萌香、その隣の黒いのが刃の“おっかけ”だ。いつも刃に色だして誘惑をしている女だが気にしないでいいぞ。」

つらら「まあ、」

刃「ザ・瑠・月・萌」「」（それはお前あなたの方だろ）でしょ  
！！）」「」「」

僕達が心の中でツッコむとつららさんは

つらら「それで結婚はいつ頃にと考えてらっしゃるのかしら？」

と言った・・・

刃「え？・・・な、何をおっしゃられて!？」

つらら「あらっ？うちのみぞれと交際をしているのでしょっ？」

刃「ええ!?!いや、その〜ですぬ付き合い始めたばかりですからまだ早いでしょうし、第一・・・」

僕がつららさんに自分はみぞれさんをふったと言おうとしたとき

つらら「・・・考えてない・・・？交際をしているのに・・・結婚は考えてら

っしやらないの?」

パキイン!

すると手に持っていたコップの飲み物が凍り、刃物となった。

刃「おおい!? ちょっと止まってください!! 自分は考えてますが、自分の父が猛烈に反対をしているのですよ!! その説得がまだできてないので結婚は少しばかり難しいのですよ!!」

僕はそう言うつららさんは氷を戻しながら

つらら「あら、そうなの? ごめんなさいね私感情的になると氷で刃物を作っちゃう変な癖があつて…」

刃「さ、左様ですか・・・」

つらら「では結婚する気があるのですね?」

刃「いえ、それはまだ(パキイン!!) はい、あります!! 許可をもらったらすぐやります!!」

ザンキ「(早く来いエイキ!! お前の息子が大変なことになって  
いるぞ!!)」

～そのころのエイキ～

エイキ「ええい!? はなせキョウキ、アマキ、息子が俺を呼んで  
いるんだ!!」

キヨウキ「だからと言ってバスの窓から飛び出そうとしないでくださいよー!!」

アマキ「向うにはザンキさんがいるので安心してくださいー!!」

エイキ「は〜な〜せ〜今日、刃に会うために今までエイキを養った俺に不可能はない!!」

キヨウキ「こんな時にもそのギャグは言うのですねー!!」

アマキ「どおりで今まで魔化魍に手を抜いてきたのはそのためですか!？」

〜となっていた

つらら「素敵な方じゃないみぞれ、私も気にいったわ。それじゃ私はちよつと校内を回るけど夕食は一緒に食べましょうね。もちろん刃さんと刃さんの親と一緒に」

刃「ウエ!?自分もですか!?!しかも父さんもですか・・・ザンキさん」

つらら「では・・・小さいころのみぞれの事も話したいので」

と言って去るとザンキさんと瑠妃が鬼気迫るか表情で

ザンキ「白雪、どういふことだー!!」

瑠妃「どういう説明をしたのですか!?!しかもみぞれさんは一回振られているじゃないですか!?!」

みぞれ「まあ、母に説明をしたのは振られる前だし、心替わりもあるだろうから問題はないだろ、」

ザンキ「大ありだ！お前に説明はしてなかったし瑠妃は人間界に行って知ったが、刃との交際をしたかったら俺を含め後11人の人から許可をもらわなければいけないのだぞ！！」

みぞれ「大丈夫だろう。私はどんな奴が来ても大丈夫だ。」

瑠妃「ストーカーが何を言うのですか！！」

ザンキ「大体なあ「つくね　！！」・・・黒乃か」

ザンキさんが説教をしようとした時、月音君に胡夢さんがジャンピングがみつきをして離れると

胡夢「何してるの搜したんだよつくね〜〜〜！」

ザンキ「またややこしくなりそうだ・・・今度は青野の方で」

ザンキさんが頭を抑えると胡夢さんは後ろを振り向くと

胡夢「こっちこっち〜いたよ！やっと見つけた。」

そういうと一人の女性が来た。

月音「…え？くるむちゃん…その後ろにいる方は…？」

胡夢「あっ…紹介するねいつかつくねに会ってもらいたかったん

だ〜私のお母さん！」

ザンキ「やはりか・・・これであいつが来るとなると・・・はあ」

瑠妃「ザンキ先生、しつかり！」

アゲハ「初めまして〜私はアゲハっていつの君がくるむの婚約者の月音君かあ〜そして後ろの子は愛人候補の女の子達ね？」

萌香「今度は愛人・・・」

みぞれ「私は将来の刃の妻だ」

瑠妃「刃さんは私の彼です！」

ザンキ「どいつもこいつも・・・ぐっ」

アゲハさんは月音君に近づき、何か話していて耳を傾けると

アゲハ「君無理やり襲っちゃってもいいから」

月音「ナナナナナナナナ！?!?!?!」

アゲハ「今夜夕飯でも一緒にどう？」

と言いさらにアゲハさんは月音君の手を自分の胸に当てながら

アゲハ「男と女の愛し合い方：体で教えてあげる。」

と言った。月音君は鼻血を出していると僕に気付き

アゲハ「あら？君もなかなかいいじゃない鍛えぬいている身体、  
穢れを知らないその眼差し…私色に染め「お母さん!?」「コホン・  
・あなたもご一緒にどうかしら?」

刃「(ターゲット、ロックオンされたああああ!?) いえ、自  
分は先約がありますので結構です。」

アゲハ「あらそう? いいじゃない気に入ったのだから構わないじ  
やな〜い。」

刃「いえ、みぞれさんの家族と先約があるので断らせていただき  
ます(ザンキさ〜ん助けてください!!!)」

僕は断りながらザンキさんにアイコンタクトを送ると

ザンキ「(いや、無理だ。オレも鬼のようにたくさんの人を愛し  
たが妖怪で人妻は初めてだ。)…黒乃、お前の種族はなんだっ  
たか?」

胡夢「サキユバスです…お母さんがあそこまで気に入るのは  
初めて見ました。」

ザンキ「(刃…すまん!) すいませんがうちの生徒に変なこ  
とを吹き込まないください。(俺にはこれくらいしかできん)」

刃「ザンキさああああああああああああん!! (マジ  
センキュウウウウ…むしろ斬鬼ユウ?)」

アゲハ「まあ、今日は諦めるけどまた今度お茶でもしましょうそ

れじゃあバイバイ」

と言つて上機嫌で去っていったが、

月音「刃君、大丈夫？」

胡夢「あんなにうれしそうな母さんは初めて見たけど・・・顔死にそうになっているよ」

刃「無理・・・死にたい。瑠妃さんとの先約があつたのに・・・」

瑠妃「刃さん、私は大丈夫ですから白雪さんとの食事を楽しんでください・・・それでは！」

萌香「つくねも楽しんできたらいいいじゃない!!」

刃「瑠妃さん!!・・・クソツ!!」

月音「モカさんっ!?!」

悲しそうな顔で去っていく瑠妃さんを止めれなかつた僕が地面を殴ると

紫「モカさんあつ見つけたですう皆さんこんなところにいたのですか〜探したのですよ〜実はうちの両親が遊びに来ちゃつて刃〜!!!」

ザンキ「ついに来てしまつたか・・・」

月音「え!?!」

僕達は声の方向を見るとこっちに向かって男の人が突進してきた。

刃「ザンキさん・・・」

ザンキ「とりあえず・・・八つ当たりするか」

僕達は突撃してくる人達に向かって立ち同時にジャンプして空中で半回転しながら

刃「食らえやあああああああ!!」

ザンキ「落ち着けこのアホおおおおおおおおお!!」

??「グハア!?!」

僕とザンキさんは突撃してきた人にバーニングデイトを食らわし地面に叩きつけると

キヨウキ「ああ、だからあれほど言ったのに・・・普通に会えと・・・」

アマキ「というよりよくジンキ君の居場所がわかりましたね。」

遅れて兄貴と姉御が来て今まで固まっていた月音君が

月音「あの刃君、その人達は」

刃「ん?ああ、両方とも僕の先輩鬼で男の方はキヨウキさん、僕はキヨウキの兄貴と呼んでいて、女の方はアマキさん、こっちはア



んに振られたの!?!」

刃「それだったら今ごろ自殺を凶ってますよ!!それより精神的に辛いものですよ。」

僕がそういと父さんはキリツとした顔になり

エイキ「何があったんだ刃!父さんに教えてくれ」

ザンキ「それについては俺から説明する実は・・・」

ザンキさんが説明した後

キヨウキ「ジンキ・・・どうしてお前ばかりが!!」

アマキ「キヨウキさん!今はそういう時ではありませんよ!!しかし大変ですね。」

ザンキ「ああ、刃は今日を楽しみにしていたからな。瑠妃さんと一緒に楽しむつもりだったらしい・・・だが白雪の母親と食事をさせられることになり拳句の果てには黒乃の母親から狙われて・・・そのうち姫に告白されないよな?」

刃「それは嫌ですよ!!せめて声的に女の童子の方がいいです(混乱しています)!!外見は女、声が男なんて嫌です!!それならスーパ―姫に人生相談された方が何倍もいいです!!(かゝなり混乱しています)」

キヨウキ「落ち着けジンキ!?!でも・・・」

エイキ「しかし君があの子供だったのか・・・」

みぞれ「お久しぶりです・・・あの時は助かりました。」

エイキ「元気そうで何より・・・」

アマキ「まさかあそこまで普通の会話をするとは・・・」

キヨウキ「ああ、でも本当にどうにかしないと瑠妃さんと月音君の彼女の萌香さんだっけ？その人もかわいそうだな・・・」

アマキ「そうですね・・・ジンキ君には恩がありますから返さないと・・・」

僕達が考えていると

みぞれ「いや、今回は私のせいだから・・・私が何とかするさ・

・・・」

胡夢「え！？みぞれ、あんた何普通の事を言っているの!？」

みぞれ「当たり前だ・・・お互い好きな人の悲しい顔なんて見たくないだろ？それに今回はお互いに少し頭を冷やす必要があるのだろっ。」

胡夢「そうだけど・・・でもどうやってやるの」

エイキ「みぞれちゃんのほうは俺が殴りこんで有耶無耶にする」  
とができるけど、それだと月音君のほうはどうにかできないし・・・

「

キヨウキ「ならそつちは俺の方が「刃さん！！大変です！！」ん？」

キヨウキの兄貴達が話しているときに九曜さんが来て

ザンキ「どうした九曜？」

九曜「実は白髪を着物を着た女性と胸元を大胆に開けた女性が喧嘩を始めました！！しかも妖怪化を解いて、片方は雪女、もう片方はサキュバスと判明して今取り押さえています。相手が強くどうしようもできません！！」

それを聞いた時エイキ父さんは手をポンとして

エイキ「よし、それは俺とザンキと新人二人で取り押さえるだから刃と月音は彼女の元へ行け！！」

月音「ええ！？」

刃「父さん！？いいのですかそれは本来僕の仕事で父さんは！？」

エイキ「刃・・・少しは親らしいことさせてくれよ・・・それと後で俺にも紹介してくれよ。行くぞザンキ、キヨウキ、アマキ！！」

ザンキ「はい！！」

キヨウキ「エイキさん・・・」

アマキ「わかりました！九曜さんその場所へ案内してください！

「！」

九曜「はっこちらです！」

父さんたちは九曜さんの案内で喧嘩をしている場所へ向かい、僕達も

刃「月音君、行くよっ！！」

月音「う、うん！！」

それぞれ反対側に走った。その後僕が瑠妃さんを見つけたのは学園から離れた所の崖であった。

刃「瑠妃さん……」

僕は瑠妃さんの名前を呼ぶと瑠妃さんは慌てて手を動かしてこちらを向くがその顔は真っ赤になっていた。

瑠妃「刃さん……どうしてここに？白雪さんの家族とご夕食を取っていたのではないのですか？」

刃「それなら胡夢さんのお母さんと喧嘩を初めて今は恐らく父さんたちに捕まっているよ……それとごめんなさい！！」

瑠妃「え……？どうしてですか？」

刃「僕は瑠妃さんと一緒に学園を回るって約束をしたのに破ってしまった……ごめんね。」

瑠妃「いえ、そんなあんな感じにのど元に刃物を突き付けながら言われたらそう答えるしかありませんよ。」

刃「まあ、そうかもしれないけど……でも一応考えていたんだよ結婚は」

瑠妃「え？そうですよねこんな私より白雪さんの方が「いやそこじゃなくて」え？」

僕は瑠妃さんに近づきながら

刃「その、もし結婚できたら子供ができて、僕も鬼を頑張りいずれ引退の時が来るから、その時は奥さんと一緒に甘味処をやって、後輩の鬼を育てたりしたいけどその時の僕の隣は白雪さんではなく……」

僕は瑠妃さんの前に来て、その両肩に手を置きまっすぐと瑠妃さんの顔を見ながら

刃「瑠妃さん、あなたなんです。それに前にも言いましたが瑠妃さんの家族になってあげると……」

僕がそう言うと瑠妃さんは笑顔で

瑠妃「刃さん……そのセリフはくさいですよ。」

と言われ僕は離れながら

刃「え、そうなんだ……ごめんこんくさいセリフしかできなくて……orz」刃さん顔を上げてください「ん？どうしたの」

僕が顔を上げた瞬間瑠妃さんの顔が近づき、僕の唇にやわらかい何か当たり、瑠妃さんは僕から顔を離すと舌をだし

瑠妃「これで許してあげますよ刃さん」

僕はポカーンとしたがすぐにキスされたとわかり、

刃「る、るるるる瑠妃ちゃん！？いいいいまのってキシユですかああ！？（混乱しています）」

瑠妃「はい、それにしても刃さんって初心なんですね。」

刃「まままま、まあね！！」落ち着いてくださいよ」「お、おう……」

僕は深呼吸して落ち着くと

刃「瑠妃さん、あなたから攻める時もあるのですね……」

瑠妃「刃さんが来ないから……」「ごめん」でも私が最初にやりましたから次は刃さんがしてください」「

刃「ええ！？やるのですか」

瑠妃「あ、無理ならやらなくても「やるよ！！」「ええ！？」

僕は瑠妃さんを抱きしめながら、花火が打ちあがっている時、今度は僕から少し長めの接吻をした……何でキスじゃないって？こちのほうか場所とかを略せるからいいかなって、そして僕は瑠妃

さんから顔を離すと瑠妃さんは顔を赤くしながら

瑠妃「これで、白雪さんよりリードしましたね。」

刃「やめてくれよそんな言い方まあ、でもなんかこれで本当のアルバイト」刃アアアアアアアアアアアアアアアア「うえ!?!」

僕が後ろを向くとそこには

ザンキ「花火をバツグにキスとはロマンチックだなあ、おい」

アマキ「なんか少し出来の悪い恋愛ドラマを見ていた気分です。」

キヨウキ「いいよなあ…グスツ…この憂さ晴らしにさっきのシーンを映像化したから立花に送るぞ!絶対送るからな!!焼き回しして色んな支部に送るからな!!」

とニヤニヤしながら見ていたザンキさんとアマキの姉御と涙を流して片手にビデオカメラを持っていたキヨウキの兄貴がいてその前に……

エイキ「刃アアアアアアアアアアアアアアアア!!お父さんは許さないから!!お父さんより先に女の子とキスなんて許さないからああアアアアアアアアアアアア!!」

血の涙を流している父さんがいた……というよりも……

刃「父さん、まだ女の人とキスしたことないのですか!!」

こうして初めてのキスはして学園祭初日は終わったのである……

それとキヨウキ兄さんの行動はザンキさんとおやつさん小暮さんの手により阻止されたが、小暮さんが僕の成長日記として保管して見せてと言ったら見るのが可能でコピーもするらしい・・・なんとという公開処刑！！

それとアマキの姉御と九曜さんは仲良くなってしまいました・・・マジな話でしかも僕の正体もばれてたし、人間を恨んでないって言うってた・・・心を清めすぎたか？やっぱり百発百中ではなく閃光連打の方がよかったかな・・・そんな思いをした日であった。

みぞれ「私はまだ負けないぞ・・・」

## 第12話「親父襲来!!&初めてのチュー」(後書き)

### 今回の猛士報告

刃がああああ刃がああああ!!

b y エ イ キ

おやつさん「いや、わかんないから」

イブキ「アマキの報告だと刃君が瑠妃さんとキスしたそうです。」

日菜佳「ほゝ今の子は進んでいるんですね」

トドロキ「でも、ザンキさんの方からは人妻にロックオンされたそうです。しかもその人“さきゆばす”っていう種族だそうです……」

おやつさん「なんでだろう……ジンキ君からはなにかフェロモンとか分泌しているのかな？」

小暮「しかし情けないぞ!!」

イブキ「誰がってもしかしてさっきの人の事ですか？」

小暮「そうだ!娘もいるのにほかの男を誘惑するとは情けない情けない情けない!!今から私も陽海学園に向かうぞ!!」

おやつさん「まあまああ、すでにザンキ君がお説教したそうですから……安心してください」

小暮「そうか・・・なら今から刃の為にもアームドセイバーを作るか！」

みどり「え？刃君、使えるのですか？」

小暮「いや、知らんが、そのために響鬼を行かせたのだ!!！」

今回の金言「刃君、ご愁傷様」と「次のステップに行きますか？」

by白菜佳」

次回はヒビキさん登場!!・・・でもあの人の性格を崩さないように気を付けないと応援よろしくお願いします!!

第13話「噂をすればなんとやらの的中率は恐ろしいほど高い：前編」(前書き

第13話投稿しました！！今回はジんキの初変身エピソードを入れたみましたので楽しんでもらえると幸いです。・・・でも初期設定とは大きく変わるかもしれません。が気にしない方向でお願いします。

### 第13話「噂をすればなんとやらの的中率は恐ろしいほど高い：前編」

第13話「噂をすればなんとやらの的中率は恐ろしいほど高い：前編」

僕は公安のブースの机に顔を乗せながら

刃「学園祭二日目~~~~~!!!!つと九曜さん仕事ある？」

九曜「ありませんよ。彼女の瑠妃さんとイチャではなく一緒に行動すればいいじゃないですか。」

刃「いや、僕もそうしたいけど瑠妃さんは理事長の方に用事があるって今は一緒に行動することもできないし、ザンキさんもサバキさんのピンチヒッターでいないからどうしようもないのだよ・・・てか九曜さん人間を恨んでないって姉御から聞いたけどマジ？」

九曜「ええ、今周りに誰もいないから言いますが貴方が人間だということも知っています。が今まで私は人間をただの下等なものと思っただけですが、刃さんと月音に敗れ初めて知りました。人間は下等ではないと・・・」

刃「もちろん人間にもひどいことしか考えられない者もいる・・・でも僕の先輩方のようにいい人もいる。」

九曜「そうですね。それが妖怪においても同じですよ。案外人と妖怪というのは似たもの同士なのかもしれませぬね。」

刃「そうかもね〜・・・じゃあ僕は月音君の所へ行ってからかってくるよ。」

九曜「そうしてください・・・後、アマキさんに私の事をよく言っておいてください!!!」

刃「ああって、偉い惚れたな!!!」

九曜「ええ、私は強い女が好きですから!!!」

刃「わ、わかったよ伝えておく(冗談だったのに・・・予想GU Yすぎるわ!!!)」

僕は月音君の元へ行くと

紫「あ、刃さん、実は兄弟がいるのかっていう話をしていたのですけど、刃さんにはご兄弟はいますか？」

月音「そういえば昨日あった人を兄貴とか姉御とかいっていたけどほかにもいるの？」

と聞かれて僕は頭を掻きながら

刃「あ〜、血のつながっている兄弟はいないけどね元々僕一人っ子で両親が死んでエイキ父さんに引き取られ、仕事の都合上立花にいたときに姉御とか兄貴達、病院にいる明日夢兄さんもその時に知り合っただ。今では立花の皆・・・むしろ猛士の皆が僕の家族と言っべきかな？」

萌香「そうなんだ・・・4姉妹の私よりなんか大家族を感じだね、

財津原先生もそうなんだよね？」

刃「そうだよザンキさんは尊敬する人でもし・・・順位をつけるとしたら二番目かな？」

紫「え？一番目は誰なんですか？」

紫ちゃんがそうというと僕は

刃「一番はヒビキさんって言うんだけど鬼神の二つ名を持つ人なんだけど・・・」

萌香「鬼神ってなんか財津原先生より怖そうな顔をしてそうだね。」

刃「実は怖くなく優しい人で、いつも明るく、ふらっと現れては人の悩みを解決してふらっと立ち去る・・・たとえるなら大自然な感じかな・・・でも機械音痴なんだよね。僕が教えるまで携帯なんて使えなかったもの。」

月音「へへ名前からするとその人も鬼なんだ。」

刃「うん！！強さなら猛士・・・かな？僕もあの人の足元にも及ばない・・・強さも優しさも・・・心の大きさもね。僕のやる“シユツ”はヒビキさんが元祖で僕も許可を貰ってやっているんだ。」

月音「へへ、俺も兄弟がいなくて年が少し離れた。従妹がいて少しわが道をゆくという感じな子だったけど俺はよく“きょう”子って言うちよつと天然？が入ったコなんだけど・・・いいかげんな両親のかわりにあれこれオレの世話を焼いてくれたな。」

月音君がそういうと僕はふと思い

刃「ねえ、月音君その“きょう”子さんのの“きょう”の漢字っ  
てもしかして“響”って漢字かな？」

月音「うん、そうだよ・・・もしかしてヒビキさんも“響”って  
漢字が入っているの？」

刃「ヒビキさんは響く鬼と書いて響鬼と呼ぶのだけどまさか適当  
に言ったのが当たるとは・・・一緒に来たりしてちなみにヒビキさ  
んはあそこのサングラスをかけた人みたいな感じなんだよ。」

月音「へえ、ちなみに響ちゃんはその隣にいるボーイッシュな感  
じの女の子なんだ。」

僕達がそう話しているとその二人は止まり

ボーイッシュな女「つつきー？」

グラサン男「おお、ジンキ元気だったかシュッ！」

僕達は固まり、

月音「響ちゃん？」

刃「ヒビキさん!？」

と呟いてしまった。



響子「大丈夫です！！つきーのことは私がよく知っていますし私自分の目には自信がありますから、いくよつきー！！」

月音「え、ちょっと響ちゃん！？わかったから服を引つ張らないで！！」

月音君の服を引つ張り中へと入って行った。萌香さんも後を追い、僕は

刃「ああ、そうだ！瑠妃さんに会ったら僕は理事長室にいるといっておいて」

紫「わ、わかりましたですう」

と言って去り、僕達は取り残され

ヒビキ「なんとというか活発な子だったね……」

刃「はい……大丈夫かな月音君……」

ヒビキ「とりあえず俺達は理事長室に行きますか？」

刃「そうですね、こちらです。」

僕達が理事長室に行き、入ると理事長と明日夢兄さんがいた。明日夢兄さんはヒビキさんを見て

明日夢「ヒビキさんっ！！」

ヒビキ「よう明日夢鍛えているか？」

明日夢「はい、医者になっても鍛えてます!!」

刃「昨日はキョウキの兄貴とアマキの姉御と話していましたね。」

明日夢「それで今日はヒビキさんと話せるのか？俺明日死ぬのかな？」

刃「不吉なことを言わないでくださいよ兄さん!!……あ、でも食われるかも……」

ヒビキ「そういえば聞いたよ明日夢にも春が来たって」

明日夢「いやいや、違いますよ!!」

刃「でも螢糸さん綺麗なんだよね！なんで普通のお付き合いでもしないの？」

明日夢「まあ、そりゃあ、螢糸さんは綺麗だけどね……」

明日夢兄さんが僕が訊ねた事に返答しにくいのか下を向くとヒビキさんが

ヒビキ「あ、そういや明日夢が俺に最初に会った時の魔化魍はツチグモだったし、その後ヨロイツチグモに襲われてたりしたから……まさかその子と蜘蛛が関係あるのか？」

刃「あ、確か螢糸さん女郎蜘蛛だったね……まさか兄さん!？」

明日夢「ああ……うんそうなんだ。」

刃「にいさん……その気持ちはわかるわ……。」

ヒビキ「でも、持田さんは彼氏出来たから明日夢もいい人を見つけたらどうよ?」

刃「ちょっとヒビキさん!?それは禁句ですよ!?!」

僕がそういつと明日夢兄さんは

明日夢「うわあああああああああ!!」

と叫び部屋を飛び出そうとしたが、僕が

刃「兄さんサキュバスの人妻で良ければ黒乃さんの……。」

明日夢「ごめんなさい!それ以上言わないでください。」

刃「よろしい……で理事長なんで僕まで呼んだのですか?ヒビキさんに用があっても僕に用はないはずですよね?」

するとお茶を飲んでいた理事長が新作の黍団子輝を一つ持ちながら

理事長「いや、実はね昔話をするついでに刃君の初变身ことを聞きたいのだよ。」

と言って黍団子を食べた。すると明日夢兄さんが

明日夢「あ、でも刃君の初变身ってコダマの時でしょ?天美さん

と一緒に変身した。」

ヒビキ「ああ、あれか・・・あれは俺もびっくりしたね。まさかまだ小学生の刃変身できるとは思わなかったけど・・・」

ちよつと昔の対コダマ戦の時、僕と姉御は威吹鬼さんを助けるために変身をした事がある。まあその後天美姉さんはその後猛士をやめそうになって、僕が小暮さんに頼んでオロチとの闘いの後鬼の素質がある姉御を一時的に小暮さんの弟子にして合宿をし鬼になったわけだけど、

刃「ああ、実はあの時の変身は2回目で初めての変身はそれよりちよつと前なんだよね。時期的に言えば「恋する鯉事件」あたりなんですよ・・・」

ヒビキ「ああ、あの時ねえ・・・話してみよ」

理事長「立ち話もなんだし・・・座ってこの黍団子でも食べてみなさい」

明日夢「刃君の新作だそうですよ。」

皆はすわり僕はお茶をすすって話し始めた。

〜回想〜

恋するカツオ事件の時、僕はみどりさんの研究室にディスクアニマルを点検してもらいに行ったときに

刃「みどりさん、この音叉なんですけど・・・」

みどり「なに？」

刃「未熟な人が使うとどうなるのでしょうか？」

と僕が言つとみどりさんは

みどり「刃君はどう思う？」

刃「僕は何も反応がなく少しだけ恥ずかしい気分がするだけなんじゃないでしょうか？もしくは鬼になっても元に戻れないとか？死ぬことはないですよね……？」

というときみどりさんは

みどり「死ぬことはないただ思いつきりはじかれて裸になったりするけど……やってみる？」

刃「そうですね……やってみますか！えい」

チーン

僕は音叉を鳴らして額に持っていていきその時は弾かれ具合でどれくらい未熟かわかるかな〜と思う程度だったので……自分の体を光が包んだと思うと

刃「……あれ？目線が高くなっているしこの手はどレキさんと同じ？」

みどり「嘘……変身できた!？」

刃「ど、どどどどどどどどどどしよう元に戻れないかも～～～！」

みどり「お、落ち着いて刃君！！今ヒビキ君を呼ぶからってヒビキ君携帯持ってないよ～～！！」

刃「あわわわわわわわわわわわ……」

みどり「はわわわわわわわわわわ……」

その後父さんが来て変身を解除する方法を覚えてくれたけど、その時に今回の事は内緒にすることにしました……僕は未熟者だし今回はまぐれということにしたんです。

～回想終了～

刃「でも、二回目に变身してからはしばらくの間変身はできずに生身でも鬼爪とか鬼火が出るようになったんです。」

ヒビキ「大変だったんだね～でも最初に鬼爪を出せたときはびっくりしたね～」

明日夢「あ、確か僕とヒビキさんとキョウキ君と一緒に銭湯行った時の事ですよね？」

刃「そうそうヒビキさんに鬼爪を出す時の感じを聞いて軽い気持ちでやったら生身でできてキョウキの兄貴、気絶しましたよね？僕あの時痛いのと訳が分からない気持ちで泣けませんでしたから。」

ヒビキ「その後くしゃみをして鬼火が出たよね～」

明日夢「で、さらにその後弱いながらも雷も出たから、立花のおやっさんの肩がコった時に雷を流してコリをとったりしていたよね？」

刃「うん、あれは小暮さんにも好評だったしそれからオロチとの決戦の間生身でサポートしたね。こわかったねあの時は一発殴られれば死ぬからな」

その時僕の無線（公安からいつでも連絡できるようにと借りた）に連絡が入り

刃「どうした？」

九曜「何者かが変化を強制的に解くマジックアイテムを持っていてそれを乱用している人がいるそうぞ至急来てください！！」

刃「了解こっちは僕一人で探してみるよ。」

九曜「は、わかりましたそれでは」

九曜さんとの通信を終えると僕はヒビキさん達に

刃「すみません！僕は仕事に行ってきます！！」

ヒビキ「おう！ああそれとお前の新しい音叉だ！！」

ヒビキさんがポケットから音叉を取り出し僕に投げ渡すと明日夢兄さんはポケットから火打石を取り出し

カチッ！カチッ！

とうち僕は

刃「行つてきますシュッ！」

と部屋から出て、走ること数分響子さんと、萌香さんが妖怪に囲まれていて

刃「くそっ！？」

僕は烈光で人間サイズの妖怪を弾き飛ばしながら萌香さん達の元へ来た。

刃「大丈夫ですかお二人とも！？」

萌香「刃君！」

響子「あんたも凶暴な妖怪なの！？だったらこっちに来ないで！」

響子さんがそう言い後ずさりすると一匹の大きな妖怪が襲い掛かり僕は烈光をクロスしてそれを防ぐ

刃「ぐう・・・重いな・・・だがハアア！！」

烈光に力を送り白い炎を作ると暑さで腕はのいてその隙に妖怪の身体に烈光弾を打ち込んだ。妖怪は数体の妖怪を巻き込みながら吹っ飛ぶと萌香さんが響子さんに

萌香「響子さんあの鏡の所まで走れますか？」

と一点を見つめながら言うと

響子「なっ…何で！？嫌よ！行ったら捕まるじゃない！？それに私あなたの事を信じてないし…」

と響子さんは叫んだが、萌香さんは

萌香「…でもつくねの事なら信じてますよね？私は妖だけどつくねのこと心から信じているんですだからここは彼を信じる者同士ちよっただけ手を組みましようよ。」

響子さんは萌香さんの一言に頷くと鏡に乗った妖精らしきものが

妖精「さああんた達あの3人を捕えて！！私もう腹ペコなんだから…！！」

と妖怪達に指示していることからあれをなんとかすればいいと判断した僕は音叉を展開し

刃「萌香さん、貴方の目標はアレだろ？あそこまでの道は僕が作るからその隙に…！！」

萌香「うん！」

響子「ねえ、あんた何をするの？」

響子さんがそう言うと僕はただ

刃「僕は人間だけど修行で鬼になれるからそれを見せるだけだよ。」

僕は音叉を鳴らし額に持っていていき変身さらに輝になって

刃鬼輝「双・烈光剣！！はあ！！」

烈光剣を二本つくり、それを左右に大きく振ることで妖精の周りの妖怪を吹き飛ばした。

刃鬼輝「今だお二人さん！！」

萌香「走って響子さん！！後は何とかしますから！！」

二人は手をつなぎ妖精のもとへ走り寄り妖精は

妖精「きゃあああああ！！？何！？何でこっちに突っ込んでくるの私を道連れにするつもり！？」

と叫び多くの妖怪が二人を襲ってきて

刃鬼輝「ハア！ハツハツ！！」

僕も一生懸命烈光で闘うが大きな妖怪相手には効果が薄くあと少  
しで萌香さん達に襲いかかろうとすると萌香さんの髪が銀色に変わ  
り、妖怪全部が吹っ飛んだが、

裏萌香「なるほど鏡を利用し十字架を外さずに私を覚醒させたか、  
能力が仇になったな鏡よ・・・人の本性など無闇に暴くものじゃな  
いってことだ。」

と裏萌香さんはかつこよく決めたが

刃鬼「僕も巻き込むなあああああ！おかげで輝が解除されたよ！！」

遅れて月音君も来たがこのことはまだ続くのであった。

第13話「噂をすればなんとやらの的中率は恐ろしいほど高い・前編」(後書き)

後編は響鬼さんが裏モカにお説教!?!というより助言をします。

楽しみにしてください!!

第13話「噂をすればなんとやらの的中率は恐ろしいほど高い…後編」(前書き)

はい、後編です!!今回響鬼さんを活躍させるつもりでしたが上手くできませんでしたが、どうか見て下さい!!

第13話「噂をすればなんとやらの的中率は恐ろしいほど高い：後編」

第13話「噂をすればなんとやらの的中率は恐ろしいほど高い：後編」

僕は立ち上がりみんなの元へ行くとみぞれさんが鏡の妖精を摘み

みぞれ「ほう…こいつがリリスの鏡か…珍しいな氷漬けにして標本にしようか」

リリスと呼ばれた妖精はひいと言ったが

刃鬼「リリスの鏡ってなんだ？」

と言うと

??「それは私から話そう・・・刃鬼、それとその「プレゼント」は気に入ってくれたかな赤夜萌香？元教師なりに気を利かせたつもりだがね」

僕達が声の方を見るとそこには目に三本の傷が入った。

刃鬼「ああ、この前の…！」

月音「あなたは…石神先生…！」

月音君達が驚いていると

石神「4か月…あれからもう4か月になるね。未だに君達にやら

れた傷が疼いて困るんだよ新聞部」

刃鬼「おまじないの効果はあったようだね。」

石神「ああ、貴様が公安と闘った後につけた傷も疼いてしょうがないよー!」

僕がそう言いながら烈光を構えると響子さんが

響子「こ…この人よつきー」

月音「響ちゃん?」

響子「この人よ!私を陽海学園に案内したのは」

月音「そ…そうか…響ちゃんにリリスの鏡を持たせたのもその鏡を使って騒ぎを起こしたのも全部あなたが仕組んだことだったんですね石神先生!」

月音君がそういうと石神先生は笑いながら

石神「お気に召さなかったのかい?私なりに学園祭を盛り上げてやりたいだけなんだが…なありリス?」

そう言い指を鳴らすとリリスは光り僕はジャンプした。そして着地して後ろを振り返るとみぞれさんと胡夢さんの変化が解けた。

刃鬼「な、なんで変化が…?」

石神「「リリスの鏡」は「本性を暴く鏡」この鏡の発する“妖気



すると陰から運転手が出てきて響子さんの肩に手を置き

運転手「安心したまえ、あの鏡の光は君や月音君達人間には効かないよただ刃鬼君には効果がある・・・それと響子君と言ったね？君は私といなさいその方が安全だ。」

すると月音君が運転手さんに

月音「運転手さん教えてください！これは一体 ……」

運転手「…簡単なことだ鏡が暴く「本性」は外見には限らん。」

刃鬼「つまり・・・欲望とか秘密と言った内面の・・・」「心」の「本性」まで暴くものなんですか？」

運転手「そうだよ・・・ちなみに今の君が浴びたら変身は解除されてしまうがね。」

刃鬼「それってつまりやb」「つくねえ〜私なんだか暑くなってきた」「月音君！！」

僕は氷を割り月音君に走りより

刃鬼「今の胡夢さんを見たら駄目だあああああああ！！」

しかし僕の叫びは月音君の耳に入って行動に移すまで行かなく

胡夢「脱いじゃってもいいかな？」

月音「ブバツ!!」

胡夢さんが何をしたかわからない（僕は胡夢さんを見ないようにしたため）が月音君は鼻血を盛大に吹き出し胡夢さんは月音君に抱き着き僕は見ないように背を向けたが

胡夢「私もうつくねの事以外はどうだっていいかも（はーと）」

月音「良くない!! てゆうか当たってるッ未知のものがほっぺに当たっているウウウ!!」

するとゴインと言う音が聞こえ地面にくずれ落ちる音が聞こえたので安心して振り向くと

紫「このメス豚がアアあなたのおっぱいには前々からムカついてたですう…揉むなら私のを揉むですう月音さん!」

紫ちゃんは月音君に近づき、

紫「このちっちゃい胸には犯罪と背徳の蜜がたっぷりつまっていますう、さアア!!」

月音「親が泣くよ紫ちゃん!!」

月音君にダイブしようとしたが

刃鬼「やめなさい!!」

と僕が服を掴み投げた。すると今度は白雪さんが自分の胸を見て

みぞれ「刃、胸なら私のもなかなかのものだぞ雪のような白い肌とチェリーのようなピンクのコントラストなんて我ながら ……」

月音「さくらんぼ さくらんぼ ……」

自分の胸自慢を始めたみぞれさんの声を聞こえなくするために月音君はさくらんぼと叫び、僕も一つの木に向かって

刃鬼「牛乳プリン！牛乳プリン！！牛乳プリンンンン！！！！」

と正拳突きをして木を折ると

瑠妃「刃さん大丈夫ですか？」

月音「良かった・・・瑠妃さんはまともそうだ。」

瑠妃さんが駆け寄るが・・・あ、

瑠妃「刃さんは私にどうしてほしいですか？」

月音「え？」

刃鬼「忘れてた・・・瑠妃さんマゾだあああああああああああああああ  
ああああ！！」

瑠妃「命令してください！刃さんの命令なら私、どんな事でも従いますから………」

とさつき倒した木にもたれながら服のチャックを降ろしながら言  
った。

月音「それ、何てプレイ!!!?ある意味一番アブノーマル!?!」

と月音君はそういうが僕は瑠妃さんの生足と見えてしまった・・・  
“アレ”で

刃鬼「グフツ!?・・・は、鼻血が・・・鬼の顔の上から出た・・・出るもんなんだね。なら、瑠妃さん命令するけど」

瑠妃「はい!何なりと!」

刃鬼「今すぐ立ち上がってチャックを上げ、普通の人らしくしてください!!それと鼻紙を・・・グフツ」

瑠妃「そ、そんなもつと厳しい命令をお願いします。」

刃鬼「た、頼むからそうしないと今この場でスッポンポンになってしまうから・・・」

みぞれ「つまりそれは私にとってチャンスだな。」

瑠妃「それは嫌です!!刃さんの命令を実行させてもらいます!」

刃鬼「ありがとう・・・うう、なかなか止まらないな・・・」

月音「もう、皆しっかりして!!」

その時激しい轟音が響き

裏萌香「フン...どうやら石神が「ゲーム」を始めたようだ。私は

行くぞこれ以上お前達にはつきあつてられん」

と言い僕達に背を向け歩き始め、月音君が

月音「モカさん！ま、待ってよ石神先生を止めるならオレも

…」

と言うが

裏萌香「バカ言え、私はただあの鏡を奪いに行くだけだ。」

刃鬼「やはりね・・・あれを使えばあなたは十字架を外さずに覚  
醒できる・・・」

裏萌香「そう、つまりはあれがあれば私はいつでも表の人格と入  
れかわる事ができると言うことだ・・・お前を使って十字架を外す  
必要もなく」

裏萌香さんはそういつと胡夢さんが

胡夢「なっ…何よその言い方つくねはあんたの十字架を外すため  
にいるんじゃないのよ！！」

胡夢さんがそう言うつと萌香さんは一度立ち止まると

裏萌香「…違うのか？少なくとも私にとって月音はそういう存在  
だったぞ。これからリリスの鏡をお前の代わりとしようお前はもう  
必要ないんだよ月音」

と言って走り去っていった僕はすぐに相棒を展開して

刃鬼「ヒビキさんにこれから言うことを録音して伝えてほしい・  
いい？」

光鷲「パイ!!」

刃鬼「それじゃあいうね……」

僕は言い終わると月音君に近づき

刃鬼「なあ萌香さんを助けに行かないのか？」

月音「え……？」

僕がそういうとポカンと口をあけ、胡夢さんが

胡夢「何言っているのよ！モカはさっきつくねにひどいことを言  
ったんだよ！！ねえつくね私が萌香の代わりになってあげるから」

紫「そうですよ月音さん!!」

胡夢さんと紫ちゃんがしがみつきながらそう言つと月音君は二人  
を離し、

月音「ごめん……モカさんの代わりなんて皆には無理だよ……」

胡夢「な、何で私はモカよりつくねの事……」

刃鬼「そうじゃないんだよね」胡夢さん、たとえば君の代わりは

誰もいない、ゆかりちゃんもみぞれさんも瑠妃さんもそれは月音君もそう……」

月音「うん俺も信じているから……リリスの鏡なんか俺の代わりなんて務まらないって、」

刃鬼「それとね……萌香さんがあぁいったのは月音君の事を案じてだと思う。」

瑠妃「どういうことですか？」

刃鬼「うん、ほら月音君は萌香さんの十字架を外すのに大けがを負ったりしたじゃないか、それでそうでもしないと闘えない自分が悔しくてリリスの鏡があつたらその心配がなくなるからね……彼女なりの配慮なんでしょう。さて行きますか？急がないと皆の見せ場がなくなるよ？」

僕がそういつと月音君は

月音「それって……どういうこと？」

刃鬼「実はさっき……ヒビキさんに萌香さんの加勢をお願いしたんだ。どちらかと言うと時間稼ぎだけでもあの人強すぎるから手加減できるかどうかかわからないよ？」

僕はそう言い茜鷹を展開、巨大化して乗った。その時光鷲が来て

刃鬼「皆、萌香さんの加勢に行くぞー！」

全員「」「」「」おおお！「」「」「」「」

私は月音達を置いて石神と闘うが私の先を読まれ、屋上の策に括り付けられる

裏萌香「グツ!? (…体が重い…何故だ…私は一体 …)」

石神「おやおや自慢の「力」はどうしたモ力?まるで表の人格のように大人しいじゃないか?」

その時私は気づいた。

裏萌香「…そうか力が出ないのはこの十字架のせいか。」

石神「…その通り十字架の封印の効果が戻ってきているのさ。リスの鏡で覚醒しても君のロザリオは外れちゃいないんだ。時間がたてば鏡の効果は弱まり十字架は再び君を封印しようとするだろう、鏡は初めから君を「孤立」させるために用意したんだよ。仲間からも!バンパイアからも!」

石神がそう言ったとき

??「それは違うんじゃないかな?」

と入口から人が来た・・・

石神「何者だお前は!」

ヒビキ「俺の名前はヒビキっていうんだジンキの鼓の師匠の一人だよ。」

と言いながら音叉をだしドアに当てて音をだしそれを額に当てると紫色の炎が出て

響鬼「はあ!!」

姿を変え鳥が刀を持ってくると石神は激しく動揺をした。

石神「その刀にその顔・・・まさかお前は・・・オロチを倒した「鬼神」響鬼!?!」

響鬼「へえ、妖怪で俺って有名なんだ・・・まあ萌香だっけ?今朝と髪の色とか違うけど君は月音と言う少年のために冷たい一言を言っただけだろうけどそれを言う時少しでも戸惑ったでしょ?刃鬼にばれていたよ・・・さて」

響鬼・・・さんはそういうと刀を構え、

響鬼「・・・響鬼装甲・・・」

と言いスイッチを押す音が聞こえると空からは鳥型のディスクアニマルが、屋上の柵の外からは猿型と蛇型が屋上への入り口からは狼型が集まり、響鬼さんに吸い込まれるように行き

響鬼装甲「ハア~~~~ツハア!!」

と赤い装甲に金色の角の姿になると

月音「モカさ〜ん!!!」

空から月音、胡夢、紫、瑠妃、みぞれが来た。

すると石神の髪は響鬼さんと刃鬼の二人によって解放され月音が来て

月音「…俺の力が必要ならそう言ってよモカさん…友達なのに遠慮してどうすんだよばかあああああああ!!!」

パキイン!!!

と言い私のロザリオを外した。何て…奴だ…私はお前の事を失つても構わないと思っていたんだ。その方がお前のためだと…なのに…なのにお前は…

石神「萌香：十字架が外れて力が戻ったか…おのれ月音…おのれえええええええ!!!」

とりあえずうるさい石神は蹴り飛ばしておいた。石神が蹴飛ばされると月音達は近づいてきて

月音「モカさんこれからよろしく…ね?」

と言いながら手を差し出してきた。私はただその手を握った。

裏萌香さんが月音君の手を握った所で理事長から連絡が入った。その内容が、

暴れる生徒達を響鬼君と一緒に片付けてくれ、報酬はドアの修理代に回すから今回は無し

とのことで、この事を響鬼さんに言い、響鬼さんと一緒に行こうとした時、

ガシッ！

と瑠妃さんが僕の腕を掴んできた。

刃鬼「どうしたの瑠妃さん？」

すると瑠妃さんは顔を赤くしながら、

瑠妃「その…雷を流して下さい！！」

刃・響「は？（・・）」

僕達は固まり、瑠妃さんは

瑠妃「いえ、実は斬鬼さんが音撃を食らったのですが、その刃鬼さんの音撃は威力が高いそうなので、やって下さい！！」

響鬼装甲「あゝ刃鬼、早いことやってあげなよ。やらないと俺達が仕事いけないし、」

刃鬼「でも、音撃弦が「今来たよ」手配上手ですねおい！」

僕は仕方なく雷光を構え、





月音「そ、そうなんだ」

刃「そういうことで月音君は家に帰って親とお話ししなさい。両親がいる事はいいことと思ってね。」

月音「刃君・・・うんわかったよ!」

刃「それじゃ、僕は行くよ・・・九曜さん!」

九曜「はっ!」

僕と九曜さんは安全第一と書かれたヘルメットを被りつるはしを片手に正門を超えて元校舎に向かった。

（数分後）

僕はつるはしを使ってやっていたが、ザンキさんと明日夢兄さんが手伝いに来る予定だったのだが・・・

刃「なんでお二人とも腰を抑えてげっそりしているのですか!」

大きな瓦礫にザンキさんは烈斬を明日夢兄さんはつるはしを杖代わりにして座っていた。

そして二人とも

ザンキ「ちよっとバケネコに襲われて・・・」

明日夢「僕はクモに襲われて・・・」

と言い、その時お昼ご飯を持ってきた瑠妃さん、猫目先生、螢糸の三名が来たが、猫目先生と螢糸さんの顔がツヤツヤしていた。それを見て僕と九曜さんは

刃・九「ああ、食われたのか……」

と言いその時瑠妃さんが

瑠妃「私もいつか……フフフフ」

変なことを呟いたが無視して作業を再開した……ああ、いい天気だな。

第13話「噂をすればなんとやらの的中率は恐ろしいほど高い：後編」

(後書き)

今回の猛士報告

ザンキさんと明日夢兄さんが食われました。

b y ジンキ

キヨウキ「そんな・・・負けた。」

日菜佳「あら~~~~明日夢君大人の階段登っちゃいましたね。」

トドロキ「ええ！？ザンキさん、明日夢、あなた達の仇は必ず自分か！？」

ダンキ「いや、違うからな！？生きているからな！？少しやつれているだけだからな！？」

アマキ「ということは次はジンキ君ですか、」

香須美「ねえ、さつき小暮さんとお父さんが温泉宿のパンフレットを持って奥に行っただけどどうしたの？」

イブキ「さあ...?」

今回の金言「ジンキ君、覚悟決めてね！」

ジンキ「何のねえ何の覚悟なんだよおお！？」

第14話「やらないか?そしてジンキ大人の階段登る」(前書き)

え、今回は色々と酷いもの(描写がひどいとか、)がありますの  
でどうか生暖かい目で見ただけだと嬉しいですよ。

## 第14話「やらないか？そしてジンキ大人の階段登る」

第14話「やらないか？そしてジンキ大人の階段登る」

僕が校舎跡を片付け終わると理事長に呼び出されて、理事長室に行く途中で瑠妃さんと出会い、

刃「おや、瑠妃さんまで呼ばれるとは・・・まさか妖怪関係の事件か!？」

瑠妃「急ぎましよう刃さん!!」

僕達は理事長室に入り

刃「理事長、何があったのですか?! 魔化魍ですか?それとも妖怪の事件ですか!？」

と僕が真面目な顔で言うと理事長は黍団子を食べてお茶をすすり言った一言は

理事長「ただの休暇だよ・・・しかも長期的なものでね、今日は無理だから明日から新学期が始まるまで君達に休暇を言い渡す。」

刃「あ、あり?そうですか・・・休暇なら貰っていたと思っただのですが・・・」

理事長「いやいや、君達は魔化魍の退治を含めこの一週間で、外で騒動を起こした陽海学園の生徒の強制送還(萌香・胡夢・紫の三人)、校舎跡の残骸の撤収作業に清掃作業とかなりの量を働いてい

るから、休暇ぐらいはいいだろう。それに暫くの間君の仕事はないからね。」

刃「左様ですか・・・僕は瑠妃さんと一緒に過ごしているのが休暇だと思つたのですが・・・まさか1?僕の部屋の壁に穴を開けたのは理事長ですか!？」

理事長「おいおい、私がそんな酷いことしたとする人間だと思つていたのかね？」

刃「僕にとつてはご褒美に等しいのですが・・・それと理事長は妖怪ですよね？」

瑠妃「私も同じ意見です。」

理事長「そのツツコミはなしだよ刃君」

実は学園祭の騒動の時ピンポイントで僕の部屋だけが何故か壁に大きな穴が開き、今まで瑠妃さんのお部屋で寝泊まりしていたのだ・・・何故九曜さんじゃないって?彼女の部屋に泊まつた方がいいでしょう!!まあ理由はもう一つあってなぜか僕と九曜さんのBL同人誌が出ているそうなんだ・・・しかも大人気僕と九曜さんがそれを初めて知ったとき

刃・九「僕(私)はノンケだ!!」

と思わず叫んだけど噂の元は僕がみぞれさんと瑠妃さんに追いかけられてた時に九曜さんの部屋に泊まつていて、それがあらぬ噂を作つたらしいので今はそれはしないようにした。

話を戻すとして休みをもらった僕たちは部屋に戻り準備をしていると携帯に着信がかり、それを取るとトドロキさんからだった

刃「はい、もしもトドロキさん、どうかしたのですか？」

トドロキ「あ、ジ、ジンキ君ツスか！？」

電話のトドロキさんはなぜか慌てていた・・・まさか！

刃「トドロキさん、そっちに紫色の髪で袖が長めの服を着ていて口にチュッパチャップスみたいなものを加えた女の子が僕の部屋の押し入れにでもいたのですか？」

トドロキ「おおっ、ジンキ君は超能力でも使えるツスか！？その通りツス！」

刃「違いますよ・・・トドロキさん・・・前にも同じことをしたのですよその子」

トドロキ「そうっすか・・・じゃなくてその子の事を聞こうとしたらエイキさんが暴れて襲い掛かり、エイキさんを止めようとしたダンキさん、サバキさんが氷漬けにされたツスよ！！」

刃「ああ・・・その子みぞれさんと言つのですが、明日学園に強制送還ですネと言つことを伝えてください。それと父さんが済まないとも」

トドロキ「わかったツス！！それと「まさかその電話の相手は刃なのか！？」うわ白雪さん！？」

電話の向こうでどたどたと音がして、ギヤアアと言つたドロキさんの叫び声が聞こえると電話に出たのが

みぞれ「刃か！？今どこにいるのだ！？」

刃「今はまだ学園の瑠妃さんの部屋だよ・・・それとみぞれさん」

みぞれ「なんだ？お前とのこづk「いや、違うから！！」ではなんだ？」

刃「・・・そこにいる人達は僕の親のような人たちでそれを氷漬けにするのは君の評価を下げるからやめなさい・・・さらに瑠妃さんの差がつくから」

みぞれ「なん・・・だと！？」

その後みぞれさんは落ち込んだのか電話が落ちる音がして、少しして

香須美「ジンキ君、と言つわけだから早く帰ってきてね！」

刃「はい・・・それではイブキさんと仲良くしてやってくださいね。」

と言つて電話を切ると瑠妃さんが

瑠妃「みぞれさん、またですか・・・」

刃「うん、まただよ・・・ハア」

どうしてまたかと言うと・・・瑠妃さんの部屋に止まった初日布団を出そうとした時に押し入れにいたのである。

瑠妃「と、とりあえず明日からの休暇を楽しみましょう」

刃「そうだね・・・でも裁鬼さんがやられたから魔化魍退治をしなければ・・・」

「そして翌日バスの中にて」

ザンキ「白雪は俺が連れて帰るから安心しろ」

刃「はい！・・・でザンキさん大丈夫ですかお肌がカサカサになってますが・・・」

ザンキ「お前達の傑作「白い悪魔」を飲んでいるから大丈夫だ・・・」

瑠妃「そ、そうですか・・・」

と話をしていると立花前に止まり、おやつさんとヒビキさん、香須美姉さんと日菜佳姉さんが白雪さんを連れて出てきた。

おやつさん「お帰りお二人とも」

ヒビキ「ザンキさん大丈夫ですか？顔色が悪いですけど・・・」

ザンキ「大丈夫だ問題はない・・・はず」

みぞれさんをバスに積み込むと（みぞれさんが落ち込んで動かな

いから）店の中から人影が出てきてザンキさんに抱き着いてきた。それは・・・トドロキさんだった

トドロキ「ザンキさああああああああああああん！！  
会えて良かったツス！俺、俺…氷漬けにされたとき死ぬかと思い、  
ずいっとザンキさんの事を考えていたツス！！」

ザンキ「戸田山・・・お前俺から卒業しただろ、それに普通俺じやなくて真つ先に日菜佳の事を考えるよ！！」

刃「そうつですよトドロキさん、ほら日菜佳姉さん泣いているよ。」

日菜佳「いえ、いいんですジンキ君、トドロキさんにとってザンキさんは特別な存在なんですから・・・私なんぞが入れる隙間なんて元からなかったんです。」

トドロキ「え！？あ、ああ！？すいませんツス！日菜佳さん、俺オロチとの鬭いの時日菜佳さんを忘れた事なんてなかったツス！！だから泣かないでください！日菜佳さんはオレの大事な恋人ツス！今度休みを作るのでその時に温泉でもお食事にも一緒に行くツス！！」

とトドロキさんが背を向けて語っているとき日菜佳姉さんはガッツポーズをした。その時僕が思ったことは

刃「（トドロキさん・・・ちよろい、ちよろ過ぎる！！）」

その後みぞれさんを積んだバスは学園に向けて発車して僕が立花に入ると小暮さんが

小暮「今だ！皆の者ジンキを取り押さえる！！」

と中国軍師みたいなことを言うと

トドロキ「すまないッス！ジンキ君！！」

ヒビキ「年貢の納め時つてやつかな？」

イブキ「ごめん！！君にはもつと強くなつてほしいんだ！！」

ダンキ「無駄な抵抗するなよ！・・・それと嫌いにならないでくれ！！」

左腕をトドロキさん、右腕をヒビキさん、右足をイブキさん、左足をダンキさんが抑え動けなくなり、

瑠妃「え〜つとえい！！」

とどめに後ろから瑠妃さんが抱きしめ動けなくなり（胸がああああ瑠妃さんの胸がああああ）、奥からみどりさんがアームドセイバーを持って近づいてきた。

刃「ま、待てみどりさん！！何でそれをもって近づいてくる！！」

みどり「ごめんね〜小暮さんがどうしてもって・・・」

小暮「お前は北は青森から南は鹿児島までいろんな鬼のもとで修行を積んできて私の修行を笑顔でやった…さらに特異体質であるお前ならアームドセイバーを使っても大丈夫のはずだ！！」

と小暮さんが近づいて言ったが

刃「本心は？」

と言つと

小暮「まあ、お前にプレゼントをしたいがなかなかいいのが思いつかなくていつそのことお前専用のアームドセイバーを送ろうかなつて……すまない。」

と小暮さんは言ったその間に僕の右手にみどりさんがアームドセイバーを握らせ

みどり「行くよ……えい！」

と下のスイッチを押すとアームドセイバーから赤い波動が出てきた。その時僕の腕に白い波動が出て、それがアームドセイバーにまとわりと僕の手からスポンと離れ天井に刺さった。

皆は僕から離れて天上に刺さったアームドセイバーを見ると

ヒビキ「なんだこの反応……」

ダンキ「俺たちとは違うな……」

トドロキ「でも俺達の場合は俺達が飛ばされたけどこれは明らかにアームドセイバーがジンキ君から飛んだと言った感じツスね……」

」

みどり「なんだろうこの反応・・・後で調べてみよう。」

小暮「ではジンキ鬼の力を使ってみてくれ・・・鬼爪と鬼火以外でな」

刃「では・・・ハッ！」

僕は拳に力を入れて雷をまとわせようとしたが

シ~~~~ン

ヒビキ「ジンキでも無理か・・・」

トドロキ「しかしこれで鬼には一か月はなれないっすね。」

おやつさん「まあ、大丈夫だよジンキ君に魔化魍の仕事は今のところないし」

刃「ええ！？マジですかおやつさん!?!」

その時おやつさんがいちまいのパンフレットを取り出し僕と瑠妃さんに渡した。それは東北の方の温泉宿のパンフレットでおやつさんから衝撃の一言が出た。

おやつさん「そこは僕の知り合いがやっている旅館でねいい温泉があるんだよ二人ともそこで闘いと雑用の疲れでもとってきなさい。」

刃「温泉か・・・いいですね〜入りたいですね〜構いませんがいつ行ったらいいのでしょうか?」

おやつさん「うん明後日かな？僕の取った部屋は結構人気で明後日なら空くらいなんだよ。そのかわりその部屋からは自然のいい景色が見れるんだよ」

瑠妃「へー私温泉なんて初めてですから楽しみです」

おやつさん「じゃあ、君達は部屋に荷物を置いて今日は疲れをとったりエイキ君に報告をしてあげなさい。」

刃「はい！いきますか瑠妃さん」

瑠妃「はい！」

僕達は二階へと上がったが、この二泊三日の小旅行が実はおやつさん、小暮さん、御子神理事長の手によって仕組みられたものだとはこの時僕達は知らなかった……。

刃「で、父さんなんで尻を抑えながら悶えているの？」

エイキ「ケ、ケツに何か鋭いものが……刺さった！！イテテテテテ」

瑠妃「あの……魔女の薬を使いますか？」

エイキ「くそ……氷漬けの次はケツに刺さるとは……あの女許さん！！」

刃「ごめん、後者は僕のせいだよアームドセイバーを使ったら手から離れて天井に刺さったんだ。」

エイキ「そうか・・・それとあの雪女の子お父さんは認めないかなー!!」

刃「はい・・・で瑠妃さんは？」

エイキ「うーん・・・まだ認めれないかな・・・？でもいい子だからなくオレもそろそろ子離れは・・・しないといけないか。やっぱ認めるか」

刃「ええ！？、父さんどうしたの!!」

瑠妃「やった!」

こうして帰ってきた初日は宴会で父さんを殴り、その翌日は筋トレをしてディスクと武器の手入れ、持っていく荷物を整理した。

そして旅行当日、僕はエイキ父さんを気絶させて、日菜佳姉さんに送られて山の中にある旅館にお昼過ぎあたりに到着した。

僕達が泊まる部屋は本館から離れていて、純和風でなかなか歴史がありそつで露天風呂までついていたが、この部屋に案内してくれた中居さんが本館に戻る際に

中居「それではごゆっくりと、彼氏さんは頑張ってください。」

と笑顔で言っていたけど、何でだろう？

僕達は部屋に荷物を置くと瑠妃さんが、

瑠妃「ねえ、刃さんこのあたりを散歩してみませんか？」

と言ったので僕も賛成して、旅館の周りを歩くと見事な森で瑠妃さんも嬉しそうに歩いていた。

刃「普通の人なら何もなければ嫌とか言いそうだけど、良い森だね。」

瑠妃「はい、でも魔化魍とか出ませんよね？」

刃「今出たら確実に困るね…旅館に戻りますか？」

瑠妃「はい…不吉な事を言つてすいません。」

刃「気にしないでくれよ、瑠妃さんは正論を言っただけだからそ  
うだ！急ぐ為にちよつと御免よ。」

瑠妃「キヤ！？」

僕は瑠妃さんを抱えて、

刃「しっかり捕まつてね！」

瑠妃「は、ヒヤイ！！」

真っ赤な顔の瑠妃さんにそう言い、僕は旅館まで走っていった。  
部屋に戻ると瑠妃さんは

瑠妃「あ、あの刃さん汗をかいているでしょうから先にお風呂に入  
つてはいかがですか？」

刃「そうだね、夕食まで時間があるから入ってくるよ。」

瑠妃「ど、どうぞ!」

瑠妃さんの様子が少しおかしかったが気にせず風呂場に行つて体と頭を洗い温泉に浸かっていると入り口から物音がして、

瑠妃「刃さん、湯加減はどうですか?」

刃「ちょ、ちょっと瑠妃さん!? な、なななな何故浴槽に!」

瑠妃「部屋の風呂は混浴だそうです。」

刃「いや、そつちではなくてですね。僕が女の方に弱いのは知ってますね。」

瑠妃「日菜佳さんからカップルならお風呂に一緒にはいるのが普通だと教えてくれたのですが・・・」

刃「多分それは、トドロキさん鈍いからその策を考えていて、とりあえず僕達で実験を試してみようと思つたから瑠妃さんに教えたと思う。」

瑠妃「そうなんですか・・・入ってもいいですか?」

刃「普通、聞くか? 寒いんだから早くお入りなさい! 温泉はいいよ!」

瑠妃「では失礼しますね。」

と瑠妃さんは入ってきたが今まで湯気でわからなかったが、

刃「る、瑠妃さん！？裸ですか！？」

僕は急いで瑠妃さんに背を向けて喋ると

瑠妃「え？何かおかしいですか？」

刃「そりゃそうでしょ！！僕男ですよ！？異性にそう簡単に素肌を晒すのはいかなものかと」

僕がそういうと背中にむにゅっと柔らかいものが当たり、

瑠妃「刃さんだから構いません・・・私のこと嫌いなんですか？」

刃「いや、そうではなくてですね僕は女の子に対する耐性がないのですよ。（転生前を含めて彼女がいた事はなし！！）」

と言うと僕の首に瑠妃さんの手が回ると

瑠妃「なら、私が付けてあげますよ・・・刃さん」

と言ったがこっちは

刃「そ、そう（瑠妃さんの胸があああ！！瑠妃さんの手がああ！！瑠妃さんの肌があああ！！）そろそろ上がらないかい？」

瑠妃「そうですね私は少し後に出ますので刃さんがお先にどうぞ。」

僕は少し前かがみで風呂場から出て急いで着替え水を飲もうと冷蔵庫を開けると

刃「ゼ にエ カップにママシドリンクに高麗人参酒・・・ん？手紙」

なんかすごいラインナップの中に白い封筒がありそれを開けると中には

刃へ、妖怪のスタミナは半端ないためママシドリンクでも飲め！！

b y 斬鬼

刃「ザンキさん・・・助言ありがとうございます！！でもやること前提なんですネ。」

と言ってひんやりとなっている封筒を折りたたみ冷蔵庫の中へ入れ直し、ミネラルウォーターとママシドリンクを飲んで瑠妃さんが出てくるのを待っていると食事が来たが、

刃「何故にスツポン鍋！？まあ寒くなってきたからありがたいこととありがたいのだが・・・なあなんか要求されている気分だよ隠しカメラはないよな！？」

僕はすぐに部屋中を捜したが隠しカメラはなく代わりに

「探さなくても隠しカメラの類はないから b y 香須美」

「安心しなさい b y おやっさん」

などと言った手紙が出てきた。もちろん父さんののは

「瑠妃コロスコロスコロス・・・ byエイキ」

と書かれてあった。僕は立花での父さんの言葉を思いだし・・・

刃「立花でのあの違いよう・・・風邪ひいてたのか。」

と結論付けて、その後瑠妃さんが風呂から出て食事を楽しんだが、食事が終わって外は真っ暗だが、まだ7時半・・・部屋にはなぜかテレビがねえ、ラジオもねえ、人もそんなにいねえ！！と言う状況なのでとりあえず布団を2枚くっつけて布団の上に胡坐をかいて座っている

刃「暇だ・・・暇すぎる！！」

と言っていると窓の方で瑠妃さんが冷蔵庫の中身を見て

瑠妃「刃さん・・・このどこかにカメラとありませんか!？」

と慌てた顔で言ったので

刃「ないよ・・・そのかわりに安心しろと言った内容の手紙があった。」

瑠妃「なら心配ないですね・・・刃さん」

刃「ん？なに？」「お酒飲みませんか」「え!？」

座っている僕に瑠妃さんは飛び込み、ドリンクを口に含むと

瑠妃「ん」

キスをして口に含んだものを流し込むと僕の体が熱く感じ瑠妃さんを押し倒して、そこから意識がはつきりとしなかった・・・

く立花く

日菜佳「ジンキ君と瑠妃さん上手くやっているでしょうかね？」

香須美「でも、あそこまでお膳立てしているからやらなきゃジンキ君は臆病だよ!！」

みどり「ジンキ君鬪いの押しは強いけど恋愛に関しては疎そうだからね」

アマキ「でも、ザンキさんから聞いた話ですとトドロキさんに恋愛のアドバイスをしていたそうですよ。」

ヒビキ「いや、でも内容はトドロキは何をしたとか、なぜ鯉を送ったとかそういう内容だけだね」

日菜佳「知識はあるけど実践できない・・・まさかジンキ君ってむつつりスケベ!？」

キョウキ「そうでないことを祈りましょう・・・。」

おやっさん「はいはい、皆もう寝る時間だよほら部屋に戻った戻った。」

ダンキ「よし、ジンキが帰ったやったかどうかが聞いてみるか？」

キョウキ「いや、やめてあげましょうよー!!」

刃「ん・・・何時だ？」

僕は目が覚め部屋に備え付けの時計を見ると

刃「え！？10時！？なんでこんなに寝てん・・・だ？」

僕がそう起き上がるうとしたらなぜか浴衣は着てなく部屋の隅にあつてマムシドリンクが転がっていた。

刃「ま、まさかね・・・そんなはずはないよな」

と僕が言つて手を横に置いた時に

むにゅ

瑠妃「ん・・・」

と声が出てゆっくりとその方を向くと瑠妃さんが寝ていたが・・・  
なぜか裸であった。

瑠妃「あ、刃さん」

瑠妃さんは眠たそうな目をこすりながら起きると

瑠妃「刃さん・・・昨日は嬉しかったです。」

刃「ねえ・・・まさか僕やってしまったのか!？」

瑠妃「えっと・・・その・・・はい／＼／＼」

僕はその言葉を聞いて

刃「ちよつと頭冷やしてくる」

と言つて風呂に向かつて歩くと

瑠妃「私も一緒に行きます・・・もう恥ずかしがる必要もありませんしその朝ご飯を食べたら・・・お願いします。」

と顔を赤らめながら微笑んで言い、僕は

刃「わかりましたよ・・・瑠妃さん」

と僕達は風呂場に向かった・・・この後の事は書くとは色々引っかかりそうなので書かないでおこう。こうして刃と瑠妃の仲はますます深くなった。ただし一つ言えることがある。それは瑠妃が口移しで刃に飲ませたのは

『彼女に×××したくなる』ドリンク

と書かれたドリンクであった・・・すげえ効果

第14話「やらないか？そしてジンキ大人の階段登る」（後書き）

刃と瑠妃が帰ってきたときの立花

日菜佳「あの二人、すごくお肌が綺麗ですね。」

おやつさん「確かあそこの温泉には怪我には効くけど美肌効果ってそんなになかったはずだけど・・・」

香須美「間違いなくやったわね・・・。」

ザンキ（帰ってきていた）「刃、強いな・・・血色いいな。」

明日夢（同じく）「しかもあの二人仲良く手をつないで入ってきましたね」

ヒビキ「熱いね〜俺でもこればかりは負けたよ。」

エイキ（旅行時40度近くの熱）「おのれ〜あの女狐め〜許さん！」

トドロキ「一体何をしてあんなったのですか？」

全員「」「」「」「はあ・・・駄目だこいつ鈍すぎる」「」「」「」

本日の金言「トドロキは恋愛の勉強をしろ！！」

明日から投稿スピードが遅くなりますが、少しの間の話は原作ではなくいろんなことをしたいと思います。

## ジんキの設定（前書き）

今回は今更ながらのジんキの設定の紹介です！！

## ジンキの設定

猛士内の名・・・刃鬼<sup>ジンキ</sup>

属性・・・光・雷

本名・・・松坂刃

身長・・・180センチ

体重・・・95キロ

性別・・・男

歳（原作のシーズン1終了時）・・・16

好きな物・・・和菓子、料理、相棒のディスクアニマル、歌う事

好きな人（Likeの方の好き、）・・・響鬼さん、斬鬼さんを筆頭にした立花の皆、新聞部の皆（loveの方の好き）・・・瑠妃さん（これだけは絶対変わらない！！）

嫌いなもの・・・バナナ、魔化魍

苦手な人・・・理事長（比較的軽め）、黒乃アゲハ、白雪つらら（この二人はトラウマ級）

顔・・・ジヨジヨの奇妙な冒険一部の「ジヨナサン・ジヨースタ  
ー」

武器・・・音撃棒「烈光」、音撃鼓「真・光震天」、音撃弦「雷

光」、鬼刃刀【雷光】、音叉剣

変身道具・・・音角、音弦（音角で変身すると右の角が音弦だと左角が伸びる）

鬼になった経緯・・・山に両親と行った時にヤマビコの姫と童子に襲われ逃げている時に鋭鬼に助けられ、その後親戚が誰も引き取らないためエイキの息子になる。最初魔化魍を許さないと思い、鬼になろうと独自に修行をするが立花でヒビキ、ザンキを初めとした鬼の後姿を見て今までの自分が間違っていたと感じ改心して修行をする。初変身から生身の状態でも鬼爪や鬼火を使えるようになり、オロチ戦の後正式な鬼になったが刃自身が自分はまだ未熟だからと言った理由で鬼の名前を持ってなかった。しかし陽海学園に行くときにザンキさんから鬼の名前をもらった。ちなみに父親のエイキからは「鈍鬼」と名付けられそうになった。

鬼の名前の由来・・・刃は音撃棒を剣にして使い、音撃弦や特性の双剣を使っていたことからそれぞれの共通点と本名から取って、「刃鬼」とザンキが付けた。また強化形態の「輝」は携帯の着メロと変身したときに周りを光の粒子が輝いていたことから瑠妃が名付けた。

必殺技・・・音撃打「閃光連打」の型：響鬼の火炎連打と叩き方は変わらない。音撃打「百発百中」の型：鋭鬼の必殺必中の型を刃は未熟者だから多くしようと思いついた技

音撃斬「雷光斬震」：鬼刃刀【雷光】を鞘である音撃弦「雷光」にセットして発動する技光と雷の力を混ぜ合わせて送り込むことで相手を浄化、爆発させる技

鬼剣術「閃光雷刃剣」：雷と光の清めの力を合わせて放つ技片方  
ずつだと光だけだと大きな光の剣が敵を切り裂く雷だけだと斬った  
直後爆発する。

音撃刃「鬼刃乱舞の型」：音撃鼓を付けて双剣で連続できる技（  
動き方はモンハンの乱舞と同じ）今はそれを雷光と音叉剣でやれる  
か只今実践中

## ジスキの設定（後書き）

今仕事の研修で携帯が1日に3時間も触れません。なので更新速度はかなり遅れますが、応援よろしくお願いします！

番外編「く、来るああああ！！あんた子持ちでしょうが！？」（前書き）

遅くなつてすいませんでした！仕事の研修が忙しく、なんとか書いたものの今回は結構短いと思いますが、楽しんでいただけたら幸いです。

それでは番外編をどうぞ！

番外編「く、来るああああ！！あんた子持ちでしょうが！？」

番外編「く、来るああああ！！あんた子持ちでしょうが！？」

ジンキ「はあ〜理事長が急用だつて言つてたから一人で来たのに・・・用事の内容が新作ゲームの受け取りかい！！」

僕が紙袋を持って叫ぶと理事長の側近の黒服さんが、

黒服「すいません、我々だとゲームを受け取る前に警察が来てしまいますので・・・」

と頭を下げながら言つと僕は急いで顔を振りながら

ジンキ「いえいえ、もとは自分が何でもお手伝いしますと言つたせいですから。お気になさらないで下さい。」

黒服「感謝します。それはこつちで預かつて理事長に渡しておきます。」

ジンキ「では自分はこれで失礼しますね。」

僕は黒服さんと別れて立花への帰り道を歩いていると僕のすぐ前に真っ赤なポルシェが止まると中から

アゲハ「あら〜お久しぶりじゃない」

と胡夢さんの母黒乃アゲハさんが出てきた。その時僕は身の危険

を感じ……

ジンキ「お久しぶりです。そしてさよなら!!」

ジンキは逃げ出した!

アゲハ「逃げなくても良いじゃない!」

しかし先に回り込まれてしまった!しかも腕を絡まれた!

アゲハ「ねえ刃君、この後暇かしら?」

と訊ねてきたが、もしここで暇と言えば何かしらの危ないアクションがあるものと考えた僕は

ジンキ「今家に連絡してみます。」

僕はアゲハさんから少し離れて立花に電話をかけた。

そして電話がつながった時

ジンキ「あっ、もしもしジンキです。じつ「ちょっと借りるわよ」へ?」

アゲハさんは僕から携帯を盗ると

アゲハ「どうもはじめまして、私、刃君のお友達の母親の黒乃アゲハと言います。はい…ええ、実は帰り道であったので色々話したい事があるそうなので…はい変わりますね。はい」

僕は話がスムーズにいき過ぎて不安をかんじその電話を取り急い

で出るよ、

トドロキ「あ、ジンキ君、立花の皆には自分が言っておくので楽しんでくるッスー!!それじゃッスー!!」

トドロキさんは言い電話を切った。この時に僕が感じた事は一つだけ…

ジンキ「(トドロキさんが出た時点で僕の負けが決まっていたか……)」

アゲハ「さあ、行きましようか?」

と腕を絡まめられ、逃げられないようにされた僕は諦めて

ジンキ「はあ…お茶くらいなら構いませんよ。」

アゲハ「やふ〜〜!!じゃあ早速行きましようか!」

こうして僕はアゲハさんに連行されるのであった。

俺が受話器を置くと、瑠妃さんが入ってきた。

瑠妃「あれ?刃さんはどこへ行ったのですか?」

トドロキ「あ、それならお友達と少し話し合ってから遅れるそうっス。」

瑠妃「お友達ですか…月音さんかしら？」

トドロキ「確か黒乃さんと言ってたッス！」

俺がさっきの電話の相手の名字を言つと瑠妃さんは固まり、二階にいたザンキさんは降りてきて、

ザンキ「トドロキ、その名字間違いないだろうな！」

トドロキ「は、はい…何かおかしいッスか？」

ザンキ「ああ、何しろ黒乃の娘は今学園にいるからな…それに黒乃の母親はジンキを狙っているからな…」

瑠妃「ザンキさん、ど、どどどうしましょう！！？」

ザンキ「とりあえず、おやっさんから許可をもらつてディスクアニマルを使ってジンキの居場所を捜すぞ！！」

ザンキさんがそう言つと立花の入り口が開き、ヒビキさんが一枚のディスクを持ちながら入ってきた。瑠妃さんは慌てながら

瑠妃「ヒビキさん！！刃さんが！！？」

ヒビキ「ああ、今さっき光鷲が来て場所わかったよ。ジンキは今黒乃さんの家にいるってさ。」

瑠妃「なら、皆さん急ぎましょう！！」

ザンキ「ああ、ジンキに嫌な思いをさせたくないしな。」

ヒビキ「何だつて同級生の母親だもんな、俺だつて嫌だよ。」

そつい言いながら出かけようとした時、ザンキさんが振り向き、

ザンキ「トドロキ、電話はどっちが先に切った？」

トドロキ「あつ、それは自分ツス！」

ザンキ「なら、今度ジンキと一緒に闘う事になったらバケガニを投げられる物と思っておけよ」

トドロキ「エエエエエエエエエエ！！？」

ジンキ「ハア……ここまで来れば休憩できるな……」

僕は公園につき水飲み場に足を向けた。今まで何があつたか三文で説明しますと、

アゲ八さんの家に行き、お茶を飲んでいた。

するとバスタオル姿でアゲ八さんが出てきた。

すぐにニビイロヘビを投げつけ、逃げた。

と言うわけである。僕が安心しながら水を飲み終わると周りの景色が歪み始め、あつという間に森に変わった。

ジンキ「コダマの森か！？」

僕が音叉を構えながら辺りを警戒していると

ヒュンヒュン！！

僕の両足に蔓が巻きつき引つ張られて行くとアゲ八さんが木の上に立っていた。

アゲ八「ハ〜イ 何も逃げなくても良いじゃない。痛い事はしないのだから。」

と手をヒラヒラとしながら言ったが、

ジンキ「このまま大人しく食われたら、身体は痛くないかもしれないが、僕の心が痛くなるのですよ！！新学期から胡夢さんにごんな顔で会えと！？」

アゲ八「も〜、そんな事気にしなくてもいいのよ〜」「よくない！！」あなたは初めてかもしれないけど私が私が愛し方を教えてあげるから安心してね。」

アゲ八さんがそう言っている間に僕は音叉剣で鳶を切り、立ち上がって

ジンキ「あ、自分既に未経験じゃないですよ。彼女と大人の階段登ってますから！！残念！」

僕がアゲ八さんにそう言い放つと少しの間固まったが手をポンと叩くと

アゲ八「じゃあ寝取りに変更ね。」

ジンキ「もっと駄目でしょう！！！」

僕はアゲ八さんにツッコミをすると、瑠妃さん、ザンキさん、ヒビキさんが来た。

瑠妃「刃さん、無事ですか？」

ザンキ「捜していたら変な森を見つけて来たが、」

ヒビキ「コダマは見つけたか？」

と辺りを警戒していたが、僕は木の上にいるアゲ八さんを指差して、

ジンキ「これはコダマの森じゃなくてアゲ八の森ですよ。」

と僕が言うと、瑠妃さんは魔具をザンキさんは武器を構えながら、

瑠妃「ではあの人を抹殺すれば…」

ザンキ「このふざけた森は消えると言うわけだな…」

ジンキ「いやいや、何物騒な事言ってるの！？しかも瑠妃さん、あなたの瞳に光が無いですよ！！ザンキさんも烈斬を降ろして下さいよー！！」

ヒビキ「そうだぞ二人共、もしジンキが食われていたら俺だって倒すのに協力するけど今ジンキの体をよく見てみる。服が乱れてないしズボンのチャックは締まったままだから…」

ヒビキさんがそう言うと僕にアイコンタクトを送り、僕は頷いて、瑠妃さんをお姫様抱っこをしてから皆アゲ八さんから背を向けて、

ヒ・ジ」「逃げるんだよー！！！！」

ザンキ「お、おい！！！！」

僕は急いで森を突き抜けて立花に逃げ帰った。

（立花到着後）

ヒビキ「上手くいったね」

ザンキ「そうだな、」

ジンキ「これにて一件落ちちゃk」ジンキ君、すまなかつたッス！

！」「トドロキさん！？」

僕達が炬燵でお茶を啜っているとトドロキさんが来て僕の前で涙目で土下座をした。

ジンキ「と、トドロキさん！？何をいきなり土下座しているのですか？」

トドロキ「いや、ジンキ君と瑠妃さんの仲を傷つけてしまうような事をしましてすまないッスー！！」

瑠妃「トドロキさん、それはもう過ぎた事ですから」

トドロキ「こうなったら切腹してこの命で責任をとるッスー！！」

と言いながら烈雷を構えようとしたトドロキさんをザンキさんと

ヒビキさんが止め、

ザンキ「ええい！落ち着け！」

ヒビキ「それほどの事じゃないからなっ？」

ジンキ「お詫びなら…あっ！今度トドロキさんの手打ちうどんを  
ごちそうして下さいよー！」

トドロキ「本当にそんな物で良いツスカ？」

ジンキ「いいですよ、トドロキさんの手打ちうどんならお釣りが  
くるくらいですよ。」

僕がそう言つとトドロキさんの顔は明るくなっていき、立ち上がる  
と

トドロキ「なら今から打ってくるツスー！」

と言いながら去つていった。そしてこの日の夕食は鍋から急遽大  
量のうどんに変わった。

トドロキ「たくさん打つたのでどんどん食べて下さいー！」

ジンキ「多いな…」

ザンキ「鬼は一人2キロって所か…」

ヒビキ「でももつとあるみたいだよ？」

瑠妃「トドロキさんやりすぎですよ…」

みぞれ「全くだ」

ジンキ「うお！？白雪何故ここに！？」

ジンキ「僕が呼びました。僕達では食べきれない自信がないので…  
後新聞部と九曜さんも呼んでます。」

月音「えっとお邪魔します。」

萌香「同じくお邪魔します。」

紫「ごちそうになるですう〜」

胡夢「ジンキ君、お母さんが迷惑をかけて御免！」

銀影「多いな…」

九曜「アマキさん、お久しぶりです。」

アマキ「あつ、九曜さんお久しぶりです。」

この後うどんを食べきってから皆にお土産を渡し、帰っていった。  
僕と瑠妃さんは着がえを取りに寝室に向かったが…

ジンキ「あれ？僕のジャージが一つがない？瑠妃さん知らない？」

瑠妃「いえ、私は知りませんよ？」

ジンキ「干してないし、何でだろ…」

僕と瑠妃さんは少し考えて

ジ・瑠「あつ、まさか……」

私は自分の部屋に戻り、刃の服を広げ着てみた。袖はかなり余り、私の腰よりも下まであった

みぞれ「かなり大きいな……私には布団にも使えるな……」

私は刃の服を着たままベッドに横になり、

みぞれ「刃……私はお前を諦めないからな。」

そう呟き私は目を閉じた。

番外編「く、来るああああ！あんた子持ちでしょうが！？」（後書き）

楽しんでいただけただけでしょうか？ここでアンケートを取りたいと思います。内容は次の番外編で書くものですが、2つあって、一つは立花にリリースが来て、トドロキさんが暴走する話か、九曜さんとアマキさんの初デート？の話のどちらがいいのか迷ってます。良かったらご意見お願いします！

ご意見は感想の所をお願いします！

番外編 part 2 「リリース来店、トドロキ暴走」 (前書き)

今回でシーズン1とシーズン2の間の話は終わりです!!!つまり  
次回はシーズン2にはいりません。

それと今回ミスターサー先生の「清める鬼と屍」からキョウキと  
ミツキにゲスト出演させていただきました!!!

それでは番外編 part 2 をどうぞ!!!

番外編 part 2 「リリース来店、トドロキ暴走」

番外編 part 2 「リリース来店、トドロキ暴走!!!」

僕が朝日課のジョギングをしに外にでるとジョギングをしていた月音君にばったりと出会った。

ジンキ「よう、月音君」

月音「あつ、刃君おはよう」

僕達は横に並び走りながら話した。

ジンキ「月音君はジョギングは初めたばかりかい？」

月音「うん、これから先何かあるのかわからないからね。少しでも鍛えないとね。」

ジンキ「そうか…今度簡単な体術でも教えようか？」

月音「え！？本当？助かるよ！」

ジンキ「それじゃあ、この先にある公園に行くかい？」

月音「お願いしますよ」

僕と月音君は公園に向かい、僕は月音君に軽く力の受け流し方、拳の握り方、人体の急所を教え軽く手合わせをした後、僕達は立花に向かうと立花の前で理事長の側近の人が立っていた…黒服姿で

ジンキ「あれ？黒服の方がどうしてここに？」

月音「ジンキ君の仕事の連絡かも？とりあえず声をかけてみたら？」

僕達は近づき、

ジンキ「どうしたのですか？立花の前に仁王立ちして」

僕の声に反応した黒服の人は僕の方を見て、

黒服の佐藤「あ、ジンキさん実は今日一日の間預かって欲しいものがあります…」

ジンキ「僕に預かって欲しいもの？なんだろう？」

佐藤さんは僕に封筒を渡すと原付に跨がり、去っていった…黒服に原付…似合わねえ！！

月音「とりあえず中に入ってから確認したらどう？」

ジンキ「そ、そうだね…入ろうか。」

僕達は立花の中に入り、奥の部屋に行つて封筒を開けると中から鏡と…

リリス「あゝやつとついた〜」

妖精さんが出てきて、僕はすぐにダンボール箱を用意して月音君

がすぐに鏡ごとダンボール箱に投げ入れ、二人がかりで箱に縄で縛った（この間わずから5秒！！）

すると箱の中から

リリース「ちよっと、理事長からの伝言があるから出してよ〜」

その一言で恐る恐る箱を開けるとリリースさんがフラフラと鏡を持ちながら出てきてちゃぶ台の上に鏡を置いてその横に座ると背伸びをしながら、

リリース「全く、休暇のつもりで来たのにこの扱いは酷いじゃない  
」！」

ジンキ「ああすいません、この前の事（学園祭の時）があったので体が勝手に行動をとってしまいました。とりあえず黍団子食べる  
？」

リリース「まあ、それならしょうがないわね。それと黍団子は美味しくなかったら許さないよ！」

ジンキ「黍団子は理事長も大好きで立花の売り上げの八割は黍団子なんだよ。」

月音「え！？それ凄くない？」

ジンキ「まあ八割と言うのは嘘で、本当は六割で残りは年末年始の餅とか猛士の仕事の報酬が占めているけど」

月音「それでも半分以上なんだね。」

ジンキ「まあね！」

僕達は朝ご飯を食べて、リリスさんは黍団子を夢中に食べていると朝の運動を終えた父さんが入ってきた。

エイキ「おっ、青野少年来ていたのか。」

月音「お邪魔しています。」

エイキ「どうだ？立花の朝ご飯は美味いだろ！それにその妖精もそんなにがつつくと喉に詰まらせてお茶をは妖精つてなるぞ？ハッハッハッ」

ジンキ「おっ新ネタですか！よく考えたね。」

月音「あはははは…（学園にいたときは全然違うこっちが素なのかな？）」

月音君が苦笑いしているとリリスさんが話しかけてきた。

リリス「黍団子おいしかった！けどジンキはこれから何をするの？」

ジンキ「僕はこれから4日くらい鼓の練習をしに、同い年の鬼の方と一緒に山寺に行くけど来る？」

リリス「行きたい！」

ジンキ「はいはい、それじゃあ今から準備してくるからお茶で



とか言っていたけどなんだろうもう一振り作るのかな？僕は荷物を持ち月音君と合流した後、ミツキさんとキョウウキさんと合流して陽海学園のバスで修行する寺へと向かった。

ジンキ君は寺につくと同時に上の服を脱ぎ、烈光を持ち、大きな太鼓の前に立つと烈光の先を天に向け大きく息を吸うと

ジンキ「はっ！」

と言いながら太鼓を叩いた。軽快なリズムで叩いていくと、起動されているディスクアニマルとリリスは太鼓の周りに集まり、リズムに合わせて回ったり踊ったりしていた。しかし俺はジンキ君の体中の傷、特に背中にある大きな×の字の傷が気になったその時、バスの中でミツキと言った男の方とキョウウキと言った女の子が俺のそばに立ち、

ミツキ「あの傷が気になるのですか？」

月音「あ、まあ・・・はい」

キョウウキ「あたい達、鬼は魔化魍と命を懸けて闘うから体に生傷は絶えないけど・・・」

月音「でも、ジンキ君の背中への傷は結構古そうですね・・・」

ミツキ「前に聞いた話ですが、ジンキ君は二回目の変身から生身で鬼の術が使え、鬼に変身しなくても闘っていたそうです。」

キヨウキ「しかもあれは刀のような切り傷だね・・・あたいは詳しく話せないけど」

すると背後から

ザンキ「俺はあの傷ができた時の事を話せるぞ、」

財津原先生がにゅっと現れた。

ミツキ「うわあ!？」

キヨウキ「ひい!？」

月音「財津原先生!？」

ザンキ「今はザンキだ。青野・・・詳しい話を聞きたかて、ミツキさん、練習するぞ!!!ってザンキさん!？」

僕がミツキさんの方を見ると

ジ・キ「そおい!!!」

バリバリバリバリ!

ミツキ「うわああああ」

ミツキさんがキヨウキさんとジンキ君に上の服を裂かれ太鼓のバチを持たせて太鼓の所に引つ張られていった。すると財津原先生・・・ザンキ先生は僕とキヨウキさんを連れて縁側に座ると

ザンキ「まずこの話をする前に俺には胸に大きな傷がある昔魔化魍と闘った時についた傷だ。今は瑠妃のおかげで傷口が残った程度に収まって何の問題もなかったが、少し前まで鬼になることさえ禁止するように医者に言われていた。」

と言って服の前を開けると胸の真ん中に傷があった。ザンキ先生は服を元に戻すと話し始めた。

ザンキ「あのころは魔化魍が大量に発生していて、アマキ等が鬼になっていないから人手も不足していた。俺の弟子のトドロキが大けがを負い入院してしまい、急遽怪我で引退していた俺が再び鬼になって闘うことになった。」

～回想～

俺はジンキが鬼の名前を持つ前だったから刃と共に行動することが多かった。ある日魔化魍がでて俺とイブキ、ヒビキと刃でその場所へ行くと大量の魔化魍がいた。刃は身を隠し、俺達は変身して闘った。闘っているうちに他の二人とはぐれ・・・

斬鬼「はあ！！」

コダマ「ギエエ！？」

ヨブコ「ギヤア！？」

俺は魔化魍を数体まとめて地面に叩きつけた俺は烈斬を突き刺し、

斬鬼「音撃斬「雷電斬震」！！」

音撃を決めたとき胸に激痛が走り、

斬鬼「グッ！」

俺が胸を抑え膝をついた時、

バケネコ「フシャアアア！」

バケネコが4体、飛びかかろうとしたが

刃「斬鬼さん危ない！！！」

光鷲「パイ！」

茜鷹「キュイ！！！」

刃が鬼爪をだし、二体のバケネコの顔にひっかき残りはディスク  
アニマルが落とし、

刃「鬼火い！！！」

刃は鬼火を吐きバケネコは顔を抑え、ディスクアニマルによって  
一か所に固まり倒れこむと

刃「斬鬼さん！！！」

刃の一声で俺は立ち上がりバケネコに烈斬を突き刺し

斬鬼「クツ！！音撃斬「雷電斬震」！！！」

再び音撃を決めバケネコを倒すと俺は烈斬を杖代わりに立ち上がり刃の方を見た。

刃「斬鬼さん、大丈夫ですか!？」

斬鬼「ああ、助かった」

俺がそう言うと刃は笑顔をうかべこっちに走り寄って来ようとした時、上から刃の背後に何かが降りてきて、

ザシユツ!

刃「え？」

刃を斬り刃は倒れ、俺は斬った相手を見た。それはコダマで手に持っていた双剣の先端には刃の血がついていた。

斬鬼「貴様アアアアアアアアアアアア!」

〜回想終了〜

ザンキ「というわけでヒビキがコダマを倒した後、刃を急いで病院に連れて行ったが傷は刃が少し大股で移動していたこともあって一命は取り留めた……」

月音「そ、そんなことが……」

ザンキ「ジンキは仲間にはできるだけそういふことは話したくないんだよ……瑠妃と一緒に風呂に入った時にはばれて数日後話した



さわやかな顔で言うジンキ君と腕をぶらぶらさせながら驚いているミツキさんと、狼型のディスクアニマルに乗ってどこかのフランスの一日3時間しか寝ない人みたいなポーズを取っているリリスが来た。

「月音「ザンキ先生が少し昔話をしてくれただけだよ。」

ジンキ「そうですね、さてミツキさんには休憩がいるけど今から月音君の特訓を始めるよ!!」

「月音「ええええ!?ジンキ君は大丈夫なの!?!」

ジンキ「うん、僕は少し水分補給したから大丈夫だし、鍛えてますか」「オ〜〜イ皆ああ差し入れ持ってツス!!」その前に腹ごしらえしますか?」

ジンキ君が声の方を見て、少し遅れて俺達もジンキさんの方を見ると鳥居の所に瑠妃さんと大きく手を振っているトドロキさん（ザンキ先生からこの前教えてもらった）が立っていた。

「キヨウキ「おお!!あたい腹が減っていたんだよ!」

「ミツキ「いや、キヨウキさん何もしてな」「ああ?」「・・・すいませんでした。」

「ジンキ「ミツキさん飯食えるか?」

「ミツキ「ええなんとか・・・」

俺達が差し入れをもらいに車の元へ行くとジンキ君はトドロキさんに話しかけた。

ジンキ「トドロキさん、バケガニはどうでした？」

トドロキ「ええ鍛えているから大丈夫だったツス！！これ差し入れのおむすびツス！！」

ジンキ「ありがとうございます」

ジンキ君は差し入れを手にとると、リリスがジンキ君の肩に止まると

リリス「ねえ私にも頂戴！踊ったらおなか減っちゃった。」

ジンキ「そうですか特訓は聞いてどうでしたか？」

リリス「やっぱりジンキは鼓をメインにしているから聞いてて楽しかったよ！それにしてもミツキだっけ？腰がひけてたよ！」

ミツキ「う…善処します…。」

ジンキ「まあ、ミツキさんは菅の鬼ですからしょうがない。」

ジンキ君達が話しているとトドロキさんはリリスさんを見て固まり

トドロキ「よ、妖精さん…。」

瑠妃「いえ、付喪神ですよ。」

瑠妃さんがそう言うが聞いていなく

トドロキ「うおおおおおおおおおおおおおおおおお  
お！！本物の妖精初めて見たッスうううううううううううう！  
」

リリス「ちょっと怖いって！！」

ジンキ「トドロキさん、落ち着いて！！」

トドロキ「絵本の中の存在と思っていただけで魔女がいるからもし  
かしてと思っていたけど・・・これで自分も空を飛べるッス！！」

ザンキ「いや、リリスはティーカーールじゃないから粉もないし  
空も飛べないぞ！！」

トドロキ「うおおおおおおおおおおおおおおお  
おおお！！」

トドロキさんはリリスを掴もうと手を伸ばすが、リリスは飛んで  
逃げジンキ君は変身して暴れるトドロキさんを羽交い絞めにして俺  
達とは距離を開けると

刃鬼「瑠妃さん・・・後は頼んだ。ザンキさん月音君に軽く体  
術でも教えてあげてください。」

瑠妃「は、はい！」

ザンキ「引き受けた・・・」

瑠妃さんとザンキ先生が返事をする。と刃鬼君の身体が光りだし、

刃鬼「トドロキさん一緒に空を飛びますか……刃鬼いい……」

トドロキ「はっ！え？え？刃鬼君ちよつて」

刃鬼「ダイナマイトオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

刃鬼君が叫ぶと、大きな爆発が起き二人は吹っ飛び

刃鬼「へぶっ！？」

トドロキ「グフツ！？」

二人は地面に叩きつけられジンキ君は変身が解けて裸になった（うつ伏せになっていたため、象さんは見えてない）。瑠妃さんは大きめの布をかけてジンキ君を魔法を使いながら寺野離れに移動させるのを見送ると背後に殺気を感じる

ポン×2

ザンキ「さて月音……」

キョウキ「腹ごしらえも済んだから」

ザンキ「少し殺るか？」

月音「え？え？なんでキョウキさんはメリケンを付けるのですか？ザンキ先生もなんで烈斬を構えるのですか！？」



番外編 part 2 「リリース来店、トドロキ暴走」 (後書き)

今回の猛士報告

休暇も終わりが・・・ハア

b y ジンキ

ヒビキ「あれ？なんか元気がないぞ？」

香須美「うゝんアレかしら？(チラッ)」

日菜佳「ですよねゝゝ(チラッ)」

瑠妃「ゝゝ (ツヤツヤ)」

みどり「一体何ラウンドやったの・・・鬼の方がバテるくらい  
って・・・」

本日の金言「ジンキ頑張れ！！」

ジンキ「こ、腰が・・・頑張りすぎた。」

リリース「あ、あと理事長からカップルでも部屋は別々だって」

ジンキ「まじか！？・・・はあみぞれさんが入ってこないように  
畏でも作るか。」

第15話「新校舎完成!!そして月音君が下ならいいのか!?!下なら!?!」(前

今回から第?シーズン!!DESU!!原作の第一シーズンと第2シーズンでは表紙の絵がもはや別人の域ですが、作者は大好きなんです!!正確に言えば第2シーズンの絵で好きになったものから・・・それではどうぞ!!

それと今回のあとがきでは猛士報告ではありませんので、どうかご了承していただけると幸いです!!

第15話「新校舎完成!!そして月音君が下ならいいのか!?!下なら!?!」

第15話「新校舎完成!!そして月音君が下ならいいのか!?!下なら!?!」

新校舎が完成して僕は瑠妃さんと陽海学園に戻り、新学期の準備をして僕の部屋が治るまでは一緒に部屋にいたが部屋が治ると理事長から

理事長「君達がカップルなのはいいことだが、学園にいる間は生徒と教師見習いということをハッキリと区別しなければならぬから部屋に戻ってくれたまえ。」

といわれた為、離れてすぐす事になり(たまく)にくるみぞれさんの襲撃を避けながら)新学期が始まった。僕は学校までの道を歩いていると月音君と萌香さんを見かけた。二人は僕に気が付き、

月音「あ、ジンキ君!」

萌香「おはよう!」

刃「やあ、good morning!お二人さんそれと月音君、今の僕は刃ですよ。」

月音「あ、ごめん!?!つい・・・」

刃「ハハハ、今は気にするな月音君、しかし教室では言わないでくれよ。もしザンキさん・・・ここでは財津原先生に聞かれたら僕は怒られて音撃斬食らうから、」

萌香「そ、そうなんだ・・・」

月音「容易に想像できてしまうよ・・・」

刃「さて少し急ぎますか？クラス割も気になるでしょう？」

萌香「そうだね、急ごうつくね！」

月音「う、うん！あ、刃君は速度落として走ってね。」

刃「おう！」

僕達は小走りで行き校門の前に人だかりを見つけその光景に危うく背負っていた雷光・改を落としそうになった。なぜなら・・・胡夢さんが人ごみの中心でポーズを取ってあるものは写真を、あるものは見とれ一部の男は前かがみになっていた。

刃「母が母だけに娘も娘か・・・」

ギューン！

月音「ちよつと刃君！？なんで雷光を構えているの！？」

刃「ハッ！？僕は一体何を・・・」

萌香「雷光に斬光をセットしていたんだよ。」

月音「何をするつもりだったんだよ！！危ないじゃないか！！！」

月音君の言葉に僕は雷光を地面に突き刺してから少し考え、

刃「・・・胡夢さんの心を清めに？」

と僕が言つと月音君は

月音「なんで疑問形なんだ」「つくね〜」 「ゲモツ!？」

ツッコミをしようとしたら胡夢さんが抱き着いてきて

胡夢「つくね〜私のこと覚えていた〜？私は月音の事一度も忘れたことはないよ〜」

胡夢さんは月音君に大好きホールドをして、胸を月音君の顔に押し付けているが月音君から聞いた話胡夢さんの胸は柔らかいらしく抱き着かれると呼吸ができなくなるらしく今も月音君の顔は青くなり、萌香さんははがそうと頑張っているが、台所の隅の方にこびりついた頑固な油污れ並みにくっついていようでなかなかはがれない。

刃「といつても僕が力づくではがすわけにもいかないし、雷光斬震をすると月音君も巻き込むからな〜…アッ！」

僕は思いついたように雷光の弦を一本弾くと萌香さんに

刃「萌香さん、少し離れて…危険かもしれないし」

萌香「え？何をするの？」

紫「ま、まさか・・・音撃を？」

刃「いや、それよりは・・・月音君には安全かな？」

二人が離れると僕は近くの木に向かって

刃「みぞれさん・・・サリィ…ゴー!!」

みぞれ「G I G・・・」

と僕がいうと木の陰から返事と共に

ヒュン！・・・グサツ！

胡夢「ギヤアアアアアアアアアア！?!?!」

氷でできたクナイが飛んできて胡夢さんの額にグサツと刺さり、胡夢さんは額から血を出しながら月音君から離れ、紫ちゃんはすぐに胡夢さんのけがの治療を、萌香さんは若干顔が青い顔の月音君の介抱をしていると、木の陰からみぞれさんが

みぞれ「久しぶりだな刃・・・」

刃「まあ、学校で会うのは久しぶりだろうね・・・“学校では”」

僕がそういうとおでこに×の字の絆創膏を張った胡夢さんが

胡夢「刃・・・それどういうこと？」

紫「まさか寮の部屋にいたときに何回かあったのですか？」

僕は雷光の弦を軽く弾きながら、

刃「詳しく言うと押し入れの中に13回、僕の布団の中に潜り込んでるのが4回、風呂場にシュノーケル装備で待機していたのが5回、仕事から戻ってきたときに（水着）エプロンで待っていたのが3回と言ったところですね。そしてそのたびに公安を呼んで強制的に部屋に連行していたね」

と僕は耳コピで覚えたトドロキさんの念押しを小さく弾きながら言う

紫「もはやストーカーの域を超えているです」

刃「しかも毎回雨戸を閉め、鍵もチェーンまでかけているのに入っているんだよね」

胡夢「怖いってそれは!!」

萌香「アハハハハ・・・」

月音「俺もそうなっていたのかな？」

刃「・・・否定できない・・・むしろ食われてたかも」

みぞれ「刃：そう褒めるな。照れるじゃないか／＼」

月・萌・紫・胡「「「いや、褒めてないから」」」

刃「僕に気付かずに布団に入り込んでくる気配の消し方は褒めるけど・・・もう少しいいことに使いなさいよ・・・なんか悲しいよ。」

みぞれ「そうか？ 十分いいことに使っていると私は思うが？」

校門前にいた生徒全員「……どこがっ!?」「……」

生徒の心が少しの間だけシンクロしたツツコミをすると予鈴のチャイムが鳴り、

胡夢「ヤバツ!? 新学期から遅刻になるよ!？」

萌香「ええ!？」

刃「皆のクラス割りは僕が知っているから5人は僕について来て!！」

月音「う、うん!！」

僕達は急いで教室に向かった……僕が知っている理由？ 転生前の知識でもなんでもなかったあの職権乱用ですけど（理事長からクラス割の縮小コピーをもらった）、何か？

（HR）

猫目「はい皆さん、お久しぶりで〜す。私はこのクラスの担任の猫目静です。休校が明けて皆さんも二年生になりました。」

教卓の所で猫目先生が説明してクラスはワイワイとしているが、

ガラガラガラ……

財津原「すまない、職員会議が長くなって遅れた。」

ザンキさんが入ってくるとクラスの空気は一瞬にして凍った。ザンキさんは猫目先生と交代して教卓に立つと、

財津原「今年から正式に皆のクラスの副担任になった財津原蔵丸だ。担当教科は体育と魔化魍に関しての授業と受け持つ・・・そしてなぜこのクラスはこんなにも空気が重いんだ？」

と首をかしげながら凍った空気のクラスを見まわしながら言つと、僕は手を挙げ

刃「多分財津原先生のイメージが・・・恐怖が埋めているからでしょうか？」

僕がそういつとザンキさんは手をポンと叩き、

財津原「そうか、ならこのクラスの皆に言う：俺は規則を破つたもの人に迷惑をかけたものには容赦なく叱るが、普通にしていたら俺は怒つたりしない：さらに男子生徒に告げる！もし恋愛などで困ったことがあつたら俺に相談してこい！！ばつちりサポートしてやる！！そのほかの事はその刃に聞け。」

猫目「では、朝のHRは財津原先生への質問タイムにしますか？」

と猫目先生が言つとクラスの空気は一変して、クラスの全員がザンキさんに質問を始めた。

男子生徒A「先生の好きなものはなんですか!？」



そして時間が経過していき、残りが少しとなり最後の質問となつた……

女子生徒Z（軽音部）「先ほど先生は刃君のギターの師匠と言うことですが、セッションできますか？」

財津原「セッションか……刃！！」

刃「ウェイ！？なんででしょうかザンじゃなくて財津原先生？」

財津原「トドロキのあれをやるぞ！！」

ザンキさんは烈斬をどこからともなく取り出し、斬徹をセットして構え

刃「今からつすか！？」「そうだ！」……はわかりました。」

僕も雷光を袋から取り出し残光をセットしてトドロキさんの念押しセッション（詳しくは仮面ライダー響鬼の第45話「散華する斬鬼」を見てね。）を20秒くらいやり終えるとクラス中から拍手が沸き起こりHRが終わった。

～放課後（飛び過ぎ？気にしたら負け！！）～

胡夢「やぶ～今年はつくねと同じクラスになれたよ……これって運命？」

月音「って言うかみんな一緒のクラスだし」

萌香「運命にしては出来過ぎだと思っただけねど……」

胡夢さんが浮かれている時に僕は

刃「あゝすまないがみんなが一緒の訳は僕と月音君の正体（人間）を知っているし、なにか問題があったら近くにいる方が僕やザンキさんが動きやすいからまとまってもらったということですよ・・・運命じゃなくて本当に・・・すまないと思っている。（吹き替え版○ヤックバ○ワー風に）」

すると萌香さんは月音君を見つめ、月音君が萌香さんの方を向くと萌香さんは急いで顔を背け教室を離れた。少しして紫ちゃんが出ていき僕もこっそり後をついて行った。

少しして紫ちゃんが持っている壺に萌香さんが覗きこんでいるところを見かけた。僕はキハダガニを起動させ、近くに行かせ録音している時に壺からピンク色の煙が出たと思うと萌香さんはフラフラと歩いて去って行った。

その時、僕の音叉が震え、手に取ると空から黒色鴉が来てディスプレイ状態の戻し内容を聞くと

瑠妃「刃さん、新学期早々ですいませんが、喧嘩が始まりましたので来てください！！」

僕は黒色鴉を展開しなおして急いでその場に向かうが、移動している時にキハダガニを回収してその内容を聞くと

紫「これは私が休校中に天才の私が開発した超強力なマジックアイテムですう、これを使えばきつとモカさんも素直になれますよ」

萌香「…あれ？何も見えないよ紫ちゃん…」

紫「ウフフ…自分の「欲望」に素直に…ね」

そこで録音は終わったが、

刃「欲望を解放しろって…タカトラバッタのライダーの敵キヤラかよ！…はあ、またお仕事が増えるよ。」

黒色鴉「カア！（ドンマイ）」

僕は喧嘩している生徒二人を喧嘩ボンバーで倒し、公安に報告書を作成した後萌香さんを捜していたが郊外の一角で轟音が響き急いでそこへ向かうと胡夢さんとなぜかみぞれさんが紫ちゃんを逆さづりにしていた。

刃「どうしたの二人とも弱いものいじめは駄目だよ〜」

胡夢「あ、聞いてよ刃…」

胡夢さんの話だと、萌香さんの様子がおかしかったのでみぞれさんに報酬込みで連れていってみると萌香さんが色仕掛けをしていてみぞれさんと一緒に引きはがそうとしたがいつもより力が強く、逃げられてしまったところに紫ちゃんが惚れ薬のくだりを話したというわけらしい。

刃「なるほど大体分かった…がなぜみぞれさんはほれほれ君を僕に向ける？」

みぞれ「いや、お前に聞くかと思って…」





刃「月音君、吹っ飛ばされたあああああああ！！」

烈光をマイク代わりに叫ぶしかなかった・・・この後表の萌香さんは紫ちゃんから媚薬を飲まされていることを放した後裏萌香さんは

裏萌香「今後は人格の表裏関係なくこの体に触れることを禁ずる。

」

さらに裏萌香は自分の胸に手を当てこういった。

裏萌香「お前が「赤夜萌香」を落としたいのなら、この私ごと口説くしかないんだよ。」

その一言に月音君の目に涙が浮かび、

裏萌香「もつとも私は攻略不能だがな」

月音「そんなあああああああ！！！！」

その光景を見た僕と胡夢さんとみぞれさんは

みぞれ「…たちの悪い抱き合わせ販売みたいだな…」

胡夢「グツジョブ裏萌香」

刃「僕ならウソダンドコードンって叫びたいね（キリッ）。第一、裏萌香さんを落とすなんて普通無理ゲーだよ・・・あ、そうだ萌香さん」

僕は先ほどの裏萌香さんのセリフでふと思いついたことがあった

ので尋ねてみた。

裏萌香「ん？なんだ？」

刃「先ほど萌香さんはなぜお前が私の“上”に乗っているで、月音君に蹴りました・・・つまり！！」

裏萌香「つまり？」

刃「月音君が下、萌香さんが上なら問題ないということですね！その態勢なら僕も瑠妃さんとやりましたね」萌香さんもなかなか「ほう・・・」あっ・・・」

僕が正気に戻るとモカさんの髪は逆立って、殺気は放出していた。

裏萌香「貴様・・・死にたいようだな・・・」

刃鬼（とりあえず変身した）「いや、全然僕はただ自分が疑問に思ったことを問いかけただけですよ？」

裏萌香「・・・殺す！！」

この後30分にもわたる攻防の結果半径50mのクレーターを作り、僕はおよそ30mも蹴飛ばされた・・・そして陽海学園特有の大結界が作り出した空を見つめながら

刃鬼「萌香さん：頬を赤らめながら闘っているということは少しは月音君の事を気にしてらっしゃるのですね・・・ガクッ」

と呟いて気絶した。気が付いた時、僕の布団の上にみぞれさんが

またがっていた事は言うまでもない。もちろん瑠妃さんと明日夢兄さんもいたのでキスは何とか避けられた。

後なぜか僕の隣のベッドでは顔に包帯を巻いたザンキさんがいたのはなんでだろう？

第15話「新校舎完成!!そして月音君が下ならいいのか!?!下なら!?!」(後

今回はザンキさんに連れて行かれた紫ちゃんとザンキさんのお話です。それだはどうぞ〜

私はあの後、財津原先生によって生徒指導室に連れて行かれ、目の前には財津原先生が座っていた。

ザンキ「さて、今ここには俺しかいないからザンキで呼んでも構わないが・・・仙堂お前がやったことは二人の幸せと想っていたとしてもやり過ぎだぞ!」

紫「は、はい!?!(こ、殺される!?!)」

ザンキ「そうか...なら後で反省文を書いて俺に提出な。これで説教は終わる。」

ザンキ先生はそういうと保温式のポッドを取り出し中に入っていたコーヒーを飲みだした。私はあっさりしすぎていて、

紫「え?終わりなんですか?」

ザンキ「ん?まあ裏の萌香には効いてないから問題ないな。それとほれほれくんだったけ?あれを見せてもらったがうまくできているな。」

紫「あ、はいありがとうございます。」

ザンキ先生はコーヒを飲み干すと

ザンキ「で、頼みがあるんだが、刃も俺の弟子だが、直接的な弟子ではなくてな・・・その直接的な弟子テドロキの方がかなりの鈍感と言つか純粹と言つかなんとというか・・・」

紫「ハア…その方に関するお話ですか？」

ザンキ「まあな、俺としてはその弟子と付き合い合っている女性かわいそうで仕方なくてな。俺は今まで多くの女性を鬼のように愛したがあいつは俺とは感じ方が違うベクトルだからな・・・頼みというのはさっきのほれほれ君の劣化版を作ってほしいのだよ。」

紫「劣化版ですか？なぜそのままではなく劣化版なのでしょう？」

ザンキ「欲望に忠実のままではなくてせめて女心というがわからせたいのだが・・・駄目か？」

ザンキ先生は私に頼みましたが私は

紫「ええ、一応ほれほれ君とは別に女心がわかる薬は作れることはかのうですが・・・」

ザンキ「ん？どうした？」

私はザンキ先生の後ろに指を差しながら

紫「その…猫目先生を説得してからでない無理ですう・・・」

ザンキ先生は後ろを振り向くと爪を出した猫目先生が

猫目「ザンキさん・・・今の話は本当ですか？」

ザンキ「え〜っと弟子の事か？」

猫目「それではなくて、たくさんの女性を愛したという所です。」

ザンキ「いや、まあ人生には色々あってだな、まあコーヒーを飲んで落ち着こう！」

猫目「聞く耳持ちませえ〜ん！！スクリユードライバー！！！」

ザンキ「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

この後ザンキ先生は附属病院に運ばれました・・・

本日の金言「猫目先生も起こると怖いですう〜 b y 紫」

第16話「萌香さんの妹さん襲来!!とフ、フラゲ!?!」(前書き)

今回はあの粘着質のツンデレ妹がでます。

第16話「萌香さんの妹さん襲来!!とフ、フラゲ!？」

第16話「萌香さんの妹さん襲来!!とフ、フラゲ!？」

新学期から一週間経って僕と公安は入学式の準備をしていると3年生になった九曜さんが来た。

九曜「刃さん…そろそろ休んではいかがでしょうか？」

刃「ん？いきなりどうしたのだ九曜さん？」

九曜さんは申し訳なさそうな顔をして

九曜「その…刃さん今日の特別講習でモンスタードリアンを食べて食中毒になったそうじゃないですか!!いまもいつもの元気が感じませんよ!!」

刃「ふっ…月音君と明日夢兄さんより鍛えているから問題ない…痛たた…」

九曜「いやいや今も入院中の月音さんと明日夢さんを比べる対象としてはだめですよ!!しかも刃さんの先輩の財津原先生もダウンしているのですよ!!」

刃「へ、変身して鬼の力を使えば…なんとか」

九曜「瑠妃さんから聞いた話では鬼の力は外傷に対して効果はあるそうですが、食中毒には効かないそうじゃないですか!!後少し

ですから休んでください!!」

刃「そ、それならと、トイレに行かせていただくよ。」

九曜「トイレから戻ったら瑠妃さんに膝枕でもしてもらってください!!あと少しで戻るそうなので」

刃「そ、そうかならいチャイチャさせてもらうよ。」

九曜「いや、休んでください!!」ジョークだよ」顔がゲツソリしているのにジョーク言えるんですね。」

モヒ安A「自分の体に異常が起きても彼女とイチャイチャすると」

モヒ安B「一見本当にやってしまいそうなジョークを笑顔で言える!!」

モヒ安C「そこに痺れもしないし憧れもしない!!」

モヒ安D「とりあえず休んでください!!」

刃「うわ〜ん皆がヒドウ〜イ!」

モヒ安a「〜」プルプルしながら言わないでください!!」

「」

僕はこの後トイレに駆け込んで用を済ませた後、体育館の隅の方で瑠妃さんに膝枕をしてもらって休んでいると紙袋を加えたトゲゾーと水筒をぶら下げた光鷲と黒色鴉が来た。トゲゾーはトテトテと歩いて僕の前に来ると紙袋を床に置いて、

トゲゾー「ガウツ！」

と吠え？紙袋を頭で僕の方へ押した。

刃「ん？トゲゾー、これは僕にか？」

トゲゾー「ガウツ！（頷く）」

僕はトゲゾーが持ってきた袋を開けると中には水薬と

「即効性で食中毒用の薬 by 理事長」

と書かれた手紙があった。

刃「マジでか！？・・・飲んでみるか。」

ゴクツ・・・ピキシユーン！！（モンハン風に）

刃「治ったああああああああああ！！！」

九曜「嘘！？」

モヒ安E「マジですか！？」

モヒ安F「治るの早っ！！！」

螢糸「でも、終わってしまったので仕事ありませんよ？」

刃「ありゃ、そう？まあいいや、トゲゾーありがとうな」

僕はトゲゾーを持ち上げ、撫でてやった。トゲゾーは嬉しそうにして降ろすとどこかへ去って行った。

瑠妃「トゲゾー賢いですね。」

刃「まあね、僕の事は臭いで判断しているみたい・・・さてと瑠妃さん、僕は軽くお腹が減ったから食堂に行ってくるよ。じゃ皆さんお先に」

瑠妃「あ、はいお疲れ様でした。」

九曜「お疲れ様でした。」

モヒ安A「ヒヤッハー!!」

モヒ安B「乙なんだぜ!!」

僕は講堂から出て食堂へ向かうと僕と同じ薬を飲んだのか回復していたザンキさんと明日夢兄さんと月音君が野菜人並みの量を食べ、調理場の方を見ると調理師の人たちが燃え尽きていた。

刃「・・・帰るか」

僕が部屋に戻るとみぞれさんがいつものごとく不法侵入してカレーを作ってくれていて、ありがたく全部（大きめのズンドウ鍋一つ分）頂いた。カレーは初めてにしては美味しくできていた（空腹だったから美味しく感じたわけじゃないからな!!）。このことをみぞれさんに言うと、みぞれさんは喜んで帰って行った。

〜翌朝〜

朝目が覚めて鍛錬を終えシャワーを浴び終わると携帯に連絡があつて、校門前に新入生が固まっついていて、入学式が始めれないそうで僕は雷光・改を担いで急いでその場所へ行き、また雷光・改を落としかけた・・・なぜなら

1年女子A「お姉さま〜」

1年女子B「柔らかい胸〜」

1年女子C「やっぱり2年生は大きい」

1年女子D「紫お姉さまも小さくてかわいい〜」

胡夢さんと紫ちゃんの周りに新入生が体をクネクネさせながら集まっていたのだ。僕はとりあえず紫ちゃんの方へ行き、

刃「紫ちゃん・・・これはどういうことなんだ？ここはいつから私立リリアン学園になったんだ？」

紫「あ、刃さん！実は新入生の間で私とくるむさん、みぞれさんにモカさんが噂になっていたそうで私達に会うために入学してきた子もいるそうです。」

刃「で、紫ちゃんと胡夢さんは新入生に捕まり、胡夢さんは悪乗りしている・・・」

紫「そうですっ〜それと刃さんも噂になってますよ・・・男女両方で」

紫ちゃんの一声でハッと後ろを振り向くと、

1年女子E「その鍛えられたボディ・・・」

1年男子A「そして担いでいる白いギターに公安総監督と書かれた腕章（九曜さんから貰った。）・・・」

1年男子B「さらに腕についている鬼の顔が彫られたリストバンド・・・」

1年女子F「間違いない・・・彼はこの陽海学園最強の名前を冠する・・・」

1年一同「「「「松坂刃お兄様（兄貴）だ!!!」」」」

刃「ウエエエエエエエエエエエエ!?!?ナンディゾンナハナシガヒロマツテイルノディスク!?（W ;）シカモキノウマケタノニ!?!」

多くの1年が僕に押し寄せてくる中、僕は雷光を近くにいた月音君に

刃「月音君パス!!」

月音「え?うわっコレ重い!?!」

月音君は雷光・改を受け取ると紫ちゃんは

紫「刃さんはどうするのですか!?!」

刃「このまま新入生を講堂に誘導するからザンキ先生によろしく  
言っておいてくれ!!」

僕はそのまま走って講堂まで誘導して公安をフル動員して止めた。  
何とか食い止め入学式は始まったが、公安の生徒30名以上が重軽  
傷を負った。それが終わり教室へ向かうと

刃「なんで月音君は頭から血を出しているの!!」

俺達は休み時間にモカさんから妹さんの事を刃君には教室であつ  
た事を話すと刃君は頭に手を当てながら

刃「つまりは萌香さんとその朱染しゅせん 心愛こいあという女の子の関係は姉  
妹で封印する前まで同じ家に住んでいて、毎日ト〇と〇エリーも顔  
負けの姉妹喧嘩をしていて萌香さんが勝ち、ある時萌香さんが家を  
出て、力を封印しているから闘うことが出来なくて逃げているけど  
必ずその後を追いかけて喧嘩をしてくと・・・そしてさっきはコ  
ミちゃん（小宮碎蔵の事）の机を持って暴れだし、萌香さんをかば  
おうとした月音君の頭にクリーンヒットというわけか、」

胡夢「…じゃああのコはただ姉妹喧嘩に勝ちただけ？今度はこ  
の学園に入学してきたの？」

紫「清々しい程の粘着体質ですう」

皆が呆れていると刃君は

刃「妖力の封印は自分で解けないことは言っているのですよね？」

萌香「言ったよ何度も…でも駄目なの。襲い掛かってればいつか私も覚醒して応戦すると信じているみたいで…」

モカさんがそういうとみぞれちゃんは片方の手の変化を解除しながら、

みぞれ「面倒な奴だな…氷漬けにして埋めようか？」

萌香「やめてよ！あれでも一応妹なんだから！！」

萌香さんがそういうと刃君は手をポンと叩いて

刃「じゃあ、鬼火で軽く燃やすか音撃斬で心を清めちゃうか？」

萌香「それもダメ！！！」

刃「じゃあ、ヒビキさんに応援要請を…鬼神覚醒でトラウマを…」

萌香「もつと駄目だよ！！こんな事で先輩呼んじゃダメでしょ！！！」

刃「別にいいじゃん！トラウマを植え付けるのは嘘だけど、ヒビキさんならきつと納得いくような説得をしてくれるはず！！！」

全員「……あ……確かに……」

その時俺はあることを思い言ってみた。

月音「本当にモカさんに勝ちたいだけなのかな…」

萌香「つくね？」

月音「いや…オレ今朝あの子に危ない所を助けてもらってさ優しいコだと思ったよ。だからあのコが追いかけてくるならそれなりに理由でもあるのかなと思って…」

刃「理由ねえ…封印する前だから裏萌香さんが表になっているはずだから…裏限定シスコンかモカさん限定Mのどっちだ？後者だと僕から少しくらいはMの方の対処法は教えることができるけど…僕の彼女がMだし…」

刃君がそういうとモカさんは苦笑いを浮かべ、

萌香「それは嫌だな…でもいいの元々ただの姉妹喧嘩だし、ココアの事は私が何とかするから…」

モカさんはそう言い去って行ったが刃君は俺に顔を向けると

刃「月音君後を追うぞ。」

月音「え？でもモカさんが自分で何とかするって…」

刃「まあね…でももし彼女の相手が表の萌香さんではなく“裏”の萌香さんだけなら絶対月音君の存在が必要でしょ？他の皆は月音君の護衛な。」



刃「……ジャ！」

と言って走り去っていった……すごく心配だよ……！

僕は急いでレフェリーの白と黒の縞々の服に着替え、萌香さんを  
捜すと

ドゴオオオン……！！

砂煙が偽墓場（墓石だけで中に何も入ってないから）の方から上  
がり

刃「ほんと、萌香さん絡みの喧嘩は見つけやすいね……って始ま  
ってる！？急がねば……ユクゾツ……！！」

両手を水平に広げ、砂煙が上がった方へ走っていくと、モーニン  
グスターを構えた心愛さんと鉄の棒でできた十字架を持った萌香さ  
んがいたが、

刃「武器に差があるな……よし……！！」

僕は雷光・改を袋から取り出し、心愛さんがモーニングスターを  
振り上げた瞬間

刃「萌香さん……受け取れ……！！」

と二人の間の地面に刺さるように投げ、地面に刺さると二人はこ

つちを見て

萌香「刃君どうしてここに!？」

心愛「ちよつとあんた何邪魔しているのよ!！」

刃「萌香さんの質問には砂煙が上がったから見つけたという所で心愛さんの質問には君の武器と萌香さんの武器の差があまりにもひどいから武器を貸しただけさ。後お互いが大けがを負うところちが色々困るから審判としてきました。」

萌香「で、でも私清めの力は・・・」

刃「ああ、安心しなさい。清めの力は鬼を通してなら出るけど、武器だけなら全く問題ないよ。少し重いかもしれないけどね。」

僕がそういうと萌香さんは十字架を捨てて雷光を恐る恐る地面から引き抜き、逆手で構えた。心愛さんもそれを見てモーニングスターを構え直し、僕は両手を広げ

刃「さてこれでお互いの武器の差は縮まったはずだから…ファイッ!！」

胸の前でクロスしながら叫ぶと心愛さんはジャンプしながら上段で振り下ろし、萌香さんは斜め下から振り上げるように雷光を振り、お互いの武器がぶつかり

ガキイーン!!

激しい音が鳴ると雷光は宙を舞い、萌香さんの後ろに立ってある

木に刺さり、僕は右手を天に向かってあげ

刃「勝負あり！！勝者、朱染心愛！」

萌香「わ…私の負けよココア…これでも精一杯頑張ったもの…だからもうこれで喧嘩は終わりに…」

萌香さんがそう言いかけた時心愛さんが咳き始めた。

心愛「…うして…」

萌香「え？」

刃「む？」

心愛さんの顔には涙が浮かび始め

心愛「どうして本気で戦ってくれないの？おねえちゃん」

萌香「ココア？」

心愛「あたしがどれだけこの戦いを待っていたと思う？喧嘩相手もない…静かになったあの家でおねえちゃんがなくなったあの日からずっとどんな気持ちでいたと思っているのよおお」

心愛さんが涙を手でふき取っていると月音君達 came。

月音「…そうか君は…モカさんがいなくて寂しかったんだね…」

萌香「……！みんな……」

僕は木に刺さっていた雷光を引き抜き、皆の方を見ると

月音「これからは同じ学校でモカさんとずっと一緒にいられるんだから…」

ハートフルドラマみたいな光景が広がり、

萌香「折角の姉妹だもんねこれからはまた仲良くしてくれる？」

と萌香さんが近づこうとした時、雰囲気が変わり、

心愛「…ちがう…ちがあぁ　　うっ！！やっぱりわかってく  
れてないじゃない！！」

心愛さんはモーニングスターを振り回し、

月音「ええええ、違うの！！？結構いい話でまとまりかけていた  
のイイイ！！」

月音君は叫ぶが、僕は音叉を鳴らし額にかざした。

心愛「何が「仲良く」よ！あたしは…あたしはねえ！！」

その時のモーニングスターの下に萌香さんがいて、月音君も萌香  
さんの元へ駆け寄ろうとして僕も急いで二人の元へ駆け寄った。

心愛「あんななんか大っ嫌いなんだからああ　　っ！！！」

あたしが男を二人巻き込んで萌香おねえちゃんを潰すと中から懐かしい声と男の声が聞こえた。

??「…フンまさか実の妹にここまで嫌われるとはな…」

??「大変ですね〜萌香さんも」

強大な妖気と別の物を感じ、背中に悪寒が走るとこうちゃんが持ち上がって行って中から腕を組んでいる銀色の髪のお姉ちゃんとうちゃんを指二本で押し返す異形の鬼の姿があった。(後、血が痛い匂いをする男)

裏萌香「まあいいこの私に刃を向けるものは誰であろうと蹴散らすだけだ。」

鬼「身の程を知れてるか？萌香さんらしいね。」

鬼はやれやれといった感じで首を振るところをこうちゃんを投げ飛ばし、あたしがバランスを崩した瞬間萌香おねえちゃんはあたしの懐に近づき……

裏萌香「身の程を知れ！！」

心愛「きゃああああああああああああああああ！！！」

あたしに腹に蹴りを入れて、あたしは大きく吹き飛ばされた。

僕は心愛さんの方を見て

刃鬼「しかし今回も飛んだね。およそ20m後半だね。」

月音「モカさん!!」

月音君が駆け寄ると裏萌香さんは

裏萌香「…月音、刃鬼助かったぞ…月音がロザリオを外し、刃鬼が攻撃を受け止めなければ危なかったぞ。」

裏萌香さんがお礼を言ったことに軽く動揺はしたが

刃鬼「でも、まだでしょうね…。」

裏萌香「ああ、心愛とてバンパイアこの程度ではくたばりはしない」

その時吹き飛ばされた方から妖力が出て墓石のかけらが吹き飛び  
胡夢さんとみぞれさんは心愛さんの様子を見て

胡夢「ええええモカの蹴りが効いてない!？」

みぞれ「しかもこの妖気モカ並みに凶々しくて強大な…」

驚いていて、月音君と紫ちゃんは頬を汗が伝い見ている。

心愛「おおおおお…。」

裏萌香「…来い心愛、久しぶりの姉妹喧嘩だ。気が済むまで相手してやるよ。」

心愛「おおおおおおおおおおおおお……」

心愛さんの妖力が高くなって行き、皆は身構えるが、

心愛「…おねえさま」

心愛さんの一言に皆は固まり、月音君が

月音「…おねえさま？」

月音君がそつつぶやくと心愛さんは裏萌香さんにお姉さまと叫びながら抱き着き、裏萌香さんも珍しく混乱して

裏萌香「なっ何のつもりだ心愛？お前は私の事をきらっていたんじゃない……」

心愛「会いたかった…ずっと会いたかったよおねえさまああ！もうどこにも行かないで〜」

僕が頬を掻きながらその光景を見ていると

裏萌香「じ、刃鬼これはどういう事なんだ!？」

刃鬼「恐らく心愛さんは強い萌香さん、表ではなく“裏”限定のシスコンだと……思います。」

みぞれ「やれやれ…人騒がせな姉妹だよな…」

僕がそう答えると心愛さんは僕の方を見て、

心愛「ってかあんたは誰よ！！審判はどこに逃げたのよ！！」

裏萌香さんに抱き着きながら言うと

裏萌香「そいつがさっきの審判だ。」

刃鬼「そうです…ホラ」

僕は顔の変身を解いて言うのと裏萌香さんは顔に小さく笑みを浮かべながら

裏萌香「しかもそいつはこの私よりも“強い”ぞ、なにせ学園最強の称号を持っているからな。」

刃「ヴェ！？（W ;）何言っているの萌香さん！！？この前萌香さんに負けたじゃん！！」

裏萌香「確かにあの時お前に勝ったが、お前手加減しただろ？それに輝も使っていないしこの前（北都戦）だってこの私に説教をしたではないか？」

刃「えええええ！？そりゃ友達に本気で闘えないし、輝だって使ったら萌香さんが僕に近づくだけで体力削られるし、あの時は萌香さんが怪我をしていたから下がってほしいと頼んだ、なんですってええええええ！？」

心愛さんは蝙蝠をハンマーに変えると僕に襲いかかったが、僕は素早く雷光で防いで、押し返すと雷光を心愛さんの腹に向け、

刃「新装備、妖怪用拘束アーム起動！！・・・ポチツとな」

ネックについたボタンを押すと雷光から銀色のアームが出て心愛さんを拘束すると、素早く斬光を装着して

刃「音撃斬「雷光斬震」ハア！」

音撃を放ち、決めてアームを解除すると心愛さんと蝙蝠は

心愛「アビヤビヤビヤビヤ・・・」

蝙蝠「キュー・・・」

口から煙を出し手足をピクピクしながら伸びていた。裏萌香さんは

裏萌香「ほら強いじゃないか。」

刃「いやいや、彼女はまだ実戦経験が少なくて武器を大きく重いものを使っているから隙だらけで何とかなったんだよ・・・もしかしてこの前の事怒っているのですか？」

裏萌香「それは違うな、心愛は普段は封印されている私の方が好きだが、表に戻ればまた覚醒させようと襲ってくるだろう・・・」

みぞれ「つまりその矛先を少しでも常に強い状態の刃に向けさせようというわけか・・・中々酷いことするな。」

刃「ま、僕は構わないよ。バンパイア相手に闘うのは良い修行になるし、彼女にも多少は闘い方を教えるのは嫌いじゃないから、後心愛さんは僕が明日夢兄さんの元へ持っていきます。」

月音「刃君、本当にいいの？」

刃「いいんだよ。だって僕鍛えてますから…シュッ！」

僕はそついうと雷光を袋に入れ、蝙蝠を袋のポケットに心愛さんを担いで皆と別れた。

～翌日～

心愛「こら〜〜まで〜〜もう一回変身してあたしと勝負しろ！  
」

心愛ちゃんはハンマーを振り回しながら襲い掛かってくるが

刃「はっ！やなこった！！僕はこれから公安の所へ行つて報告所に目を通して、その後君が昨日壊したところの修復に行かなきゃならないの！どうして君の相手をしなくてはいけないのだよ！！つつか飯食わせる！！しかも君には変身しなくても勝てるわ！！」

心愛「うるさいうるさいうるさあああい！！あたしだって誇り高きバンパイアがあるのよ！！第一あんたがおねえさまより強いなんて嘘に決まっているでしょ！！」

心愛ちゃんはそつ言いながらハンマーを振って、僕はそれをしゃがんで避けうどんを食べながら

刃「ズゾゾゾゾ・・・腹が減っては193はできないって言う  
だろうが！それに僕が最強なんてデマだし、昼休みに相手してや  
るから今はやめろ！！」

と言った。もちろんこれで収まると思っていなかった・・・が攻  
撃はぴたっ止まり僕は後ろを振り向くとハンマーを蝙蝠に戻した心  
愛ちゃんは

心愛「・・・その言葉嘘じゃないわよね！！」

刃「嘘じゃないよ・・・今日昼飯食べたら暇だし・・・ほんの少  
しだけだけど相手できるのはほんとだよ？（あれ・予想と全然違う）  
」

心愛「疑問形なのが怪しいけど、こうちゃんを監視につけるから、  
それじゃあたしは教室に戻るわ、じゃあね。」

と言って踵を返して教室に戻って行った。蝙蝠のこうちゃんは僕  
の方に止まり、

刃「心愛さん、予想していたのより超あっさり帰って行ったね・・・  
なんでだろう？」

こうちゃん「キュー？」

刃「萌香さんの聞いた話と全然違うぞ？・・・ズゾゾゾゾ」

僕は首をかしげながらうどんをすすり、廊下にすする音が響いた  
・・・この後お行儀が悪いと猫目先生に怒られたのは言うまでもない。

刃「まさか・・・恋愛の方のフラグが立ったとか・・・嫌だなあ  
せめて師弟としてのフラグの方が数億倍でした・・・これ以上修羅  
場はウンザリだ。」

第16話「萌香さんの妹さん襲来!!とフ、フラゲ!?!」(後書き)

「今回の猛士報告」

・・・よく分からないけど多分鬼的な意味じゃなくて闘い方の弟子が出来た・・・はず。

b y ジンキ

ヒビキ「なんかはつきりしないな」

イブキ「ジンキさんからの話ですと萌香さんの妹が刃君に襲い掛かり、刃君が約束をしたら大人しく帰って行ったそうです。」

トドロキ「それだけなら普通じゃないツスカ?」

イブキ「でも、超粘着質な人だそうであっさり引いたことに萌香さんは驚いていたそうです。」

キョウキ「またフラゲか・・・ジンキもげろ!!」

アマキ「そうと決まったわけじゃないですけど、九曜さんからの話では彼女ツンデレというやつだそうです・・・。」

ヒビキ「じゃあ、彼女候補か?」

香須美「またですか!!ジンキ君は後何人の女性を落とせば気が済むのでしょうか?」

おやつさん「いや、まだそうと決まっていから・・・」

本日の金言 「ジンキ、モゲロ!! byキョウキ&イブキ」  
「ただの弟子あることを祈りましょう。 byその他」

刃「だといのですが・・・おっと、そろそろ時間か。いくぞ」  
「うちゃん!!」

「うちゃん」キョー!!」

第17話「へ〜通り魔事件…え？強盗団…しかも潰しているの？ヨッシャー

今回は強盗事件編です！！最後に少しアンケートがあります  
協力お願いします！！それではどうぞ！！

第17話「へ〜通り魔事件…え？強盗団…しかも潰しているの？ヨッシャー

第17話「へ〜通り魔事件…え？強盗団…しかも潰しているの？ヨッシャー！！（某勇者王風に）…前編」

心愛ちゃん襲来から少しだけ経って、僕の朝の鍛錬に心愛ちゃんも参加することになり、毎日良い修行になっている。今僕は音叉剣を使い心愛さんと手合せをしていた。

刃「ヨッ、ハアッ！！」

ガキイン！！

心愛「キャフン！？」

心愛さんの手からハンマーになったこーちゃんが離れ、元に戻るのを見ると僕は心愛さんの前に立ち

刃「はい、今日も僕の勝ちだよ。」

心愛「ああもう！！また変身してないのに負けたあ！！何であんたはそんなに強いのよ！！」

心愛さんは地団駄を踏み僕は音叉を元に戻して

刃「まあ、鍛えてますから、シュッ！」

と左手でやると心愛さんの悪い点を言った。これはいつも言うことで最初の頃は無視されてたけど最近は少しずつただけど聞いてくれ

るようになり、一番最初の頃は素手で相手をしていたが最近鬼爪と音叉剣を使わないと勝てなくなってきた。(鬼爪を最初に使った時は驚かれて気絶しちゃったけど)

刃「種族だからというのもあるかもしれないけど心愛さんとはとにかく力で真つ向から勝負をしたら駄目でしょう!!それとハンマーとかは当たれば威力は高くてもいいかもしれないけど、剣にした方がいいと僕は思うよ?」

心愛「別にいいじゃない!これは私の勝手でしょう!」

刃「まあ、それはそうだけど・・・こういつては悪いが、心愛さんは強い方の萌香さんと比べると力が足りないから他の物で補わなければいけないと思う。それにこーちゃんは剣にもなれるのだから?」

こーちゃん「キュー(肯定)」

刃「心愛さんは小柄であることがコンプレックスかもしれないけど、それを生かして短剣や片手剣でのトリッキーな動きをして相手を翻弄する闘い方がいいと思うし、それでもしないと僕を変身させるのはかなり遠い話になっちゃうよ?」

心愛「うつ・・・善処します。」

刃「そうかそうか・・・それと僕の血飲む?」

その時トゲゾーが来て僕のジャージの裾をかなり強く引っ張った。

刃「(ん?理事長からの呼び出しそれもかなり深刻なものだな)心愛さん今日の鍛錬はここまで僕は用事があるから失礼する!」

心愛「しょうがないわね、血はまた今度頂戴ね!!」

刃「おう、それじゃ!!」

僕はトゲゾーを担いで理事長室へ走って行き、

刃「理事長!!お呼びですか!?!」

理事長「お、来たかね刃君、久しぶりの出番だよ(ボソッ)」

刃「おおい!?!理事長メタっちゃうの!?!」

瑠妃「そうですよ、理事長出番が久々だからと言ってそんなことを言うてはダメですよ!!しかも私のライバルが増えているみたいですけど!!」

刃「瑠妃さんもメタるなよ!!それと心愛ちゃんは違うから!!ただの師弟関係だから・・・多分そうだといいな。」

瑠妃「刃さんは人気ですから・・・それと心愛さんのことは今はまだ不問にするとして理事長いかがなされたのですか?」

理事長「うむ、最近起こっている通り魔事件の事だが・・・つい先ほどの正体が人間界で悪さをした妖怪強盗団の仕業とわかった。」

刃「わかりました。では公安にこのことを報告して学園の皆さんの避難の誘導、さらに足の速いものを中心としたもので構成した部隊を作って、学園の周りを探索発見次第、報告と僕とザンキさんの

迎撃部隊で捕まえます。」

僕がそういつと理事長は手を前にだし

理事長「いや、刃君は避難支持をして、指揮権をザンキ君か九曜君に譲渡した後、敵の本拠地と思われる地下牢に向かってほしい。瑠妃君は月音君を見つけてほしい。」

刃「月音君を捜してほしい・・・どういことですか？」

瑠妃「私関係ですか？・・・まさか月音さんの封印が！？」

刃「封印？・・・ああ、グール化を止めるアレの事ですか！！！」

僕が驚くと理事長はいくつかピンで刺した地図を広げ、その上に魔封じの鍵の写真を置いた。

理事長「ああ、あの時彼に施した封印はまだ不完全な物で、もう一度魔封じの魔法を唱えないと少し厳しいものだよ・・・もしかすると月音君と闘うものになるかもしれない・・・二人ともやっつけられるかな？そして先にこのピンの地点にディスクアニマルを放つてから行動開始してくれ。」

理事長はピンを差した地点を指を差しながら言い、僕は腰に手を当て

刃「ふむ、力のバンパイアの力を借りたとしてもこっちは経験で無力化しますよ。」

瑠妃「やってみせます・・・それが仕事ですから・・・」

刃「さて、瑠妃さんもディスクアニマルを出してくれ」

瑠妃「は、はい！」

僕達はディスクアニマルを放ち僕は公安の建物に、瑠妃さんは月音君を捜しに行った。

〈公安の建物〉

刃「以上の通りに行動してくれ、学園付近を警戒する部隊はディスクアニマルを見かけたり、近づいたら急いで逃げてその場所を先生に報告：いいな！！」

公安一同「おおう！！」

刃「では各自行動してくれ！！」

モヒ安A「ヒヤッハー久しぶりのお仕事だぜええ！！」

モヒ安B「全くこつちの方が仕事を終えた後のコゴメトマトジュースが美味しく感じるからやめられないんだぜー！！」

モヒ安C「俺達が留年したのもこの感じが忘れられないからなんだぜえ！！」

九曜「いや、モヒ安達、バカかお前らは！！」

モヒ安D（真面目モード）「すいません、いつも成績は中くらいなんですけど公安をやめたくないから俺達揃って留年することに決

めたのです。」

刃「ならしょうがない・・・頑張ってね!!」

モヒ安A B C D「」「」「ヒヤッハー!!」「」「」

モヒ安達はバイクで公安の建物を出て行ったが・・・バイク欲しいな。

あたしは萌香おねえさまを元に戻すために通り魔を追っていたらそれが強盗団で、おねえさまとあの男は連れ去らわれ、あたしも少  
しで殺されるところでサキュバスと雪女が助けてくれたが、

胡夢「このこのこの」

みぞれ「このこのこの」

心愛「なに子供レベルの喧嘩をやっているのよー!!!!」

見なおしたと思ってしまったあたしはバカだった。喧嘩を止め、  
萌香おねえさまと男を捜すために地下牢跡を歩いて行った。その時  
さつき雪女が言ったことを思いだし問いかけた。

心愛「そういえばあんた達はさつき対あたしのおねえさまの特訓  
をしたいたって言ったのよね？」

胡夢「そうね、後・・・」

心愛「後？なんなのよ？」

みぞれ「刃と共に闘えるようにとの意味合いも込めているんだ。」

雪女の一言にあたしは首を傾げると

胡夢「なんか刃の闘いを見ているともっと修行しないと駄目だな  
くって思うのよ。」

心愛「そ、そんなに強い刃は？」

二人が落ち込んでいるのを見てあたしはそういうと、サキュバス  
は手をヒラヒラさせながら

胡夢「凄いわよ、去年の夏休みなら一人で200体以上の妖怪  
倒したし、」

みぞれ「ああ、その時の話なら月音からも聞いたが、一人で巨大  
な妖怪を燃やして足止めしたらしいし、いつもの仕事としてそう言  
うやつらを倒しているらしい……。」

胡夢「この前なんか裏モカと大きなクレーターを作って闘ったか  
らね、それで闘った後心配して声をかけても笑顔で鍛えてますか  
らで終わらせちゃうし」

みぞれ「正直刃は妖怪以上の何かだと思うぞ…でもそこがかっこ  
いい…ポッ」

胡夢「ひよっとしたら今日は輝を見れるかもね。でも普通の状態

倒せちゃうかもね」

心愛「さ、流石は刃だ・・・しかしあたしも妖怪の事はある程度知っているけど、あんな鬼がいるなんて知らないわよ！」

胡夢「あゝそれなら今度刃に聞いたら？今は月音とモ力を捜しましょー！」

そう言ってサキュバスは前を振り向くと、その先に

月音？「皆こんな所まで助けに来てくれたんだ…でももう大丈夫だよ敵はやっつけちゃったから」

男が立っていた。サキュバスは男に向かって走り出し、

胡夢「つくねっよかったー無事だったのつくねー」

月音？「ははっ、オレならピンピンしているよ」

そしてサキュバスはつくねと言う男（名前を覚えてなかったため）の前で…

胡夢「つくねっ！！」

ジャンプしてつくねの顔を大きな胸に埋めた。するとつくねは鼻血を出して倒れた。そして後ろから声がした。

紫「あついたのですう皆さん無事だったですう」

後ろを振り向くと魔女っ娘と黒服魔女がいた。

胡夢「紫ちゃんそれに瑠妃さんも！久しぶり〜刃君と二人で理事長の元で頑張っていると聞いたよ〜」

瑠妃「皆さんもご無事で何よりです。刃さんはもう少ししたら来るそうです。」

黒服の魔女はあたしに気が付くと

瑠妃「あら？そちらは？」

みぞれ「モカの妹のココアだ」

心愛「初めまして」

私が黒服の魔女に礼をした時、後ろで地面を蹴る音が聞こえて

瑠妃「え…」

ドスッ

月音が瑠妃と呼ばれていた魔女の腹に肘を食らわしていた。

瑠妃「カフ…」

しかし瑠妃は倒れず

瑠妃「ど…どうしたの月音さん、久々の再開だから私に抱き着いてくるなんて…私には刃さんがいるからこんなことをしては駄目ですよ…でもいい」

瑠妃と言われた魔女は体をくねくねとさせ刃との思い出を熱く語っている、雪女は

みぞれ「別にお前が月音に鞍替えしてもいいぞ、そうなる私の方が“色々”とやりやすいからな。」

瑠妃「しません！！だって刃さんは私の・・・ポツ」

この際何があつたのか聞かないことにした。すると魔女っ娘が

紫「わあゝ流石瑠妃さん、ドMとノロケ丸出しですう、でもアブノーマルじゃ負けませんよゝ何しろロリコンは犯罪ですからゝ」

と言って月音に抱き着くと雪女がため息をつき地面に手を当てる  
と魔女っ娘は氷の中へ入って

みぞれ「私の前でイチャつくな刃が欲しくなるじゃないか。」

心愛「欲しい!?!」

するとつくねはフラフラと歩いて

ぺたんっ

あたしの胸に触りあたしは即座にこーちゃんをモーニングスターに変え、

心愛「あたしをハーレム要員にするなー!!!」

とつくねを殴り飛ばすと血の匂いがおかしいことに気づき、つくねに近づき、血をなめてみた。いつものような血の味はせずに

心愛「まっずいなにこれタバコの味がする!?!」

あたしがなめた血をペツと吐き出すと来た道から白い鳥みたいな物が

鳥? 「パイ!?!」

月音? 「ガツ!?!」

つくねを飛ばし瑠妃の方に止まると瑠妃は顔色を変え

瑠妃「皆さん!?!そのひとから離れてください!?!」

皆がつくねから遠ざかると胡夢は

胡夢「瑠妃さんどういうこと!?!つくねから離れろって」

というと魔女っ娘が

紫「刃さんから聞いた話では、刃さんのディスクアニマル「光鷲」は一度覚えた人はどんなに変装しても判断できるそうで、また悪意を持っている人も区別できます!さらにその月音さんの腕にバンパアの血を封印するための魔具である「魔封じの鍵」がありません!?!あれは月音さんの「命綱」、そのない月音さんなんてありません!?!」

魔女っ娘がそういうとつくねは胸ポケットから煙草を取り出し火

をつける顔が変わり

強盗犯「ふゝまさかそんな玩具ではれるとはねえ」

と通り魔がいうとくるむは

胡夢「あんたが「偽物」ならつくね達は別の場所にいるんでしょ？ねえどこよ？」

と身構えながら言う通り魔はたばこの煙を吐くと

強盗犯「ああ、あいつらなら死んでいるよ・・・多分、今は仲間に見張らせているんだけどこれがヤバい奴でねナイフで肉を切ることに快感を感じる変態さんなんだよね。まあオレの一味の殺し担当さ、月音くんもあいつに遊ばれている頃だと思っから見ない方がいいヨゝグロイから」

そう笑いながら強盗犯は言うとくるむは

胡夢「このおおおおおおおおお！！！」

叫びながら攻撃しようとするが、

瑠妃「待つて落ち着いて月音さんはまだっ……」

その時シユカンと鋭い音が聞こえるむの腕から血が出ると強盗は

強盗犯「いいねゝ殺意を向けてくる相手なら女でも容赦なく殺せるかかって来るなら覚悟しなよゝ俺強いから」

強盗はそう言うと、瑠妃は魔具をしまい、刃の持っているのと同じ音叉を剣に変えると強盗に向かって

と聞きましたから、

そう言い剣を構えると

瑠妃「では皆さん行きますよー!!」

みぞれ「そうだな・・・さっさとこんなやつを倒して月音達の居場所を吐かせるぞ。」

紫「数では上回っていますが気を付けていきましょう!!」

あたしもこーちゃんを構え直し

心愛「そうね、毎日刃との特訓の成果を見せてやるわよ!!」

くそしてそのころの刃く

刃鬼「うおおおおおおおおお!!間に合ええええええええええええええええ!!」

シャカシャカシャカシャカ……

変身して必死にママチャリをこいで地下牢跡の入り口に向かっ  
ました。

第17話「へ〜通り魔事件…え？強盗団…しかも潰しているの？ヨッシャー

あとがきではアンケートを取りますが、後編の最後に心愛が刃の事を「師匠」と呼ばせるか「義兄さん」と呼ばせるか迷っています！

恋のフラグを期待していた人には申し訳ございませんが、これ以上恋のライバルが増えると（ジンキの）胃に穴が開くかもしれませんのでこっちのフラグにさせていただきました！！期限は本日の午後9時までです！！

ご協力よろしく願います！！

第17話「へ〜通り魔事件…え？強盗団…しかも潰しているの？ヨッシャー

はい、第一七話後編です！アンケートの結果「義兄さん」に決まりました！最初「お義兄様」と書いていた人もいたのでびっくりしました。因みに瑠妃とみぞれのライバルではないので安心？してください！

それでは後編をどうぞ！！

第17話「へ〜通り魔事件…え？強盗団…しかも潰しているの？ヨッシャー

第17話「へ〜通り魔事件…え？強盗団…しかも潰しているの？ヨッシャー！！」（某勇者王風に）…後編」

シャカシャカシャカシャカ…キキイー！！

刃鬼「うわっ、この自転車ブレーキパッドすり減っている！！しかも油もなくなっているからウルセツ！？…あとで整備するか…」

僕は自転車から降り、幽波紋じゃない方のスタンドを降ろし、地下牢の入口を見た。

刃鬼「地図によると一番近い入口は…ここか…」（紫色の蛇風に）

僕は地図を確認して地図を折りたたみ、かごに入れ風で飛ばされないように石を乗せてから中へ入って行った。

〜数分後〜

刃鬼「迷ったな…さっきから同じところをグルグル回っているな…」

普段ならここで自分の鼻で誰か捜すけどここはかび臭く鼻が利かなくて僕は困って別の道を歩いていると

刃鬼「ん？壁に穴が開いている？しかも断面から結構新しい…いってみるか。」

僕は壁の穴を通り行くと女性が泣く声が聞こえ、急ぐと血まみれで気絶している蜘蛛の妖怪と泣いている萌香さんがいた。

僕は急いで萌香さんに駆け寄ると

刃鬼「萌香さん!! どうしたのですか?」

萌香「刃・・・刃鬼君、月音を止めて!!」

刃鬼「萌香さん、それは一体・・・まさかバンパイアの血が暴走しているのか?」

萌香「うん、だからお願い!! つくねを止めて!!」

僕は頷き立ち上がり、牢屋の外へ向かおうとすると蜘蛛の妖怪は

蜘蛛男「くっそ、あの餓鬼・・・許さねえ!!」

と言いながら立ち上がったが、色々とややこしくなりそうだったので

刃鬼「寝てる」

ゴッ!!

蜘蛛男「ギャアアアア!?!?!」

左フックを顎に食らわして気絶させた。その時緑大猿が来て僕はその後を壁を壊したりしながら突き進み角を曲がると煙草をくわえ、

変化が解けた胡夢さんと闘っている月音君を見守っている皆、そしてその後ろからでかい妖怪がいたので僕は走り、低くジャンプして

刃鬼「ライダーキック!!」

牛っばい妖怪をライダーキックで蹴り飛ばし、着地すると

月音「う あ (赤面)」

胡夢<sup>ズボン</sup>「グハツ (赤面)」

刃鬼「なんで月音君とズボンをはいた胡夢さん鼻血出しているの？ スカートをはいいた胡夢さん？」

胡夢<sup>スカート</sup>「あいつが私の姿でつくねに胸を見せたのよおおお!! っ て何よその呼び方!! それとあいつは偽物よ!!」

みぞれ「あいつはドッペルゲンガーと言う種族で他の者に化けることができるそうだ」

刃鬼「ああ、確かにそれだと鼻血でますね・・・とりあえず瑠妃さん今のうちに」

瑠妃「は、はい!! 紫ちゃん手伝って!!」

紫「了解ですう!!」

紫ちゃんが暴走状態で鼻血が垂れている月音の周りにカードを差し、魔方陣を作って結界を発動すると月音君の顔にあった紋様らしき物は引いていき、元に戻るのを確認し、ほっと胸を撫で下ろすと…

心愛「どこ行くの？あなたにはまだお姉ちゃんを返してもらってないわよ？」

心愛ちゃんがこーちゃんを振り上げ、

心愛「逃げようたってそうはいかないんだから！！」

こーちゃんを振り落とし胡夢（偽）は避けたが

刃鬼「あゝ僕は萌香さんの場所知っているよ。ここに来る前に会ったし」

心愛「え！？どこっ！？」

心愛さんがそう言ったが、僕は胡夢（偽）の逃げている先を見て角を曲がった瞬間砂煙が上がった。そこは僕が来たところでもあるので僕は指を差しながら

刃鬼「今砂煙が上がった方から来たから多分萌香さんもあそこにいると思う……。」

心愛「ええ！？」

月音さんの血の暴走を封じた後、突如轟音が響き私達はその方を見ると

胡夢（偽）「ハハハハツついてるつついているぞ！…まさかこの局面でこんな女に会えるとはッ」

胡夢（偽）の右手は萌香さんの頭に手を置いていた。

胡夢（偽）「目が合った瞬間なぜかピンときたよ。「この女は何がある。」「こいつに変化してみてえ」ってな」

偽胡夢の右手が怪しく光り、左手を顔の前に持つていくと

刃鬼「げっ！？顔が変わっているう！？髪も伸びてる！？」

刃鬼さんは変わっている事に

胡夢（真）「うそ…！この凶々しい妖気…これは……」

みぞれ「まさか…これは」

胡夢（偽）は裏萌香（偽）へと変わり、

裏萌香（偽）「まさかこの女がこれ程の力を隠し持っていたとはな」

みぞれ「まずいぞ…くるむに化けた時でさえかなり強かったんだ。そんな奴が」

刃鬼「胡夢さんに化けた時でもかなり強い？どついう意味だ？」

みぞれさんの一言に刃鬼さんは首を傾げていて私は

瑠妃「刃鬼さん！彼は様々な武術をマスターしていて化けた人の力を100%引き出せるそうです！！」

私の説明に刃鬼さんは聞きおわると

刃鬼「ほう、それは厄介な相手ですね・・・で瑠妃さん、彼と言っていたからあの偽物は本当は男なんですね？」

瑠妃「は、はい！刃鬼さん余裕ですね・・・」

胡夢「刃鬼、あんたこの前裏萌香負けたと言ってたじゃない！！何でそんなに余裕なのよ！！」

刃鬼「余裕？それは違うよ。胡夢さん、例え相手が裏萌香さんに変わったとして狼狽えていては隙が出来ます。それに「汚らわしいっ！」あ、待て！心愛ちゃん！！」

心愛「あんなんかがお姉さまの代わりになるもんかああああ！！！」

刃鬼さんの静止を聞かず、心愛さんが偽の萌香さんに向かって武器を構えて駆け出し、偽の萌香さんはカウンターの構えを取って、刃鬼さんは走りだしながら

刃鬼「ちっ・・・相棒！！偽物の腕を狙え！！」

光鷲「パイ！！」

刃鬼さんが指示すると光鷲は一直線に偽の萌香さんの腕に飛んでいき、翼のカッターで腕を浅く斬りつけた。

裏萌香（偽）「クッ!？」

偽の萌香さんは顔を一瞬ゆがめたが、そのまま攻撃は心愛さんを捉え、

パン！

心愛「あ・・・」

心愛さんは口から多少の血が出て宙を舞ったが、刃鬼さんが素早くキヤツチをすると偽の萌香から背を向け私達の元へ歩み寄りながら

刃鬼「おい、大丈夫か？僕の声が聞こえるか？」

と声をかけると心愛さんは弱弱しく

心愛「う…や、刃…」

と答えると刃鬼さんはフウと息を吐くと

刃鬼「良かった…意識はあるか、それと動けるか？」

心愛「喋れるけど、身体は動かない…忠告聞かなくて…」ごめん

刃鬼「顎に入ったか…別に謝らなくてもいいから、偽物は僕が倒すから休んでいてくれ…瑠妃さん頼む」

心愛「うん・・・わかった。」

瑠妃「は、はい」

気を失った心愛ちゃんを私のそばに降ろして立ち上がると偽の萌香さんを見た。偽の萌香さんは萌香さんを投げ飛ばし、苦い表情をしながら

裏萌香（偽）「貴様、あの一瞬で俺がどこに攻撃するかよく分かったな。あの時の玩具の一撃で少しずれたよ。しかもこの俺を倒すだど？」

刃鬼「僕の相棒を玩具呼ばわりにするのは酷いね、ああ見えて、鉄柱なら斬りおとせるんだけど……ここから先は僕が相手だよ。」

刃鬼さんは構え、偽の萌香さんも構えるとお互い同時に地面を蹴ると偽の萌香さんは蹴りを刃鬼さんは殴りかかり

バシッ！！ガッ！！

地下牢跡に激しい音が鳴り、刃鬼さんは萌香さんの蹴りをガードもせずに立ち、

裏萌香（偽）「ゲッ……」

偽の萌香さんはフラつき、刃鬼さんは懐に入り

刃鬼「まだまだあ！！」

ドドドドドドドドドド！！

偽の萌香さんの腹部に連打で拳を打ち込み、

刃鬼「もういつちょう!!」

裏萌香（偽）「グハッ!？」

アッパーカットをして偽の萌香さんは吹き飛ばされた。その光景に胡夢さん達は

胡夢「嘘・・・強い」

みぞれ「全くあれを見ると今までの修行が意味がないように感じるな・・・」

紫「この前は手加減でもしていたのですか？」

紫ちゃんの一言に刃鬼君は右手をこっちに向け人差し指をたてて横に振った。

刃鬼「ちがうよ紫ちゃん手加減はしてない・・・ただ彼は隙をなくし、できるだけ攻撃を食らわないことを最優先に持っているから、さっきの蹴りは本物の萌香さんより弱いんだ。」

刃鬼さんは烈光を構えると片方を立ち上がろうとしている偽の萌香さんに向け

刃鬼「それに彼女の潜在能力100%出せたとしても彼は萌香さんじゃない、さっきなりたてだ・・・それでろくに鍛えてないのにいきなり強くなるうとしても、所詮無理があるってもんだな。」

裏萌香（偽）「ふざけるな!!俺は空手、功夫、柔術と言ったあ

らゆる武術をマスターしているのだぞ！」

偽の萌香さんは構え直し刃鬼さんに攻撃を仕掛けるが刃鬼さんは烈光で手を叩き落とし、手を抑え

刃鬼「・・・で？それがどうかしたの？」

裏萌香（偽）「それがって・・・俺だって鍛えてきたんだぞ！」

刃鬼「そうだね・・・でも君は心の方は鍛えたのかな？そして鍛えた理由は自分“だけ”を守るためだけでしょう？しかもさっき言った武術はどれも相手：人間相手に“倒す”武術だ・・・僕のように妖怪以上の“化物”を“殺す”武術じゃない。」

刃鬼さんは少し悲しそうな顔で言うと、頭突きをして相手を少しだけ離して腹部に烈光を叩きこむと

刃鬼「最後に僕相手に萌香さんに化けたのは間違いだったかもね・・・」

裏萌香（偽）「ハア、ハア、ハア・・・何故だ？」

刃鬼「僕がこれから使うのは萌香さんには本当に相性の悪い技だね・・・ハア！！」

刃鬼さんが輝に変わろうとした時、偽の萌香さんは襲い掛かったが刃鬼さんの纏っている光によって弾き飛ばされ、刃鬼さんが変わり終えると烈光に光が集まると

刃鬼輝「すまないが、そろそろ終わりにさせてもらおうよ・・・ハア！」

！」

烈光をふるい光が偽の萌香さんの当たると鼓に変わり、

裏萌香（偽）「な、なんだこれは!？」

刃鬼輝「なにつて、ただの鼓さ・・・今のあなたには少々きついぞ・・・さて、お前の罪でも数えてな。」

刃鬼さんは偽の萌香さんの前に立ち

刃鬼輝「響鬼さん直伝：「爆裂強打・輝」の型：テリヤアアア  
！！」

刃鬼さんは烈光で思い切り鼓に叩きこみその時も妖気と清めのが反発しあい電流がバチバチと

刃鬼輝「ハア！！ハア！！ハア・・・テエエリヤアアア！！」

裏萌香（偽）「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

音撃を決めると白い爆発が起きて煙が晴れると変化が解けた強盗犯の姿があつた。輝と顔の変身を解くと胡夢さん達は駆け寄り

胡夢「やぶ〜強盗犯をやっつけたよ〜！！！」

紫「輝で闘つとあなるのですね・・・ゾクゾクするですう！」

みぞれ「流石だな・・・ますます惚れるよ・・・ポ」



みぞれ「私も問題はない・・・それとくるむ嘘はいけないぞ。」

月音「俺も身体のおちこちが痛いけど大丈夫だよ。」

紫「二人とも口に血の跡がついてますよ。」

瑠妃「私達もかなりの魔力を消耗しましたが、動けます。」

刃「皆は大丈夫でと・・・残りは結構大ダメージを受けた心愛ちゃんか。」

刃さんは烈光を戻し顎に手を当てながら心愛さんを見た。心愛さんは私の肩にもたれて、眠っていた。

心愛「スー...スー...」

刃「なんか・・・起こすのも気がひけるな。」

胡夢「そうねえこうしていると可愛いんだけど」

刃「しょうがない・・・瑠妃さん、済まないけど心愛ちゃんを...」

心愛「ん・・・」

あたしが偽物の攻撃を食らって刃に休むように言われてから揺れている事に気づき目を覚ますと

萌香「あ、心愛」

刃「おお、心愛ちゃん、目が覚めたか。」

胡夢「もつぐつすりと眠っちゃって！」

みぞれ「その程までに偽モ力の力が強かったんだろ……」

紫「でもあれは刃さんの判断のおかげで少しは威力を落としたのですよ！」

瑠妃「それでも吸血鬼の回復力でもかなりの時間がかかるので  
ね。」

月音「本当に吸血鬼っているいろと凄い面があるね。」

皆の声が聞こえるが、刃の声なぜか近くから聞こえて不思議に  
思うとだんだん意識がはつきりしてきて、あたしの目の前に黒く大  
きな物が見えた……あたしの制服は赤だけどおねえちゃんたちの制服  
は緑で黒なんてないはず……そういえば刃の鬼の姿肌が黒かったよう  
な……

心愛「え……ええええ！？ちよつと刃、離しなさいよ……！」

刃「おつと！？こら暴れるな！！落としちゃうだろ！！今、降ろ  
すから暴れないでくれ……！」

あたしは刃におんぶされる形で運ばれていたのである！刃は急い  
であたしを降ろしあたしは足に力を入れようとしたが、

心愛「あ、あれ？フンツ！…あれ？」

腕は力が入るのに足に力が入らず立ち上がれず刃の背中にもたれかかってしまった。

刃「ありやありや・・・まだあの攻撃のダメージが残っているのか・・・病院まで我慢してくれないか？」

心愛「第一なんであなたにおんぶされなきゃいけないのよ！せめておねえちゃんにされたいわよ！！」

刃「無茶いうなよ。萌香さんは襲われた時のダメージがあるし、この中で一番体力が残っているのは僕だからしょうがないじゃない！！」

みぞれ「といっても刃は偽モカと闘っているけどな・・・」

雪女の一言であたしは

心愛「そういえばあいつはどうしたの！！お姉さまが倒したの？」

と云うとお姉ちゃんは手を振りながら

萌香「ううん、私は闘ってないよ。刃君がやつつけてくれたよ。」

心愛「嘘よ！アレの力は強かったのよ刃ごときに倒せるわけなんて・・・」

刃「まあ、あれは敵が萌香さんの体に慣れてない事と、元が男だから容赦なく顔とかにグーパンチができたから勝ったんだよ。第一、

萌香さんの体に戦鬼の力とは相性が悪かったこともあるけどね……と、」

刃があたしを背負い直し、歩き出した。あたしは背中にもたれて

心愛「ねえ、なんで刃はそんなに強いなの？」

と問いかけると刃は

刃「うーんそれは僕の過去を話さなきゃいけないけど、それは重い話だけどいいかな？」

心愛「……うんお願い」

刃は顔を少しだけ空に向けると

刃「月音君には話したか覚えてないけど、僕がなる戦鬼は心身を鍛えて、いろんな人から教えてもらって初めてなれる姿でね……僕が鬼になろうとした切欠は小学校の頃目の前で両親を魔化魍に殺されてね、僕はその時逃げる事しかできなかった。その時に今の僕の父さんと会って、父さんが魔化魍を倒すのを見ることを許可してくれたけどその時の父さんの姿に憧れて、僕も鬼になりたいと思っただんだ……。」

月音「刃君……」

刃「それで最初は父さんに弟子入りしようとしたけど断られて自分で鍛えることにしたんだよ……でも小学校低学年の頃にどれほど鍛えても、何回懸垂できても鬼になれなかった。その時の僕の心は魔化魍を滅ぼしたい気持ちでいっぱいだったからね、ある日一人

の同級生を守るのに数人の上級生と喧嘩して、ボコボコにされ、気づいたら一人の先輩鬼が今のようにおんぶしてくれてね。その時にその先輩に負けて悔しいと言ったら、同級生が僕に感謝していたから良かったね。僕は友達を守れて羨ましいとも言われたよ・・・その時に教えられたよ。倒すことより守ることの方がなんかこう・・・心がスツとするなって」

あたしはその話を聞いていて刃の背中に顔をうずめると刃は続けた。

刃「それから気持ちを復讐ではなく誰かを守りたいという思いで修行をすると、今まで相手にしてくれなかった先輩方が教えてくれたり父さんが異様に優しくなったりして修行が進み、先輩方も驚くぐらいの年、確か小学高学年の時かな？鬼になつて頑張ったね・・・大けがを負った先輩の穴埋めとかで忙しくて中学では友達もできなくて浮いていたね。いつも生きるか死ぬかの闘いだったからね。ここに来て毎日が楽しいね・・・恋人もできたし。」

瑠妃「刃さん・・・」

刃「おつと話がずれたかな？まあ簡単に言うとな誰かを守りたいという気持ちで鍛えているからかな？それと経験と先人の教えかな？おつと病院に入ったら書類書くからしつかり捕まってくれ」

心愛「ん・・・」

あたしは刃の首に腕を回し刃達は病院に入り近づいた医者を持っている書類にサインをしていた。

心愛「・・・ねえ、刃・・・」

刃「ん、なんだい？心愛ちゃんどこか痛むのか？」

心愛「あたしが回復したらまた手合せしてくれる？」

刃「いいよ、僕も吸血鬼と闘えるのはいい経験だし心愛ちゃんが目に見えて強くなるのは嬉しいからね。」

明日夢「刃君、もう鬼の弟子取ったの？」

刃「まさかっ弟子と言うほどじゃありませんよ。ただ手合せをして、いけないところを言うだけですよ明日夢兄さん」

明日夢「そうなんだ、じゃ、こっちについてきて」

あたしは刃の一言で一つ思いつき皆が一つの部屋の扉の前についた時

心愛「ねえ、刃・・・もうひとつ願いがあるんだけどいい？」

刃「うん、いいけどどうかしたの？」

皆が部屋に入り終え刃が椅子にあたしを降ろそうとした時に言った。

心愛「今度から刃を義兄さんって呼んでもいい？」

その時刃はピタッと止まった。辺りを見回すとお姉ちゃんまで固まっていた。

僕は心愛ちゃんの一言にわが耳を疑った。念のために心愛さんを椅子に降ろし、真正面からもう一度聞くことにした：聞き間違いであることを願って……

刃「ごめん……心愛さんさっきなんて言いましたか？僕の聞き間違いでなければ先ほど僕の事を……義兄さんと呼ぶと聞こえましたが？」

月音「僕もそう聞こえたけど……違うよね？」

胡夢「だ、だよね〜」

しかしみんなの思いとは裏腹に心愛さんの口から出た言葉は

心愛「うん、間違っていないよ。お義兄ちゃんと言った方がいい？」

その発言に僕はゆっくりと瑠妃さんとみぞれさんの方を見ると

瑠妃「またですか……フフフフッ」

みぞれ「刃は罪づくりな男だな……フフッ」

吹き出しだと普通に笑っているように見えるが目が笑っていない。しかも瑠妃さんは音叉剣、みぞれさんは両手に氷の爪を展開してこつちを見ていた。とりあえず僕は心愛さんに理由を尋ねることにした。

刃「なあ、何故心愛さんは何故そう僕を呼びたいんだ？」

僕の質問に心愛さんは

心愛「偽物の萌香お姉さまを倒した強さに惚れたしいつもあたしのわがままに付き合ってくれるし、それと背中が温かかったからかな？・・・駄目？（上目使い+腕をギュツと掴む）」

刃「フグツ（心に矢が刺さる）！？ええつとその」「いいんじゃない？」「…え？」

僕が心愛さんの質問の返答に四苦八苦していると部屋の扉が開き、イブキさんとトドロキさんが入ってきた。その二人に瑠妃さんとみぞれさんは殺気を飛ばした。

イブキ「部屋の外で聞いてたけど、刃君はアマキを姉御って言うているからいいんじゃない？」（天然）

トドロキ「キョウキも兄貴って言われているし刃にも義妹ができてもいいと思うツス！！それと鬼の弟子じゃないなら、小暮さんも起こらないと思うツス！！」（全然気づいてない）

明日夢「そう言えば、俺も刃君から兄さんって呼ばれているから問題は・・・あ」（途中で二人の殺気に気づく）

明日夢兄さんが天然&鈍感鬼コンビの後ろで瑠妃さんとみぞれさんにジェスチャーで謝っていると僕は最終手段を思い出した。

刃「あ、ごめんね」父さんに許可を取らないと…（多分父さんから駄目って言うはずだ！！）」

心愛「なんで刃義兄さんの父さんから許可を取らなくちゃいけないのよ。」

瑠妃「少しそう言うのに厳しい方で刃の恋人の私もまだ中々認めてもらえなくて…（刃さん、ナイスです！！）」

明日夢「そ、それじゃあ立花に連絡を…」「その必要はないぞ！」「え？ザンキさん？」

月音「え？財津原先生！？ど、どこに」

トドロキ「……！！匂いからしてその壁ツス！！」

ジンキ「おいおい、なんで居場所分かるの！！」

瑠妃「日菜佳さん……頑張ってください。」

トドロキさんが指さす先の白い壁をよく見ると長方形の切れ目が入ってペラッとはがれるとコーヒカップと携帯を持ったザンキさんが現れ、

ザンキ「ついさっきメールで確認したら「彼女は許さんが、義妹くらいならいい」だそうだ。」

刃「そんな……ソナウドンドコドーン！！」

僕が叫ぶと心愛さんは腕をグイッと引っ張ると

心愛「ねえ？師匠って呼ぶのは先輩とかに誤解を招くかもしれないな

いけど義兄さんって呼んでも大丈夫だよな？（上目＋笑顔）」

刃「ハウツ！？…ハア…父さんからも許可が出たしいいよ…でも最後に確認させてほしい」「刃さん！！」「どけ！！」「オポフ！！？」

僕がそう言いかけた時、瑠妃さんとみぞれさんに飛ばされた！  
僕は起き上がり三人を見ると

瑠妃「さ、最後に確認させてください！！！」

みぞれ「朱染心愛…お前は」

瑠・み「刃の事が好きになったのですか？（か？）」「」

と言うと心愛さんは眉をしかめ

心愛「は！？好きだけど…likeの方でしょ？」

瑠妃「いいえ、loveの方です！！！」

みぞれ「もしくは欲しいか…お前までライバルになると刃を奪いにくくてかなわん」

瑠妃「あなたには絶対あげません！！私は刃さんとキスはしましたし「これ以上書きますとこの小説がR18になるので略します。」

みぞれ「甘いな、私が刃の嫁になれば、刃の為なら「これ以上書きますと（ry）」

瑠妃さんとみぞれさんの口喧嘩が始まりその内容を間近で聞いて

いる心愛さんは

心愛「え？え？……キユー」

心愛さんは鼻血を出しながら気を失い、

刃「心愛さああああん！！って月音君もおお！！しかもイブキさん、トドロキさん！？あなた達彼女いるでしょ！？」

月音君、イブキさん、トドロキさんも鼻血を出して気絶して、萌香さんは顔を真っ赤にしている。紫ちゃんも鼻血を出しながらメモ帳に何か書いていた……

ザンキ「全く……」

明日夢（螢糸さんによって慣れた）「あははは……」

この後心愛さんに聞きなおすと僕と裏萌香さんの（割と薄いけど）大きな壁があるそうで愛してはいないそうで安心しました……後、トドロキさんとイブキさんはみぞれさんの手によって凍らされました。

しかし……学校内でも大声で呼ぶからすごく恥ずかしい……でも満面の笑みでこっち来るからやめるとはいえない……ウウッ

第17話「へ〜通り魔事件…え？強盗団…しかも潰しているの？ヨッシャー〜  
今回の猛士報告」

義妹が出来ました・・・

b y ジンキ

ヒビキ「エイキさん子連れの方と結婚したのですか？」

エイキ「いや、ただだけど？・・・ああ、ザンキが言ってた子ね。」

日菜佳「まさか新たな瑠妃さんのライバル出現!？」

香須美「いや、それはないって」

アマキ「つまりジンキ君が私の事姉御と言つのも同じようなもの  
ですね。」

キヨウキ「なるほど、弟子だったら俺がぶん殴ろうと思っていた  
けど義妹ならしょうがない。」

おやつさん「それと関係ないけど、さっき宅配でイブキ君とトド  
ロキ君が氷漬けで来たけど・・・どういうことなの？」

ヒビキ「さあ？なにか余計な事を言ったんじゃないのですか？」

おやつさん「だろうねえ・・・」

本日の金言 「人間の氷漬けて生モノで宅配できるんだ…」  
Y立花一同」 b

第18話「一時的に成長するキャンデー・・・メ〇モちゃんか!？」

(前書き

第18話です!!今回はキャンデーを食べて心愛が縮む話です!!

それと今回から新キャラ月光閃火さんが考えたキャラが出ますが感想に書かれたとおりに出してしまうと主人公が主人公(空気)とか(笑)になってしまうので月光閃火さんに了承を得て設定をいじって出したあります。

第18話「一時的に成長するキャンデー・・・メ〇モちゃんか!？」

第18話「一時的に成長するキャンデー・・・メ〇モちゃんか!？」

どうも最近義妹ができた松坂刃です!今僕は新聞部の勧誘に出たつもりが噂がすごい勢いで広まっているようですね...何が言いたいかと言うと現在進行形でたくさんの生徒に追われています(笑)!!

刃「た、助けてくれ　　!!」

女子生徒A「待ってくださいお兄様~~~~!!」

女子生徒B「私お兄様の部活に入りたいのです!!」

男子生徒A「俺を兄貴の下で働かせてくれ~~~~!!」

男子生徒B「兄貴の為なら一生ついて行きます!!」

僕は逃げながら廊下の人達に勧誘チラシを配りながら走っていると制服を着崩した一人の生徒が僕の隣に来た。僕はわりと力を入れて走っていたので驚いた。

刃「ほう、君なかなか鍛えているね...新聞部にこない?」

??「ふっ...あなたはそんな体格で新聞部の勧誘とは...変わっていますね。」

刃「まあ、そうだけど僕は松坂刃で学年は二年だ。君の名前は?」

キリク「俺の名前はキリク<sup>シャルパス</sup>ガールアント、フルネームはキリク<sup>シャルパス</sup>S<sup>II</sup>ガールアントで学年は一年だ・・・しかし何故あんたは走っているんだ？」

キリクと言った少年は首を傾げながら尋ねるが僕は最後の一枚を配るとチラシ入れを後ろに投げると

女子生徒C「キャ!？」

男子生徒C「オウフ!？」

ビオー（パンツ一丁）「アアン、ヒドウ〜イ!〜!」

数名こけるが後続はうまく回避して追ってくる。僕は前を向きなおすと

刃「何でかはわからないが変な噂が広まっっていて（最強とか男女両刀とか）、放課後とかこうしないと捕まってナニをされるかわかったもんじゃない!・・・そろそろだな、キリク君、次の角を曲がったらジャンプしろ!!君を新聞部室に連れて行く!!」

キリク「ん?ああ、わかった。」

僕とキリク君は角を曲がると大きくジャンプした。何故ジャンプする必要があったかと言うと、暴動鎮圧用に公安、相撲部、ラグビー部によって構成されたの部隊が結成して待ち伏せしていたからである。（本来は萌香さん達のような女性用に構成したはずなのに…  
解せぬ）



すると安全第一と書かれたヘルメットを被った九曜さんが現れて

九曜「ここは私達が止めますから、刃さんは今のうちに逃げてください！！」

刃「わかったよ九曜さん！キリク君僕についてきてくれ！」

キリク「ああ・・・」

僕はキリクさんを連れて新聞部部室に入ると

胡夢「アハハハハハハハハハ！！」

みぞれ「くくくく・・・」

胡夢さんとみぞれさんが大笑いしていて、瑠妃さんは紫ちゃんから貰った書類目を通して

瑠妃（顧問補佐）「すすすくドロップ…服用した妖を大人の姿に「強制変化」させる薬のようですね。妖の変化能力を刺激してるだけのようなので時間が経てば元に戻れるとは思いますが…」

僕はキリクさんを連れて月音さんに近づき

刃「月音君、どうしたの？」

月音「あ、刃君後ろの子は？」

キリク「初めまして、俺の名前はキリク＝ガーランドと言います。

」

月音「あ、俺は青野月音です。君の先輩なんだ。」

刃「彼は新聞部入部予定の方です……で月音君あの心愛ちゃんっぽい子は一体……」

僕が瑠妃さんの前に立っている女の子に指を差していると女の子は僕の方へ見て、身に涙を浮かべ

心愛？「う……刃義兄さあ……ん！！」

僕に抱き着いてきた。僕の事を義兄さんと呼ぶのはこの学園内ではただ一人だけ（兄貴とかお兄様とかよく言われるし、外でも言われたことはないけど）

刃「もしかして、心愛ちゃんか！？なんでまた小さくなったの……  
ゴルゴムの仕業か!？」

萌香「ゴルゴムって何!!!？」

「紫ちゃん説明中」

刃「なるほど……紫ちゃんが作った大人に一時的になるキャンデーをなめて、その副作用で小さくなってしまったのか。」

僕は皆にコーヒーを淹れるためにサイフォン（副顧問のザンキさんの私物）で鬼火でつけたアルコールランプでお湯を沸かしながら、紫ちゃんの説明を聞いていると胡夢さんが小さくなった心愛ちゃんに抱き着き

胡夢「いや〜ん、サイコ〜かわいいっ!!」

そしてみぞれさんが心愛ちゃんの頭をぺしぺしと叩きながら

みぞれ「ちっちゃい方が断然可愛いぞ。」

二人が心愛ちゃんをからかっているので萌香さんは叱ろうとしたが、その前に

ゴン!×2

刃「馬鹿にしちゃダメだろうが!」

胡夢「う、うおおお・・・」

みぞれ「痛いではないか刃・・・」

胡夢「そうよ!!たんこぶできちゃうじゃない!!」

二人はぶーぶーと文句を言ったが僕は音弦を見せ

刃「そうか…ならば鬼になって頭をまっp」「すみません」「よろしい…で心愛ちゃんは何故薬を使ってまで大人になろうとしたのかい?」

僕がそういつと心愛ちゃんは俯いて

心愛(小)「そ、その…空手部に入ろうと思ったら子供はダメってバカにされて・・・」

みぞれ「ん？…お前は新聞部に入るんじゃないのか？」

心愛（小）「そんな事一言も言っていないわよ！！」

刃「まあまあ、空手部か・・・主将はいい人って聞いたけどあまり下の人は駄目だつてモヒ安が愚痴っていたな・・・。」

僕はコーヒを淹れて数人分入れ終わると

心愛（小）「へえ…そうなんだ…って義兄さんは勧めないの？」

刃「まあ部活は個人の自由だからね、今日は勧誘することもないから心愛ちゃんは色々と楽しんできたら？その中で気に入った部活があつたらそこに入部したらいい。」

僕がそう言いながらコーヒをキリク君の前に置くと萌香さんが

萌香「でもその前にブカブカの服をどうにかしないとね。下着丸見えじゃ恥ずかしいでしょ？じゃあ私達は手芸部の所に行ってくるね。」

刃「なら僕と月音君達、野郎共はここでキリクさんに説明するね。行つてらっしゃいシユツ！」

瑠妃「では、失礼しますね。」

女性陣が立ち去ると、僕はキリク君の向かいに座り、月音君が参考用の資料を取り出そうとした時キリクさんが突然

キリク「刃さん…あんた鬼…音撃戦士なんだろ？」

刃「何故、そう思ったのかな？」

キリク「俺は風の噂を聞いてきたが音撃戦士は常に鬼の顔が彫られた道具を持っていると聞いたからなそれに……」

刃「うん？・・・ああ、」

キリク君が向いた方を僕も遅れて見ると月音君が持っていた記事を全部落として固まっていた。

キリク「あれを見たら確信でしょう？」

刃「うん、そりゃね…月音君は秘密をつまく隠す練習をしてね…で新聞部の活動の内容なんだけど基本は学校中の噂を聞き、裏付けを取ってそれを記事にするんだけど…」

キリク「いや、待て何普通に進めようとする？聞いた話では最低でも記憶の改竄も辞さないと聞いたぞ？」

キリクさんの一言に僕は眉をしかめながら

刃「なんでそんなことをしなきゃいけないんだ？もし戦鬼…音撃戦士の関係者以外に見られたら鬼が反省文を書くだけなんだけど、それにうっかり鬼の姿を見て、それから鬼に弟子入りして鬼になった人が多いんだけど・・・すまないが他の噂の内容も教えてくれますか？」

僕の問いにキリクさんは頷き話してくれたが僕だけでなく、月音君まで「え〜」みたいな顔で話を聞いた。

キリク「異常が俺が聞いた話だ・・・どこかおかしい所はあるか？」

キリク君の話聞いた僕は頭を抱えて

刃「おかしいも何も・・・まず【『鬼』はかなり昔から世の中に潜む闇や妖怪を祓ってきた『ダークヒーロー』である】ってあるけどおそらく闇と妖怪と言うのは魔化魍でしょう・・・たまに間違っただ妖怪と闘うこともあるけど、それは本当に稀で、鬼はダークヒーローではなく、なるうと思えば心身を鍛えたらなれる身近なヒーローが売りのつもりだし・・・」

月音「その次の【鬼の持つ『力』には闇や妖怪を浄ずる】ってあったけど確かに萌香さんとかに効果はあるけど、魔女の瑠妃さんや紫ちゃんとかにはあまり効果ないよね？」

刃「うん、最後に【鬼の『力』は一子相伝である】ってあるけど別にそうじゃないんだよね、僕がいい例だ（弟子がすでにいたザンキさんから弦を教えてもらった）。鬼によつては弟子が卒業したらすぐに新たな弟子を入れることが多いんだよ。一気に二人は弟子にすることはほとんどないんだよね。」

キリク「そうなのか・・・では頼みがある、」

刃「なんだい？」

キリク「俺と闘ってほしい!!」

刃「は…なんで？月音君、入部試験なんてあった？」

月音「いやないよ！！多分鬼と戦いたいだからじゃない？」

キリク「そうだ！上級妖怪でも倒せない物を倒せる唯一の存在・  
ぜひ戦いたいんだ！！」

僕は了承しようと答えようとすると公安の無線機に連絡が入り、

モヒ安A「ヒヤッハー！！刃さん、プロレス部と合気道部が暴れ  
て九曜会長は合気道に行ったので至急応援をお願いするんだぜ！！」

刃「了解、そちらに向かいます・・・すまないが月音君と少しの  
間待っていてくれよ！！シュツ！！」

僕は急いで公安の元へ行き、チョッパー力石さんをキン肉バスタ  
ーで気絶させるとモヒ安Bが来て、

モヒ安B「ボス！！郊外で空手部の下っ端がはぐれものと悪さを  
しているとの情報があつたんだぜ！！」

刃「そうか・・・すまないがそこまで案内してくれ！！」

モヒ安B「ヒヤッハー！！」

僕はモヒ安Bのバイクの後ろに乗り、その現場へ急行すると・・・

刃「ねえ、なにこれ・・・」

モヒ安B（素に戻っている）「いや、自分に聞かれても何と言  
ましようか・・・シユール？」

宮本（空手部主将）「俺も空手部のバカが悪さしているって急いで駆け付けてみたら…」

僕達が見ている光景・・・それは・・・

宮本「幼女が怪獣のごとく暴れまわっているだど!？」

刃「しかもよく見たら僕の知り合いばかりだし・・・」

すると最後の一人を倒した心愛さんは宮本さんに指を差しながら

心愛（小）「皆っ…あいつよっ!! 刃義兄さんの隣にいる空手着を来た男が空手部のボスの変態ロリコン男よっ!!!」

と叫び、宮本主将は自身に指を差して

宮本「…え? 何? 確かに俺はロリコンですがそれが何か?」

その時、僕とモヒ安Bは嫌な予感がしたので息の合ったバク転で後ろに逃げて、小さくなった皆の方を見ると

萌香（小）「やっつけるオオオオ!!」

紫（小）「変態許すマジですう!!」

宮本「え? え? 待てオレが何を…」

みぞれ（小）「刃、括目しろ、これが・・・」

瑠妃（小）「私達の力です!!」

僕はとりあえず素手の心愛さんに音叉剣（刃引きしている）を投げ渡すと皆は息を合わせて

新聞部（小）「子供限定合体超奥技 レインボーデストロイヤアアア!!!」

宮本主将が宙を舞っている時に僕とモヒ安Bは敬礼をしていると

瑠妃（小）「刃さん!!!」

みぞれ（小）「私達の姿はどうだったか？」

瑠妃さん（小）とみぞれさん（小）が抱き着いてきて、僕は二人を抱え上げると

刃「あ、ああ…中々すごい光景だったぞ…うん」

モヒ安B「（今の刃さんがどこかの優しい父親っぽく見えるけど言わないでおこう）ではボス、自分はこれで…」

刃「ん、ああ…ありがとうね」

モヒ安Bが帰ると心愛ちゃん（小）が来て音叉剣を差し出し

心愛（小）「義兄さん…これありがとう」

僕は屈んで受け取って元に戻しポケットに入れると

刃「どういたしまして…それと二人とも降りてくれない？」

瑠妃（小）「あ、はい」

みぞれ（小）「仕方がない・・・」

二人が降りると僕は心愛ちゃん（小）の頭に手を置いて

刃「そう言えば、入りたい部活は見つかったかい？」

心愛（小）「あ、忘れてた・・・」

刃「ククク…そうか、僕は運動部の人達とは交友があるから聞きたいことがあったらいつでも言ってきてくれその部活の情報を提供してあげるよ。」

僕は頭を撫でながら言うと心愛ちゃん（小）は顔を赤くして

心愛（小）「義兄さん…あたしは子供じゃないわよ！！」

刃「おお、すまない。ついついやってしまった…すまんね。」

心愛（小）「ふん！…ねえ、義兄さんはあたしに新聞部に入っしてほしい？」

刃「おお！！入ってくれるの！？良かったあゝ多分今日の事で変な噂が出て入部者はいなくなるだろうから」「」「ええええええ！！？」「」「いや、皆気づけよ。僕だって学園最強とか両刀だったりと変な噂立っているんだぞ！？」

心愛（小）「なら、明日入部届を書いてあげるわよ!!」

萌香（小）「ココア・・・」

心愛ちゃん（小）が言くと皆は暖かな目で見ていて

心愛（小）「か、勘違いしないでよ!!あたしが入りたいんじゃない、刃義兄さんの為に入るんだからね!!」

刃「まあ、どっちでもいいけどこれで一人は確保だね。」

僕がそういうと月音君とキリク君が来て、

月音「や、刃君!!彼と手合せして!!」

刃「おお、すっかり忘れていたよ!それじゃキリク君今からやるか?因みに僕が勝ったら嫌でも入ってもらおうよ?」

キリク「ああ、構わない・・・俺が勝ったらなんか奢ってもらおうぞ。」

刃「と言うわけで・・・心愛ちゃん少し離れてね。月音君は開始の合図を頼む。」

心愛（小）「うん!義兄さん頑張つてね!!」

月音「う、うん!!」

心愛ちゃん（小）が離れると僕はキリク君に向かい左手は握り拳、右手は手刀にして構え、キリク君も構えると月音君が

月音「では・・・はじめ!」

その一言にまずキリク君がものすごい速さで近づき、僕はとっさに腕をクロスしてガードするが、キリク君の拳は重く数歩後ずさりしてしまった。

刃「いってゝ強いし速いねゝ（今のままだところちがヤバいな・・・なら!）」

僕は足払いをかけようとするがバックステップで後ろに下がると僕は右手も握り近寄り、ラッシュを仕掛けた。

刃「オラオラオラオラ・・・!」

キリク「クツ!？ウオツ!？」

キリク君は避けたりガードをしていたが、

キリク「ハッ!」

刃「ガッ!？」

顔にカウンターの拳が入り、思わずその時に

キリク「ハッ!」

刃「グハッ!？」

腹部に蹴りを食らい飛ばされた。僕は空中で体を捻って、蹴りを

当たた。

キリク「ウグツ!?!」

お互いに飛ばされ、急いで起き上がり構え直した。

刃「(まいったな・・・彼結構、多くの戦闘経験がある・・・こりや実戦なら鬼に変身しないところちが死ぬな・・・。)」

するとキリク君は手刀を作り風を切る動作が見えると嫌な予感があったのでしゃがむと

スパツ!

後ろの木が斬り倒され、

刃「魚!!!キリク君!!!僕を殺す気か!!!?」

キリク「いや、すまない少しばかり力み過ぎた。似たような術なら刃さんも使えるそうじゃないですか。月音先輩から聞きましたよ。」

刃「月音君か...全く簡単に喋るなよ。まあできるけど...フンツ!

僕は両腕に光の力を込めて白く光ると、キリク君は両腕に火を灯し赤く燃え、一気にお互い距離を詰め、

刃「オラオラオラオラオラオラ...」



て少し捻って走り出すが、キリク君の右手に青色の固まりが出来てきた。僕はできるだけ被害を少なくしようと飛び上がり空中で前転して右足をキリク君に向けて急降下して行くが、

キリク「少し遅かったようだな…食らえ!!」

と放とうとするが青い球は少しだけグニャと動く

ベシヤ!

シャーベット状の何かは僕に向かって飛んで来なくてキリクさんの足元に落ちた。

キリク「え?」

キリク君は足元の何かを見つめていたが

刃「ヤバツ!?キリク君避けてくれええ!!」

キリク「なっ、フゲツ!?!」

ライダーキックは急には止まらない、僕の蹴りはキリク君の胸に当たって吹っ飛び大きな木にぶつかった。キリクさんは

キリク「うう…しよ、勝負はお、オレの負けだ。い、言われた通り、入部してやるよ。」

とふらふらとこっちに来るが、石につまづきバランスを崩して

キリク「お、おっとっと…ウオツ!!--」



（翌日）

あたしは刃義兄さんから貰った入部届を書いてこーちゃんに持たせて、新聞部部室に行くと部室前でキリクに会った

キリク「よう…、おはよう…君昨日より大きくないか？」

心愛「おはよう…これが元々の大きさよこの変態男！」

ロリコン（キリク）を殴り飛ばして、部室に入ると

萌香「そんな…」

胡夢「食べないよ…」

月音「潰れる…」

瑠妃「刃さんの言うとおりになっちゃった…」

皆が落ち込んでいた。あたしは

心愛「困っているみたいね。まあ、あたしが入るから安心しなさい！…！」

萌香「ココア…！」

お姉ちゃんたちはあたしの前に集まるけど、刃義兄さん姿が見え

なくて

心愛「あれ？刃義兄さんは？」

あたしが訊ねると皆は黙り部室の扉が再び開く音が聞こえ、あたしが振り向くと緑色のスーツを着た少年と財津原先生、杖を使いながらキリクが来た。

財津原「しかし、まさか鬼でもそうなるとは・・・なんか刃のその姿懐かしいな。」

キリク「先輩って意外と小さいころは普通の身長なのですね。」

少年「意外っていうな！しかもキリク君も無茶するな…おっ、心愛ちゃんも元に戻ったか！！」

と言い近づきながら左手でシュツとして、あたしは指を振るわせながら

心愛「も、もしかして刃義兄さんなの！？」

刃（小）「そうだよ、いやゝまさか人間（心愛には説明済み）の僕にまで効果があるとは思わなかったね。」

月音「でも俺には効果はなかったよ？なんでだろう？」

皆が首を傾げていると財津原先生が

財津原「恐らくだが、鬼の姿はある程度身長が変わってたりするし、刃が特異体質なのだからかもしれない。」

キリク「戦鬼には秘密がいつばいな・・・」

刃（小）「まあ、そういうことで今日一日中はこれで過ごすからよろしく シ・・・ごめん、逃げる!!」

すると義兄さんの顔は急に変わり、逃げ出した。そして

瑠妃「待ってくださいい 抱き着かせてくださいい」（少しヤバい笑顔＋涎）

みぞれ「安心しろ何も痛いことはしない。ただ少しだけやらせてほしいことがあるだけだ。」（笑顔＋涎）

刃（小）「嫌だよ!!だって二人とも顔が怖いし涎垂れてるって!!しかもみぞれさん字おかしい!!」

この日校舎内をポケットバイクで逃げている少年を追いかけて回している翼を展開した魔女と床を凍らせている雪女の姿が目撃さ、公安が八割戦闘不能になりながらも鎮圧されたそうである。ちなみにあたしは本人の了承を得て抱き着かせてもらった。

財津原「あ、刃ちよつとエイキに写メ送るから動くなよ。」

刃（小）「了解しました。あ、心愛ちゃん撫でてもいいぞ。」

心愛「い、いいの!?!」

月音「なんか普通に絵になってる・・・」

萌香「（つくねが小さくなったら私もあしたかったな。）」

胡夢「（つくねが小さくなったらかわいいんだろぅなあ〜）」

紫「（今度はつくねさんでも小さくなれる薬を作りますか、そして…フッフッフ）」

刃「ちょっと心愛さん撫ですぎ！…煙出てるって！…！」

第18話「一時的に成長するキャンディー・・・メ〇モちゃんか!？」（後書き

）今回の猛士報告）

ポケバイあつて良かった・・・本当に…本当に良かった!!

byジンキ

日菜佳「何今回の報告!! わざわざ紙で書いているけど後半の所字は震えているし、涙の跡があるんですけど!!」

ヒビキ「なんかキャンディーなめて小さくなっちゃってその時瑠妃さんとみぞれちゃんが暴走して身体能力も落ちていたらしいつてさ。」

イブキ「それで僕が昔上げたポケバイが役に立ったようですね。」

672

トドロキ「今ザンキさんからメールが来ましたが、ジンキ君確かに昔に戻ってますね。」

エイキ「これは小学校で東北付近に行つてたの時かな？」

アマキ「それはみぞれと言う女の子に会つた時でしたよね？」

エイキ「そうだな・・・よしジンキに抱き着いてくるわ。」

おやつさん「駄目ですよ、エイキ君はこれからヤマビコ退治だよ。」

エイキ「シツシヨージャなかつたチキシヨー!!」

キョウキ「しかし小さい頃から大きかったと思っただら普通なんです  
ね。」

香須美「そうなのよ〜それで成長期の時はどんどん伸びて一か月前に買った服が小さいときがあったわね〜」

みどり「私も知っている〜その時ショウキ君が驚いて腰抜かしてたわね〜」

本日の金言「なんかほのぼのとなりました。 by立花一同」

刃（小）「そりゃよかった」

みぞれ「可愛い・・・」（ジャンケンで勝った）

ザンキ「白雪、おかしいことをしたら電撃来るからな〜」

瑠妃「ま、負けた・・・メインヒロインなのに・・・」（負けた）

刃（小）「瑠妃さんも後で抱き着かせてあげますから・・・」

今回はスケベ狼再登場！！

第19話「名探偵だよ!!白鋼君…って誰よ!!」(前書き)

第19話です!!今回もタイトルにもありますが、新キャラが出ます!!

キャラ案を提供してくれた種地響介さん、ありがとうございます!!

第19話「名探偵だよ!!!白鋼君…って誰よ!!!」

第19話「名探偵だよ!!!白鋼君…って誰よ!!!」

僕は放課後に瑠妃さんと一緒に校内のパトロールをしていた。なぜなら最近女生徒の制服が鋭利なもので切り裂かれていたと言う事件で、時間帯もバラバラなので休み時間に交代でパトロールしているわけである。

僕達は中庭の大きな木の前を通り過ぎている時、僕は瑠妃さんに話しかけた。

刃「ごめんね、瑠妃さんこんな用事に付き合っただけで、瑠妃さんがいないと追っかけに見つかった時逃げ切れるか心配なんだよね〜（ん？何かの気配を感じるね・・・）」

瑠妃「いいえ、いいですよ。私は刃さんと一緒なら例え火の中、水の中、ベッドの中までついていきます!!!」

刃「瑠妃さん、最後のは僕達が二人きりの時に言おうね。」

僕がそう言うと瑠妃さんは顔を赤くしながらあたりを見回して、僕は木の上に指を差し

刃「あ〜誰かは知らないが木から降りてきてくれ、その木結構年くっついていてもろい所もあるらしいよ〜後今は物騒で君がイタズラ魔じゃないのなら早く降りてこないと冤罪がかかっちゃうよ?」

僕がそう言うと灰色がかった黒色の髪の少々老け顔の少年が降り

てきた。少年は頭をぼりぼりと搔くと

少年「チツ、お前なんで気づいたんだ？気配も消したつもりなんだけど……」

刃「うん……君は気配を消し過ぎたからかな？なんか不自然なもの。それと少年」

白鋼「俺には影野かげのしろがね白鋼しろがねって言う名前があるんだ。」

刃「そうか僕は松坂刃と言う……君は一年でしょ？」

白鋼「ああ、それがどうかしたか？」

刃「部活は入ってないね？」

白鋼「ああ……」

刃「なら……瑠妃さん」

瑠妃「はい、白鋼さん、すみませんがこの書類にサインをお願いします。」

瑠妃さんは書類を挟んだクリップボードを白鋼さんに渡して

刃「ごめんね、最近色々書類を書かなくてはいけないんだ。」

僕が彼にボールペンを渡すと白鋼さんは

白鋼「そうですか……え……と名前と学年を書いて」

刃「そうそう、で朱肉があるけど印鑑は持っていますか？」

白鋼「ああ、俺は持っていますよ・・・これでよしって、何書かせているんじゃないああああ！！」

刃「ツッコミ、乙」

瑠妃「ここまで見事なノリツッコミは初めて見ました。」

と書類（入部届）を投げ捨てようとしたが僕はすぐにそれを回収すると

刃・瑠「ようこそ新聞部へ歓迎します！！」

白鋼「ああ、めんどくさって新聞部！？俺は刃先輩の体格からてつきり体育会だ・・・」

刃「僕は訳ありでね新聞部に入ったんだ。それではあさ「うわああああ！！」！？瑠妃さん！！」

僕は笑顔で白鋼君に新聞部のパンフレットを渡そうとしたが悲鳴が聞こえてきた。僕は瑠妃さんに声をかけて

瑠妃「はい、白鋼さんもついてきてください！！」

白鋼「はあ？なんで俺がついていき「間違つて連行される事を防ぐためだ！！それに君は僕の後輩だ！！」しょうがねえな。」

僕達は声のした方に行くと一人の血まみれの女性を落ち着かせよ

うとしてゐる心愛ちゃんとこーちゃんがいた。

刃「心愛ちゃん!」

心愛「あ、刃義兄さんに瑠妃さんになんであたしと同じのクラス  
の影野がいるの?」

瑠妃「それは後で説明します!!そちらの方は大丈夫ですか!？」

心愛「怪我自体は今の所大したところはないんだけど、包帯持っ  
ていない?」

刃「あゝ僕は怪我しても自力で治るから持っていないね。」

すると白鋼君は救急箱の中から包帯を取り出し、瑠妃さんに渡し  
た。

包帯を巻くのは瑠妃さんと心愛さんに任せ、男の僕と白鋼君は女  
性陣に背を向けて話していた。

刃「ねえ、白鋼君の種族ってなんなんだ?因みに僕は鍛えてなれ  
る鬼みたいな人間だよ」

白鋼「え!?!?刃先輩それは校則で駄目ではないのですか?しか  
も鬼なのか人間なのかどっちですか!？」

刃「ああ、人間が紛れ込んでいたら殺すというのは理事長曰く嘘  
だって「は!？」それとはつきり言うなら僕人間ね 後、正体ばら  
しても教師から怒られる程度だから問題ない…わけでもないね。副  
顧問の鬼のザンキ先生に怒られたらヤバいな。」

白鋼「ええええ!!? アレ嘘だったのですか!? しかも先輩人間  
って…ああ、突っ込みどころが多すぎてやれきれないわ!!」

白鋼君は頭を抱えて地面をのたうちまわっていたが、

刃「まあ、それは後で説明するとして今日はあの方を病院に搬送  
した後、また改まって説明するよ。」

白鋼「ああ、それと先輩、俺は…人狼です。」

刃「そう…うちの部長と同じだな。それじゃあ今日の所はアバコ  
！」

僕はそう言い、けがをした人をお姫様抱っこで運び、帰りは瑠妃  
さんをお姫様抱っこで（瑠妃さんがやってほしいと言ったから）部  
屋まで運んでイチャイチャしてから帰った。

～翌日～

僕は白鋼君がいる教室まで行き、拉致って（追っかけられていた  
ため）煙幕を使って新聞部の部室に行くと、銀影先輩が心愛ちゃん  
にボコボコにされていた…

白鋼「先輩…ここサディステイククラブじゃないですよね？」

刃「うん、新聞部のつもりだけど…去年闘ってばかりだな…あっ  
逃げちゃだめだから、逃げようとするれば公安総動員で捕まえるから」

白鋼「先輩なんで公安を指示できるんですか!!」「僕、公安委員

会総監督だもん」「だもんって・・・ハア話を聞きましょう」

この後心愛ちゃんの話の聞くと昨日被害者の仲本こっこの前にカチューシヤをした人狼がいたらしい・・・しかも関西弁らしい

僕と瑠妃さんは

刃「銀影先輩・・・さつさとワイがやりましたってはいちやいなさいよ。」

瑠妃（刑事コス）「かつ井です。」

銀影「ガツガツガツ！だからワイはやってないって！！しかしこのかつ井美味ツ！？」

刃「全く…今日はカツ井食べたら去っていいですけど後日もっときついの見舞いますよ？」

僕がそういうと銀影先輩はカツ井（刃お手製）を食べ終わると部屋を出ていき、心愛さんが後を追いつ、少し間を開けて胡夢さんとみぞれさんが出て行った。

僕は椅子に座り、瑠妃さんはどんぶりを片付けると緑茶を入れてくれた。

刃「じゃあ、早速だけど連続イタズラ魔の犯人捜ししますか！」

白鋼「早速ですね・・・あれ？後ろの黒板に今年の新入部員は3人って書いてありますが、俺と朱染で2人だぞ・・・その魔女っ娘（紫）か？」

刃「紫ちゃんは二年だから先輩だよ。もし勉強で分からないところがあったら教えてもらおうといい。で、最後の一人は「ハア!!!」来たか」

僕は扉の方へ指を差し、そこにいたキリ君（あだ名）を白鋼君見た時に

刃「彼が最後の新入部員のキリク」ガード君だよ。キリク君、彼は今日から部員の影野白鋼君だ。」

キリク君はハアハアと息を切らしながら椅子に座ると

キリク「おう、よろしく。しかし先輩、毎日“アレ”から逃げているんですか!？」

白鋼「?刃先輩“アレ”ってなんですか?」

刃「ほら、今日君をここに来るとき拉致つて来ただろ?あれは僕のすぐ後ろを女の子が追っかけてきてたからなんだ。と言っても最初の人の何割かはキリク君に流れていったから僕は楽だったけど  
www」

白鋼「はあ、凄いですね・・・」

キリク「全くだ・・・そう言えば彼とは闘ったんですか?」

刃「いや、しないから第一入部前に闘おうとしたのは君ぐらいだよ!・・・」

僕達が書類をまとめていると白鋼君が訊ねてきた。

白鋼「刃先輩、すいませんが銀影先輩の性格を教えてくださいませんか？」

刃「ん？女たらしのスケベ狼と言ったところだが、何か気付いたのか？」

白鋼君は被害者リストを広げると

白鋼「いえ、今の所被害者が全員三年です、もし俺が襲うなら学園生活慣れてない一年を襲います。まあそんなメンドクサイことはしたくありませんが、・・・つまり」

キリク「つまり今回の事件は、銀影先輩が犯人ではなく解決へのキーワードか・・・」

僕は被害者表を取り月音君に向いて、

刃「月音君、被害者と銀影先輩の交友関係を調べてくれ！！」

月音「あ、それならあらかた調べてみたけど・・・」

刃「けど・・・どうしたの？」

萌香「最後の犠牲者の仲本先輩だけ何の関係もないの・・・」

萌香さんの一言に僕達が首を傾げると白鋼君は部室を窓から出て行った。僕も後に続いて窓から出て、後を追うと心愛ちゃん、胡夢さん、みぞれさん達が銀影先輩と向き合っていた。殺気も交じって

いることから戦闘前と言った感じである。

刃「ん？闘っているのか？よし乱入するか！」

白鋼「ええ！？」

僕は茂みから出てくると音叉を鳴らし額に当てて変身した。

刃鬼「三人とも、何やっているんだ？シュツ」

胡夢「やい、今は刃鬼だったね。」

みぞれ「実はあいつと闘うことになったのだが…」

僕が心愛ちゃんの胡夢さんとみぞれさんの話を聞くと、心愛ちゃんの方は銀影先輩イタズラ魔であることを言い、先輩を倒すと全部喋ってやると言い、みぞれさんと胡夢さんは休校期間中先輩が二人の修行相手をしていたがほとんどがセクハラであったため今が袋叩きのチャンスと言い、話を聞き終えた僕は先輩の方を見ると先輩は

銀影「げっ！？刃鬼相手か・・・辛いな」

と言ったがじりじりと寄ってきて僕の目の前から消え、横に来ていたが、僕は避けなかったすると

銀影「ガッ！？」

銀影先輩は吹っ飛び僕の隣には人間の体に白い体毛が生え赤と黒の瞳を持った…

刃鬼「え？誰？」

白鋼「影野ですよ！！顔丸出しですよ」

白鋼君はツツコミをしたが、白鋼君が言った通り顔に体毛が生えてなく顔がすぐに判別できた。

刃鬼「おおっ！！確かに分かりやすいね〜…しかしなんかアレ（銀影先輩）とやけに違うな？」

白鋼「…俺はアルビノなので不完全なんです。すい「納得！！」ハア！？」

刃鬼「じゃあ、僕が相手するから白鋼君は心愛さんを守ってくれ…ハアアアアアア！！」

僕は輝になると白鋼君と銀影先輩は驚き

白鋼「げ！？な、なんなんですか！？」

銀影「それが噂の輝かいな・・・」

刃鬼輝「さて、先輩…メンバーチェンジですが、貴方を倒せたら話してもらいますよ。」

僕は烈光を構えると突然

銀影「わあああ、殺さんというてエエエ！！」

白鋼「あ！？」

銀影「流石に学園最強を相手するのは無理があるって!!」

刃鬼輝「いやいや、速さなら先輩の方が上ですって!!」

すると白鋼君が銀影先輩よりもはやい速度で近づき、

白鋼「ハッ！」

左足で蹴り上げた。すると木の陰から

こっこ「銀影さん!!」

こっこ先輩が出てきて、銀影先輩に駆け寄った。すると白鋼君が

白鋼「やはり来ましたか・・・真犯人の仲本こっこ先輩」

その一言に僕達は

胡夢「え？」

心愛「えええ!!？」

刃鬼輝「ウエエエエエエエエエエエエエエ!!」

すると月音君達が来て事情を説明した。すると仲本先輩の頭から血が出てきて、

刃鬼輝「うお!!血、血があああ!白鋼君!!」

白鋼「はい、包帯」

キリク「包帯巻くから先輩は動かないでください!!!」

僕とキリ君は包帯を巻こうとしたが先輩は

こっこ「あ、これ私の血なの…私は自分の“血液”を操れる妖怪なの。昨日倒れた時も同じ…血にまみれて被害者のフリをしていただけ」

こっこ先輩が理由を話し出したが、その時銀影先輩がま〇とちゃんみたいな顔で笑い出し、こっこ先輩が出るのを待つために心愛ちゃんを利用したこと、付き合ってきた女性の名前を言いだした。

銀影「捕まえてホツとしたわ〜俺を恨んでいる奴はぎょ〜さんおるからなア、やきもちやきのあみちゃんやろ、元ヤンのゆみちゃんやろ、独占欲が強いみさこちゃんにクールで怖いみほちゃんやろ…」

白鋼「先輩…キレてもいいですか？」

刃鬼輝「もう少し待て…」

僕は瞳のハイライトが消えている白鋼君をなだめると

銀影「…っちゅうわけで自分らこっこちゃんのバツを軽うしたってな、軽〜う」

銀影先輩は笑いながらそう言つと心愛ちゃん、胡夢さん、みぞれさんが

心・胡・み「」「バツを食らうのはおのれじゃこのクズがああああ  
あ！」「」

銀影「重お　　っ！！」

銀影先輩が吹っ飛んだ瞬間

刃鬼輝「白鋼君…GO！！」

と肩をポンと叩くと白鋼君は銀影先輩が落ちてくる地点に先回り  
して

白鋼「絶望がお前のゴールだ！！」

と言い右足を軸にして、

白鋼「ウラウイラウラウラウラウラ…ウラア！！」

と左足で鋭い蹴りを数十発食らわしもう一度上に飛ばすと今度は  
背を向けた。

銀影「グアア！！…あゝ」

再び銀影先輩が落ちてきて白鋼君の頭を通り過ぎた時に

白鋼「ハア！！」

今度は左足を軸に右足で銀影先輩の腹部に蹴りを食らわすと

銀影「ギアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

と空の彼方へ飛んで行った。この後仲本先輩は理事長の元へ行き、その時に白鋼君が

白鋼「先輩、まあ・・・その・・・なんとはいかな。あいつ（銀影）はとんでもない奴だったが、先輩は顔はいい方だと思うからいい恋ができると思う。」

と言い、こつこ先輩は白鋼君の方を見ていた。後、僕今回は変身した意味がなかったな。

～翌日～

僕が追っかけから逃げ切って新聞部室の前についた時、反対側から白鋼君と“なぜか”こつこ先輩が来ていた。

白鋼「先輩・・・何でこつちに来るんですか？」

こつこ「ん？白鋼君って誰かと一緒にいる事少ないでしょ？もしかして嫌だった？」

白鋼「ええ、いや・・・まあ大丈夫ですが」

と仲良く話していた。

刃「ありやりや、白鋼君、春到来ですか。」

と僕はポカーンとしていると肩をポンポンと叩かれ後ろを振り向くと血の涙を流した銀影先輩が立っていた。

銀影「なあ、刃俺とあいつ何が違うや？俺とあいつ人狼やる？」

銀影先輩の一言に僕はただ

刃「先輩…そんな事僕に聞かれても知りません！！ただいうなら先輩はスケベだから、」

銀影「チキシヨーーー！！！」

キリク「来るなあああああああ！！！」

追っかけ一同「「「待ってキリク君~~~~~！！！」」」

今日の陽海学園は平和……かな？

第19話「名探偵だよ!!白鋼君…って誰よ!!」(後書き)

今回は猛士報告はありません!!次回は雪の里編で刃が歌う、踊る、滑る、闘います!!またみぞれさんのヒロイン回でもあります・  
・瑠妃さんの救済をしなきゃ・・最近心愛ちゃんがヒロインやっ  
ってしまっていたから・・・やべえ

第20話「雪女の里、そして闘い：前編」（前書き）

第20話です！！今回は作者が思うに一番のシリアスで、苦勞を  
しましたが、楽しんで読んでいただければ（？）嬉しく思います。

それでは20話前編をどうぞ！！

## 第20話「雪女の里、そして闘い：前編」

### 第20話「雪女の里、そして闘い：前編」

私は夢を見ていた。小さい頃に好きな男の子と一緒に花を摘みに行った時の事だった。私は白雪草を一つ摘み、男の子に見せた

みぞれ「この花は白雪草：私と同じ名前で可愛いだろ？約束しないか？私が17歳になった時：また二人でこの花を摘みに来よう。」

私はその続きを言おうとした時、男の子は

男の子「…やめるよみぞれ」

みぞれ「え？」

男の子「ムリだ そんなのムリに決まっているじゃんか…だってお前オレ達人間を食らう化物なんだ」…」

夢はそこで途切れ、最初の夢から少し後になり私は化物と言われる同じくらいの子三人から石を投げられていた。私が腕で防いでいると大きな体の子が大きめの石を持ち

ガキ大将「くたばれ、化け物！！」

と石を投げた時私は思わず目を閉じたが、

ガンッ！！ゴトン

私に当たらず私は目を開けると私の前に棒を持った少年が立っていた。少年は私の方を見て、そしてこの少年は小さい頃の刃だ・・・

刃（昔）「おう、嬢ちゃん無事かい？・・・って血が出てるじゃないか！！」

刃（昔）は私の手にできた傷を見て驚いているといじめてきたやつは少年を指を差しながら

男の子A「おい、なんでお前そいつをかばうんだ！！」

男の子B「そいつは人間を食べる化物なんだぞ！！」

刃（昔）は耳を傾けた後、私の前に膝をつくと

刃（昔）「少なくとも男が数人がかりでか弱い女の子をいじめるのは許せませんな。それと、君少しだけでいいから喋ってみてくれないか？」

私は刃（昔）の言葉の意味が分からなかったが

みぞれ「こゝ、これでいいのか？」

私は喋ると刃（昔）は笑顔で

刃（昔）「うん、いい声だね。君は化物なんかじゃないよ。」

と言い立ち上がるといじめてきたやつらに向かい、

刃（昔）「君達は彼女を化物と言ったが、傍から見れば無抵抗の女の子一人に石を投げている君達の方が酷いよ・・・それとこのデカ物、君は大きな石を投げようとしたが、君は人が死んだらリセツトボタンで復活していると思っっているのか？そんな君たちの方が・・・“化物”だよ。」

ガキ大将「はあ！？それくらいの事分かるし！！やる気か！？」

刃（昔）「う〜ん今君達と喧嘩しても構わないが、まず彼女の怪我を治療しなければだね。」

そういうと少年は大きく息を吸うと

刃（昔）「父さあ〜〜〜ん！！出番ですよ〜〜〜！！！」

と叫ぶと砂煙をあげながら少年の父らしき人物がものすごい速さで

刃（昔）の父「うおおおおおおおお！！刃あああ！！俺を呼んだかああああああ！！！」

と抱き着いてきたが刃はまるでいつもの事のようになされるがまさに頼ずりされながら

刃（昔）「父さん、あそこにいる女の子の止血と消毒お願いします。石を投げつけられているので腕を全部みてください。後自分は少し喧嘩しますので後で僕にも消毒お願いします。」

刃の父「おう任せろ！！それと家に帰ったら説教だぞ！」

刃（昔）「はいはい、では行ってきます。」

刃は棒を腰に戻すと三人に駆け出し、子供たちの攻撃を踊るように避けて近づき関節技をかけていた。

私はそれをただ見つめる事しかできなかった。刃は私に近づき、私の顔をじくっと見ると

刃（昔）「うん、どう見ても可愛い女の子だね。君がまた襲われたら駄目だから家まで送ろうか？」

「私は急いで立ち上がり、

みぞれ「だ、大丈夫だ。あ、ありがとう……。」

刃（昔）「ふふ、いいってことよ、それじゃあ気を付けて帰りなさい。」

刃（昔）と刃の父が帰ろうとした時、私は

みぞれ「ま、待ってくれ!!」

刃（昔）「なんだい？まさかどこか痛いのか!？」

刃の父「なんだって!!?そりゃあ大変だ!!」

みぞれ「い、いや、違うんだ……もし私が17歳になったらお前を必ず迎えに行く。」

と言った刃は私に近づいて頭を撫でながら

刃（昔）「ふふ、それじゃあ僕に彼女がいなかったらお願いしよ  
うかな？でも、僕に彼女がいたらどうするのかな？それじゃあね。  
父さん！！家まで競争だ！！」

刃の父「応ッ！晩御飯のおかず一つ賭けるぞ！！」

と言い（ものすごい速さ）で去って行った。

〜夢、終わり〜

みぞれ「ん…またあの夢か…しかしその前の夢まで見るとは」

私は目をさまし机の上に置かれた母の手紙を見た。

みぞれ「17歳・・・か」

刃鬼「え〜現在の温度は41度か・・・熱いねウラッ！！」

心愛「ザクッ！？」

キリク「グフッ！？」

胡夢「ドムウウウウウウウウウウ！！？」

僕は朝方心愛ちゃん、キリクさん（なんか理事長の話では僕より  
年上だけど、仕事と生活の安定を与えられるからと言うことで入学  
させられたらしい…）、胡夢さんを相手に鍛錬をしていた…学校？

異常な暑さのせいで休校になった。月音君達は取材でいないし銀影先輩は盗撮をしようとして九曜さんとザンキさんに連行されたため胡夢さんも一緒に鍛錬しているわけである。

僕は顔の変身を解除して

刃「はい、それじゃあそれぞれの悪い点を言っね。まず心愛ちゃん」

心愛「はい！」

刃「変形させるのをレイピアに変えるようになったのはいいけど、剣を使い始めたばかりなのか体の使い方が甘い所がある。今度ザンキさんに教えてもらいなさい。」

心愛「ウ・・・ウス」

刃「次にキリクさん！！」

キリク「おう・・・どうだ？」

刃「まあ、戦闘面では問題はないけど、トドメに打てもしない大技放とうとするな！！そのせいで君をシュートして二人を叩き落としたりしたんだから！！今の君は皆との連携をつなぐ役割になりなさい！！後、攻撃をかわすたびにいちいちポーズを決めない！！名乗りは僕もあるからいいけど！！」

キリク「あ、ああ・・・」

刃「最後に胡夢さんは・・・始めて組んだチームでの試合だから

戸惑うのも、仕方ないよね。まあ、他の人と組んでも大丈夫なように頑張つて下さい。」

胡夢「はい・・・しかし刃の教え方は細かくてためになるね。」

僕がそう言い終わると木の陰で休んでいた白鋼君が話しかけてきた。

白鋼「しかし刃先輩もこんな暑い中、三対一で稽古をやりますね。」

刃「まあね、だって鍛えてますからシュツ！！それと君の昨日のあれは必殺技かな？」

白鋼「はあ？必殺技なんてありませんよ。第一持つてなくてもいいでしょう。」

白鋼君がそう言いながら帰ろうとするが、心愛が止める

心愛「逃がさないわよ！！あんたが新聞部一年の中では一番強いのよ！！！！」

キリク「この俺を差し置いて強いなんて許さん！！」

刃「頼むよ蹴りの力が最大30tなんて変身してない僕や裏萌香よりも強いんだよ！せめて闘い方を教えて！！さもなくばこっこ先輩にお願いしますよ！！」

白鋼「う・・・ハア、分かりました。というより先輩が鬼になると蹴りどれくらいなんですか？」

刃鬼（変身）「この姿だと確か最大40tだったかな？輝だと50tに増えます」

心愛「うわ・・・何であたし生きているんだろ？（さつき蹴った）」

キリク「流石鬼だ・・・」

僕は白鋼君の闘い方と左右の足を使い分けている事を聞き、

刃鬼「ふ〜ん左脚は威力が低いデメリットを瞬発力で補う多段攻撃用。一発一発の威力を手数で稼いで、右脚は反対に溜めが必要で避けられやすい反面、絶大な威力を叩きつける一撃必殺用。左脚で体力を削ぎ落とし最後に右脚を叩きつけてきたのか。」

白鋼「そうですね・・・先輩ならどう使いますか？」

刃鬼「僕もそうするけど右足はカウンターでもいけるね。」

白鋼「ふ〜ん、なるほどでは「お〜い皆！！」ん？月音先輩か？」

僕達が話し合っている時月音君達が笑顔で来た。

刃鬼「どうしたの？月音君」

月音「ねえ、週末、みぞれちゃんの里へ向かわない？」

心愛「みぞれって言うにあのやい…刃鬼義兄さんをストーカーしている女でしょ？」

みぞれ「ストーカーじゃない、私なりの愛情表現だ。」

刃鬼「おお、みぞれさん！突然部屋に来ないから心配したぞ！！」

キリク「え？刃鬼先輩！？みぞれさんと何をしていたのですか？」

刃鬼「いや、別に今までは御飯時じゃない時は追い返し、ご飯を作っている時に来たら一緒に飯を食うくらいだぞ。因みに瑠妃さんの方が来る事が多いぞ。こっちが行くことも多いし」

白鋼「先輩、二股をかけているのですか？」

月音「どちらかと言うと刃鬼君争奪戦？」

みぞれ「で、皆は来るのか来ないのか教えてくれないか？うちは涼しいし、お友達や後輩もどうぞらしいからな。」

刃鬼「ふむ、みぞれさんに母親に会うのはちょっと怖いが、みぞれさんの故郷を見てみたいからいいよ。」

白鋼「俺はどうせ連行されるんだからいいぞ」

キリク「俺の魔力が少しでも戻るかもしれないからな行かせてもらおう！！」

刃鬼「では行きますか？」

（そして週末（高速のキングダムゾーン！！））

胡夢「やつぷ〜旅行だあああ!!」

心愛「かつとばして運転手さん!!」

キリク「ヒヤッハー!!」

運転手（久しぶりの登場）「ヒヒヒ、任せなさいこの四次元トネルで結ばれた土地ならどこへでもひとつとびだ。」

胡夢「ねえ、カラオケありますか?」

運転手「演歌でいいならあるよ。」

雪女の里行きのバスの中は大盛り上がりであった。

瑠妃「理事長のお話では大結界に刃さんの清めの力を効率よく発揮するために調整中の為、4、5日かかるそうです。因みに刃さん、仕事はないので安心してください。」

刃「ウェイウェイ、瑠妃さんありがとうね。シュッ」

心愛「つまりその間みぞれさんの所にお世話になるのね。雪女の里って涼しそうよね〜」

紫「ありがとうございます〜」

白鋼「自分までお誘いしていただきましてありがとうございます〜」

するとマイクを握った胡夢さんが



刃鬼「まあ、僕が上に頼んで、サイズを書いた紙を渡したんだけどね。」（鬼の力で燃えています。）

瑠妃「刃さん、温かい」

萌香「むしろ熱そう・・・」

キリク「な、なんか眠くなってきた。」

月音「うわあああああ（M　；）寝たら駄目だよ！！キリク君！！！」

刃鬼「起きなきゃ刃鬼ダイナマイトするぞ　もしくは鬼刃刀（一回返してもらった）で切るよ」

キリク「おはようございます！！！」

僕達は雪女の里の近くまで行き、皆が里の風景に夢中になっている時に僕は急いで着替えて（鬼の姿のまま入るのもなんだし、屋外での着替えは死ぬかと思った。）里に入るとみぞれさんの母親のつららさんが出迎えてくれた。

つらら「いらっしやい。お待ちしておりました。」

月音「あ、みぞれちゃんのお母さん」

つらら「つららです。学園祭の時以来ですね、刃さん…どうですかこの里はお気に召しましたか？」

ジンキ「ええ、自分も色んな集落を見てきましたが、いいところ

ですね。建物のほとんどは綺麗な氷できていますし、空には境界の影響ですか？オーロラが出ていて綺麗ですね。それと今の自分はジンキとお呼びください。」

皆がオーロラに夢中になっているとつららさんは少しずつ近づいてきながら

つらら「でも…この美しい里も最近では少子化に悩んでいるのですよ。里の規模に比べて人口は減る一方です…」

ジンキ「自分の方も鬼になる人が減少しているのでその気持ちはわかります。」

つらら「ええ…ですからジンキさん…“あなたにも早くみぞれと子作りしていただかないと”」

ジンキ「ウエ!？」

僕は急いで逃げようとするが鎖が身体に巻き付き、鎖の先を見ると数人の里の方々が…

つらら「月音さんくらいなら私一人でも引つ張っていけますが、ジンキさんは強そうですから申し訳ありませんね。さて、床の準備はできていますのでこちらへ…」

ジンキ「ウオオオオオ!?!?!? 助けてくれええええ!！」

僕が叫ぶとつららさんの頭に氷でできたクナイが刺さり、他の雪女の方々も白鋼君とキリク君が気絶させた。

みぞれ「余計な気遣いは無用だ母よ…」

キリク「全くジンキ先輩対策の最初の手がこれとは…」

白鋼「全くこれからどうなるのやら…」

その後僕は鎖を引きちぎり、破片の後片付けをしてから、倉庫に雷光と鬼刃刀を置いて、食事の間に通された。食事の時つららさんがみぞれさんに話かけた。

つらら「そういえば、みぞれは明日の「花納め」の為に帰ってきたんだっただわね…」

キリク「花納め？なんでしたっけ？」

ジンキ「いや、僕も聞いてないね」

つらら「あら…聞いてらっしやらないの？」

みぞれ「花納めは文字通り山から花を摘んできて神社に収める儀式だ。白雪草と言う小さな花を…」

紫「白雪草…」

紫ちゃんが少し変わった反応をしたが、みぞれちゃんは続けた。

要約すると花納めの儀式は人間界でいう成人式みたいなもので雪女の里では17歳で成人するらしく、白雪草は縁結びの効力があるらしく良縁に巡り合えるように祈願するものらしい。新聞部の女性陣は全員参加させていたただくことになりおめかしすることになった。

男性陣はその女性陣のおめかし姿を見る事になるらしい・・・と  
にかくいえることは僕と月音君の胃に風穴があくかもしれないとい  
うことだ。

食事が終わった後、僕は立ち聞きでこの周辺に化物が出ることを  
聞き、仕事柄こつこつという話を聞くと魔化魍かもしれないと思い、男部  
屋の皆には散歩と言って、倉庫に鬼刃刀を取りに行こうとした時、

みぞれ「ジンキ、どうしたのだ？」

みぞれさんとばっかり出会い

ジンキ「いや、少しこの辺りを散策しようと思ってな、ひよつと  
したら良い修行の場所が見つかるかもしれないからね。」

みぞれ「ならばこの辺の土地に明るい奴がいるだろう、私も同行  
してもいいか？それとお前に見せたい光景がある。」

ジンキ「おお、ぜひ頼むよ。見せたい光景も気になるしね。」

みぞれ「では、行くとしよう。」

僕はみぞれさんと一緒に雪女の里の周辺を散策することにした。

白鋼「なあ、ジンキ先輩散歩にしては遅くないですか？…駄目だ」

月音「そつだね…これかな？ダブリあり」

パサッ

キリク「うゝん彼女とイチャイチャしているんじゃないのですか  
な？おし、上がり！」

月音「え！？」

白鋼「またキリクが一抜けか・・・」

俺達がババ抜きをやっていると部屋のふすまを誰かがノックして  
キリクさんが出ると

瑠妃「すみません！刃さんはいますか！？」

キリク「ど、どうしたのですか瑠妃さん！？」

慌てた表情の瑠妃さんがいて俺はキリクの代わりに

白鋼「ジンキ先輩なら結構前に散歩してくると言っていました  
が…」

瑠妃「やっぱり・・・」

瑠妃さんはそう呟くと俺達の部屋が出ていき、心愛と萌香先輩が  
来た。

月音「ねえモカさん、どうしたの？」

萌香「それが、みぞれちゃんが帰ってくるのが遅くて・・・」

心愛「しかも明日使う白雪草は紫ちゃん曰く軽い幻惑作用があるらしく使ったことがあるらしいの・・・」

白鋼「紫先輩が使ったことのある・・・もしかして媚薬関係ですか？」

萌香「う、うん、異性を誘惑する類の、よく分かったね。」

白鋼「チツ、嫌な予感が当たるとは・・・」

キリク「うん？どういう事だ？」

月音「みぞれちゃんはもしかしてその花を使って・・・」

白鋼「その通りです、月音先輩：みぞれ先輩はその花を使ってジンキ先輩を誘惑するつもりなのでしょう・・・。」

俺がそついうと胡夢さんが来て

胡夢「さっきみぞれちゃんのお母さまから聞いた話では今は化物が出るらしく、私達が呼ばれたのはその護衛だって！！」

と慌てて言うつと萌香先輩が

萌香「でも、ジンキ君がいるから大丈夫だよね？」

月音「あ、確かに・・・」

俺は最後に月音先輩に質問をした。

白鋼「月音先輩、ジンキ先輩に彼女はいますか？またその彼女はみぞれさんじゃないのですね？」

月音「う、うん、瑠妃さんがジンキ君の彼女なんだよ・・・」

俺はため息を一つ吐いて

白鋼「急ぎましよう…ここで油を売っているのは瑠妃さんに怒られますよ？」

月音先輩達は急いで着替え、俺は妖怪化して外へ出たが・・・

白鋼「あの～萌香先輩、瑠妃先輩が持っているのは・・・銃？」

萌香「え〜と確かスノーランチャーと言うもので…」

心愛「雪を弾にして打ち出す武器みたい…ほしいかも」

俺達は心愛の言葉を無視すると空から鳥みたいな物が来て瑠妃さんの腕に止まると

瑠妃「見つけたのね、ならそこまで案内して!!」

鳥? 「カア!!」

鳥が再び飛び上がると瑠妃さんは後を追い、俺は一番遅い月音先輩をおんぶして後を追いかけると、刀を持ったジンキ先輩とみぞれ先輩がいた。瑠妃さんは銃を構えて撃った。

雪の弾は二人の近くに落ち激しい音をたてた。

瑠妃「よくも、よくも…私を騙してくれましたね！私達をおもてなしで油断しておかせてそのスキにジンキさんを奪う作戦だったのね！！」

瑠妃さんの言葉にみぞれ先輩はジンキ先輩の前に立ちながら

みぞれ「そう思ってくれてもいい…言い訳はしない。」

瑠妃さんは目に涙をためて再び撃とうとしたが

萌香「駄目よ！ジンキ君に当たっちゃう！！」

瑠妃「放してください！！私は嬉しかったのです。今までみぞれさんはジンキさんとしかくに喋ろうしなくてジンキさんも心配していて、やっと他の皆さんと仲良くなれると思っていたらそれが計算づくなんで…許せません！！」

ジンキ「ま、待て瑠妃！みぞれさんにも訳があるんだ！！それを聞くまで」

瑠妃「ジンキさんも彼女の肩を持つのですか！！」

萌香さんの静止を振り切り瑠妃さんは撃つが、弾はまっすぐみぞれさんに飛ぶが、

ジンキ「鬼火イ！」

ジンキさんがみぞれさんの前に立ち口から白い炎を吐き、弾を溶かすと瑠妃さんは膝から崩れ落ち、剣を構えると

ジンキ「瑠妃さん、僕はみぞれさんの口から訳を聞きたい…ごめん！！」

剣に光が集まると俺達のいる場所の少し下に当たると積もっていた雪が煙幕の役割を果たし、煙が晴れた時二人はいなかった…。

瑠妃「刃さん…ウウツ」

その時背後から唸り声が聞こえ後ろを振り向くと身の丈が2m近くの化物がいた。

萌香「これが化物…。」

キリク「早速ジンキ先輩との特訓が実を結ぶのか？」

僕は鬼刃刀と氷でできたスノーボードに乗り、皆から逃げた。

みぞれ「すまないな…私をかばったばかりに仲を悪くしてしまった。」

ジンキ「気にするな…勿論何故僕を連れ出したわけを教えてくださいよ。」

みぞれ「ああ、まずはこっちについてきてくれ…。」

僕は氷を溶かし剣を背負い直し、みぞれさんの後をついて行く  
みぞれ「ついたぞ…ここが私が連れてきたかった所だ。」

そこは一面の明日使つ“白雪草”の群生地だった。

ジンキ「見事な花畑だな…白雪草の…」

僕がそういつとみぞれさんは花畑に近づきながら

みぞれ「…分かっているよ。これが仲間への裏切りな事は…でも  
…私達は融通の利かない種族でね…雪女は若い時にしか子供が産め  
ない身体なんだ。」

ジンキ「!?…そうか、だから17歳で成人なのか…」

僕がそう呟くとみぞれさんは

みぞれ「ジンキは理解が早くて助かる…成人すると“なるべく早  
く子供を産まなくてはならない”…それが里の掟でな…」

ジンキ「そしてみぞれさんも今年で17歳…」

みぞれ「そう、今お前を失えば私は見合いでもして別の男と家庭  
を気づかなくてはいけない…」

ジンキ「例え、相手が嫌いな男でもか…」

だんだん震えてきたみぞれさんの声に僕は抱き着いてあげること

もできなく、ただ立っているだけしかなかった。

みぞれ「種の存続の為には仕方ないだろう…実際母も“そうだった”」

ジンキ「!…」

みぞれ「本当はもっと皆でまったりと、新人生と共に新聞を作りたかったんだがな…」

みぞれさんは花をこちらに向けてきた。

みぞれ「分かってくれ…もうこうするしかないんだ…私にはこうするしか…」

その時クラツとなり、目の焦点が少しぶれた。

みぞれさんは花を両手で持ち、目に涙を浮かべ

みぞれ「頼む…ジンキ…いや刃、今夜だけでいい!私をお前の恋人にしてくれ…」

そしてみぞれさんは着物を脱いだ。僕はみぞれさんの着物の前を閉じて

刃「みみみみみみみ、み、みぞレサン!?ボボボボボボ、僕ハナニモ見てないからね!!(見たのはさくらんぼが乗った牛乳プリンだ!ただの牛乳プリンだ!)」

みぞれ「刃…大丈夫か?」

僕はすぐに正気を取り戻すと、

刃「それに何故今夜だけなんだ？いつものみぞれさんのセリフとは思えない。何故なんだ！？何故校則より僕に会えることを優先するみぞれさんがその掟を受け入れるんだ！？」

みぞれ「刃には隠し事できないな…仕方ないだろう“雪の巫女”の予言には逆らえないんだ。」

刃「雪の…巫女？」

僕は雪の巫女という言葉が出てきたのでそれに首を傾げるとみぞれさんは説明してくれた。

雪の巫女はこの里の長ですすでに百年は生きているそうで、神の声を聞けるという預言者で、もし雪の巫女がいなかったらこの里はなく、雪女はすでに絶命していた存在らしい。

刃「つまり、結婚相手も雪の巫女の予言によって決められるのか？」

みぞれ「そうだ…里では個人の恋愛よりも種を絶やさないとだ。」

刃「…この事もか？」

僕はそういつとみぞれさんはキャンディーを外すと

みぞれ「だが間違うな…これは掟の為じゃない…私はただお前を





と眩くと気を失った。

第20話「雪女の里、そして闘い：前編」（後書き）

次回は恐らく中編になりますが、楽しんで待っていただけたら幸いです。

また次回は新聞部とその他数名が大活躍します。シリアスありですが、自分の小説の基本である笑いも書きたいと思います。

第20話「雪女の里、そして闘い…中編」(前書き)

<注意!!-->

今回ジンキとみぞれさんが甘い空間を超展開するので「みぞれは俺の嫁」の人は回れ右をしてください!!そのほかの人は気をつけてみてください!!

## 第20話「雪女の里、そして闘い：中編」

第20話「雪女の里、そして闘い：中編」

ジンキ「うっん、み…それさん…ハッ!？」

僕が目を覚ますとそこは雪山ではなく部屋の中でやかんから湯気が出ていて僕の両手には包帯が巻かれてあった、皆は僕が目覚めて

月音「刃君、目が覚めたんだね!」

萌香「よかった!怪我はない?」

白鋼「ジンキ先輩、手の怪我は誰にやられたんですか!？」

僕は答えようとしたら

瑠妃「ジ、ジンキさあああああああん!」

鼻水まで出ていた瑠妃さんが抱き着いてきた。僕は瑠妃さんを撫でようとしたが、やめた。

ジンキ「瑠妃さん…ごめん、剣を向けてしまった」

瑠妃「グスツ…いいえ、ジンキさんが無事なら構いません…」

瑠妃さんはそう言ったが、僕はみぞれさんが攫われたことを思いだし

ジンキ「いかん、みぞれさんを助けなければ…」

キリク「ジンキ先輩、何故あそこにみぞれさんがいなかったのですか？」

ジンキ「みぞれさんが攫われた…しかも敵は僕が鬼である事も知っていた…」

僕がそういつと皆の表情は強張った。その時つららさんが

つらら「今回の事は雪の巫女がなさったことのようにです。」

ジンキ「ああ、知っている。」

つらら「それとその巫女が言うには「僕をこの里から追い出せ…だろ？」…ええ」

僕が言った事につららさんは申し訳なさそうに頷くと皆は驚いた。

月音「ジンキ君、どういうこと!？」

ジンキ「そのままの意味だ。雪の巫女は僕が白い光を持つ刃鬼と言っことも知っていた。」

キリク「そうか…雪の巫女からはなんと？」

ジンキ「白き光を使う刃の鬼よこの里から去れ、僕はこの里に災厄をもたらす…とね。」

僕はそう言い、瑠妃さんを体から離し立ち上がった。体は木にぶ

つかった時に痛めたらしく痛みが走るが我慢をして、音叉を手に持つと部屋を出て行くとした。その時

心愛「ちよっと!?!どこへ行くの!?!」

白鋼「心愛、先輩の事だ…みぞれさんを取り返すのだろう…」

胡夢「探すのはディスクアニマルを使えばいいからね…」

ジンキ「ああ、そうだ。僕はこれから彼女の言っていた災厄を起こしていくよ…皆は来ないでくれ…瑠妃さんは立花に鬼抜いの要請を…」

瑠妃「え? 一体誰を…ま、まさか嘘ですよね?」

瑠妃さんは驚いた顔で首を左右に振りながら言うが僕は

ジンキ「瑠妃さんの思っているとおり…僕を鬼抜いの対象にしろ。もしできなくても…僕自身でする。」

僕がそういうと部屋を出て行った…立花に電話をするために

刃さんは外へ出て行ったあと、ココアちゃんが

心愛「ねえ、瑠妃さん、さっきの鬼抜いって…何?」

と私に尋ねてきた。私は震えながら答えようとした時、

瑠妃「では説明します…鬼抜いとは…鬼の力を悪事や私利私欲の為に使った鬼を…それより強い鬼が“殺す”事です。」

月音「つまりそれをジンキ君は自分に言ったという事は…」

瑠妃「ええ、ジンキさんはみぞれさんを救ったら、…先輩の手で殺して欲しいのだと…・…・…思います。」

胡夢「でもジンキはみぞれの為に闘うんじゃない！なんで…」

瑠妃「鬼は人間を魔化魍から守って来た存在です…ジンキさんは妖怪と人間、そして鬼の懸け橋ですから…本当なら妖怪の方と変身しなくても闘ったり、稽古したりするのもかなりのリスクがいるのです…でもジンキさんは闘うつもりですね、みぞれさんを助けるの…恐らくみぞれさんを救う際に殺してしまうからなのかもしれないません…また鬼は人と魔化魍の間に立つあいまいな存在です…それが「グワツ!?!?!?!」

その時部屋の壁に轟音を立てた。

バキイ!!!

刃鬼「うわあああああああああああああああああ!!!ガッ」

そして刃鬼さんが飛ばされてきた。

月音「刃鬼君!?!まさかもっ!?!」

心愛「でも早すぎない!? みぞれさんも救えてないのに!」

すると刃鬼さんが飛んできた穴から刃鬼さんよりも真つ黒などこか見た事のある鬼がやってきた。クロオニさんは起き上がった刃鬼さんに指を差し、

クロオニ「刃鬼…これで分かったか…今のお前では助けられないとな!」

僕は廊下を出て、人ごみの少ない路地裏に出て、携帯を取り出した。

ジンキ「フウ…まさか鬼払いを自分からお願いするとは…猛士初だろうな…」

僕は携帯を広げようとした時、茶色の鷹型ディスクアニマルが僕の携帯を弾き飛ばした。僕はそのディスクアニマルの持ち主を良く知っている…僕は音叉を取り出して

ジンキ「隠…クロキの旦那、どこにいるんですか!」

すると建物の影からクロキの旦那が隠を肩に乗せ、僕の携帯を持って現れた。旦那は僕を睨みながら

クロキ「ジンキ…立ち聞きさせてもらった…本気か?」

ジンキ「はい…でも、みぞれさんを助けるまで殺されたくありませんが…」

僕が音叉を鳴らし、額に持っていくとクロキの旦那も音叉を額に持っていた。

刃鬼「ハア！！行きます！！」

黒鬼「こい！今のお前では俺には勝てない！」

僕は黒鬼の旦那に雷の拳を放つが、旦那はガードもせず顔で受け止め、拳を握り込み、

黒鬼「ジンキ…歯あ食いしばれエ！！オラア！！」

刃鬼「グワツ！？」

僕は壁を壊し、部屋に飛ばされた。黒鬼の旦那はゆっくりと入ってきて、月音君達は慌て、心愛ちゃん達は敵意をむき出しにしたが、黒鬼の旦那は僕に指を差し

黒鬼「刃鬼…これで分かったか…今のお前では助けられないとな！！」

僕は立ち上がり構えると、心愛ちゃん、キリク君、白鋼君が前に立ち、構えた。

心愛「刃鬼義兄さんをこれ以上やらせない！！」

キリク「お前を俺の炎で燃やしてやる！！」

白鋼「すいませんが、刃鬼先輩がいなくなると困るのですよ。」

三人は構えると黒鬼の旦那は構えを解き、

黒鬼「刃鬼：良い後輩を持ったな：それとお前が一人で助けだし、鬼被いを受け死んだら、みぞれさんはまた雪の巫女とやらに攫われてしまうぞ？それにそうでなくてもお前が死んだら悲しむんじゃないのか？更にお前は何故そこまでこだわる？」

僕は立ち上がり、

刃鬼「まあ、みぞれさんを助けるのはきな臭いものを感じてね：それにもう二度とあと少しで助けられるのに助けられない思いは嫌なんです！！例え鬼被いの刺客が旦那であつたとしても！！」

黒鬼「まあ、それはいいが：俺は鬼被いで来たわけじ、刃鬼さんをやらせません！！」グフツ！？「義兄さんが殺される前にあんたを殺す！！」ギャボツ！？」

黒鬼の旦那は瑠妃さん達の攻撃を受け、黒鬼の旦那は宙を舞った。

〜数分後〜

頭の変身を解除したクロキの旦那の前に僕、瑠妃さん、心愛ちゃん、土下座して座らされた。

クロキ「つうわけで、俺がここに来たのは鬼被いでもなんでも無く、新しいバイクの慣らし運転でお前の学園の理事長に聞いたらココがいいって言ったの！」

ジンキ「旦那…スイマセンでした!!」

瑠妃「お話をスイマセンでした!!」

心愛「なんで私まで…」「心愛ちゃん!!」「スイマセンでした…誇り高いバンパイアなのに…」

クロキの旦那は緑茶をすすり、

クロキ「まあ、許すが…ジンキ「ウエ?」なんで雪の巫女はお前の事を知っていたんだろ?お前が力を使ったと言ってたけど鬼とは限らない。むしろ鬼は変身しないとジンキ以外術は使えないから今の段階では鬼ではないと言えるはず。」

ジンキ「そうなんですよね…きな臭くて」でしょうね「うわっ! つららさん近い近い!!」

つららさんは僕の頬をつつきながら

つらら「雪の巫女はみぞれが大男(恐らく僕)に襲われていた所を保護したと聞きました…でやったのですか?」

瑠妃「ジンキさん!!」

クロキ「うわ〜ひくわ〜お兄さん超ひくわ〜立花の皆にも言っちゃうよ?」

ジンキ「瑠妃さん、旦那はつきり言うが、僕はやってない!僕からは触れてもないからな!!」

僕がそういつとつららさんは怖い顔をして

つらら「やってないんですか!? 何でやらないんですかッこの臆病者!」

ジンキ「普通にできないよ彼女持ちですし!! それに…僕の“手”で彼女に触れるのは…できない…昔の僕とは違うからね…」

僕が両手を見つめながら言つと

瑠妃「ジンキさん…」

月音「? どういう事なんですか?」

ジンキ「まあ、それは後でいい…今は先にみぞれさんを奪還しなくては…」

僕がそう言い足に力を入れ、立ち上がるとつららさんが

つらら「まあ、お待ちなさい、私にいい案がありますので…」

と言つて頭以外を凍らせた。

白鋼「せ、先ばああああああい!」

ジンキ「大丈夫だよ…フンツ!」

僕が氷を解かすと、つららさんは

つらら「明日の花納めの儀式で雪の巫女から予言を授けられる日なんですけど、みぞれは最後の賭けで無理にジンキさんと結ばれたかったでしょう」「それは違うと思っぞ」「あら?」

ジンキ「あの時のみぞれさんの目は結ばれたい目じゃない 助けを求めている目だ。」

紫「では、ジンキさんは・・・」

ジンキ「仕事柄、助けを求められたら助ける...それが戦鬼だから...」

心愛「義兄さんあたしもやるよ!」

月音「僕も!」

ジンキ「皆...分かった頼むよ...クロキの旦那は参加しないでくださいよ。つららさん机借りますよ。」「アアアアアアアアアアアアアア!」

僕はそう言いながら立ち上がると突然瑠妃さんが叫びだした。

萌香「ど、どうしたの瑠妃さん?」

白鋼「何かいい案が思い浮かんだのですか!」

すると瑠妃さんは

瑠妃「あのジンキさん、私とジンキさん、陽海学園特別遊撃班ですよね?」

ジンキ「あっ…忘れていた。(作者も忘れかけてました)」

キリク「なんですかそれ？」

ジンキ「まあ簡単に言うと妖怪・魔化魍関係の事件を解決するのに特別な権力も使って解決する部隊みたいなもの…僕と瑠妃さんの二人だけだけど、」

と言うと心愛ちゃんが

心愛「ひよっとしたら鬼被いって言うのもしないでいいんじゃないの？」

ジンキ「あっ…」

白鋼「むしろ多少派手にやっちゃってもいいんじゃないでしょうか？」

ジンキ「う…」

クロキ「さっき立花に電話したが、好きにやっちゃってだって後個人的に増援も)」

ジンキ「僕の今までの覚悟は一体…」

胡夢「半分無駄だったかも、」

ジンキ「ウウウ…orz」

つらら「でも、神殿は広く、厳重な警備もあります。しかし私は作戦があります。」

ジンキ「いいのですか？」

つらら「ええ今回はかりはどうも話が急すぎて、それにジンキさんに去れと言うのも分かりません…今回はなにか「裏」があるのか感じれません、それに私も娘の事を案じているのです。…でも作戦をする前に問題が…」

ジンキ「問題？なんででしょうか？雪女の人ならばつ飛ばせますか？」

するとつららは袖からカツラを取り出し月音君達に被せた。

つらら「神殿には女性しか入れません、月音さん達は女装すれば大丈夫ですが…問題はジンキさんは体が立派過ぎて…」

クロキ「嫌だよな…こんなマッチョな女性はまずいないし不気味だな…」

胡夢「いたらUMAよ間違いない！」

ジンキ「鍛えてますから!!」

月・白「いや、使い方間違ってるから!!」

皆が納得すると

ジンキ「すいませんが、作戦は陽動班と実行班の二組に分かれる

予定ですか？」

つらら「あら、わかります？」

クロキ「いや、わかるも何もセオリー過ぎて駄目だろ！！」

ジンキ「僕とクロキさんが作戦の改良をします！！まず、部隊を  
…」

こうして僕達はみぞれさん奪還作戦を考え、クロキの旦那以外休憩して、決戦に挑んだ。

<陽動班（萌香、心愛、瑠妃、キリク）>

花納めの儀式が始まり、俺達5人は途中でトイレに行くといい抜け出し、俺はトイレに入り、神殿の係員が説教をしているが、

係員「全く最近の若い子と来たら…」

萌香「許してください…こうするしかないんです。」

心愛「昨日私の義兄さんの友達が攫われたの…」

瑠妃「攫われたのは白雪みぞれさん、攫ったのは雪の巫女…」

係員「は？」

ガチャ

着替え終わった俺出て、

キリク「と言うわけで暴れさせてもらいます。」

係員「男!？」

と言い萌香さん達はスノーランチャーを、俺はジンキさんから借りた音叉を剣に変え

キリク「まずは俺から行くぜ!!!ハア!!!」

俺は炎の力を剣に纏わせ、壁を斬りつけ、壁に大きな穴を開けた。

皆は壁から出て暴れ始めたすると銃を装備した。巫女さんが出てきた。

心愛「おねえちゃん、あたし達の役目ってひたすら暴れまくるんだよね?」

萌香「う、うん…」

心愛は生き生きとした表情で

心愛「ははは、血が騒いできた。そーゆーのはあたしに任せて!」

と言いながら飛んで銃を撃ちまくった。

瑠妃「心愛ちゃんは戦闘だといキキキするのね。」

すると反対側からも銃を持った巫女さんが来た。

キリク「行くぞ!!」

俺は瞬時に巫女さんに近づき、剣の峰で気絶させて行った。

しかしロビーに行くと

B A B A A「来ました撃て!!」

待ち伏せをされたのか、大量の雪弾が放たれた。反撃しようにもこっちの弾は少なくなってきた。瑠妃さんは無線を使って作戦司令官のつららさんと連絡を

瑠妃「ごめんなさい予定より時間が稼げないかもしれませんが!!」  
・・・え？増援？一体誰が？」

瑠妃さんの連絡に耳を傾けるが、攻撃は激しくなる一方だった。  
その時

ブオーーン!

神殿内にバイクの轟音が三つ響くと

パリーン!!...ドン!

ロビーの窓ガラスが割れ、三台のバイクが出てきた。そのバイクに乗っている人は全員で4人、一つは黒い学ランを着た人が乗っていたが、残り三人は鬼が乗っていた。

<増援>

アマキさんからお誘いがあったら、まさかバイクで建物に突っ込むとは…しかも

狭鬼「祭りの場所は…ここかあ？」

天鬼「狭鬼、キャラが変わってますよ。でも時間には間に合ったようですね。」

黒鬼「そうだな…刃鬼の為だ暴れるぞ!!」

これから戦をするようですね。すると銃を構えた巫女さんがアマキさんに狙いをつけ、

ドンッ!

と撃ってきたので私はすぐに腕を振るい

九曜「ハア!!」

ゴウッ!!

炎の壁を作り雪の弾を溶かすと、

黒鬼「よし狭鬼、俺達も九曜に続くぞ!ハア!!」

狭鬼「そうですね…ハッ!!」

音撃棒の先に火炎の弾を作り、放っていく。アマキさんも

アマキ「そこっ!!」

ピュピュピュッ!!

音撃管を連射にして放っていく私も炎のリングを作り、

九曜「行け、烈・火炎車!!」

と放っていくと巫女さん達は逃げていく。すると刃鬼さんの後輩や新聞部の皆さんが近寄ってきた。

萌香「あの…なんで九曜さん達が!？」

九曜「なんでも理事長いわく立花からの依頼で刃鬼の援護をしてやれと刃鬼さんはどこに?」

と言うと瑠妃さんは

瑠妃「あ、今刃鬼君は多分みぞれさんを奪いに空を飛んでいるところですよ。」

九曜「はい?」「九曜君、炎!!」「はい!!」

心愛「あたしたちの役目は時間稼ぎよ!!」

まあ、時間稼ぎなら頑張って時間を稼ぎますか!…でも

黒鬼「又ハハハハハハハハハハ！！！」

ドンドンドンドン！！

狭鬼「アハハハハハハハハハ！！！」

ボンボンボンボン！！

やりすぎですよ二人とも…

私は分身体が部屋を出ていくのを見届けると窓へ向かおうとする  
と、

??「ア〜イキャ〜ンフラ〜イ…」

声が聞こえ、何かかと思ひ首を傾げると、

パリーン！！

刃鬼「そして、ダイナミックご入室！！」

と刃鬼が入ってきた。刃鬼は立ち上がると明るい声で

刃鬼「良かった…みぞれさん、助けに来たよ。」

私に近づいてきた。私はハツとして両手を前にだし

みぞれ「刃鬼、私に近づかないでくれ!」

刃鬼は足を止め、

刃鬼「なぜだい?」

と優しい声をかけてきた。本当なら今すぐ抱き着きたい。だが・

みぞれ「私はお前を愛する資格はない…私は汚されてしまったからな…」

刃鬼「雪の巫女が決めた結婚相手にか…」

みぞれ「そうだ…私は唇を奪われ、体中を触られ、犯されかけた…こんな私は死んだ方がいい。」

私がそついうと刃鬼は

刃鬼「なあ、みぞれさん、昨日君は僕に恋人になってくれと言い、僕は何もしなかった。何故だかわかるかい?」

突然話を変えたが、私は

みぞれ「それは…お前が私をはしたない女だと思ったからじゃないのか?」

と答えると刃鬼は首を振り、顔の変身を解いた。

ジンキ「違うよ…僕が君に何もしなかった…できなかったのは僕

のこの“手”で君を触ってもいいのかどうか分からなかったんだ…  
恐らく君よりも汚れているこの手で」

と言い、ジンキは自分の手を見つめた。

みぞれ「何故だ…お前は人殺しも悪いことは何もしてない！！皆  
を守るために身を削ったなのにそのお前が汚れているわけではないだ  
ろっ！！」

と私は言うがジンキは剣をおろし、近くの椅子に座った。

ジンキ「みぞれさんは、魔化魍は人間や妖怪を食べて成長するの  
は知っているな…」

みぞれ「ああ、学校で教えてもらったからな…」

ジンキ「更に魔化魍はいつ出現することが分からなく、予防する  
策もない…鬼の元に情報が伝わるのに最低でも何人かは食われている、一番酷くて十人以上も食われている…そして僕はそれを殺して  
いる。」

みぞれ「！？」

ジンキは膝に肘をつき両手で顔を覆いながら

ジンキ「僕の手にはね、みぞれさん…今まで殺してきた魔化魍の  
血と犠牲になった人間、妖怪の血がべつとりとついているんだ…落  
ちる事のない血の汚れが…」

みぞれ「じんき…」

ジンキ「それにみぞれさん、僕は常に死ぬ可能性が高いそんな戦いをしている。ちょっと行つてくるそれが最後の言葉になるかもしれないこともある…瑠妃さんはそれも了承してついでにきて…みぞれさん、僕は君が昔見た刃じゃない。止めることは許されない、背後に屍が積み重なっている血まみれの鬼の刃鬼なんだ。でも、僕は君が死なせることをさせたくない。僕は全力で君を止めたい。偽善と思うかもしれないがこれが僕なんだ…。」

私はベッドから立ち上がりジンキに近づき抱き着いた。

みぞれ「優しいんだなジンキは…なら昔、お前が私を守る時、私を化物じゃないと言ってくれた…なら言わせてもらおう…お前は汚れてなんかいない…お前の手は多くの人を守つてきた温かい手だ…。」

ジンキ「そう…ありがとう…みぞれさん少しだけ離れてくれるかい？」

みぞれ「なんだい？」「いきなりで失礼！」ん！…んん！！」

私は少し離れるとジンキは私にキスをしてきた。しかも舌も入れてきて、私の舌を絡めてきた。離そうにもジンキの腕が私にしっかりと抱き着いて離れられなかった。

みぞれ「むぐっ…むっ…んっ…んむっ…プハッ！」

ジンキがキスをやめて私の顔を見ると自分の唇をなめると

ジンキ「みぞれさんの唇結構甘いね…あ、いつもキャンディーなめてたか。」

みぞれ「お前いつの間にそんな舌づかいを…そうか瑠妃と練習したのか…しょうがないもだろうなお前と瑠妃は恋人なのだから」

ジンキ「いや、フレンチキスは瑠妃さんとはやったことはない！さっきのは適当に舌を突っ込んでみた。」

みぞれ「適当って…」

と立ち上がって言い、私の頭に手を置くと

ジンキ「でもどうってことはないだろう？キス程度なんて（ファーストキスは泥酔した父さんだし！その後泥で洗ったからノーカウントのはず！）」

昔のように優しい笑顔で言った。私は涙腺が熱くなるのを感じながら、

みぞれ「…バカ…簡単に言うな…怖かったんだぞすごく…」

ジンキ「そうか…」

みぞれ「キスだけじゃないんだ…あいつが凄い力で覆いかぶさってきて…」

ジンキ「うん…」

みぞれ「体中触られたんだぞ…抵抗するまもなく…胸も…」

ジンキ「ああ…」



ア！！！（ M ; ）（超赤面）

ジンキも顔を赤くしていた…だがジンキの唇もよかった…ポッ

第20話「雪女の里、そして闘い…中編」(後書き)

次回は月音君達の所から始まりま〜す！…それではさらばだ！！

## 第20話「雪女の里、そして闘い：後編」（前書き）

後編を始める前に、ここでみぞれ奪還作戦の内容を書かせていただく、みぞれ奪還作戦はつららが考えた陽動と実行と別れてやるものであったが、クロキとジンキがありきたりすぎるといった理由で実行の班の中から探す班、外から探す班の二つに分かれた。外から探す班はマツチヨすぎて女装して入れないジンキとディスクアニマル、中から探す班は前回の最後にキスシーンを見てしまった月音君、胡夢さん、紫ちゃん、白鋼君の4人である。今回はその中から探す班から始まる・・・

## 第20話「雪女の里、そして闘い：後編」

### 第20話「雪女の里、そして闘い：後編」

<中から搜索する班（月音、胡夢、紫、白鋼）>

俺達が中でみぞれ先輩の部屋を捜していると轟音が響いてきた。

白鋼「激しくなりましたね…」

胡夢「でもおかしいわね、萌香たちの武装だったらこんなに轟音は響かないはず…」

俺達は激しすぎる轟音（黒鬼、狭鬼、九曜がフィーバーしているため）に首かしげていると

月音「でも、早く行動しなきゃ！」

紫「そうですね、もしかすると窓のない部屋にいるかもしれないですから、そうなるとうんきさんでも探しきれないですから私達が頑張らなくては！！」

紫先輩は前にジンキさんから貰った音叉を握りしめ言った。

白鋼「そうですね、急ぎましょー！！」

俺達は恐らくみぞれさんがいる客間に続く階段の前に来ると後ろから声が聞こえた。

??」「ほう…西側で騒がしいと思えば…なるほどこっちが本命という訳だね。」

皆は男を睨みつけ俺は殺気を放ったが、男はさらりとした表情のまま

雅「慌てるな…私は藤咲雅ふじさきみやびこの里の者ではない。」

と自己紹介を始めたがジンキ先輩が以前「殺気をぶつけても何のアクションを起こさない人物は危険だ」という教えてくれた。すると目の前の男は

雅「君達はひょっとして白雪みぞれを助けに来たの友人かな？」

と言い、胡夢先輩は

胡夢「みぞれを知っているの？」

と言ったが雅は

雅「…残念だが白雪みぞれは昨夜“ある男”から心も体も奪われたと聞いているよ。」

月・紫・胡「?!?!?」「!?!?!」

白鋼「やはり、予想通りか…」

俺は歯をギリッと音をたてたが、雅は続けて言った。

雅「現在、雪の巫女は里の復興の為、ある組織との協力関係を築

こうとしていてね。その友好の証として巫女は里の中で最も妖力を秘めた少女を「人質」として差し出した。」

白鋼「やめる…それ以上言うな!!」

俺の声を無視してあいつは続けて言った。

雅「その人質の名前が白雪みぞれ、ゆえに今さら駆けつけた所でもはや手遅れ、彼女は二度と戻らないだろう。」

雅はそういうと俺は瞬時に人狼態になり、雅に向かって走り出した。

白鋼「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

雅「ん?その白い体毛…ああ、お前“できそこないのアルビノ”か…沈め」

ガンッ!!

雅は簡単に避けると拳を俺に当てたその時俺は壁に吹き飛ばされた。

白鋼「グワッ!?!」

胡夢「シロガネ君!?!」

俺は月音先輩たちの方を見ると

紫「な…何それ結婚相手が決まったんじゃないかなかったですか…そ

れじゃみぞれさんは雪の巫女に利用されて…」

月音先輩はカツラをのけながら

月音「嘘だろ？すべてを…奪われた？みぞれちゃんがそんな訳が分からない理由で…訳の分からない男に…」

その時階段の上から人影が見え、俺達はその方を見るとみぞれさんがゆっくりと降りてきた。

みぞれ「来る…な来ちゃ駄目だ…その男の言う通り…だ。私は汚されてしまった。だからもうお前達と共に帰れない…」

月音「みぞれちゃん…何言っているんだよ。」

胡夢「そうよ、みぞれ！！そんなの…「駄目なんだ」！？」

みぞれ「この体じゃあもう…ジンを愛する資格はない…だからジンキにも伝えてくれ私の事を忘れてこのまま二度と…」

するとみぞれ先輩の身体に罫が入っていき、紫先輩は

紫「氷人形…あれはみぞれさん本人ではなく、氷で作った「分身」ですう！きつと私達二度と会わないつもりで…氷人形で「さよなら」を…」

月音先輩は急いで近づいていったが、氷のみぞれさんは直前で砕けて、

雅「しかし“汚された”？全く…ガキはこれだから困るよ。」

胡夢「!?!」

雅「本当に抱いたと思っっているのか?この私取るに足らんだだの小娘を」

紫「まさか…」

雅「ジンキが…何?からかっただけさ、ガキは趣味じゃない。とはいえ口づけ程度で泣いて暴れるから興奮めだったよ。おまけに汚されたなど思い上がりもほどほどにしるよカス共が、」

雅は呆れたように言った。その時俺と月音先輩の中で何かが切れ

月音「お前があああああああ!」

白鋼「貴様がみぞれ先輩をおおおおおおおおおおおおおおおおお  
お!」

月音先輩は殴りかかり俺は右足で顔めがけて蹴ろうとしたが、

雅「なんだ?その奴も男か…だったら遠慮はいらないな」

ガンツ!バキバキッ

と言いきろくあしらわれ、月音先輩は床に俺はさっきとは反対側の壁に叩きつけられた。

胡夢「つくねええ!」

胡夢先輩が雅に闘おうとするが、腕を掴まれた。胡夢さんは力を込めて動かすが、動かなかった。

雅「だが、案じることもない、ガキとはおえ政略の為の大事な「ピユイー!!」ガツ!？」

突如白い何かを雅を弾き飛ばすと、紫先輩の肩に止まった…それは、

光鷲「ピイー!!」

大きく一鳴きするとディスクに変わり、紫先輩の手に収まった。紫先輩は急いでそれをセットして回すと刃鬼先輩の音が聞こえてきた。その内容は

刃鬼「こちら刃鬼、みぞれさんの部屋を発見、これより例えみぞれさんの心が奪われていても取り戻す!!!ア〜イキヤ〜ンフライ!!!」

と言って再び光鷲は鳥になると皆の顔に希望の色が見えてきた。

胡夢「刃鬼君、間に合ったのね!!!」

月音「そうだね…」

俺もつい顔を笑顔にして起き上がり、

白鋼「みぞれさんの事は刃鬼先輩に任せましょう!!!」

俺たちの表情に雅は顎に手を当て

雅「何故、貴様達は笑っていられる？さっきのガキは汚されたと言ったはずだが？ほかにガキが一匹加わっただけで何も変わらなはずだが？」

俺は刃鬼先輩が教えてくれたポーズを思い出しながら、左手を腹に添わせ、右手を左斜め前に突出すと皆が言っていた。

月音「刃鬼君は強力な清めの力を持っているから…」

胡夢「あんたがみぞれに付けた穢れなんて…」

紫「チヨチヨイのぱツパで綺麗にしてやるですう〜!!」

俺は右手を左から右へ、左手を腰に移動させながら

白鋼「それにあの人の優しさは底を知れないのでな!!（先輩、あの言葉使わせてもらいます!!）…変身!!」

俺はそういうと右手を左手の上乗せて両手を大きく広げた。俺の体毛は白から黒へと変わっていき、月音先輩の髪は茶色に目は赤く変わった。俺はすぐに右手を雅にかざすと、

ゴウツ!!

激しい音を立て雅の服が燃えた

雅「グッ!？」

急いで服を脱ぎ捨てたが、その隙を俺達は逃がさず

白鋼「先輩、行きますよ!!」

月音「ハアアアアア!!」

俺の蹴りと先輩の拳が当たり、雅は俺達以上に柱を壊しながらぶつ飛び、月音先輩は

月音「急ごう、みぞれちゃんとジンキ君が待ってる。」

俺達はみぞれさんがいる部屋に行き、見たものは…ジンキさんとみぞれさんがディーブなキスをしているシーンでした。ええもちろん鼻血は出ましたよ。ドバドバと!!

僕とみぞれさんは正座をして胡夢さんのお説教を食らってました。

胡夢「あんた達は一体何やっているのよ!!」

ジンキ「すまない…みぞれさんを慰めようと頑張っと思っていたのがこれがいいかと思ひ…本当に…すまないと思つ。(24時間戦う人風に)」

みぞれ「くるむ…お前羨ましいんだろ?好きな人とキスできたことに対して…」

胡夢「な、なななな／＼それがさっき汚されたと言って悲しんでいた奴のセリフ!？」

胡夢さんとみぞれ“ちゃん”の言い争いを傍目に白鋼君の頬をビシタしている

月音「え？どういふ事ですか？瑠妃さん？瑠妃さん！？」

ジンキ「どうした？月音君！？」

月音「いや、分からないけど…強敵が出てきて、ジンキ君の先輩も赤と青の狐のお面をつけた軍団と闘ってひき離されたみたい…」

ジンキ「なんだって！？（狐のお面…化け狐か？でもなんでココに！？）」

その時廊下で物音がして、僕は皆を後ろに下がらせるから再度変身して鬼刃刀を構えると、有ることを思いつき紫ちゃんに尋ねた。

刃鬼「紫ちゃん、ここから萌香さん達がいる場所の方角を教えてください、」

紫「ちようど扉の方ですが、何をするんですか？」

白鋼「まさか先輩・・・やるつもりですか！？」

僕は剣に光と雷の力を込めると

刃鬼「みぞれさん、君の故郷の神殿壊しちゃうけど、許してよ！」

みぞれ「刃鬼、構わないやってくれ！！」





僕はみぞれさんの方から褐色の肌の女の方を向いた。

??「あら？初めまして、まだ鬼さんがいたのね」

刃鬼「ええ、それより貴方の名前はなんだ？僕の今の名前は刃鬼だ。人間の時は松坂刃だよ。」

刈愛「へへ君が刃君ね、私の名前は朱染しゅせん 刈愛かるあ、心愛と萌香のお姉ちゃんです！！」

刃鬼「そうですか…「うっう！？」何だ!？」

僕が声の方を向くと雪の巫女の口から白い何かが出てきて形を作ると

??「残念…残念だここまで来て全てペアになってしまつとは…里を侵略しようとする組織に対して同盟を結ぶ事だけが血を流さずにすむ唯一の方法なのにな…」

その時背後に嫌な予感がして、すぐに蹴る音が聞こえ、振り向くと白鋼君が吹き飛ばされた刈愛さんに対して構えていた。僕は月音君に

刃鬼「月音君早く萌香さんの口ザリオを外せ!!」

月音「何で!?!早くしろ!!」

月音君が萌香さんの口ザリオを外そうとするがその前に表情がなくなつた刈愛が二人を飛ばした。

月音「ゲフツ……」

萌香「カハツ……」

飛ばされるとキリク君が近づき

キリア「おい、先輩どういう事だ!？」

刃鬼「……心愛ちゃん、刈愛姉さんはどういう人だ?」

心愛「刈愛姉さんは……うちではナンバー1の殺し屋で一度殺しを  
始めると止まらないのよ。」

そう言つと次は心愛ちゃんとキリク君が吹き飛ばされた。

僕達はお互いの背中を預け、どこからでも対処できるように構え  
ると刈愛さんは目から涙を流して泣いていた。

刈愛「うええ……」

隣にいた白鋼君は僕に話しかけてきた。

白鋼「先輩、彼女何で泣いているんですか?」

刃鬼「さあな分からん……白鋼君、僕が彼女の動きを止めるから全  
力の一撃を入れる。」

白鋼君が頷くと僕は刈愛さんに向かい刈愛さんは手刀を構え接近  
してきた。僕は

刃鬼「ハッ！！」

蹴りをしたが、刈愛は僕を避け、白鋼君達に向かって行き、

白鋼「ゲワッ！？」

みぞれ「かはっ、」

胡夢「キヤア！？」

瑠妃「ぐっ、」

刈愛が皆を倒し終わると立ち止まり、

刈愛「上の命令であなたは最後に殺せと言われたの……」

刃鬼「そうかい……では殺し合いを始めますか！ハアアアアアアアアアア！！」

刈愛「グッ！？うええええ！！」

僕は刈愛と真っ正面から向かい合い刈愛は泣きながら、僕は叫びながら刈愛を僕が殴れば、刈愛は殴り返し、刈愛が僕を蹴り飛ばせば僕も腹部に蹴りをして、刈愛の手刀が僕の肩に刺されれば傷を塞いで鬼爪で斬る。

このような鬨いが続き、僕と刈愛の周りの床にお互い血が染めていき、

刃鬼「ハア、ハア、ハア……いい加減倒れてくれませんか？魔化

魍よりしづといぞー！」

僕はそう愚痴をこぼすと刈愛も

刈愛「フウ…そつちこそそろそろ死んでよ。悲しいけど、萌香達も殺さなきゃいけないの…」

刃鬼「泣くほど悲しいなら殺すなよ！！」

僕は雷の力を左拳に込めて放とうとした時、月音君達の方で大きな妖力を感じてその方を見ると、月音君が萌香さんの十字架を外していた。

刈愛「萌香…あなた、封印が…」

その時裏萌香さんの蹴りが刈愛の顔を捉え、

裏萌香「久しぶりだ姉さん、会えて嬉しいよこれは私なりの再開の挨拶だ。受け取ってくれ」

ゴガアアアアン

と蹴飛ばし、僕は

刃鬼「さすがは裏萌香さんだ。えげつないが少し休憩出来た…よつとー！！」

裏萌香「そうだな…怪我が浅い奴もいるがヤバい奴もいるな。」

心愛「あ、おねーさま！」

白鋼「グツ…先輩凄いですね…」

キリク「ゴホゴホツ…くそ回復が追い付いてないな…」

みぞれ「刃鬼、大丈夫なのか？血が結構出たが…」

刃鬼「ああ、大丈夫だが…」

僕と裏萌香さんは刈愛の方を見た

刈愛「強いよね…あれだけやったのに誰も死んでないなんて…だったら私ももつと本気を出さなくちゃ」

すると刈愛は笑顔でスカートを片方を摘み上げ片膝をついた。

刈愛「それよりまずは祝福しましょう。封印を解いて覚醒できるようにになったのねおめでとうモカちゃん」

裏萌香「…何のマネだ姉さん。」

僕は二人が会話をしている時に地面に刺しておいた刀を抜いた。

刈愛「あなたは私達姉妹の中でも特別な“血統”、それが目覚めたなんてとても素晴らしい事よ。父様もきつとお喜びになるわ。」

裏萌香「…それで鬨いは終わりにしてその素晴らしい妹を見逃すか？」

刃鬼「それはないだろう…僕達を殺すことは彼女の仕事…やめることはできない。」

僕が剣を構えながら萌香さんの横に来ると

刈愛「そう…その鬼さんの言う通り…私も二人相手には辛いから「制限」を一つ外すね。」

そう言いながら刈愛は耳のピアスを片方外すと外した方の手が不気味に変化して5枚の蝙蝠の羽のような物になった。僕は輝になり

刃鬼輝「萌香さん…第2ラウンドだね。」

僕が呟くと刈愛は羽をふるい、萌香さんを斬り、僕は鬼刃刀で防いだ。

パキッ

心愛「お姉様!!?」

すると斬られた裏萌香さんは

裏萌香「成程…そうやって攻撃するのかその腕は、残念ながら姉さんが斬ったのは私の残像だ。」

と裏萌香さんは蹴り上げたが僕はすぐに腹部を蹴り距離を開けた。刈愛はすぐに立ち上がり、構えた。

刃鬼輝「萌香さん!!彼女を倒すなら超強力な一撃を決めろ!!半端な威力では効き目はない!!」

裏萌香「すまない…では刃鬼はどうする？」

刃鬼輝「僕が先に動いてあの厄介な羽を止め、雷の力で彼女を痺れさせる。その隙白鋼君と共に超強力な思いつきりぶち込め！！」

裏萌香「ああ…白鋼、聞いたな！！」

白鋼「はい！！」

白鋼君が萌香さんの隣に行くのを見ると僕は刀を構えて駆け出し、刈愛の羽を刀で受け止めた。

ピシピシッ！

刃鬼輝「ハアッ！！」

動かないと確認してから刀に雷を纏わせると刀を通して刈愛の体に電撃が走り、動きが止まった。僕は限界まで電撃を流し続け、背後から

裏萌香「どけ刃鬼！！」

白鋼「行くぞっ！！」

と声が聞こえ僕はすぐに跳躍をした。

バキバキバキツメキメキッ！！

僕は下で音がしてみると萌香さんの本気の蹴り上げを白鋼君はど

す黒い闇を纏った右足の飛び蹴りが腹部に突き刺さり、飛んで行った。僕が着地をすると白鋼君の変化は解けて地面に座り込んだ。僕も輝を解除して手を差しのべた。

刃鬼「お疲れさん、やはりとどめを白鋼君に任せて正解だったね……」

裏萌香さんは起き上がってこない刈愛を見て

裏萌香「…悪く思うな、カルア姉さん…こうするしか…」

その時刈愛の体が少し動いたのを感じ僕は萌香さんの体を押した。

ドンツ…パキイン…ザシユザシユザシユ！！

刃鬼「グワツ…グウウ…」

僕はとっさに刀で防ごうとしたが、刀は折れ、刈愛の刃が僕の左腕を貫く。

裏萌香「馬鹿な…内臓は踏みつぶしたはず！」

白鋼「不死身かよ…冗談キツイよ…」

僕が腕に刺さった3枚の刃を抜こうとしたが抜けず、鬼火で対抗しようとしたが、刈愛の2枚の刃がすぐそばまで死を覚悟したが…腕が間に入り僕はその顔を見た。

雅「…もうこのくらいにしておこうか…刈愛」

刈愛「雅さん……」

僕は雅という男を見ていると男は僕を見て

雅「ほう、お前が噂の刃の鬼か……まさか刈愛と殴り合いで対等に戦えるとは思わなかった……今回は君に免じて俺たちの負けにするよ。」

腕から刃が抜けると僕は体に力が入らなくなり、刈愛との会話もろくに聞けなく、刈愛を抱きあげた雅はという人物の元にへりが来てそれから僕はクロキの旦那たちが来るのを見た後、赤く染まっている床に崩れ落ちた。

雅達がへりに乗り込むを確認して、ぼくはへりを飛ばし雅に話しかけた。

??「お疲れ様雅……それで例のサンプルは予定通り仕込んでこられたの?」

雅「ああ、あの“魔化魍”とやらの技術を使った奴なら仕込んできたよ。それと里で陽海学園の生徒に会ったよ。去年お前を潜入させてた学園だ。」

??「ん?ああ……それで手こずっていたんだね。あそこは厄介な生徒が多いからね。」

ぼくがそう言うと雅は

雅「ああ、それに片方が長く、白く輝く鬼を見かけたよ。確か大きな刀を持っていたよ。おそらくお前の獲物だろ？」

ぼくは刀を使う鬼という言葉で

??「え！？刃鬼に会ったの！！」

雅「ああ、だから前を見て運転しろ！！」

ぼくは前を見て機体を制御して聞いた。

??「分かったけど、で、彼はどうだったの！！強かった！？」

雅「まあな、刈愛と真正面から殴り合い、片方の制限を外した刈愛の攻撃を受け止め、さらに刈愛の無意識の攻撃に気づき、立ち向かおうとしていたよ…嬉しそうだな“霧亜”？」

霧亜「やっぱり君は面白いよ刃鬼！！…ぼくももつと鍛えならなくちゃ！！」

ぼくは刃鬼と再戦できる時を楽しみにしてアジトに向かった。

ジンキ「む……ファ……どこだここは？」

僕が目覚めるとそこは神殿ではなく壁は真っ白で典型的な書院造の和室だった…ある1点を覗いて…

ジンキ「何故扉がないんだ？窓はあるのに？」

ぼくは左手を動かそうとしたとき違和感を感じ左腕を見るとギブスを巻かれ先端から指がちよつとしか出ていない状態であった。

ジンキ「ああ…萌香さんのお姉さんと闘って、鬼刃刀が折れて攻撃を食らったのか…イテテ…」

僕は痛む体に力を立ち上がり、素早く部屋の壁を触りながら隠し扉を探した。立花でもそうだが、こういう場所には必ずと言っていいほど壁が扉があるということが多い。ちなみに僕がこうして扉を急いで探すには訳があり、1つ目はトイレを覚えていた方が後々いいと思い、2つ目はみんなの様子を知りたいという事、3つ目はなんとというかこの部屋にいると変な感じがして嫌なのである。どんな感じかと紫色の蛇風にいうと「ああ…ムラムラする…」という感じである。

ジンキ「うゝんなんでこんな風に思うんだろ？というか僕は一体何日寝ていたんだ？」

と一人で呟き、「ああ自問自答、悲しいな…」と思おうとした時

みぞれ「お前が闘ってから2日立っているぞ。」

突如背後から声が聞こえ振り向くとみぞれちゃんが土鍋を持ってたっていた。

ジンキ「ウオツ！？ビックリさせるなよみぞれさん！！寿命が縮まるかと思っただよ！」

みぞれ「結局縮まらないのか」「まあ、もつと怖い思いをしてきましたから」なるほどでお粥食べるか？医者からの伝言もあるし、「

ジンキ「ああ、構わないよ。ですまないがトイレはドコ？」

みぞれ「ああ、それならその花が入っている花瓶を引くとトイレと風呂へ続く扉が開くぞ。」

ジンキ「おお、千九！！それとみんなの様子も知りたいから教えてね。」

「刃鬼、トイレ&飯&医者からの伝言を聞いている」

僕がお粥を食べ終わるとみぞれちゃんが近寄ってきて、

みぞれ「ジンキ…すまないな、私の為にお前は武器が壊れ、左腕も暫く使い物にならなくなってしまった…だがお前のおかげで里が救われたのも確かだ。それについてお礼を言う。」

みぞれちゃんは僕に向き直り

ジンキ「いや、みぞれさんが謝る必要はないよ。まあ一か月くらい左手が使えなくても鬪える…むしろ妖怪相手にはちょうどいいくらいかな？」

みぞれ「フッフ…流石はジンキだな。」

ジンキ「それ程でもないさ、でみぞれちゃん、」

みぞれ「ん？なんだジンキ？」

ジンキ「この部屋の名前ってなんだ？」

僕が尋ねるとみぞれさんは

みぞれ「ここは「秘密の白雪草の間」と言うんだ。この部屋の壁には花粉を塗りつけられ、畳にも少量の花粉を撒いてある。」

みぞれさんの言葉に僕は固まった…まさかこの部屋…！

ジンキ「ねえ、みぞれさん…まさかこの部屋って「ジンキ」おつと…！」

突然みぞれさんが抱き着き、僕はバランスを崩し、布団の上に押し倒され、

みぞれ「ん…」

みぞれちゃんがフレンチキスをしてきて、突然のことに僕はなされるがままに舌を絡められ、

ジンキ「ん！？…ムグツ！？」

キスが終わるとみぞれちゃんは今度は僕の足を凍らせた。

ジンキ「ウオオオオオイま、待て！何をする気だ！？「ジンキが悪いだぞ。」…へ？」

みぞれちゃんは僕の上に跨りながら

みぞれ「お前があの時にキスをしてから私はずっつと我慢をしてきたのだぞ。」

ジンキ「で、でも僕には瑠妃さんが「ジンキは瑠妃とヤツたんだってな」な、何故そ、それを！！？」

みぞれ「瑠妃を酔っぱらわせているときに瑠妃本人から聞いたぞ。」

ジンキ「うん…それは分かったが、何故服を脱ぎ始める！！」

みぞれ「子作りするのに服は邪魔だろ？ジンキは瑠妃とやる時は服を着たままやるのか？」

ジンキ「まあ、たまに…ってそうじゃなくて普通、彼女持ちと分かってやりませんよ！！」

僕はムラムラしている本能をザンキさんに殺さ…怒られる恐怖で何とか抑えながらみぞれちゃんを説得するが、みぞれちゃんは

みぞれ「前に言っただろ、ライバルがいるのなら奪うだけだと…それに寝取りもありだと…それにジンキにあいつに汚されたのを消し去ってほしいんだ…」

ジンキ「みぞれさん…（そうだね…怖かったんだもんな…）」

僕が少し真面目な顔で見つめていると

みぞれ「それに雪の巫女と母からも「やってしまいなさい」と言

われたからな。」

ジンキ「台無しだあああああ！…ってみぞれさんそこはって…  
アッー！！」

～翌日～

僕は少しげっそりしながらバスに乗り込もうとすると、

雪の巫女「刃の鬼よ、少しお待ちなさい。」

雪の巫女に呼び止められた。僕は振り向きながら

ジンキ「神殿を壊しすぎてすみませんでしたあああああああ  
あ！！」

僕達が闘った神殿は損傷が酷すぎて修復するのに時間がかかり、  
なおかつその7割がクロキの旦那、キョウキの兄貴と九曜さんのせ  
いなのだが、クロキの旦那たちは一足先にバイクを飛ばし、逃げた  
のである。

僕が土下座をしていると雪の巫女は

「雪の巫女」顔を上げてください。この里はあなたによって救われ  
たものなのですよ？」

ジンキ「いや、僕は何も…このように剣は折られ、左手もこの様  
です。」

と僕は言うが雪の巫女の手から予言の象徴のジャック・フロスト

が出てくると

ジャック「ククク、俺が予言していた里に訪れる一番の恐怖（刈愛）を退けたのはお前のおかげじゃないか？何故そう遠慮する？」

ジンキ「鬼というのは常に精進する心を忘れてはいけない。もし今回のことで満足していたらもっと高みへ…多くの人を守れない…僕はそう思っています。」

僕がそういつと雪の巫女の隣にいたつららさんが一歩前に出るとつらら「でも、みぞれを一度ならず二度までも助けていたいただきありがとうございます。」

と言い頭を下げた。するとジャックは

ジャック「お前に一つ予言をしておこう…俺が昨日見た予言だが、お前が変わった剣を持ち、銀の装甲に白き羽を身に纏い闘う姿が見えた…お前は何か心当たりはあるか？」

嘘はつけないと思った僕は

ジンキ「変わった剣というのは僕の先輩が持っている“アームドセイバー”だと思うが…僕には使えないはずですけど…」

ジャック「まあ、これはあくまで予言だから詳しいことは分からないがお前は大きな力を入れることは確かだな。」

ジンキ「そうですか…ジャックありがとうね。」

ジャック「気にするな…」

雪の巫女「では、猛士とはこちらで協力をお願いします。」

雪の巫女は礼をし、僕も礼をして折れた鬼刃刀を担ぎバスへ向かった。

ジンキ君が乗ったバスが去り、私は雪の巫女に話しかけた。

つらら「雪の巫女…」

雪の巫女「何でしょうか白雪つららよ…」

つらら「昨日、うちのみぞれがジンキ君と一緒に寝たそうです。」

雪の巫女「そうですか…あれほど強い方がみぞれと結婚すれば…」

つらら「大家族になることは間違いないですね。」

つ・雪「フフフフ…」

ジャック「こいつら、怖え…」

バスの中

ジンキ「ん!?(ゾクツ)」

白鋼（前の座席）「先輩どうかしましたか？」

ジンキ「いや、何でもない。少し背筋に悪寒が感じたただけだ。」

キリク（後ろの座席）「両隣のせいでは・・・？」

瑠妃（左隣）「みぞれさん・・・近すぎませんか？」

みぞれ（右隣）「フ、私はちゃん付けで呼ばれているのだ。お前より仲はいい…体の方もな。」

瑠妃「なっ！？道理でいないと思ったら…ジンキさん学園に戻ったら私と（ry）」

ジンキ「キリク君、胃薬を……」

キリク「本当に大丈夫ですか？」

ジンキ「鍛えていますから…シュッ！」

月音「今回も無理があると思うよ・・・」

心愛「義兄さん……」

萌香「アハハ……」

胡夢「なんでサキュバスの私より魔女の瑠妃さんとみぞれの方が早いの一！一！」

紫「ジンキさんだからでしょうか？」

胡夢「否定できないわね・・・」

第20話「雪女の里、そして闘い：後編」（後書き）

何か最後が色々ドロドロしたものになりましたが、第20話は終わりです！！自分はまた仕事の研修が始まりますので更新速度がかなり遅くなりますが、気長に待っていただけると幸いです・・・。

それでは次回までサラダバーじゃなくてサラバダー！！

第21話「小暮さん落ち込むの巻!」(前書き)

はい、久々の更新で内容も短くなっていますが、楽しんでいただいたら幸いです。

それではどうぞ!!

## 第21話「小暮さん落ち込む巻!」

第21話「小暮さん落ち込む巻!」

雪女の里の闘いから2週間近く経った。僕の左腕は刈愛の攻撃により“一応”骨が切れていくつつくの鬼の力をもってしてもまだ時間がかかるが、私生活についてはほとんど問題はない……ただ雪女の里で更に仲良くなっちゃたみぞれちゃんと元々仲良しの瑠妃さんが毎日争うように僕の部屋に来るのである。

一部を紹介すると…

### 登校時

瑠妃「刃さん、私と一緒に学園に向かいましょう!」

みぞれ「刃、私と二人つきりで共に行こうではないか。」

瑠・み「むむ……」

刃「三人で一緒に行きましょうよ……」 夕飯を作ろうとした時

瑠妃「刃さん、肉じゃがを作ったので食べませんか?」

みぞれ「刃、新作が出来たから食べて感想を聞きたい。」

瑠・み「むむ……」

刃「僕は両方食べれるから落ち着いて。」

お風呂に入っている時

ガラッ！！

瑠妃「刃さん、片腕が使えないから不便ですよね！！私が背中を流します。」（バスタオルだけ）

ザバア！！

みぞれ「刃、私が身体の隅々まで洗ってやろう。」（スク水）

瑠・み「むむむ……」

刃「すまないが、僕は後で明日夢兄さんの所で入る。」（洗濯板で洗濯中）

（就寝前）

刃「さて、そろそろ寝るか。」

ガチャ！

瑠妃「刃さん！！一緒に寝ませんか!?!」

スパンツ！

みぞれ「そんなやつより私と寝ないか？安心しろ。私が動くからお前は身を任せている。」

瑠・み「むむむむむ……」

刃「うん、二人とも帰ってくれ…モヒ安、二人をそれぞれの部屋に戻せ!!」

モヒ安「……ヒヤッハ　!!!」

瑠妃「ちょ、ちょっと!刃さ〜ん!!」

みぞれ「離せ…!」

~~~~~

僕は毎日押し掛けてくる二人にどう対処したらいいのか、とある人に相談する事にした。

刃「と言うわけで、何かアドバイスをお願いします……銀影先輩」

銀影「は?何でワイがお前の人生相談をしなきゃいけないや?」

刃「いや〜女性二人相手にどう対処したらいいのか、自分でもわからないので色んな女性に声をかけたり、遊んじゃっている銀影先輩なら何かいい考「刃、飯おかわり」あ、はいは〜い分かったよ。コミちゃん」

銀影「刃も何故わいを“助けない”んや!!煙が目に!」

銀影先輩がこう言ったのは、先輩はつい先程女子更衣室を盗撮していた所を公安に見つかり、逃げているときにザンキ先生によって捕まり、木にグルグル巻きにされながら吊されいて、僕はその見張

りを任されて朝飯前だったのでお釜と七輪を持ってきて、途中から手伝ってくれたコミちゃん（小宮碎蔵、更正済み）と一緒に朝ご飯（白飯に鯖の塩焼き、味噌汁）を食べながら見張りをしていたのだ。

刃「一応今食事中ですし、」

小宮「刃の飯美味しいし、」

刃・小「煙を浴びせるのがお仕置きですから」

僕達がそういつと銀影先輩はもがきながら

銀影「くそくそくそ煙が目に入って痛いわ、目の前でうまそうな匂いがするわ、相談する事が半分のろけやし、刃お前いつぺんくたばれ!!」

と文句を言ったがその瞬間銀影先輩の額に氷で出来たクナイと烏の羽が刺さり、背後に殺気を感じてその方を見ると

みぞれ「今、刃を馬鹿にしたな…?」（ハイライトがない目）

瑠妃「さて…少し話し合いませんか?」（黒い笑い）

銀影「ヒイ!?や、刃助けてくれ!!」

銀影先輩は必死の表情で助けを求めてきたが僕は雷光を構え、

刃「ある晴れたく昼下がりがく市場へと続く道く」

僕が歌うとコミちゃんは立ち上がり足を肩幅に広げ、

小宮「荷馬車がゴトゴト子牛を乗せていくよ」

歌い始め、銀影先輩の表情はドンドン青くなっていき、

刃・小「ドナドナドナ」ドナ」荷馬車に乗せ」て」 （敬礼をしながら）

銀影「薄情も」」ん！！」

銀影先輩は瑠妃さんとみぞれちゃんに引きずられながら去っていった。僕はコミちゃんと一緒に片付けをして別れた後、食後の一服をしていると猫目先生が来て、僕の方を見ると手を大きく振りながら、

猫目「あつ刃く」」ん、理事長がお呼びですよ」」！！キリク君も既に行つてま」す。」

刃「あつ、はい分かりました！」後銀影君は？」つい先程僕に文句言つたら瑠妃さんとみぞれちゃんに連行されました。」

猫目「ありやありや…仕方ありませんね。」

刃「では自分は理事長室に向かいます。シュッ！」

僕は右手で何時ものポーズをしてから理事長室へ向かった。

（理事長室前）

僕は呼吸を整えて（前のオンボロ自転車を片手の全力で運転した

ため)から

刃「松坂刃、入ります!!!」

僕はドアをノックして入ると中には警策を持った小暮さんと尻を  
押さえもがくキリクさん、そしてクククと笑っている理事長がいた。  
少しして理事長から訳を聞くと

小暮さん到着 キリクさんが理事長と給料の事でもめていた キ  
リクさんがタメ口で理事長に文句を言っていた 小暮さんの宝刀が  
炸裂!!!

というわけであるが、僕は小暮さんに

刃「小暮さん、キリクさんは僕の二つ下の学年ですが、実年齢は  
2000らしいですよ?」

と言うと小暮さんは警策を落とし、キリクさんに謝った: 土下座  
をしてまで、

小暮「年上に見えず無礼な事をしてしまいすみません!!!」

小暮さんがそう言うときリクさんも小暮さんが僕の大師匠と言う  
事を知っていたため小暮さんの前で土下座をして、

キリク「いえ、俺も来客に気づかずお見苦しい所をお見せしてす  
いませんでした。」

小暮「いえいえ……」

キリク「いえいえいえ……」

と土下座の繰り返しで話が進みそうになかったので、僕が二人を止め、

刃「小暮さんは一体どうしたのですか？報告はいつもしていますし、雪女の里の件はおやっさんがやってくれるそうですし……化け狐の事ですか？」

僕は真面目な表情で小暮さんに尋ねた。化け狐は戦国時代の書物に乗っていた魔化魍の配下にいる存在で大した強さではないが何故雪女の里に現れたのか、それが心配で仕方なかった。

しかし僕の言葉に対し、小暮さんは手を顔の前に出して横に振りながら

小暮「それも気になるが、今日は3つ要件があつて来た。まずは」

すると小暮さんは警策を僕に投げつけてきて、僕は慌てて取ると小暮さんは

小暮「刃……お前、瑠妃さんという方がいながら浮気とはどういう事だ。しかも婚約もしたそうじゃないか……!?!?」

刃・キ・理「……ブツ……!?!?」「……」

小暮さんの一言に僕達は盛大に吹き、とつさに理事長とキリクさんは

理事長「まあ、待ちたまえ、小暮さん」

キリク「これには雪女の里の策略が……」

とフォローを入れてくれたが、小暮さんは予備の警策を取り出し、

小暮「ええい、言い訳は聞かん！！往生せい！！」

ババババババシーン！！

数分後、理事長が詳しく話してくれたおかげで誤解は解け

小暮「大変だったな…刃」

刃「いえ、気になさらないで下さい。断りきれなかった自分にも責任はありますので…」

キリク「刃先輩…尻をさすりながら言ってもカッコ良くないぞ。」

刃「いつもより威力が2倍だったから…いって~~~~で残りの2つはなんですかっ！？」

僕はゆっくりとソファーに座り、尻に痛みが走りながらもキリクとした顔で尋ねた。小暮さんは僕を真っ直ぐ見つめ、

小暮「2つ目は…刃、お前今まで嘘ついてきたな？」

刃「嘘？…何のことですか？僕は今まで小暮さんに嘘をついた覚えはありませんが？」

すると小暮さんは大声で

小暮「お前は今までアームドセイバーを使えないと言ったが、その理由が未熟だからといった…」

小暮さんの声の大きさが少し小さくなり、

刃「え？だってこの前駄目でしたし、僕はヒビキさん程鍛えていないからそうですよね？まさかもっと重大な問題が！？」

僕は心配になり慌てると小暮さんは笑顔になって

小暮「いや、その逆だ！！この前の波動を調べたらお前の波動が複雑で更に強すぎて、あのアームドセイバーでは使えない！！お前はどこまで私を驚かせてくれるのか！！」

小暮さんの喜びように僕は顔が固くなりながら

刃「は、はあ…でそれがどうかしましたか？」

小暮「簡単な話だ。お前専用のアームドセイバーを作る！！今度はこのうちの理事長の知識も使ってな！！フフフッ」

理事長「私も鬼の最強武器を作ってみたいのでな。クククッ」

二人は不気味な笑い方をしていたが、

刃「でも、僕はまだ必要」「拒否権はない！？」「……ファイズ」

小暮さんは笑い終えると笑顔のまま

小暮「で、刀の部分に鬼刃刀を使いたいのだが出してくれないか？」

小暮さんはそう言った瞬間、事情を知っている僕、キリク君、理事長は黙り込み、理事長は刀が入った袋を取り出し中身を出した。中身を見た小暮さんは

小暮「……馬鹿なorz」

と言い落ち込んだ。

刃「こ、小暮さん！？お気を確かに！！」

キリク「そ、そうだぞ！アナタの武器で刃先輩の命が助かったのです！」

僕とキリクさんは小暮さんを励まそうして、理事長も

理事長「まあ、君の腕ならそれを直す、または新しく作れるだろう？」

と言ったが、小暮さんは

小暮「無理なんだ！鬼刃刀は私が一から作ったのではなく、猛士の過去の資料にあった作り方を参考に作り、資料も途中から文字がかすれていて、本来の半分程の強度もなかったんだ……私は不良品を渡したという事になってしまったんだ……すまない。」

と小暮さんはため息をつき更に落ち込んだが、その時キリクさんが

キリク「ん？俺ひよつとしたらその刀を作った人の名前知っているかも……」

刃・理・小「「ナ、ナンダツテ　！！？」」

キリクさんの一言に皆は轟鬼じゃなくて驚き、胴上げをした。その後キリクさんが名前を思い出すまで保留と言うことになり、鬼刃の代わりの音叉をもう一本貰う事で小暮さんは私用を済ませて帰っていった。

～その日の夜～

僕は寝ようとした時、携帯に着信が入っている事に気づき、

刃「あれ？えっと…兄貴からだ、何だろう？」

携帯の通話ボタンを押して耳に近づけると、

キヨウキ「ジンキ！！もげて刺されて爆発して死ね！！」

刃「兄貴…どどど、どうしたのですか！？」

僕がそういうとキヨウキの兄貴は何か言おうとした瞬間、

ピュピュッ…！

キヨウキ「グハッ！？」

ドサッ

音撃管の発射音と携帯の落ちる音が聞こえ、少ししてから

アマキ「あゝ、ジンキ聞こえている？」

ジンキ「あ、姉御！一体何があったんですか！？兄貴の狂いようがハンパなかったですが！？」

僕がそうアマキの姉御に尋ねると

アマキ「この前雪女の里でみぞれちゃんでしたか？彼女と仲良くなったよね？」

刃「はい…そうですが、ま、まさか！？」

僕はその時嫌な予感がして、その予感は的中した…

アマキ「ついさっきまでそのキスシーンを立花の特大スクリーンで見てた。ちなみにイブキさんとトドロキさんは顔を真っ赤にして気絶、エイキさんは自棄酒を始めたわ。」

刃「ええゝ、で映像提供者は誰ですか？あの時鬼の皆は闘っていたわけですから…」

アマキ「うん、小さい女の子の…紫ちゃんだよ？小暮さん、魔術を教えて貰ったついでにその映像ディスクを貰ったらしいって、」

刃「そうですか…それでは失礼します。」

アマキ「うん、お休み…寝首をかかれないように気をつけてね。」

刃「あっ…はい、気をつけます。」

僕は電話を切ると、日本の音叉を剣に変えて、

刃「紫ちゃん、覚悟せいやあああ！！」

と叫び、寮を出て紫ちゃんを追いかけるとき、明日夢兄さんに見つかり叱られた。

第21話「小暮さん落ち込むの巻!!」(後書き)

善宗「今回は猛士報告はお休みさせていただきます。」

ジンキ「オイ!! いいのかそれで!？」

善宗「別に今回は報告することないでしょ？」

ジンキ「ま、まあ確かに…小暮さんも来たし…内容は向こうも把握しているからね。」

善宗「それより瑠妃さんのヒロイン回を書かなきゃ…感想では一回だけ心愛がヒロインをしていると書かれ、みぞれも雪女の里編で立派にヒロインしてたし…このままだと瑠妃が色々と可哀想な事になっちゃうよ…。」

ジンキ「作者…急いでやれ!!」

善宗「急いでは無理かもしれないけど、とりあえず頑張ってみるよ…。」

ジンキ「よろしい!」

善宗「それでは次回までサイナラ。」

第22話「ミッション イズ パースデー 瑠妃さん」(前書き)

「ちょっとしたおふざけ」

ジンキ君

鬼に姿を変えて人助けをする、その男の人と出会ってからの中で、  
何かが変わってきました。

そんなある日、俺が目覚めると刃君からメールが来ていた。一体  
何だろう？

## 第22話「ミッション イズ バースデー 瑠妃さん」

第22話「ミッション イズ バースデー 瑠妃さん」

ある日俺達新聞部部員全員は刃に呼び出され、新聞部部室に集合すると、暗い部屋の真ん中で刃君は机に肘を置き、両手を口の前で組んで

刃「皆さん、待ってました。」

月音「刃君、俺達に用事ってなんなの？」

みぞれ「瑠妃と喧嘩したのなら私の物になれ。」

胡夢「ふざけた事言わないの!!」

みぞれ先輩の一言に胡夢先輩はポカッと頭を叩いたが、刃先輩はそれを無視して俺達に顔を向けて

刃「いや実は、君達にお願いがあつて…」

その言葉を聞いた瞬間、俺と他の一年の皆は直ぐに窓の外を見た。

キリク「明日…雪降らないよな…」

白鋼「いや、大雨かもしれない…」

心愛「槍かもしれないわね…」

銀影「刃だけに火炎弾かもしれないな」

刃「君達、何気に酷いね…お仕置き」

ゴンツ！！ガンツ！！ペシツ！グサツ！！

俺と白鋼は刃先輩の拳を心愛はデコピンを銀影部長は雷光を頭にぶっ刺され苦しんでいると月音先輩が

月音「まあ刃君って何でも一人でこなしちゃうからね…」

紫「戦闘がからんでいる事以外なら任せて下さいですう。」

先輩達がそう言い、刃先輩は立ち上がり

刃「では、皆に聞きます…この中で今瑠妃さんが欲しい物知っている人…挙手！！」

シーン…

刃先輩の一言に俺と白鋼は呆れ、他の皆はポカンとしていた…後、部長は血を流しながら倒れていた。

白鋼「帰るか……」

キリク「俺も…」

俺達がそう言い出口に向かうと

バキツ！！ガシツ！！

刃「ま、待ってくれ！！ふざけているかも知れないけど、真面目

な気持ちで聞いているんだよ!!」

刃先輩がギプスを壊して俺達の足に掴んできたが、

ギリギリ!!

と凄い力で掴んできて

白鋼「痛い痛い!!話聞きますから!!」

キリク「刃先輩、それ以上力を入れるとこっちが折れる!!」

刃「あつ、すまない…慌て過ぎた。」

刃先輩が手を放すと、萌香先輩が

萌香「瑠妃さんの欲しい物を聞くことは、つまり誕生日プレゼント?  
ト？」

萌香先輩がそう言うと刃先輩は立ち上がり、頬を軽く搔きながら

刃「うん、そう言う所だな…ふと思いついてみたら、瑠妃さんは僕のために色々な事してくれたけど、僕からは何もしてないから…何かプレゼントしようと思って」

刃先輩は窓の方へ歩きながら言うと胡夢先輩が首を傾げながら

胡夢「あれ?でも瑠妃さんから誕生日の事なんて聞いたことないし、第一刃君の方がいつも一緒に行動しているから詳しい筈でしょ?」

みぞれ「しかし、最近は瑠妃は学園で刃は公安と人間界での仕事があるから碌に喋っていないからな……」 胡夢先輩がそう言うと刃先輩は肩を落としながら

刃「実は…瑠妃さんは自分の誕生日を覚えてないんだ……。」

全員「……………?!?」「……………」

その一言に俺達は驚いた。刃先輩は続けて

刃「みぞれちゃんと一年以外の皆なら知っているけど、白鋼君達に教えるけど……。」

刃先輩は俺達に瑠妃さんと出会った時の事を話してくれた。瑠妃さんが人間を恨んで復讐しようとしていたこと、刃先輩が瑠妃さんを止めて保護した事、お館様の事、そして刃先輩が大怪我をして止めた事、そして病院で起きちゃった告白……最後はいらなかったな……しかし

心愛「義兄さん!!私頑張って手伝うよ!!!」

心愛(と肩に止まっているコウモリ)が大量の涙を流しながら刃先輩の手を掴んだ。

刃「流石我が義妹よ!!!」

お互いの肩に手を置き換え、見つめあうと

月音「まあ、俺達も瑠妃さんにはいつもお世話になったし……。」

萌香「私達も手伝うよ。」

胡夢「私にドーンと任せなさい!!」

みぞれ「刃の頼み事だからな…任せろ」

白鋼「まあ、断つても参加させるつもりでしょうからやりますよ。」

刃「皆…すまない。」

こうしてミッションイズバースデーが発動された。

「ミッションその一瑠妃さんの欲しい物を知ろう!!担当赤夜萌香&黒乃胡夢」

萌香さんと胡夢さんには部室で待機してもらい、僕達は隣の部屋から隠しカメラで様子を探る事にした（銀影部長が所持していため没収）僕は二人に渡しておいた通信機（ザンキさんの私物）を使い話しかけた。

刃「二人共、そろそろ瑠妃さんが新聞部の記事を持ってきます。」

萌香「う、うんわかった。」

胡夢「不自然にならないように頑張るわね!」

刃「お願いします!」

そうして通信を切ると同時に瑠妃さんが入ってきた。少し部活して萌香さんが話しかけた。

萌香「ねえ、瑠妃さん」

瑠妃「何ですか萌香さん？」

萌香「今欲しい物って何かあるの？」

萌香さんがそう言っていると瑠妃さんは少し考えて手をポンと叩くと

瑠妃「そう言えば下着を買おうと思ってました。」

萌香「し、下着…ですか？」

瑠妃「はい！！最近胸のあたりが苦しくなってきました……」

胡夢「確かに最初の頃より大きくなっているわね。私と同じ位になるんじゃない？」

胡夢さんが瑠妃さんの胸を凝視していると

瑠妃「やはり愛の力ですね！！刃さんは明日休みだったら「この先は色々」」

胡夢「うわっ、凄い事するわね。」

萌香「あわわわわ……」

別室では……

心愛「……………（冷たい視線）」

白鋼「……………（距離を少しずつ開けている）」

紫「ふむふむ……………（鼻血を流しながらメモ）」

月音「……………（鼻血を流し気絶）」

キリク「先輩流石の俺も引くわ……………」

みぞれ「私も大きくなるのか……………」

周りの視線が痛い、凄く痛い。僕はマイクで

刃「胡夢さん……………話を变えて……………」

僕がそう言つと胡夢さんは

胡夢「瑠妃さんと刃君の仲が良いのはわかったけど、刃君からプレゼントしてもらつたら嬉しい物って何かある？」

胡夢さんが多少無理やり話の流れを変えると瑠妃さんは

瑠妃「私は刃さんが傍にいてくれるだけで充分です。それ以上何かを望むのは欲張り過ぎと思つてまして……………もし刃さんが私に贈り物を上げてくれるのならなんでも構いません。」

萌香「瑠妃さん……………」

胡夢「羨ましいわ〜後私の母さんが迷惑をかけてすみません!!」

別室では…

刃「瑠妃さん…」

心愛「健気…」

キリク「なのにドM…」

白鋼「それを言うな…」

銀影「そうか…さて」

銀影先輩は椅子から立ち上がるとカメラを片手に

銀影「瑠妃さんの新しい下着姿を撮らなくてはあかな!!」

とドアに手をかけた瞬間、

白鋼「逃がすか!!」

白鋼君が先回りして銀影先輩の顎を蹴り上げ、

みぞれ「とりあえず…」

キリク「凍って頂こう…」

みぞれちゃんとキリク君が凍らせ、

心愛「えい」

心愛ちゃんが頭の部分の氷を壊したのを見ると僕は右手に光の力を込めながら、

刃「俺のこの手が光って唸る お前を倒せと輝き叫ぶ！ 必殺！  
シャアアアイニングウ フィンガアアアー！！」

銀影「ギャアアアアアア！！声的には俺の技アアアアア！！」

銀影先輩の頭を燃やした後、

刃「とりあえず、アクセサリーでも作るか…」

白鋼「まあ、それが普通でしょう。」

紫「プレゼントで別れかける事は普通は無いですう」

皆はそう言うが、僕の先輩誕生日プレゼントに鰹送った人いたんだよ。

刃「さて、気を取り直して次は会場の確保なん」その心配はいらんぞ！「！！？」」

僕は通信機を外して外に出ようとする壁がめくれ、

ザンキ「話は聞いた！！」

更に天井の板一枚が外れ、

九曜「刃さんが困っていたら手伝います!」

そして部屋の窓から

明日夢（螢糸さんに抱きかかえられながら）「会場とかは僕達がセッティングするから」

最後に部屋の扉が開き、

理事長「君はプレゼントでも作りなさい。」

と言い、全員去っていったが、

刃「逆に心配だよ…」

この後新聞部の皆は瑠妃さんに送るプレゼントを作りに行ったり、買いに行ったりと解散していった。

瑠妃「はあ…」

最近皆さんの様子がおかしく、刃さんにも聞くこととしても仕事が入り話が聞けなかった…。

土曜日の午後私は理事長に呼ばれ、照明の様子がおかしいので講堂に向かうよう言われた。私は講堂へ向かう途中で

刃「おっ、瑠妃さん」

瑠妃「刃さん！今から講堂に？」

刃「ああ、照明の様子が悪いからって聞いてね……一緒に行く？」

瑠妃「はい、」

私は刃さんと一緒に講堂に向かっていくとき刃さんが

刃「おかしい…予定では部室で行うはずなのに…」

と呟いていたが、私が訪ねても「なんでもない」で済まされてしまった。私達が講堂について私が扉を開けると同時に、

九曜「放てい！！」

モヒ安「……ヒヤッハー！！」「」「」

ボンボンボン！！

モヒ安の方々がバズーカ型のクラッカーを鳴らし、私がポカンとしていると新聞部のみんなが近づき

月音「瑠妃さん……」

萌香「お誕生日……」

新聞部員全員「……」おめでとう……」「」「」「」

白鋼「って言う解釈でいいのかな？」

キリク「って白鋼!!」

心愛「いい所で何を言っているのよ！」

刃「また10時間連続イクササイズするよ!!」

白鋼「すいませんでした！」

みんながわいわいと騒ぎ始めたとき私の背後から理事長が

理事長「ふふふ、成功したようだな・・・」

瑠妃「理事長、これはいったい何なのですか？」

理事長「見てとおり君の誕生日パーティーだよ・・・刃君が君の為に考えたものだ。」

瑠妃「刃さんが・・・？」

私がそう呟くと明日夢先生が

明日夢「瑠妃さんって自分の誕生日を覚えてないらしいから刃君がやるうと言ったんだ。」

ヒビキ「本当なら刃と瑠妃さんが始めてあつた日にやりたいけど俺や刃といった鼓の鬼は夏は大忙しなんだよね」

刃「そうそう・・・」

そのとき場の空気が凍り、刃さんがヒビキさんに震えながら指を刺し、

刃「な、なんでヒビキさんがここに……？」

という講堂内に

ドン……

和太鼓の響き……舞台の幕が開くとそこには鬼の姿の威吹鬼さんに斬鬼さん、鋭鬼さんと鬼の皆さん総勢9名の鬼の姿があり、真中には大きな太鼓が二つあり、ヒビキさんは刃さんの肩の手を置くと

ヒビキ「いくぞ、刃」

刃「やるのですか……ハア」

ヒビキさんの言葉に刃さんはため息をすると音叉を鳴らし、舞台に向かいながら変身し、太鼓の前に立つと音撃棒を構え

刃鬼「皆さん行きます！」

響鬼「音撃打……」

鬼全員「豪華祝宴」の型！！」

そう皆さんは言う就和太鼓を叩いていく、新聞部や公安の人達はただ静かにそれに耳を傾け、途中からは刃鬼さんは輝に、響鬼さん

は紅に変わっていき、最後は

刃鬼・響鬼「ハア〜…ハア!!」

ドン!

息の合った連打で終わり、皆からは拍手が飛びその後月音さん、白鋼君、キリクさんからは花束、萌香さんからは絵を、心愛ちゃんと胡夢からはお菓子を、紫ちゃんからは惚れ惚れくん、みぞれさんからは彫像をもらい、刃さんが近づき

刃「僕からは「宴会じゃあああああ!!」ええええええええええええ!!?!」

刃さんが何か言おうとしたとき

ザンキ「全員思う存分騒げえええ!!」

鬼「「「「「おおおおおおお!!」」」」」

トドロキ「料理もいっぱいあるっすっすっすっすっすっすっす!!」

エイキ「今日だけは未成年でも酒を飲めやああああ!!」

理事長「今日一日は多少暴れても許す!!」

公安「「「「「おおおおお!!」」」」」

九曜「我々も騒ぐぞおおおおお!!」

モヒ安「……ヒヤッハアアアアア！！」「」「」

この後は大宴会となった……刃さんはエイキさんに引っ張られていつてしまった。

刃「ふう、終わったか……」

僕は父さん、小暮さんを初めとした酔っ払ってぶっ倒れた人達に毛布をかけ、熱くなつた身体を身体を冷ましに屋根の上にと

瑠妃「あつ……」

瑠妃さんがいた……僕はすぐにあたりを見渡し、誰もいないことを確認すると（みぞれさんはアマキの姉御に頼んで酔いつぶしてもらつた。）瑠妃さんに近づき、

刃「隣いいかな？」

瑠妃「はい、いいですよ。」

僕は隣に座るとポケットに入れていた小さな箱を取り出し

刃「さっきは渡し損ねたけど……はいこれ」

といい瑠妃さんに渡した。瑠妃さんは

瑠妃「あ、ありがとうございます・・・開けてもいいですか？」

刃「いいよ、瑠妃さんのプレゼントだからね構わないよ。」

瑠妃さんは箱を開けて中身の鴉の形のネックレスを取り出した。石は理事長の手伝いでオニキスを譲ってもらった。金属は霧亜と戦った時に折れた音叉の破片を利用して作った。すると瑠妃さんは

瑠妃「・・・・・・・・グスツ」

目に涙を溜めていた。僕は

刃「はわわわわわ・・・・・・・・るるるる」瑠妃さん、気に入りませんでしたか！？やっぱり鬼全員の太鼓が駄目だったのか！？昔僕もやられて少し引いたけど嫌いにならないでください！！」

僕がそう言うと瑠妃さんは涙をぬぐい、

瑠妃「い、いえ、そうではなく嬉しくて・・・刃さんは公安や新聞部、魔化魍相手に忙しいのに私のためにこういうことをしてくれて・・・私って刃さんにお世話になりっぱなしですね。」

瑠妃さんがそう言うと僕はつい

刃「それは違うよ。」

といった。さらに続けて

刃「新聞部の仕事でも、公安の仕事でも鬼の仕事でも瑠妃さんがサポートしてくれているからできるわけであって、お世話になって

いるのは僕のほうだよ。」

瑠妃「そんな、遠慮しなくても・・・」

刃「いやいやいや・・・」

瑠妃「いやいやいや・・・」

僕たちがそういいあっていると背後から

???「まったく仲が良いなお前たちは・・・」

僕たちが後ろを向くとなぜか裏萌香さんがキャンパスを二枚持って立っていた。

刃「な、なんでそっちの萌香さんが？」

裏萌香「宴会の途中で月音が誤ってロザリオを外したのだよ。」

瑠妃「なるほど・・・でどうかしたのですか？」

瑠妃さんがそういうと裏萌香さんはキャンパスを一枚を僕に、もう一枚を瑠妃さんに渡して

裏萌香「まあ、お前ら二人にプレゼントだ・・・その絵を見てもろ。」

僕達はキャンパスを見ると瑠妃さんのほうには窓枠に腰をかけて空を見上げる瑠妃さんが、僕のほうには窓の近くに立ち、空を見上げる僕の姿が書かれていたが窓の形、空の雰囲気似ていて窓もお

互い半分しか書かれていなく首をかしげていると

裏萌香「お互いの絵をくつつけて見る。」

僕達は言つとおりになると一枚の大きな絵ができた。

刃「おお・・・」

瑠妃「なるほど・・・」

僕たちは絵を見ていると裏萌香さんは

裏萌香「最初は瑠妃だけを書くつもりだったのだがな、隣にお前（刃）が立ってないと不自然に感じてな、表の私がお前も書いたのだよ。」

刃「ありがとうございます・・・」

裏萌香「お礼は良いよ、それと私は寝るよ。お前らも早く寝て明日もがんばれよ。」

瑠妃「はい・・・」

裏萌香は部屋に戻って行くと僕と瑠妃さんはディスクアニマルを使って絵を運んで貰うと

瑠妃「刃さん…これからも宜しくお願いしますね。」

と頭を僕の肩に乗せて尋ねてきたので

刃「勿論さ…」

と僕は答え瑠妃さんを抱き寄せて、二人で夜の空を見上げた。

瑠妃のパーティーから数日経ち、新たな問題が起きた。それは…

ザンキ「刃と瑠妃が所構わずイチャイチャするとはな…」

みぞれ「悔しいな…」

胡夢「私、愛に生きる妖怪のはずなのに…」

ザンキ「しかも…」

俺達が横を見ると

瑠妃「刃さん、ア〜ン」

刃「ア〜ン」

二人が甘い空間を広げ、色々辛いしかも…

猫目「ザンキさん、私達も」

静もやるうとするが生魚丸々はちょっと…そついや昨日電話越し  
でエイキ泣いてたな

## 第22話「ミッション イズ パースデー 瑠妃さん」(後書き)

今回の猛士報告

甘い……

byザンキ

ヒビキ「なにこれ？」

みどり「聞いた話では瑠妃ちゃんとジンキ君がイチャイチャして  
いるって……」

イブキ「イチャイチャねえ……」

トドロキ「仲良しなのは良いことッス。」

日菜佳「(トドロキさんとイチャイチャしたいのにな)」

香須美「(イブキ君とは…まだ無理ね。)」

エイキ「ウワアアアアアアアアアアン!!」

本日の金言「仲良しな事は良いけど程ほどにね? byおやつさ  
ん」「修行はちゃんとしろよ!! by小暮」

第23話「鬼のような修行…?」(前書き)

遅くなつてすみませんでした!!今回は原作の月音が鞭を持って修行する所ですが、原作通り書くと色々と危ないので少し減らしてみました、楽しんで頂けると幸いです。

最後に種地先生がこの作品の外伝を書いているので、そちらも宜しく!!(cv:大塚 芳忠)

## 第23話「鬼のような修行…?」

第23話「鬼のような修行…?」

どうも仙堂紫ですう〜今私はある意味とても珍しい光景を見ているかもしれない。それは……

刃（血涙）「待てや〜〜!!!オレハクサマラムツコロス!!!」

ボンボンボンボン!!!

刃さんが烈光を使い、月音さんに烈光弾を放ち、月音さんは

月音「わ〜待った待った!」

で刃さんに待って貰うように叫ぶが、

刃「断る!!!ハア〜…ハッ!!!」

刃さんがひととき大きな光の弾を作り、月音さんにむかって放った弾は月音さんのすぐ後ろに落ちて、爆発して

月音「ぎゃ嗚呼ああアアアア!?!」 月音さんは吹っ飛びました。どうしてこうなったかと説明するには少し時間を遡り……

〜約2時間ほど前：放課後〜

私と萌香さんは朝からいない月音さんを探していた。するとくるむさんとみぞれさんがきて

胡夢「…！モカ、そっちはいた？」

萌香「ダメ…くるむちゃん達も？」

胡夢「どうしたんだろう？登校中にぷっつりと姿を消して」

紫「放課後まで連絡一つないなんて…」

萌香「どこに行ったの…つくね…」

皆が心配そうな顔をしていると

刃「あ、皆ここにいたのか…！」

白鋼「先輩方なぜここに集まっているのですか？」

刃さんと息を切らしているキリクさんを連れて、反対側からはこっこ先輩と一緒に来た白鋼君が合流してきた。刃さんは

刃「すまないが、誰か瑠妃さんを見なかったか？」

と言うつくるむさんが

胡夢「いや、見てないわ。それと刃君もつくねを見なかった？」

刃「いや全然…」

刃さんは手を左右に振り、数秒止まった後



刃「理事長：今やっている修行のプランはなんですか？」

刃さんがたずねると理事長の方に止まっているリリスが

リリス「え〜っと確かプランDだった気がするよ。」

理事長「これ、リリス！！」「へえ…」「ハッ！！？」

リリスに注意した後理事長は刃さんの方を向いたが、刃さんの顔はまさに鬼のような顔（戦鬼じゃなくて普通の鬼）で

刃「理事長：修行の場所は“あそこ”で間違いないですよね？」

音叉を突きつけながら聞くと理事長はうなづきそれを見た刃さんは音叉を降ろし

刃「皆急ぐよ！！僕の後についてきて！！」

刃さんは走り出し、皆その後続いた。（なぜか白鋼君はこっこの先輩をお姫様抱っこしながら）移動しているときに刃さんが修行の内容を話してくれた。

修行の内容はつくねさんに特殊な魔具を持たせて、その魔具がいかなる封印を一時的に解除し、妖力の力を引き出させるアイテムでそのままだどつくねさんが危険なので、瑠妃さんがアースとなって余計な妖力を流して闘う修行らしいですが・・・

刃「瑠妃さん曰くビリビリしていらしい…が場所が絶滅の危険性のある魔物などを保護する魔物の楽園なんだよ！！僕はいつも修行で行くけどあそこはまだ月音君には荷が重い！！」

白鋼「そんな事より、いつもそんな場所で訓練している先輩が凄  
いよ!」 刃さんはそっぴい急いで魔物の樂園に扉を開け中に入ると

ヒュパアン!!

??「ああん!」

ヒュン!!

??「ひゃん!」

鞭の叩く音と艶声が聞こえ

萌香(赤面)「ええええ!?!」

胡夢(赤面)「なんでこんな声が!?!」

白鋼(鼻血)「エロい・・・」

こっこ(赤面)「はわわわわ・・・」

皆は顔を赤くしているなか(私は涎をたらしていましたが何か?)

刃さんだけ

刃(怒)「これは瑠妃さんの声…月音めえ…ナニをしているんだ  
よ!?!」

胡夢(赤面+怒)「そうね…急ぐわよ!?!」

と刃さんは音撃棒をくるむさんはこうちゃんを構えて、声の方へ

走っていき

瑠妃「ああああああっ!!!」

頬を真っ赤に染めて、大きな声を出してた瑠妃さんを見つけ、胡夢さんはこうちゃんを釘バットにして

胡夢「何をやってんのよおあんたちはあああああああああ  
あ!!!!!!」

くるむさんが瑠妃さんを打ち上げ、瑠妃さんが地面に叩きつけられると

胡夢「…つたく油断もスキもない!一番まともそうな瑠妃さんが一番のド変態なんだから!」

刃「だが僕はそんな瑠妃さんが好きなんだよね!!」

キリク「はい、そのろけない!!」

白鋼「こっこ先輩大丈夫ですか?」

こっこ「だ、大丈夫だよ(白鋼君もああいうプレイ好きなのかな?)」

胡夢さんはバットを構え魔物のほうを向き、

胡夢「事情は聞かせてもらったわ、まずは邪魔な魔物を…」

と言おうとしたとき刃さんが

刃「その必要はない…それだと月音君の修行にならない。」

刃さんが音撃棒を腰に戻してつくねさんを見ていた。さらに瑠妃さんが

瑠妃「それにさっきからビリビリが私にこない…」

私達は月音さんのほうを向くとつくねさんの左手に妖力が圧縮されて集まり、実線経験が豊富なキリクさんと白鋼君が

キリク「凄い量だな・・・」

白鋼「まさか修行一日目でこれほどの効果が・・・」

少しして魔物はすべて倒されて（気絶ですけど）、つくねさんが立ち上がり

月音「瑠妃さんありがとう・・・ずっと俺が欲しかった物がここにある…さっきそれを一瞬掴めそうなのがしたよ…」

瑠妃「そ、そんなことはありませんよ・・・／＼／」

と瑠妃さんに言い、瑠妃さんの顔も照れて少し赤くなっていたが・・・

ポキポキ・・・チャキ

つくねさんはハツとした顔になり、音のしたほうを振り向くと

刃「月音……貴様人の彼女を堂々と口説くとは言い度胸じゃないか……」

月音「刃君!!?その口説いたわけじゃあ……」

刃「君は口説いたつもりではないかもしれないが……」

キリク「傍から見ればどう見ても……」

白鋼「口説いていたとしか見えないが……」

そのとき

ブチンッ!!

血管が切れるような音がして烈光の先端の鬼石に光が集まり、

刃「月音……絶望が……お前のゴールじゃあああああああああ……!!」

月音「ヒ、ヒイイイイイイイイイイイイ!!」

刃「ヒイイイイハアアアアアアア!!」

というわけです……

僕は半分焦げている月音君に近づき

刃「月音君、

これに懲りたら二度とあんなことをするなよ・・・今度は倍の数で行くからな!!」

月音「はい、気をつけます・・・ガクッ」

月音くんが気絶すると僕の携帯に着信が入り携帯を開くと立花からだった。僕は通話ボタンを押し、

刃「はい、ジンキです。」

と出るとおやっさんからだった。

おやっさん「あ、ジンキ君、わたしなんだけど…」

刃「どうかしましたか？」

おやっさん「いやね、キョウキ君がヤマビコとツチグモにやられてね、姫と童子、それとツチグモは倒したらしいけど、ヤマビコの方を取り逃がしたらしくてね、しかもいた場所が君の学園につながるトンネルの近く、更にヒビキ君を始めとした他の鬼も忙しくて行けないから頼むよ。」

おやっさんはそう言ったが

刃「行きたいのは山々ですが、ザンキさんが今職員の方で忙しく、足がないのですよ。自転車も理事長から借りているやつ（油が切れ

ているぼろ自転車) しかないので難しいですし…」

僕がそう申し訳ない気持ちで言うとおやっさんは

おやっさん「あれ？ 理事長が君専用のマシンを送るってヒビキ君から聞いたけど、まだ貰ってないのかい？」

と言った僕が固まっていると黒服の佐藤さんが来てカンペで

理事長が呼びです。しかも至急だそうです。

僕は指でOKサインを作り、

刃「今から理事長の元へ行きますのでこれで、」

おやっさん「ああ、そう？ じゃ頼むよ。」

刃「はい、では」

僕は電話を切り佐藤さん(趣味は家庭菜園)の後についていくとガレージへと連れていかれ、

佐藤「理事長、刃を連れてきました。」

理事長「うむ、下がっていいぞ。」

理事長がそう言い、佐藤さんがガレージから出て行き、少しして照明がつき僕の前に大きな包みとそのそばに立つ理事長がいた。

刃「理事長、おやっさんから聞きましたが、僕専用のマシンをくれるそうです…」

理事長「ああ、君はまだ未成年だからコレを渡すかどうか迷ったが面倒くさいから今渡すよ。」

刃「面倒くさいって……」

理事長が覆っている布を除けると黒地に白のラインが入ったバイク：ヒビキさんが憧れていたバイク、CB1300 SUPER BOLD・ORがあつた。しかもよく見るとカスタマイズもされていた。

理事長「気に入ったかね？この白光びやくは？ベースになったバイクはよく君がヒビキ君と一緒にバイク屋の前で見っていたバイクをベースにしたよ。」

刃「ええ、まあ……でもコレ使えませんか？僕の年齢的に……（イヤツフウウウウウウー！）」

僕は白光を指差しながら言ったが、理事長はニヤリと笑うと

理事長「ああ、安心したまえ。それは学園内、もしくは近くの移動に使えたまえ。それに魔化魍は山奥に出るから別にいいだろう？と言つか早く乗って行きたまえ。」

刃「うーん、なんか納得しないけど行ってきます。シュツ」

僕は渋々白光に乗り（内心大喜び）、アクセルを踏んで陽海学園から現場に向かった。

白光の最高時速が凱火の二倍近くあるためか、ヤマビコは直ぐに見つけ、キョウキの兄貴があらかじめ姉と童子を倒していたおかげ

で楽に倒せた。

その後報告書の作成の為に、たちばなに行き給料を貰っていると日が暮れて、翌日が土曜日の為、たちばなで一晩父さんに抱きつかれながら過ごし、翌日父さんを蹴飛ばし、キョウキの兄貴のお見舞いに行つて昼頃に学園に戻ると……

バキッ！…ドスン！

裏萌香「今後お前から私に抱きつく事は許さん！！」

月音「す、すみません……」

ロザリオを付けた状態で顔が赤い裏萌香さんとクレーターの真ん中にいるジャージ姿の月音君の姿であった。

刃「どういうこと……？」

少しして瑠妃さんから事情を聞いた。萌香さんがベルモンドの力で裏萌香に変わり、しかも今朝、数千万以上するベルモンドを無断で持ち出した為、瑠妃さん達が追っていたが、裏萌香さんの目的が月音君に妖気探知の感覚を掴んで貰う為だったらしいが…

刃「全く…それならそうと僕が理事長、後キリク君に言っておけば良かったのに、理事長なら面白そうだから許すだろうし…キリク君と僕も理事長に通じているから弁護もできたのに……」

裏萌香「ふん、言わなくても気づいているはずだ。それにこっちの方が面白みがあるだろ？」

刃「いや僕はそう言うのはよくわからないな。さて…」

僕は白光から降り、ヘルメットをシートの上に置き、

刃「さて、じゃあ早速、修行やりますか？」

と僕がそう言うのと、

月音「え？今までののは……」

と月音君が言ったが、

裏萌香「勘違いをしているようだが、今までののは私がただこうして外出してみたかっただけだ。」

刃「月音君も激しい修行を予想していたでしょう？まあ今日は僕と萌香さんで今後の修行の計画を立てなきゃいけないから、今日は軽くで済ませるよ。後胡夢さん達もね。」

月音「え！？本当！？」

胡夢「しかも私達まで！！？」

こっこ「わ、私もですか？」

白鋼「先輩、落ち着いて下さい！そして俺の後ろに隠れない！！」

僕の一言に月音君は助かったみたいな感じの顔、胡夢さん達は驚き、こっこ先輩は涙目で白鋼君の後ろに回り袖を掴んで震えていた。

刃「あつ、こつこ先輩は修行に参加しないでいいですよ。出来れば救急係をお願いします。」

こつこ「そ、それぐらいなら…構いません。」

僕はこつこ先輩に少し離れて貰い、光鷲には救急セットを盗りに行って貰い、

刃「今日はえ〜つと、僕と萌香さんペア対残り全員で武器ありの組み手でもしますか？」

裏萌香「私は構わないぞ。」

僕の提案に裏萌香さんは頷いたが、他の皆は

胡夢「え？それはちよつと…」

みぞれ「いくら刃達が強くても、」

キリク「2対7で闘ったら、俺達の勝ちが決まったも同然…」

白鋼「無理があるのでは…？」

紫「しかも武器ありです…でもキツいかもしれないですう〜」

心愛「なんか燃えてきたわ!!」

瑠妃「私は出来れば刃さんに激しくやられたいですね…// //」

皆は反対の意見を言っていたが（一部違うが）、僕は音叉を取り出

しながら

刃「その点は安心してくれ…僕は輝で、手加減はしないから…何秒耐えられるかな？」（黒笑）

月音「ヒッ！！」

白鋼「積んだな……」

紫「こ、こうなったらヤケですう！！！」

ゝ組み手の様子は音声ただで送ります。ゝ

刃鬼輝「ハアゝゝ…ハッハッハッハッハッハッ、ハア！！！」

ドンドンドンドン！！

紫「きゃあゝゝ！！！！？」

胡夢「イヤゝン！！！」

裏萌香「ハアッ！！！」

ガスッ！！バキッ！！

キリク「ガハッ！？！」

心愛「お姉様ゝゝ！！！」

刃鬼輝「音撃斬「雷光斬震」！！！」

みぞれ「ウワッ!?!」

瑠妃「激しくていい!?!」

月音「まさかわざと技を食らいに行ったの!?!」

白鋼「テリヤアア!?!」

裏萌香「良い攻撃だな。だが無意味だ!」

ゲシッ!?!

白鋼「グハッ!?!」

刃鬼輝「オマケで音撃打「爆裂強打・輝」の型、テリヤアア!?!」

月音「ウワアアア!?!」

銀影「なんでワイまでエエエエ!?!?」(簀巻きされている所に音撃が決まる。)

九曜「ギヤアアア!?!?」(走って逃げている。)

刃鬼輝「あつ、すいません。ついつつかり!?!」

〜数分後〜

裏萌香「今日はここまでだ。」

刃鬼「明日もやるから覚悟していてね!」

月音「え〜〜〜〜!!?」

心愛「お、お姉様と義兄さんを同時に闘えた…我が生涯一編の悔い…あり…ガクッ」

白鋼「ま、まだまだ動ける」白鋼君は無理しちゃ駄目!!」「せ、先輩耳と尻尾を、触っちゃ…アッー!!」

キリク「…もう…いや…ガフッ」

みぞれ「ヤバい、刃にやられるのが癖になりそう…」

胡夢「…（返事がないただのサクユバスのようだ）」

銀影「なんでワイまで…オウフ」

僕達は転がっている屍を放置して（瑠妃さんは後で回収するつもり）、その場を後にした。

〜数分後〜

僕と裏萌香さんは今後の修行内容について話すことにしたが…

刃鬼「何故チェスをしながらなんだ？」

僕は中庭に机と椅子を置き、チェスをやっていた。

裏萌香「まあ私の気まぐれだ。」

刃鬼「それなら仕方ない。で修行の方針なんだけど、」

裏萌香「私の方は毎日手合わせをするつもりだが、どうだ？」

刃鬼「うーん、それも良いけど、月音君は君の力を持ってはいるけど、基本は人間だから、力を上手く扱う為に精神を鍛えないとね。」

裏萌香「別にしなくても良いのではないか？」

刃鬼「萌香さんは、月音君と2人つきりで修行したいかも知れないけど、「なっ!？」それだと力が暴走しちゃうかもしれないからね。少しだけ僕の方でやらせてくださいね。」

裏萌香「そ、そうか。」

刃鬼「しかし萌香さんも変わりましたね〜っと。」

僕がルークを置くと

裏萌香「ん、良い手だな。で、私のどこが変わったか？」

刃鬼「まず丸くなった…いや、優しくなったね。」

裏萌香「はっ!？な、何を根拠にそんな事を…」

刃鬼「最初の頃は視線だけで、こっこ先輩とかなら気絶させるほど鋭かったけど、今は優しい目をする事があるからね。」

裏萌香「そ、そんな事お前は知らないだろ。忙しいし、いつも闘っているからな。」

少し顔を赤くしながら裏萌香さんは言ったが、僕はニヤリと笑い、  
(萌香さんは分からないだろう…鬼の顔だし)

刃鬼「実は紫ちゃんと心愛ちゃんが、ディスクアニマルを使って、  
今までの記録を撮っていて…」

裏萌香「わ、分かったから、それ以上言うな!!!」

刃鬼「へいへい、分かりましたよ。それじゃ不服かもしれないませんが、最初の一週間は、僕の方で鍛えさせて貰いますよ。」

裏萌香「だから、私は構わないからな!!!」

とりあえず今後の方針を決めた僕達はチェス盤を見たが…

刃・裏萌「あ………」

今まではやっていて悲しくなるくらい裏萌香さんが圧勝していたが

刃鬼「とりあえず…チェックメイト?」

裏萌香「ま、負けたな…」

何故か今回は僕が勝てた…明日僕、死ぬのかな?

刃鬼「もしかして、かなり動揺してた?」

裏萌香「あ、ああ…しかもお前も強くなっているし、それだと表情が分からないからな。」

刃鬼「あ、なる程…じゃあ帰りますね。」

裏萌香「明日から頼むぞ。」

刃鬼「了解…シュッ」

僕は左手で何時もポーズをして、瑠妃さんを抱き上げて、そのまま部屋に戻って寝た。

今日から一週間の間、俺と一年生達は刃君の下で修行する事になったが…

月音「ねえ、刃君」

刃「どうしたんだい、月音君？」

月音「確認するけど、これ修行だよな？」

俺が尋ねると刃君は

刃「そうだけど、どうかした？」

刃君はそう言ったが、俺には修行とは思えなかった。何故なら…

心愛「あ~~~~」

白鋼「え~~~~」

キリク「い~~~~」

胡夢「う~~~~」

みぞれ「え~~~~」

九曜「お~~~~」

モヒ安A「あ~~~~」

モヒ安B「お~~~~」

なんで発声練習なんだ？刃君は刃君で警策を持っているし…

刃「月音君もやれい！！」

ベシーン！！

月音「痛！？」

そして一週間の間、刃君のよくわからない修行が続いたのであった。

## 第23話「鬼のような修行…?」（後書き）

今回の猛士報告

自分専用機…ヒヤッホ　　！！！！後、最高時速が凄すぎる！！

byジンキ

ヒビキ「いいな、俺が欲しかったやつなのに…」

イブキ「しかも、カスタマイズされているのか…羨ましいね。」

アマキ「最高時速は500キロを超えているそうです。」

トドロキ「そう言えば、ジンキ君は今までどうやって現場に向かっていたですか？」

おやつさん「基本はエイキ君やザンキ君の車に乗せて貰って、一緒に闘ってたね。」

日菜佳「たまに私や姉上がジンキ君を乗せて行った事もありましたね。」

香須美「でも、一度だけなんだけど…」

イブキ「?どうかしましたか？」

香須美「ジンキ君が夏休みの時にエイキさんの応援に行くときに、たまたま私と日菜佳がいなくて、現場が近くだからとジンキ君、自転車（アルベ〇ト）で行った事があるの。」

アマキ「それなら私はエイキさんから聞きましたが、ジンキ君汗だくで現場について、それから普通に闘ったそうですね。」

おやつさん「ジンキ君、頑張るね〜」

ヒビキ「うんうん、あつ、確かジンキが近々この過去の資料を見たいって言ってたな。」

おやつさん「ああ、鬼刃刀の事か……」

イブキ「ジンキ君、学園の仕事とこっちの仕事とかで、そのうち過労で倒れませんか？」

全員「……………あ……………」

本日の金言「過労で倒れないように気をつけてね！！ たちはな一同」 「今度バイク乗せて b y ヒビキ」

刃（ノートパソコンを使っています。） 「ふむふむ、ヒビキさんはあのバイクに憧れていたからね〜」

瑠妃「刃さん、キリクさんから思い出せるだけの鍛冶師の名前を書いたメモが来ました。」

刃「あ、ありがとう。それじゃあその紙をコピーして理事長にも渡して下さい。」

瑠妃「はい」

裏萌香「身の程を知れ！！」

月音「ギヤアアア！！？」

刃の音撃戦士特別編「探している物は意外と近くにある。そしてタイトルが長い

はい今回は特別編で、ミスターサー先生の「清める鬼と屍」から  
チヨウキとオシキ夫婦、「妖と人」から四季と七実がです。また、  
今回はぬらりひよんの孫とのクロスであるためリクオもです！！

それでは特別編をどうぞ！

刃の音撃戦士特別編「探している物は意外と近くにある。そしてタイトルが長い

刃の音撃戦士特別編「探している物は意外と近くにある。そしてタイトルが長い！！：前編」

僕と瑠妃さんはキリクさんがリストアップした人名（と言っても全員妖怪だけ）で、今生きていて、居場所のわかっている人を調べるため、白光でたちばなに戻って、猛士の資料と合わせて調べているが…

ジンキ「全く掠りもしない、大半が既に退治されていたり、この世からいなくなっている…：…すいませんチョウキさん、こんな事に付き合わせてしまって、」

僕は隣で調べ物の手伝いをしていているチョウキさんを向いて

チョウキ「別に気にするな。しかしこうして過去の資料を見ると、ヒビキの名前が良く出てくるな…」

ジンキ「ええ…過去の資料全部でイブキさんとかトドロキさんとかの名前は3、4回ザンキさんだって10回なのにヒビキさんだけで2、30回ぐらい出ていますからね。」

チョウキ「実は歴代のヒビキって目立ちたがり？」

すると上の階からヘルメットを持ってヒビキさんが降りてきて、

ヒビキ「呼んだ？」

と言ってきたので

ジンキ「いや、呼んでないッス。」

ヒビキ「そうか…後ジンキ、お前のバイク凄いな！！今イブキが物凄い笑顔で乗りに行ったよ。」

ジンキ「そうですか…ヒビキさんもかなりの笑顔でしたよ。」

ヒビキ「そう？でそっちはどうだった？」

チヨウキ「大半が生きていませんでした。残りは封印されていたり、居場所がわからない。極一部に実在してないのが混じってました。」

ジンキ「結局…鬼刃刀の再生は駄目でした。」

僕が資料を机の上に置いて、椅子にもたれかかった。すると上から

おやっさん「どうやら終わったようだね。」

オシキ「お疲れ様、あなた」

瑠妃「お茶でも飲んで一段落しましょう。」

チヨウキ「少し、休むか？」

ジンキ「そうですね…次は鬼刃刀の代わりを探さなくてはいけません、少し疲れましたから、一服しますか。」

僕は瑠妃さんからお茶を飲んで、チヨウキさんは妻のオシキさんから黍団子を食べさせている時に、おやっさんが机の上のリストを見ると、首を傾げながら

おやっさん「あれ？この人封印されているって書いてあるけど、うちによく食べに来るけど？」

おやっさんの一言に僕は

ジンキ「ブー　ッ!？」

瑠妃「キャ？」

ヒビキ「うわっ!?!汚いぞ!?!」

チヨウキ「資料につくぞ!」

思わずお茶を吹き出してしまった。

ジンキ「ゲホゲホ、すいません。」

ヒビキ「で、おやっさん、どの人何ですか？」

おやっさん「え〜っと…あつ、この“四季”さんだね。」

ヒビキ「あつ、その人なら俺、この前理事長と一緒に飲みに行きましたよ。」

僕と瑠妃さんはその会話を聞き、瑠妃さんは素早く電話を取り出

して

瑠妃「ジンキさん…パス」

ジンキ「ありがとう…」

僕は直ぐに理事長の電話番号を打ち込み、

プルルル、プルルル…ガチャ

理事長「あつ、ジンキか？」

ジンキ「はめやがったなああああ！なんで今まで存在を黙っていたのですか！？キリクさんリストを最初に渡したのに、あれか！？イジメですか！？それとも出番が欲しいからですか！？」

理事長「出番が欲しいのは、私よりキリク君だと思うが？後この間まで、私はアイツが生きていたのは知らなかったし、アイツがリストに載っているとは思わなかったんだ。」

ジンキ「はあ…まあいつか。で理事長、一つ尋ねますが、四季さんの腕は如何なものでしょうか？」

僕がそう尋ねると理事長は

理事長「代償は高いが、かゝなり良いぞ。恐らく鬼刃刀の何倍何十倍良い刀を打つぞ。代償の半分はこっちで出すから、残り半分はアームドセイバーの設計図でも持って行きなさい。」

ジンキ「そうですか…ありがとうございます。」

僕は通話を終えると

ジンキ「おやっさん！！四季さんの家の電話番号知ってますか！  
」？  
」

おやっさん「知っているよ。交渉は飲み仲間のエイキ君に任せようと思うから、ジンキ君達は待っていてね。」

ジンキ「了解、シュツ！」

僕は父さんの帰りを待つことにしたが、ただ待つのは退屈なので、

チヨウキ「だから、俺のおシキが一番だって！！鬼として強いし」

ヒビキ「いやいや、みどりも色んな武器を開発しているし、俺達がそれで何度か助けられただろ？だからみどりが一番だって」

ジンキ「ヒビキさん、それを言うなら瑠妃さんは、スタイルもいいし、手先も器用で、仕事もできて、料理も美味い！！一番は瑠妃さんですよ！！」

嫁、彼女自慢大会をしました（笑）因みに自慢されている方々は

オシキ「チヨウキさんったら…／＼／」

みどり「ヒビキ君も、恥ずかしい。」

瑠妃「ジンキさん照れてしまいますよ／＼／／」

頬を染めたり、体をクネクネさせたりしていた。この嫁彼女自慢大会は、さらにヒートアップしていき、ヒビキさんはアームドセイバーを、僕は雷光を、チヨウキさんも音撃棒を構えたので、小暮さんに止められた。(ケツに警策のフルスイングで)

その後おやつさんの話によると、僕は黍団子猛士セット(紅や、輝を初めとした変わり種の黍団子セット、20個入り1500円)と僕専用のアームドセイバーの設計図を持って、遠くから見てもわかる服装で行くように言われ、

僕は向こうの方で寝泊まりするかも知れないから、数日分の荷物+予備の服(いつサバキさんがやられるか、わからないから)をまとめて、翌日陽海学園のバスで隣町の浮世絵町に向かう事にした。

「?????」ああ、分かりました。引き受けましょう。俺もそのエイキさんの息子に興味がありますから…ええ、代償は黍団子猛士セットと何か珍しい技術をお願いします。…はい、それでは遠くから見てもわかる服装で12時半に駅前です…はい…それでは」

俺はたちばなの店主からかかった電話を切って俺は縁側に座り、  
「?????」うーん、リクオは明日暇らしいが一人だけ迎え行かすのもなんだし…とがめと姫は、エイキさんの話だといいい男らしいから…よし、七実いるかい?」

俺は自分の娘の名前を呼ぶと

トタトタ…ガラッ

七実「どうかしたのお父さん？」

????「すまないが、明日リクオと一緒に、駅に人を迎えに行つてくれないか？」

七実「良いけど、どんな人なの？」

????「この前連れて行つた、たちばなに住んでいる俺の飲み仲間であるエイキさんの息子さんと、その彼女が来るらしい。」

俺がそう言つたと七実は手をポンと叩いて、

七実「あゝ、酔いつぶれたお父さんをつれて帰る時にもう一人の酔っぱらいをおぶつて女の人と帰つたデカい人ね。」

????「あゝ多分そう、でいいか？向こうはお土産で黍団子持つて来るそうだけど？」

七実「いいよ！！あつリクオ君、呼んでくる？」

????「ああ、頼むよ。」

七実が縁側から去り、俺は

????「さて、リックくんがオススメする音撃戦士の少年…リックオやゆらにどんな影響を与えてくれるかな？」

俺がそう呟いた時、

リクオ「四季さん、僕に何かようですか？」

リクオが来てくれて、俺はリクオの方を向いて

四季「ああ、実はな…」

僕は陽海学園のバスに揺らされて浮世絵町の駅前に到着した。

運転手「ヒヒヒ、浮世絵町に到着したよ。」

ジンキ「ありがとうございます。」

運転手「気にしなくてもいいよ。私も君が活躍してくれるお陰で、山道を安心して行けるからね。」

瑠妃「では行ってきますね。」

運転手「お土産を楽しみにしてるよ。ヒヒヒ。」

ジンキ「了解、シュッ」

僕と瑠妃さんは荷物を持って降りて、バスは発車した。僕は浮世絵町の空を見上げた。

初夏の日差しがビルの窓等に反射して、

ジンキ「結構暑いな…」

瑠妃「そうですね…ここも自然が少ないですね。ジンキさんの御

守り（原料：屋久杉）がないと辛いですね。」

僕達がそう呟くと、僕達の隣に

みぞれ「全くだ…雪女の私にはキツいな…」

みぞれちゃんが立って言ったが、僕達は思わず、みぞれちゃんの方を向いた。

ジ・瑠「……………」

みぞれ「ん？どうした？」

ジンキ「なんでみぞれちゃんがここに…」

瑠妃「修行は…？」

するとみぞれちゃんは

みぞれ「萌香に（月音との修行を邪魔しないと理由で）許可をもらって、抜け出してきた。」

とサムズアップをして答えた。僕はとりあえず

ジンキ「ふん…！」

ゴン…！

みぞれちゃんの頭に音は鈍いが軽く拳骨をした。みぞれちゃんは頭を抑えながら、

みぞれ「痛いぞ…」

ジンキ「修行を抜け出す方が悪い！それに僕達は数日過すけど、着替えは「一通り持ってきている」…用意がいいな。」

みぞれ「お前の事だから、荷物はいるだろう？それにまた食べられるかもしれないから…着替えはいるだろう。」

瑠妃「私がそれをさせるとでも、思っているのですか？」

みぞれ「やってみせるさ…」

二人は少しの間にらみ合うが、片方は自然が少ない所が苦手な魔女、もう片方は暑さに弱い雪女で、場所は日差しが燦々と照りつけ、ビルが立ち並ぶ駅前の広場なので、

ジンキ「二人とも辛くないか？」

瑠妃「はい…」

みぞれ「あぁ…」

僕は二人の様子にため息を軽くして、喫茶店を指差し、

ジンキ「約束の時間はまだ先ですし、アソコの喫茶店で、軽く昼食でもとりますか？」

瑠・み「賛成…」

僕達は喫茶店ポレポレに行き、瑠妃さんとみぞれちゃんを街路樹

が近くに立っている日陰の席に座らせて、メニューを取りに店の中に入って行き、

店員さんから、メニューを持って戻って見ると、

チャラ男A「ねえ、俺達と遊びに行かない？」

瑠妃「…結構です。人を待っていますので」

チャラ男B「君、可愛いね。何歳なの？」

みぞれ「黙れ、お前達と話す事は何もない。それに私には好きな人がいる。」

モヒ安の足元にも及ばない、チャラ男共に絡まれていた。

そっぴや瑠妃さんとみぞれちゃん人間界じゃあ、かなり美人な部類に入っていることを忘れていたな……いつも美人見ていたから、感覚が麻痺しているのかな？

僕は考えているとチャラ男は更に

チャラ男C「そんな奴より俺の方が格好良いつて、」

チャラ男A「はあ？俺の方が格好良いつて!!」

チャラ男B「なに馬鹿な事言っているんだよ！？俺に決まってるだろっが！」

と言ったが、瑠妃さんとみぞれちゃんはサラリと

瑠妃「それはないですね。」

みぞれ「ジンキとお前達を比べたら、月とスツポンの差があるぞ。」

瑠妃「みぞれさん、それじゃあスツポンに失礼ですよ。」

みぞれ「む、それもそうだな…じゃあ月とスペースデブリか？」

瑠妃「後ダイヤモンドと真つ黒焦げたゴミ以上の差ですね。」

……なんていつもは喧嘩するのに、こういう時は見事なコンビネーションをするのかな？余りにも見事な毒舌で僕の隣にいる店員さんの顔の血の気が、イブキさんの青い部分より青くなっているよ（笑）

僕はチャラ男共の方を見ると、チャラ男共の額に青筋が出てきたので、僕は二人を助ける為に（街中じゃあ力使えないからね。）店員さんの制止を聞かずに、瑠妃さん達の元へ近づき、

ジンキ「いや〜ゴメンゴメン、日替わりランチのメニュー見てたら、遅くなっちゃった。」

と言いまメニューを3つ置くと

瑠妃「もう、遅いですよー！」

ジンキ「すまないね〜、今回は僕が奢るから好きな物を頼みなよ。」

みぞれ「そうか、ならごちそうになるとしよう。」

僕達がメニューに向き合つと背後から、

チャラ男A「おい、兄ちゃん…」

チャラ男B「何俺達を無視しているのかな？」

チャラ男C「何様のつもりだよ？アア？」

僕は（わざと無視していた）チャラ男共を見て

ジンキ（身長180？）「ああ失礼、小さくて見えなかつたよ。  
僕は彼女達の連れのジンキと言うんだ。」

チャラ男A（身長170？）「なっ!？」

チャラ男B（身長160？）「なんだとお!？」

チャラ男C（身長165？）「テメエ、なめてんのか？ああん？」

チャラ男達はガンを飛ばしてくるが、小学校から命がけの戦いを  
してきた僕には全く怖くなく、

ジンキ「オイオイ、僕は男を舐める趣味なんてないよ。」

と言つと

ブチッ!!

チャラ男A「テメエ…」

チャラ男B「絶対…」

チャラ男C「ぶつ殺す!!」

チャラ男はそう言いながら、殴りかかろうとした。

僕と七実ちゃんは駅に急いでいた。理由は、まず僕達で出ようとすると、カラス天狗達が護衛を付けようとする事からそれを避けることと、もう一つが……

七実「たちばなの…黍団子おおお!!」

さっきからこの調子なのだ。そりゃ確かにまたちばなの黍団子は美味しいけどま何もそこまで思っ

リクオ「ね、ねえもう少し速度落とさない?今駅前についても15分くらい待たなきゃいけないけど…」

僕がそう言うと、七実ちゃんは僕の方を見ずに、

七実「でる前にお父さんが言っただけど、向こうは既に駅前に着いてるって」

リクオ「え!?!な、なら急がなきゃ!!」

僕達は駅前に急ぐと人だかりが出来ていて、その中心には「闘魂」と書かれたTシャツを着た体格の良い男の人に、不良が殴りかかるうとしていたが、男の人はゆっくりと立ち上がり、不良達の攻撃を

受けた。

不良A「コイツ、人を馬鹿にした割りには……」

不良B「大した……」

不良C「ええ……」

最初笑っていた不良の顔はどんどんひきつってきた。何故なら男の人は背中で三人分のパンチを食らって

男「素人のパンチだね。それと背中って腹部の7倍頑丈らしいよ。」

平然とした表情で言うと男の人は不良の方へ向いて、

男「さて、僕も昼飯を食いたいから一発で終わらせよう。」

そのまま男の人は右手を平手にして

バシンッ!!

不良A「アベシッ!?!」

不良B「ヒデブッ!?!」

不良C「アワビッ!?!」

不良を三人まとめて一発のビンタでぶっ飛ばし、不良達はゴミ箱に突っ込まれ、男の人は席に座り直し、

男「二人とも何するか決まった？」

黒服の女性の方と、ミニスカートの女性に話しかけていた。

黒服の女性「では私は洋定食で」

男「瑠妃さんが洋定食…みぞれちゃんは？」

みぞれ？「なら、私は冷やし中華で」

男「ホイホイ、僕は日替わりランチで、デザートはいる？」

瑠妃？「いえ、それぐらいにしておきましょう。」

みぞれ「迎えが来るかもしれないからな。」

男「それもそうか…じゃ頼むよ。すいませーん！！」

男の人は店員さんと呼んでいた。メニューを頼み終え、男の人は

男「さて、迎えに来る人はどんな人何でしょうねえ？」

瑠妃？「さあ、ジンキさんの服装で見つけてもらうしかありませんが…」

みぞれ？「そのTシャツダサイな…」

ジンキ？「しょうがないじゃん！！目立つ服装っていったらこれ他にあるのって、753Tシャツと“たちばな”の制服だけだよ

「!!」

「たちばなの単語で今まで固まっていた七実ちゃんが、ジンキと言われた人達に近づき、」

七実「あの、すみません!!もしかしてあなたが松坂刃さんですか?」

ジンキ? 「はい?本名はそうですが、どうかしましたか?」

七実「私は父の四季からあなた方を迎えに来ました。」

七実ちゃんがそう言うのと黒服の瑠妃さんと言われた人は

瑠妃「娘さんですか?私は瑠妃と言います...で、そちらの男の子は彼氏ですか?」

と僕の方を見ていったが、

七実「いえ、私の父の義兄弟の孫のリクオ君です。」

と僕を紹介すると刃と言われた人は、僕に近づき、手を差し伸べ

くれ。ジンキ「初めまして、僕の名は松坂刃だが、今はジンキと呼んでくれ。」

リクオ「あ、初めまして...」

僕は握手をしたが、ジンキさんの手は大きく、腕は筋肉がついてガツシリとしていた。七実ちゃんは

七実「では早速案内を…「あゝ少し待ってくれるかな？」なんですか？」

ジンキ「その〳〵昼飯を食べてからでいいですか？頼んじゃったし…君達も食べる？」

ジンキさんは頭を掻きながら言い、僕達もまだ食べてなかったの  
で、お昼と一緒に食べることにした。さっきの光景を見て思ったけ  
ど、この人も妖怪なのかな？

僕がそう思った時、ジンキさんは

ジンキ「あつ、少年に言っとくけど、俺はただの人間だよ。」

リクオ「って人の心読まないで下さい！！」

僕がそう叫ぶと七実ちゃんが

七実「でも、それにしても強いですね。」

とポレポレカレーを食べて言うとジンキさんは

ジンキ「鍛えてますから、シュッ！」

と左手でポーズをして日替わりランチを食べた……なんか変わった人だと思った。

刃の音撃戦士特別編「探している物は意外と近くにある。そしてタイトルが長い

最初に今回の感想の返信はかなり遅くなるかもしれないので、予めご了承ください。

今回は時間がないのでこの辺で失礼します。それでは次回までア  
デュ〜(〇W〇)ノシ

刃の音撃戦士特別編「探している物は意外と近くにある。そしてタイトルが長い

はい、特別編 part 2 です！タイトルのように後どれぐらい続くのかわかりませんが、楽しんで頂けると幸いです！！

それでは中編（仮）をどうぞ！！

刃の音撃戦士特別編「探している物は意外と近くにある。そしてタイトルが長い家の前に来たが、

みぞれ「門…デカいな…」

瑠妃「塀の端からここに来るのに、数分かかりましたから、中も相当な広さだと思います…」

リクオ「まあ、大人数？が普通に暮らせるほどありますから…」

七実「大半の喧嘩も、隣にバレなくてすむ事多いですよ。」

ジンキ「猛士の本部よりでかいかも…」

僕達が立ち尽くしていると扉があき、中から…

僧侶？「あつ、若！！今は危ないので護衛を付けるとアレほど言っただじゃないですか！！！」

お姉さん「七実嬢ちゃんもよ。」

長髪の僧侶と白い着物に首から御守り袋をぶら下げた女の人が出てきて、リクオ君と七実ちゃんは

リクオ「ゴメン、黒田坊、でもそうしないと四季さんのお客さんに迷惑をかけるかもしれないから。」

七実「千、心配かけたね。」

二人がそう言うのと、

黒田坊「全く……」

千「まあ、次からは気をつけてね。」

千と言われた方は僕のほうを向き、

千「さて、うちの大将に用のあるジンキはあんたかい？」

ジンキ「え、ええ……そうです。」

千「私に着いてきな。お連れの方は……黒田坊、お願いするよ。」

黒田坊「はあ、わかりました。ほかの方は拙僧に着いてきてほしい。」

瑠妃「わかりました。」

みぞれ「……わかった……」

僕たちは千さん、黒田坊さん、リクオ君、七実ちゃん、僕&瑠妃さん&みぞれちゃんの順（瑠妃さんとみぞれちゃんは僕の側に立って）に門の中へ入り、門が閉まったとき上から殺気を感じ、

ジンキ「二人とも、僕から離れる!!」

僕の声に二人はすぐに飛び退き、僕も鬼爪を出して上を向いて

ガキーン！！

直感で刀を防ぎ、鬼火を吐いたが、敵？は鬼火を避け、距離を開けると

敵？「ほう・・・あれを防いでさらに反撃か、やるねえ」

僕は敵をにらみながら、鬼爪を引っ込め、カバーをはずした雷光を逆手に構えると、奥から

????「おい、こらッ、斬！！何客人に刀を向けているんだ！！怪我をさせたら、俺が響君とかリッ君とかエイキさんに会いづらいじゃねえか！！」

一人の男の人が出てきた。お父さんの名前やヒビキさんや理事長のあだ名が出てきた事からこの人（妖怪？）が四季さんのようだ。すると斬といわれた人は刀を納め

斬「すまない、つい“鬼”の実力を見たくてね。」

斬さんがそういうと四季さんは頭をボリボリとかくと僕のほうを見て顔を真っ青にしていき、

四季「ハア・・・アアアアア！！！！早速怪我しているじゃねえか！！千、すぐに救急箱を！！！！やばいエイキさんと響君に殺される！！！！」

と慌て始め、僕は

ジンキ「落ち着いてください！これは、自分で鬼爪を展開しただけですぐに直りますから！！」

と言うと、四季さんはピタッと止まり

四季「そう言えばエイキさんが話してくれてたな、特異体質だつてすまないな。俺はわかっているかもしれないが、俺が四季崎 紀だ。」

ジンキ「はじめまして、僕はエイキ父さんの息子のジンキ、本名は松坂刃です。」

瑠妃「私は橙条 瑠妃と言います。これから少しの間お世話になります。」

みぞれ「私はジンキの妾の白雪みぞれ、もう少ししたら松坂みぞれになる・・・よろしく」

ジンキ「ウオオオオオイ！？何言ってるのみぞれちゃん！！」

瑠妃「そうですよ！ジンキさんのお嫁さんは私ですよ！！」

ジンキ「そういう意味でもない！！場所を考えてくれ！！」

四季「ハッハッハッ、君達は面白いね…さて、天気が悪くなつてきそうだから中で話そうか？」

僕達が四季さんの言葉に空を見上げると雲が覆って来始めていた。

ジンキ「あつヤバいなこりゃ…瑠妃さん」

瑠妃「はい！少し庭を借りますが、いいですか？」

リクオ「良いですけど何をするのですか？」

リクオ君が首を傾げながら尋ねると、僕は

ジンキ「うん、お土産と依頼の品を“転送”するだけさ。」

リクオ「？」

リクオ君が頭を傾げているのを無視して、瑠妃さんは魔具の魔導書を広げ、呪文を呟くと、庭に魔法陣ができて、地面から

ゴゴゴ…

と効果音が付きそうな感じ（実際はでていません）に大量の黍団子の箱と、折れた鬼刃刀が入った箱と白光（なんで！？）が出てきた。

しばらくして魔法陣が無くなると

瑠妃「ジンキさん、終わりました。」

瑠妃さんが僕に振り向き、僕は鬼刃刀が入った箱を持ち、

ジンキ「これがお願いした、直して欲しい品です。」

と言いながら四季さんに渡すと、四季さんは鬼刃刀が入った箱と

黍団子の箱を持ち、

四季「分かった…続きは俺の部屋で話そう。ついて来てくれ。」

と僕に背を向け歩き始め、僕は千さんに二人を任せて四季さんの後について行った。

僕は四季さんに連れられたのは、和室で僕と四季さんは向かい合  
い、上質な木材を使った机の上には折れた鬼刃刀が置いてあり、四  
季さんは破片の一つを手に取り様々な角度から見ても、

四季「ふむ、綺麗に手入れしているね。この刀を大事に思ってい  
るようだね。」

その言葉に僕は少し緊張しながらも

ジンキ「は、はいっ!!その刀は小暮さんが僕にこれからも頑張  
ってほしいとか、生き抜いてほしいと言った思いがこもってますか  
ら!!」

僕がこう言っていると四季さんは微笑みながら、

四季「そうかそうか…では代償の半分はリツ君から貰っているけ  
ど、残り半分は持っているかな?」

ジンキ「はい、設計図は個々に…」

僕は鬼刃刀の箱のふたを手に取り、ずらすと

カタッ

と小さな音を立て仕掛け蓋の一部が取れ、中から折り畳まれた紙が出てきた。僕はそれを広げて渡すと四季さんは少しそれを眺めた後、

四季「へえ…中々面白い構造をしているね。魔術に関してはいまいちわかんないな…」

ジンキ「それは瑠妃さんが詳しいので、後程説明させますかま？他にも何か必要ですか？」

僕がそう言っていると四季さんは考え始め、ポンと手を叩き

四季「そうだ！君の実力を知りたいから誰かと手合わせをしてくれるかい？」

ジンキ「は、はあ…僕は構いませんが…」

四季「おっ助かるよ。」

四季さんの言葉に僕は肯定の返事をしたが

ジンキ「で、僕の対戦相手は先程斬りかかった、え〜と斬さんですか？」

と言うと四季さんは手を横に振りながら

四季鬼「いや、アイツと闘わせたら近所迷惑になるし、アイツが興奮したら、君に大怪我がするかもしれないから、駄目だ。」

ジンキ「下手をすれば、死ぬかもしれませんね。では僕の相手は誰になるのでしょうか？」

四季「そうだな〜ん〜……」

四季さんが腕を組み考えていると、

いい男「四季殿、失礼する。」

四季「ん？牛鬼か…どうかしたのか？」

長髪で片目を隠しているいい男、もとい牛鬼と言われた男性が入ってきた。

牛鬼「いや、居間に大量の黍団子と不思議な力を感じて、リクオに聞いたら四季殿に客人が来たらしいから来ただけです…しかし、畏とは違う力をお持ちのようだな。」

牛鬼さんは僕を見てそう言った時、四季さんは何か思い付いたような顔をして、

四季「そうだ！牛鬼、お前のところの牛頭丸だっけ？アイツとこの客人のジンキを、手合わせさせてみてもいいか？飲み仲間のエイキさん曰く、かなり強いらしいが…駄目か？」

四季さんの突然の申し出に対して、牛鬼さんは

牛鬼「私は構いませんよ。私もその少年の実力を知りたいので…」

四季「それじゃ、中庭でやるか。」

牛鬼「アソコなら多少の音では周りにも迷惑がかりませんね。」

二人は手合わせの場所等の打ち合わせをしていたが、久しぶりに僕空気がだな

四季「武器は真剣でいいか？」

牛鬼「そうしますか…」

…僕は無事に生き延びる事が出来るのかな？とりあえず…

ジンキ「自分は自前の武器を使っていいですか？」

せめて手に馴染んでいる武器で闘わないとキツいかも…

僕がジンキさんを探していると中庭のほうでワイワイと騒ぎ声が聞こえて向かうと

牛頭丸「……」

牛鬼の部下の牛頭丸が刀を構え、その反対側では、

ジンキ「……」

ジンキさんがギターみたいな武器を構えてにらみ合っていた。二人の間に立っている四季さんは

四季「二人とも用意はいいか？」

牛頭丸「問題ない、直ぐに終わらせる！」

ジンキ「こつちも大丈夫です。」

二人の言葉に四季さんは3歩後ろに下がり、

四季「それでは…始めっ！！」

四季さんの合図と同時に

牛頭丸「ハアアアアア！！」

牛頭丸がジンキさんに接近して刀を振り落とそうとしたが、ジンキさんはそれをギターで受け止め、

ジンキ「いい一撃ですね…だがまだ軽い！！」

と言い払いあげると逆手に持ち替え、

ジンキ「ガンガン行く…ぜ！！！！」

そう叫びながら流れるようにギターを振った。

ギインギイン！！

牛頭丸もそれをかわしたり、刀で防いだりするが

牛頭丸「クッ…」

苦戦していたが、ジンキさんから一旦距離を置き、直ぐに殺気の籠もった突きで接近した。

リクオ「ジンキさんッ!？」

僕は思わず叫んだが、ジンキさんは落ち着いた様子で

ジンキ「ハッ!！」

ジャンプで突きを避け、牛頭丸の背後に着地すると

ジンキ「ほい、一本」

ギターを首筋に当て、

牛頭丸「…参った。」

四季「勝負あり、勝者ジンキ!！」

四季さんの声で周りの皆は歓声を上げた。少しすると青田坊がジンキさんの前に出て行き、

青田坊「ジンキ殿、俺と一本手合わせしてくれないか?」

牛頭丸「頼む!！俺とももう一度闘ってくれ!！」

青田坊と牛頭丸がそう言うとジンキさんは頭を掻いて、

ジンキ「あゝ…それはちょっと…厳しいかな?」

青田坊「ああ！？何でだよ！」

青田坊の言葉にジンキさんは空を指差し、

ジンキ「一つに天気だけど、今日は大雨で雷もあるらしい…あっ」

皆が空を見ると雨が降り出した。雨に濡れたまま、ジンキさんは今度は二人を指差して

ジンキ「2つ目に闘いなれた妖怪二人相手に人間の僕が勝てるわけ無いでしょ。やるならどちらか片方をお願いしますよ。」

四季「確かに…」

ジンキさんがそう言うつと部屋の中でお茶を飲んでいた牛鬼が

牛鬼「なら牛頭、お前は退け。」

牛頭丸「しかし牛鬼様！！俺は「明日、相手にしてあげますから」…チツ！」

牛頭丸が下がって馬頭丸の持ってきたタオルで頭を拭き、青田坊が手をパキパキと鳴らしながら

青田坊「では…行かせて貰うぜ！！」

ジンキ「え！？ちよっ！？」

青田坊は拳を繰り出した。ジンキさんとはつさに武器でガードしたが、青田坊の怪力で壁まで吹き飛ばされた。

ガンッ！！！

ジンキ「グッ！？」

四季「おいコラッ！！青、何やってんだ！！」

青田坊「す、スイマセン！」

四季さんは青田坊を叱り

リクオ「ジンキさん！？大丈夫ですか！？」

僕はジンキさんの下へ駆け寄ろうとしたが瑠妃さんが止め、

瑠妃「大丈夫ですよ。ジンキさんはあれほどでは気絶なんかしま  
せんから。」  
すると

ジンキ「いつてえええ〜！！」

ジンキさんは至って普通に立ち上がり、四季さんの方を向き、

ジンキ「四季さん、僕は大丈夫ですので、手合わせを続けたいの  
ですがいいですか？」

四季「ああ…本当に大丈夫なのか？」

ジンキ「ええ、勝てるかどうか分かりませんが、」

ジンキさんはギターを地面に突き刺し、構えると、新しいキャンデーを口にくわえたみぞれさんが

みぞれ「ジンキ、変身したらどうだ？それなら勝てるかもしれないぞ。」

リクオ「変身…？」

僕は首を傾げていると

瑠妃「その方が良いのではないのでしょうか？実際刀を使うのは“鬼”の姿で戦うわけですし、」

四季「おお、その方が良いかもな。“音撃戦士”の力も見てみたいやつらが多いだろうし、」

瑠妃さんや四季さんがそう言ってジンキさんは

ジンキ「はあ…分かりましたよ。幸いこの雨の中だ雷の一つや二つ、民家に落ちても不思議ではないでしょう…青田坊さん、」

青田坊「ん？何だ？」

ジンキ「少し待ってくださいね。」

ジンキさんはその言葉と同時に左腕を顔の高さまで持っていき、鬼の顔が付いたリストバンドを触ると

ガシャ

鬼の顔の下の方に弦が付いた物が出てきて、ジンキさんはそれを指で弾いた。

ベェン…

リストバンドから音が出て、ジンキさんはそれを額にもっていった。そして……

ジンキ「ハアッ!!」

ビシャアアアン!!

雷がリストバンドを、天に突き出したジンキさんに向かって落ち、皆は慌てだったが、瑠妃さんとみぞれさんは至って落ち着いた様子で見えていた。

雪女「あの…随分落ち着いていますね？ジンキさんに雷が落ちたというのに…」

雪女が二人にそう言うと

瑠妃「まあ、ジンキさんの変身はあんな感じですから…」

みぞれ「鬼弦で変身すれば、晴れていても、屋内でも雷は落ちてくるからな。」

リクオ「え…?」

僕がポカンとしているとジンキさんの姿は人ではなく、黒くて左

の角が異様に伸びている鬼へと変わった。変身をした刃鬼さんは構えて

刃鬼「さて…いきますか!?!」

刃鬼さんは青田坊に向かって走り、青田坊も刃鬼さんに向かって走り腕を組みあつた。

青田坊「グツ!?!」

ズリズリ

どンドン青田坊が押され始め、いつの間に帰ってきたのかは分からないけどお爺ちゃんが刃鬼さんを見て、

ぬらりひょん「ほう珍しい、ありゃあ“戦鬼”じゃないか。これはちと青が不利じゃな。」

リクオ「え?」

僕がお爺ちゃんの方を振り向いた瞬間、

刃鬼「どっせ〜い!?!」

青田坊「又オオオオオ!?!」

ズウン!?!

僕が急いで音の方を見ると、刃鬼さんが青田坊の袖を掴み、地面に叩きつけていた。皆驚いていたが四季さんは

四季「勝負あつたな…勝者は刃鬼だな。」

青田坊は立ち上がり、

青田坊「いや〜お強いですね。この俺が力負けするとは…」

刃鬼さんに握手を求め、刃鬼さんも青田坊の方を向き、顔が光ると鬼の顔から人の顔に戻り、

ジンキ「いえいえ、青田坊さんも中々強かったですよ。僕もまだまだ鍛え足りませんね。」

と言い、握手を交わした。四季さんは

四季「さて、手合わせをしてジンキの実力も分かったことで、まずジンキ君達は風呂に入りなさい…リクオ、すまないが彼を風呂場に案内してくれ。」

リクオ「あ、はい分かりました！ジンキさんについて来て下さい。」

ジンキ「了解、シュツ！」

僕は瑠妃さんが持ってきた着替えを持って、リクオ君と共に大浴場に向かっていると、（因みに顔から下は鬼の姿のまま）

リクオ「あの、ジンキさん!!」

ジンキ「ん？どうしたんだい？」

リクオ「ジンキさんは本当に人間なんですか？」

リクオ君の問いかけに僕は

ジンキ「ただの人間じゃないよ。でも妖怪じゃあない。」

リクオ「そう言えばさつきお爺ちゃんが戦鬼と言っていたけど……」

ジンキ「ほう、身内に音撃戦士の存在を知っている人がいるのか。なら風呂に入りながら説明しようか。」

この後、僕とリクオ君は大浴場で戦鬼の事、戦鬼の歴史、ついでに僕の仕事や陽海学園の事を話すとリクオ君は

リクオ「へえ〜色々あるんですね。」

ジンキ「まあね、後僕の連れの二人も妖怪だよ。そう言えば、リクオ君も妖怪なのかい？」

僕は浴槽に浸かりながら、リクオ君に尋ねるとリクオ君は

リクオ君「僕は妖怪の血が4分の1程度混じっているだけですよ。それにジンキさんと比べると、僕なんかまだまだですよ。」

と言い落ち込んだが僕は左手をリクオ君の頭の上に乗せて、

ジンキ「リクオ君、僕だって最初からあんなに強かった訳じゃない。最初の頃なんて鬼にすらなれなかった。」

リクオ「え？」

ジンキ「でも、毎日身体と心を鍛え、多くの闘いを経験して、  
そして身体を見て分かるように、多くの失敗もして、何度か死にか  
けた事もある。だけどそうして今の僕、戦鬼のジンキがいるわけだ  
よ。」

リクオ「はあ、」

ジンキ「まあ、何が言いたいかと言うと……え〜っと……君も色々  
と鍛えていったら良いと思うよ？」

リクオ「それ、ついさつき思いつきましたよね！？しかも「え〜  
っと」って言ってましたし！！」

リクオ君のツツコミに僕はただ

ジンキ「…すまない、僕今まで教わる事は多かったけど教えた事  
は少ないんだよ！！それに人生経験が少ない僕が良い言葉がポンポ  
ンと出るわけ無いでしょ！！」

リクオ「逆ギレですか！！」

ジンキ「違う！！ヤケクソに言ったただけだ！！（キリッ）」

リクオ「開き直っている！？」

〜数分後〜

僕とリクオ君は迎えにきた四季さんの護衛忍の炎さんの後をついていき、大広間に行くと、

四季「おお、二人とも遅かったじゃないか!!」

ぬらりひょん「先に始めてしまったぞ。」

大宴会が始まっていました。因みに、瑠妃さんとみぞれちゃんは…

千「…で四季の坊やが気付いてくれなくてな…」

瑠妃「大変ですね、ジンキさんはそういう事に気づいてくれますが、優しすぎて…」

雪女「へえ、そのキャンディーは冷気を閉じ込めているのですか。」

みぞれ「予備を多目に持ってきたから分けてやろうか?」

なんか意気投合しちゃってるよwww僕はリクオ君の方を見て

ジンキ「とりあえず…楽しみますか?」

リクオ「そうですね…」

こうして四季さんの元での初日が過ぎていき、翌朝僕の両腕に瑠妃さんとみぞれちゃんが抱きついて寝ていたのは言うまでもない。

刃の音撃戦士特別編「探している物は意外と近くにある。そしてタイトルが長い

## 本日の猛士報告

こつちでも宴会はカオス！！

byジンキ

ヒビキ「あ、やっぱり？」

イブキ「ジンキ君、悪酔いしなかったらいいのですが……」

バンキ「ああ、確か前に酒を飲んだ時、力が暴走しかけたのですっけ？」

ザンキ「あの時は普通の息で鬼火が出かけて、周りは燃える物ばかりだから、本当に危なかった……。」

本日の金言「ジンキ、酒を飲むなよ！！」

トドロキ「でも向こうに水を操れる妖怪がいるから問題ないのでは？」

鬼一同「……あ……確かに」「」「」

刃の音撃戦士特別編「探している物は意外と近くにある。そしてタイトルが長い

遅くなってスイマセンでした！！今回は長いですが、楽しんでいただいたら幸いです。それではどうぞ！！

刃の音撃戦士特別編「探している物は意外と近くにある。そしてタイトルが長い……中編 part 2」

ジンキ「はあ……」

四季さんの元へ来て4日目になった。四季さんは鬼刃刀を打ち直す際に

四季「俺がコイツを強くするのに少し時間がかかるからゆっくりと待ってくれ。」

と言われて待っているのだが……

ジンキ「暇だ……リクオ君や青田坊さん、四季さんの娘さん達は学校だし、瑠妃さんは千さんとみぞれちゃんと一緒に出かけちゃったし……手合わせするにしても牛頭君はさっきの筋トレで半ば燃え尽きかけているし、他の妖怪の皆さんは僕の鬼の姿を見てからは手合わせしてくれない……暇だ……！」

と縁側に横になり、空を見上げていると

ぬらりひょん「なんじゃ、お主暇なのか？」

リクオ君のお爺ちゃんのぬらりひょんさんがひょっこりと僕の顔をのぞき込んでいた。僕は思わず

ジンキ「魚っ！？って！？……」

ズデンー!!ゴチン!!

驚いて、その拍子に縁側から落ち踏み石に腰をぶつけてしまった。

ジンキ「いててて…」

僕は腰をさすりながら立ち上がるとぬらりひよんさんは苦笑いをしながら

ぬらりひよん「いや〜すまんかったわい、そんなに驚かれるとは思わなくての。」

ジンキ「いえいえ木にしないで下さい。で自分に何かご用でしょうか?」

僕がそういうとぬらりひよんさんは

ぬらりひよん「いや何、四季からお前さんが暇そうなら散歩にでも連れて行ってやれと言われてな。それにお主はここに来てからずっと、わしや四季の組の者と手合わせばかりしていたじゃろ? お主は人間だからそろそろ休暇も欲しいじゃろ?」

ジンキ「確かに…」

僕がここに来てからの行動を簡単に説明すると…

1日目、挨拶と依頼をしてからバトル(二名)

2日目、朝の筋トレをして部屋割りをしてからバトル(生身で10名)

3日目、朝の筋トレをしてからバトル（生身で50名、鬼の姿で100名）をして瑠妃さんとみぞれちゃんの死闘を止める。

とこんな感じで…よく考えると、連続で手練れの妖怪と闘えたものだ。ウン、リクオ君も「本当に人間？」と言ってたな。まあ僕は鬼でもあるし響鬼さん達と組手と比べると楽なだけだねwww

ww  
僕はぬらりひょんさんのお誘いを受け出かけようとした時カラス天狗さんが

カラス天狗「総大将！！出かけるのなら護衛をつけて出て行ってください！」

と言ってきたが

ジンキ「安心してください、僕がいますからそれに…奴良組の中で動ける人いるのでしょうか？」

と言ったら納得して、部屋の中へ戻っていった。（昨日の組手の中にカラス天狗さんの息子もいた。勿論ポッコボコにしちゃったけど）

僕とぬらりひょんさんは浮世絵町を散歩していき、ぬらりひょんさんは僕に美味しいお店等を食べ歩きをしながら回っていき、お昼頃に「化猫茶屋」という店の前にきた。

ぬらりひょん「ここはわしの組のものがやっついての、昼は喫茶店、夜は居酒屋としてやっておる。」

ジンキ「名前からして…化け猫がやっているのですか？」

僕がそうつぶやき、ぬらりひよんさんは僕の顔を見て

ぬらりひよん「なんじゃ、ここは営業しているのは普通の妖怪で、普通のお店なのになぜそんな苦そうな顔をしているのじゃ？」

ジンキ「いえ…その…自分の職業があれ（戦鬼）ですから、河童とか化け猫って聞くとつい身構えてしまうのです…はい。」

僕は陽海学園に入ってから妖怪の種族が魔化魍と同じ名前を聞くという身構えてしまう癖があるのだ。この前も休み時間に同級生の女の子が「私の種族、河童なのよね」と軽い気持ちで話しているときに、3日連続の徹夜（原因はサバキさんとエイキ父さん）で頭がはつきりしていない僕は思わず雷光を構えて怖がらせてしまったことがある。その後ザンキさんから拳骨くらったけど、

僕がそのことを思い出して苦笑いしていると中から手拭いを頭に巻いて猫耳を隠している人？が出てきてぬらりひよんさんを見かけると

猫「あ、総大将！どうも！！」

ぬらりひよん「おお、良太猫か商売は上手く行っとなるか？」

すると良太…郎君は頭をかいて

良太郎「ええ、窮鼠がいなくなっただおかげであっしらもうまく商売がいつているのですが…あ」

ぬらりひよん「なんじゃ歯切れが悪いのお…なにかあったのか？  
後、後ろの奴は四季の飲み仲間の息子でジンキという妖怪の事も知  
っているから安心せい。」

ぬらりひよんさんの一言に安心してくれた良太郎君は

良太郎「はあ、実は昼の方の店を手伝う筈の浦太猫がナンパして  
くると、置き手紙を残しなくなり、残っているのが喧嘩っ早い桃  
太猫、いつも居眠りをする金太猫、それにまだ若い龍太猫しかいな  
いので人手が少し足りないのです。」

ジンキ「ふむ、今の時間帯（お昼）で人手が足りないってやばく  
ないか？良太郎君？」

良太郎 良太猫「良太猫ですって！…まあその通りでして…はあ、  
今日は閉店しますか。」

良太猫君はそっぴいながら暖簾を降ろそうとしたが、ぬらりひよ  
んさんは

ぬらりひよん「待て、その必要はないぞ。人手ならここにジンキ  
がいるから使えばいい。こいつは喫茶店で働いていたこともあるか  
らの、」

と言い出して、良太猫君も驚き

良太猫「ええ！？人手が増えるのはうれしいですが…お客人にそ  
んなこともさせるわけには…」

ジンキ「僕は一向に構いませんよ（暇だったし）」

僕はこうしてぬらりひよんさんを店の奥でゆっくりとさせて、良太猫君のてつだいをした。

（お手伝いの様子）

良太猫「ジンキさん、この料理を手前から6、8、10の机のお客様に！」

ジンキ「了解って、こらモモ！！サボるな！！」

桃太猫「はいはい、わかりましたよ！！」

ジンキ「不貞腐れるな！！リュウは小さいお子様をあやしてあげて！！」

龍太猫「了か〜い ほ〜らいい子いい子」

良太猫「キンも寝る暇があったらこのかぼちゃを切って！！」

金太猫「フガッ！？すまん良太猫…さてワイの強さは泣けるでえ！！」

スパーン！！

金太猫「ダイナミックチョップ…生」

ジンキ「なんでかぼちゃをまな板ごと切るんだよ！！」

浦太猫「た、ただいま・・・」

龍太猫「うわゝ亀さん、所々凍っているよ？」

浦太猫「白い髪でキャンディーを啜えた女の子を口説こうとしたら凍らされた・・・。」

桃太猫「はん、仕事を抜け出した罰だよ!!」

ジンキ「さつきまで料理をつまみ食いしていた奴が言うセリフか？それとウラさんはお湯を軽く浴びた後仕事を手伝って、」

桃太猫「うるせえ!!」

浦太猫「わかりましたよ...で誰？」

ジンキ「自分、ジンキと言います。それと多分君を凍らせた子、多分僕の同級生...」

とこんな感じで無事に終わった。僕とぬらりひよんさんはこの後、食事と食後の一服とまったりとして、割引券（昼夜共用）を持って、夕焼け空の中を帰り、門をくぐると黒色鴉が飛んできたがその体には大量の傷があった。

僕はそれに驚いていると腹部を抑えながらリクオ君が戻ってきて、

リクオ「ジ、ジンキさん!!」

ジンキ「リクオ君!!どうした!？」

リクオ「雪女が…妖怪に攫われた…」

ジンキ「何…リクオ君危ない!!」

僕はリクオ君を突き飛ばすとリクオ君が立っていた場所に一本の槍が突き刺さっていた。槍には手紙が巻いてあり、内容は

女達は俺達、餓狼団が預かった。返してほしいかもしれないが場所は貴様が探せ、四季の女も捕まえたので四季が打った妖刀を全部タダでくれるなら考えてやる。

と書いてあった。僕はその手紙を読み終えた僕はディスクアニマルを起動させようとしたが

四季「待て、ジンキ…」

目の下に薄っすらと隈ができている四季さんが止めた。僕は四季さんを見て

ジンキ「四季さん…止めないでください。」

と殺気をこもってしまったというと四季さんは

四季「俺を睨むな…俺はその音叉を貸してほしいだけだ…」

ジンキ「貸してほしい？四季さんは鬼になれるのですか？」

僕が首をかしげていると四季さんは

四季「いや、鬼には成れないが…絶、あれを持ってこい。」

絶「承知……」

四季サンの言葉に、絶さんは一瞬消えたと思うと、すぐに大きなケースを持ってきて

絶「まずは一箱、残りは組のものが持ってきます。」

四季「ご苦労さん……さて、ジンキ“これ”がお前の音叉を借りた理由だよ。」

四季さんはケースを開けると中には大量の銀色のディスク……待機状態のディスクアニマルがあった。

ジンキ「こ、これは……」

四季「俺が前にエイキさんからディスクアニマルを借りたときに作った。」

ジンキ「さ、さすがは四季さん……」

四季「千も捕まっているらしいからな……俺の組の奴を傷つけようとしている物は許さん。」

ぬらりひょん「ほっほっほ……四季、お主も素直じゃないのお」

ぬらりひょんさんが意地悪そうな顔をしながら言うと四季さんは少し顔をそむけて

四季「う、うるせえな……ちなみに後これと同じ大きさのケースが

20箱ある。」

四季さんの一言に僕は目の前にあるケース（ザンキさんが持っているケースの1/5倍近くの大きさ）を見て軽く想像した：「うん

ジンキ「四季さん…凄く…多いです。音叉一つと音弦一つじゃ足りないと思っ…」

四季「うん、俺も作りすぎたと思っている…予備ある？」

ジンキ「一応バッグの中に音叉が二つ…リクオ君手伝って」

リクオ「あ、はい…」

この後大量のディスクアニマルを放ち、僕とリクオ君、四季さんはバイクを使い、町の中を回った。そして日が沈んだ時、一体の茜鷹が来た…どうやら居場所を見つけたらしい。

僕は鷹をディスクに戻し、白光のディスク投入口に入れた。理事長曰く白光はディスクアニマルを入れることでカーナビのような役割を持ち、現場へ急行できる機能がついている…らしい。

僕がディスクを入れるとリクオ君が一旦降り、ヘルメットを外すと髪の毛は茶色の部分は白色へと変わっていき、髪の毛がどんどん後ろに長く伸びて行った。変わり終えたリクオ君は僕の方をむき

裏リクオ（仮）「さて、ジンキ討ち入りに行くか！」

ジンキ「あ、ああ…（リクオ君も二重人格か？）」 勘違いしている

リクオ君は四季さんのバイクに乗って僕達はナビを頼りに瑠妃さん達が居る場所へ向かった。

瑠妃「んっ・・・」

私が目を覚ますとそこはどこかの倉庫のようで外からは船の汽笛が鳴り、窓からは暗くなっている空が見えた。  
私は起き上がるうとしたが

ジャリッ

起き上がれなく、私の体には鎖が巻かれていた。そして私の隣には同じように鎖に巻かれた千さん、みぞれさん、つららさん（リクオさんの方の雪女さんの名前）の姿があつて、三人は私の様子を見ると

みぞれ「ああ、お前も起きたのか？やけに遅かったな？」

千「まあ、それはそうだろうね、“リクオの同級生を逃がすために攻撃をかばった”からね。」

千さんの言葉で私達がここに来る前の事を思い出した。あれは服を買った後の事だった。三人で歩いていると後ろから異様な気配を感じ、人気の少なそうな路地裏に行くとリクオ君達と同級生の女子と会い、背後からこの前のシンキさんに吹き飛ばされた不良がい

きなり襲いかかってきて、私は同級生の方を逃がす為に攻撃をかばい私は気を失ったのだ。

千「いやあ、あの後返り討ちにしようとしたがね・・・」

みぞれ「奴らお前を人質にしてな私がなんとかお前のディスクアニマルを使って、ジンキに連絡はした。」

瑠妃「そうでしたか・・・みなさんすいませんでした。」

つらら「そ、そんな謝るのは私の方です。おふた方はお客様なのにこんな目にあわせてしまって・・・」

すると私たちに近づく足音がいくつか聞こえ私たちがその方をむくとスキンヘッドの人を先頭にこの前の不良、ほかにも多くの男性が来て、私達を舐めまわすように見て

スキンヘッド「へえ、なかなかの上玉じゃねえか。」

チャラ男A 不良A「へへへ、そうでしょう。」

不良B「しかも全員妖怪ですからさらにいいでしょう。」

不良達の嫌な笑い声が響くと千さんは

千「なあ、あんたら何もんだい？私たちをこうしてどうするつもりなんだい？」

千さんの質問にスキンヘッドの人は

スキンヘッド「俺達は餓狼団っていう群れを追い出された人狼の集団でな、今は小さな軍団だがこの組を大きくしたかったんだが、金が足りなくてな、ちょうどこの港に綺麗な女の子がいたら買い取ってくれるバイヤーがいるらしいから、すまないがお前らには売られて貰う。」スキンヘッドさんがそう言つと周りにいる不良は

不良A「しかし兄貴、コイツ等つまみ食いしないっすか？」

不良B「へへへ、そっちの短い髪の子、俺タイプなんっすよ。」

不良C「俺はアソコの長い髪の女の子がいいなあ。」

不良達がそう言つとスキンヘッドさんは千さんを少し見た後、

スキンヘッド「まあ、俺もあの女性がいいし、バイヤーの指定に清らかじゃないといけないとは言われてないからな…さてお嬢さん達、先に言っておくがここで叫んでも無駄だからね。」

と言いながらスキンヘッドや不良達はそれぞれ私達に近づいてきた。

後数歩の所に来たとき、

ブアアアアン！！

????「ハアアアアアアア…」

バイクの音と男の声が聞こえ、

????「スパークリングアタック！！」

ボカン！！

手下「「「ギヤアアアア！？」」「」

スキンヘッド「グッ！？」

雷を纏った白いバイクに乗った人がスキンヘッドさんやその手下を吹き飛ばした。

バイクは私達と不良達の間にとまるとスキンヘッドさんは

スキンヘッド「テメエが四季か？」

と尋ねると壁の穴から四季さんと髪の毛が後ろに長い…気配からしてリクオ君？がバイクに乗りながら白いバイクの隣に来て、

四季「残念ながら四季は俺の事だ。」

不良B「じゃあこの町を仕切っている奴良組の三代目、奴良リクオか！？」

リクオ？「違つぞ、それなら俺だ。」

スキンヘッド「ならアイツは誰だよ！？」

スキンヘッドさんがそう言うと私の目の前にいる鬼…刃鬼さんはゆっくりとバイクから降り、私達の方を向いて

刃鬼「瑠妃さん、みぞれちゃん、遅れて御免ね。直ぐに片付ける

から…」

刃鬼さんは私達に言つとスキンヘッドさん達を方を向いて右手に音叉剣を出し、肩に担ぎ、左手を指差すように

刃鬼「神の器の一つ、刃やいば！それを使う鬼の刃鬼！！人を…愛する者を護る為！！アナタ達を斬る！」

刃鬼さんがそう言つと、スキンヘッドは右手んを上げると手下の人全員が武器を構えた。

スキンヘッド「はっ、たった三人で俺達50人相手に勝てると思つているのか？」

と笑いながら言つたが四季さんとリクオ君は

四季「50人か…刃鬼一人で足りるな。」

リクオ？「そうだな…刃鬼手伝い入るか？」

と言つた。刃鬼さんはリクオ？君達の方を向かず、刀を両手に持ち替えて

刃鬼「いえ…結構です。さて、そのMr・スキンヘッド、君の部下はそれで全員か？」

スキンヘッド「ああ？そうだが、それがどうかしたか？あまりの数の多さに臆したのか？」

刃鬼「ふっ…違うよ。その逆さ。」



不良「ひ、ヒイ!？」

スキンヘッド「し、死にたくない!死にたくないよおお!！」

餓狼団のメンバーが犯罪者連行用バスに乗せていくのを見て、と、九曜さんが刃鬼に近づいてきて、

九曜「刃鬼さん…今回はやり過ぎですよ。」

刃鬼「ん?そうか?まあ瑠妃さん達を攫った事や相手が圧倒的に数が多かったから…ね?」

九曜「それを50人を10分で倒した人がいますか?…全くこんな普通なら無茶と思われる事を平然とするから、学園で変な噂が立ったり男に追っかけられたりするのですよ。」

刃鬼「九曜さん、色々とすまない。」

九曜「まあ、公安はそんな誰かを護る為に闘う刃鬼さんだから、安心してついて行くのですから。では…自分はこれで」

刃鬼「ああ、また学校で会おう。」

公安が立ち去った後、刃鬼は私と瑠妃の前にゆっくりと歩いてきて、私たちの立っている二歩前で止まると

刃鬼「二人とも…怪我はない?」

刃鬼の一言にまず瑠妃が

瑠妃「はい、大丈夫ですが…迷惑をかけてすいませんでした。」  
そして私も

みぞれ「すまない、うっかりしたばかりに…千さんにも迷惑をかけてしまった。」

千「気にするな、こうして皆が助かったわけだし…な。」

四季「それに刃鬼はそんな言葉は聞きたくないみたいだしな。」

瑠・み「…………え?」

裏リクオの一言に私達は刃鬼の顔を見ると顔の変身を解除したジンキは私達にさらに近づいて

ギョッ

瑠妃「え?」

みぞれ「ん?」

私達に抱き着き、

ジンキ「良かった…皆…無事で…本当に…………良かった。今度も…  
間に合った”。」

震えた声で呟くように言い、大きな腕で私達を抱き寄せた。

リクオ達は目の前の光景、ジンキが連れの人二人に泣きながら抱きついている事に啞然としていた。

千「ジンキにも泣くことあるんだね……」

リクオ「鬼の目にも涙だな……」

するとつららが

つらら「でも、間に合ったとはどういうことでしょうか？」

と疑問に思ったことを言い、その質問にオレが答えた。

四季「確か前にエイキさんが言っていたのだが、ジンキとエイキさんは……本当の親子じゃない。」

リクオ「!?!」

千「つまり……とがめ達と同じ養子なのかい？」

四季「そう、元々ジンキは俺達とは違い、ただの人間で、小学校の頃に生みの親を目の前で殺されらしく、力のない自分が嫌でエイキさん達のもついで、一生懸命心身を鍛えて、鬼の力を手に入れ、最年少の鬼となった。」

リクオ「……」

四季「最初は鬼の力で人が助けられるのが、うれしかったらしく  
エイキさんも嬉しそうに話していたよ。でも…鬼になってからはど  
こか感情を殺した感じがしたらしい…実際鬼として活動し始めた中  
学では友達もいなくて、いじめも起きてたが、それを隠していた…  
なぜだと思う？」

つらら「鬼の力を出さないためですか？」

四季「確かにそれも一理あるが、明日夢君がジンキとそのことに  
ついて話したら、ジンキ曰く新しい家族に迷惑をかけるわけにはい  
けないって言うていたらしいし、先輩の鬼と一緒にいくと必ず自分  
自身を囮にして敵の攻撃からかばうらしい…家族を失いたくないら  
しい。」

俺の言葉に皆黙って聞いていた。

四季「でも、陽海学園に入ってからには変わった。」

リクオ「?…どういうことだ?」

四季「学園に入って初めて魔化魍退治かけたとき、たちばなの  
おやつさんに友達ができたこと、部活に入った事をとても嬉しそう  
に話していたらしい…特に瑠妃さん…彼女ができたときは話してい  
るエイキさんが血の涙を流すくらい楽しそうに話していたらしい…  
だからジンキは友達、家族を助けられないことを怖がっていた…とい  
ったところか。」

俺が話し終えてつららと千を見るとつららは号泣、千も目頭を押  
さえて上を向いていた。

つらら「グスツ…いい話でずう〜!!」

千「ジンキ…お前という奴は苦勞を…涙が……」

泣いていた…その時、リクオが俺の肩をたたき

リクオ「おい、四季……」

四季「どうしたリクオ？」

四季がリクオの方を振り向くとリクオはジンキ達を指さし

リクオ「あのみぞれというやつ…苦しんでいるぞ。」

四季「は？」

俺はジンキ達をよく見るとみぞれちゃんはジンキの肩を必死にタ  
ップしていて瑠妃さんは、

瑠妃「ああ…ジンキさん、もっと強く／＼／＼／」

顔を赤くして嬉しそうな顔をしていた。確か鬼の力って響君曰く  
20トン近くあったような…やばいな…俺はジンキのそばへ行き

四季「おい、ジンキ君？そろそろ二人とも離してあげては？」

と尋ねるがジンキは

ジンキ「良かった、本当に良かった！」

俺の言葉が耳に入っでなく今度は昼のリクオ（これ以上裏になっても意味がないから）が

リクオ「ジンキさん！お二人からミシミシと音がなってますよ！離してあげてください！！」

と大声で言うが聞こえてなかったたので、俺はため息を一回ついで、近くに落ちてた鉄パイプを拾って

四季「セイツー！！」

ゴインー！！

ジンキの脳天へ唐竹割りをお見舞いした。鉄パイプはジンキの頭の形に沿ってへこみ、

ジンキ「空いたあ！？じゃなくてアイタア！？」

ジンキは二人を離してその場に座り込み、少しして

ジンキ「四季さん！！いきなり何するんですか！？」

四季「いやいや、ああでもしないとそこのお二人さん…全身複雑骨折になっていたぞ…今の君の姿を考えたらわかるだろ？」

俺の言葉にジンキは自分の手を見て何回か手を開いたり閉じたりして

ジンキ「しまったあああああああああああああ！！忘れてたあああああああああ！！」

リクオ「忘れちゃ駄目でしょおおおおおおお！！」

ジンキ「いつも瑠妃さんを抱きつくのは、着替えてから抱きついていたけどその時思いつきり抱き着く癖ができて手加減が…」

リクオ「言い訳無用！！ジンキさんはそこに正座してください！！」

ジンキ「ウ、ウエイ…」

リクオ（身長148？、普通の体型）がジンキ（身長180？、マッチョ）に説教をするというシニールな光景を笑いをこらえて瑠妃さん達に

四季「大丈夫か？」

と尋ねると

みぞれ「ま、まあこれもジンキの愛と思えば…もう少し抱きつかれていてもよかったな。」

つらら「流石はみぞれさん、私も見習わなくては…」

みぞれ「では明日と明後日、私達で特訓をしよう！」

つらら「はい！！」

四季「いや、しないでくれよ！！リクオ君、心配しすぎて胃に穴が開くぞ！？」

闘志を燃やしている雪女二人組は無視して

千「で、瑠妃さんは…」

瑠妃「ああ、やっぱりジンキさんに抱き着かれると…いい。ビリ  
ビリが加わっていたらもっといいかも…でも…」

瑠妃さんは体をクネクネしながらなにか呟きだしたので

四季「千…少し外の空気を吸ってくる…」

千「私も行くよ…」

なんか色々とかオスなその場を後にして外に出ると突然千が

千「なあ、四季」

四季「なんだ？」

千「ジンキは彼女達を助ける為に全力を尽くしたんだろ？」

四季「ああ、彼女たちが攫われたと聞いたとき周りの草が焦げて  
たな。それに俺が一旦止めた時も俺に殺気を向けてきた…魔化魍も  
逃げ出すぐらい強いいな。」

千「そう…なら今回は私達が…その、変な事をされる前に四季達  
が来たけど…もし私が奴らに汚されたら四季はどうする？」

千の言葉に俺は即答で



刃鬼輝「全く……」

僕は四季さんを蹴り飛ばし皆を見ると

リクオ「四季さん……」

瑠妃「ジンキさんが鈍かったら私の気持ちに気づいてもらえない……なんていう放置プレイ！」

みぞれ「私は嫌だな……」

千「期待した私が馬鹿だった……。」

つらら「千さん、ドンマイ！」

僕は顔の変身を解いた時、光鷲が紙を加えてきて僕がその紙を広げると

ジンキへ

お主の着替えは化猫茶屋に送ったから割引券と一緒に息抜きしてこい。

ぬらりひょんより

ジンキ「だって、行きますか？」

瑠妃「はい！！」

千「今日は…自棄だ！みんな支払いは四季の坊やにさせるからど  
んどん食べてくれ！」

みぞれ「ならありがたくごちそうになるか…。」

つらら「でも、四季さんはどうしますか？」

ジンキ「僕が担いでいくよ。バイクは回収されているし（モヒ安  
達が）、あとは僕の姿だけど、屋根を走って行けばいいからね…そ  
れじゃ行くよ！！」

僕は四季さんを担いで皆で良太郎君の店に向かった。

刃の音撃戦士特別編「探している物は意外と近くにある。そしてタイトルが長い」  
↳化猫茶屋での男の会話

四季（焼酎）「いててて、ジンキお前本気で蹴りやがって…いてて」

ジンキ（ジンジャエール）「すみません…ついそういえば鬼刃刀の事ですが…まだでしょうか？」

リクオ（お茶）「確かにジンキさんも学校休んできてますから早くしてあげないと…」

四季「はあ、しょうがねえだろ。あのアームドセイバーの刀身だけなら3日もあればできるが、機械の所が…特に魔術の部分が俺には全く分からないんだ。」

ジンキ「え！？あの〜四季さん？機械の部分は作らなくていいんですよ。」

四季「なんでだ？」

ジンキ「機械の部分は猛士と理事長の共同開発で専用の機材で作るので…その四季さんが全部作る必要ないんですよ？」

四季「つまり俺の工房に閉じこもり夜遅くまで起きてきた今までの努力は…一体……」

ジンキ「無駄になってしまいましたね…。」

リクオ「その…ドンマイ…」

四季「オーズ…orz」

浦太猫「またあつたね。ねえ、君達僕に釣られて「させるかあああああ！！」ギヤアアアアアア！！！」

良太猫「浦太猫おおお！？」

ジンキ「二人に手を出す奴は…許さん！！！」

刃の音撃戦士特別編「探している物は意外と近くにある。そしてタイトルが長い

はい、ようやく特別編後編です！！今回も長いですが楽しんでいただけると幸いです。

刃の音撃戦士特別編「探している物は意外と近くにある。そしてタイトルが長い！：後編……生まれ変わった鬼の“刃”」

ジンキ「・・・ふう」

土曜日の朝、僕はリクオ君と一緒に近所の公園（片道3キロ）までジョギングをした。僕は自動販売機で買った水を遅れてやってきたリクオ君に投げ渡した。リクオ君は水を飲み

リクオ「ハア、ハア…ジンキさんすごいですね毎朝この距離を顔色一つ変えずに走りきるんだもの。」

とリクオ君は感心したように言ったが

ジンキ「いや、いつもはこれの二倍だね。それに筋トレとイクササイズも含めてやっているね。」

リクオ「アハハハ…」

僕の朝の運動メニューを聞いたリクオ君は苦笑いしていると

??「フツ！ハツ！」

女性の声が聞こえ僕とリクオ君が声の方を歩き、木の陰に隠れてみると短い黒髪で体操服を着た女の子がお札を持って何かの練習をしていた。リクオ君は女の子に面識があるのかゲツ!?みたいな顔をしていた

ジンキ「リクオ君、どうかしたのか？」

リクオ「彼女は花開院けいかいんゆらちゃん…陰陽師なんだ…」

僕は“陰陽師”という言葉にギョツとし、その場を去ろうとしたが

ゆら「さっきからそこで私をみているのは誰なんや？」

ゆらさんにはれてしまいリクオ君、僕の順で出るとゆらさんは

ゆら「リクオ君と…そちらの人は？」

ジンキ「どうも、今リクオ君の家でお世話になっているジン…松坂刃と言います。」

僕がと言いながら彼女が右手に札を持っていたので握手をするために左手を差し出すと

ゆら「なんや、あんさん“戦鬼”かいな。」

僕はハツとして左腕を見ると鬼弦がゆらさんに見え、僕は

ジンキ「…サラバだっ！！」

全力で逃げ出した！！

ゆら「あんた、ちよい待ちっ！！縛！！」

しかし逃げられなかった！！

僕は陰陽師のお札によつて動けなくなり、ゆらさんが僕に近寄り  
ゆら「なんであなた私から逃げるん？…もしかしてあんさん陰陽  
師に追われたことがあるん？」

由良ちゃんの問いかけに僕は頷き、リクオ君は驚き

リクオ「え？ゆらちゃんそれはどういうこと？」

ジンキ「ハア、どうやらゆらさんは“あの事件”を知っているよ  
うだし当事者で被害者の僕から話すよ。」

僕は体に力を籠めお札を燃やすと起き上がり

ジンキ「あれは僕が父さんと一緒に各県を回っていた頃、」

「ジンキが中学一年の頃」

僕と父さんはチームとして各県に助っ人として、京都に来た時に  
ちょうど人里の近くに魔化魍が出てそれを父さんと討伐した後、下  
位の陰陽師に見つかつて…

陰陽師A「待て、妖怪！！」

陰陽師B「大人しく滅せられい！！」

陰陽師は戦鬼を妖怪と勘違いして追つてきたんだ。最初は二人だ  
つたんだが、数分もすると数は馬鹿みたいに増えていつて陰陽師の  
集落に入り



ジンキ「何気にすることはないよ、シュッ！」

リクオ「軽いですね。」

ジンキ「まあ、僕もしつこくあのことをネチネチいう事はつもりはないよ。さてリクオ君、そろそろ戻るか？」

僕は右腕の腕時計を見ていうと

リクオ「あ、そうだね。じゃあゆらさん、また明日!!」

ジンキ「失礼させてもらうよ！シュッ！（明日って日曜日じゃあ…？）」

僕達はゆらさんと別れて全力疾走でその場を後にした（勿論リクオ君は死にかけていたけど）。

俺はディスクアニマルの反応があった洞窟へ向かった洞窟の入り口に立った時何の反応もなかった。

鋭鬼「はあ…移動したか…それよりも俺はジンキ分が欲しい！最近は瑠妃ちゃんとかみぞれちゃんがジンキを独占しているけど、たまにも俺にも独占させてほしい…」

俺は息子の事を考えた。あいつと会ったのもこんな山の中だし、



ジンキ「…でこれはどういう事が説明してもらおうか？」

僕は仁王立ちで目の前で正座している心愛（こーちゃんも反省はしている）、キリク、白鋼を睨みつけた。心愛はうつむいたままで動かないがほかの二人は

キリク「いや、俺の魔力が少し戻り、心愛も新しい必殺技ができたからその報告できたんだが…」

白鋼「出迎えてくれた妖怪（青田坊）が強そうだからつい三人とも血が騒いで…」

キ・白「「やっちゃまったんだぜ」「」

ジンキ「おお、キリク君おめでとぅ…で、本音は？」

キ・白「「血が騒いじやった心愛を止めませんでした！！」「」（土下座）

二人がそう言い僕は心愛の方を見て

ジンキ「心愛…君が新しい必殺技を手に入れた。これがうれしい事はわかる。」

心愛「義兄さん…」

心愛は僕の顔を見たが僕は冷たい視線を送りながら周りを見渡し、ジンキ「だが、道場をこんなにも穴だらけにして、新必殺技も僕

に不意打ちでくわすな！！あれを僕じゃなく月音君が食らっていたら死んでたよ！！…罰として後で音撃斬な。」

心愛「え！？ごめんなさい義兄さん！！頼むからあのビリビりはやめて！！」

ジンキ「別に僕一人だからいいじゃん！！猛士にいた時なんか共鳴音撃（ヒビキ、トドロキ、イブキ）食らったんだから！！」

キリク「うわっ痛そう…」

四季「餓鬼一人に大技かけるなよ。」

瑠妃「でもいいかも…ウフフフ…」

白鋼「瑠妃さ〜ん、元の世界に戻ってきてください。」

リクオ「あははははは…」

ジンキ「まずはこの道場の修繕だな…白鋼君、キリク君、心愛ちゃんも手伝え…反論は認めない…いいな？」

キリク「大丈夫だ、問題ない！」

白鋼「サー、イエッサー！！…これくらいなら半日あれば直せますよ…」

ジンキ「むしろ半日もかかるか？公安を使えば、5時間で直せるけど…」

リクオ「え！？半日で直せるの!？」

ぬらりひょん「ジンキはほんとうに人間か？」

～道場建て直し中～

僕達が晩飯を庭で食べながら心愛さんを叱っている時、携帯に着信が入り携帯を開くとおやっさんからだった。

僕は席を離れ、庭の隅の方で通話ボタンを押し、耳にあてた。

ジンキ「もしもし、ジンキです。」

おやっさん「あ、ジンキ君実は…」

僕はおやっさんのに任務の内容に僕は危つく携帯を潰してしまいそうだった。それは…

エイキ父さんがツチグモの童子と姫ににやられて…行方不明……

おやっさん「でも、エイキ君の遺体とかは見つかっていないから、安心してね。ジンキ君が向かうのは明日でいいから」

ジンキ「はい…で場所はどこですか？」

おやっさん「え〜っと…場所は今君のいる町に近い山で……」

僕はおやっさんとの電話を終わり、深呼吸をして振り返ると

四季「お仕事かい？ジンキ君？」



白鋼「なら俺達は他の所を二人一組で散策して、襲われている人がいたら非難させます。」

ジンキ「ああ、でも姫と童子は片方だけなら大丈夫かもしれないが、両方いたら気を付けて逃げろよ。もし敵が鎧なら逃げることで考えろ。」

キリク「了解、能力的に考えてペアの組み合わせとしては俺と心愛、白鋼とみぞれ先輩、ジンキ先輩と瑠妃さんでしょうね。」

心愛「なんで私がロリコンと…」

キリク「俺はロリコンじゃねえし、あれは事故だったの…!」

瑠妃「早く見つけることが鍵ですね。四季さん、この前のディスプレイアニメルをお借りしてもいいですか？」

四季「ああ、いいよ。元々猛士に送る予定だし、それとジンキの新しい刀なんだが、もう少しかかるがいいか？」

ジンキ「ええ、大丈夫です…そうだった…!」

僕は地図を持ったままリクオ君の元へ行き

ジンキ「リクオ君、この山について何か知っているかい？」

リクオ君はその山の名前を見て、

リクオ「あ、明日僕達が行く山だ。これがどうかしました？」

ジンキ「まじかよ……」

僕はリクオ君達が魔化魍に会わないことを願ったが…まあ、なんというか無理だったね。だって山に来て5分も経たずに真正面からばったり見つかったものリクオ君絶対呪われてるって…！とりあえずリクオ君達は瑠妃さんとみぞれちゃんが避難させているし、青田坊さんとつららちゃん、後、心愛ちゃんがいるから問題ない。

白鋼「先輩も闘ってくださいよ…！」

キリク「ってか先輩が一番強いんですよってウワツ…！」

今は白鋼君は速さを生かしたヒット&アウェイ戦法を、キリク君は黒く胸に銀色のハートが付いた鎧を来て剣で鎧童子の槍をさばいていた…ってか二人とも僕でも苦戦する鎧の童子と姫とほぼ対等に戦えるってすごいじゃん…！！

刃鬼「ああ、すまない。まずは…」

僕も烈光を構えてまず、白鋼君の素早い攻撃で動けない鎧姫に烈光弾を放つ

刃鬼「ハアア…！」

鎧姫「グハア…！」

そして姫が怯んだ隙に懐に近づき、烈光で姫の武器を闘い落とし、光震天を取り付け鼓が展開されると

刃鬼「音撃打「閃光連打」の型!!」

素早く音撃を決め、童子の方をむくと、近くの土が盛り上がった場所が揺れだし、

バゴンッ!!

鎧ツチグモ「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!?!」

刃鬼「な、ツチグモ!?もう成長していたのか!？」

白鋼「先輩危ない!!」

僕は土蜘蛛が成長していることに驚いて、白鋼君の一声で烈光をクロスすると童子の槍を防ぐことができた。僕は槍を上には飛ばし、童子の腹部を蹴り、距離を開けるとキリク君と白鋼君が僕のそばへ来て

キリク「先輩ここは俺とシロに任せて先へ行ってください!」

白鋼「奴が向かった先には恐らく瑠妃さんやリクオ君達もいます。」

二人は僕にそう言い童子へと闘いに行った。僕は

刃鬼「二人とも…死ぬなよ!!」

と大声で言い、ツチグモが走っていった方へ向かった。

私達は山に入って少し奥に入った時姫と童子に会いジンキさん達が時間を稼いでくれたおかげで何とか逃げる事ができましたが：

心愛「う、中学生ってこんなに重たいの！？しかもなんで二人も担がなきゃいけないの！！」

夏実（リクオ君の友達その1）「ううん…のっぺらぼうの鬼さん（刃鬼の事）…頑張って…」

紗織（リクオ君のお友達その2）「うう…オカマとオナベが（姫と童子の事）…人間じゃなくなった。」

倉田（青田坊）「心愛の嬢ちゃん、人間というのは意識があると落ちないように重心を取ってくれるが、意識を失ったり寝ている人間はそういうことをしてくれないからな。」

清継（リクオ君の友達その3で妖怪馬鹿）「むにやむにや、僕の主…」

島（リクオ君の友達その4）「うう…清継君…流石にやばいですって…」

追手の事もあり、術で敵の動きを封じることができない心愛ちゃんと倉田さんには気を失った人を二人づつ担いでもらい山を降りている。私もカナちゃんという子を背負っているが女の子達と倉田さんが背負っている島君は姫と童子、鬼の姿の刃鬼さんを見て気絶してくれたので比較的楽でした。

しかし清継という子はリクオ君曰く「夜のリクオさんに会いたい一心で妖怪に近づいていく」という馬鹿で無理やり魔法で眠らせることにしたのですが…もうひとり厄介な子がいて

ゆら「なんで妖怪を目の前にして逃げるんや!！」

このゆらって女の子陰陽師としてのプライドが高く、魔化魍を妖怪と勘違いしているようでしかもお友達を「足手まとい」と言い、今にも来た道に戻ろうとしている

みぞれ「だからさっきも言った通りあれは妖怪なんて甘い存在じゃない…お前が行った所で餌になるだけだ。」

とみぞれさんが雪のように冷たく言っても

ゆら「そないのやってみへんとわからんやろ!！」

と無視する一方でみぞれさんも何度か私のそばに来て小声で

みぞれ「なあ、あいつ氷漬けにしてもいいか？」

と言いましたが、その度に私が

瑠妃「ジンキさんに嫌われますからやめてくださいね。」

と注意していた。そのやり取りが5回目を終わった時、地響きが聞こえ

鎧ツチグモ「キシヤアアアアアアアアアアアア!！」

ツチグモが目の前に出てきた。その時

ゆら「出てきたな、妖怪!!私が成敗する!!」

ゆらさんが私たちの前に立ちお札をツチグモに投げ、それがツチグモに触れると

ボンツ、ボンボンツ!!

と爆発を起こすがツチグモにはそんな小細工は全く効かない、私達はその隙に物陰に

ゆら「なら…これならどうや!!行けっろくそん禄存、ぶきま武曲!!」

ゆらさんは式神を出して鹿は角で、武士は刀でツチグモを攻撃するが普通ならまだしも相手は鎧、足にあっさりとおしらわれ式神の反動でゆらさんもその場に尻餅をついて起き上がるうとした時、ツチグモはゆらちゃんの目の前に迫り、食おうとした時

ダッ!

????「ウラッ!!」

ドンツ!!

ゆら「あつっ!?!」

誰かがゆらさんを突き飛ばし、ゆらさんは大丈夫だったが代わりにツチグモに噛まれている人を見て私達は顔から血の気が引いた。

それは・・・

刃鬼「グッ!?グウウウ...」

刃鬼さんだったからだ・・・

俺達は刃鬼先輩がツチグモを追った後、鎧童子と闘ったが...

キリク「ハア、ハア...こいつかてえ!!うおつと!?!」

白鋼「ぜえ、ぜえ...当たり前だろ!!童子の上位種だぞ!!フンッ!!」

俺達は攻撃をかわしながら同時に攻撃をしているが、俺の対人間用の剣は刃こぼれをしていて切れ味はなくなり、白鋼の拳や靴からは血がにじみ出ている。

キリク「不味いな...クソッ嫌と言うほど修行したのにな...」

白鋼「ああ、ヤバいな...ここまで効かないとは悲しくなるな。」

俺達は鎧を見ていて鎧は槍を構えた時

シュッ!

???「あらよつと!」

ヨウッ！

鎧の後ろに鼓ができて

????「音撃打「必殺必中」の型！！」

太鼓の音が聞こえ目の前の鎧が灰になると俺達の前に手の所が薄い緑色で、背中に刀を背負った三本角の鬼がポーズを決めて立っていた。鬼は

鬼「ふっ、大丈夫か刃鬼…っていないし！！しかも君たち誰！！」

鬼の人は肩を落とし俺達を見た。白鋼は警戒していたが俺は近づいて

キリク「俺、自分の名はキリク」S「ガーランド、あっちにいる白鋼と共に刃鬼先輩の後輩です。であなたは？」

俺がそう紹介すると鬼は腰に手を当て

鋭鬼「ああ、俺の名は鋭鬼、刃鬼のお父さんだ！！どうだ凄いだろっ！！」

と言っていたが

白鋼「ああ、財津原先生が言っていた子離れができないバカ親ね。

キリク「ああ、刃鬼先輩が言っていた今でも頬擦りしてくる寒いギヤグしか言わない親父さんね。」

俺達の言葉に鋭鬼さんは

鋭鬼「オオオオウ……ザンキクロス!!」

と大粒の涙（どこから出しているのか疑問だが）を流していたがピタッと止まると

鋭鬼「今息子がピンチだ!!」

と言つて刃鬼さんが走つていった方に走り出した。俺達も少し遅れて追いかけると

鎧ツチグモ「キシヤアアアアアアアアア!!」

刃鬼「ゲウウウ……」

ツチグモに捕まり、噛まれたところから血がしたたり落ちている刃鬼先輩の姿があり、その姿をみた鋭鬼さんは

タンッ!

鋭鬼「俺の息子を離せやあああああああ!!」

と地面を蹴り空へ飛んで蹴りをしようとしたがその前に刃鬼先輩が白い燃え上がり白い雷も纏っていたので、

ツチグモ「ギヤア!?!」

ツチグモは思わず刃鬼先輩を放し、その直後鋭鬼さんの蹴りが土蜘蛛の頭部を捕えツチグモは吹き飛ばされた。刃鬼先輩は地面に着地すると

刃鬼輝「ハア、ハア、ハア・・・」

息を荒げ、膝をついた。すると木の陰から涙目の瑠妃さんとみぞれ先輩それと心愛も駆け寄り

瑠妃「刃鬼さん！！？」

みぞれ「大丈夫か！？」

心愛「義兄さん！？血がつ！？」

刃鬼先輩は瑠妃さんとみぞれさんの肩に手を置いて

刃鬼輝「安心して怪我は…フンッ！」

気合を入れ傷口をふさぐと立ち上がり、鎧の方を見て

刃鬼輝「さて…今まで噛んでくれ多分お返ししないかね…」

刃鬼先輩はそう言いツチグモに走り出そうとしたが、

鋭鬼「まあ、待て刃鬼。」

グイッ

刃鬼輝「グエツ!？」

ズデンツ!

鋭鬼さんが刃鬼先輩の銀色の部分を引つ張り止めた。

僕はすぐに立ち上がり父さんを睨みつけた。

刃鬼輝「父さん!!いきなり何するんですか!!」

すると父さんは背中に背負った刀を僕に渡した。父さんは僕に近づき

鋭鬼「四季さんが午前中に打ってくれて、ここに来る時河原で伸びてた全裸の俺を発見、そしてこの刀を渡してくれたが、これは刃鬼、お前のだ。」

僕はそれを受け取り鞘から抜いた。新しくなった鬼刃刀は前よりも一回り大きく、それで軽い、白く輝く刃紋は僕の顔を綺麗に映していた。周りの皆も刀に見とれていたが、

鎧ツチグモ「キシヤアアアアア!!」

ツチグモは足を上げ、僕達に振り降ろしてきたが僕は鞘を投げ、刀を構え



キリク「させないぞ!!」

みぞれ「…凍れ」

キリク君とみぞれちゃんが足を凍らせ、心愛ちゃんは音叉剣を持ち地面を蹴りあげ、飛び上がる。

心愛「私の新必殺技を…食らいなさい!!」

そしてキリク君も大きな竜巻を作り、その中に入り

キリク「これも食らってもらおうぞ!!」

心愛ちゃんの体をこうちゃんの羽が巻きつきドリルのようになりキリク君も足を鎧ツチグモに向けて竜巻と一緒に向かう。

心愛「くらえええええええええ!!」

キリク「スピニングダンス!!」

二人の蹴りはツ鎧チグモの足を割り、鎧ツチグモは僕達に口を向けたが

刃鬼輝「させんよ!!」

僕は刀を口めがけて投げた。刀は鎧ツチグモの口に刺さり、ツチグモは痛みにもがき、その隙に僕と父さんは鎧ツチグモを挟むように立ち、

鋭鬼「よつと!!！」

刃鬼輝「ハッ！」

音撃鼓を貼り付け展開させると音撃棒を振り上げ、

鋭鬼「音撃打…！」

刃鬼輝「双連打撃…！」

鋭・刃「輝きの型!!!！」

僕と鋭鬼さんは一糸乱れぬ音撃を決めて鎧が土くれになり崩れ去った。顔の変身を解いた父さんは

エイキ「うーん、なんかこっちの数が多かったからか歯ごたえがなかったな…。」

ジンキ「いや、童子と姫に倒された父さんが言えないセリフでしょ？まあ確かに思いのほか楽に倒せましたが…。」

リクオ（走ってきた）「いやいや、ジンキさんも人のこと言えないでしょ!!！」

瑠妃「そうですね!!輝になって抜け出したのはいいですけど、白くなるので血の跡がはつきり出ますし、傷がふさがっていませんよ!!！」

僕は瑠妃さんの一言で腹を見ると血は止まってなく、まだ少し血が出ていた…多分これは



ゆら「痛っ!?!」

鈍い音を立ててデコピンをして、ゆらちゃんが父さんを見ると

エイキ「ゆらちゃんだっけ？君は魔化魍を陰陽術で倒せると思っ  
ていたのかい？」

父さんの問いにゆらちゃんは目を合わせず黙って頷くと父さんは  
手を彼女の頭に載せて

エイキ「そうか、なら同僚に魔化魍に会ったら逃げると言ってお  
け、それと今回の事でジンキに謝っても気にするな。むしろジンキ  
の優しさは底を知らないからお嬢ちゃんに謝られると罪悪感覚える  
方だから、」

瑠妃「その通りですね。」

みぞれ「全くだ。まあそれがいいところなんだがな、」

ジンキ「なんか酷い!!」

父さん達はそう言うがゆらちゃんは

ゆら「で、でも私のせいでジンキさんは・・・」

由良さんが言葉をつづけようとした時木の陰から

四季「はあ、気にするなと言ったら気にするなよ、ゆら」

四季さんがため息をつきながら出てきた。

ゆら「四季!!?」

ゆらちゃんは驚いて札を構えたが四季さんは

四季「安心しろ、闘うために出てきたわけじゃない。ジンキ達戦鬼たちの事を教えてあげようと思ってな。」

と言い四季さんはゆらちゃんに戦鬼の事特に戦国時代までの鬼の扱いを話し、ゆらちゃんは驚いた顔でそれを聞いた。一通り話し終えると四季さんは

四季「という事でジンキ達は身を張って人間、今は人間との共存を望んでいる妖怪もかな?…まあそういった者を護る存在だから、この場合は謝罪よりもお礼の言葉を言っつてやれ。じゃあな!」

四季さんはそう言い大型バイク(どこから持ってきた!?)に乗り、去っていった。僕達も麓まで連れて行き、リクオ君達、ゆらちゃんも別れた。

俺達は奴良家に戻るとジンキ先輩は刀もでき、理事長に治療をお願いするため明日帰ることになった。そして

四季「ジンキ君達の送迎会じゃアアアアアアアアアアアアアアアア

!!!」



ジンキ「まあね、キリク君は特殊なケースだけど」

白鋼「それでも一番先輩が強いのですがね。」

するとリクオ君が真面目な顔になり

リクオ「ジンキさんは何でそこまで強くなれるのですか？」

その問いに先輩はニヤツと笑うと

ジンキ「教えてほしい？」

リクオ「はい!!」

俺はこの後「いつも鍛えているから」と言うと思ったが

ジンキ「まあ、思いかনা?…大事な人失くしたくない…一人でも多くの人守りたいという思いが…」

と先輩は手を見て真面目なことを言った。先輩は続けて

ジンキ「まあ、瑠妃さんから聞いた話ではゆらちゃんも闘えない人を足手まといと切り捨てていたらしいが、僕は逆に今自分が死んだら守れない、絶対守ってみせるって思えるんだ…」

リクオ「そうですか・・・」

ジンキ「あ、リクオ君はあまり深く考えるなよ。疲れちゃうから!それとただ決めるだけじゃなくてそれを達成できるように…」



キリク（ほんの少し酔っている）「心愛、血を戻せ！！先輩が死んでしまっぞ！！」

心愛「美味しい／＼／」

瑠妃「心愛さん！首筋にキスは許しません！！なら私も接吻を！！」

みぞれ「いや、私とだ！！」

ジンキ「た、助けて……………」

女に捕獲されたジンキ先輩は俺達に助けを求めるが…

キリク「すまないが流石に……………」

白鋼「無理だよ先輩…頑張って生きる……………」

俺達はその場から離れ、三人で縁側でぶどうジュースを飲んだ…  
…翌日の先輩はげっそりとしていて心愛は血の飲みすぎで胃もたれを起こしていたがほかの二人は顔がツヤツヤでした…四季さん曰く、密室空間に放り込んだとか…

刃の音撃戦士特別編「探している物は意外と近くにある。そしてタイトルが長い」  
帰ってきた猛士報告

血、血が……足りない……誰か助けて……

b y ジンキ

ヒビキ「ど、どづいう事……!?!?!」

イブキ「確かツチグモに食われかけたとは聞きましたが……」

香須美「確か後輩の女の子に血を吸われたとか……」

ザンキ「心愛か……あいつ月音の血よりもジンキの血が好きだから  
な……」

エイキ「ジンキ夏休み迎えられるのかな?……あつこれ四季さんが作  
ったデイスクアニマルとジンキの新しい刀」

小暮「ほう、これはこれは……素晴らしい……!」

イブキ「あ、小暮さんが壊れた。」

小暮「さつそく天明理事長と打ち合わせをしてアームドセイバー  
を作らなければ……!」

みどり「あまり強すぎる武器は作らないでくださいよ。」

ヒビキ「多分聞いてないだろうけどねえ……」

本日の金言「後で上質のレバー送ります。　bよおやっさん」

ジンキ（入院中）「ありがたい……」

明日夢「本当良く生きているね。後、瑠妃さんとみぞれちゃん、心愛ちゃんは面会禁止にしたから」

ジンキ「兄さん、すいません……」

明日夢「色々と、頑張っつてね。」

ジンキ「はい……」

第24話「夏休み、そして暗雲：前編」（前書き）

夏季休暇最終日にやっと書けた：執筆速度が遅くなって嫌になり  
ますが、今回は超久々のアノ人が登場します。

## 第24話「夏休み、そして暗雲：前編」

### 第24話「夏休み、そして暗雲：前編」

僕は常闇の祭壇で理事長の診療を受けていた。透視魔術で僕の体を見た

理事長「ふむ、食べられた肉体も完全に回復しているね…しかも強化されている。」

刃「いや、この前貰った『シャマルデザート・デラックスセット』が凄い効き目でしたよ…食べて死にかけましたがね。」

理事長「しかし、なんでデザートを食べた体力が回復するのだろうかねえ？」

刃「分かりませんよ。しかも心愛ちゃんに吸われた血や瑠妃さん達に絞られたアレまで回復しましたよ。」

理事長「不思議だねえ…」

刃「不思議ですねえ。」 僕達が雑談をしていると瑠妃さんが来た。

刃「おつ、瑠妃さん月音君の修行の方はどうなっていますか？」

本来なら月音君の修行に関しては僕がやる予定だったのだが、腹の一部を食われていて、その治療の為、月音君の修行は裏萌香さんに一任していたのだ。しかし報告をする瑠妃さんの表情は暗く、

理事長「修行が行き詰まり始めている？」

瑠妃「はい、理事長。月音さんは“毎日”裏萌香さんの修行に耐えています。何か悩みでもあるのかここ数日は特に修行に身が入らない様子で…」

瑠妃さんは一生懸命月音君のフォローをしているが、理事長は僕の方を見てから

理事長「瑠妃君、」

瑠妃「は、はい」

瑠妃さんは額に冷や汗をかきながら理事長を見ていた。

理事長「少し暇をやるから人間界にいつて休養でもしてきなさい。」

理事長の言葉に瑠妃さんがポカンとして、瞳に涙を浮かべ

瑠妃「…わ…私、クビですか？私は刃さんから離れたくありません！」

と言ったが理事長は手を左右に振りながら、

理事長「いやいや、違うから。君の為でなく月音君の為だからな。しかも今この場で君にクビを言い渡したら刃君にマウントポジションでたこ殴りされるから」

と理事長は少し慌てて言った。とりあえず空気になっていた僕は

刃「大方、月音君は裏萌香さんに追いつけないから自信を無くしているのでしょうか。と言うか、あれほど裏萌香さんには月音君の相手はたまには替えるって言ったのになあ…そこまで月音君を独占したいのかあの子は!？」

僕はムキーとハンカチを噛み締めていると理事長は結界を調整する機械を操作しながら

理事長「まあ大結界の中には見えてこないものもある。行き詰まったら外に出て己と向き合うのもいい。」

刃「学園もそろそろ夏休みだし新聞部の皆と楽しんで来たら？」

僕の発言に理事長は首を傾げ、

理事長「いやいや刃君、君も新聞部だろ。何故一緒に行かないよ  
うな発言をするのかね？」

瑠妃「あつ刃さん専用アームドセイバーが出来たのですか!？」

瑠妃さんは手をポンと叩きながら言ったが、

刃「それもあるけど、実はアマキの姉御が信号待ちをしているバイクに車が突っ込む事故で入院しちゃって…勿論怪我自体は軽いけどね…」

瑠妃「確かアマキさんは正式な鬼になってから一度も入院していない鬼で猛士通信に乗ってましたよね？」

刃「うん、余りにも不吉だから鬼の皆でお被いと、アームドセイバーの受け取り、九曜さんを連れて姉御のお見舞いに行つてから、僕達はザンキさんの車で、そっちに合流するよ。時間的には1日目の夜かな？だから2日目は瑠妃さんの水着姿を楽しみにしているよ。」

瑠妃「そ、そうですか／＼／＼分かりました。それでは私は明日の準備の為に失礼します。」

瑠妃さんは顔を赤くしながら理事長に一礼して常闇の祭壇から出て行き、僕は理事長にアームドセイバー製作に協力してくれた事にお礼を言つてから部屋に戻つた。

月音「ハア…。」

俺は今日モカさんに言われた事を思い出し、ため息をついた。

月音「俺の拳が…軟弱か…。」

モカさんや刃君は俺のために修行をしてくれているけどその成果が最近はお出なくなっていた。そんな事を考えているとき、

コンコン

刃「月音君、いる？つて開いてた。」

刃君が雷光を持って入ってきた。刃君は俺の顔を見ると、

刃「月音君、今悩み持っているでしょ？…自分は強くなっていないと…詳しく話してくれないかな？」

刃君の言葉に驚いたが、刃君は瑠妃さんから聞いたのだろうと思いい、俺は刃君に愚痴るように話した。

刃君はただ相づちを打ちながら最後まで聞いてくれた。俺が話し終えると刃君は

刃「なるほど…月音君は今の自分はこれ以上強くなれない……そう思っているようだが、まずはつきりと言えることは、裏萌香さんの修行内容が悪い！」

月音「え、エエエエエ！?!？」

刃君がはつきりと否定したので俺が驚くと

刃「そりゃそうでしょう!!修行だからって好きな女の子を殴れるわけないだろ!!僕だって瑠妃さんやみぞれちゃんの手合わせするときに、手が止まっちゃう時があるんだから!!月音君もそう思うだろ?」

刃「ま、まあそうだけど…それでも多分俺は新聞部の中では一番弱いんじゃないかな?」

俺がそう言うと刃君は呆れた顔をして

刃「あのな月音君、君は萌香さんの血と言う力を持っているけど、君は基本は人間なんだよ!?!人間が1ヶ月やそこらで僕と同じくら

い強くなれると思うなよ!!」

月音「や、刃君……」

刃「僕だって鬼になるのに数年はかかった。それに戦鬼に成りたくてもなれない人も僕は見てきた。しかし、月音君は自分の戦い方を見つけて、その気になれば鬼になれる程の力を持っているんだよ！」

月音「そ、そうかな？俺は刃君みたいに強くなつてないし……」

刃「まあ、そりゃ鍛え方が違いますから、後月音君自身が気づかない疲れも貯まっているから休暇を楽しんだらいいよ。後コレ」

刃君は雷光を俺に渡して、

刃「僕は明日の午前中は皆と行動出来ないから、もし敵が来て白鋼君やキリク君がそばに居なかつたら、それを使って萌香さん達を護れ。後、刃引きはしているから安心してくれ、」

月音「いやいや、安心できないから!!なんで戦うこと前提なの!?!しかも」

刃「いや、僕達って何かと厄介なことに巻き込まれるだろ？むしろ今まで厄介事に巻き込まれてない事があつたかい？」

月音「う……ありません。大事に使わせてもらいます。」

俺の様子を見た刃君は立ち上がり、

刃「それじゃあ、明日の夜に出会おうか。シュツ！」

刃君はいつものポーズをして自分の部屋に戻っていった。

僕は月音君の部屋から自分の部屋に戻る時、妙な感覚が襲い、僕の周りの時間が止まった。僕は後ろを振り返ると黒いスーツを着た女神がアコースティックギター持って立っていた。

刃「女神さん、今度は何の様ですか？」

女神「いや、お主としダベリに來ただけじゃ…それはそうとお主、なんでお主の武器をあの月音・に渡したのじゃ？原作ではあの少年は素手で闘っておった。なぜそれを変えようとするのじゃ？」

女神さんは俺に睨みながら言ったが嘘はつけない僕は素直に言った。

刃「建前としては闘いは何もただ手合わせの数で決まるもんじゃない。いろんな武器を使い、その武器の特性、間合い、弱点を突かれたときの対策を考えることで、様々な相手と渡り合える経験が手に入る…といえはかつこいいけど本音は個人的には月音君も鬼になつてくれたら、人手不足が少しくらい解消されるなあと…ね。」

僕はウインクをしようと女神さんは

女神「フフフ…アツハツハツハツハツ！！やはりお主嘘が下手じ

やのう、建前と本音を逆に、しかも両方ともわしが尋ねる前に言っ  
とるじゃないか！！八八八八八八八八！！」

刃「あ、バレタ？やっぱ僕、嘘付けねえなあ！！」

僕と女神さんひとしきり笑った後、女神さんが一枚の紙を取り出  
した。

女神「さて、わしがここに来た本当の理由はおぬしに予言とア  
ムドの姿のことで打ち合わせをしに来た。」

刃「え！？アムドの姿って今から打ち合わせするんですか！？  
最近メル友になったジャックが予言したからってつきりもう決まっ  
ているのかと…」

女神「お主…小宮や九曜と言い、変わった奴を友達にするの〴〵そ  
のうちおぬしの争奪戦に刈愛でも加わるんじゃないのか天界の皆が  
心配しとるぞ。」

刃「天界でも認知度高いの僕！？とりあえず予定ではどんな姿な  
んですか？」

女神「それなら、ほれ」

僕はそれを見て固まった。紙には銀色の戦国版アムド響鬼の背  
中に光鷲の羽根をくっつけただけの絵で、僕は思わず

刃「無いわあ…手抜きじゃん！！」

女神「ならお主が考えるコンチキショウ！！」

刃「ええ、逆ギレ？まあ、少しは考えていたので手伝ってくれたらありがたいですね。」

女神「では、聞くがコンセプトは何じゃ？わしとしては響鬼の対となる姿を想像しておるのじゃが…」

僕は昔、響鬼さんが自分の装甲響鬼の姿を見て

ヒビキ「まるで、赤備えの武者だな。」

と言うのを聞き、ザンキさんが模擬戦での僕の闘い方を見て

ザンキ「なんか武士道と言うより騎士道の方がしっくりくるなあ…」

イブキさんとトドロキさんが瑠妃さんを連れてきた僕を見て

イブキ「なんかお姫様と騎士みたいだね。」

トドロキ「あ、それお似合いッスー!!」

…トドロキさんは何も言っていなかったな…皆の言葉を思い出し

刃「モチーフは人を護る武者と対になる……」「妖怪も護る騎士」  
で…」

僕の言葉に女神さんはニコツと笑い、

女神「そうか…楽しめそうじゃな。」

僕達はアームドのデザインを考えているのに夢中になりすぎ、途中で時止めが解除され…

「翌朝、ザンキさんの車の中」

九曜「刃さん、大丈夫ですか？」

刃「ウンダイジヨウブダヨ〜…（はしゃぎすぎて眠い…）」

ザンキ「刃、目的地に着くまで寝ている。」

僕はザンキさんに言われて椅子を倒し、意識を夢の世界に飛ばした。

俺達は鬼の皆とお被いを済ませた後、アマキが入院している病院へお見舞いのために行ったのだが…アマキの部屋に着いた瞬間、

九曜「アマキさあああああん！！」

ジンキ「フゴッ!?!」

アマキ「く、九曜君!?!」

ジンキに肩を貸していた九曜が眠ってジンキを放る捨てて、アマキに駆け寄り抱きついた。

アマキは抱きつかれても普通にしていたが、

九曜「思っていた程、怪我が軽くて良かった。」

アマキ「ありがとう…そろそろ離してくれるとありがたいけど…ほら、恥ずかしいから」

九曜「あ、スイマセン！」

アマキと九曜がなんかいい雰囲気になっている中、ジンキの電話が鳴り、ジンキは眠い目をこすりながら、部屋を出ていき、真剣な表情で戻ってくると俺の肩を叩き俺の耳に顔を近づけて

ジンキ「少しむこうでトラブルが起きたようで、僕は一足先に白光で向かいます。ザンキさんは九曜さんと共にお願いします。」

俺は小さく頷くとジンキは

ジンキ「では姉御に九曜さん、あまりイチャすぎないようにね。それじゃ」

ジンキは病室を出て白光を呼び、月音たちの元へ向かった…あいつアームドセイバーを忘れてるな…後で俺が持っていくか。

俺は萌香さん達が捕まっているヤクザの事務所へ飛び込んだ。ヤクザの人達は攻撃をしてくるがいつも萌香さんとの特訓の成果なの



窓から白いバイクごと入ってきたジンキ君がヤクザの頭をバイクで轢いて着地してバイクから降りると、俺を見て

ジンキ「お、月音君、悩みは解消されたようだね。」

月音「う、うん！！ジンキ君は相変わらずアグレッシブだね。」

ジンキ「それが、僕だからね…寝不足もあるけど、」

俺達はヤクザ達を放置して外へ出るとくるむちゃん達が追い付いてきた。

僕達は小さい女の子で話していると胡夢さんとみぞれちゃんが燦ちゃんを見て

みぞれ「さっき言ってたが、不思議なちからがあるらしいな…」

胡夢「ねえ、その力をちょっとだけ私達に見せてよ。」

キリク「俺もどういったものかは興味がある。」

燦ちゃんはスケッチブックを開き、

燦【そ、それはちょっと……】

キリク「む、それは残念だな…（力が強いのかな？）」

と見せるとキリク君は素直に下がってくれたが他の二名はズイッと近づき

胡夢「いいじゃない助けてあげたんだからさ！」

みぞれ「ダメと言われると余計見たくなるな」

僕は燦ちゃんと二人の間に立ち、

ジンキ「はい、二人ともそこまでにしなさいね。第一彼女を助けたのは君達じゃなく月音君だし、不思議な力がかなり殺傷力の高いものだったり、使う人自身の寿命を削るものだったらどうするの？」

胡夢「う！…それは考えてなかった。」

みぞれ「すまない」

ジンキ「はいはい、謝るのなら燦ちゃんに言ってね。」

僕はそう燦ちゃんに謝ることを促していると銀影先輩と猫目先生とこっこ先輩（なんで？）、ザンキさんに九曜さんが来た。

銀影「自分らそのひとを誰やと思うとるんや、」

九曜「失礼にもほどがありますよ！！まあジンキさんが止めてくれましたが…」

すると胡夢ちゃんが



第24話「夏休み、そして暗雲：前編」（後書き）

燦ちゃんがどう見ても先輩には見えないな…それではアデュ!!  
…… ネットカフェに寄らなきゃ…な

第24話「夏休み、そして暗雲：後編」（前書き）

誠に勝手ながら、タイトルを変えさせて頂きました。

理由としては…特にないので申し訳ございません。

## 第24話「夏休み、そして暗雲：後編」

第24話「夏休み、そして暗雲：中編」

僕達は燦先輩の後について行き、宿の前まで行くと柄の悪い従業員が燦先輩を見て、

従業員「燦！！？お前なんで帰ってきた！！？4日前に姿を消して以来無断欠勤していたろ、お前」

僕はふと変な感じがしたため隣を見ると白鋼君が少々嫌な顔をしていた。僕目の前の人の発言がどうも芝居じみているように見えた。

従業員「オレはてっきり仕事が嫌になって出て行ったのかと……」

今度はキリク君が僕の隣へ来てテレパシーで

キリク『先輩・・・あいつ、彼女になにか後ろめたいことをしたようですね。』

すると燦先輩が働かせてほしい趣旨を伝えると

従業員「……！駄目だお前はクビだよ燦」

皆「……！？」

燦先輩は驚いているが、最初の間で怪しいと思った僕は白鋼君とキリク君に念話で有ることを伝えた後、ゆっくりと歩き出した。

従業員「当然だろ！従業員が少ないのにお前が消えてたせいで大変だったんだぞ！！」「異議有り！！」「何だ！？お前達は！？」

まずキリク君が燦先輩の右隣に立ち、指を従業員に指して。青スーツの弁護士みたいな異議有りを申し出た。次に白鋼君が燦先輩の左隣へ立ち、

白鋼「俺達はこの燦先輩が通っていた高校の後輩だ。」 キリク  
「実は燦先輩が仕事場に戻れなかったのはワケがあつてな…」

白鋼「彼女は今までヤクザに拉致されていて、ちょうどヤクザが俺達の先輩（萌香）も拉致して、別の先輩が助けた（9割月音、1割ジンキ）からここに帰ってこれたわけだ…」

二人は多少の覇気を込めて睨むが、

従業員「は、ハア？俺がクビって言ったらクビなんだよ！！」

従業員は燦先輩を突き飛ばそうとしたが、

ガシッ！

横から音弦がついた腕が従業員の腕を掴み、従業員は腕の持ち主を睨もうとしたが、

ザンキ「お前：何をしているんだ？」

従業員の睨みより約1000倍キツイ睨みを聞かせたザンキさんがいてその後ろでは九曜さんが燦先輩の後ろに立ち、

九曜「あなた…大の大人が女の子に手を上げると言うのはどうい  
うことが覚悟していますか？」

腕を組んで見下し、トドメに僕が空のコーヒー缶（スチール製）  
×4個をまとめて握りつぶし、

刃「それとアナタは主ではないでしょう？そのあなたがクビを言  
い渡せるのですかな？」

銀影「事と次第によっちゃあ…覚悟しいや。」

燦先輩を護るように歴戦の戦士6人の強烈な睨みで、ただのチン  
ピラの従業員は

従業員「チッ、」

と舌打ちをして、ザンキさんの腕を振り払い宿の中へ戻っていつ  
た。（因みにこっこ先輩は泣きかけ）

そして入れ替わりになるようにビールの缶を持った人が出てきた。

女性「全く高橋は…また燦を苛めたみたいだね。まあ今回はバチ  
が当たったみたいだね。」

すると燦先輩は女性の前に出て来た。

燦『おかみさん！！』

女将さんは燦先輩の頭に手を置き、

女将「……よく帰ってきたね。心配したよ燦……」

温かな雰囲気の中空気になりかけていた猫目先生とザンキ先生が女将のまりんさんと挨拶をし、僕達は燦先輩の先導の下、宿の中へ入っていった。 移動中………

僕達が宿全体を見ていると萌香さんが

萌香「わあゝ素敵な建物」

白鋼「しかも隅々まで手入れされているな…思い入れがあるのを感じるな。」

胡夢「2階が民宿で一階は軽食屋なんだ。」

紫「目の前が海で眺めが最高ですう！」

刃「台風が来たら大変だけど…嫌いじゃないわ!!」

キリク「今もこういう民宿があるとは…素ん晴らしい!!」

萌香さん達の会話僕とキリク君が悪ノリでそう叫ぶと

燦「夜遅いので静かにして下さい!!」

燦先輩がスケッチブックをパタパタを可愛く動かしながら注意された。

刃・キ「「ファゝイズ……」」







全員「」「」「無理です……」「」「」

みぞれ「あれくらいの勢いで襲われてみたいが、止めたくはないな。」

胡夢「とりあえず水着用意する？」

瑠妃「そうしますか……」

皆ががっくりしていると心愛ちゃんを抱えた刃さんが窓から入ってきた。

刃「あゝすつきりした。あ、さっき下で従業員が話していたけど、この宿潰れるかもしれないってさ。」

財津原「やけに軽く言うな……」

紫「私も聞いたですう、ここは元々女将さんの亡くなった旦那さんが始めた宿らしくて……女将が一人でやってからは赤字続き、」

刃「そうそう、お金がなくちゃとてもやってはいけないらしい……後心愛ちゃんは起きろ」

心愛「ハッ！？ここはどこ？私は誇り高きバンパイアの朱染心愛……！！」

財津原「」

刃さんは水を飲みながらそう言った。胡夢さんは水着を出しながら

胡夢「…なんか大変な時に来ちゃったね」

みぞれ「遊ぶ気まんまんだったのにな…」

皆が水着をだし私も勝負水着を出すと

刃「瑠妃さん…ちょっといいか…」

瑠妃「はい、どうしました？」

刃さんが私を呼び止め私の水着を指差し、

刃「その紐水着を着るのかい？」

瑠妃「はい！もしかして似合わないでしょうか？」

私は首を傾げながら言うと刃は顔を赤くしながら頬を掻いて

刃「いや、そうじゃなくて…そのそれより似合う水着を日奈佳姉さん、香須美姉さんと一緒に買ってあるんだ。出来ればそれを着てほしい…かな。」

瑠妃「刃さん…あれ？」

私達が周りを見ると部屋の中には僕達しかいなくて机の上には「魚釣りに行ってきます by猫目&財津原」と書かれた紙が置いてあった。僕達が部屋の外へ出ると皆は、燦先輩を見ていた。

僕達は皆より後ろに立つと萌香さんは

萌香「妖が人間界で生きていくのって予想以上に大変なんだよね……」

刃「今は人間もちゃんとした仕事につくのも大変だし…燦先輩はかなり運が良い方だろうね。」

僕は萌香さんの問いにそう言うと萌香さんは僕と月音君を見て、

萌香「つくねと刃君は人間だから学園を卒業したら人間界に戻るよね？でも私達はどうかだろう…全員が上手くやっていく事なんてできるのかな…」

みぞれ「それに…つくねなら戻らないで妖の世界に残る選択もできるかもしれないが、刃は鬼だから確実に人間界に戻らなくてはいけない…そして魔化魍との闘いで死ぬかもしれない…」

皆は暗い雰囲気の中、僕は頭をボリボリと搔いて

刃「あゝ、萌香さんちよつと」

萌香「ん？何？」

萌香さんが顔をあげた瞬間

パシン！！

萌香「きゃう！？」

僕は萌香さんのおでこにデコピン（ちょっと強め）を食らわし、おでこを抑えている萌香さんやポカンとしている皆（燦先輩も来た。

）に向かい、

刃「つまり、萌香さんが言いたいのはいつか僕らがバラバラになるかもしれない…そう言いたいのか？」

萌香「う、うん…そうだよ。でもなんでデコピンするの？」  
僕は皆に指差し

刃「確かにいつかそう言う危機が来る“可能性”はある…が、ま  
だはつきり来るわけでもないし、卒業までまだ1年はある…」

月音「それはそうだけど…」

刃「なら皆離れ離れにならないようにそれぞれが、頑張れば良い  
だけさ、しかもみぞれちゃん、僕はそう簡単に魔化魍相手にくたば  
りはしないよ。そのために毎日鍛えているのだから。シュッ!!」

紫「刃さん…」

みぞれ「フツ…頑張れば良い…お前らしいな…」

胡夢「そうね…ならまずは燦先輩に私達の希望としてまず幸せに  
なってもらわないと!」

胡夢さんはそう大きな声で燦先輩を手伝いに行き、みぞれちゃん  
も手伝いに行ったが、

みぞれ「けどどうするんだ？宿が潰れてしまえばどうにもでき  
んぞ。」

床の掃除をしていた紫ちゃんは

紫「まずは資金不足ですう、私達で当面の経営資金を稼げれば火急の事態は避けられそうな気がしますけど…」

瑠妃「それが簡単じゃないから女将さんが苦労しているわけなのよね…」

刃「僕達の宿泊費じゃあぜんぜん足りないし、公安全員呼んだらそれはそれで一般の客が寄り付かない、僕がお金をそのまま寄付するにも女将さんは拒否するだろうからな…」

僕達は掃除をしながら考えていると、埃取り（こうちゃん）を持った心愛ちゃんが

心愛「ケホケホ、ねえそれよりおなかへったよお〜！まずお昼にしようよ。テラスで海を見ながら焼きそば食べようよ〜」

と愚痴っていたが重さ約100キロの埃取りを使っていたら腹も減るだろ…と思いつつながら僕が心愛ちゃんに頭突きをした時、萌香さんに電流が走った（同時に心愛ちゃんには電流を流した）。

萌香「そうか…ナイスよココア…」

胡夢「モカ？」

キリク（ついさっき来た）「ん？どうしたのですか？」

萌香「武器なら揃っているじゃない…」

白鋼（キリクと同じ）「武器？…刃先輩全員分の音叉とか音撃武

器持って来たのですか？」

刃「一応音撃弦は予備を持ってきたけど違うから！二人には後で僕が説明するから！！」

僕は二人にツツコミ、萌香さんから何をするか聞き、思わず

刃「萌香さん…It's good idea!!」

月音「何故途中から英語!？」

白鋼「しかも、発音いいな…」

僕は直ぐに男勢の方を向いて、

刃「今から民宿1号作戦を開始する！拒否権はない！！作戦内容を達する!!………」

僕が男勢に作戦内容を伝えて、

刃「陽海学園新聞部…サリーゴー!!」

男「」「おう!!」「」

僕達は台車を持って（誤字じゃない）近所の商店街に走った。

まりん「…ごめんねあなた…この宿もついにお終いな。やる気なかったしね…わたしもあなたも死んでからは昼からお酒ばっか飲んで、借金増やして、燦ちゃんが来てまるで娘みたいに私を慕ってく

れて、おかげで少しは変わった気がしたけど…」

私は夫の写真が入った写真立てを持ってさらに呟いた。

まりん「ダメだ…やっぱり私は…」

その時外から声が出て、一階の軽食出てみると

ワイワイガヤガヤ

いまだかつて見たことが無いくらい大勢のお客さんがいて、燦ちやん以外でうちに残ってくれている従業員は私を見て

従業員「あつ女将さ〜ん、手伝って下さい人手が全然足りませ〜ん!!」

と右手はオムライスを左手でソフトクリームを作るという器用な事をしていた。私は少しパニックになりながらもエプロンを着ながら、

まりん「どういうこと?なんでウチにこんなに大勢のお客さんが?しかも一階の軽食は夫が死んで以来、一度もやってないのに……」

??「それなら俺が説明します。」

すると私の隣には汗だくになった黒髪で白の半袖の下に黒と灰色柄のミリタリー長袖で黒のナイロンサバイバルズボンをはいた…確か白鋼君が立っていた。白鋼君は汗を拭いた後、

白鋼「俺の先輩がやって欲しいと頼み込んだのですよ。出来るだ

け手伝う事を条件にね。」

まりん「え？」

私が外を見ると、

萌香「いらつしゃ〜い!!」

胡夢「私達のお店で美味しい食事はいかがですか？」

こっこ「か、格好いい男性店員もいますので女性の方もどうじょ!!…噛んじゃった。ウウウ……」

女の子達が水着姿で呼び込みをして、厨房では、

刃「はい、チンジャオロース、担々麺、ナポリタン、焼き魚定食出来たよ!!」

キリク「了解!!次炒飯10人前入りました!!」

刃「ホホ〜イとな!」

マッチョな刃君が中華鍋を片手に炒飯を作り、その後輩のキリク君もお盆を持ちながら素早い動作で料理を置いていき、お客さんもその料理を食べ、

お客A「びゃああああ、うまいいいい!!」

お客B「美味しい、美味しいぞおお!!」

お客C「うまい!!」(テレーツテレー)「

一部おかしいお客さんはいたが全員笑顔で食べていた…しかし私は

まりん「なんでここまでやってくれるの？それに食材を買うお金はどこから？」

私の呟いた疑問にキリク君が近づいてきて

キリク「まあ、先にお金の方を話しますが、代金は財津原先生と刃先輩の財布からで返金は宿が繁盛してからでいいらしい。それと何故先輩方がここまで手を貸すかと言うと男勢の説明だけが、それは…俺や刃先輩、白鋼には本当の親はいない。白鋼と刃先輩は養子で家族はいるが俺にはいない…まあ孤児ってやつだ。」

まりん「！？」

キリク「俺の場合はただ目の前で家族が別れるのは見たくない…それに刃先輩は困っている人を見かけたら助けないと気が済まなく喧嘩をふっかけられても相手を思いやる程のお人好しで（魔化魍や外道相手には容赦ないが）…まあそんな先輩だから俺達はついて行きたいし、多少の我が儘も受け入れられる…ただそれだけだ。」

キリク君はそう言うとかき氷を作りに去った。そして

ギョッ

私の手を燦が握ってきた。私は燦を見つめながら

まりん「そつだ…すっかり忘れてた。一年前、約束したっけ燦…」

忘れていた事…それは燦がここで働かせ欲しいと頼んだ日の約束

…私は燦と手を繋ぎ、宿を見ながら

まりん「あんたと私でここを一番の宿に立て直すのだよね……」

九曜「ハア…なんで私が…」

私は昨日の晩、財津原先生に

財津原「九曜、すまないがあの高橋を追ってくれないか？鬼としての勘だが、アイツは何か悪さを起こしそうだ。」

と後を私は半信半疑で刃さんから借りた白光で追っていたのだが、まさかの当たりだった。高橋は男に詰め寄られていた。

高橋「ひっひいひい！？」

男「おいどうして俺の命令通りに宿に火を付けなかった？これだから“人間”て奴は使えなくて困る……お前もう死んでいいよ。」

話の内容からヘッドホンをしている男は妖怪という解釈でいいようです。ヘッドホンをした男は高橋に手を伸ばそうとした時、私が隠れている物陰とは別の物陰から、

銀影「フツ…やっぱ黒幕がいよったんか…待ちくたびれたでホンマ」

昨晚から姿の見えなかった銀影が出てきた。銀影はさらに二人の方を見ながら、

銀影「一言忠告しよと思て夜からそのアホを尾けよったんや、自分らこれ以上燦先輩にちよつかいださんがいい、せやないと後悔するで〜ワイの後輩は凶暴やからな。」

まあ確かにそれが刃さんにバレたら軽く公安5個分は壊滅するでしょうね。それに新聞部一年もかなり強いらしいと聞いたが…戦力過剰ですね。

話を戻しヘッドホンをつけた男は

男「後悔？あはっ 面白いねえ…誰だてめえ」

その言葉に銀影はフツと笑った後、

銀影「正義の味方や」

と言ったが、あなたより刃さんの方が正義の味方の言葉が似合うでしょう。でもよく考えると、刃鬼の姿の方が正義の味方っぽいですね。

あの姿はなんかこう正義の味方オーラが溢れ出ているような気がするのですよ。

と私がなんか変な考え事をしてるといつの間にか殺気が渦巻く空間になっていてヘッドホンの男：椿六郎はポケットから小型スピーカーを取り出し、

椿「組織には「神」と呼ばれる素晴らしい妖力を持った御方がいてね。神のお言葉は聞くものの肉体を操り、歌声は「死の旋律」と

なつて聞くものの命を奪う。」

私はその時嫌な感じがしてとっさに耳をふさいだ。直後に銀影は頭を抑え、高橋は目や耳から血を出し、倒れた。

私は片手を外し、嫌な音に耐えながら連絡用のディスクアニマル（アマキさんから借りた）を起動させるために音笛を鳴らした。

リィーン…

音叉を鳴らすと何故か私の体は楽になり、銀影が車に乗せられた後、連絡用の鷹が私の腕に止まると、

九曜「財津原先生、高橋を見張っていたら銀影と敵が現れた。その後銀影は攫われ、これより発信機を持って追跡を行う。」

ディスクアニマルに録音させて鷹が飛び去った後、私は白光に乗り銀影を連れ去った車の尾行を開始した。

第24話「夏休み、そして暗雲：後編」（後書き）

「民宿まりんにて」

俺は釣った魚が入ったクーラーボックスを持って民宿の厨房の入り口に立ち、

財津原「刃、魚の追加を釣ってきたからここにおいていくぞ。」

刃「あっありがとうございます！！」「や、刃君、麻婆豆腐二人前きつねうどん3人前追加！！」「はい！！あ、心愛ちゃん、マルゲリータ、パエリア、ボルシチ、石焼きビビンバ出来たよ！！」

刃は料理を作りながら言っていたが、メニューが明らかに軽食というレベルじゃない！！

俺がそう思っていると一体の鷹が来て、俺の肩に止まった。俺は直ぐにそれをディスクに戻して再生した。

九曜からの伝言を聞き終えると俺は

財津原「刃、少し出かけてくるが大丈夫か？」

刃「あ、はい大丈夫です。後九曜さんを見かけたら増援として来てくれと伝えて下さい。」

刃は料理を作りながら言い、俺は感づかれないように

財津原「ああ、わかった。アームドセイバーは部屋において置く

ぞ。  
「

俺は雷神からアームドセイバーを降ろし、発信機頼りに九曜の元へ向かった。

第25話「天使の歌声、鬼の覚声：前編」（前書き）

かなり遅くなりましたが、楽しんでいただけると幸いです！今度こそ刃鬼を最強形態に・・・

第25話「天使の歌声、鬼の覚声：前編」

第25話「天使の歌声、鬼の覚声：前編」

俺達は軽食屋のテラスにコップを持ち、前では刃先輩が麦茶の入ったコップを持ち

刃「え〜、いきなりやったことで近くの店の買い占めて、どこまでいけるかわからなかったのですが、まさかの完売を祝して……乾杯！！」

全員「……カンパ〜イ！」「……」

皆が乾杯してまず胡夢先輩と紫先輩が月音先輩に歩み寄りながら

胡夢「それにしても良かったあ（ハート）」

紫「大繁盛でしたね、軽食屋まりん」

胡夢先輩は胸の谷間を見せつけるように、紫先輩は月音先輩に抱きつきながら言い、月音先輩は顔を赤くしていた。

次にみぞれ先輩と瑠妃さんが刃先輩に歩み寄りながら

みぞれ「ああ、店と近所のスーパー、それに商店街の店5件の食材を買い占め、」

紫「刃さんが先輩（クロキ達）を使って運び込んだ食材200キロを含めて余るかと思ったのですが……」



燦『心愛ちゃん、アイス食べる？』

心愛「あ、ありがとうございます。」

刃先輩と月音先輩そして白鋼は詰め寄られていた。まあ、俺はなんだ・・・ロリコンと勘違いされているから近付いてこないんだ・・・おのれ心愛・・・グスッ

するとまず刃先輩が

刃「みんな似合っていますよ。二人もそう思うだろ？」

月音「う、うん！モカさんはレザーっぽい生地がいい感じだし、くるむちゃんのレースとかいいし、」

白鋼「こっこ先輩もスポーティなフィットネス水着だし、心愛と紫先輩のフリフリもかわいいし、」

刃「みぞれちゃんのストライプもいいよ。瑠妃さんは・・・  
・ノーコメントでお願いします。」

瑠妃「ええ！？何ですか？」

瑠妃さんは刃先輩に顔を近づけるが、まあ紐としか言いようがないしな背中から見たら裸同然なもの。

皆無難な返答したが、まあ瑠妃さんのははつきり言ってエロい、瑠妃さんの水着（黒の猛士のマークが胸についた紐水着）にしていて、もし刃さんが近くにいなければいったい何組のカップルが破局になったことなのやら・・・

ちなみに俺は水色のトランクス型、月音先輩と白鋼はそれぞれ黒と迷彩のサーフ型、そして刃先輩はなぜか赤の禪型だった（本人曰く「日菜佳姉さんにハメられた」らしい）……ちなみに全員人気は”あつた……詳しい内容は本人達の為に伏せさせてもらう。

目の前のイチヤイチャした空間を肴に目からでた汗入りの酒を飲んでみると、まりんさんが来て

まりん「アハハハ……皆素敵なお水着とプロ顔負けの料理でたくさんのお客さんを連れてきてくれて、ありがとうね。」

刃「いえいえ、水着に関しては僕と瑠妃さんについては異議有りと言っておこうかな？」

心愛「素敵と言うより……エロい？」

白鋼「まあ良いんじゃないのですか？後心愛、刃先輩の禪のどこがエロい？」

キリク「一応、刃先輩と瑠妃さんで客も来ましたし、お互いが紐でピツタリじゃないか？」俺がそう言った瞬間刃先輩の右ストリートが腹に突き刺さった。

ピクピクしてこっこ先輩に木の棒でツンツンされているキリク君を無視して、僕はまりんさんを見て、

刃「彼の事は直ぐに復活するので無視して下さい。で、今日の稼



僕達がそう会話をしているとまりんさんは

まりん「ふふふ、そうだね…燦や死んだ主人のためにもあたしが頑張らなきゃね……」

と言っていたが…皆は不思議そうな表情をしていたが大方死んだまりんさんの主人の事を考えていたのだろう…僕と瑠妃さんや白鋼君、キリク君にとって“死ぬ”事は身近にある、若しくはあった人…?には不思議には思わないかも知れないね…月音君達は違うからね…… たちばなにいた時もお世話になった鬼の人が魔化魍に殺された話も聞いた事がある。

僕がそう空を見ながら考えていると

ピンポーン

インターホンがなり、まりんさんは自分が出る時燦先輩に言っ  
て民宿の入り口へ向かった。そして僕はトイレに用を足しに行った。

俺はディスクアニマルを追って九曜と合流して、さらに影野の兄貴達も参加してきて銀影を乗せた車を追っていると、一つのビルの前についた。

ザンキ「ここか……」

樋仙（白鋼の兄者）「間違いない……」

駆車矢（白鋼の兄貴）「御伽の国の支部だな。」

九曜（白光に乗っている）「人間界に溶け込むように上手く偽装  
していますが、血の匂いがしますね。」

ザンキ「さて、これからどうするか？」

俺が後ろの座席の二人に話しかけようとした時、

銀影「何やおおおお！！」

捕まっている銀影が突然叫びだした。俺達はポカンとしていると

銀影「“それ” やったらオレこつち来た意味ないやん！あかん！  
あかん！それはああああ！！また刃にいいとこ持っていけるわああ  
ああ！！燦先輩にかっこいい所見せたかったのにいいいい！！」

と大声で悔しがっていた。九曜は呆然としながら、

九曜「もしかして……彼は燦先輩にかっこつけるためにわざと捕  
まったのでしょうか？」

樋仙「恐らく……」

駆車矢「なんか呆れるなあ……」

俺達のため息をついて車の中でぐでーとなっていると銀影は連れ  
てきた男が持っているスピーカーを壊し、襟を掴んでそのままビル  
の中へ入っていった。

俺は車から降り、トランクから烈斬を取り出し、

ザンキ「とりあえず、殴り込みますか？」

樋仙「そうだな……」

駆車矢「こっちは依頼だからな……」

九曜「先に私一人で行かせて貰いますね。」

ザンキ「おう、俺達も準備が出来次第行くよ。」

駆車矢「気を付けてな。」

九曜がビルの中へ入って行くのを見ながら俺は、

ザンキ「ジンキのアームドセイバーがあればビルを丸ごと斬れるから楽なんだけどなあ……」

樋仙「意外に想像できるな……」

ジンキがアームドセイバーでビルを唐竹割りしている図を創造していた。

まりんさんが出て行った後、胡夢さんが燦先輩にまりんさんの旦那が何で亡くなったのか聞いて、僕達は止めたが燦先輩は暗い顔をしながらも教えてくれた……。

胡夢「妖に殺された！？まりんさんの旦那さんが！？」

まりんさんの旦那は白い羽の妖に目の前で殺され、食われていたという残酷なものだった。すると突き音君は

月音「ていうことはまりんさんは妖の存在を知っているの！？」

燦先輩は黙って頷き、続いて萌香さんが

萌香「うそ・・・それじゃ私達、妖はまりんさんにとって夫の仇に・・・!？」

白鋼「本当は違うが・・・ただの人間にとっては同じことだろうな・・・」

刃「ああ、まりんさんから見れば偉業の存在。仇となるからね・・・そして拒絶されたモノの中には人間を憎むモノが出てくる。」

こつこ「そ、そんな事言わないでよ！！刃君！！燦先輩がそんなことするわけないじゃない！！」

キリク「こつこ先輩、刃先輩や鬼の人は昔からはそういったものと闘ってきたのですよ。」

燦「そうです・・・妖とばれば、私もまりんさんから憎まれ追い出されてしまうでしょう。だから・・・お願いですどうかまりんさんにだけは・・・正体を知られないでください。」

燦先輩は震わせながらそう僕に伝えた。そして僕は燦先輩を安心

させるためにも笑顔で

刃「わかりましたよ先輩、任せてください!!」

するとキリク君と白鋼君が横に出てきて

キリク「まあ、俺達は隠し事が得意なほうなんでね。」

白鋼「本当の家族のように触れ合っている二人の中をそう簡単に引きちぎれさせないように頑張りますよ。」

僕達はそう言い燦先輩にサムズアップをすると

???「ほう、それはいいことを聞いた・・・ということは君に人間界を捨てさせるにはこの女がいなくなればいいのか(・・・・・・・・・・?)」

僕達は入り口のほうを見るとまりんさんを抱えた長髪の男が立っていた。僕達は身構えると

奏「失礼・・・私は御伽の国第七支部長、かみやかなで神谷奏君を迎えに来たよ。音無燦」

神谷からは血の臭いが濃くしてこのままではまりんさんが危ないと思った僕は神谷に向かって走り右手に鬼爪を出して雷の力を込め、

刃「おりゃああああああ!!」

雷神拳・改を放つが、神谷は

神谷「なんだい君は無礼なやつだ。礼儀もわきまえん子供は万死に値する」

そついい神谷の口に何かが集まり、歌が聞こえた瞬間僕は見えな  
い何かに殴られたように吹っ飛ばされた。

刃「グフツ!？」

壁に飛ばされた僕は耳を押さえながら立ち上がると紫ちゃんは大きな声で

紫「み・・・みなさん気をつけてください!この能力・・・そしてこの美しい姿・・・」

僕は神谷を見ると白い羽を広げ、綺麗でどこか不気味な歌を歌っていた。そして紫ちゃんは神谷の種族を言った。

紫「セイレーン・・・その歌声で人間を惑わし殺す音曲の大妖ですう!！」

みぞれ「うう・・・体が痺れて動かない・・・」

胡夢「さっきの歌をまともに食らったせい・・・?」

刃「歌・・・さっきのは歌声か・・・クソツめんどくさい相手だな。」

僕はそう言いながらみんなの前に行こうとしたとき、

まりん「その・・・姿は・・・やっぱり・・・あんだだね4年前

この宿でうちの夫を殺し食ったのは……」

天板が外れたスタンドを持ち、口の端から血を流したまりんさんが立った。神谷は

奏「4年前?・・・ああ丁度私がこっちの支部に派遣された頃か」

神谷はまりんさんの方をみて

奏「あの頃は荒れてたなあ私はこの魚臭い田舎町が気に入らなくてねだから殺したあちこちでたくさんの人間を……」

まるで世間話をするかのように喋り、そして

奏「ただの憂さ晴らしさ、いちいち殺した奴のことなんて覚えてないねえ」

神谷の言葉にまりんさんはスタンドを振りかぶろうとしたが燦先輩がそれを止めた。まりんさんは

まりん「燦っ!?!?放せ、こいつはこいつはあ!?!」

まりんさんは語気を荒げながら燦先輩を見るが涙を流している燦先輩を見て、流し……

まりん「何でだ?なんでこんな奴が存在しているんだよ。」

まりんさんの問いにキリク君は……

キリク「知らないよ……なんでそんな奴がいるのか……哲学

者なら光があるように闇がある。いい人がいるように悪人もいると  
いうだろうかね……」

心愛「ちょっとキリク！！あんた一体「心愛、少し黙っている」  
!？」

心愛はキリク君に対し怒ろうとしたが、キリク君の殺気で黙って  
しまう。キリク君は神谷を睨みつけながら

キリク「まあ、でも俺が……俺達がやることは変わらないな。」

そう言いながら一枚のカードを取り出したキリク君の隣に白鋼君  
がきて

白鋼「ハア……結局はこうなるのか。こっこ先輩危ないから下  
がっていてくれ、」

そう言い腰に両手をかざした僕は音叉を取り出しながら二人の間  
に立つと月音君も立ち上がった。

月音「オレも三人より弱いけど闘うよ。それにオレはこいつを許  
せない！！」

キリク「かつこいいですね月音先輩、でも水着だと危ないからこ  
れを使ってください使う際に変身と言ってください。さて、俺もイ  
ライラしているんですよね。きたねえ歌を歌うこいつに！！」

キリク君はさらにカードを取り出し月音君に渡した。

白鋼「さてそれじゃあ気持ち悪いこいつをぶっ飛ばすか？」

その時白鋼君の言葉に切れた神谷は

奏「この私を気持ち悪いだと!?!?・・・死ねえ!?!?」

神谷はそう叫びながら攻撃を放ち僕達はまりんさんと燦先輩を立つが、

パキイ!?!?

神谷の歌を何かが相殺し、僕達は後ろを見るとまりんさんはゆっくりと燦先輩を見ながら

まりん「さ・・・燦?今あんた歌った?」

まりんさんの顔には恐怖が支配していたが、燦先輩は

燦「・・・・・・・・ごめん・・・・・・・・ね・・・・・・・・」

そう言い神谷の歌声を相殺した。そしてその声と背中から羽を見て

心愛「これは・・・・・・・・」

瑠妃「歌・・・・・・・・?な・・・・・・・・なんて美しい・・・・・・・・」

キリク「まさに天使だね・・・・・・・・」

みんなは眩き神谷は笑いながら

奏「・・・・・・・・!素晴らしい聞くものの命を奪うこの私の歌声に

同じ妖力を持った歌声をぶつけて相殺するとは……」

刃「セイレーン……」

白鋼「やつと同じ種族とはな……」

僕達は驚いているとまりんさんは震えた声で

まりん「嘘だろ……？……お前も……4年前ここで私の夫を食い殺したその男と……同じ人食いの化け物だというのはか？」

燦「……まりんさん「へーイストップ!!」刃……君？」

僕は二人の会話を遮り、まりんさんに指差し

刃「まりんさん、確かに彼女はやつと同じ種族だが、燦先輩は化け物じゃあないね。それにやつは食うために殺したんじゃないだろ？ 大方……娯楽だろうね。」

奏「ほうよくわかったな。そうだ私は自分の夢をかなえるために「うつさい黙っている阿呆」な!？」

刃「まったく……まあ言いたい事は燦先輩は貴女を守るために涙を自分の正体をばらした。本当にいい子ですよ。それに……化け物とは人間を殺しても何も感じないもしくは楽しんでるやつこの事を指す。」

白鋼「そんな化け物に燦先輩は指一本触らせない……」

キリク「目には目を真の化け物には専門の退治屋をを……ね。」

月音「だから……俺達が……燦先輩とまりんさんが笑って  
過ごせるように……皆を守る!!」

月音君が言い終わるとキリク君はカードを天に突き出し、白鋼君  
は左手を右から左へ移動させながら、僕は音叉を鳴らし額にあて、  
月音君もカードを前に出し……闘うために叫んだ。

刃・キ・白・月「……変身!!」「」「」

僕は炎と雷に包まれ刃鬼に、白鋼君は闇を纏い本気モードに、キ  
リク君はカードをくぐり鎧を装着し、月音君は黒い竜巻に包まれラ  
イダースーツを身にまとい、戦う姿に変わり、神谷に向かっていっ  
た。

第25話「天使の歌声、鬼の覚声：前編」(後書き)

後編では刃鬼がアームドセイバーを使いますが、意外なあの子が活躍します。

そして月音君の着ているライダースーツのイメージは仮面ライダージョーカーで黒いスーツに青色のスカーフを首に巻いています(青野だけに)！

ご意見、感想待っています！！

第25話「天使の歌声、鬼の覚声：後編 part 1」（前書き）

どうも一時期メンタル面で死に掛けていた善宗です！いよいよよ  
きた後編ですが、長くなりそうなので二つに分けることにしました  
！！お許しください！！それではどうぞっ！！

Ps . 今回と次回に種地先生の作品からはドルドと駆車矢が参加  
しています！！……影は薄いけど

## 第25話「天使の歌声、鬼の覚声：後編 part 1」

第25話「天使の歌声、鬼の覚声：後編 part 1」

わいは椿君を引き摺りながらビルの中にカチコミする事を言つと、

椿「カチコミってお前正気か！？てゆうかなんであんたは燦の為にそこまで無茶を……？」

銀影「ハツハツ女の為に戦うんは男の浪漫やないか……それに恩があるんや燦先輩にでっかい恩がな……」

わいは燦先輩との思い出を思い出す。狂犬として荒れていたあの時を……そしてそんなワイ……オレに手を差し伸べてくれた燦先輩の顔を……

銀影「ありきたりな理由かもしれんせやけど手がつけられん悪ガキやったオレを燦先輩だけが構ってくれた。見捨てんでくれた……しかし目が覚める一発やったであれは……誰にでも優しゆうて絆を大切にするひとなんや実際オレだけやあらへんしな燦先輩から助けられたやつは、」

椿「……………」

オレがそう話している時に二人分の足音が聞こえ

黒スーツA「お話の所失礼ですが、」

黒スーツB「予約はございましょうかお客様」

黒スーツの二人は口では普通に対応しとるが、姿は半分以上変化は解け殺気はびんびんに出している。すると椿君は飛び上がり

椿「断る必要はねえこいつは敵だツ殺せエブツ殺してしまえツ！  
！バカな奴だ恩だが何だが知らねエがお前一人で何ができる…死ねえ森丘銀影！！」

すると黒スーツの奴は襲い掛かってきたがオレはやさしく教えてやった。

銀影「せやからひとの話はよう聞いとけやオレだけやない（・・・）  
・・・）って言うたやろ、燦先輩に恩があるんは……」

そしてオレの背後から

????「真空正拳突き！！」

ガオンガオンガオン！！

妖は空気の塊をくらい、その場に倒れた。椿は何がおきたのか唾然としていたがオレは後ろを振り向きながら

銀影「やつぱ来よったか…ホンマ 自分は燦先輩と幼女が絡むとすつ飛んできよるな…陽海学園空手部主将…宮本灰次」

灰次は周りを見て

宮本「…どこだ？……燦先輩はどこにいる？あ？お前が抜け駆けして先輩のそこ行ったって聞いて慌てたんだそしたらなぜかここに

連れてこられてな…ふっ会ったらず再会の「高い高い」をしてあげるんだぜ（はーと）」

すると柱の物陰から

シャチの妖「侵入者発見!!」

ウナギの妖「これより掟に従い…」

タコの妖「殺してやるでちゅ〜!!」

三匹の妖怪が出てきたが、

???「三連、臆…火炎車あ!!」

角から見覚えのある技と聞き覚えのある声が聞こえ、三匹の妖は

シャチ・ウナギ・タコ「「シャウタアアアア!?!?」「」

と叫び倒れた。しかもウナギとタコは良い匂いを出しながら、オシらは後ろを見るといつもの黒学ランの九曜が

九曜「ハア、まったく宮本お前はそのロリコン癖がなかったら刃さんと今以上に仲良く慣れたのに…もったいない。」

九曜が呆れていた。そして九曜は

九曜「それに燦先輩はここにはいませんよ。」

その一言に宮本は固まり、オレは宮本の肩に手を置き

銀影「残念やったな…しかも向こうには心愛ちゃんもいたのになあ…」

オレがそついうと宮本は

宮本「嘘オオオ何で！？せつかくオシヤレして来たのにッ！」

銀影「オシヤレって…それいつもの空手着やん！」

宮本「空手着こそ空手家の正装だろっ！？」

九曜「いや、知りませんよ！？あ、でも生地がいつものより良い奴ですね。」

オレ達が言い争っていると

椿「く…くそっこいつらぶざけやがって殺せッ生きてこっから帰すなア！！」

と叫ぶが

シ〜〜〜……ン

誰も出てこなくてオレ達が首を傾げていると、

九曜「あ、もう暴れているのですか？早いですねえ…財津原先生…流石は刃さんの師匠」

宮・銀「は？」「」

九曜がポツリと呟くと壁が轟音を立てて崩れ、中からジンキと似た一本角の鬼が出てきて

斬鬼「お、九曜ここにいたのか。」

九曜「あ、どうでした敵は？」

斬鬼「今の俺は斬鬼だ。それと敵に関しては、はっきり言って弱いな…もう六割は倒したぞ。しかも残りの四割の内二割はどこかに転送されたし」

椿「はあ？六割！？馬鹿な…そうだ人工魔化魍なら…！」

斬鬼「ああ、それならないぞ？恐らく向こうだろう？」

椿「なら…この支部にいる戦力は…二割の戦闘員だけ…！」

そう椿が言おうとした瞬間、誰かが椿の両肩を掴んだ。オレはその人の顔を見て固まった。

銀影「あれは…妖ヶ丘Family Sの“黒鴉”！？」

宮本「それに“処刑人”って…刃はどんだけ人脈が広いんだよ…  
…今度ゴッドファザーって呼ぶか。」

九曜「怒ると思うので辞めて下さい。それにあの二人は一年のご家族ですよ。」

ドルド「……さて椿と言ったな…」

駆車矢「さつきお前が言った人工魔化魍とやらについて話させて貰おうか？」

椿「ヒッ!？」

二人は椿を引き摺りながら会議室に入り、斬鬼先生は

斬鬼「おっと、そうだ。後少ししたら敵が来るだろうから頼むよ。」

と言つて会議室に入っていった。そして海の妖怪がわんさか出てきたが、灰次は

灰次「くそつ、燦先輩はいないし、九曜はなんか心が綺麗になっているし、変な奴らが出てくる……全くお前に関わるとロクな事にならないな。」

銀影「五月蠅い!ワイだって燦先輩と仲良く飯でも食いたかったわ!!!」

九曜「二人ともいい加減にしろ!!喧嘩するならこいつらを倒してからだ!!!」

宮本「わかったよ……ここは久々に手を組んでやるよ銀影!!!」

銀影「なら、どちらが多く倒したかそれで勝負や!!!」

九曜「まとめてコンガリと醤油をかけて上手に焼いてやりますよ」

！」

俺達は（出番の少なさを）襲いかかってきた魚介類の妖怪（に八つ当たりする事）を（決め）迎え撃った……ん？何かおかしいって？気にしたらあかんで？

ドカツ！！バキツ！！バツシャ ン！！

刃鬼さん達は神谷さんがアジトから転送した半魚人達と闘い、私達も参戦しましたが、白鋼君は近くに落ちていた物干し竿を槍に変え、胡夢さんは爪を使い、

白鋼「フツ！！」

胡夢「ハア！！！！」

ザシユザシユ！！

半魚人A「グギヤア！?!?!」

半魚人B「グエエエエ！?!」

目にも止まらぬ速さで斬りつけ、他の半魚人が水の弾丸を二人に向かって飛ばすが、

キリク「無駄だ！！水を我が冷気で凍てつけ、アイスカーテン！

！」

みぞれ「かなりの高圧の水鉄砲だな…まあ私達が無効化にするがな。」

キリク君は魔法で、みぞれさんは能力で、水鉄砲を無効化して

月音「ハア！！！フンツ！！！」

半魚人C「ギャボツ！？」

半魚人D「ギョギョ！？」

と黒いライダースーツ（身体能力を上げる効果有り）を着た月音さんがパンチや蹴りで闘うが……それより目立つ戦い方をしているのが、

刃鬼「ハイ、15体目！！！」

半魚人E「ジヨイン！？」

半魚人F「ジヨイン！？」

半魚人G「トキイイイ……」

網馬「天才の俺がああああ！?!?!?!」

心愛「10体目！！！」

半魚人H「ジャギイ！？……」

黒服の戦闘員「……イイイイイイ!?!?」「」「」

トレンチコートの男「おのれディケイドオオオオオオオ!??!?!」

雷光やこうちゃん（金棒）で敵を片っ端から打ち上げている刃鬼さんと心愛ちゃんでした。吹き飛ばされた敵は空の彼方へ星になっていきましたが……一部おかしかったのですが気にしないでおきましよう。

目の前で部下が吹き飛ぶ光景を見て、神谷は

奏「……お前らは一体……」

私は戦闘員達を羽で締め付けながら

瑠妃「私達も人間と妖怪の共存を望む者……」

私は刃鬼さんに戦闘員を投げて、刃鬼さんがそれを空の彼方へ飛ばした後、私の隣へ立ち、刃鬼「そして僕と瑠妃さんはその共存を壊そうとする者から共存を望む人や妖を守る事をしている。」

僕がそう言いながら瑠妃さんの肩を抱くと紫ちゃんがマジカルステッキで近くにいた最後の半魚人に落とすと、胡夢さんは

胡夢「さて、残りはあんた一人ね……覚悟しなさい!!」

すると神谷は笑い出した。奴のムカつく笑いに心愛ちゃんは、

心愛「何?余りにも自分が危機的状況で可笑しくなったのかしら

？」

と言ったがキリク君が

キリク「油断するな！！今俺達が勝っているのは全部燦先輩のおかげだ！！燦先輩が倒されれば俺達は全滅なんだぞ！！」

心愛「うるさいわね！！少しくらい良いじゃない！！」

この間も笑い続けていた神谷は

奏「クツクツ…残念ながら私には切り札があるのだよ…最強の私の駒が！！」

神谷はそう叫びながら海の方へ飛んでいき僕達は神谷を追うが、その際にオロオロしているまりんさんとそれを抑えているこっこ先輩に羽手裏剣を放ち、

燦「危ないまりんさん！！！！」

燦先輩はとっさに庇ったが、複数の羽手裏剣の内一枚が燦先輩を切り、歌が止まった。

そして同時に海に大きな魔法陣が出来て、中から出てきたのは

頭は二つのウブメで体はオトロシのような……

刃鬼「合体魔化魍か……？」

僕がそう呟くと神谷は

神谷「そうだ！！わが御伽の国が研究して作り上げた試作品の人工魔化魘だ！！試作品ながらも強力な駒さ！！ただ視力がかなり弱くなったが、まあその分匂いに敏感でな…まあ仲良く踏みつぶされる！！」

神谷はそう言い歌うと僕の視界は真っ黒になり、僕は最後に見えるたウブロシ（仮）の足がこっちに来るのが見え、僕は僅かな気配と空気の流れてウブロシの足を止める事に成功した。

しかし、体重差と神谷の歌等の影響があつて押されているのを感じ、僕は潰される恐怖と皆を守れない事の恐怖に耐えていた。

しかし少しすると突然音がやみ、視界が元に戻ると何も喋らないウブロシの顔の周りには赤い霧がまとわり付き、疲労の色が顔に出ている瑠妃さんとみぞれさんが無言でアームドセイバーを持って来た。

僕は周りに耳を傾けたが、不思議な事に何も聞こえなかった。

~~~~~

俺は神谷の歌に効果は弱いが、結界を張り、目の前の化け物の足から皆を守るために身を張る刃鬼先輩の姿がなんとか見えた。

キリク「くそっ！！燦先輩が余り声が出せない今、アイツの歌を何とかしないと……」

俺がそう愚痴ると白鋼が

白鋼「歌…声…：…そうだ！！アレを刃鬼先輩に渡せば！？」

と言った瞬間、

ドスッ！！

俺達の目の前に白鋼が言っていたアレ…確か装甲声刃が砂浜に突き刺さった。

しかしそれは俺達の体勢（膝をついて耳を押さえいる状態）での目の前…しかも俺の髪の毛を数本切って刺さったので、もの凄く怖かった。（目の前の地面にビルを一刀両断できるものが刺されれば誰だって怖いはず）

俺と白鋼が上を向くと白鋼の顔の上に

「ごうちゃん「きゅ、きゅ〜」」

むちゃくちや疲れた顔の心愛の蝙蝠が落ちてきた。恐らく体が上手く動かない中、俺達の部屋からたった一匹でこの武器を持ってきたのだろう…：それを見ていると今度は赤い霧が俺達の後ろから怪物に向かっていき、怪物の顔でまわり付いていた。背後を見ると

「ごっご「私だって闘えないけど…：これくらいなら…：…」」

ごっご先輩が貧血で震える手を前に突き出し、妖力をコントロールしようとして頑張っていた。

一人と一匹の活動を見て俺は

キリク「よし…白鋼！！お前は紫先輩に燦先輩の手当てを行うように言え！」

白鋼「ああ、それはわかったが…お前はあの刀を持っていくのか？」

キリク「いや、あの刀を先輩の元へ持っていくのはおれよりふさわしい人がいる…いや、妖怪か。と言うわけで俺はこの耳障りな歌を一瞬でも止める！！」

と言うと瑠妃さんとみぞれ先輩が刀を二人がかりで持ち、刃鬼先輩の元へ一歩ずつ歩んでいった。白鋼が紫先輩の元へ走っていくのを見た俺は

キリク「さて…今の俺であの呪文が何秒が続くかわからんが…とりあえず頑張るか。」

俺は目をつぶり人差し指を杖の代わりにして早口で詠唱を始めた。神谷は刃鬼先輩を潰す事に夢中になっていて俺に気づいてない。

そして神谷が俺に気づいた時呪文は完成間近だった。俺は最後の一節を叫んだ。

キリク「我が命を聞き、音よ止め！！そして虚無の世界へ…」「サイレント・ザ・ワールド！！」「」

そうして指を大きく横に切ると俺を中心に透明の膜が広がっていき、音がやんだ。皆は驚き、刃鬼先輩も歌の効力が消え、辺りを見回すと瑠妃さんとみぞれ先輩が刀を持っていき皆を見、俺が

キリク「先輩…頼むぜ」

と聞こえない筈の中で俺は呟いたが、先輩は頷き 左手を顔の横に持って行き、

シュツ

刃鬼先輩のいつものポーズと一緒にする風を切るような声は音のない世界でも俺の耳に届いた気がした。そして片手で刀を持ち上げ、顔の前で右手に持った刀の柄の先端を左腕につけた時、俺の魔法は解け刃鬼先輩の身体は白く輝く光に包まれ、二階の俺達の部屋からは大量のディスクアニマルが刃鬼先輩の元へ集まっていった。

神谷「うっ何だこの光は!？」

神谷は突然の事で歌を止め、腕で光を防ぎ、手のない二首の化け物は暴れまわっていた。

ウブロシ「ガアアアアアア!?!？」

瑠・み「?!?!?!?!?!?!?!?!」

ズシヤアアアアン!!……………

暴れまわっている化け物の足が瑠妃さんとみぞれ先輩に振り落とされ、辺りに砂煙が舞い、

月音「そ、そんな……………」

萌香「嘘……………」

皆は呆然としていたが、上空から

「??? おいおい、皆勘違いしているなあ……二人共大丈夫か？」

「? ? 「はい…大丈夫です。」

「??? 「怪我はないが……眩しいぞ。」

と軽く話している声が聞こえ皆は空を向くと白く輝く光が両脇に瑠妃さんとみぞれ先輩を持っていた。光は地面に降りると

「??? 「さて、そろそろ光をのけないとな。」

と言い、皆の一步前に進むと

「??? 「はああああ……ぜやああ!!!」

と力強く叫びながら光を飛ばすとそこには白や銀色の騎士のような装甲、背中に鷲の羽をつけ、二本の角の間に刃のような大きな角を伸ばし右手に大きな刀、左手に大きな手甲装備した……

騎士刃鬼「うゝん、アームド刃鬼と言うより騎士刃鬼かな? とりあえず仮称にするか。」

新たな姿の刃鬼先輩が立っていた。

灰次「おらあああどけえええ!!!真空・千枚貫し!!!!!!」

銀影「叫ぶのは柄じゃないが……瞬足!!」

九曜「燃え尽きろおおお、集・火炎剣!!!!」

妖「「「「ギアアアア!?!?」」」」

ワイ達が最後の集団を倒すと斬鬼先生が会議室から出てきて

斬鬼「む、今終わったのか。ヤケに遅かった。」

とサラツと言ってきたが九曜が

九曜「確かに刃さんや先生なら約200なんて数は直ぐに終わるでしょうが、私達ですよ!!相性の事も考えて無茶を言わないで下さい!!」

斬鬼「ふむ、それもそうか……」

九曜の叫びに斬鬼先生は納得すると

灰次「ガアアアアアアア! 燦先輩がピンチなのに早く燦先輩の元へ行けないのが…ガアアアアアア!」

と血まみれの胴着姿で血だまりの中を転がっていたが、

斬鬼「向こうなら終わっているのじゃないか?」

九曜「まあそうでしょうね……」

二人は腕を組みうんうん頷きながら喋り、わいも灰次に近づき

銀影「それに自分も知っているやる？向こうにいる燦先輩と刃…  
この二人に共通点があるのを、」

すると灰次は止まり

灰次「燦先輩は幼く見えて、小さくて可愛い……刃はマッチョで  
大きくてゴツい……この二人のどこに共通点があるんだ？全くない  
じゃないか!!」

九曜「いや、何姿限定なんですか?!?!?他にあるでしょう!!」

頭にハテナマークが沢山浮かんでいる灰次に斬鬼先生は溜め息を  
ついて

斬鬼「灰次……お前はあの二人に喧嘩をふっかけて負けていただ  
らう?」

そういつと灰次は納得したように手をポンと叩き、

灰次「なるほど二つ名か!」

斬鬼「その通り……あの二人は両方とも二つ名に……」

九曜「歴代“学園最強”と言われていきますから……一時期は私も  
そうでしたが、」

九曜が涙を浮かべながら言っていたが、あの二人がいるから心配  
はいらへんやろうな…。

斬鬼「宿真っ二つになってなきゃ良いけど……」

装甲になった僕は月音君に向かい、

騎士刃鬼「さて月音君、僕が魔化魍を何とかするから君はあの神谷をぶん殴れ。」

僕がそういつと神谷は

神谷「姿が変わって考えまで変わったか？どのみち貴様に私の歌を防ぐ事はできまい！！」

と歌を歌い始めるが僕は鉤状になっている鐔を展開し、それを神谷に狙いを定め、

騎士刃鬼「ハアア！！」

腹から短く叫ぶと清めの音に変換された声が神谷の歌を拮抗し、そして

パキーン！！

神谷「グハツ！？」

ウブロシ「ギャアアアア！？」

神谷とウブロシにダメージを与えた僕はすかさず、背中のおおきくなった相棒の羽を開き空へ飛び、ウブロシの甲羅の横へ向かって

騎士刃鬼「セリヤセリヤセリヤセリヤ!!!」

両足を突き出し蹴りを連続で蹴るとウブロシはどんどん皆から離れていった。

刃鬼君が俺達にアイツ（神谷）を倒すように言い、魔化魍を蹴つて皆から離れた後、俺の隣に白鋼君とキリク君が来て

白鋼「さて、月音先輩。俺達はアイツを倒しますか？」

キリク「早くしないと刃鬼先輩に手柄を取られますよ？」

月音「あ、ああそうだね……ってかかて「クソガキの分際でこの私に勝てると思ってるのかああああ!!!」って怒っているうっとうっとうっとうっ!？」

アイツは歌い、俺は吹き飛ばされ、とっさに避けた白鋼君とキリク君は神谷を挟むように動き、

白鋼「サデイスティックゴーゴン!!!」

キリク君「ライトニング…ブラスト!!!」

白鋼君は黒炎を纏った槍を、キリク君は雷を纏った蹴りを神谷に向けるが、

神谷「私には効かないと言っただろうがあ!!!」

白鋼「グワァ!?!」

キリク「グフツ!?!」

二人は神谷の歌で地面に叩きつけられたが立ち上がり、

白鋼「クソっ…キリク!!もう一度あの静かになる術が使えるか?」

キリク「いや、あの術は最近再び使えるようになった呪文で、今の俺では一回が限界だ!!」

白鋼「そうか…」

白鋼君とキリク君が神谷を睨み、神谷は

神谷「いい加減、諦めて大人しく私に殺されたらどうだ?安心しろあの鬼も地獄に送ってやるからどうだね?」

しかし二人は神谷の言葉にニヤツと笑い、

キリク「それは嫌だね!最後まで諦めるながあの人の教えでね。」

白鋼「それにもしここで諦めて死んだら、先輩が地獄の底まで追っかけて閻魔が止めに入る程キツイ修行させられるはずだな。」

キリク「むしろ刃鬼先輩が閻魔に変わりそうだよ。元々鬼だから違和感なさそうだしな。」

月音「容易に想像できて怖いね。」

二人の会話に俺も飛び入り参加して言うとキラク君は指をパチンと鳴らし

キラク「Exactly(そのとおりだ。)」

そして英語の成績が本人曰わくイマイチな白鋼君は、

白鋼「え〜っと……うん、その通り!!さてアイツを倒すか？」

月・キ「(あつ、逃げた。)」

神谷「私を無視するなこのクソガキ共ああああ!!」

白鋼「おっと!!」

キラク「危ねっ!?!」

神谷の歌(範囲をかなり狭めたもの)を飛んで避けた二人は俺の隣に立ち、両脇を掴むと

キラク「先輩、合体技で…ユクゾツ!!」

白鋼「色々と突っ込みたいが…ハッ!!」

ビュン!!ポイ

二人は俺の脇に腕を組んだまま、大きく飛び上がり次に

キリク「起これ竜巻よ！！我らに勝利をもたらすために！！」

キリク君が素早く呪文を唱え空から来た竜巻が俺達を包み空高く飛んでいくと、

白鋼「先輩！！足に妖力を溜めて、アイツに足を向ける！！」

月音「うん！！……ってえええ！？それって無茶じゃないか！！」

俺は驚いて二人をみるが、

キリク「裏萌香先輩が言っていたはずだぜ？」

白鋼「強さとは思いを貫く力……」

キリク「気高き思いも貫く力がなければ戯れ言と変わらない。」

白鋼「そして思い無き力もまた無意味！！」

キリク「先輩に思いはあるでしょう？」

白鋼「仲間を、友を守ると言う思いが！！」

二人の言葉に俺はただ頷き萌香さんの力を込めた足を神谷に向けると竜巻は向きを変え、神谷に向かった。

神谷「私には攻撃は効かないと言ったはずだが、貴様達は馬鹿か？まあい「うおおおおおお！！」」

神谷は最高出力で歌おうとした瞬間心愛ちゃんが釘バットのこう

ちやんで石を打つが石は誰から見ても分かるように神谷の上を通過しようとしていたが、

キリク「やはり無視をしたか…計画通り!!」

キリク君が笑うと石は神谷の頭の上あたりでパキヤと音がして白い粉が神谷に降りかかったが神谷は軽く咳をして歌い始めたがその声はさっきのような不気味さのある物ではなく、むしろ笑えてしまいそんな声だった。

神谷「ナゼダ、ナゼ!? ワタシノウツクシイコエガコンナモノニ  
!?!?!?」

俺達が近づく中神谷は狼狽えていると

キリク「ヘリウムは知っているよな?…あれを吸い込み、肺にヘリウムガスがたくさん入っていると、声帯の発した音は空気の時よりも伝達速度が速くなる。これに比例して、声道で共鳴する回数は多くなる。つまり、声の波長が短くなるから、外に響く音は高い音になる。…まあ粘度が少ないからしゃべり続けていれば効果は無くなる。」

白鋼「因みにお前が吸い込んだのはそのヘリウムと似た性質がある魔化魍のカツパの粘液が固形化したものだ。人間なら1ヶ月近くは声が変わるが妖だから余り意味がないかもしれない…しかし、一瞬でも歌が止まった。つまり!!」

二人はそこまで言うと言俺の方を見た。俺は頷いて

月音「俺達を甘く見たお前の…負けだああああ!!」

キ・白・月「ウオオリヤアアアア!!」

俺達の蹴りは神谷の腹に当たり地面に叩きつけ砂煙が晴れ、

萌香「……!」

胡夢「やった月音が勝った!!」

皆「やったあああ!!」

皆の歓声を受け、俺達は振り向こうとするが、

騎士刃鬼「ウエエエエエエエイ!!」

こっちに突撃してきた刃鬼君によって俺達は吹き飛ばされた。

第25話「天使の歌声、鬼の覚声：後編 part 1」（後書き）

後編 part 2へ続く（キーン山風に）

第25話「天使の歌声、鬼の覚声：後編 part 2」（前書き）

後編 part 2です！！今回はサー先生から蟲鬼組も参加します  
！！

第25話「天使の歌声、鬼の覚声：後編 part 2」

第25話「天使の歌声、鬼の覚声：後編 part 2」

皆から距離を開けて僕はウブロシの真上に飛んでいき

騎士刃鬼「さて時間が惜しいから…一気に決めるか。」

装甲声刃を構え、

騎士刃鬼「え〜っと、鬼刃覚声…きじんかくせい…ハア！」

まず最初に相手を拘束するための清めの音に変換された声、清めの声をだし、ウブロシはもがきながら、二つあるウブメの首を伸ばしてきたが、

みぞれ「刃鬼の邪魔は！！」

瑠妃「させません！！」

片方の首はみぞれちゃんの力で凍り、残りは瑠妃さんの鬼石で強化された魔法でできた羽で拘束され、僕の所まで届かず、

騎士刃鬼「はあああ……てえりやああああ！！」

目の前清めの声で出来た“刃”の文字ごとアームドセイバーで横一文字に斬ると白い刃がウブロシを真っ二つに斬り、

サアアア…

ウブロシが砂になり散った後、瑠妃さんとみぞれちゃんが駆け寄ってきた。

瑠妃「刃鬼さん、やりましたね!!」

みぞれ「ますます惚れてしまったよ。」

騎士刃鬼「さて、残りはあのセイレーンだけだな。急いで戻ろう!!」

瑠妃「はい!!」

みぞれ「ああ、」

僕は翼を広げ飛び立とうとしたが、あることに気づき、装甲声刃を逆手に持ち替え、

騎士刃鬼「みぞれちゃん、ちよつとごめん」

ヒョイ

みぞれ「あ…」

みぞれちゃんをお姫様抱っこの形に抱き上げた。もちろん瑠妃さんは

瑠妃「刃鬼さん…何ヲしているのですか?」

騎士刃鬼「瑠妃さん、これはただ僕と瑠妃さんには羽があるけど



騎士刃鬼「ならこつちは…刮目せよ！！鬼神と呼ばれる鬼と同じ物を持つ鬼の力を！！」

と僕が叫び、神谷が歌い始めようとした時、

神谷「グフツ！？」

神谷は突然血を吐いた。僕がポカンとしていると、後ろから

月音「これが刃鬼君の…力」

萌香「凄い……」

心愛「流石お義兄様……」

白鋼「全く動きが分からなかった。」

キリク「凄すぎる……プツｗｗｗｗ」

騎士刃鬼「いやいや、皆違うから！！何もしていないから！！しかもキリク君は気づいていて悪ノリするな！！後さつきから誰か何かしている？耳がキンキンして辛いのだが」

皆が神谷が吐血したのが僕の攻撃だと勘違いしているのに突っ込んで装甲化してからの違和感に文句を言うと、

「……？？？」  
「すみません…でも私の“この歌”が聞こえるなんて凄いですね。」

聞き慣れない声が聞こえ、僕の横に来たのは閉じたスケッチブックを持った燦先輩だった。

燦「同種族と言うことで少し手こずりましたがやっと効いてきたようですね。私の“能力”が」

神谷「燦!!?これはお前がやったのか?だがお前の能力は守りの歌だけではないのか?」

驚いている神谷に燦先輩は痛みをこらえながら笑みを作り、

燦「いいえ、あなたが私の歌をちゃんと聞き取れずにそう思っただけです。」

瑠妃「な…何?どういうこと?」

月音「ゲホ、というかさっきまで無口だった燦先輩が……」

みぞれ「急にしゃべり出したな。」

紫「なんか怖いですう……」

皆が呆然としている中キリク君は顎に手をあて

キリク「いつもスケッチブックを持っているのは、能力が強すぎるからか、リミッターなのか……。」

白鋼「普通は聞こえないという事は超音波の一種か?」

キリク君と白鋼君がそう呟く(言っても丸聞こえだけど)と

心愛「でもそれだと聞こえているお義兄様はヤバいんじゃないの？」

心愛のふとした疑問に皆は固まった（まりんさん含む）が、

騎士刃鬼「大丈夫だよ。だって僕鍛えてますから。シュツ！！後心愛ちゃん、かぼちやを斬る時に雷光を使ったから、今もキツチンのどこかに刺さっているはずだから持ってきて」

心愛「そんなのあるわけ…本当にあった。」

月音「やっぱりそれで解決させようとするのね……。」

燦「変わってますね。それと私が歌っていた歌は彼にしか効かないようにしてましたから安心して下さい。」

騎士刃鬼「なるほど、さてと…神谷、年貢の納め時だな。大人しく投降しろ。」

燦「そうです。あなたは私の歌、先ほどの月音君達の攻撃で」

僕は装甲声刃を肩に担ぎ、既にポドポドな神谷を睨むと、神谷は一瞬悔しそうな表情をしたあと、

神谷「ならば…これでもどうだ！！」

神谷はそう叫びながら羽を飛ばした。僕は後ろにいる皆に当たりそうな羽を雷光と装甲声刃で切り払い、燦先輩は歌で僕の落としきれなかった羽を散らした。

その時だった。

瑠妃「キャ!!??」

みぞれ「くっ!?!?!」

皆…月音君たちとは少し離れていた瑠妃さんとみぞれちゃんに目を向けると瑠妃さんは腕からみぞれちゃんは足に羽が一枚刺さっていた。神谷に視線を戻すと奴は笑っていた。

そして……僕の中で何かが切れた。

瑠妃さんとみぞれちゃんがけ画を刃鬼君の纏う気の変わりように俺達は思わず後ずさった。

萌香「あの刃鬼君……なんか怖い」

胡夢「燦先輩が急に喋りだした時とは違う感じの怖さだね……」

すると

黒鬼「あゝあ、なんかミツキの様子がおかしかったから来てみれば……あの化け物（神谷）何をした。」



騎士刃鬼「ハッ！！」

ガンッ！！

神谷「グハッ！？！？」

雷光を振るい、神谷を海に叩きつける。

叩きつけた場所は浅瀬の為神谷は起き上がるが、少し離れた場所に刃鬼君は降り、雷光を構え、膨大な殺気を出しながらゆっくりと神谷に向かい歩いていく。

神谷「ひっ！？来るな！！」

神谷は羽を飛ばすが、全部刃鬼君の鎧に当たり、一つも傷付ける事は出来なかった。神谷は逃げようとするが、刃鬼君は直ぐに神谷の頭を掴み再び叩きつけ、

騎士刃鬼「僕の大事な人を傷つけ、多くの人々の幸せを奪った罪…閻魔の代わりに今ここで僕が裁く！！」

そう叫び雷光を振りかぶろうとしたが、

????「止めて！！」

俺達が声が聞こえた方を振り向くとまりんさんが涙を流し

まりん「裁くなんてまだ若いあんたが言うことじゃない…それにその手を汚したら彼女達が悲しむだろ。」

まりんさんの言葉に刃鬼君は

騎士刃鬼「まりんさん……残念ですが、僕の手は既に血まみれで、瑠妃さん達もそれを了承して僕について来ている。」

まりん「そんな悲しい事を言わないでくれよ。」

そして刃鬼君は燦先輩を指差し

騎士刃鬼「それに僕がやらなかったら、燦先輩がアイツに止めを刺すでしょう。そしてアイツと同種族である燦先輩自身もまりんさんに討たれようと考えている……でしょう燦先輩？」

燦「!? 気づいていたのね……確かにまりんさんが私の事を許せなかったら、そのつもりです。」

まりん「燦!?!」

騎士刃鬼「僕は燦先輩よりもくぐってきた修羅場の数が多いのでね。ハッ!?!」

バキッ!?!

刃鬼君は神谷を殴った後音叉を鳴らし、剣にしてまりんさんの前に突き刺した。

騎士刃鬼「ならばまりんさん、それを貸します。それであなたはどうしますか？」

刃鬼君はそう尋ねるとまりんさんは剣を抜き、海の方へ投げ捨て、震えている燦先輩に近づき、

ポンッ

優しく燦先輩の頭に手を置き、

まりん「燦…少年…もういいんだよ。それよりも宿が派手に壊れてしまった。本当に旦那の事を思うならまず宿を再建しなくちゃね。約束しただろ？…二人でここを海一番の宿にするって…」

燦「まりんさん……」

二人の様子を見た黒鬼さん達は

黒鬼「仇を討つ事より、思い出を守る事を選んだか……」

蝶鬼「正しい判断だな…燦と言う子…良かったな。」

蜜鬼「本当の親子のようです…グスッ」

騎士刃鬼「蜜鬼さん、血はつながっていなくても本当の親子にはなれるのですよ。……」

4人はそう呟き（一人は泣いてる？）、まりんさんに撫でられていた燦先輩は、まりんさんから少し離れ、

燦「ではまりんさん、私ははじめを付けてきます…私は人間の味方だと。」

まりん「ああ、行っておいで！」

燦先輩は神谷の前に歩いていくと

燦「最後に忠告させてもらいます。これ以上あなたが抵抗しても無意味です。あなたの体は壊れています。もう歌も歌えないでしょう。」

神谷「ふ、ふざけるなああああああ！！！！」

血を吐きながら燦先輩に攻撃を加えようとするが、

騎士刃鬼「ところがぎつきょん！！僕を忘れるな！！」

神谷の腕を左手の手甲で攻撃を防ぎ

騎士刃鬼「ウラア！！」

ゴインツ！！

神谷「グハツ！？」

神谷は宙に浮き、刃鬼君は雷光を回し、ディスクアニマルで大きくなった捕獲用アームで神谷の体を捕らえ、

騎士刃鬼「殺しはしないが……今までの罪を僕の音撃と先輩の歌で反省しろ！！燦先輩行きますよ！！」

燦「は、はい！！」

燦先輩は羽根を広げ刃鬼君の神谷を挟むように回り、

騎士刃鬼「天使の裁きを受ける！！音撃斬：「撃・天使裁き！！」

燦「無音の世界」  
サイレンス・イン・ザ・ダーク

刃鬼君の激しい音撃、燦先輩の聞こえない歌、その二つを食らった神谷は泡を吹き気絶した。

- -

敵を全員鎖（瑠妃さんが持っていた：理由は聞かないでくれ）で縛ったところ別行動をしていた斬鬼さんや兄者達も合流してきて神谷たちは収容用護送車で学園に運ばれそれを見送った後、突然刃鬼先輩が

騎士刃鬼「あ、忘れてた。」

キリク「先輩何を忘れていたのですか？」

月音「まさか敵の誰かを学園に送るのを忘れていたの？」

萌香「え、でもそれなら白鋼君のお兄さんたちがやっていたよ？」

心愛「なら何？・・・こうちゃんなら回収したわよ？」

騎士刃鬼「違う違う」

まりん「私の投げた剣ならその黒い鬼さんが回収したよ。後変

な剣はその泣いていた鬼が回収したよ。」

騎士刃鬼「それも違いますがまりんさん適應するのはやつ!？」

蝶鬼「もともとそー言う性格なんだろ?後何を忘れたんだ?」

皆は首を傾げていたが、

斬鬼「嗚呼・・・アレか。」

黒鬼「アレか・・・」

瑠妃「アレですね。」

一部が納得して俺たちはさらにわからなくなると刃鬼先輩はまりんさんのほうを向いて

騎士刃鬼「まりんさん、今から僕が先輩から教えてもらった儀式みたいなことやるのですがいいですか?」

まりん「いいよ〜」

燦「な、何をするのですか?」

斬鬼「まあ、軽いおまじない見たいなものだ…俺もやるぞ。」

黒鬼「久しぶりに俺も参加させてもらおう。」

ドルド「鬼のおまじないか…興味あるな。」

まりんさんの許可を貰い刃鬼先輩達三人は砂浜に歩き、武器を構え

騎士刃鬼「せくの、はっ!!」

斬鬼「フツ!!」

黒鬼「イヨツ!!」

三人は武器を弾き始めた。後で聞いたが刃鬼先輩は弦で魔化魍を倒した後、場の清めとして念押し of 演奏をするらしい。三人の演奏は激しい音ながらも皆の心を落ち着かせるものだった。

## 第25話「天使の歌声、鬼の覚声：後編 part 2」（後書き）

今回は記念回ではなく、ギャグ回です！！まだまだ記念回の案は募集していますので、初めてコメントする方でもどんどん応募してください…555以外なら（オイッ！！）

後忘れていた騎士刃鬼（仮）の外見

・肩、右腕、両足は仮面ライダー剣のブレイドキングフォーム（模様無し）、左手の盾はモンスターハンターフロンティアの期間限定武器「ステイルリザードE」と言う片手剣の盾

・背中の羽はブレイドジャックフォームのような羽（元は光鷲）

・胸はFateのギルガメッシュの鎧に装甲響鬼と同じようなライオンが入ったもの

・腰は真ん中に真・光震天、両脇に音撃棒、右腰の音撃棒の下に音撃弦を、左腰の音撃棒の下に音叉、ディスクアニマルを装着

・頭は響鬼のような角の間に「甲」の代わりに鋭い角が一本生えている（形は鋭鬼の角）

全体的なスペックは装甲響鬼と大差は無いが、響鬼より刃鬼の方が使用したディスクアニマルが多い為、足は少し遅い（装甲響鬼：100m：1秒、騎士刃鬼100m：1.5秒）その代わりに空を飛べる力を手に入れた。

（羽撃鬼の2倍近い速度での飛行が可能）

とこのように感じています。これからますますしく願い  
ます！

第26話 「あれは打ち上げ花火ですか？」 「いいえ、あれは火炎弾です。」

善宗「な、なんとか間に合った……。」

ジンキ「今回はミスターサー先生の「清める鬼と屍」より蟲鬼組とオシキさん、キョウキさん、「妖と人」からは四季さん、とがめちゃん、七実ちゃん、姫ちゃんが、種地響介先生の「刃の音撃戦士外伝 凜鬪列伝・改」からはドルドさん、駆車矢さんが出演します  
!?!」

善宗「なんか豪華出演だな……個性が強くないと影薄くなるな。」

ジンキ「そして最後には大変な事が起きるそうですが気にせずど  
うぞ……!」

第26話 「あれは打ち上げ花火ですか?」「いいえ、あれは火炎弾です。」

第26話 「あれは打ち上げ花火ですか?」「いいえ、あれは火炎弾です。」

神谷との闘いを終え、刃鬼君達、鬼の皆と白鋼君の義兄さん、更にクロキさん達が遅いと探しに来た四季さん一家達は民宿の改修工事を始め、終えた時には日が落ち、星空がでた頃テラスでスイカ割りを始め、俺達は割ったスイカを食べながらスイカ割りを見ていた。

ジンキ「あつそれスイカ割り」

クロキ「あ、どうした」

ジンキ「スイカ割り」

四季「あらよつと」

ジンキ「スイカ割りったらスイカ割り」

キリク「あ、それ」

目の前ではジンキ君がスイカ割り?をしている・・・俺は隣でスイカを食べている白鋼君に尋ねた。

月音「ねえ白鋼君、」

白鋼「何ですか先輩?」



シュバツ！キュリツ！！

ジンキ君がすばやく剣を動かしながらスイカの横を通り過ぎ、

ジンキ「また食材を斬ってしまった……」

と呟くとスイカはきれいに等分された……三回しか切っていないのになんで16等分されているんだろ？

四季「細かいことは気にするな！！」

クロキ「そうだ、今はこの雰囲気を楽しめ少年！！」

月音「うわっ！?!?!?!」

ジンキ君の隣に来たクロキさんと四季さんが背後に回っている事に驚いていると今度はみぞれちゃんに凍らせてもらったスイカにかじりつきながらまりんさんが来て

まりん「しかしまあ、私としては……なんで瑠妃という子が彼氏であるジンキ君に縄で縛られて吊されているのか教えて欲しいのだけど……」

と部屋から亀〇縛りで吊されている瑠妃さんを苦笑いしながら見ていると、目隠しを取り、スイカに乗せた皿を片手に持ったジンキ君が来て、

ジンキ「しょうがないのですよ。こうでもしないと瑠妃さん頭や腹の上にスイカを乗せたり、スイカのすぐ隣で埋まっていたりして心臓に悪い事をするんだよ。」

紫「瑠妃さんのマゾ属性が其処まで行くとは……」

ミツキ「瑠妃ちゃんが今のままで後6歳くらい若かったら魔女っ子じゃなくてマゾっ子になっていましたね。」

ミツキ君がそう呟くと皆（特に女子勢）が

姫「それは笑えないわ……」

とがめ「つまらないし……」

紫「同じ魔女として見逃せないですう……」

胡・七・心「……最低……」「……」

クロキ「すまない……」

チヨウキ「ミツキの事は後で俺達が深く注意しておくから……」

女子達&先輩鬼達の視線と言葉にミツキ君は縮こまるが、

ジンキ「まあまあ、さっきのギャグは父さんより面白いし、みぞれちゃんはウケていて笑っているし、瑠妃さんも悦んでいるからね。」

みぞれ「笑ってなんか……フッフ！」

瑠妃「ミツキさんのギャグと皆さんの冷たい視線がアア／／／／」

心愛「ウケてる……瑠妃さんに至っては感じているし!!」

キヨウキ「私初めて見たわ……」

財津原「瑠妃の方は…そろそろ降るすか。」

財津原先生は烈斬で吊り下げられている瑠妃さんを降ろすと四季さんがどこからともなく花火を取り出して、

四季「さて、スイカも食べた事だから次は花火だ!!」 鬼一同  
「「「「ヒヤッハー!!」」」」

クロキ「夜空に華を咲かせてやるぜ!!」

七実「汚物とGは消毒……花火ではなくろうそくの火で、」

姫「止めてね。それにろうそくなんてもって来てたかしら?」

ザンキ「まあろうそくがなくてもジンキともう一人ろうそく代わりが来るから安心しろ。」

と財津原先生が言う

九曜「すいません遅れました!」

九曜さんがヘルメットを片手で持ちながら来て後ろから

銀影「何や何やえらい楽しそうやな」

胡夢「ドコに行っていたのよこっちが大変な時に限ってモオオオ

「!!」

銀影「ははは、すまんすまん」

ボロボロな姿の銀影先輩の後ろに誰かいてその人が見えた瞬間心愛ちゃんが指を差しながら、

心愛「ああそれにあんたは前に倒した空手部のロリコン主将!!」

ジンキ「あ、灰次先輩も来ていたのですか？」

灰次と言われた胸着を着た人は心愛ちゃん達を見ると

灰次「君はいつかのかわいい幼女、むっそれに見慣れない幼女もいるな。」

心愛「幼女じゃない!!私はこれでも15だ15!!」

キヨウキ「見慣れない幼女つてもしかしてあたいのことかい?…  
それにあたいは17だ!!」

二人は抗議の声を上げたが、

灰次「年齢など1万15歳でも1億2千万17歳でも構わん。大事なのは発育だ。そうたる同士キリクよ!!」(キリツ)

心愛「それはあたしが発育不足だと言いたいのか畜生オオオオ!!  
!(CV:若本則夫)」

キヨウキ「じわじわとなぶり殺ろしてやるわああ!!」(CV:

中尾隆聖）

キリク「待て心愛！！お前は発育が遅いだけだ！！後20年くらいしたら萌香先輩と変わらないくらい良くなるから！！それと俺はロリコンじゃない！！」

ミツキ「キョウキさんも落ち着いて！！」

灰次先輩はそうハツキリと言い、心愛ちゃんは金棒になったこうちゃんを構え、キョウキさんは恐怖のメリケンを装着し、襲いかかるうとするがキリク君とミツキ君が二人を止めていた。

灰次先輩はそんな二人を無視し、燦先輩を見つけると

灰次「わ〜い、燦先輩だ会えて良かったッス〜！！」

燦「灰次君！？」

燦先輩を持ち上げ高い高いをしたがジンキ君はメガホンを構え、

ジンキ「灰次先輩、それ以上なにかするのであれば、ここにいる鬼総勢9名の一斉攻撃がありますので大人しく投降しなさい！！」

ナキ「駄目ですね、駄目ですね。犯罪は駄目ですね。」

ルイキ「そうですね、そうですね。まさかクロキさん……」

クロキ「違うからな！？それに何故そう思う！？」

姫「鈍感ねえ〜。」

とがめ「ある意味女の敵じゃな。」

四季「花火……」

九曜「空気……」

この後灰次先輩は七実ちゃんに壁コンされ皆は花火をする事になった。

〜花火の様子〜

ジンキ（ろうそく代わりに、上半身裸）「九曜さん、もっと熱くなれよおおおおお!!」

九曜（ジンキと同じ）「うおおおおお!!」

ザンキ「暑苦しいわ!!」

紫「私の開発したロケット花火【豪快我玲於音】砲の威力得と味わうがいいですう!!」

胡夢「食らええええ!!」

心愛「いけえええ!!」

キヨウキ「ついでに普通のロケット花火も食らえ!!」

銀影「ギヤアアアア!？」

灰次「大量の花火が襲って来るうつつつつつつ!?!?」

キリク「何で俺もおおお!?」

オシキ「チヨウキさんの馬鹿ああああ!」

チヨウキ「ぐはああ!?」

バキツ!?……チユドーン

ナキ「たまや〜」

こつこ「一体何があったの!?」

白鋼「いや、何かチヨウキさんが隠していたことがバレたとか…

…」

樋仙「……線香花火をする白鋼……早速撮らねば!」

四季「とがめ、姫ちよつと助けて!!」

とがめ「何って父上!?線香花火をまとめすぎ!」

姫「元気玉みたいになってる!」

七実「こつちにこないで!!」

四季「ガン!?(ジユツ)あっちいいいいいい!?!?!」

月・萌「うわああ……」

駆車矢「騒がしいこった……。」

猫目「にゃ〜ん 何か楽しそうな事をしていますね〜先生も混ぜて下さ〜い」

こうして楽しい時間？は過ぎて行き、合宿最終日となった。

合宿最終日の夜、僕は雷光を背負い夜の砂浜を一人で歩いていた。理由はクロキの旦那、四季さん、樋仙さんと駆車矢さん達が帰った今、いつ敵がまた来るか分からないからだ。ザンキさん達は敵の支部を潰したと言ったが、残党がいるかもしれないので勝手に見回りをしていたが、

ジンキ「一向に来る気配はなし……そろそろ寝るか。」

僕はそう呟き、テラスに入ったとき、

????「少年、毎晩こんな遅くまで何をしていたんだい？」

僕は声のした方を見るとまりんさんが水の入ったコップを持って柱にもたれ掛かっていた。

ジンキ「まりんさんか……いやただの見回りさ。」

まりん「見回りって随分心配症だね。そんなんじゃあ老けちゃう」

まりんさんはコップを僕に渡し、中身を飲んだ後、

ジンキ「職業柄、気にしないと行けないのでね。それに今日で終わりの合宿でこれ以上皆に被害が起きないようにしなくてはね。それに僕鍛えてますから、シュツ！」

僕はポーズを取るとまりんさんは

まりん「全く、人を守るのが少年の仕事かもしれないけどそんな事をしていたら彼女達が心配するでしょ。」

ジンキ「確かにそうですが二人とも納得して着いてきてくれた…それに学園に戻ったら二人に色々とサービスするつもりです。後僕の事はジンキとお呼び下さい。」

まりん「ジンキ君いつか刺されるかもね…そうだ、ちょっとしゃがんで。」

僕はまりんさんの言葉に首を傾げながらしゃがむと

まりん「お礼になるか分からないけど…」

まりんさんは僕の頭に手を置き撫で始めた。

ジンキ「ま、まりんさん!?!い、一体何を!?!?」

まりん「今日まで少年が私と燦が仲良くしているを少し羨ましそうに見ているのに気づいてね。男の先生に聞いたら君は両親を失って母親代わりがいなかったらしいわね。」

ジンキ「ザンキさんか……まあ周りに年上の女性はいましたが母親代わりの人はいませんでしたね。」

まりん「でも嫌だったかい？」

ジンキ「い、いや！父さんや姉さん達に撫でられるのはまた違った暖かさが……って何言ってるんだ僕！！」

僕は慌てているとまりんさんはゆっくりと手を放し、

まりん「あなたは新聞部の中で大人びているけど若いから、人を守るつもりで無茶して死んだら親が泣くわよ。」

と僕に言った。僕は頷き部屋に戻った。再度部屋換えした部屋の僕の布団には瑠妃さんとみぞれちゃんが仲良く手をつないで寝ていて驚いた。

「ジンキがまりんに撫でられている前のジンキ達の部屋」

ジンキの布団の上で瑠妃とみぞれが真剣な顔で向かい合って座っていた。緊迫した空気の中まず瑠妃が口を開いた。

瑠妃「みぞれさん私に話とは何でしょう？」

瑠妃がそういうとみぞれはキャンディーを加え、

みぞれ「私とお前との話といえばジンキのことしかあるまい。私達はジンキに助けられ、ジンキのことが好きになった。」

瑠妃「確かにそうですね・・・白黒をつけるのですか？」

瑠妃はいつでも戦えるように身構えるがみぞれはため息をついて

みぞれ「違うぞ、お前はジンキが何故いつも夜遅く寝ているか知っているか？」

みぞれの問いに瑠妃は

瑠妃「そういえば、猛士の仕事のことならすでに終わっていますし、理事長への報告書は私が、公安は九曜さんが・・・まさか！」

みぞれ「そうだ。この窓から見えるがジンキは財津原先生にもばれないように一人で見回りをしている・・・敵がいつ来るかわからないからな。」

瑠妃「それでそれがどうかしたのですか？まさか最終日の今日今から一緒に見回りをして意味はありませんよ。」

窓からジンキを見ていた瑠妃は視線を戻し言ったが、みぞれは

みぞれ「ああ、それに私達がジンキと共に戦おうと思っても、相手が下級妖怪、普通の姫や童子ならまだしも九曜並みの妖怪、魔化魍ではただの足手まといにしかない・・・だろ？」

みぞれは拳をぎゅっと握りながら瑠妃に尋ねた。瑠妃は少し黙った後

瑠妃「そうですね・・・私はジンキさんと猛士の仕事をやっています  
が私の役割は魔化魍の探索、戦闘では姫や童子の相手、魔化魍では

ほんの少しの牽制だけですな。」

それを聞いたみぞれは

みぞれ「そうだよな・・・お前に話というのは私達は喧嘩ばかりしているだろ？しかしそれではジンキに迷惑をかけてしまう。これから先強いやつが現れてきてジンキも苦戦することが多くなるかもしれない・・・お前も私もジンキが苦しむ姿は見たくないし、戦いばかりのジンキが安らげる場所を作りたい。だから・・・」

下を向いたみぞれの手は振るえだし、そして決心したように呟いた。

みぞれ「瑠妃……私はジンキと結ばれなくてもいい。でもジンキの近くじゃないととても怖いんだ。また御伽の国やまがにさらわれ何をされるのか怖い……だから、だから頼む……あいつの傍にいさせてくれ！」

みぞれの手に涙が落ちみぞれは震える声で瑠妃に頼む。瑠妃はそんなみぞれを見て、今まで彼女とジンキを奪い合った事を後悔していた。みぞれの気持ちは瑠妃にもわかるからだ。瑠妃もまたジンキがいないとまた昔の人を憎んでいた自分に戻るのではないのか。そんな気持ちがあったからだ。

そして瑠妃はある事を思いついた。そしてみぞれに言った

瑠妃「残念ですが、みぞれさんそれはできません。」

みぞれは驚いて顔を上げたが、目の周りは涙で真っ赤になっていた。瑠妃はみぞれの手を取り、

瑠妃「私も貴方の気持ちはわかります。みぞれさんの決断はとも辛いものです。だから・・・」

瑠妃はにっこりとかつてジンキが自分に告白したような暖かな笑みを浮かべ、

瑠妃「どんな戦いにも終わりが来て平和が来ます。だからその時まで二人でジンキさんを支えましょう。」

みぞれ「いいのか？それだとお前はジンキを独占できないぞ？」

瑠妃「今はいいのです…それに私一人だとジンキさんをカバーしきれませんから、ほらジンキさんって石橋をたたいて渡るところか川を割って渡るような人ですから！」

瑠妃の言葉にみぞれは涙を拭き笑顔で、

みぞれ「そうだな・・・確かにお前一人ではカバーしきれないが二人でならカバーできるかもな。」

瑠妃「ならば、一旦勝負はお預けでこれからは二人でジンキさんを支えていきましょう！！」

みぞれ「ああ！！」

二人は手をつなぎ決心した・・・その時隣の部屋のキリクが来て

キリク（寝ぼけている）「先輩方うるさいから寝ろ…“眠りへ誘う霧”」

瑠妃「あつっ」

みぞれ「うっ」

キリクの魔法で二人は手をつないだまま眠らされた。そしてその数分後ジンキが来て驚く。

翌日僕達は陽海学園に戻ることに成り、新聞部のみんながバスに乗り込もうとした時、胡夢さんが爪を出して暴れ出した。キリク君曰わく昨日の晩、まりんさんが月音君と萌香さんがキス（実際は血を吸っていただけ）していた所を見て、又そのことを言う際萌香さんの事を「彼女」と言ったため、暴れ出した訳である。

そしてまりんさんは僕の方を見てニヤリと笑った。僕は嫌な予感がしたが時既に遅く、

まりん「ジンキ君も私の昨日の「アレ」が恋しくなったらいつ来てもいいわよ」

わざとらしくそういった瞬間、背後から殺意を3つ感じ振り向くと

リイン

瑠妃「ジンキさん……フフフフ」 瞳にハイライト無し&音叉  
剣装備

シャキーン

みぞれ「ジンキ…お前は私達という女がいながら」 涙目&爪展開

キュツキュツ…トン

燦『あなたを消しても良いですよ？答えは聞きませんが』 黒  
い笑顔&歌う準備万端

三人の殺気を浴びながら僕は

ジンキ「いや、僕は頭を撫でられたただだから！！三人が思っている事は一切無いから！！」

そう言つと瑠妃さん達は構えを解いて

瑠妃「なんだそうでしたか…びっくりしましたね。みぞれさん」

みぞれ「全くだ、胡夢の母親の件もあるから本当かと思つたぞ。」

燦『す、すいませんでした……』

まりん「いや〜からかいすぎたね。」

ジンキ「助かったから良いけど瑠妃さんとみぞれちゃん、いつの間にも仲良くなつたの？」

僕は二人に尋ねるが二人は

瑠・み「内緒です（だな）」

と答えてくれなかった。僕は女の子の不思議として放置する事に

していると僕と月音君の元へ来て、

燦『私はお二人を尊敬しています。私は月音さんから「諦めないこと」、「ジンキさんから「他人を守ること」、「そしてお二人から「共存」という言葉に勇気を貰いました。その道を行くために力が必要なときはいつでも呼んでください。私でよければいつでも駆けつけますから』

月音「燦先輩……」

ジンキ「ありがとうございます。」

僕達が燦先輩の言葉を見ていた時、

ズボツ!!

銀影「はい、そこまで……そろそろ出発するで……」

機嫌が悪い銀影先輩が月音君の顔面に拳を入れ、引きづって行ったが、

キリク「月音先輩の顔に穴が……」

心愛「向こう側が見えているけど大丈夫なの？」

白鋼「まるでBHMマンだな……」

ジンキ「なら僕は顔に星を背中に翼を着けて四次元殺法コンビを作るか？」



エイキ「ジンキ、父さんが…来た…よ…」

父さんが出てきたが、言葉はときれときれになり、ついにはスト  
ップした僕とザンキさんは近づき、頬をペシンペシンと叩いたりし  
たが反応はなく、視線の先を見ると

まりん「だ、大丈夫ですか？」

まりんさんがいた。僕は試しに父さんの耳元で

ジンキ「とうさん…まさか…まりんさんに…」

というと再起動したとうさんは

エイキ（赤面）「な、ななななな何をいいいい言っている  
のかな!?!?!?!?!?」

と顔を真っ赤にして僕の荷物を車の中へ放り込み、

エイキ「さ、ちばなに帰るぞジジジジンキ!?!」

と僕の肩を掴み、車に引きずり込もうとするが、僕は

ジンキ「父さん!?!ちよつと伝えておきたいことがあるから少  
し待って!?!」

ザンキ「そつだおちつけエイキ!?!そんなことをしたら嫌われる  
ぞ!?!」

エイキ「ガーン!!」

ザンキさんの一言で落ち込んだ父さんを無視して僕はまりんさんと燦先輩の方を向いて、

ジンキ「僕が二人に伝えておきたいことがあります。それは僕とそこにいるエイキ父さんに血の繋がりはありません。でもそれでも本当の親子同然のようにできる。だから二人もきつといい親子になります。これからも二人三脚で頑張ってください。」

まりん「フッフ、ありがとうね。」

燦『はい!!』

僕は言い終わると素早く父さんの車に乗り込み（瑠妃さんとみぞれちゃんはザンキさんの車、白光はバスに積んだ）、父さんはまりんさんの方を見て

エイキ「今回はむむむ息子がお世話になりました!!」

まりん「いえ、こちらこそジンキ君には助けられてばかりでした。本当にいい息子さんを持たれて羨ましいです。」

エイキ「いやいや、そちらの娘さんもかわいらしくて私も羨ましく思います!!」

会話をしていたがなんか長くなりそうだったので父さんに蹴りを食らわし少しの間気絶させている間に月音君達、ザンキさん達は先に戻っていった。その後僕は正気に戻った父さんと一緒にまりんさん達と話をした後、たちばなに戻った、その時の車の中で父さんが

エイキ「なあジンキ、母親と妹欲しくないか？」

と言っていた……勿論燦先輩が年上だという事は突っ込んでおいた。

こうして僕達の夏合宿は終わった。



ているか聞いてみたら、ジンキの事で頭がいつぱいだから考えてないと言っていたな。それが恋をしただから猛士としては大事件の前触れだろうと思っっているだろう。」

トドロキ「そうツス!!この前エイキさんの家に見合い話 came ときなんかジンキ君が瑠妃さんと一緒に消息不明になっていたツス!!」

瑠妃「いや、あれは(異世界の)中国に行っていたと言ったはずですが?」

トドロキ「あれ?そうでしたっけ?でも急に消えたので心配したツス!!」

雪の巫女「でも、私の予知能力を使っても何もありませんでしたよ?」

おやつさん「……じゃあ、皆解散!!」

本日の金言

「雪の巫女が予知能力持っていたの早く気付けばよかった……  
by  
たちばな一同」

ジンキ「だろうね……」

エイキ「まりんさんか……」

雪の巫女「」

新年&38万アクセス突破記念「ドキッ!?刃カメンライドパーティー!!!その1

注意!!

今回の話は本編とは関係なく記念回なので、

・新聞部一同が仮面ライダーを知っている。

・キリクがライダーオタク

・キャラ崩壊

等の事がありますので苦手な方は超変身をしてお戻りください。

後、今回は柳先生の「真・恋姫十無双」ジョインジョインジョインキレイ」より主人公の紀霊、その姉兼婚約者の華雄、紀霊限定Mで部下の趙雲さんが出ます!!

新年&38万アクセス突破記念「ドキッ!?刃カメンライドパーティー!!!その1

新年&38万アクセス突破記念「ドキッ!?刃カメンライドパーティー!!!その1」

ある日の新聞部部室

ジンキ「暇だね〜瑠妃さん」

瑠妃「そうですね〜」

紫「記事作成も終わりましたし暇ですう〜」

胡夢「しかも今は記事にするようなこともないし、事件も起きてない……平和ね〜」

月音「でもこたつを持ってきて和まないですよ!!!しかもどこから持ってきたの!!!」

キリク「先輩も細かい事を気にするなよ……それクロックアップと、」（クライマックスヒーローズフォーゼでカブト使用）

心愛「嘘っ!?ちょっとやめてって負けたあああああ!」  
(同上キバ使用)

こつこ「こたつはモヒ安の皆が手伝ってくれたんだよ。はいあ〜ん」

白鋼「先輩恥ずかしいですがノノノノ」

財津原「そつだぞ青野、お前も入れ」

猫目「そうですよ〜」

みぞれ「これはこれでいいな…」

銀影「ワイの入るスペースなしかよ!!」

月音がこたつに入りそうになった時、灰色のオーロラが出てきて皆を包み、オーロラが晴れるとそこには椅子に座った人影が一つあった。人影にライトが当たると

善宗「やあやあ、新聞部諸君、私の名前は善宗とい

目の前の男が言い終わる前に

刃鬼「音撃打「百発百中」!!」

斬鬼「音撃斬「雷電斬震」!!」

キリク「スピニングダンス!!」

白鋼「燃え尽きるおおおおおおお!!」

善宗「ギヤアアアアアアアアアア!?!?!?!」

善宗復活まで少々お待ちください。〜

善宗「あゝ死ぬかと思った。」

ジンキ「で作者、なんで僕達をここに連れてきた？」「よくぞ聞いてくれました！！」「」

すると善宗は立ち上がり、

善宗「君達を連れてきたのは他でもない。「ロザリオとバンパイア 刃の音撃戦士」のアクセス数が38万を超えたのでその記念回をやるうというわけさ！！」「

瑠妃「記念回と言いますと何をやるのですか？」

瑠妃さんの一言に反応するかのように奥にある部屋は明るくなり、そこには大きな看板が立てかけてありそこには

「ジンキカメンライド&ヒロインチェンジイベント！！」

と書いてあり

瑠妃（涙目）「私、死ぬのですか・・・」

騎士刃鬼「作者殺す……」

善宗「違うから！！ただの記念イベントだから！！ってかジンキ！！！装甲に変身するな！！まだ名前未定なんだから！！！」

萌香「とりあえずどういったもの説明してくれませんか？」

善宗「ああ、いいけど私はこれからやることがあるので司会に引き継ぐよ。それではお願いしま〜す。」

男「了解した。」

女「お姉ちゃんも顔がいれば問題ない!!」

するとスーツを着た男の人とドレスを着た女の人 came。ジンキ君と瑠妃さんは驚いた顔で二人を見て

ジンキ「紀霊さん、いつこちらに来られたのですか!!それに華雄さんもお久しぶりです。」

ジンキ君が話しかけると紀霊さんと言われた人は

紀霊「朝起きたらこんな場所にいたが知っている奴がいて安心したよ。後初対面の奴もいるから自己紹介しておこう。俺の名前は紀霊、字は周英だ。」

華雄「私の名前は華雄、字は乾香けんこう紀霊のお姉ちゃんであり、婚約者でもある!!」

紀霊「姉者何言っているの!?!」

みぞれ「なら私達も...」

瑠妃「負けていられません!!」

ジンキ「させぬわ!!!!」

二人は何かしようとその前に二人の口をふさいだが、

月音「あれ？銀影先輩は？」

皆はあたりを見回すと礫になった銀影と趙雲さんが満足そうな顔を  
をして立っていた。

紀霊「おおい、星！？何やっているの！！」

瑠妃「多分、スカートの中でも覗いていたのでしょう。」

心愛「そうそう、というわけでそいつは無視して説明してよ。」

趙雲「ではまずこちらの方の席へ……」

新聞部の皆は趙雲さんの先導の元ひな壇に設置された席に移動し  
て、紀霊さんと華雄さんは司会席みたいなところに座り、

紀霊「それでは説明します。今回はもしジンキが仮面ライダー響  
鬼ではなくほかのライダーだったらという事と」

華雄「ヒロインが瑠妃ではなく他の者であればという事を事前に  
集めた案を元に！」

趙雲「善宗なりに面白おかしくたまにシリアスを織り交ぜながら  
やっていくものらしい。」

月音「へへっってつまりそれはヒロインが萌香さんになる事もあ  
るの！！」

俺が驚きながら尋ねると紀霊さんは手元の紙を見て

紀霊「ああ、その萌香って子の案が一番多いな。まあ気にするな  
!!!」

月音「嘘だああああああああああああああ!!」

月音が落ち込んでいるのをよそ眼に今度は紫が

紫「つまりその中に私も」あゝ…君は無かったね」チキシヨウで  
スうつうつうつ!!」

紫が落ち込んでいると華雄さんが別の紙を見ながら

華雄「安心しろ善宗からの伝言で募集した案のほかにも善宗がい  
くつか考えているらしいぞ。」

皆はそれに驚いていると趙雲がジンキに近づき

趙雲「では早速ジンキ殿はこの椅子にお座り下さい。」

ジンキ「ああ、なるほどメインだから」

ジンキが少し立派な椅子に座ると

ガチャンガチャン!!

両手両足を鉄の拘束具が出てきてジンキは動けなくなり、趙雲に  
よって頭に怪しげな機械がはめられる。

ジンキ「な、なんなんだこれ!?!?!?!?」

暴れながら拘束から抜け出そうとするが動けないジンキの元に紀  
霊が近づき

紀霊「作者曰く、それは“カメンライドマスイーン”と言って今  
回の事を成すには必要不可欠らしいが、少し痛いらしい。後製作者  
はみどりという人らしい、」

ジンキ「みどりさああああああああん…まあ暴れてもしよ  
うがないけどまず僕は何になるんだ?」

華雄「確か仮面ライダーオーズと書いてあるな。」

華雄の言葉に反応したのはキリクであった。

キリク「オーズだと!オーズはコアメダルという特殊なメダル三  
つで変身し同じ色のメダル3枚や特定のコンボができると歌が出る  
ライダーだ!」

紀霊「説明ありがとう…次から君にライダーの説明を頼むよ。今  
回はヒロインの変更はないけど瑠妃さんが出てこないね。」

瑠妃「うう…」

瑠妃は部屋の隅でいじけ華雄は謎のレバーに手をかけ

華雄「それでは逝ってこい!」



銀影「だれが取ったかは知らんが月音に関してはこんな写真も出  
回ったで」

萌香「これは!？」

銀影「のぞきの現場写真やな。」

シヨックの萌香に銀影は腕を回し、

銀影「ま…その写真の事は月音君には黙っといたれな。あわれす  
ぎる。それにモカさんはもうそないな奴らのことは忘れてしまえや。」

萌香「あ…」

銀影はにたと笑いその先を言おうとした時

????「はっ、馬鹿馬鹿しい。その写真はお前があゝの馬鹿を誘導  
し覗かせたんだろスケベ狼？」

声が聞こえ萌香と銀影は声の方を見ると貯水タンクの上にアイス  
キャンディーを食べている赤を基調とした右腕の持ち主の生徒

萌香「アंक君…」

銀影「なんやお前、お前も萌香さん狙いか？」

と銀影は言うがアंकは鼻で笑い、

アंक「はっ、俺はな欲望を求めてうるついでにただだ。それとお前に訂正を言っておこう。刃はな下着の窃盗をしてたんじゃなく窃盗されていた下着の“奪還”をしていたんだよ。それをお前が窃盗と言いふらしたんだろうが!!」

萌香「本当なのアंक君!？」

すると屋上の扉が空き

刃「おっ、萌香さんこんな所にいたんですか。探しましたよ〜」

話題の人物、火野刃がやってきた。刃はすかさず

刃「ハア!!」

銀影に体当たりを食らわそうとするが銀影は一瞬で消えたかと思うと少し離れた意味に現れ、

銀影「いきなり体当たりとはひどいやないか。下着窃盗の刃君？」

刃「あれは窃盗じゃなく奪還を頼まれたんだけど…後月音君も間もなく来ます。覚悟してください!!」

刃はそう言うが銀影は笑いながら

銀影「こうなりやお前を倒して力づくで俺の女になってもらうで赤夜萌香!!」

銀影が変化を解くと同時に刃は四角いものを取り出し腰につけそ

れがベルト“オーズドライバー”に変わるとアंकの方を向いて

刃「アंकメダル!!、今回もタトバで行く!!」

アंक「ああ、わかった。ホラッ!!」

アंकの投げた三色のメダル“コアメダル”三枚をキャッチしてそれをベルトに右から赤・黄・緑の順番で入れるとベルトの横についていた丸い物体“オースキャナー”でメダルをスキャンし、三枚すべてをスキャンして、

刃「変身!!」

刃がそう叫ぶとオースキャナーから

『タカ・トラ・バッタ!!タ・ト・バ!タトバ、タ・ト・バ!』

歌が流れ、歌が終わると鷹をイメージした赤色の頭部、トラのような爪がついた黄色の腕、バッタのような強靱な緑色の脚部、刃の変わりように銀影は

銀影「な、なんやお前の姿は!?!それにさっきのふざけた歌もなんや!?!」

刃は構えながら今の自分の名前を叫んだ。

オーズ「今の僕の名前は…仮面ライダーオーズだ!!」

アंक「歌は気にするな。」



な椅子に座らされ、

紀霊「次は仮面ライダーWか…キリク君説明よろしく!!」

キリク「仮面ライダーWは二人で一人の仮面ライダーというキャラクターが、変身時は肉体のベースとなる一方の身体にパートナーの意識が憑依しており、2人で意思疎通を行って様々なメモリーを使って戦うのが特徴だ!また原作では左翔太郎とその相棒のフィリップが変身するが、フィリップは気になったことは調べつくさないと気が済まない性質で、戦闘中でも無視してしまう。その時翔太郎はロストドライバーというアイテムで月音先輩のスーツのモデルである仮面ライダージョーカーに変わるぞ!!」

紀霊「はい、お疲れさん水いるか?そして今回は心愛がヒロインとなっている」

紀霊がキリクに水を渡すと心愛は金棒を振り回しながら

心愛「私にあんなの嫌だあああああああ!!」

と襲いかかるが、

紀霊「ユクゾツ!!」

ビュン!

心愛「なっ!?!」

白鋼「消えた!?!?!」



三人が気絶すると皆はモニターに目を移した。映し出された場所を見て萌香は

萌香「あ、今度は強盗事件の時だ。」

〜W編〜

新聞部の前に偽裏萌香はコピーした萌香の妖力を感じながら

偽裏萌香「へえ〜その十字架封印の魔具だね。まさか君はそれで封じられているのかい？もったくない…これから君の妖力はこのオレが使ってやるよ。見ての通りオレはどこも封印されてないからな。だから君は死んでいいよ。」

そんな偽裏萌香に心愛はこうちゃんを武器に変え、

心愛「汚らわしい！！」

裏萌香へと駆けていく。

胡夢「馬鹿！！」

みぞれ「お前が言って勝てる相手ではない！！」

紫「だから待つですう！！」

周りの忠告を無視し心愛は武器を振りかぶり偽裏萌香はカウンタ

―を仕掛けようとした時、

『STAG』

??? 「行け!!」

偽萌香 「グハツ?!?!」

青い物体が裏を弾き飛ばすと青い物体はそのまま壁の穴に入って行き、穴から出てきたのは

??? 「全く…月音にビートルフォン持たせて正解だったな。」

制服ではなく黒のベストにズボン、赤いネクタイに黒いスリーフインガーハットをかぶった少年松坂翔太郎が出てきた。翔太郎は心愛の前に来ると

翔太郎 「全く、お前の気持ちも分かんねえこともないが少し落ち着け」

頭に手をポンポンとやり

心愛 「でも、あんなの許したくない!!」

翔太郎 「でもお前は一度も裏萌香には勝ったことはないだろ？」

心愛 「う…それでも私はあんな奴にお姉さまの姿を…お姉さまの力を使われたくないの!!」

心愛は涙目になりながらも自分の思いを叫んだ。翔太郎はそんな



翔太郎「させるわきゃねえだろうがこのアホ!!」

ゴチンツ!!

月音「イッテ〜!!」

翔太郎「全く…変身するぞ」

月音「ああ、それじゃ萌香さん、皆頼むよ。」

胡夢「やぶ〜任せといて!!」

翔太郎が腰にダブルドライバーを着けると月音の腰にも同じものが出てきて、翔太郎は黒いUSBメモリを月音は緑色のUSBメモリを取り出し、スイッチを押した。

『JOKER!!』

『CYCLONE!!』

翔・月「変身!!」

月音がサイクロンメモリをダブルドライバーを入れ、それが翔太郎の方に移り月音は気を失いそれを胡夢達が避難させる、翔太郎はサイクロンメモリを差しこみ自身の持つジョーカーメモリーを差し込み展開する。

『CYCLONE!!』JOKER!!』

電子音声とともに竜巻が起こり、緑の右半身に黒い左半身、赤い複眼に銀色のマフラーの仮面ライダーWサイクロンジョーカーになり、心愛の隣に立つ。

心愛「うわっ翔太郎が半分こ怪人になった!?!?!?」

W（翔太郎）「半分こ怪人言うな!?!とりあえず心愛行くぞ!?!」

W（月音）「やっぱり言うよね…この後言うことは分かるよね?」

心愛「分かっているわよ!?!翔太郎!この私に恥ずかしいこと言わせるのだから後であんたの血を貰うわよ!?!」

W（翔）「え!?!俺!?!…上限400で手を打つぞ!?!」

心愛「そんなにくれるの!?!よしやってやるうじゃない!?!」  
（超ヤル気!?!）

二人は偽裏萌香に対し左半身を前にして、指を差し

W「「さあ…」」

心愛「お前の」

W・心「「「数えろ（なさい）!?!」」」

〜W編終わり〜

胡夢（ポップコーン食べてる）「結構いい感じじゃない。」

萌香（トマトジュースを飲んでいる。）「そうだね〜しかもなか月音の性格違うし。」

キリク（タバコを吸っている）「まあ、月音君も原作のフィリッ  
プに近づけているんだろう。」

紀霊「そういうこつた後言い忘れていたが、ジンキ君は変わるラ  
イダーによって名前が名字が変わる事になっている。」

みぞれ「私としてはなんか嫌だな……ジンキがジンキじゃなくな  
る感じがして……」

華雄「まあ、気に入らぬ者もいるかもしれないが善宗曰く「コス  
プレみたいな物」と思えばいいらしい。ん？気が付いたようだな。」

皆は椅子の方を向くと

月音「ゲホツゲホツ！酷い目にあつた……」

心愛「でもそんなに痛くはなかつたわね。」

ジンキ「大方演出の為だろそれでも……」

ジンキは二人の頭を見て自分の頭を触った。

ジンキ「僕達三人ともアフロになっちゃった……」

心愛「嘘っ!?!?!?」



新年&38万アクセス突破記念「ドキッ!?刃カメンライドパーティー!!!その1」  
次回登場するライダーは

キバ、龍騎、アマゾン となっております!!

この中でどれがヒロインが裏萌香なのかは…見てのお楽しみ!!

それでは新年&38万アクセス突破記念「ドキッ!?刃カメンライドパーティー!!!その2」までサラバダッ!!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6525q/>

---

ロザリオとバンパイア 刃の音撃戦士

2012年1月3日00時35分発行